

特276-429



\*1200800471490\*

特276

429



始





# 維氏美學

明治十七年三月印行

下冊

寄贈本



文部省編輯局

正  
14. 3 0  
寄贈

特276

429

音韻本

維氏美學下冊目次

第二部

第一篇 藝術ノ類別

第二篇 建築術

第一章 天象ノ說ヲ主張スル流派○建築ノ形狀ハ

各地ノ風土材料及ヒ制度宗旨ノ性質ニ由

リテ各々相異ナル事

第二章 建築ハ當初居宅ノ廣大ニ赴クヨリ起リシ

ヲ論ス○希臘ノ建築法

第三章 羅馬ノ建築○ビザンチンヌノ建築○亞刺

比ノ建築○佛蘭西初年建築

一 一 二〇

二〇

四五

六七

第四章 「オジワール」法○中興ノ時ノ建築法

八一

第五章 總括

一一一

第三篇 彫刻

一二八

第一章 象徴○彫刻術ニ於ケル象徴ノ効益○希臘

種族ノ美貌○骨格○純美

一二八

第二章 希臘彫刻ニ於ケル意趣○博士家ノ陋見○

古昔彫像ノ長處ハ何處ニ在ル乎○近代ノ

彫刻家何ヲ修メテ以テ古昔ノ彫刻家ニ勝

ルヲ得ル乎

一五五

第三章 建築ニ用フル彫刻ノ衰頹ノ原因○建築ニ

用フル彫刻ニ係ル要欸

一九五

第四篇 畫學

二四一

第一章 筆畫○設色○渲染○濃淡

二四一

第二章 充補ノ彩色

二六六

第三章 設色ノ勻齊及布置○設色ヲ以テ畫ノ意趣

ヲ發揮スル事

二九七

第四章 筆畫○生氣ヨリ發スル形貌○線條ヲ主ト

スル筆畫家及ビ生氣ヲ主トスル筆畫家○

生氣ヲ主トスル筆畫家ノ線條ヲ主トスル

筆畫家ニ勝ル所以ノ理

三三〇

第五章 光線ニ因リテ發スル變形○輪郭○布置○

線條ヨリ發スル遠近ノ勢并ニ渲染ヨリ發

スル遠近ノ勢

三四六

第六章 手術○デラクロアードオドールルソー

生畫ヲ主トスル  
筆畫ニ勝ル  
ハオドール  
ルソー

生氣ヲ主トスル  
筆畫ニ勝ル  
所以ノ理

第七章

及ビリュベソノ諸氏ニ係ル例則

三五九

運筆并ニ作者固有ノ情性ヲ發揮シ及ヒ物

體ノ性ヲ發揮スル事○リュベソ○フランズ

アルス○ユージョーンヌ、デラクロア○美

術博士院ノ謬迷ヲ論ズ

三八六

第五篇 舞蹈

第六篇 音樂

第一章 音樂沿革ノ概略

四〇八

第二章 音樂ハ學ト術トノ二科ニ涉ルヲ論ズ○音

響ノ意義

四三一

第三章 音聲ノ本質ヲ論ズ

四四五

第四章 圖書調刻ノ法ニ由テ音律ヲ定ム○音樂ハ

第七章	及ビリュベソノ諸氏ニ係ル例則	三五九
第七章	運筆并ニ作者固有ノ情性ヲ發揮シ及ヒ物體ノ性ヲ發揮スル事○リュベソ○フランズ	
	アルス○ユージョーンヌ、デラクロア○美術博士院ノ謬迷ヲ論ズ	三八六
第五篇 舞蹈		
第六篇 音樂		
第一章 音樂沿革ノ概略		四〇八
第二章 音樂ハ學ト術トノ二科ニ涉ルヲ論ズ○音響ノ意義		四三一
第三章 音聲ノ本質ヲ論ズ		四四五
第四章 圖書調刻ノ法ニ由テ音律ヲ定ム○音樂ハ		

各自ノ思想ヲ表發ス	四五七
各自固有ノ性質ニ隨テ音樂ヲ調ス○音樂ト詩學ノ連合○メロヂ及アルモノ○音樂ノ區域	四七四
四九六	
四九六	
五〇六	
五二一	
五三二	
五六四	

第七篇 詩學

第一章 詩學トハ何物ナル乎○詩人ノ才性

四九六

第二章 人心ヲ感スルノ要款

五〇六

第三章 私愛ノ念○文藝ノ作ヲ評スルニ於ケル私

愛ノ念ノ力

五二一

第四章 詩ノ語○諧韻ヲ用ヒサル詩○詩ノ境界

五三二

第五章 近世詩風ノ性質

五六四

第六章 詩學ニ係リ道德并ニ心性ノ學ノ進歩○稗

各自ノ思想ヲ表發ス	四五七
各自固有ノ性質ニ隨テ音樂ヲ調ス○音樂ト詩學ノ連合○メロヂ及アルモノ○音樂ノ區域	四七四
四九六	
四九六	
五〇六	
五二一	
五三二	
五六四	

官

第七章 「ドリーム」

五七五  
五九九

第八章 歌行ノ詩及ヒ諷刺ノ詩○詩ニ於ケル感情

ヲ發揮スル手段ノ他ノ諸藝ニ勝サルヲ

論ス○詩及ヒ學術

六二二

第七篇 結局論

六三七

附錄 プラトンノ美學

六八六

維氏美學下冊

中江篤介 譯

○第二部

○第一篇 藝術ノ類別

凡ソ藝術ニ係リ、相通スル所ノ事項ハ、余既ニ前ニ之ヲ論セリ、今ハ更ニ各種ノ藝術ニ就テ一々講究ヲ加ヘテ、以テ之ヲ明ニスル有ラント欲ス

夫レ藝術ノ數千亦一ナラス、今各々別ニ之ヲ講求セント欲スルハ、宜ク其孰レヲ先ニテ孰レヲ後ニス可キ乎、此レ固ヨリ豫メ一定セザル可ラス、若シ然ラスシテ或ハ甲ヲ論シ未ダ了ハラズシテ、去リテ乙ヲ論シ丙ヲ論シ、其倫序無キ是ノ如クナルハ、縱令ヒ其論スル所洵ニ善ク寡窳ニ中タルモ、其言必ス重複錯雜ヲ免レズシテ、大ニ讀者ノ心ヲ厭ハ

シメシ、故ニ必ズ先ツ順序ヲ一定シテ、務テ事物自然ノ道理ニ適合セシ  
メテ後方ニ得タリト爲ス、苟モ然ルキハ、既ニ一藝ヲ論シ了ハリテ、他ノ  
一藝ニ及ブノ際、意義連續シ、氣脈貫通シ、多言ヲ費マサズシテ思己ニ半  
ニ過クル有ラン、然リト雖モ、茲ニ一難事有リ、夫レ彫刻ナリ、音樂ナリ、繪  
畫ナリ、建築ナリ、舞蹈ナリ、詩ナリ、設令ヒ其初テ起リシ年代ヲシテ明瞭  
ニシテ疑ヲ容レザラシムルキハ、誠ニ善シ、他無シ、首ニ其最モ前ニ起リ  
シ者ヲ取リテ之ヲ論シ、遞ニ其最モ後ニ起リシ者ニ論及スルキハ、議論  
自然ニ順序ヲ得テ、初ヨリ妨碍ニ遭フコト無カル可キヲ以テナリ、獨リ奈何  
セン、今日ニ在リテ之ヲ考フルニ、其年代決シテ是ノ如ク明瞭ナラズ、故ニ  
必ズ年代ノ前後ヲ論セント欲スルキハ、其勢臆度意想ニ出テザル可ラ  
ズ、顧フニ凡ソ藝術ノ中ニ就テ、其人耳ヲ怡ハシムル者ハ、人目ヲ怡ハシ  
ムル者ニ比シテ、其以前ニ起リシコト疑ヲ容レズ、然レヒ人耳ヲ怡ハシム

ル藝術モ亦其類一ナラズ、今臆度ヲ以テ之ヲ定メント欲スルキハ、果シ  
テ其孰レカ最モ前ニ起リテ、孰レカ最モ後ニ起リシト爲サン乎、予故ニ  
曰ク、諸藝ヲ類別シテ其次序ヲ一定スルコトハ極テ難事ナリト、夫レ人目  
ヲ怡ハシムル藝術即チ彫刻繪畫建築等ハ、皆必ズ外物ヲ假リテ後形ヲ  
見ハス者ナリ、若夫レ人耳ヲ怡ハシムル藝術即チ詩歌音樂舞蹈ノ如キ  
ハ然ラズ、皆特ニ聲調若クハ運動ヲ以テ之ヲ發スルニ過キズシテ、初ヨ  
リ他物ヲ假用セズ、夫レ他物ヲ假用スル者ハ、必ズ幾分ノ智巧ヲ要スト  
雖モ、他物ヲ假用セザル者ハ、自然ニ發スルヲ以テ、必ズシモ智巧ヲ要セ  
ズ、此ヲ以テ之ヲ考フレバ、人耳ヲ怡ハシムル藝術ハ、遠ク人目ヲ怡ハシ  
ムル藝術ノ前ニ起リシコト殆ント疑ヲ容レズ、然レヒ之ヲ要スルニ、人耳  
ヲ怡ハシムル藝術モ亦其目一ナラザルヲ以テ、若其類中ニ就テ、孰レチ  
先トシ孰レチ後トセント欲スルキハ、其事甚タ爲シ易カラズ、例ヘハ舞

踏ヲ取リテ前ニ置カント欲スルモハ、音樂及ビ詩モ亦同ク人耳ヲ怡ハ  
 シムル者ナリ、未タ述ニ其後ニ置クヲ得ズ、此ニ由リテ之ヲ觀レハ、同  
 一ニ人耳ヲ怡バシムル藝術中ニ在リテ、其先後ノ列ヲ定メント欲スル  
 所ハ、其勢臆度ニ陷イルヲ免レザルナリ、  
 又同ク人耳ヲ怡バシムル藝術ノ中ニ就キテ、其先後ノ列ヲ定ムルヲモ  
 亦甚タ爲シ易カラズ、蓋シ世或ハ建築術ヲ以テ最モ前ニ起リ、彫刻繪畫  
 ナ以テ之ニ踵テ起リシト爲ス者有リ、即チラムチー氏ノ如キ己ニ此說  
 ナ主張セリ、其言ニ曰ク、今夫レ世界ハ萬物ヲ以テ聚成スル者ナリ、蓋シ  
 萬物皆地中ヨリ出テ、始テ定形ヲ得、若干ノ歲月ヲ涉リ以テ生ヲ爲ス、  
 顧フニ其未タ地中ヨリ出テザルニ當リテヤ、其原素ハ固ヨリ己ニ現存  
 スルニ論勿シト雖モ、畢竟未タ形ノ見ル可キ者無キヲ以テ、其物無シト  
 曰フモ必スシモ不可ナルヲ無キナリ、其萬物ノ各形有ルハ特ニ既ニ地

中ヨリ出ルノ後ニ在リ、夫ノ彫刻繪畫ノ建築ニ於ケルモ亦猶ホ是ノ如  
 キナリ、其初ニ當リテマ、獨リ建築ノ一術有ルノミ、彫刻ト繪畫トハ其中  
 ニ包在シテ未タ一科ヲ成サバ、ルヲ以テ、畢竟有レモ無キカ如キナリ、其  
 人智漸ク進ミ、物ヲ觀ルノ情漸ク密ナルニ及ビ、凡ソ智巧ノ彫鐫ニ屬ス  
 ル者ハ、之ヲ類シテ以テ彫刻ノ一術ト爲シ、凡ソ智巧ノ采色ニ屬スル者  
 ハ、之ヲ類シテ以テ繪畫ノ一術ト爲シ、然ル後此二道初テ夫ノ建築ト  
 鼎立スルヲ得、此レ猶ホ夫ノ草木禽獸ノ原素本ト地中ニ蘊蓄シテ未  
 タ見レテ形ヲ成サス、其漸次ニ發シテ外ニ出ツルニ及ビ、草木ハ自ラ草  
 木ニ、禽獸ハ自ラ禽獸ニシテ、判然土地ト形ヲ異ニスルカ如シト、蓋シラ  
 ムチー氏ノ必ス彫刻繪畫ヲ以テ建築ノ中ニ包在スト爲ス所以ノ者ハ  
 抑、其故有リ、曰ク初メ彫刻ノ物タルヤ、特ニ家屋中ノ一飾タルニ過キス、  
 蓋シ木石ニ就テ隱起以テ象形ヲ爲シテ人目ヲ怡バシム、是レノミ、其後



ニ及ヒ、其隱起ノ狀漸次ニ益隆高ニ赴キ、遂ニ突然屹立シテ一像ヲ爲ス  
 ニ至リテ、復ク梁棟ノ間ニ在ルヲ得ズ、此レ即チ彫刻ノ建築ヨリ發シテ  
 別ニ一科ヲ爲シ、所以ノ沿革ナリ、彼レ其初メ特ニ梁棟椽桷ノ一飾タ  
 ルニ過ギズ、他無シ、其形扁平ニシテ僅ニ一面ニ就テ巧ヲ施スニ過キサ  
 ルヲ以テナリ、其突然屹立シテ人形ヲ全成スルニ及ビテヤ、四面皆智巧  
 ノ觀ル可キ有リテ、斯ニ始テ建築ト分別シテ自ラ一術ヲ爲スニ至ル、此  
 レ乃チ彫刻ノ建築ヨリ生シ、所以ノ説ナリ、  
 又繪畫ノ如キモ亦略ホ之レト同シ、彼レ其初メ亦梁椽棟桷ノ一飾タル  
 ニ過ギズ、蓋シ梁椽ノ上ニ於テ種々ノ采色ヲ施シテ、以テ人ノ目ヲ怡ハ  
 シメ、又夫ノ彫刻ノ巧其初メ鑄鑿甚タ深カラザルヲ以テ、其形象判然タ  
 ラザル者有リ、因リテ采色ヲ施シテ以テ僅ニ人目ニ瞭然タルヲ得、凡  
 ソ繪畫ノ用此ノ如キニ過ギズ、其後人智漸ク進歩シテ物ヲ觀ルノ情漸

ク精密ナルニ及ビ、始テ夫ノ萬物ノ形ノ種々ナルモ、彩色ヲ假リ以テ之  
 ヲ寫ス可キヲ知ルニ至レリ、是ニ於テ平繪畫ノ一道始テ起リテ、益其精  
 緻ニ赴クヲ致セリ、此ニ由リテ之ヲ觀レバ繪畫モ亦其初ニ當リテハ、特  
 ニ建築ノ一術中ニ包在セシニ過キサザルヲ、猶ホ彫刻ノ建築術ニ於ケル  
 カ如シ、

凡ソ茲ニ云フ所ハ皆ラム子一氏ノ説ニシテ、此言ニ由ルキハ、同ク人目  
 ヲ怡ハシムル藝術中ニ就テ、建築術最モ先ツ起リ、彫刻之ニ踵キ、繪畫又  
 之ニ踵ク者ナリ、

此説ヤ、遽ニ之ヲ聽クキハ頗ル信ズ可クシテ、少シモ病ヲ見サルカ如キ  
 ナ以テ、人々之ヲ採用シテ疑ハズ、然レモ予ヲ以テ之ヲ觀ルキハ、未ダ遽  
 ニ依準スルヲ得ザル者有リ、何トナレハ、其言ノ實跡ニ於テ少シモ微  
 ス可キ者無キヲ以テナリ、夫レ建築先ツ起リテ、彫刻繪畫ハ特ニ其中ニ

包在シテ、人智ノ漸進ニ隨ヒ、此二道自ラ一科ヲ爲スニ至レリト、是ノ說  
 ヤ議論ヲ以テ言フキハ甚タ美ナリ、獨リ奈何セン實迹ノ徵ス可キ者無  
 キヲチ、苟モ實迹ノ徵ス可キ者無キキハ、終ニ臆度妄想タルヲ免レス、且  
 ヲラム子一氏及ヒ其他此說ヲ主張スル者ハ、皆以爲ラク建築ハ本ト人  
 ノ造化ノ工ヲ景仰感嘆シテ之ニ摸擬セント欲スルニ生ゼリト、是ニ於  
 テ建築ノ一術ヲ崇尊スルコト極テ甚クシテ、夫ノ彫鐫繪畫ノ二道ノ如キ  
 ハ、皆其中ノ一部ト爲スニ過ギス、此レ其立論ノ基礎ナリ、然ルニ予ヲ以  
 テ之ヲ觀ルルハ、建築ヲ以テ造化ノ摸擬ニ出ルト爲スノ說ハ、本ト荒誕  
 無稽ニシテ少シモ信ズルニ足ラス、夫レラム子一氏ノ徒、此一說ヲ把リ  
 テ基趾ト爲シ、因リテ建築彫刻繪畫三藝ノ發起ノ順序ヲ定メント欲ス、  
 其本根既ニ固カラズ、何ヲ以テ完全ノ論ヲ立ツルコトヲ得ン哉、之ヲ要ス  
 ルニ一モ取ルニ足ル者無キノミ、

夫レ人ノ初メテ生スルヤ、其智極テ蒙昧ニシテ、物ヲ觀ルノ情甚疎ナリ  
 シコト固ヨリ疑フニ足ラス、故ニ其當時ニ在リテハ、建築彫刻繪畫ノ三ノ  
 者全ク混シテ一ナリシコト、或ハ信ス可キナリ、建築ノ一術先ツ起リ、他ノ  
 二術其中ニ包在セシト爲スカ如キニ至テハ、竟ニ信憑ス可ラス、且ツ古  
 昔希臘人ノ如キハ、凡ソ人耳ヲ怡ハシムル藝術ハ、皆混シテ一ト爲シテ  
 初ヨリ分別スル所無シ、是ニ於テ詩人往々既ニ詩ヲ作リテ又之ヲ歌ヒ、  
 更ニ又胡弓若クハ、シタル絃器ノ名ノ屬ヲ調シテ自ラ之ヲ和シ、又或ハ起  
 舞シ、一人ニシテ三事ヲ兼ヌ、是レハ則チ詩歌音樂舞蹈ノ三藝合シテ一  
 タリト謂フ可シ、然レモ此ヲ以テ音樂舞蹈ノ二ノ者ハ詩歌ノ中ニ包在  
 スルト云ヒ、若クハ詩歌音樂ノ二ノ者ハ舞蹈ノ中ニ包在スルト云ヒ、若  
 クハ詩歌舞蹈ノ二ノ者ハ音樂ノ中ニ包在スト云フキハ、妄論タルヲ免  
 レス、何トナレハ畢竟此三ノ者相混スルニ過キスシテ、其主客輕重ハ竟

ニ未ク定ム可ラサルヲ以テナリ、  
夫レ諸藝ヲ大別スルキハ、兩種ト爲ス可シシテ、即チ一ハ人耳ヲ怡ハシ  
ムル者ニシテ、一ハ人目ヲ怡ハシムル者ナリ、是レハ予既ニ之ヲ論セリ、  
然レモ若シ其發生ノ次序ヲ論スルキハ、到底實迹ノ徴ス可キ無キヲ以  
テ、其勢妄想ノ論ニ陷イルヲ免レス、且ツ又此兩種ノ中ニ就テ孰レカ前  
ニ發シ孰レカ後ニ發シシヲ論スルモ、亦妄想ヲ免レス、他無シ、此二事ハ  
古昔ノ載籍ヲ考フルモ未タ其年序ノ徴ス可キ有ラサルヲ以テナリ、  
是故ニ詩歌ナリ、繪畫ナリ、彫刻ナリ、音樂ナリ、建築ナリ、舞踏ナリ、予其孰  
レカ最モ前古ニ溯リ、孰レカ最モ後ニ居ルコトヲ言フヲ欲セス、顧フニ方  
今學術益進開シ、考證ノ一途益精微ヲ極ムルヲ以テ、古來人ノ未ダ知ラ  
ザリシ所ノ上古ノ事ヲ往々之ヲ實迹ニ徴シテ差繆無キヲ致シ、即チ  
藝術ノ年序ノ如キモ、或ハ一旦之ヲ明知スルコトヲ得可シ、故ニ今ニ及ヒ、

一已ノ臆度ヲ叙述シテ強テ人ノ信ヲ博スルカ如キハ、予ノ甚ク取ラサ  
ル所ナリ、然リト雖モ今此レ等ノ諸藝ヲ汎論スルニ非スシテ、必ス一々  
之ヲ論究セント欲スルキハ、竟ニ之カ次序ヲ定メサル可ラス、顧フニ年  
代既ニ知ル可ラサルキハ、當ニ如何スベキ乎、蓋シ茲ニ一策有リ、以テ次  
序ヲ定メント欲ス、何ゾヤ、曰ク諸藝ノ性質ニ就テ細密ニ推考ヲ加ヘ、其  
中ニ於テ作者ノ感情ヲ發揮スルノ區域最モ狹少ナル者ヲ把リテ、首ニ  
之ヲ論シ、次第ニ其區域ノ廣博ナル者ニ及ハントス、是ノ如クスルキハ、  
以テ杜撰臆度ノ病ヲ免ル、コトヲ得可シ、  
蓋シ諸藝兩種ニ別レテ、一ハ人耳ヲ怡ハシムルコトヲ主トシ、一ハ人目ヲ  
怡ハシムルコトヲ主トス、人耳ヲ怡ハシムル藝術ハ、其源言語ヨリ發セシ  
ヲ以テ、自ラ言語ト其性質ヲ同クス、人目ヲ怡ハシムル藝術ハ、其源文字  
ヨリ發セシヲ以テ、自ラ文字ト其性質ヲ同クス、此レ其別ナリ、

人目ヲ怡ハシムル者ハ、曰ク建築ナリ、曰ク彫刻ナリ、曰ク繪畫ナリ、人耳  
 ヲ怡ハシムル者ハ、曰ク詩ナリ、曰ク音樂ナリ、而シテ舞蹈ノ如キハ既ニ  
 手足ノ容ヲ以テ之ヲ發スルヲ以テ、之ヲ人目ヲ怡ハシムル者ノ列ニ入  
 ル可ク、又聲調ヲ諧スルヲ以テ、亦之ヲ人耳ヲ怡ハシムル者ノ列ニ入ル  
 可シ、然レモ其最重ニスル所ハ、畢竟聲律ニ合スルニ在ルヲ以テ、予ハ之  
 ヲ詩歌音樂ノ中ニ列シテ以テ之ヲ論究セント欲ス、  
 凡ソ人目ヲ怡ハシムル藝術ハ、全ク成ルノ後ヲ俟テ之ヲ人ニ示メス  
 ヲ以テ、初ヨリ漸次ニ進ミテ漸次ニ收結スルノ理有ルヲナシ、若夫レ人  
 耳ヲ怡ハシムル藝術ハ、一時ニ人ニ示メスニ非スシテ、專ラ前後ノ次序  
 ヲ以テ巧智ノ寓スル處ト爲ス、故ニ人目ヲ怡ハシムル藝術ハ、又名ケテ  
 止齊ノ術ト曰ヒ、人耳ヲ怡ハシムル藝術ハ、又名ケテ序進ノ術ト曰フ、  
 人耳ヲ怡ハシムル藝術ハ生氣ヲ發揮スルニ於テ其區域最モ博シ、何ヲ

以テ之ヲ言フ、曰ク夫レ生氣ハ物ノ賴リテ以テ生スル所ニシテ、活發靈  
 動ノ質アリ、而シテ凡ソ其藝術ハ本ト形ノ見ル可キ者ナクシテ、專ラ聲  
 音ヲ以テ手段ト爲シ、始ヨリ終ニ至ルマテ變動シテ已マス、是レ其生氣  
 ヲ發揮スルニ於テ最モ便ナル所以ナリ、若夫レ人目ヲ感スル藝術ハ然  
 ラス、其手段タル專ラ物ノ形狀ヲ發揮スルヲ以テ、其最モ巧ナル者ト雖  
 モ、夫ノ生氣ヲ發揮スル人耳ヲ感スル藝術ノ作者ノ如キニ至ルヲ能ハ  
 ス、此レ他無シ、其作物ノ形狀一定シテ變動スルヲ無キヲ以テナリ、  
 止齊ノ藝術ハ生氣ヲ發揮スルニ於テ甚便ナラス、故ニ畫家彫刻家建築  
 家ノ如キハ自家ノ感情ヲ發揮スルニ於テ、其區域自ラ夫ノ詩人樂人ノ  
 自在ナルカ如クナラサル者有リ、予故ニ此レニ據リテ區別ヲ立テ、諸藝  
 ノ次序ヲ定ムルノ助ト爲サント欲スルモ、決シテ一時ノ妄想臆度ニ非  
 サルナリ、然リト雖モ所謂生氣ナル者ハ極テ重要ニシテ、苟モ藝術ヲ以

十四  
テ家ニ名クル者ハ、必ス之ヲ發揮スルヲ求メサル可ラス、故ニ畫人彫  
刻人ノ如キモ、巧妙ノ地ニ到ルキハ、其作物必ス生氣ノ見ル可キ有リ、但  
其藝術ノ性本ト詩歌音樂ノ專ラ生氣ヲ發揮スルヲ主トスルカ如ク  
ナラサルノミ、

生氣モ亦二種有リ、一ハ體殼ノ生氣ナリ、一ハ情意ノ生氣ナリ、故ニ彫刻  
家畫家ノ如キモ獨リ顔面手足ノ容ヲ摸寫スルノミナラス、亦其顔面手  
足ノ容ノ外ニ於テ、自ラ其人物ノ情性念慮感情ヲ摸寫シテ人ヲシテ之  
ヲ察スルヲ得セシメザル可ラス、是レハ則チ所謂生氣ヲ發揮スルノ  
謂ナリ、但其主トスル所畢竟物ノ形狀ヲ寫スニ在ルヲ以テ、縱令ヒ生氣  
ヲ發揮スルモ、竟ニ形貌ノ外ニ於テ之ヲ求ムルヲ得ス、若夫レ詩歌音樂  
ノ如キハ既ニ定形無クシテ、特ニ聲音ニ於テ意趣ヲ寓スルヲ以テ、物ノ  
生氣ヲ摸寫スルニ於テ太々便宜有リ、是ノ如キ者ハ作者ノ巧拙ニ由リ

十五  
テ然ルニ非スシテ、其藝術ノ性質本ト自ラ然ルナリ、  
茲ニ論スル所ト及ヒ前數章論スル所トニ由リテ之ヲ觀レハ、凡ソ藝術  
ノ巧ヲ爲ス所以ノ者ハ、專ラ物ノ形貌ヲ摸擬シテ其真ニ迫マルニ在ル  
ニ非スシテ、物ノ精神ヲ發揮シテ其活潑ノ氣象ヲ寫スニ在リ、設シ畫家  
彫刻家ノ巧ヲ爲ス所以ノ者ヲシテ、專ラ形貌ニ在ラシメハ、吾人其畫幀  
若クハ其彫像ヲ觀ルヨリハ、如カス直チニ實物ヲ觀ルノ愈レリト爲ス  
ニハ、何トナレハ畫人ナリ彫刻家ナリ、其手腕如何ニ巧妙ナルモ、獨リ形  
貌ヲ以テ言フキハ、竟ニ實物ニ及バサルヲ遠ケレバナリ、今乃チ然ラズ  
シテ、實鑒家相率キテ有名ナル畫若クハ彫像ヲ觀テ、頌讚ノ感テ致シテ  
目ニ容レサル者ハ、其故何ツヤ、其畫幀其彫像ノ中ニ於テ自ラ作者ノ意  
趣ノ觀ル可キ者有リテ、乃チ夫ノ生氣ノ活潑タル者有ルヲ以テナリ、  
且ツ夫レ人ノ手足ノ容、顔色ノ狀、及ヒ言語ノ調ノ如キハ、一々皆心上ヨ

り發生シ來ル所ナルヲ以テ、其幾微ノ間必ス意趣ノ在ル有ラサル莫シ、  
 其人ニ是ノ情念有リ、故ニ其手足ノ容自ラ是ノ如シ、其人ニ是ノ意思有  
 リ、故ニ其顔色ノ狀自ラ是ノ如シ、心ニ憂フル有ル乎、其言語自ラ情乎タ  
 リ、心ニ樂ム有ル乎、其言語自ラ綽然タリ、人生平常ノ瑣事皆然ラサル莫  
 シ、然レハ則チ專ラ人ノ心情ヲ察セント欲スルモ、畫幀彫像ノ属ヲ觀  
 ルヨリハ、如カス直チニ生人ト晤話シテ以テ之ヲ觀察スル有ランニハ、  
 今乃チ然ラズシテ、畫幀彫像ノ巧妙ナル者ヲ觀ルモ、之ヲ樂ムト大ニ  
 人ト晤話スルニ勝サル所以ノ者ハ何ツヤ、他無シ、人ト晤話シテ其心情  
 ヲ觀察スルトハ、畢竟性理ノ學ノ經驗ナルニ過キズ、畫幀彫像ヲ觀ル  
 ノ樂ニ至リテハ然ラズ、其作物中ニ於テ自ラ其作者ノ手腕ニ得ル所ノ  
 顯ハル、有ルヲ以テ、正ニ吾人ヲシテ爲メニ感情ヲ發セシムルガ故ナ  
 リ、是ヲ以テ是顔面ナリ、是手足ノ容ナリ、之ヲ生人ニ觀テ少シモ感情ヲ

發スルコトナキモ、一日之ヲ畫幀彫像ニ觀ルモ、吾人必ス其作者ノ巧ヲ  
 讚シテ其才ノ美ヲ嘆セサルコト能ハス、此レ他無シ、吾人ノ藝術ノ作ニ感  
 スルハ、獨リ其作物ノ生氣意趣ニ感スルニ非スシテ、亦作者ノ生氣意趣  
 ニ感スルヲ以テナリ  
 此ニ由リテ之ヲ觀レハ、畫人ナリ、彫刻人ナリ、建築家ナリ、詩人ナリ、樂人  
 ナリ、俗人ナリ、其主トスル所ハ、務テ其作物ニ於テ自家ノ機軸ヲ出シテ  
 以テ自ラ其生氣意趣ヲ發スルニ在ルコト知ル可キナリ、此レ予ノ諸藝ヲ  
 區別シテ、其次序ヲ定ムルコトハ、夫ノ年代ノ次序ニ據ラスシテ必ス其藝  
 ノ性質ニ據ル所以ナリ、  
 是故ニ予ハ夫ノ藝術ヲ大別シテ兩種トスルノ說ハ、固ヨリ之ヲ存シテ、  
 乃チ一ハ名ケテ人目ニ係ル藝術ト爲シ、一ハ人耳ニ係ル藝術ト爲シ、次  
 キニ此兩種ノ中ニ就テ作者ノ意趣ヲ發スルニ於テ、其區域最モ狭少ナ

ル者ヲ取リテ首ニ之ヲ列シ、漸次ニ其區域ノ廣博ナル者ニ及ハントス、蓋シ作者ノ意趣ヲ發スルノ區域ノ廣狹ヲ知ラント欲セハ、其藝術ノ性質如何ヲ視テ之ヲ知ル可シ、夫レ人耳ヲ感スル藝術ハ、人目ヲ感スル藝術ニ比スレハ、意趣ノ區域更ニ廣シ、又同一人耳ヲ感スル藝術中ニ就テ、詩歌ノ如キハ音樂ニ比スレハ意趣ノ區域更ニ廣シ、何トナレハ人目ヲ感スル藝術ハ、畢竟人ニ示メスニ形貌ヲ以テスルニ過キス、若夫レ人耳ヲ感スル藝術ハ、一切形貌ヲ闕キテ人ニ示メスニ精神ヲ以テスレバナリ、又音樂ノ如キハ畢竟聲律ノ高下ヲ以テ意趣ヲ示メスニ過キザルモ、詩歌ニ至リテハ其辭句本ト意義ヲ有スルヲ以テ、作者自ラ其感情ヲ發スルニ於テ大ニ便利ナリ、

夫レ藝術ノ巧ヲ爲ス所以ノ者ハ、作者ノ其感情ヲ發揮シテ、賞鑒家ヲシテ之ヲ知ラシムルニ在リ、然レハ則チ今藝術ヲ區別シテ其次序ヲ定メ

ント欲シテ、一切妄想臆度ノ見ヲ棄テ、專ラ諸藝ノ性質ヲ論究シ、其區域ノ廣狹ニ由リテ之レカ次序ヲ定ムルハ、庶幾クハ天下復タ非議ヲ容ル、者無カラシ、是故ニ予ハ下數篇ニ於テ先ツ人目ヲ怡ハシムル藝術ヲ取リ、其中ニ就テ最モ首ニ建築ヲ列シ、次ニ彫刻ヲ列シ、次ニ繪畫ヲ列シ、又之ニ次クニ人耳ヲ怡ハシムル藝術ヲ以テシテ、其中ニ就テ先ツ舞踏ヲ列シ、次ニ音樂ヲ列シ、詩ヲ以テ最後ト爲シテ、漸次ニ之ヲ論究スルヲ得ン、

○第二篇 建築術

○第一章 天象ノ說ヲ主張スル流派○建築ノ形狀ハ各地ノ風土材料及ヒ制度宗旨ノ性質ニ由リテ各々相異ナル事

天象ノ說ヲ主張スル流派ノ最モ其議論ヲ逞クセシハ、建築ニ過クル莫シ、天象ノ說ヲ主張スル流派トハ何ソヤ、曰ク其說ヲ主張スル者ハ皆云フ、古昔建築ノ初テ起リシハ、造化主ノ業ニ倣フテ其痕迹ヲ摸擬スルニ昉マリテ、決シテ風日ヲ蔽フヲ以テ主ト爲スニ非スト、故ニ此說ヲ執ル者ハ、之ヲ名ケテ天象ノ流派ト曰フ、其言荒誕虛夸ニシテ、風ヲ逐ヒ影ヲ捕ルカ如ク、洗洋自ラ恣ニシテ絶エテ信憑ス可キ無シ、茲ニ其一ニテ舉ケテ之ヲ示メサントス、

シヤル、プラン氏ハ即チ天象ノ說ヲ執ル者ナリ、其藝術論ノ第二十葉以

下ニ於テ口ヲ極テ其說ヲ鼓唱セリ、曰ク上古人民ノ初テ相聚リテ邑落邦國ヲ爲スヤ、木石ヲ構架シテ方ニ始テ建築スル所有リ、然レモ其所謂建築ハ自己居宅ノ便ヲ圖ルニ非スシテ、專ラ造化ノ迹ヲ摸擬シテ之ヲ形容スルニ在リ、夫レ造化ノ迹ハ幽遠深微ニシテ得テ測度ス可ラサル者ナリ、而シテ上古ノ建築ハ之ヲ摸擬セシヲ以テ、其旨趣モ亦幽晦ニシテ測ル可ラサル者有リ、怪ムコト無キナリ、是邦ノ建築ハ自ラ是邦人民ノ夫ノ天象ニ於テ感發スル所ノ者ヲ取リテ之ヲ寫スニ過キスシテ、決シテ其人民中ノ誰甲若クハ誰乙ノ意旨ニ出テタルニ非ス、故チ以テ其形狀奇怪ニシテ、今ヨリ之ヲ觀ルモハ、絶エテ其何ノ目的ヲ指シテ何ノ旨意ヲ示メセシヲ知ル可ラス、後世人文進剛スルニ及ヒテハ然ラス、品章制度極テ錯雜ニシテ、復ダ上古ノ單純清楚ナルカ如クナラス、是ヲ以テ建築ノ如キモ其制度一ナラス、即チ寺塔ハ自ラ寺塔ノ制有リ、官衙ハ自



ラ官衙ノ制有リ、廬舎ハ自ラ廬舎ノ制有リ、一定シテ紊ル可ラス、一構築ニ遇フ毎ニ、一望シテ其何ノ爲メニシテ設ケシコト明ニ知ル可シ、是レハ則チ近世建築家ノ業ノ益々進ム所以ナリ、  
 古代ノ構築ハ然ラス、其旨趣初ヨリ人事ノ便チ爲スニ非ス、形狀奇怪突兀ニシテ、人ヲシテ驚心動魄セシムル者有ルモ、從フテ其制度ノ旨意ヲ考フルキハ、茫乎トシテ得可ラス、怪ムコトナキナリ、彼レ其初メ木石ヲ構築スルヤ、多クハ僧侶之ヲ綜理シ、其形狀多クハ宗旨ノ意ノ寓スル所ナルヲ以テ、俗人ハ得テ之ヲ窺ハス、今夫レ神明ノ徳タル、洋々トシテ天地ノ間ニ充滿スルニ論無シト雖モ、之ヲ要スルニ人智ノ淺薄ナルヲ以テ、終ニ其端倪ヲ得可ラス、古代ノ建築ノ旨意モ亦猶ホ是ノ如キナリ、其構築ノ形狀中自ラ作者ノ旨意有リテ、決シテ一時偶然ノ間ニ發セシニ非ザルコトハ固ヨリ論ヲ待タズ、然レモ今明カニ其旨意ノ在ル所ヲ指摘セ

ント欲スルキハ、精ヲ竭シ智ヲ畢クヌモ、其一端ヲ得可ラス、今古昔ノ遺構ノ存スル者ニ就テ檢考ヲ加フルニ、其墻壁ノ上往々徽章ノ如キ者ノ彫鐫セル有リ、此レ蓋シ夫ノ天地ノ形象ヲ觀察シテ之ヲ摸寫スル所ナル可シ、然レモ庸衆人ハ絶テ之ヲ理會スルコト能ハス、獨リ庸衆人之ヲ理會スルコト能ハサルノミナラス、即チ僧徒ノ命ヲ承ケテ此レ等ノ徽章ヲ彫鐫セシ者ト雖モ、自ラ其何ノ指斥スル所ナルヲ知ラス、夫レ然リ、故ニ一切旨意ノ在ル所ハ、獨リ宗教ヲ典ル者之ヲ胸中ニ秘シテ、餘人ハ其一斑ヲ窺フコト能ハス、何ツヤ、其用フル所ノ文字既ニ尋常ノ文字ニ非スシテ、皆幽遠深遠ノ章號ナルヲ以テナリ、  
 夫レ然リ、故ニ上古ニ在リテハ、僧侶自ラ建築家ノ事ニ任シ、一切其制度ヲ綜裁シテ、工匠ノ徒ハ唯其旨意ヲ承奉スルノミ、夫レ僧侶ノ徒、身宗教ノ說ヲ典リテ、斯ニ土木ノ事ニ任ス、其建築スル所ノ自ラ宗教ノ意思ヲ

寓スルヲ亦宜ナラス乎、既ニ宗教ノ意思ヲ寓ス、故ニ其旨趣茫洋トシテ  
 窺測ス可ラズ、然レモ之ヲ深察スルキハ、竟ニ天文地理ノ大體ヲ摸寫ス  
 ルニ過キス、即チ夫ノエジツトノ高塔ノ如キ、挺々然トシテ高ク空中ニ聳  
 ヘテ、既ニ以テ人ノ居宅ニ便スルニ非ス、此レ必ス彼僧徒一二高山ノ巔  
 ヲ望見テ造化ノ巧ニ感スル有リ、因リテ塔ヲ起シテ之ヲ摸倣シ、以テ其  
 景慕ノ意ヲ寓スルニ起リシヲ疑フ容レス、今其形狀ニ就テ搜檢スルニ、  
 決シテ一時偶然ノ故ニ發スルニ非スシテ、自ラ天地ノ大道ノ或ハ敬ス  
 可ク或ハ畏ル可キ者ヲ取リテ、之ヲ其間ニ形ハセシヲ想フ可シ、又或ハ  
 一大宮殿ノ如キ者ノ構築セル有リテ、其承塵ノ上遍ク星辰ノ經度ヲ彫  
 鐫スルヲ見ル、此レハ則チ天象ヲ摸擬セシヲ彰々トシテ明ナリ、又或ハ  
 窟穴ニ就テ數道ヲ鑿開シ、其間往々室ヲ設ケ、人ヲシテ已ニ入リテ復タ  
 出ルヲ能ハサラシム、此レモ亦深意ノ寓スル有ル可シ、

又多ク木石ヲ架シ、全ク平扁ニシテ少シモ凸凹ノ處ナカラシム、此レハ  
 則チ海面ノ貼平ニシテ風濤ノ患ナキニ象リタル者ナリ、又樓櫓森然ト  
 シテ蒼穹ニ拔クモノ有リ、此レハ則チ巖巖ノ高ク聳ユルニ象リタル者  
 ナリ、又高柱布列シテ擡立スル有リ、此レハ則チ喬木ノ茂生シテ天ニ參  
 ハルニ象リタル者ナリ、凡ソ此ノ如キノ類ハ、一モ人ノ居宅ニ便スルニ  
 非スシテ、專ラ化工ノ形迹ヲ摸擬シテ以テ其敬仰ノ意ヲ寓セルコト疑  
 ナシ、  
 此レニ由リテ之ヲ觀レハ、古代ノ建築ハ初ヨリ人生ノ便利ノ爲メニ設  
 クルニ非スシテ、一ニ皆宗教ノ意ヲ包含セルヲ知ル可キナリ、蓋シ僧侶  
 夫ノ造化主宰ノ功德ヲ敬仰スルヲ極テ至リテ、以爲ラク主宰ノ事物ヲ  
 裁成スルヤ、巧妙至ラサル所ナシ、天下ノ至巧ナル者ト雖モ、能ク肖似ス  
 ルヲ有ルヲ無シト、是ニ於テ意ヲ極メテ其萬分ノ一ヲ摸仿スル有ラフ

ト欲ス、是ヲ以テ或ハ山林ノ形狀ヲ象リ、或ハ江海ノ景況ニ仿ヒ、或ハ日月星辰ヲ寫ス等ノ如キ、皆造化ノ工ニ擬スルニ非サル莫シ、蓋シ其之ヲ擬スルヤ、或ハ石ヲ用ヒ、或ハ木ヲ用フルモ、其制度或ハ高聳ナルモ、或ハ平扁ナルモ、竟ニ材料ヲ造化ノ工ニ資ラサルヲ得ス、他ナシ木石ハ本ト造化ノ作ル所ナルヲ以テナリ、竟ニ造化ノ典型ニ依準ミサルヲ得ス、他無シ、長厚高ノ三形ハ本ト天地自然ノ理ナルヲ以テナリ、故ニ曰ク、建築ハ其初メ天地ノ形象ヲ觀察シテ之ヲ摸擬スルニ起レリト、

シャル、プラン氏ノ言此ノ如シ、美ハ則チ美ナリト雖モ、顧フニ太タ玄妙虚夸ナラス乎、

ラム子一氏モ亦天象ノ説ヲ執ル者ナリ、其言大抵シル、プラン氏ト相似タリ、曰ク印度ノ宗教ハ凡ソ宗教ノ最モ古ニ溯ル者ナリ、其旨趣大抵神明ヲ以テ至ラサル所ナシト爲シ、山河大地草木國土ヲ舉ケテ皆神體

ノ形ヲ外ニ發スル者ト爲ス、是ニ於テ其敬仰ノ意ヲ庶物ニ致スヲ、極メテ至レリ、即チ其塔廟寺院ノ制ノ如キモ、皆自ラ此意思ノ寓スル所タリ、夫レ既ニ山河大地ヲ以テ神明ノ形體ト爲ス、故ニ其立論ノ間自ラ虚大ニシテ且ツ幽晦ナル者有ルヲ免レズ、而シテ其構築ノ中ニ於テ此意ヲ寓スルヲ以テ、其制度モ亦隨フテ虚夸幽遠ノ狀無キヲ能ハス、今印度寺院ノ制ヲ觀ルニ、皆極テ高大ニシテ且ツ其結構錯雜ニシテ窮詰ス可ラス、而シテ絶ニテ墻壁ノ属ノ其外ヲ限極スル無シ、故ニ之ヲ觀ル者自ラ未タ成就ミザルカ如キノ狀ヲ見ル、嗚呼此レ正ニ其宗教ノ玄旨ノ在所ナリ、何ソヤ、大凡ソ物ノ收結有ル者ハ、大ナリト雖モ自ラ狭小ノ迹有リ、若シ夫レ收結無キ者ニ至リテハ、小ナリト雖モ自ラ廣大ノ意有リ、他無シ、限極スル所無キヲ以テナリ、夫レ印度人既ニ山河天地ヲ以テ皆神明ノ形體ノ發ト爲ス、而シテ神明ハ幽遠博大ニシテ限極無キ者ナリ、然

レハ則チ其寺院ノ制ニ於テ亦必ス神明遠大ノ徳ヲ寫サ、ル可ラス、此レ其構築ノ力ヲ極テ博大ノ意ヲ摸寫スル所以ナリ、

ラムチー氏ノ言此ノ如シ、其荒誕ナルコシヤル、ブラン氏ニ下ラス、其意大抵建築ヲ以テ専ラ宗教ノ説ヨリ發起セシト爲スニ過キス、但其立論太ク玄妙高遠ニシテ、言語中雲煙ノ靄然タルアルカ如ク、人ヲシテ其意思ヲ捉搦スルニ難カラシム、之ヲ要スルニ皆異ヲ立テ新ヲ標シ、其文章ヲ瑰偉ニシ、其字句ヲ美婉ニシテ以テ自ラ喜フノミ、未ク以テ藝術論ノ着實ノ見ト爲ス可ラサルナリ、

ウイオレール<sup>ウイオレール</sup>デ<sup>デ</sup>ク<sup>ク</sup>氏ハ近時有名ノ建築家ナリ、其論スル所極テ切實ニシテ大ニ實迹ト相符合シテ、復ク前ノ二氏ノ虛夸ナルカ如クナラス、故ニ予ハ甚ク其言ヲ善トシテ、自ラ其予カ見ト同シキヲ喜フウイオレール氏曰ク、蓋シ建築ハ凡ソ藝術ノ中ニ就テ最モ實際ノ便利ニ適スルヲ取ル

者ナリ、他ノ諸藝ノ専ラ觀美ヲ求ムルガ若クナラスト、善イ哉言ヤ、今地球上諸國ノ民其何ノ種タルヲ問ハス、苟モ古代ニ溯リテ其寺院若クハ廬舎ノ制ヲ考察スルニ、多クハ皆其實際ノ便利ヲ求ムルノ意ニ出ツル者ニシテ、尖ノ二氏ノ引ク所ノ如キ者ハ、最モ其希レニ有ル所ノ者ナリ、且ツ<sup>エジプト</sup>ノ高塔ノ如キモ、其意思ノ玄妙ナルヲ未ク必ズシモシヤル、氏ノ言フ所ノ如クナルニ非ス、若夫レ印度ノ窟室ノ如キハ、ラムチー氏ノ論最モ其謬戾ナルヲ見ル、請フ之ヲ辨セン、

夫レ人類ノ初テ生シテ未ク多ク年所ヲ經サルヤ、各々其意ニ任セテ生ヲ爲シテ、未ク相聚リテ邦國邑落ヲ爲ス有ラス、是時ニ在リテハ人皆窟穴ニ據リ、若クハ林叢ニ蔽ハレテ以テ風雨ヲ防キシヲ想フ可シ、然レハ則チ窟穴ト林叢トハ、是レ人類ノ最初ノ廬舎ト謂フ可シ、是ヲ以テ其後ニ及ヒ、智巧稍々進ミテ器具ヲ造作スルニ至リテモ、其居宅ハ猶ホ窟穴

林叢ノ外ニ出デス、但林叢ハ人作ヲ以テ之ヲ爲ス可ラスシテ、窟穴ハ則チ巖石ノ罅隙ニ就テ略ホ鑿開ノ巧ヲ加フルキハ、以テ之ヲ爲ス可キナリ、故ニ夫ノ刀斧ノ具ノ稍々備ハルニ及ヒテハ、復々天然ノ窟穴ヲ以テ足レリトセズシテ、往々自ラ鑿開シテ之ヲ廣豁ニス、但其器具已ニ略ホ備ハルニ及ビテ、猶ホ僅ニ窟室ヲ作りテ自ラ蔽フ者ハ、他無シ、其初年ノ慣習ノ自ラ然ラシムル所ナリ、此レ乃チ夫ノ印度、エジプト、アシリーノ古昔ノ寺塔ノ往々地中ニ設クル所以ナリ、必スシモ別ニ玄妙ノ意思有ルニ非ザルナリ、

獨リ此レノミナラス、其後人智益々進ミテ能ク木ヲ伐リ石ヲ鑄リテ、巧ヲ施スヲ知ルニ及ヒテモ、往々之ヲ地上ニ構架セズシテ、猶ホ之ヲ地中ノ窟穴ニ施セリ、此レ皆自ラ其初年ノ慣習ノ迹ニ脱シ難キ者有ルニ由リテ然ルナリ、蓋シ此ノ如キ者ハ東方諸地ノ民、數百年ノ間皆之ヲ用

ヒタリキ、ウイオレー氏ノ證スル所ニ由ルニ、東方諸地ノ民既ニ木材ヲ用フルヲ知ルノ後モ、猶ホ往々喜ヒテ巖石ニ就テ鑿鑄ノ巧ヲ施セシヲチ觀テ見ル可シ、其言ニ云フ、印度古昔ノ遺構ヲ搜索スルニ、其中動モスレハ巖石ヲ鑿開シテ居宅ヲ作り、其屋蓋及ヒ屋蓋ヲ支撐スル所ノ柱皆石ヲ以テ之ヲ作りテ、其形多クハ木ヲ削ルカ如クセシ者有リト、又云フ、ペルセポリーノ壞宅ノ梁桷ノ如キモ、多クハ石ヲ以テ之ヲ作りテ、形ハ則チ反リテ木ヲ削リタルカ如クセル者多シト、夫レ古代ノ民既ニ木材ヲ用フルヲ知ルノ後モ、猶ホ往々石窟ヲ構築シテ材木ヲ架スルヲ喜ハザルキハ、其初年天然ノ窟穴ニ據リシ時ノ遺習ヲ守リシヲ想フ可シ、夫レ既ニ石窟ニ就テ巧ヲ加フルキハ、甚ク整齊ナルヲ能ハスシテ、自ラ未タ巧ヲ畢ハラサルカ如キ形狀有ルハ、豈ニ自然ノ勢ナラス乎、ウイオレー氏又云フ、上古ノ寺塔ハ往々圓柱ヲ撰メテ之ヲ排疊スルヲ猶

ホ「オルグ」ノ名ノ樂器ノ管ノ如クシテ、以テ裝飾ノ觀ト爲ス、即チコルサバトノ  
 宮殿ノ裝飾ノ如キ皆是レナリ、今之ヲ觀ルルハ、多ク大木ノ幹ヲ聚メテ  
 之ヲ積累セシカ如キヲ見ル、顧フニ此種ノ裝飾ハ、上古穴處ノ時ノ遺習  
 ノ最モ後ニ存セシ者ナリ、何トナレハ古昔ノ民未ク鍊火石ヲ用ヒテ其  
 構築ヲシテ整齊ニシテ且ツ完固ナラシムルヲ能ハス、直チニ地ヲ鑿リ  
 テ穴ヲ穿ツヲ以テ、或ハ土石ノ墜落シテ遂ニ穴中ニ葬ムルニ至ルノ恐  
 レ有リ、是ニ於テ往々木ヲ伐リ、其幹ヲ攢メテ支撐セサルヲ得ズ、是ヲ以  
 テ其後智見稍進ミテ屋ヲ地上ニ架スルニ及ビテモ、猶ホ動モスレハ圓  
 柱ノ如キ者ヲ積累シテ以テ裝飾ト爲シハ、畢竟其初年穴處ノ時ノ土  
 石ヲ支撐セシ遺習ヲ存セルニ過キスト、ウイオレー氏ノ言誠ニ切實ニシ  
 テ事迹ニ適當スト謂フ可シ、此言ニ由リテ之ヲ考フレハ、近代ノ人ノ上  
 古建築ノ旨趣ノ在ル所ヲ臆想シテ之ヲ察スルモ、遽ニ解ス可ラサルハ

亦宜ナラス乎、

ウイオレー氏又曰ク、上古小亞細亞ノ民ノ遺構モ亦往々石ヲ以テ之ヲ作  
 リテ、其形狀ハ反リテ木作ノ梁棟桷椽ノ類ニ象ル者甚ク多シ、又テ  
 スノ遺構ノ如キモ亦然リ、既ニ石ヲ以テ材料ト爲シテ其巧ヲ施ス  
 ハ、反リテ木材ノ製ニ象ル、此レ世人ノ往々驚怪シテ遽ニ解スルヲ能ハサ  
 ル所以ナリト、又曰クエジト人ノ如キハ、石ヲ以テ全屋ヲ作りテ、其形狀  
 全ク葛蔓若クハ藤蘿ト土塊トヲ以テ作セシ者ト異ナルナシ、顧フニ鉅  
 石ヲ架シテ屋ヲ作り、其形狀ヲシテ木材ノ屋ト相似セシム、此レ其智巧  
 實ニ驚ク可キナリ、予ヲ以テ之ヲ考フルニ、凡ソ此ノ如キ者ハ他故無キ  
 ナリ、蓋シ其人民木ト樹木極テ多キ地方ニ居リ、且ツ其智巧已ニ頗ル進  
 闢シテ、能ク材木ヲ斲削シテ屋宅ヲ爲スヲ知リ、一旦徙リテ樹木ニ乏  
 キ地方ニ轉居シ、是ニ於テ凝石ニ就テ屋ヲ作り、若シハ石ヲ架シテ之ヲ

作シテ、裝飾ハ一ニ其平生ノ習フ所ニ擬シテ以テ自ラ喜ヒシニ過キス、但其ノ智巧己ニ進メルヲ以テ、巖石ニ就テ鑿鑿ノ巧ヲ施スト雖モ、其形迹全ク材木ヲ用ヒタルカ如キナリト、

又古昔ニ在リテイニヤン人ノ聚居セシ小亞細亞ノ遺迹モ、亦此レト相似タリ、蓋シ全屋巖石ヲ鑿開スルノ成ル所タルコト、一ニ印度人民ノ廬舎ト異ナルコト無シ、然レモ其中往々大木ノ根幹ヲ列シタルカ如キ狀有ルヲ見ル、此レ蓋上古穴處ノ時樹木ヲ以テ土塊ノ墜ルヲ防キ、若クハ之ヲ以テ屋蓋及ヒ牆壁ト爲セシ遺習ニシテ、乃チ此ヲ以テ裝飾ト爲スニ過キス、但ドリヤンノ建築ニ於テ此レト相似タル裝飾有ルヲ見テ、亦上古樹木ノ根幹ヲ用ヒシ時ノ遺習ト爲スカ如キハ、蓋シ謬戾タルヲ免レズ、何トナレバウイオレー氏ノ通博ニシテ善ク古代ノ事ヲ搜索スルヲ以テ、明ニ此說ノ非ヲ辨シテ餘力ヲ遺サレバナリ、而シテ予ハ素ヨリウイオ

レー氏ノ言ニ服シテ極テ之ヲ信スル者ナリ、故ニ此說ヲ以テ謬戾ト爲スハ亦宜ナラズヤ、

其レ古代ノ建築ノ遺構、或ハ木石ヲ用フル有リ、或ハ直チニ巖穴ニ就テ鑿鑿スル有リ、又其裝飾モ亦數種有リテ形狀各々相異ニシテ、其中往々奇怪ノ觀ヲ呈ス、然レモ其實ハ少シモ怪ムニ足ル者無シ、彼レ其居ル所ノ風土物産本ト相異ニシテ、或ハ樹木ニ富ム有リ、或ハ樹木ニ乏キ有リ、又其人情モ亦相異ニシテ、或ハ這樣ノ裝飾ヲ好ム有リ、或ハ那樣ノ裝飾ヲ好ム有リ、此レ其廬舎寺院ノ制ノ各々相異ナル所以ナリ、又寺院ト宮殿トニ至リテモ、其制度様式ハ尋常廬舎ト相異ナルコト無シ、但其規模稍々廣大ナルノミ、此レ固ヨリ怪ムニ足ラス、神ナリ君ナリ、本ト其人民ノ崇敬スル所ナリ、是ヲ以テ一旦之レカ爲メニ寺塔若クハ殿屋ヲ建ルハ、必ス其制度ヲ廣大ニシテ以テ尋常ノ廬舎ニ別ツコトヲ求ム、此レ自然

ノ情ナリ、然レモ其材料ニ至リテハ、其土地樹木ニ富ム者ハ亦樹木ヲ用ヒ、其土地石ニ富ム者ハ亦石ヲ用フルノミ、別ニ玄妙ノ原因有ルニ非サルナリ、

エジプトノ高塔ノ如キハ巍然トシテ天半ニ聳ユ、誠ニ天下ノ偉觀ナリ、然レモ此ヲ以テ高山ノ巔ニ摸擬シテ、以テ造化ノ工ヲ寫セシト云フカ如キハ、妄想ノ至ナリ、此レハ本トエジプト王ノ墓域ニシテ、其制度ノ高大ナルコト此ノ如キ所以ノ者ハ、他故無シ、國王自ラ萬民ノ上ニ托シテ、自ラ以爲ラシトシ庸衆ト類ヲ異ニス、是ニ於テ其墓表ヲシテ極テ高大ナラシメテ以テ自ラ喜ヒシニ過キス、初ヨリ化工ニ摸擬スルニ意有ルニ非ザルナリ、今經典及ヒオメーロノ「イルリヤード」ノ詩ニ據リテ考フルニ、古昔ニ在リテハ屍ヲ窟穴中ニ置キ、石ヲ其上ニ堆積スルヲ以テ例ト爲セリ、此レ他ナシ、當時深山大澤到ル處之レ有リ、是ニ於テ猛獸往々人ニ

逼リ、又屢々墳墓ヲ發掘シテ死體ヲ食フノ患有リ、故ニ此ノ如クニシテ以テ猛獸ノ害ヲ防ケリ、獨リ國王ノミニ非ザルナリ、但國王ハ其位ノ尊貴ナルヲ以テ、其墳墓ノ制モ亦之ヲ高大ニシテ庸衆ト區別スルノミ、又アシリー王ノ宮殿ヲ造營シテ高大ヲ極メ、樓閣挺然トシテ空ヲ攀チ、殆ント國中ヲ俯觀スルニ至リシカ如キモ、亦此ヲ以テ其得意ヲ示シ、又炎暑ノ候登リテ以テ涼ヲ取ルニ過キス、他ナシ、此土暑熱極テ劇キヲ以テ、是ノ如ク高大ナラザルキハ、以テ涼ヲ取ル可ラザレバナリ、又東方諸國ノ寺院ノ極テ廣大ナルコトハ、其原因蓋シ二有リ、彼レ多クハ天ヲ尊ヒテ神ト爲シテ、以爲ラシ博大ニシテ覆ハサル所ナシト、是ニ於テ其寺院ノ制ヲ廣大ニシテ以テ神ノ靈ヲ發揚スルコトヲ務ム、此レ其原因ノ一ナリ、又當時僧侶皆神殿中ニ相聚リ居テ生ヲ爲セリ、是ヲ以テ務テ神殿ノ制ヲ廣大ニシテ、殆ント一區域ヲ爲スカ如キニ至レリ、此レ其



原因ノ二ナリ、即チ印度ニシテ、トシ、デーノ寺院ハ皆是レナリ、  
 其他人民天ヲ尊ヒテ神ト爲サスシテ、別ニ一二神ヲ奉スル者、即チ古昔  
 希臘ノ如キモ、其神廟猶ホ頗ル尋常ノ盧舍ヨリ廣大ナリ、此レ他ナシ、其  
 中ニ安置スル所ノ神像極テ高大ナルヲ以テ、若シ神殿ヲ大ニセサルハ  
 ハ、之ヲ容ル、トヲ得サレバナリ、但希臘ニ在リテハ、僧侶別ニ一種族ヲ  
 爲スニ非スシテ、皆他ノ人民ト雜居シ、且又祭祀ノ如キモ之ヲ神廟中ニ  
 行フニ非スシテ、常ニ街衢ニ於テ之ヲ行ヒシヲ以テ、神殿ノ制終ニ印度  
 アシリト等ノ廣大ナルカ如クナラス、

北地ノ人民ノ如キハ、其初メ神廟甚タ高大ナラザリシモ、其後漸ク高大  
 ニ赴ケリ、其原因蓋シ各々一ナラス、或ハ宗教ノ意思ニ係ル者有リ、或ハ  
 風土ノ故ニ係ル者有リ、又或ハ此ニ因リテ以テ他邦ノ民ニ誇ル者有リ、  
 之ヲ要スルニ、神像ノ高大ナルニ由リテ然ルニ非ス、又僧徒ヲ居クガ爲

メニ然ルニ非サルヲ以テ、未タエジト印度及ヒ古昔希臘ト同視ス可ラ  
 ス、蓋シ北地人民ノ崇尊スル所ノ神ハ、本ト無形ノ物ナルヲ以テ、塑像ヲ  
 以テ之ヲ形ハストヲ得ス、是ニ於テ務テ其塔廟ヲ高大ニシテ以テ神靈  
 ノ高大ナルトヲ發揚スルトヲ求ム、但既ニ神德ヲ發揚スルトヲ以テ主  
 トスルカ故ニ、特ニ其制度ノ高サニ注意シテ、廣サハ則チ必スシモ意ヲ  
 用ヒス、又其氣候大率寒冷ニシテ、廟外ニ於テ祭儀ヲ行フトヲ得ス、是ニ  
 於テ寺院ヲ高大ニシテ以テ大像ヲ容ル、トニ足ルトヲ求ム、是ノ如キ者  
 ハ歐洲諸國ノ寺院皆是レナリ、啻ニ此レノミナラス、中古ノ時一種ノ訛  
 言行ハレテ、諸國ノ民皆以爲ラシ、紀元一千年ニ至ルトキハ天地方サニ一  
 大劫會ニ値ルヲ以テ、世界一時ニ崩壞シテ人畜皆殲ルヲ免レズト、是ニ  
 於テ上下皆震慄シテ此會ノ至ルヲ待チタリ、既ニシテ一千年ニ及ヒテ  
 モ、別ニ異事有ルト無シ、是ニ於テ諸州ノ民皆相慶シテ以爲ラシ、是レ全

ク上帝ノ擁護ニ由リテ此禍ニ免ル、コトヲ得タリト、因リテ相共ニ金ヲ  
 獻シテ寺院ヲ構築シテ、其高大ヲ極メ以テ神恩ヲ謝スルコトヲ求メリ、  
 一千年ノ劫會ノ事ハ、現今ノ人幾ント復タ之ヲ言フ者無シ、然レモ當  
 時ニ在リテハ諸國ノ民皆之ヲ信ゼシヲ以テ、其危悞ノ狀實ニ想フ可  
 シ、今其原因ヲ尋ヌルニ蓋シサトシ、シノ經典ニ據レハ、基督ノ死  
 ニ臨ム時、其徒弟ニ告ケテ世界ノ將ニ崩壞セントスルコトヲ示セリ、且  
 ツ曰ク、此代ノ民必ス此禍ニ遭ハント、是ヲ以テ基督ノ徒弟及ヒ其他  
 耶蘇宗ヲ奉スル者ハ、皆以爲ラク基督死スルモ、世界且ツ崩壞セン  
 ト、既ニシテ基督死スルノ後モ、絶ニテ異事有ルコトナシ、是ニ於テ人皆  
 以爲ラク基督初ヨリ人ヲ欺クノ理ナシ、願フニ其所謂此代ノ民トハ、  
 獨リ一代ノ民ヲ指スニ非スシテ、今ヨリ以往一千年ノ民ヲ并セテ言  
 フ者ナリト、此レ其紀元一千年ノ劫會ノ說ノ起リシ所以ナリ、其相傳

フルコト此ノ如ク其久キヲ以テ、凡ソ耶蘇宗ヲ奉スル人民ハ、皆此說ヲ  
 信シテ疑ハス、一千年ニ至ルニ及ヒ、諸國ノ民皆恐怖シテ復タ生意有  
 ルコト無ク、唯手ヲ拱シテ禍ノ至ルヲ俟ツノミ、既ニシテ一千有一年ニ  
 及ヒテ、亦別ニ異事無キヲ見テ人皆相慶シテ狂ノ如シ、夫レ一旦震懼  
 ノ地ニ居テ己ニ性命無キ者ノ如クニシテ、俄ニ安穩ノ地ヲ得、其喜知  
 ル可キナリ、其ノ天主ノ功德ヲ感佩シテ、争フテ寺院ヲ創立セシハ、豈  
 ニ人情ノ自然ニ非ス乎、

又是時ニ際シ、諸部落ノ民諸侯ノ虐政ヲ脱シ、自ラ官吏ヲ選立スルコトヲ  
 得テ、皆喜フコト甚シ、是ニ於テ相與ニ金ヲ出シ、各々其邑落ニ於テ塔廟ヲ  
 起シ、以テ天主ノ恩ニ報セリ、故ニ其寺院ヲ創立シテ高大ヲ窮極セシハ、  
 本ト天主ノ爲メニスト雖モ、亦此ヲ以テ其獨立ノ權ヲ得タルコトヲ祝ス  
 ルノ意ヲ表シ、且ツ以テ區會議員會聚ノ處ト爲スカ爲メナリ、若シ一意

ニ天主ヲ敬仰スルカ爲メニ發シタルト云フキハ、未ダ當時ノ眞情ヲ得  
 タリト謂フ可ラス、ウイオレ<sup>イ</sup>氏モ亦是ニ察スル有リ、故ニ其言ニ曰ク、中  
 古ノ時諸邑落爭フテ寺院禮拜堂ヲ起シシハ、獨リ祭日僧徒ノ前ニ出テ  
 、誦經ニ陪席スルカ爲メナラスシテ、亦時々會聚シテ本邑ノ事務ヲ議  
 スルカ爲メナリ、故ニ其祭儀ヲ觀ル時ニ在リテハ眞ニ寺院禮拜堂ノ名  
 ニ適合スト雖モ、其邑務ヲ議スルノ時ニ在リテハ、畢竟議事堂ト異ナル  
 コナシト、

且ツ當時諸侯各々其封疆ニ雄據シ、時々兵ヲ擧ケテ相攻撃シ、動モスレ  
 ハ兵ヲ放テ邑落ヲ剽掠シ、或ハ火ヲ縱テ暴威ヲ示シシヲ以テ、邑民  
 ノ高塔ヲ建立シシハ、獨リ此ニ由リテ敬信ノ意ヲ天上ニ表スルニ非ス  
 シテ、亦時々其絶頂ニ登リ四方ヲ臨望シテ不虞ヲ戒メリ、鐘樓ノ如キモ  
 固ヨリ祭日ノ用ニ供セシト雖モ、亦緩急アルニ際シテ、登リテ其鐘ヲ鳴

ラシ、以テ邑人ヲ會シ、及ヒ兵士ヲ聚ムルヲ以テ常ト爲シリ、  
 人或ハ云フ、中古ノ時オジワール<sup>ル</sup>ノ建築法ノ起リシハ、畢竟ゴール人專  
 ラ木ヲ以テ屋ヲ作りシニ由ルト、即チオーギ<sup>ス</sup>スタン、チエル<sup>リ</sup>ノ如キ  
 モ此說ヲ爲シリ、蓋シオーギ<sup>ス</sup>スタン史ヲ作り、ブリ<sup>コ</sup>チオー<sup>ー</sup>及ヒメロウ<sup>エ</sup>ト  
 ノ二人、シルベリ<sup>ッ</sup>シノ逼迫スルコトヲ恐レ、避ケテルアンニ徙リ、障壁ヲ築  
 テ以テ自ラ固メンコトヲ述ヘ、次テ曰ク、當時ブリ<sup>コ</sup>チオー<sup>ー</sup>ノ建築シシルア  
 ンノ宮殿ハ、其制度大抵ゴールノ諸寺院及ヒ殿屋ト異ナルコト無シ、蓋シ  
 形狀極テ高クシテ挺然トシテ空ニ聳エ、其柱ハ皆方形ニシテ大木ノ幹  
 數本ヲ合シテ成ル所ナリ、又其穹窿ノ形ハ皆尖ニシテ且ツ高シ、思フニ  
 此レハ其用フル所ノ材料ノ然ラシムル所ニシテ、其形ヲシテ圓ナラシ  
 メント欲スルモ得可ラサルヲ以テ、己ムコトヲ得スシテ此ニ出テタリ、此  
 レ乃チ我佛國オジワール<sup>ル</sup>法ノ濫觴ニシテ、其後數百歳ニシテ此法大ニ

行ハレ、且ツ精緻ニ赴キシト雖モ、之ヲ要スルニ其源ハ蓋シゴールノ建築ヨリ出タルニ疑無シト、

オーギニスタンノ此説ハ、事迹ニ於テ別ニ根據有ルニ非スシテ、畢竟臆測タルヲ免レスト雖モ、之ヲ要スルニ其理無キニ非ス、且又ウイオレイ氏ノ所見ト大ニ齟齬スル所有ルヲ見ズ、ウイオレイ氏ノ意蓋シ以爲ラク、後世ニ至リテハ穹窿ノ形低降シテ復タ曩日ノ高キガ如クナラズト雖モ、其是ニ至ル迄ハ、諸建築家猶豫シテ決スルヲ能ハサルヲ久シ、蓋シ圓形ノ穹窿ハ其基址極テ鞏固ナルニ論ナク、形既ニ太ク高カラス、然レモ此ニノ利益ヲ知ルノ前ハ、未ダ別ニ見ル所有ラサルヲ以テ、常ニ前日ノ法ニ據リテ構築セリト、又曰ク、オジワール法ハ畢竟兩木相向フテ成ル所ノ尖角ノ形狀ト、羅馬ノ穹窿ノ半圓ノ形狀トノ間ニ在リテ、正ニ其衷ヲ折ル者ナリト、

凡ソ茲ニ云フ所ノ諸事ハ、予將ニ更ニ之ヲ論スル有ラントス、本章ノ旨趣ハ專ラ建築ノ起原ニ係リテ、玄妙ノ論ヲ爲ス者ノ迷謬ヲ破ルニ在リシカ、議論ノ及フ所偶々「オジワール」法ノ事ニ波及セシヲ以テ、己ムヲ得ス之ヲ論スルコト此ノ如シ、顧フニ建築術ノ起リシコト、其原因頗ル明白ニシテ、之ヲ事實ニ照シテ歴々徴ス可シ、然ルニ彼ノ僻論者動モスレハ理學幽微ノ言ヲ爲シテ、故意ニ其論ヲ玄妙ニシ、遂ニ此原因ヲシテ曖昧ニシテ解シ難カラシム、此レ予ノ口ヲ極テ之ヲ論駁スル所以ナリ、

○第二章 建築ハ當初居宅ノ廣大ニ赴クヨリ起リシヲ論ス○

#### 希臘ノ建築法

人ノ初テ其居宅ヲ構築スルヤ、唯風日ヲ蔽フテ以テ身體ノ便ヲ爲スニ取リテ、他ノ念慮有ルコト無シ、故ニ是時ニ在リテハ、神ノ爲メニ祠廟ヲ建テ、若クハ國王ノ爲メニ宮屋ヲ建ルモ、其制度全ク尋常ノ居宅ト相異ナ

ルヲ無クシテ、唯大小ノ別有ルノミ、若シ之レカ證ヲ得ント欲シハ、オメ  
 ールノオヂセーノ詩ヲ讀ムニ如クハ無シ、其所謂「バシレーズ」ノ宮殿ノ  
 如キハ、一種族ノ長ナリト雖モ、畢竟一草屋タルニ過キス、即チ祠廟ノ如  
 キモ其初ニ在リテハ皆然リ、尋常ノ居宅ニ比スレハ唯稍々高大ナルノ  
 ミ、  
 古昔ニ在リテハ祠廟宮殿皆稍々高大ナルノミニシテ、大ニ尋常ノ盧舍  
 ト異ナルヲ無シト雖モ、唯高大ノ形狀既ニ以テ頗ル人ノ眼ヲ驚カス者  
 有リ、即チオメールモ其詩中ニ於テ大ニ「アルキノース」屋ノ大ナルヲ  
 驚テ、之ヲ摸寫スルニ至レリ、然レ「アルキノース」屋ハ木ヲ以テ之ヲ作  
 シテ、別ニ裝飾有ルニ非ス故ニオメールノ感ハ唯其規模ノ高大ナルニ  
 驚キシニ過キス、然レ「予」ヲ以テ之ヲ察スルニ、建築ノ事タル本ト人生  
 實際ノ便利ヲ圖ルニ始マリテ、其後ニ至リ漸次ニ觀美ヲ事トスルニ馴

處  
 美術  
 以所

致シテ、斯ニ以テ美學上ノ一科ヲ成スニ至リシハ他故無シ、唯夫ノ祠廟  
 宮殿ノ類一タヒ人目ヲ驚セシヨリ以來、漸次ニ人ヲシテ之ヲ裝飾スル  
 ヲチ求メシムルヲ致セリ、何トナレハ夫ノ祠堂ナリ宮殿ナリ、其制誠ニ  
 尋常ノ居宅ト異ナラスト雖モ、其規模更ニ高大ナルヲ以テ、梁楹棟楹ノ  
 類ヨリ一切構築ヲ成ス所以ノ部分、更ニ判然タルヲ致ス、此レ其人心ヲ  
 感スル所以ナリ、一タヒ人心ヲ感スルハ人ノ評稱スル所ト爲ルヲ以  
 テ、漸次ニ觀美ノ途ニ赴クハ是レ自然ノ理ナリ、

然リト雖モ所謂人心ヲ感スルヲモ、最初ニ在リテハ固ヨリ甚ク曖昧ニ  
 シテ、決シテ後世ノ人ノ高臺廣閣ノ屬ヲ觀テ之ヲ感スルカ如キニ非ス、  
 然レ「建築」一タヒ人心ヲ感スルハ、作者モ亦自ラ心ヲ是ニ用フルヲ  
 ハ人情ノ然ラシムル所ナリ、是ノ如クニシテ久キヲ經ルハ、構築ノ法  
 益々精微ニ赴キ、其目的ト手段ト益々相適合スルヲ得テ、自ラ夫ノ觀

美ノ一途ニ達ス可キナリ、  
 建築ノ道一タヒ此ニ至ルキハ、初テ之ヲ美學上諸藝ノ中ニ入ル可クシ  
 テ、復タ之ヲ尋常ノ巧技ト謂フヲ得ス、他無シ、其目的ハ專ラ便利ノ一  
 事ニ在ラスシテ亦賞鑒家ノ評稱ヲ博スルヲ求ムルニ在ルヲ以テナ  
 リ、顧フニ古昔ニ在リテ建築ノ人心ヲ感シシハ、獨リ其規模ノ高大ナル  
 ニ由レリ、後世ニ至ルニ及ヒテハ、規模ノ高大ノ外、又自ラ一意趣ヲ發揮  
 スルヲ求ム、夫レ規模ノ高大ナルコトハ、如何ニ高大ナルモ自ラ限極有  
 リ、若夫レ意趣ニ至リテハ、畢竟無形ノ一理ナルヲ以テ善ク之ヲ發揮ス  
 ルキハ、規模ノ高大ナルニ勝ルコト遠キ甚シ、此レ乃チ後代建築ノ上古ノ  
 建築ニ勝ル所以ナリ、  
 古昔ニ在リテハ建築ノ人心ヲ感シシコト、獨リ其規模ノ高大ナルニ由リ  
 シハ、經典ニ就テ之ヲ考フルモ亦微ス可シ、蓋シ經典ニ據ルニ、上古ノ人

民相與ニシテナルノ野ニ聚リ、因リテ議シテ曰ク、吾儕願ハクハ一都  
 府ヲ建立シ、且ツ一大塔ヲ起シ、其絶頂ヲシテ天ニ達シシメント、顧フニ  
 上古ノ人建築ノ高大ナルヲ愛好スルコト是ノ如クナルキハ、夫ノアシリ  
 王ノ宮殿ヲ創シテ高大ヲ極メシニ當リテ、東方ノ人民ノ之ヲ觀ル者  
 ノ感情湧起シ、心ヲ驚カシ魄ヲ動カセシコト想フ可キナリ、  
 夫レ建築ノ貴フ所ハ獨リ其高大ナル處ニ在ラズ、然レモ上古ノ人民ハ  
 其智識猶ホ微ナルヲ以テ、未ク眼ノ其他ニ着クコトアラズ、且ツ又一タヒ  
 高大ノ建築ヲ創メシ人民ト雖モ、皆盡ク眞ノ建築ノ巧ノ在ル處ヲ發揮  
 スルコトヲ知ルモノニ非ス、蓋シ人民種族各々相異ナルヲ以テ、其制度文  
 物益々進歩スル者アリ、或ハ否ラザル者アリ、其制度文物ノ益々進歩ス  
 ル者ハ、其性情活潑ナル者ナリ、其否ラザル者ハ、其性情ノ活潑ナラザル  
 者ナリ、是ヲ以テ性情ノ活潑ナル者ハ、一タヒ高大ノ建築ヲ創メテ人ノ

感情ヲ起スハ、其建築ノ道漸次ニ進ミ、久テ經テ竟ニ大ニ盛隆ニ赴キ  
シモ、性情ノ活潑ナラザル者ハ、初ヨリ是ニ赴クヲ知ラス、且ツアシリ  
ノ如キハ、國祚甚タ永カラズシテ、他邦ノ滅ス所ト爲リシヲ以テ、夫ノ  
高大ノ宮殿ヲ起シ後、漸次ニ建築ノ法ヲ變革スルニ暇有ラザリキ、又  
エジプト人ノ如キハ、其構築ノ法唯一種ニシテ、嘗テ之ヲ變スルヲ思ハ  
ズ、一意ニ堅固ナルヲ求メテ他念有ルヲ無シ、是ニ於テ凡ソ構築スル  
所有ル毎ニ、必ス石ヲ用ヒ、堆積シテ塔ノ如キ形ヲ爲シ、以テ常ト爲セリ、  
又印度ノ如キハ、其建築法ノ進歩ハ獨リ裝飾ニ在リテ、構架ノ制ニ至リ  
テハ、初年ノ規模ヲ守リテ失ハス、是ヲ以テ大率テ規模宏大ニシテ檢束  
無キ者ノ如シ、此レ正ニ夫ノ天象ノ說ヲ執ル者ノ空虛浮誕ノ論ヲ爲ス  
所以ナリ

近日好古家印度ニ於テ多ク上代ノ建築ノ遺構ヲ發見セリ、皆規模極テ  
宏大ニシテ、高廣並ニ人ノ意表ニ出ツ、但其制度皆相同シ、蓋シ屋蓋ヨリ  
基址ニ至ルマテ、遍ク彫鏤ノ巧ヲ施シ、用意極テ縝密ニシテ、眞ニ人ヲ驚  
カスニ足ル、夫レ其規模ノ高大ナルト裝飾ノ華麗ナルトヲ以テ、遠ニ之  
ヲ觀ルハ、嗟驚スベシト雖モ、仔細ニ之ヲ察スルハ、其中自ラ欠失ノ  
處有リテ、隱然蠻野ノ氣象ノ其上ヲ掩フカ如キヲ見ル、即チアシリー、エ  
ジプトノ諸建築ノ如キ皆然リ、其中幾分ノ智巧ノ觀ル可キ有リト雖モ、之  
ヲ要スルニ風氣未開ノ形象有ルヲ免レズ、希臘ノ建築ニ至リテハ然ラ  
ズ、其構架ノ間自ラ一定ノ法ノ在ル有リ、故ニ古代ノ建築ニ於テ必ス法  
度ノ整齊ナルヲ見ント欲スルハ、希臘ノ遺構ヲ觀テ始テ見ル可キナ  
リ

印度マシリー等ノ上代ノ建築皆宏大ナリト雖モ、今ニ於テ之ヲ考メ  
ルニ、其制度ノ旨趣必スシモカル、プラン氏ノ言ノ如クナラズ、予チ

以テ之ヲ觀ルニ、氏ノ言ノ如ク眞ニ山嶺ノ狀ヲ摸擬セシヲ疑フニ足ル者ハ、獨リカメールノ建築有ルノミ、此レハ誠ニ純石ノ岡巒ヲ摸擬セシニ類ス但、其何ノ爲ニ構架セシコトハ、考證家力ヲ盡シテ搜索スルモ未タ之ヲ得ザルナリ

古昔希臘ノ建築法之ヲ分テテ三大節ト爲ス、曰ク「コロヌ」柱ノナリ、曰ク「プラットバンド」譯者未タ其義ナリ、曰ク「フロントン」同ナリ「コロヌ」ハ夫ノ大木ノ根幹及ヒ蘆葦ヲ束テタル者ニ易フル者ナリ、「プラットバンド」ハ大理石ヲ以テ之ヲ作シテ、夫ノ上古ノ材木ノ製ニ易フル者ナリ、而シテ「フロントン」ハ屋蓋ヲシテ四方ニ傾向セシメ、雨水ヲシテ皆下注シテ少シモ屋上ニ留滯セシメザラント欲スルモ「フロントン」ハ必ス欠ク可ラサル者ナリ、

此ニ由リテ之ヲ考フレハ、希臘建築法ノ三大節ハ、皆事物自然ノ理ニ適

合スル者ニシテ、少シモ疑ヲ容ル、所ナシ、今此明瞭ノ道理ヲ闡キテ問ハス、必ス天道幽晦ノ說ヲ爲シテ之レカ旨趣ヲ傳會セント欲スルハ、殆ント其何ノ故タルヲ解セサルナリ、

古昔希臘ノ建築法ハ、其長短大小ノ制極テ嚴密ニシテ、皆幾何學ノ道理ニ本ヅカサルハ莫シ、抑希臘人ノ人ト爲リ大率嚴毅縝密ニシテ以テ俗ト爲ス、故チ以テ其諸藝術皆整齊莊嚴ニシテ、絶エテ放蕩ノ迹無シ、然レハ則チ其建築ノ是ノ如クナルコトハ初ヨリ怪ムニ足ラザルナリ、希臘ノ建築法ハ洵ニ整齊ナリ、然レモ其中自ラ雅致ノ人ヲ感スル有リ、且ツ其手法各々一ナラスシテ皆觀ル可キナリ、今之ヲ大別スルモ、三ノ流派有リ、曰ク「ドリック」ノ流派ナリ、曰ク「イヨニック」ノ流派ナリ、曰ク「コラント」ノ流派ナリ、其法數種有リト雖モ、之ヲ要スルニ此三流派ノ外ニ出デス、



此三流派ハ其原因ヲ尋究スルニ、蓋シ柱ヲ用フルノ大小長短ノ差ニ由リテ發起スル者ナリ、「ドリック」法ハ柱ノ高サ其直徑ヲ六倍スルノ長サニ至レリ、是ヲ以テ其形狀自ラ鞏固嚴厲強毅ノ態有リ、「イヨニック」法ハ柱ノ高サ其直徑ヲ八倍或ハ九倍スルノ長サニ至ルヲ以テ、「ドリック」法ニ比スルキハ、稍輕爽ニシテ且ツ流麗ナルノ態有リ、若夫レ「コラント」法ニ至リテハ、其柱「ドリック」法ヨリモ更ニ細長ナルヲ以テ、狀貌益々爽麗ニシテ喜フ可シ、此レ其梗概ナリ、

今此三法ニ就キテ考フルニ、其柱ノ長短大小是ノ如ク相異ナル所以ノ者、決シテ一時偶然ノ故ニ發スルニ非スシテ、皆其全體ノ構架ヨリ源起スル者ナリ、蓋シ「ドリック」法ノ柱ハ樹木ノ地ヲ抜テ出ルカ如クニシテ別ニ基址有ルヲ無シ、是ヲ以テ柱ノ徑大ナラサルキハ、以テ梁棟ノ重キニ任スルニ足ラス、「イヨニック」法ノ柱ハ基址有リテ其上ニ安ンシ、又其梁棟

ヲ承クル處、螺旋狀ヲ爲ス、此レ其「ドリック」法ニ比シテ、稍輕爽ニシテ雅麗ナル所以ナリ、然レ此レ之ヲ「コラント」法ニ比スルキハ、其華瞻富麗ナルヲ遠ク相及ハス、凡ソ此レ皆其全體ノ結構ヨリシテ發起スル所ノ差異ナリ、「此三法ノ差異ハ獨リ此レノミニ非ス、蓋シ其柱ノ製各々相異ナルヨリ其他各部ノ制度自ラ其數ヲ異ニセサルヲ得ス、是ニ於テ全體ノ狀貌全ク相異ナルヲ致ス、蓋シ「ドリック」法ニ在リテ強毅ノ態最モ多キニ居リ、他ノ二法ニ在リテハ遞次ニ減殺シテ流麗華美ノ地ヲ爲ス者ハ、是レ自然ノ勢ナリ、其結構既ニ然リ、是ヲ以テ裝飾ノ法モ亦各々結構ト相副ハサル可ラス、即チ「ドリック」法ニ在リテハ裝飾極テ朴實、「イヨニック」法ニ在リテハ稍艷麗ナリ、獨リ「コラント」法ニ至ルニ及ヒテハ、采飾或ハ太過ナルニ至ル有リ、凡ソ此レ皆數理ニ本ツキ來ル者ト謂フモ不可ナル無キナリ、「三法ノ柱ノ差異ニ由リテ各部ノ制度ノ數ヲ異ニスルヲハ、之ヲ其階ノ

級ニ著ハスニ至ル、其柱ノ徑最モ大ナル者、即チ「ドリック」法ノ建築ニ在リ  
 テハ其升降階ノ級相距ルヲ極テ遠クシテ、巨人ト雖モ由リテ升降スル  
 一能ハサルニ至ル、是ヲ以テ級ト級トノ間ニ於テ、更ニ小級ヲ施シテ以  
 テ躋登ニ便セサルヲ得ス、顧フニ夫ノ階ハ唯升降ノ爲メニ設クル者ナ  
 リ、今其級ヲシテ相距ルヲ是ノ如キニ至ラシムル者ハ、算數ノ理ニ拘泥  
 スルノ太甚シキモノト謂フ可シ、アテーンズ人ノ事功尙チヒテ空理ヲ  
 斥クルノ性ヲ以テ、其建築ノ制ニ是ノ如キ弊有ルハ抑、何ノ故ソヤ、  
 アテーンズノ建築家ノ算數ノ理ニ拘泥スルノ弊ハ、獨升階ノ爲メニ之  
 ヲ見ル可キニ非スシテ、其全體ノ形貌モ亦之カ爲メニ大ニ瑕玷ヲ生ス  
 ルニ至レリ、我カ近世ノ建築家ハ是ニ慮ル有リ、是ヲ以テ其階級ハ皆相  
 距ルヲ更ニ近クシテ、以テ升降ニ便ナラシメテ、別ニ小級ヲ施スヲ無シ、  
 顧フニ此ノ如キ者ハ、獨實地ニ便ナルノミナラス、形貌ノ觀モ亦大ニ益

ヲ得ル者有リ、何トナレバ全體ノ構築極テ高大ニシテ、其升降ノ階級相  
 接シテ櫛比スルヲ以テ、之ヲ一望スルキハ偉大ノ容ト細緻ノ觀ト相反  
 シテ、大ナル者ハ愈々大ニ、細ナル者ハ愈々細ニシテ、其形容最モ人目ヲ怡  
 ハシムルニ足ル、若夫レ「ドリック」法ノ階ハ其級中別ニ細級ヲ施スト雖モ、  
 固ヨリ之ヲ一望ニ見ル可ラサルヲ以テ、全體ノ偉大ト階級ノ疎濶ト相  
 比シ、自然ニ相傾奪スルノ狀有ルヲ免レス、是ヲ以テ其全體ノ制度極テ  
 高、大ナルモ、人或ハ其高大ヲ覺エサル有リ、  
 然リト雖モ、此事ニ係リテハ獨希臘ノ作者ト我近代ノ作者トノ、意匠ノ  
 優劣ヲ別ツ可ラスシテ、亦其寺院ノ目的トスル所ノ差異ニ由リテ、之レ  
 カ評判ヲ爲サ、ル可ラス、蓋シ我カ近代ノ寺院ハ、本ト天主ヲ祭ルカ爲  
 メニ設クト雖モ、并セテ亦夫ノ衆多ノ善男女ヲ延テ之ヲ容ル、ヲ以テ、  
 若シ升降ノ階竦大ナルヲ希臘ノ寺院ノ如クナルキハ、建築ノ旨趣ニ於

テ背戻スル所有ルヲ致サン、若夫レ希臘ノ寺院ノ如キハ、本ト專ラ神像ヲ安置スルカ爲メニ設クル所ニシテ、其規模ノ是ノ如ク高大ナルハ、初ヨリ信者ヲ延入スルカ爲ナラスシテ、其神像ノ大ナルカ爲メナリ、若シ之レカ證ヲ得ント欲セハ、其神像ヲ觀ルニ若クハ莫シ、蓋シ其最大ナル者ハ頭冠直チニ承塵ニ接シテ少シモ齟齬ヲ見ザルニ至ル、是ニ於テ祭日ニ男女ノ來リ賽スル者ハ、皆堂外ニ立チテ拜ヲ爲シ、或ハ列チ成シテ祠堂ヲ匝ルノミ、故ニ其階級ノ疎大ナルハ、本ト尋常ノ人チシテ躋登セシムルコト無キニ由リテ然リ、此ニ由リテ之ヲ言ヘハ、希臘寺院ノ升降階ハ獨リ神ノ爲メニ設クト謂フモ可ナリ、夫レ神ハ廣大ニシテ測ル可ラサル者ナリ、其階ノ偉大ナルコト亦宜ナラス乎、

是ノ如ク論シ來ルキハ、予ノ論殆ント自ラ矛盾スルニ似タリ、然レモ實ハ決シテ然ラス、何トナレハ夫ノ神ハ本ト無形ニシテ、特ニ像ヲ作りテ

之レカ形ヲ擬スルニ過キズシテ、初ヨリ升降スルノ理無シ、故ニ苟モ階ヲ設クルキハ、必人チシテ登降スルヲ得可ラシムルハ、是レ天下普通ノ理ナリ、且ツ階ノ太タ疎大ナルカ爲メニ、全堂ノ偉觀ヲ傾奪スルニ至ルキハ觀美ニ於テ竟ニ瑣類ト爲スチ免レス、故ニ希臘祠堂ノ階級ノ過大ナルハ、畢竟之ヲ疵病ト謂ハサルヲ得スシテ、予ノ論初ヨリ矛盾スル所有ルニ非ス、

此ニ由リテ之ヲ觀レハ、希臘ノ建築法ハ其「ドリツク」法タリ、「イヨニツク」法タリ、「コラン」法タルヲ論セス、且ツ又其間少ク疵病有ルニ關セス、全體ノ結構自ラ一定ノ様式有リテ、其各部皆全體ト相副フテ、絶エテ不整齊ノ處無キコト知ル可シ、此レ他無シ、作者ノ胸中本ト定算有リテ一モ偶然ニ出テザルヲ以テナリ、然レハ則チ希臘ノ建築家タル者ハ、構築スル所有ル毎ニ必ス一定ノ紀律ノ束縛スル所ト爲リテ、略ホ自家ノ意匠ヲ運スルコト

得サル乎、曰ク然ルニ非サルナリ、蓋シ其紀律ハ誠ニ嚴整ナリト雖モ  
 然レモ未タ盡ク作者ノ意思ヲ束縛スルニ至ラス、且予カ論セシ所ノ三  
 法ノ柱ノ大小ノ如キモ、畢竟其梗概ヲ示スニ過キスシテ、其間ニ少出入  
 無カラス、是ヲ以テ作者皆紀律ノ大體ヲ守ルト雖モ、小節目ニ至リテハ  
 各々自ラ其見識ヲ發揮シテ之ヲ出スヲ得、此レ其意匠ヲ運スルニ於テ  
 稍、其餘裕有ル所以ナリ、且希臘人ハ天性嚴整ニシテ法度ノ外ニ騁スル  
 ヲ喜ハスト雖モ、自由ノ精神ニ至リテハ之ヲ重ンスルヲ極テ至レリ、  
 夫レ作者作ル所有ルニ臨ミ、自家ノ意匠ヲ運シテ之ヲ發揚シテ、紀律ノ  
 約束スル所ト爲ラサルハ、亦自由ノ精神ヲ奮發スルノ類ニ非ス乎、  
 嘗ニ此レノミナラス、希臘人ハ天分高絶ニシテ美學ノ道理ニ於テハ自  
 然ニ其心ニ獲ル者有ルヲ以テ、動モスレハ其性情ヲ發揮シテ以テ紀律  
 ノ短處ヲ補フヲ有リ、以下請フ之ヲ論セン、

蓋シ希臘寺塔ノ制ハ專ラ直線ニ據リテ構築スル者ニシテ、其弊ヤ形貌  
 太ク嚴整ニシテ絶エテ變化ノ能無ク、觀ル者ヲシテ厭倦セシムルヲ免  
 レス、就中「ドリック」法ハ最モ其最ナル者ナリ、人或ハ云ハン、希臘寺院ノ今  
 ニ存スル者、其構築彼ノ如ク巧妙ニシテ、人ヲシテ倦怠セシムル者有ル  
 ヲ無シト、此レ大ニ然ラス、何トナレハ希臘建構ノ今ニ存スル者ハ、多ク  
 ハ完全ナラスシテ其幾分ノ殘壞セル處有ルヲ以テ、觀ル者其全體ヲ見  
 ルヲ得サレハナリ、且其梁棟楹椽ノ記號傾仄セル處有ルニ因リテ、反  
 リテ幾分變化ノ態ヲ添補シシカ若キ者或ハ之有リ、設令ヒ其建築ヲシ  
 テ少シモ傾壞セル處無カラシメハ、觀ル者其全體ヲ通覽シテ遺漏無キ  
 ヲ得ルヲ以テ、其形貌中必ス往々過整ノ病有ルヲ覺ラシ、更ニ一層  
 ヲ進メテ之ヲ論シニハ、必スシモ親ク其建築ノ全貌ヲ觀サルモ、姑ク  
 其制度ニ就テ想像ヲ加フルキハ、明ニ其人ヲシテ厭倦セシムル所有ル

ヲ知ラシ、何ソヤ夫レ巨大ノ圓柱並立シテ以テ屋蓋ヲ承ケ又其屋蓋  
 全ク扁平ニシテ絶エテ高下凸凹ノ處無キヲ、譬ヘハ風波靜恬ナル日ニ  
 海面ヲ望ムカ如ク、而シテ其フロントンモ亦唯二直線ヲ以テ成リテ、絶  
 エテ屈折スル處無ク、其他瑣細ノ諸部モ亦皆直線ニ據リテ構架シ、且ツ  
 其大小長短廣狹一々相副フテ毫釐ヲ爽ヘス、一モ幾何學ノ道理ニ基カ  
 サルヲ莫シ、希臘ノ建築ノ法度蓋シ是ノ如シ、若シ人此法度ニ據リテ一  
 建築ヲ想像シ、從フテ考察ヲ加フルハ、其形貌果シテ能ク人ヲシテ倦  
 怠セシムルヲ無キヤ否ヤ、凡ソ物ノ狀太ク嚴整ナルハ、必ス人ヲシテ  
 厭ハシムル者有ルヲ免レス、而シテ希臘ノ建築法ハ天下之ヨリ嚴整ナ  
 ルハ莫シ、

希臘建築ノ法度蓋シ此ノ如シ、然ルニ茲ニ人ヲシテ驚嘆セシムルニ足  
 ル者有リ、何ソヤ、曰ク希臘建築家ノ中往々自ラ其法度ニ於テ疵病ノ在  
 ル所ヲ發見シ、方チ極テ之ヲ醫スルヲ求メシ者之レ有リ、此レ正ニ予  
 ノ希臘人ヲ謂テ天分高絶ニシテ美學ニ於テ自然ニ心ニ獲ル者極テ深  
 シト爲ス所以ナリ、請フ其證ヲ舉ケン、

今人希臘寺院ノ遺構ニ就テ仔細ニ點檢スルニ、其圓柱ノ上下大小相同  
 シカラスシテ、往々圓錐狀ヲ爲シ、若クハ中間稍々大ナルヲ猶ホ卷絲ノ  
 如ク、上ニ到リ漸次ニ削小シテ梁棟ヲ承クル處ニ至リ、始テ錐尖ヲ爲ス  
 有リ、又其圓柱並ニ墻垣ノ屬皆直立セシテ往々内ニ嚮フテ微ク傾仄  
 セリ、獨此レノミナラス、其ベストームノ諸寺ノ中、特ニ「バルテノン」寺ノ如  
 キハ、屋蓋純平ナラスシテ中ニ當ル處微ク凸形ヲ爲スヲ、全ク前ニ云フ  
 所ノ柱形ニ同シ、又其アルシトラトゾ未「フ」リトズ上同等モ亦復タ然リ、若  
 夫レ屋蓋ノ柱ニ接スル處ニ至リテハ、正ニ此レト相反シテ、乃チ中ニ當  
 ル處ニ於テ微ク凹形ヲ爲セリ、此レ皆英國建築家「パントリー」氏ノ發見

スル所ナリ、氏嘗テ「パルテノン」寺ノ遺構ニ就テ仔細ニ檢察ヲ加ヘ、大ニ見ル所有リ、因リテ一書ヲ著ハシ、號シテ「アテーンヌ」建築ノ發微ト曰ヒ、一千八百五十一年ヲ以テ印行シリ、其言ニ據ルニ「パルテノン」寺ハ其構築ノ各部大小長短廣狹並ニ盡ク相比準シサル處有リ、蓋シ「イクチニユー」希臘建築自ラ意匠ヲ運シテ、以爲ラク少ク法度ノ外ニ出テ、變化ヲ求ムル所ハ、必ス以テ人目ヲ怡ハシムルヲ有ルヲ得ント、此レ正ニイクチニユースノ美學ノ道理ニ於テ自ラ其心ニ獲ル所有ルノ證ニ非ス乎、若シ然ラスシテ、イクチニユースヲシテ、一々紀律ニ依準シテ少モ自ラ肆ニスルヲ無カラシメハ、夫ノ「パルテノン」ノ遺構ノ如キモ、必ス人ヲシテ厭倦シシムル者有リテ、今ノ人目ヲ怡ハシムルカ如クナルヲ得サル可シ、予故ニ曰ク希臘人天性嚴整ナリト雖モ、自由ノ精神ヲ發揚シテ自ラ其意匠ヲ運スルニ於テハ、綽然トシテ餘裕有リト、

抑、建築ナル者ハ材料各々相異ニシテ、其風土ニ因リ或ハ多ク石ヲ用フルアリ、或ハ多ク木ヲ用フルアリ、又其法度紀律ノ如キハ族類中自ラ一定ノ準則有ルヲ以テ、作者少シモ之ニ循ハスシテ、盡ク自ラ其意思ヲ發セント欲スルモ固ヨリ得可ラス、然レモ茲ニ論スル所ニ由リテ之ヲ考フレハ、作者苟モ巧思有ル所ハ、小節目ノ處ニ於テ頗ル自家ノ胸臆ヲ發揮シテ、大ニ全體ニ補益スルヲ得ルヲ知ル可キノミ、此レ獨希臘ノ建築ノミ然リト爲スニ非サルナリ、

夫レ建築ノ一術ハ他ノ藝術ニ比スレハ、作者ノ其胸臆ヲ發揮スルニ於テ、其區域最モ狭小ナルヲハ、予既ニ前ニ之ヲ論セリ、是故ニ構築ノ全體ニ論勿ク、各部ノ大小廣狹ニ至リテモ、亦其紀律大體ハ作者得テ之ヲ左右セス、但其細微ノ處ト及ヒ一切裝飾ノ觀ノ如キハ、作者苟モ自ラ見ル所有ル所ハ、皆以テ之ヲ發揮スルコトヲ得、凡ソ此レ皆所謂作者ノ感情

ノ見ル可キ者ニシテ、乃チ此建築ノ彼建築ヨリ巧ニシテ、此作者ノ彼作者ヨリ妙ナルハ、正ニ此ニ在リ、即チ「バルテノン」寺ノ如キモ本ト神像ヲ安置スルカ爲ニ設ケシヲ以テ、希臘人ノ意ニ於テ其法度必ス嚴毅峻整ノ狀有ル可クシテ、獨「ドリク」法ヲ用フ可クシテ、「イヨニク」ト「コラント」トノ二法ハ初ヨリ之ヲ用フルヲ得ス、是ノ如キ者ハ作者ノ得テ左右セサル所ナリ、又夫ノ「フリーズ」未詳「メトツプ」及ヒ「フロントン」等ニ施ス彫飾ノ如キハ、本ト一定ノ紀律無キヲ以テ、フ「チャース」ハ意ヲ肆ニシテ盡ク之ヲ胸臆ヨリ取ルヲ得タリ、此レ正ニ建築ト彫刻トノ相異ナル處ナリ、然リト雖モ「バルテノン」寺ノ遺構ノ人目ヲ怡ハシムルヲ、彼ノ如キ所以ノ者ハ畢竟安クニ在ル乎、美學上ノ論ハ全ク此一點ニ在リ、請フ之ヲ辨セン、曰ク此寺ヤ本ト神像ヲ安置スルニ在ルヲ以テ全體ノ中自ラ廣大ニシテ景仰敬畏ス可キノ狀有リ、第二ニ其各部細微ノ處自ラ作者ノ用

意縝密ナル歷々見ル可シ、此二ノ者相得テ悖ラズ、此レ即チ此寺ノ構築ノ美ヲ爲ス所以ナリ、

大凡ソ建築ノ尙フ可キ所以ノ者ハ、他ニ非ス、其構築ノ齊莊宜キヲ得テ、絶エテ過不及無キニ在リ、而シテ是レ他ニ非ス、各部ノ少變化有ル者、相聚リテ自ラ一種ノ風趣ヲ生スル有ルヲ以テナリ、故ニ曰ク、整齊中變化ノ處有リト、而シテ希臘人天分高絶ニシテ此二ノ者ヲ發見スルニ於テ希有ノ眼力ヲ有セリ、是ヲ以テ其紀律極テ嚴整ニシテ、或ハ狹隘ノ處有リト雖モ、其制度極テ單純ニシテ、或ハ疎策ノ處有リト雖モ苟モ自家ノ意匠ノ及フ所ハ、作者皆力ヲ竭シテ之ヲ發揮シ、以テ此病ヲ醫スル有ルヲ務メリ、

○第三章 羅馬ノ建築 ○ピザンテンヌノ建築 ○亞刺比ノ建築

○佛蘭西初年建築

宗旨ニ係ル諸建築ヲ以テ言フキハ、羅馬人ハ遠ク希臘人ノ下ニ在リ、何  
 ナ以テ之ヲ言フ、羅馬ノ諸寺院ノ制度ハ大抵皆希臘ノ寺院ニ模仿シテ  
 成ル所ニシテ、其巧妙遠ク相及バズ、若夫レ羅馬人ノ自ラ法度ヲ創メシ  
 者ハ一有ルヲ無シ、但羅馬人ノ功ト爲ス可キ者モ亦之レ有リ、何ソヤク  
ラウァー四方ノ角ヲ切リヲ以テ承塵ヲ作ルト是ナリ、相傳フ、東方ノ邦之ヲ  
 用フル者有リテ、其習風ニエトリニスクニ入り、遂ニ遍ク羅馬ニ行ハル、  
 ニ至リシト、

柱上ニ於テ、直チニ「プラットバンド」ヲ施スキハ、必ス石ヲ以テ柱ヲ作ラザ  
 ル可カラズ、石ノ極テ長ク且ツ堅硬ナル者ヲ得テ、方ニ始メテ用ニ中ツ  
 ベシ、是甚タ難事ナリ、今「クラウァー」ヲ以テ承塵ト爲スキハ、此患ヲ免ル、  
 一ヲ得、此レ其便利タル處ニ量ル可ラサル者有リ、羅馬人ノ性タル極メ  
 テ著實ニシテ、万事ニ就テ實益ヲ尙ヒテ浮飾ヲ斥ク、是ヲ以テ「クラウァー」

ノ用ヲ發見セシハ、羅馬人ニ於テ關係極テ大ナリトス、即チ其建築ニ於  
 テ往々夫ノ穹窿ヲ施ス者ハ、唯「クラウァー」ノ用ノ便ナルヲ以テナリ、  
 羅馬人一タビ（クラウァー）ノ用ヲ發見セシヨリ、凡ソ建築ノ類ハ其制度希  
 臘ニ模仿セル者ト雖モ、亦皆穹窿ヲ施シテ之ヲ爲セリ、其遺構ニ就テ之  
 ナ徴ス可シ、但寺院ニ至リテハ、絶エテ此法ヲ施セル者有ルヲ無シ、此ニ  
 由リテ之ヲ考フルニ、寺院ニ係リテハ、專ラ希臘人ニ模擬シテ必ス之ニ  
 肖似スルヲ求テ、少シモ自己ノ意思ヲ添補スルヲ思ハザリシト知  
 ル可シ、

希臘ノ制度ハ、專ラ直線ニ依リテ構架セシヲ以テ、其形狀動モスレハ過  
 嚴ナル處有ルヲ免レズ、羅馬人ハ否ラズ、多ク穹窿ヲ用ヒテ、直線圓線相  
 錯ハリテ大ニ人目ヲ怡ハシムル者有リ、此レ其長處ナリ、然レモ亦疵病  
 ノ指ス可キ有リ、何ソヤ、夫レ其穹窿ト「プラットバンド」ト並ニ「ヒエードロ



アト石柱トハ、本ト同一ノ用有ルヲ以テ其一ヲ廢ス可シ、然ルニ羅馬人ハ然ラズシテ常ニ此二ノ者ヲ併用ス、此レ其人目ヲ怡ハシムルニ於テハ或ハ取ル可キ所有リト雖モ、制度ノ道理ヨリ言フハ、全ク無用ニ屬ス、故ニ此一方ヨリ論ズルハ、亦之ヲ其短處ト謂ハザルヲ得ズ、蓋シ嘗テ之ヲ論ズ、羅馬人ノ斯ク重複ノ病ニ陷キリシ所以ノ者ハ他ニ非ス、其希臘人ノ巧ヲ感ズルコト極メテ至レルヲ以テ、苟モ之ヲ摸擬スルコトヲ得ルハ、必ズ之ヲ摸擬シテ以テ自ラ喜ベリ、是ヲ以テ全體ノ結架一モ希臘ノ法ニ據ラズシテ全ク自ラ其種族ノ風格ヲ發揮シシ時ト雖モ、其間ノ瑣細部ハ往々希臘ノ制度ヲ用ヒテ以テ裝飾ト爲セリ、而シテ其最モ謂ハレ無キ者ハ夫ノ希臘ノ三法ヲ雜用シテ、自ラ以爲ラク美學ノ道ニ於テ遺漏スル所無シト、此レ甚ク笑フ可キナリ、願フニ羅馬人ノ喜ビテ希臘人ニ摸仿シシコトハ、獨リ建築ノミナラズ、詩學ニ於テモ亦然

リ、即チ、ウイ、ル、シル、オ、ラ、ース、ノ、俊、才、ト、雖、モ、作、ル、所、有、ル、每、ニ、往、々、オ、メ、ー、ル、ハ、ン、ダ、ー、ル、ニ、摸、擬、セ、リ、其、意、蓋、シ、以、爲、ラ、ク、此、ヲ、以、テ、大、ニ、彩、色、ヲ、増、セ、リ、ト、殊、ニ、知、ラ、ズ、凡、ソ、彩、色、ノ、摸、擬、ニ、成、ル、者、ハ、嘗、ニ、美、麗、ナ、ラ、ザ、ル、ノ、ミ、ナ、ラ、ズ、反、リ、テ、瑕、類、ヲ、生、ズ、ル、ヲ、免、レ、ザ、ル、コ、ト、且、ツ、既、ニ、自、家、ノ、意、思、ヲ、以、テ、之、ヲ、作、リ、又、雜、フ、ル、ニ、他、人、ノ、字、句、ヲ、以、テ、ス、ル、ハ、其、間、必、ス、扞、格、シ、テ、乖、忤、無、キ、コ、ト、能、ハ、ズ、此、ノ、如、キ、者、ハ、美、學、ノ、道、理、ニ、於、テ、最、モ、當、ニ、忌、避、ス、可、キ、所、ナ、リ、羅、馬、ノ、作、者、曾、テ、此、ニ、慮、ラ、ザ、リ、シ、ハ、甚、ク、惜、ム、可、ラ、ス、乎、

羅馬ノ建築ノ少シモ希臘ニ摸擬シシ所無キ者、即チ劇場及ビ水ヲ引ク甬道等ノ如キニ至リテハ、其紀律ノ整齊ヲ求ムルトキハ、遠ク希臘ノ諸建築ノ下ニ在リ、若シ其細微ノ部分ノ巧緻ヲ以テ言フハ、亦希臘人ノ能ク及ブ所ニ非ズ、且ツ凡ソ建築ノ爲メニ設クル所ノ旨趣ニ適中シテ少シモ過不及ナキコトハ、希臘人ノ自ラ夸リテ長處ト爲シシ所ニシテ、其

制度ノ偉大ナルヲハ其短處ナリ、羅馬ノ建築ニ至リテハ、其旨趣ニ適中  
 スルヲ略ホ希臘ニ下ラズシテ、且ツ偉大ノ觀ニ富メリ、此レハ則チ希臘  
 ノ建築ニ勝ルト謂フ可シ、且ツ羅馬ノ建築ハ善ク夫ノ穹窿ノ制ヲ用ヒ  
 テ、其堅固ナルヲエジ、ツト人ノ能ク及ブ所ニ非ズ、他無シ、エジト人ハ唯  
 巨巖ヲ用ヒテ構築スルノミナルヲ以テ、遮ニ之ヲ望ムルハ、隕然トシテ  
 一大石ノ地上ニ横ハルカ如クニシテ、絶テ美觀ノ觀有ルヲナシ、  
 以上論ズル所ニ由レハ、羅馬ノ建築法ノ大略知ル可キナリ、以下請フビ  
 ザンチンヌノ建築法ヲ論ゼン、

ビザンチンヌノ建築ハ、專ラ輕爽ヲ以テ勝チ、且ツ其構架極メテ迅快ナ  
 リ、此レ又他邦ノ及バザル所ナリ、然レモ亦師承スル所有リ、蓋シ其穹窿  
 ヲ用フルヲハ、之ヲ羅馬ニ取り、其細長ノ柱ヲ用フルヲハ之レヲ希臘コ  
 ラント法ニ取レリ、然レバ則チビザンチンヌノ建築ハ絶ニテ自ラ機軸

ヲ出シシ所無キ乎、曰ク然ラス、其屋蓋ノ穹窿ノ上ニ施セル處即チ是ナ  
 リ、蓋シ其最モ迅快ナル者ニ至リテハ、幅員極テ廣クシテ始ント大空ヲ  
 掩蔽スルニ至ル、然リ而シテ一柱ノ之ヲ支撐スル無キナリ、

ビザンチンヌノ屋蓋ノ此ノ如ク廣大ナル者ハ、獨リ建築上ノ奇ヲ求ム  
 ルガ爲メナラズシテ、亦其耶穌宗ノ說ニ於テ基ク所有リ、蓋シ此方ノ僧  
 徒ハ屋蓋ヲ以テ天ノ形ニ擬ヒリ、是ヲ以テ力ヲ極メテ其レヲシテ廣大  
 ナラシム、獨此レノミナラズ、其寺院ヲ築クヤ、希臘一種ノ様式ト稱スル  
 所ノ十字架ノ形ニ依リテ以テ法ト爲シテ、而シテ所謂希臘ノ十字架ハ  
 四枝ノ長サ必ス相等シ、是ニ於テ此邦ニ在リテ寺院ヲ建築スル者ハ、必  
 ス僧徒ノ示教ニ順フテ一大十字架ヲ以テ承塵ト爲シ、其上ヲ蔽フニ圓  
 蓋ヲ以テシテ之レト相當ラシム、而シテ其最モ難シト爲ス所以ハ、多ク  
 柱ヲ用ヒテ十字架ノ形ヲ擾ルヲ得ザルニ在リ、夫レ是ノ如クニシテ、

大十字架ヲ以テ承座ト爲シ、圓蓋ヲ以テ遍シ之ヲ蔽ヒ、柱ヲ以テ之ヲ支撐スルヲ得ズ、此レ其建築家タル者將ニ何如ニ手ヲ下クサントスル乎、是ニ於テ建築家ハ胃腎ヲ搯擢シ心思ヲ焦耗シテ、方ニ始テ穹窿ヲ以テ之ヲ支撐スルヲ創思セリ、此レ其才思ニ富メルヲ、豈ニ深ク感服セザル可ケン哉、

此様ノ寺ノ尤モ著名ナル者ハ、コンスタンチノールノ「サーントソフィ」寺ヲ以テ最ト爲ス、予其構架ノ詳ヲ論ズルヲ求メズ、他然シ、其事專ラ幾何學ノ道理ニ係リテ、藝術ノ上ニ至リテハ必ズシモ益スル無キヲ以テナリ、但其圓蓋ノ極メテ大ニシテ遠ニ之ヲ望ム所ハ、絶エテ支撐スル所無クシテ、翻然トシテ空ニ懸ルカ如シ、觀ル者皆驚怪セザル莫シ、且ツ又其建築家ノ巧妙ニ最モ感ズ可キ所以ハ、其基址ノ處ニ於テ小孔ヲ穿テテ累々相連ラシメ、以テ日光ヲ延キ入ル、ニ便ス、此レ其奇想タル

何如ソヤ、

此ノ大圓蓋ノ周傍又四箇ノ半圓蓋有リテ以テ十字架ノ四枝ヲ掩蔽セリ、又其廳ノ形タルヤ皆穹窿狀ヲ爲シ、或ハ兩箇相並フ處有リ、或ハ三箇相並フ處有リ、夫レビザンチンヌハ古昔希臘ノ遠裔ナリ、希臘ノ建築法ハ整齊ニシテ變化ナキヲ前ニ論スル所ノ如シ、今ビザンチンヌハ其裔ヲ以テシテ其建築ノ銳果奇傑ナルヲ此ノ如シ、豈ニ相反スルノ甚キニ非ス乎、

此ニ由リテ之レヲ考フレハ、ビザンチンヌノ建築ハ獨リ其柱ノ形ヲ古昔希臘ニ取リタルノミニシテ、其他穹窿等ニ至リテハ皆之ヲ羅馬ニ取レリ、而シテ其後ニ發起シル諸建築法即亞刺比及ヒ佛蘭西初年ノ建築法ノ如キ、皆遞次ニ承受スル所有リ、請フ次ニ亞刺比ノ建築法ヲ論セン、亞刺比ノ建築ハ頗ルビザンチンヌノ建築ニ類スル所有リ、何ヲ以テ之

チ言フ、蓋シ其柱上ニ穹窿ヲ施シ、四角ノ様式ニ依リテ穹窿上ニ於テ圓蓋ヲ用フルカ如キハ、皆ビザンチンヌノ法ニ模仿シシニ過キス、然レモ亦大ニ相異ナル所有リ、即チ其喜ビテ「オシワール」法ヲ用ヒ、又其穹窿ヲ置クヤ、一箇ハ一箇ヨリモ峻ニシテ、其形狀ノ俊爽ニシテ且ツ果毅ノ態有ルヲ、大ニ羅馬ノ尋常穹窿ノ比ニ非ス、獨リ此レノミナラス、其大圓蓋ヲ支撐スル穹窿ノ制極テ新奇ニシテ、實ニ人ヲシテ驚心動魄セシム、蓋シ其穹窿挺然トシテ高ク聳ユル者、相擡マリテ上ニ森然タルヲ以テ、世人之レヲ號シテ「スタラクナット」ノ穹窿ト謂フ、「スタラクナット」トハ食鹽若クハ水晶ノ自然ニ溪谷ノ間ニ矗立スルヲ謂フ、

又其外面ニ就テ觀ルモハ、巨壙ヲ圍繞シテ略ホ孔穴ヲ施スヲ無シ、此レ蓋シ日光ノ内ヲ射ル者過多ナルヲ防シカ爲メニシテ、己ムヲ得サルナリ、若夫レ裡面ハ裝飾極テ綺麗ニシテ、青黃金碧ノ色人ヲシテ目眩セ

シム、但其彫刻ノ禽獸ノ狀ヲナセル者有ルヲ無ク、專ラ材料ノ富贍ナルト光彩ノ變トヲ以テ雄ナル者ナリ、

亞刺比寺院ノ建築ハ蓋シ此ノ如シ、此レ建築ノ最モ事ヲ好メル者ニシテ、其主トスル所ハ美麗ノ觀ニアリ、但其中或ハ美麗ニ過キテ漸ク淫靡ノ態有ルヲ致ス者往々之レ有リ、他無シ、偉大ノ觀ニ乏シテ富贍ノ狀ニ專ナラサルヲ以テナリ、且ツ其構架法ノ種々ノ線畫ヲ用ヒテ直線圓線螺旋線ノ三ノ者相錯ハリテ姿致ヲ取り又其外面ノ日光ヲ延クヲ或ハ多ク或ハ寡クシテ、室内極メテ明ナル處有リ、又稍々暗キ處有ル等、以テ變化ノ巧ヲ示ス可キ者一モ遺ス所有ルヲ無シ、之ヲ要スルニ亞刺比ノ構築法ハ巧ハ則チ巧ナリト雖モ、旨趣ニ至リテハ錯雜紛紜トシテ捉搦ス可キヲ難シ、此レ其長處ニシテ亦其短處ナリ、

佛蘭西初年ノ建築法ハ亞刺比ノ法ト少シモ類スル所無シ、蓋シ耶蘇教

ノ初テ行ハル、ヤ、寺院ノ制ハ一ニ羅馬ニ依準シテ以テ足レリト爲シ  
 シカ、其後ニ及ヒ漸ク之ニ加フルニ「チツフ」ヲ以テスルニ至レリ、「チツフ」ト  
 ハ正門ト堂皇トノ間ノ部分ヲ謂フ、蓋シ其旨趣ハ全ク寺院ノ全體ヲシ  
 テ羅旬ノ十字架ヲ様式ト爲スニ在リ、羅旬ノ十字架ハ幹ノ長サ枝ニ勝  
 サルコ甚タ遠シ  
 佛蘭西初年ノ寺院ハ專シ木材ヲ用ヒシカ、第十一紀ニ至リ漸ク石ヲ用  
 フ、此レ蓋シ雷震ノ爲ニ火災ヲ致スコ屢々ナリシニ由リテナリ、  
 夫レ其木材ヲ棄テ、石ヲ用フルヤ、是ニ於テ構架法自ラ一變セサルヲ  
 得ス、是ニ於テ平穹窿ノ兩傍下ニ嚮フ處ニ就テ、更ニ複壁ヲ施シテ以テ  
 墻ト相接セシメサル可ラス、又其四面或ハ柱ヲ立テ、兩箇相並ヒテ以  
 テ列ヲ爲サシメ、若クハ大杭ヲ列シテ柱ト相雜ラシム、凡ソ此レ皆以前  
 ノ無キ所ナリ、

又其四旁ノ庇廡極テ大ニシテ、翼然トシテ外ニ嚮フ、此レハ内垣ヲシテ  
 雨水ノ侵蝕ヲ免レシムルカ爲メナリ、廳樞ハ則チ其上面往々穹窿狀ヲ  
 爲シ、又兩箇相並ヒテ列ヲ爲ス、但孔穴ハ正圓ニシテ「オイユドベーフ」ヲ  
 爲ス、「オイユドベーフ」ハ牛目ノ義ニシテ即チ廳ノ啓閉スル處ヲ謂フ、  
 又其内部ノ正門ヨリ奥ニ行ク處ハ、廊ヲ爲シテ日光隱然トシテ射入シ、  
 人ノ鼻目ヲ髣髴間ニ認ムルコト得ルニ過ギズ、此レ蓋シ祭日ニ僧侶ヲ  
 シテ列ヲ爲シテ行步セシムルカ爲メナリ、  
 其正奥ノ處ハ高樓ヲ設ク、其屋蓋上ニ更ニ尖塔ヲ施シ、轟然蒼穹ヲ摩ス  
 ルノ勢有リ、其樓ハ鐘ヲ置キ且ツ登リテ以テ遠近ヲ臨瞰スルカ爲メナ  
 リ、  
 若夫レ續飾ノ制ニ至リテハ、復タ羅馬法ノ一意ニ整齊ヲ主トナスガ如  
 クナラス、是ニ於テ彫刻家其巧妙ヲ肆ニシ、其奇思ヲ逞クシ、各々其感觸

スル所ニ隨フテ彫鐫シテ束縛セラル、無シ、是ヲ以テ當時ノ建築ノ今  
 ニ存スル者頗ル多シト雖モ、其梁楨ノ彫飾相同シキ者絶エテ有ルコト無  
 シ、佛蘭西當時ノ寺院ハ柱形極テ大ニシテ、穹窿ノ狀極テ整齊ナルヲ以  
 テ、一望スルキハ隱然トシテ嚴毅壯固ノ態有ルヲ見ル、加之廳孔狹小ニ  
 シテ日光ヲ延クコト少キヲ以テ内ニ入ルキハ黯澹トシテ僅ニ人ノ顔ヲ  
 認ムルニ過キササルヲ以テ、人ヲシテ自ラ神威ヲ敬畏スルノ意ヲ發セシ  
 メ、又自ラ人ヲシテ悲愴ノ情ヲ發セシム、是レ固ヨリ怪ム無キナリ、其住  
 持ノ僧多クハ所謂「モアンス」遁世僧ニシテ、世ヲ遺レ身ヲ捨テ、一意ニ  
 望テ來世ニ屬シ、神德ヲ景仰シテ自ラ地下ノ苦ヲ免ル、コト是レ務ム  
 ルノミ、是ヲ以テ其建築ノ制自ラ悲慘忍辱ノ狀有リテ、復タ「オジワール」  
 法ノ奇傑豪宕ナルカ如クナラス、蓋シ夫ノ「モアンス」ハ其執ル所ノ戒律  
 既ニ嚴急ニシテ、唯自ラ克クテ懲ヲ懲ス有ルノミ、加之當時夫ノ一千年

大劫會ノ懼レ、猶ホ胸中ニ留滯シテ未ク全ク去ラサル者有リ、其建築ノ  
 是ノ如クナル亦宜ナラズヤ、若夫レ繼テ起ル所ノ「オジワール」法ノ建築  
 ニ至リテハ、俗家ノ起ス所ニシテ方ニ夫ノ村邑自治ノ權ヲ得テ、其心悠  
 々然トシテ大ニ望ヲ將來ニ屬スル有リ、此其建築ノ奇傑豪宕ナルコトモ  
 亦自然ノ勢ナリ、

○第四章 「オジワール」法 ○中興ノ時ノ建築法

予既ニ希臘羅馬ヒサンチヌ及ヒ亞刺比佛蘭西初年ノ建築法ヲ論セ  
 リ、今ハ則チ請フ「オジワール」法ヲ論セン「オジワール」トハ尖穹窿ノ謂ナ  
 リ、顧フニ佛蘭西ノ特ニ「オジワール」ヲ用ヒシハ猶ホ希臘ノ柱製ニ於ケ  
 ル、羅馬ノ尋常穹窿ニ於ケルカ如シ、各々皆長スル所アレバナリ、  
 然リト雖モ柱製ハ必シモ希臘人ノ創思セシ所ニ非ス、穹窿ハ必スシモ  
 羅馬人ノ創思セシ所ニ非ス、但希臘人ナリ羅馬人ナリ、始メテ夫ノ柱ノ

形穹窿ノ設ノ大ニ建築ノ觀美實益ニ補フ處アルヲ發見シ、此ヲ以テ其構架法ノ基趾ト爲シ、故ニ其創思セシ所ニ非スト雖トモ、實ハ創思ト異ナルヲ無シ、即チ吾佛蘭西ノ「オジワール」ニ於ケルモ亦猶ホ是ノ如キノミ、蓋シ亞刺比人前ニ已ニ此法ヲ用ヒタリ、然レモ常ニ之ヲ用フルニ非スシテ、或ハ時ニ之ヲ用ヒテ以テ裝飾ト爲スニ過キス、既ニ吾佛蘭西ノ之ヲ傳フルニ及ヒ、此法ヲ以テ建築ノ大旨トシナシ、大ニ其他ノ部分ヲ一變シテ其尖穹窿ト相副ハシメタリ、此レニ由テ之ヲ觀レハ尖穹窿ハ亞刺比人之ヲ創メテ佛蘭西人大ニ之ヲ擴張セシト謂フ可キナリ、  
 ロントレット氏著ハス處ノ構架法論說ニ由リテ之ヲ言ヘハ尖穹窿ノ下壓ノ力ハ尋常穹窿ノ下壓ノ力ニ比スレハ極メテ寡シ、其ノ數ヲ度ルニ蓋シ三ト七トニ過キス、且ツ又尖穹窿ハ其ノ頂削小ニシテ且ツ其ノ兩旁相距ルヲ稍廣キヲ以テ、其支撐スル處ノ部分ヲ壓スルノ力モ亦尋常

穹窿ノ力ニ比スレハ、三ト四トニ過キス、

茲ニ論スル所ハ即チ「オジワール」法ノ尤モ建築ニ益有ル所以ナリ、是ヲ以テ此ノ法ヲ用フルルハ、尋常穹窿ニ比スレハ、人力ヲ勞スルヲ更ニ寡ク、財ヲ糜スルヲ更ニ少クシテ、構架ノ高サハ之ニ倍スルコトヲ得、而シテ當時ノ人心ノ最モ喜ブ所ノ構架ヲシテ務メテ高カラシムルニ稱ヘリ、顧フニ古昔東方ノ人民ハ「バビロン」人ヲ除クノ外ハ皆ナ規模ノ廣大ナルヲ求メテ、高サハ則チ必シモ意ヲ留メサリシガ、吾第十一紀ノ人心ハ正ニ之ト相反シテ、專ラ其ノ高ク空ニ拔クヲ求メテ、廣サハ則チ其心ヲ置カサリシ所ナリ、而シテ「オジワール」法ハ高ク構架スルニ於テ尤モ利便ナリ、其ノ大ニ世ニ行ハレシヲ亦宜ナラス乎、  
 茲ニ云フ所ノ外「オジワール」法ニ於テ更ニ一種ノ利益アリ、顧フニ此利益ハ前ニ論スル所ノ利益ノ尤モ昭著ナルカ如クナラズト雖モ、猶ホ頗

ル大ナルモノアリ、何ソヤ、曰ク大穹窿ノ線ノ斜ニ頂上ニ赴ク所ニ循フテ、更ニ多ク小穹窿ヲ施スコト是レナリ、蓋シ羅馬人ノ如キハ、此小穹窿ヲ用フルコトヲ知ラサルニ非スト雖モ、之ヲ大穹窿ノ斜線上ニ用ヒズシテ他處ニ用ヒタリ、是ヲ以テ其極メテ小ナル者ト雖モ、必ス若干ノ石材ヲ用ヒサルヲ得スシテ、其勢已ムコトヲ得ス又更ニ厚墻ヲ作リテ之ヲ承ケシムルコトヲ要ス、否ラサレハ其厭下ノ力盛ナルヲ以テ之ニ當ルニ足ルモノナシ、加之此斜線ノ穹窿ヲ用フルキハ、全一體ノ四方ニ於テ重サヲ分ツコト相均シキコトヲ得、夫レ其材料既ニ木ヲ用フルコトヲ得テ、其四方ノ重サ又相均キキハ、是其便益タル豈ニ甚タ大ナラス乎、

「オシワール」法一タビ行ハル、ヨリ、諸邑落ノ民争フテ寺院ノ構築ヲ高大ナラシメテ以テ自ラ喜ベリ、蓋シ此時村邑自治ノ制始メテ行ハレ、人民始メテ自由權ヲ復スルコトヲ得、是ニ於テ一土木ヲ起ストキハ、自ラ視

テ以爲ク此レ固ヨリ己レノ有ナリト、是ニ於テ諸邑相競フテ建築シ、必ス他邑ノ寺院ヨリ高大ニシテ且ツ美麗ナラシメント欲シ、而シテ建築家モ亦力ヲ竭シ思チ盡シテ人民ノ望ニ副ヒ、以テ己レノ榮ト爲スコトヲ求ム、此レ「オシワール」法ノ益々進ミテ其極ニ至リシ所以ナリ、

佛蘭西初年ノ建築ニアリテハ、專ラ尋常ノ穹窿ヲ施スヲ常ト爲シテ、而シテ其線ノ下ニ向フ處下壓ノ力極メテ大ニシテ、其厚壁ノ力動モスレハ之レニ當ルニ足ラザルモ、今尖穹窿ヲ用フルニ及ンテハ、下壓ノ力復タ尋常穹窿ノ甚シキガ如クナラス、然レモ其高サ既ニ尋常ニ超越シテ、幾ント蒼天ヲ衝クノ勢ニ至ルヲ以テ、厚壁ノ力ハ終ニ亦之レニ堪フルニ足ラス、是ニ於テ乎「アルクブーダン」ノ制起ル、アルクブーダントハ大穹窿ノ旁ニ於テ更ニ構築ノ巧ヲ施シ、其一翼ヲシテ内面ニ入ラシメ、大穹窿線ノ其支撐ニ接スル處ニ於テ之レカ承ヲナサシム、是ニ於テ大穹



窿線ノ下壓ノ力如何ニ大ナリト雖モ、優ニ以テ之ヲ支撐シテ傾覆ノ患ナキヲ得可シ、此制ノ一タビ發スルコリ、制度ノ高峻ナルヲ益、其極ニ至リ、人民ノ構築ニ與カル者共ニ相屬マシテ曰ク、此ニ由リテ以テ直チニ上天ニ朝スルヲ得ント、

吾カ中古ノ建築ニ係ル大寺院ノ起リシコ此ノ如シ、其規模ノ高峻ニシテ制度ノ雄快ナルヲ、觀ル者ヲシテ今ニ於テ猶ホ驚畏ニシム、顧フニ我カ西方種族ノ宗旨ニ於ケル、其心ヲ設クルヲ自ラ別ニシテ、大ニ東方ノ人種ト相同シカラス、故ニ其寺院ノ制モ亦隨フテ相同シキヲ得ス、オシワール法ノ建築ノ如キハ、尤モ善ク我カ中古ノ民ノ信心ヲ表スルニ便ナリシト謂フ可シ、

「オシワール法」ノ便利ハ獨リ此レノミナラス、其大穹窿既ニアルクブーダンニ據リテ自ラ支撐スルヲ以テ四壁ハ復タ重力ニ任スルヲ須ヒ

スシテ、其職幾ント墻垣ト異ナラスシテ、必シモ甚タ堅固ナルヲ要セス、是ニ於テ作者四壁ニ就テ硝子板ヲ施シ、種々ノ彩色ヲ加ヘテ以テ裝飾ト爲スヲ得、此レ其以前ノ無キ所ナリ、

初年ノ寺院ハ本ト遁世僧ノ主トシテ構築セル所ナルヲ以テ、形狀自ラ幽暗悲惨ノ狀有ルヲ免レス今「オシワール法」ノ寺院ハ然ラス、其起ルヲ俗人ノ手ニ出テ、且ツ其自由ノ權ヲ復シテ喜フノ意ヲ表スルニ在ルヲ以テ、其間自ラ盛大ノ態無カル可ラス、若シ夫レ裡面ノ明暗ニ至リテハ、壁上硝子板ヲ施スノ多少ヲ權スルモハ、一ニ旨意ノ如クナルヲ得可シ、此レ又壁上硝子板ヲ用フルノ利益ナリ

然リト雖モ其構築スル所既ニ神明ヲ祠祭スルヲ以テ旨趣ト爲スヲ以テ、其日光ヲ延テ裡面ヲ照スヲ、太明ナルヲ得ス、他無シ、太明ナルモハ人心放散シテ其自ラ反省シテ神德ヲ思慕スルニ便ナラサルヲ以テナ

リ、然レモ亦太幽暗ナルヲ得ス、苟モ太幽暗ナルモハ心思阻屈シテ大ニ自由活潑ノ氣象ト相副ハサルヲ以テ、是ニ於テ又硝子板ニ係ルノ一術起ル、即チ硝子板ニ就テ人物草木ノ類ヲ畫クノ術是レナリ、是術ノ起ルヤ畫家相競フテ之ヲ講シ、其最モ巧妙ナル者ハ、實ニ人ヲシテ驚嘆セシムルニ足ル者有リ、

古昔希臘人ハ才性高邁ニシテ、物ヲ觀ルノ情極テ精密ナルヲ以テ、一理ヲ得ルトキハ旁推シテ益々衆理ヲ極メ、大ニ後人ノ尊敬スル所トナレリ、即チ其建築法ノ如キモ全體ヨリ節目ニ至ル迄、事理整齊ニシテ一モ次序アラサルナシ、而シテ今「オジワール」法ノ建築ノ如キハ、ソノ次序ノ秩然タルヲ希臘ノ法ニ比スレハ加フルヲ有テ減スルヲナシ、何ヲ以テ之ヲ言フ、夫レ既ニ尖穹窿ヲ用ヒテ制度ヲシテ高峻ヲラシム、是ニ於テ又「アルクブータン」ノ制ヲ發見シテ其下壓ノ力ヲ支撐スルヲ求メ既

ニ其ノ制得ルニ及ヒテ四壁復タ支撐ノ力ヲ要セス、是ニ於テ硝子板ヲ施シテ以テ裝飾ヲナシ、又日光ヲ寺ノ裡面ニ延テ過不及無キヲ要ス、是ニ於テ硝子畫ノ制ヲ講シテ明暗共ニ宜キヲ得ルニ至レリ、凡ソ其前後條理ヲ推擴シテ遞次ニ發見スル所アリテ、各々其當ヲ得ルヲ豈ニ秩然トシテ紊ル、ヲ無キニ非ス乎、

且ツ希臘ノ建築ハ其柱ヲ製スルヲ以テ基本ト爲シ、是ニ於テ其制度ヲシテ嚴正ナラシムルカ將ク雅麗ナラシムル乎、皆唯柱ノ大小ヲ以テ本ト爲シ、自餘ノ部分ハ皆之レト相副ハシムルニ過キス、即チ「ドリック」イヨニツク「コラント」ノ三法ノ別ハ皆此理ニ外ナラス、彼レノ基本ヲ寓スル所特ニ柱ノ製ニ在リテ、此ニ因リ數理ヲ推シテ構築ス、是ヲ以テ其作ノ幸ニ巧妙ノ地ニ到リシ者ハ、洵ニ世ノ奇觀ト爲スニ足ルト雖モ、其中幾分カ怪僻ノ處有ルヲ免レス、即チ其今ニ存スル寺院中、柱ノ過大ニシテ

巖ヲ列ニシカ如キ者、及ヒ其升降ノ階ノ過大ニシテ、級ト級トノ間相距  
 ルヲ人身ノ長サト相等シキカ如キハ皆奇嶮ト謂フ可ラスシテ、反テ怪  
 僻ト謂フ可シ、他無シ、彼レ誠ニ一定ノ旨趣有リテ前後整齊ナリト雖モ、  
 其旨趣タル本ト普通ノ事理ト相副ハサルヲ以テナリ、  
 若夫レ「オジワール」ノ法ノ如キハ、亦其尖穹窿ヲ以テ基本ト爲シテ、自餘  
 ノ部分ハ皆之レト相副ハシムルノミ、此レ猶ホ希臘法ノ柱製ニ於ケル  
 カ如シ、但其相異ナル所以ノ者ハ、曰ク希臘ハ一意ニ條理ヲ推シテ構架  
 ノ整齊ナルヲ求ムルモ、我カ第十二紀ノ建築家ハ獨リ條理ヲ推スノ  
 ミナラス、又事實ノ己ムヲ得サル所ニ隨フテ之レカ巧ヲ設ケテ、以テ  
 其構架ノ整齊ナルヲ求メリ、此レ其相勝サル所以ニシテ、此事ハウ、オ  
 レールギニク氏善ク之ヲ論述セリ、  
 然リト雖モ「オジワール」法モ亦短ナル所無クンバアラス、即チ其アルラ

ブーグン」ノ制ノ如キ、及ヒ其重サノ平均ヲ得ルニ難クシテ構築ノ傾仄  
 シ易キカ如キハ、皆其疵病ノ在ル所ナリ、怪シムト無キナリ、苟モ建築家  
 一材料ヲ以テ其穹窿ヲ作ルヲ能ハサル間ハ、其各材料ノ相接スル處自  
 然ニ相壓スルカ、若クハ相離ル、ノ患有ルヲ免レスシテ、極テ巧ナル建  
 築家ト雖モ、豫メ其相壓シ相離ル、ノ力ヲ算シテ、之レカ平均ヲ制シテ  
 少シモ違ハサラシムルヲ能ハス、是ノ如キ者ハ此ノ建築法ノ短處ナリ、  
 希臘ノ建築ノ如キハ、穹窿ヲ用ヒスシテ上面平扁ナルヲ以テ、初ヨリ夫  
 ノ壓力ヲ算スルヲ須ヒス、苟モ其結構ノ鞏固ニシテ之ヲ永世ニ存セ  
 ント欲セハ、唯柱ノ製ヲ強クシテ之ヲシテ上面ノ重ヲ支撐スルニ足ラ  
 シムルニ過キス、又羅馬ノ建築ノ如キハ、尋常穹窿ノ製ヲ用フルヲ以テ、  
 其線ノ下ニ向フ處ノ下壓ノ力極テ大ナリ、然レモ其之ヲ支撐スルヤ、厚  
 固ノ牆壁ヲ用ヒ、若クハ別ニ構架スル所アリテ之ヲ承クルヲ以テ、其制

タル甚ク難キヲ無シ、他無シ、苟モ穹窿線ノ壓力ヲ過メント欲スルハ、亦唯之レヲ支撐スル所ノ墻壁若クハ他ノ構築ヲシテ更ニ壯固ナラシムルニ過キスシテ足ルノミ、

若夫レ「オジワール」法ノ建築ニ至リテハ然ラス、其大穹窿ヲ支撐スル所ノ副築モ亦穹窿ヲ集メテ成ルコト、一ニ全體ノ内面ト異ナルコト無シ、是ニ於テ其線ノ兩傍ノ力相反スルノ患ヲ免ル、ヲ得ス、他無シ、此患ヲ豫防セント欲スルキハ、其諸線相壓シ相反スルノ力ヲ度ルコト、極テ密ニシテ毫釐ヲ差ヘザルニ非サレハ得ヘカラザレバナリ、夫レ然リ、是ヲ以テ我寺院ノ「オジワール」法ヲ以テ構築セル者ハ、動モスレバ傾仄ヲ致シテ之レカ爲メニ修繕ヲ要スルコト屢々ナリ、獨リ此ノミナラス、其副築ヲ用ヒ及ヒ「アルクブータン」ヲ用フルコト、是ノ如ク其多キヲ以テ、力ヲ極テ裝飾ノ巧ヲ施スト雖モ、苟モ意ヲ留メテ視察スルキハ、作者ノ巧思ニ於テ隱

然自ラ窮シテ奈何トモス可キ無キ處有ルヲ見ル、否ラサレハ其建築ノ形狀中幾分未ク收結セサル處有ルカ如キヲ覺ユ、是ノ如キ者モ亦此法ノ短處ナリ、

シヤル、プラン氏ハ尤モ「オジワール」法ヲ喜ヒ、稱賛シテ曰ク「容レラレサル者ノ如シ、而シテ此法ノ短トスル所ニ於テ、プラン氏口ヲ極テ之ヲ稱譽セリ、此レ豈ニ故ラニ之ヲ回護セント欲スル邪、此レ甚ク怪ム可キナリ、氏ノ言ニ曰ク、夫レ希臘建築法三有リテ「ドリック」法最モ能ク希臘人ノ氣象ヲ發揮スル者ト爲ス、而シテ「ドリス」法最モ能ク希臘建築家ノ名及ヒイクニ「ドリス」ノ二氏其特絶ノ姿ヲ以テ此法ニ係リテ論著スル所有リ、曰ク大凡ソ建築ノ裝飾ハ必ス其構架ノ中ニ於テ之ヲ見ハスコトヲ要ス、別ニ裝飾ヲ須フルコト無シ、是故ニ穹窿ナリ、墻壁ナリ、圓柱ナリ、苟モ已ムコトヲ得サルカ爲メニシテ之ヲ施スルハ、自然ニ建築ノ觀美ヲ發スル有リト、善イ

哉言ヤ、顧フニ我カオジワール法ノ建築家ハ此言ニ據リテ以テ典則ト爲セシナラン、故ニ其アルクブーダンノ制ノ如キハ、畢竟夫ノ高峻ノ穹窿ヲ支撐スルカ爲メニ之ヲ施セル者ニシテ、初ヨリ虚飾ノ爲メニ非サルナリ、而シテ其自然ニ觀美ヲ發スルコト是ノ如シ、蓋シ希臘建築ノ千古不朽ノ美譽ヲ馳スル所以ノ者ハ、他無シ、此一著ニ在リ、然ラハ則チ夫ノ己ムヲ得サル者有リ、因リテ構築スル所有ルコトハ、此レ建築法ノ一大肝要ノ旨趣ナリ、我カオジワール法ノ建築家ハ、其自ラ之ヲ知リタルト否ラサルトニ論無ク、深ク此旨趣ニ得ル有ル者ナリ、即チウイラール法ノ建築ナリ、ビエールナリ、ロベールナリ、皆身ヲ編戶ニ起シテ遂ニ美名ヲ世ニ發スルニ至リシハ、他無シ、其建築ニ於テ夫ノ副築及ヒアルクブーダンノ屬ヲ用ヒテ、絶エテ其旨意ヲ匿クスコト無ク、人ヲシテ此等ノ制ノ皆唯其穹窿ヲ支撐スルカ爲メナルコト知ラシム、而シテ此レ等ノ制有

ルヨリ、其建築ハ大ニ従前ノ面目ヲ一變シテ、更ニ一層ノ美觀ヲ増セリ、然レモ此等ノ制ハ初ヨリ虚飾ヲ求ムルカ爲メナラスシテ、唯其高峻ノ穹窿ヲ支撐シテ、之ヲシテ傾仄スルコト無カラシムルカ爲メニ、實ニ萬已ムコトヲ得サルニ出テタル者ナリ、是故ニオジワール法ノ建築ニ在リテハ、凡ソ其利益ノ爲メニセシ所ノ者ハ、皆自然ニ裝飾ノ具ト爲リ、凡ソ其奇傑ノ觀ヲ發スル所ノ者モ、實ハ皆夫ノ重力ノ平均ニ係ル萬古不易ノ道理ニ依準スル者ニシテ、少シモ怪異迂僻ノ病ヲ見ズ、此レ其尤モ貴尙ス可キ所ナリト、

夫レ建築家ノ構架スル所有ル必ス其旨趣ヲ發揚シテ絶エテ隱匿スルコト無キヲ要スルコトハ、詢ニアラシク氏ノ言ノ如シ、即チ畫人ノ人物ヲ描キ彫刻家ノ顔面ヲ鐫ルカ如キ、必ス其鼻目筋骨ヲシテ判然一目ニ瞭然ス可ラシムルコトヲ要ス、建築家ノ構架法ニ於ケルモ亦猶ホ此ノ如キナリ、

然レモ建築家縦ヒ其旨意ノ在ル所ヲ發揚スルコトヲ尙フモ、此レカ爲メニ盡ク其構架ノ曲折ヲ暴露シテ、一モ蔽飾スル所無キニ至ルモハ、豈ニ復タ此ヲ以テ美觀ト爲スコトヲ得ノ哉、譬へハ畫工ノ美婦人ヲ描クカ如キモ獨リ鼻目ノ端麗ナル處ト軀幹ノ整齊ナル處トヲ寫スニ止マラスシテ、亦其臟腑ヲ舉ゲテ之ヲ寫スモハ人誰レカ之ヲ厭ハサル者有ラン、己ノ所思ヲ宣發シテ絶エテ隱匿シサルコトハ、即チ所謂誠實ノ一徳ナリ、此レ固ヨリ美事ナリ、然レトモ藝術ノ道ニ於テ此徳ヲ實行シント欲スルモハ、恐クハ其當ヲ得タリト謂フ可ラス、顧フニ吾オシワール法ノ建築家ノ夫ノ副築及ヒアルクブーダンノ屬ヲ用ヒシハ、誠ニ萬已ムコトヲ得サルカ爲メニ出テタル者ナリ、然レモ必ス此ヲ以テ之ヲ讚稱シント欲スルハ奇怪ノ事ト謂ハサルヲ得ス、構架ノ中ニ於テ自ラ美觀ヲ發シテ別ニ虛飾ヲ求メサルハ、誠ニ建築家ノ肝要トスル所ナリ、然レモ架法

太ク暴露ニシテ、作者ノ窮迫ノ處ヲ見ハスニ至ルコトハ、亦其忌避ス可キ所ニ非ス乎、オシワール法ノ構架ニ於テアルクブーダンヲ用フルモハ、正ニ暴露ノ病ニ非ス乎、プランシノ必ス此ヲ以テ美觀ト爲スカ如キ、予未ダ其解ヲ得サルナリ、

且ツ當時ノ建築家モ亦自ラ其疵病ノ在ル所ヲ知リテ、痛ク之ヲ掩飾スルコトヲ求メシ者ノ如シ、何ヲ以テ之ヲ言フ、今其アルクブーダンニ就テ檢察スルニ、往々多ク小柱ノ類ヲ施シテ以テ其構架ノ曲折ヲ蔽ヒシヲ見ル、此レ其自ラ暴露ノ處ヲ知リタルノ證ニ非ス乎、此レニ由リテ之ヲ觀レハ作者ノ心ニ於テハ未ダ必スシモ其旨意ヲ發揚シテ、人ヲシテ之ヲ一目ニ瞭然セシムルコトヲ求メンコト、ブシ氏ノ言フ所ノ如クナラサルナリ、設令ヒ作者ヲシテ夫ノアルクブーダンヲ用ヒスシテ、別ニ其穹窿ヲ支撐スル良策ヲ發見シシメハ、其喜ヒテアルクブーダンヲ捨テ、他

ノ良策ヲ取リシヲ想フ可シ、然レハ則チ其アルクブータン<sup>一</sup>ヲ用ヒシヲ以テ、之ヲ讚稱シント欲スルハ、殊ニ作者ノ深意ヲ知ラサル者ナリ、今オジワール<sup>一</sup>法ノ作者ノ深意ヲ探ラシムルニハ、彼レノ最モ意ヲ注キシハ極テ其建築ノ制ヲシテ高峻ナラシムルニ在リ、是ニ於テ苟モ以テ其大穹窿ヲ支撐ス可キ手段ハ、必ス之ヲ用ヒサルヲ得ス、即チ其アルクブータン<sup>一</sup>ノ制ノ如キハ、實ニ萬已ムヲ得サルニ出タル者ナリ、其意以爲ラク少ク外貌ヲ損スル有ルモ、此法ヲ用ヒテ以テ高峻ノ勢ヲ成スニ如カスト、此レ其苦心ノ在ル所タルノ明カナル、予其肺腑ヲ見ルカ如シ、之ヲ要スルニアルクブータン<sup>一</sup>ノ制ハ、オジワール<sup>一</sup>ノ短處ナリ、豈ニ此ヲ以テ其美觀ノ在ル所ト爲スヲ得ン哉、

「オジワール<sup>一</sup>法ノ稱美ス可キハ、ブランシ氏ノ指摘スル所ニ在ラズシテ別處ニ在リ、ウイオレ<sup>一</sup>、ギョウク氏尤モ意ヲ中古ノ建築ニ用ヒテ搜檢至ラ

サル所莫ク、其論スル所往々窅窅ニ中レル者有リ、其言ニ曰ク、「オジワール<sup>一</sup>ノ法ノ最モ盛ニ行ハレシハ、第十二紀ノ末年ニ在リ、蓋シ此法ハ歐州ニ在リテ別ニ一路ヲ開キシ者ニシテ、且ツ其源實ニ俗家ニ發シテ大ニ從前建築ノ遁世僧ノ旨ヲ承ケシ者ト其規模ヲ異ニセリ、予ヲ以テ之ヲ觀ルニ、此法ノ尙フ可キハ其條理ノ次序ヲ得タルノ一途ニ在リ、凡ソ此レヨリ前ノ諸法ハ、大率皆當時ノ慣習ニ依リテ準則ヲ取レルヲ以テ、若シ普通ノ條理ヲ以テ之ヲ律スルハ、往々缺失ノ處有ルヲ免レス、獨オジワール<sup>一</sup>法ハ其結構ノ全體ニ論無ク、其裝飾ノ小節目ニ至リテモ皆普通ノ條理ニ近接スルヲ求メシヲ見ルニ足ル、此レ其貴尙ス可キ所以ナリ、希臘ノ建築ノ如キ、嚴整ヲ求ルニアラズト雖モ、其構築唯圓柱ヲ以テ平扁ノ屋蓋ヲ支撐スルノミニシテ、他ニ變化ヲ求ムルヲ知ラズ、又羅馬ノ如キハ穹窿圓柱並ニ之ヲ用ヒテ善ク之ヲ鎔合スルヲ知ラ

百  
其帝國ノ末年ニ至リテハ、夫ノピサノ法起リテ、圓柱ノ上ニ於テ穹窿ヲ施スヲ試ミ以テ一法ヲ創メリ、然レモ亦此二法ヲ融合シテ之ヲシテ相反スルノ痕迹ヲ沒セシムルヲ能ハス、我カ初年ノ建築法ハ此數ノ者ニ比スレハ、大ニ進歩ノ處有リ、其法圓柱穹窿並ニ之ヲ用フルヲ、羅馬ト異ナラスト雖モ、其構架稍々條理ノ觀ル可キアリ、且ツ穹窿ヲ以テ主トナシテ圓柱ハ特ニ之レカ添補タルニ過キス、若夫レ「オジワール」法ニ至リテハ、面目意思並ニ一變シ、穹窿ノ制專ラ建築ノ要旨トナリ、獨リ構架ノ上ノミナラス、即チ全體ノ觀ニ至リテモ、一ニ穹窿ヲ以テ之レカ本領ト爲シテ、羅馬人モ亦時ニ其建築ノ全體ノ旨趣ヲシテ穹窿ニ基カシメリ、然レトモ其穹窿ヲ支撐スル所ノ部分塊然トシテ巨巖ノ如ク絶エテ輕爽ノ態有ルヲ無シ、他ナシ其構法全ク巨材ヲ聚メテ成ル所ナルヲ以テナリ、若夫レ「オジワール」法ニ至リテハ、其狀態是ノ如ク爽

百一  
快ニシテ、且ツ其部分各々皆一定ノ職アラサ莫ルクシテ、一モ虛飾ニ出ツル者無シ、即チ圓柱ノ如キ荷モ之ヲ設クルモハ、必ス支撐スル所有リテ虛シク設クル所ニ非サルナリ、蓋シ其柱上凹形ヲ爲スハ、其承クル所有ルカ故ナリ、又其柱題ノ面外ニ出ル處頗ル長キカ如キモ必ス然ラサルヲ得サルニ由リテナリ、  
又其承塵分レテ數箇ノ穹窿ト爲ル者ハ、亦徒ニ設クルニ非ス、此猶ホ人身ノ神經ノ如クニシテ、必ス一々司ル所有リ凡ソ穹窿ノ線下ニ嚮テ壓抑スル處ハ、必ス又他ノ穹窿有リテ其力ヲ節制セサルハ莫シ、四壁ノ制復タ羅馬ノ制ノ鞏固ナルカ如クナラサル者ハ、其支撐スル所無クシテ特ニ風日ヲ蔽フニ取ルカ爲ナリ、是故ニ其全體ノ構法ヲ論スルモハ、大率斜線ニ據リテ成レル者ニシテ、諸部相倚リ相排シテ以テ自ラ維持スルヲ得ル者ナリ、復タ羅馬ノ構法ノ專ラ支撐ノ疎大ナルニ由リテ僅



ニ維持スルカ如クナラス、蓋シ其穹窿ノ制ハ復タ一片ノ物ニ非ラスシテ、必ス各部ノ壓力ヲ算シ、巧ニ之ヲ度リテ相制セシメ、又其下ニ嚮フ處ハ、各々皆之ヲ承クル者有リ、遞次ニ降りテ下地ニ達ス、而シテ其構法ハ一見シテ之ヲ詳知スルコトヲ得、又外面ニアリテハ屋蓋各々翼有リテ外ニ向ヒ、雨水ヲシテ浸濕スルコトヲ得サラシム、

又凡ソ裝飾ノ數ハ本土多ク有ル所ノ花卉若クハ禽獸ニ象リテ以テ之ヲ爲ス、此レ蓋シ作者ノ意專ラ自家ノ機軸ヲ出シテ、絶エテ前人ノ規轍ニ循ハサルカ爲ナリ、然レモ其裝飾ハ各皆其居ル可キ所ニ居リ、又其旨意明白ニシテ一目ニ瞭然タリ、此レ他無シ、其善ク全體ノ形貌及ヒ結構ニ適セラルヲ以テナリ、蓋シ其彫飾タルヤ、結構己ニ成ルノ後ニ於テ之レヲ施スニ非スシテ、當初材料ヲ裁割スルノ時ニ於テ早ク之カ功ヲ竣ハ

レリ、是故ニ名ハ裝飾ト云フト雖モ實ハ全體ト一體ヲ成シテ相離レサル者ナリ、

ウイオレー氏ノ言洵ニ當レリ、而シテ人或ハ云ハシ、果シテ此ノ如クナル片ハ、我ガ「オジワール」法ノ建築ハ畢竟唯算數ノ學ト重學トニ由リテ成ルニ過キスト、是或ハ然ラン、蓋シ諸藝術ノ中ニ就テ特ニ建築ノ一途ハ算學重學ノ二ノ者ト極テ交渉有ル者ナリ、故ニ夫ノ希臘羅馬ノ建築ハ皆此ノ二學ノ理ニ據リ以テ準則トナサザル莫シ、而シテ其尙フ可キハ尤モ此一著ニ在リ、而シテ今我ガ「オジワール」法ノ作者ノ如キモ、亦此二學ノ理ニ基テ構築ス、此一著ニ係リテ言フモ、希臘羅馬ノ作者ト並驅リテ先ヲ爭フト曰フモ可ナリ、然ルニ况ンヤ其他猶ホ頗ル取ル可キ者有ルチャ、

我ガ「オジワール」法ノ取ル可キ者ハ、獨リ其能ク數學重學ノ二ノ者ニ適

合スルノミニ在ラスシテ、亦其能ク二種ノ手法ヲ出シテ別ニ一機軸ヲ出クスニ在リ、此一事ニ係リテモ予復クウイオレー氏ノ言ヲ引テ以テ證ト爲サン、何トナレハ凡ソ我カ近代ノ建築家ニ就テ、其最モ善ク「オジワール」法ヲ論評セシハ、ウイオレー氏ニ踰ユル莫ケレハナリ、ウイオレー氏ノ言ニ曰ク、「オジワール」法ハ第十二紀ノ末ニ於テ我カ佛蘭西ノ建築家ノ意ヲ以テ創起セシ所ナリ、蓋シ當時我カ中古ノ文運未タ其至盛ノ地ニ到ラスシテ、品章制度猶ホ多ク古昔ノ遺習ヲ存セシガ、俄カニシテ夫ノ村邑自治ノ論起リ、徒フテ幾分自由ノ權ヲ克復スルコトヲ得タリ、是ニ於テ平古昔ノ文物ト自由ノ論說ト相錯リ相擾ル、チ免レスト雖モ、人心ノ自由ヲ喜フコト本ト其天性ナルヲ以テ、苟モ才識有ル者ハ皆舊規ヲ去リテ新途ニ就カサル莫シ、即チ建築ノ一法ニ就テモ、苟モ天ニ獲ルノ才有ル者ハ、皆競フテ新規ヲ發揮シテ復ク希臘羅馬ノ舊軌

ヲ蹈マサラント欲ス、而シテ賞鑒家モ亦相將非テ之ヲ環擁シテ其贊揚ノ力ヲ極メテ、然ルカ若キ者ハ何ソヤ、蓋シ我カ佛蘭西本ト自ラ固有ノ美術有リト雖モ、希臘羅馬ノ古法ノ抑壓スル所ト爲リテ、徒ラニ人ノ腦髓中ニ鬱シテ未タ少シモ其萌芽ヲ生ゼズ、是ニ於テ自由ノ說起ルニ及ビ、我カ作者モ亦其自由ノ性情ヲ發揮シ、別ニ一種ノ新法ヲ創見シテ以テ古昔ニ駕セント欲ス、此レ乃チ建築ニ係リテ「オジワール」法ノ發生セシ所以ナリ、

此法ノ發生スルヤ、王公大人或ハ意旨ヲ同フセサル者有リト雖モ、一モ得テ之ヲ抑壓スル莫シ、此レ他無シ、凡ソ事一意思有リテ自然ノ道理ニ適合スルモハ、其勢力ノ必ス強チ成スコト猶宗教ノ說ノ人心ニ於ケルカ如クナルコトハ、是レ自然ノ勢ナリ、而シテ「オジワール」法ノ建築ニ於ケル、其意思本ト自然ノ道理ニ適合セルヲ以テ、其絶エテ防壓ノ制ヲ受ケス

シテ、大ニ其力ヲ逞ウスルニ至リシコ、亦宜ナラス乎、  
 今試ニ幾何學ヲ能スル者ニ向テ幾何ノ道理ノ信ス可ラサルヲ論セン  
 ニ、力ヲ極テ之ヲ言フモ、彼レ終ニ屈セサラントス、此レ他無シ、幾何ノ道  
 理タル極テ明白ニシテ極テ信憑ス可キヲ以テナリ、我カ「オジワール」法  
 ノ建築家ノ自ラ信セシコモ亦猶ホ然リ、

大凡ソ藝術家苟モ一意思ヲ創シテ能ク事物自然ノ道理ニ背カスシテ  
 然ル後之レニ被ムラシムルニ一形體ヲ以テスルキハ、其形體タルヤ必  
 ス其目的トスル所ノ旨趣ヲ成スカ爲タルニ過キスシテ、一モ虚飾ニ涉  
 ルコ莫シ、是ノ如クニシテ作ルコ有ルキハ、其間自ラ所謂手法アル者ノ  
 觀ル可キ有ルハ自然ノ勢ナリ、是ニ由リテ之ヲ言ヘハ、夫ノ手法ナル者  
 ハ、凡ソ人手ニ出ル者皆之レ有ラサルハ莫シ、即チ詩歌音樂繪畫彫刻建  
 築等ノ物ニ論ナク、日常ノ器具碟碗凡牀ノ類ニ至ルマテ、苟モ創見スル

所有リテ作ルキハ、其中必ス一手法ノ印證セル有リ、顧フニ吾儕今日ニ  
 在リテ希臘ノ諸作ヲ觀テ之ヲ愛敬スルハ何ソヤ、亦唯其中手法ノ觀ル  
 可キ有ルヲ以テナリ、即チ我カ中古ノ作者ノ喜フ可キモ、亦唯手法ノ觀  
 ル可キ有ルヲ以テナリ、但其意思ノ大ニ相異ニシテ略ホ肖似スル所無  
 キ者ハ、他無シ、此二因ノ文物制度本ト特ニ相同シカラサルヲ以テナリ、  
 而シテ今ヤ吾儕再ヒ希臘ノ手法ヲ得ント欲スルモ不可ナリ、何トナレ  
 ハ吾儕本トアテ「インヌ」人ニ非ザルヲ以テ、其腦中蓄フル所ノ意思隨フ  
 テ相同シカラサルヲ以テナリ、吾儕再ヒ我カ「オジワール」法ノ轍ニ循ハ  
 ント欲スルモ亦不可ナリ、何トナレハ世運日々ニ大ニ進鬪シテ、復タ當  
 時ノ比ニ非サルヲ以テナリ、是ヲ以テ吾儕今日ニ在リテ必ス希臘若ク  
 ハ我カ中古ノ法ヲ起スキハ、畢竟摸擬剽竊ノ病ヲ免レズ、何ノ手法カ能  
 シ之ヲ出サン、故ニ吾儕今日ニ在リテハ復タ前人ノ爲セシ所ヲ爲ス可

ラス、但前人ノ方法ト爲シ所ハ吾儕モ亦以テ方法ト爲スコヲ得可シ、何ソヤ、曰ク誠實ノ意思ヲ得テ之ニ據リ、然ル後作ル所有ルコト是レナリ、苟モ然ルモハ夫ノ手法ナル者ハ、必ス隱然トシテ其間ニ發生シテ自ラ掩フ可ラズ、必スシモ搜索スルコト須ヒサルナリ、我カ「オジワール」法ノ建築ノ夫ノ希臘羅馬ノ建築ト異ナル所以ノ者ハ果シテ安クニ在ル哉、曰ク專ラ形貌ノ制ノ自由ニシテ束縛ヲ受クル無キノ一著ニ在リ、蓋シ希臘羅馬ノ建築ハ其旨趣各々相異ナリト雖モ、之ヲ要スルニ其作者皆固ク之ヲ執リテ失ハス、其建築ノ大體ヨリ小節目ニ至ルマテ、一々其一定ノ意思ヲ發揮シテ之ヲ出サマルハ莫シ、我カ「オジワール」法ノ作者ハ然ラズ、其意思ヲ執ルコトノ嚴整ナルコト或ハ希臘羅馬ニ及ハザル有ルモ、其形貌ノ縱横自在ニシテ端倪ス可ラサルコトハ、又此二因ノ及フ所ニ非ス、此レ其手法ノ存スル所ナリ、

我カ「オジワール」法ノ建築タルヤ、其各部ノ壓力ヲ均齊スルノ手段ニ就テ言フモ、其構架ノ體貌ニ就テ言ヒ、並ニ其幾何學ノ理ヲ用フル所ノ術ト夫ノ草木禽獸ノ形ヲ象リテ裝飾ト爲スノ方法トニ就テ言フモ、其區域大ニ廣博ヲ成シテ、復タ希臘羅馬ノ專ラ一途ヲ守リテ必ス之ニ違ハサルカ如クナラズ、此レニ由リテ之ヲ言ヘハ、「オジワール」法ノ建築ノ其體貌ノ制ニ於テ大ニ自在ヲ得タル所以ノ原因ハ他ニ非ス、作者物ヲ觀ルノ情大ニ廣博ニ赴キテ、其腦中大ニ意思ニ富メルヲ以テ、其自逞スルト彼ノ如ク其レ甚シキナリ、然リ而シテ其是ノ如クニシテ恣睢猖狂、自ラ逞クスルノ間ニ於テ自ラ手法ノ觀ル可キ有リテ、決シテ掩フ可ラサル者ハ、抑、何ノ故ソヤ、蓋シ其建築ノ體制誠ニ自在ニシテ、其裝飾誠ニ數種ナリト雖モ、此レ皆一定ノ意思有リテ然ル後發生スルニ過キス、而シテ所謂一定ノ意思ナル者モ、亦自ラ其由リテ發スル所ノ基有リテ、妄リニ

搖動スルヲ得ス、夫レ既ニ一定ノ意思有リテ、然ル後作ル有リ、此レ其體貌裝飾如何ニ變化自在ナルモ、自ラ手法ノ一定セル者有ル所以ナリト、此レウイシー氏著ハス所ノ第十一紀ヨリ第十六紀ニ至ル間佛蘭西建築法ノ論ト題號セル書中ノ言ナリ、

我カ佛蘭西藝術中興ノ時ノ建築法ニ係リテハ、予別ニ論スル所有ルヲ欲セズ、何トナレハ其中最モ名作ト稱ス可キ者ハ、盛大瑰麗ノ觀無キニ非スト雖モ、之ヲ要スルニ未タ一定ノ紀律ノ徵ス可キ有ラサルヲ以テナリ、蓋シ我カ中興ノ時ノ建築ハ、大率従前ヨリ傳フル所ノ佛蘭西ノ建築法ヲ以テ基ト爲シ、之レニ和スルニ希臘羅馬ノ諸法ヲ以テスル者ナリ、是ヲ以テ其建築ノ最モ著名ナル者ハ、畢竟其調和ノ間幾分ノ巧思有ルニ過キス、且ツ其作者各々見ル所有リテ構築セシヲ以テ、彼此相比較スルトハ、其意思或ハ相反スル者有ルヲ致セリ、故ニ若シ仔細ニ之ヲ講

究セント欲スルトハ、諸家ノ作ニ就テ一々考索ヲ加フルニ非サレハ、終ニ其詳ヲ得可ラスシテ、予未タ暇アラズ、故ニ茲ニ之ヲ論セス、

### ○第五章 總括

建築術ハ諸藝中ニ就テ、作者ノ自ラ其意思ヲ發揮スルニ於テ最不便ト爲ス、トハ、既ニ前ニ之ヲ論セリ、蓋シ建築術ハ獨リ藝術上ノ美觀ヲ求ムルノミナラス、亦必ス實益有ルヲ求ム可シ、實益トハ何ソヤ、其構築ノ旨趣トスル所ノ者は是レナリ、之ヲ例ヘバ、寺院ヲ建ル乎、必ス神ヲ祭り儀ヲ舉クルニ便スルヲ求メザル可ラズ、宮殿ヲ建ル乎、劇場ヲ建ル乎、皆然ラザル莫シ、故ニ建築家タル者ハ、必ス其構築ノ旨趣ヲ外ニシテ別ニ自ラ意思ヲ發スルヲ得ズ、譬ニ此ノミナラス、其他又其地ノ産スル所ノ材料、及び其風氣ノ寒温、土壤ノ堅脆等ニ由リテ取捨スル所無カル可ラズ、加之従テ建築スル所ノ地形、及び本土人情習俗モ亦必ズ諮訪依準

セザル可ラス、凡ソ皆其意思ヲ束縛シテ、自ラ恣ニスルヲ得サル所以ナリ、

人或ハ云ハフ、凡ソ茲ニ論ズル所ハ、皆建築ノ爲ニ必須トスル所ナリ、唯此レ等ノ必須有リ、是ヲ以テ建築家善ク規畫裁制スルキハ、適ニ以テ其巧ヲ見ハスニ足ルト是レ詢ニ然リ、然レモ善ク此等ノ必須ニ適合スレバ、之ヲ要スルニ建築家ノ巧思ト云フ可シ、未タ其美術上ノ意思ト謂フ可ラズ、予故ニ曰ク建築術ハ種々ノ妨碍有リテ作者ノ自ラ其意思ヲ發揮スルニ於テ極テ不便ナリト、

且ツ又古昔ノ如キハ近代ニ比スレハ、此種ノ妨碍更ニ甚キ者有リ、何ヲ以テ之ヲ言フ、曰ク寺院宮殿ノ制度モ亦尋常廬舎ノ制度ト大ニ相異ナラスシテ、必ス其種族ノ好尚ニ従ヘリ、之ヲ以テ希臘ノ寺院宮殿ハ、自ラ希臘ノ制有リ、エジプトノ寺院宮殿ハ、自ラエジプトノ寺院宮殿ノ制有リテ、

大抵様式ヲ尋常廬舎ニ取リテ、特ニ其規模ヲ廣大ニスルニ過キス、夫レ其種族ノ好尚ニ従テ構築ス、是ヲ以テ作者自ラ其意思ヲ發揮スルニ於テハ、其不便益、甚キ者有リ、

更ニ言フ可キ有リ、今前代ノ建築ノ存スル者ヲ觀ルニ、或ハ嚴整ノ態有リテ、人ヲシテ恭敬ノ意ヲ發シシムル者有リ、或ハ剛毅ノ狀有リテ、人ヲシテ壯快ノ心ヲ發シシムル者有リ、人其此ノ如キヲ見テ、動モスレハ輒チ云フ、作者固ヨリ豫メ此効ヲ期シリト、予ヲ以テ之ヲ觀ルニ、此レ大ニ然ラス、且ツ我カ第十三紀ノ禮拜堂ノ如キ、其挺然高峻ナルヲ彼ノ如ク其甚シキ者ハ、作者ノ意或ハ此ニ因リテ人ヲシテ一意ニ精神ヲ天堂ニ騰ケテ、人寰ノ汚塵ヲ擺脫セシムルニ在リト雖モ、其他亦一原因ノ在ル有リ、蓋シ當時寺院ヲ建築スル、必ス羅旬ノ十字架形ニ據リテ様式ト爲セリ、而シテ羅旬ノ十字架ハ、幹極テ長クシテ兩枝極テ短キヲ以テ、其構

架ノ規模自ラ高峻ナラサルヲ得スシテ、周圍ハ必スシモ廣大ナラス、是ノ如キハ本ト自ラ一定ノ法度有リテ、之ニ依準スルニ過キスシテ、未ダ作者自身ノ意思ト謂フヲ得サルナリ、

且ツ其必ス羅旬ノ十字架形ニ據リテ構築シシ所以ノ者ハ、他ニ非ス、特ニ此レニ因リテ、人ヲシテ救主ノ慘刑ニ罹リシヲ追憶シテ、其高大ノ恩惠ヲ記念セシムルニ在リ、而シテ其構築ノ高峻ナル所以ノ者ハ、特ニ此ニ因リテ、人ヲシテ救主ノ終ニ意ヲ得テ天ニ升リシヲ想像セシムルニ過キス、夫レ然リ、是ヲ以テ寺院ノ全形ニ論ナク、極テ瑣細ノ部分並ニ一木一石ニ至ル迄、皆象擬スル所アラサル莫シ、蓋シ當時ノ人情尤モ宗教ヲ篤信シ、喜テ事物ノ間ニ於テ宗教深微ノ意思ヲ寓セリ、今之ヲ細察スル所ハ、歴々トシテ徴ス可シ、然レモ凡ソ此等ノ事ハ皆衆人ノ同ク然リトスル所ニシテ、作者ハ特ニ之ヲ其構築ノ間ニ發スルニ過キス、固ヨ

リ其一己ノ感情ト謂フヲ得サルナリ、

獨リ此ノミナラス、此ノ如ク高峻ナル所以ノ者ハ、又別ニ俗事ノ意思ノ在ル有リ、蓋シ邑人此レニ因リテ遠近ヲ臨望シ、且ツ不虞ヲ戒メ、並ニ其新ニ自治ノ制ヲ得タルガ爲メニ、此ヲ以テ其欣喜得意ノ状態ヲ見ハスヲ求メリ、

凡ソ茲ニ云フ所ハ、皆其國ノ宗教人情ヨリ發スル者ニシテ、皆以テ作者一己ノ意思ヲ束縛シテ、之ヲシテ自ラ肆ニスルヲ得サラシムルニ足ル、

現今ニ在リテハ、人ノ宗教ヲ篤信スルヲ、復タ第十三紀ノ甚キガ如クナラス、且ツ政體ノ如キモ郡縣ノ制ニ循フテ之ヲ立ルヲ以テ、復タ諸侯伯ノ相交代スルノ禍ヲ見ルヲ無シ、是ヲ以テ今人我カ第十三紀ノ建築ヲ觀ル者、皆其當日ノ旨趣ヲ細察スルヲ忘レテ、唯其高大俊偉ノ觀ヲ感

スルヲ知ル而已、是ニ於テ乎云フ、某ノ寺院ハ甲ノ状態アリ、某ノ宮殿ハ乙ノ状態有リ、此皆其作者ノ豫メ其意思感情ヲ寓シテ其此ノ如キナ期セシニ由リテ然リト、此レ我カ第十三紀ノ建築ノ今日ニ於テ大ニ美學上ノ觀美ヲ發セシ所以ナリ、設令ヒ今人此等ノ建築ヲ觀ル者ヲシテ皆當時ノ宗教上ノ人心及ヒ習俗時態ヲ顧念スルヲ知ラシメハ、其之ヲ感稱スルヲ必ス是ノ如クノ甚シカラザルナリ、

若シ此意ヲ明カニセント欲セハ、試ニ想像セヨ、爰ニ二建築有ランニ、一ハ古代ノ物ニシテ其大半毀壞ニ就キ、一ハ近日ノ構造ニシテ金碧爛燦タリ、若シ一時ノ美觀ヲ以テ言フキハ、金碧ノ爛燦タル者、固ヨリ古代ノ遺構ニ勝サルト謂フ可キモ、夫ノ美學上ノ美ヲ以テ言フキハ、其毀壞セラル者ヲ金碧ノ爛燦タル者ニ比スレハ、迥ニ雅趣有リ、然ル所以ノ者ハ他無シ、近日ノ構造ニ係ル者ハ、吾人明ニ其旨趣ノ在ル所ヲ知ルヲ以テ、之

ヲ望見スルニ於テ作者ノ一己ノ意思ヲ想像ス可キ無シ、是ヲ以テ美ハ則チ美ナリト雖モ、自ラ俗態有ルヲ免レス、若夫レ古代ノ建築ハ大半殘壞ニ就キ、且ツ多ク年所ヲ經ルヲ以テ、吾人ノ之ヲ建築セシ所以ノ當時ノ旨趣ヲ明知セザルヲ以テ、其制度規模皆作者ノ腦中ヨリ湧キ出テシト爲ス、此レ其自ラ雅趣ヲ發スル所以ナリ、之ヲ例ヘハ羅馬ノ「コロゼ」殿ノ如キモ、當時ニ在リテハ十萬人ノ男女來リ聚リテ、其猛士勇卒ノ海陸軍戲ヲ爲スヲ觀タリシガ、現今ニ至リテハ、大半殘壞シテ僅ニ其遺構ヲ見ルノミ、然レヒ人ノ之ヲ觀ル者、自ラ感情ヲ發セサル莫シ、思フニ當時ノ人ハ、特ニ其海陸軍戲ノ樂ム可キヲ見テ、其殿屋ノ制ハ必スシモ之ヲ感セザリシナラン、然ル所以ノ者ハ他無シ、作者ノ意思ヲ省察スルト否ラサルトノ別ナリ、

夫レ然リ、是故ニ現今ノ建築スル所ハ、賞鑒家往々過酷ノ論ヲ爲シテ輒



子曰、此建築巧妙ナリト雖モ、甲ノ部是ノ如シ、此レ其短キ處ナリ、乙ノ部敏ノ如シ、此レ其疵病ナリト、其之ヲ感スルコト大ニ古代ノ遺構ヲ見ルカ如クナラス、怪ムコト無キナリ、

近代ノ建築ハ人其實際ノ利便ヲ先ニシテ、作者ノ意思ハ之ヲ後ニス、古代ノ遺構ハ正ニ之ト反シテ、人其實際ノ利便ヲ外ニシテ、唯作者ノ意思ヲ是レ視レバナリ、

然リト雖モ予ノ此論ニ由リテ、近代ノ建築ハ初ヨリ少シモ雅致有ルコト無ク、即チ作者モ亦曾テ意ヲ此ニ留メスト爲ス所ハ、大謬ナリ、蓋シ其構築スルヤ首トシテ其構築ノ旨意ニ合スルコトヲ求テ、以テ實際ノ利益ヲ圖ルニ論無シト雖モ、其間又自ラ別ニ理趣ノ在ル有リ、此レ乃チ建築ニ係ル美學上ノ觀美ヲ爲ス所以ナリ、但建築ニ係リテハ作者盡ク自家ノ感情ヲ發スルコト能ハズシテ、必ス當時ノ人心ノ向フ所ト、並ニ實益ノ在

ル所トヲ求メテ、之ヲ得サル可ラス、此レ其美學上ノ觀美ニ專ラナルコト能ハサル所以ナリ、之ヲ要スルニ建築家ノ其巧妙ヲ發スルハ、特ニ其構築ノ間ニ於テ、善ク夫ノ便利ト鞏固トヲ合シテ相離レサラシムルニ在リテ、美麗ノ觀ハ隨テ發スル者ナリ、

然リト雖モ、建築モ亦藝術中ノ一途ナリ、既ニ藝術ノ一途ナルトハ、固ヨリ意趣生氣ノ觀ル可キ無シト爲サス、是ヲ以テ今一建築ヲ觀ルトハ、必ス一意思ノ其間ニ隱然タル有ルヲ見ル、故ニ其狀貌温和ノ態有ルニ非サレハ、必ス剛烈ノ狀有リ、婉麗ノ態有ルニ非サレハ、必峻潔ノ狀有リ、沈鬱ノ態有ルニ非サレハ、必輕爽ノ狀有リ、博大ノ態有ルニ非サレハ、必豐富ノ狀有リ、凡ソ此レ皆所謂建築上ノ意趣ナリ、但他ノ藝術ニ在リテハ、凡ソ意趣ハ皆作者ノ獨リ專ラ造作スル所ナリト雖モ、建築ニ在リテハ、作者先ツ風土人情地形材料及ヒ其構築ノ旨趣等ニ順テ、之レカ樣式ヲ

制シテ然後意趣其間ヨリ發出ス、是其異ナル所以ナリ、然リト雖モ、所謂建築ノ意趣ナル者ハ、果シテ何ニ由リテ發出スル乎、曰ク此レ知リ難カラサルナリ、其制度ノ各部及ヒ特ニ其以テ建築スル所ノ諸線ヲ觀ルキハ、之ヲ知ル可シ、之ヲ例ヘハ水平線ノ延長ナル者ニ依リテ構築スルキハ、其形貌自然ニ壯固嚴整ノ氣象ヲ發ス、眞直線ニ依リテ構築スルキハ、其形貌自然ニ果決剛猛發揚竦立ノ氣象ヲ發ス、空隙ノ處寡少ナルキハ、構築稠密ナルヲ以テ、其形貌自然ニ謹恪ニシテ且悲慘ノ氣象ヲ發ス、空隙ノ處多キキハ、構築豁敞ナルヲ以テ、其形貌自然ニ磊落爽快ノ氣象ヲ發ス、加之材料ノ性質及ヒ其整列ノ様式ニ因リ、又外面ニ於テ彫飾ヲ施シルト否ラサルトニ因リ、其形貌ヲシテ或ハ美麗ナラシメ、或ハ峭潔ナラシム、此其梗概ナリ、是故ニ建築ノ大家ト稱ス可キ者ハ他ニ非ス、唯善ク此レ等ノ道理ヲ理會シ、構築スル所有ルニ臨テ、明ニ

其求ムル所ノ目的ト其用フル所ノ手段トヲ知リテ、必ス其レヲシテ相適合セシムルニ在リ、此ノ如クスルキハ、其建築自ラ一定ノ氣象有リテ、裁緝ノ巧隱然其間ニ發見スヘキナリ、

以上論スル所ニ由リテ之ヲ考フレハ、建築ナル者ハ之ヲ美學上ノ點ヨリ論スルモ、其勢必ス夫ノ幾何學等數學重學及ヒ論理學ノ諸科ニ依準シテ、以テ其道理ニ悖ラサルヲ求メサルヲ得ス、是ヲ以テ美麗ノ觀ト意趣トハ、到底之ヲ第二著ニ置カサル可ラス、此レ其自餘ノ諸藝ト相異ナル所以ナリ、

顧フニ夫ノ建築ノ一術ニ係リテ、天象ノ說ヲ執リテ空妙高虛ノ論ヲ發セシ者ハ、皆往々建築ヲ以テ造化主宰ノ功ニ摸擬スルニ起ルト爲セシカ如キハ、是ニ至リテ益々其繆戾ヲ見ル、何トナレハ此一術ハ他ノ諸藝ニ比スルキハ、實益ヲ求ムルハ其目的トスル所ノ最ニシテ、作者ノ感情

意趣ヲ發スルコトハ、他ノ諸藝ニ比シテ大ニ相下ル所有リ、夫レ然リ、豈ニ復タ外貌ノ觀ニ馳シテ、夫造化ノ迹ヲ學フニ暇有ラゾ哉、凡ソ建築ノ作者ハ萬事ヲ閃キ、先ツ明ニ其構築ノ目的ヲ考ヘ、寺院ハ必ス寺院ノ法度ヲ守リ、宮殿ハ必ス宮殿ノ法度ヲ守リ、卑々トシテ敢テ自ラ肆ニセサルモ、其功成ルニ及ヒテ、自然ニ美麗ノ觀ヲ發スルヤ疑無シ、若シ然ラスシテ、初ヨリ其構築ノ目的ヲ問ハス、其實際ノ利便ヲ論シテ、一意ニ藻繪彫琢ノ美麗ヲ事トシテ、自ラ法度ノ外ニ馳スルモ、其自ラ視テ美ト爲ス所ハ、適々以テ取類ヲ爲スニ足ル、蓋シ天下最モ人ノ厭忌心ヲ起ス者ハ、建築ノ其目的ヲ失ヒシ者ヨリ甚シキハ莫シ、昔モリエールブリュイエールノ文學ヲ以テ世ニ鳴ルニ方リ、淺學ノ徒文章ノ美觀ノ在ル所ヲ知ラス、作ル所有ル毎ニ徒ニ字句ヲ偉麗ニシ、章法ヲ奇崛ニスルコトヲ求メテ、全文ノ旨義ハ曾テ之ヲ問ハス、自ラ以テ得タリト爲セリ、建築ノ其目

的ヲ失フテ徒ニ美觀ヲ求ムル者ハ、亦猶ホ此ノ如シ、甚タ憫笑ス可キナリ、豈ニ慎戒シザランヤ、

此ニ由リテ之ヲ觀レハ、人ノ目ヲ怡ハシムルコトハ、建築ニ在リテハ畢竟第二著ニ在リ、即チ古來大家種々ノ構架法ヲ創思セシ者ノ如キモ、當時自家ノ意ハ初ヨリ美麗ノ觀ヲ求ムルニ在ラスシテ、專ラ實際ノ利益ヲ獲ルニ在リ、故ニ其大ニ美學上ノ譽ヲ發スルコトヲ得タルハ、既ニ成ルノ後ニ在リ、我カ中古ノ大土功ノ如キ、太抵皆然ラサル莫シ、

夫レ我カ中古ノ建築ノ美ヲ爲ス所以ノ者ハ、他ニ非ス、善ク其構架ノ目的ヲ守リテ敢テ失ハス、又善ク材料ノ性質ヲ度リ、善ク風土ノ寒温ヲ測リ、以テ實際ノ便ヲ求メタルヲ以テナリ、予故ニ願ハクハ現今ノ建築家モ亦意ヲ此ニ用ヒテ邪路ニ陷サラザランコトヲ、

現今建築ノ術ニ於テ一種折衷法ト號スル者有リテ、專ラ希臘羅馬及ヒ

我カ中古ノ諸法ヲ雜取シテ之ヲ出ス、是ヲ以テ其建築スル所一定ノ旨趣無クシテ、人ヲシテ一見之ヲ厭倦セシム、他無シ、摸擬剽竊ノ病乃チ然ラシムルナリ、顧フニ現今此惡風ノ行ハル、所以ノ者ハ、職トシテ夫ノ博士家ノ舊規ヲ拘守シテ、當世ノ需用ニ應スルコト能ハサルニ之レ由ル、蓋シ博士家ノ徒狹隘ノ紀律ヲ以テ我カ作者ヲ束縛シテ、必ス之ヲシテ其意見ニ從ハシメント欲ス、此豈ニ現今開化ノ需用ナラン哉、現今ノ需用トスル所ハ他ニ在ラス、必ス一定ノ旨趣ニ由リ、以テ構築ノ目的ヲ定メ、人ヲシテ實際ノ便利ヲ得セシムルコト是ノミ、且ツ更ニ古代ト相異ナル所以ノ者一有リ、蓋シ方今學術ノ大ニ進鬧セシヨリ、建築ノ材料昔ニ比スレハ兩種ヲ増加セリ、即チ熟鐵ト鋼鐵ト是ナリ、蓋シ近代文物日ニ益々豊備ニ赴キ、人民大ニ繁殖セシヨリ、建築ノ制度モ亦隨テ益々博大ナラサルヲ得ス、而シテ幸ニ熟鐵ト鋼鐵トノ用相開ケ、以テ建

築家タル者優ニ此需用ニ應スルニ足ル、此又知ラサル可ラス、然リト雖モ是ノ如クニシテ建築ノ制度ヲ一變セント欲スルハ、必ス先ツ夫ノ博士家ノ陋見ヲ破リテ、之レカ束縛ヲ脱セザル可ラス、顧フニ世ノ藝術家苟モ偏見ヲ執ルコト無クシテ、平心以テ之ヲ察スルハ、曩日ノ建築ヲ觀ルニ於テ、必ス將ニ曰ハントス、嗚呼曩日ノ建築ノ制度ノ此ノ如クナル所以ノ者ハ、他無シ、其用フル所ノ材料ノ性質自ラ然ラシムルナリ、然レハ則チ我モ亦現今有ル所ノ材料ニ隨テ少シク制度ヲ變改シテ可ナリト、果シテ是ニ慮及スルハ、夫ノ博士家ノ陋見ヲ破ルニ於テ何カ有ラン、

夫レ熟鐵鋼鐵ノ二者ハ、曩時ノ建築ニ於テ絶ニテ之ヲ用フルコト無シ、故ニ今日ニ於テ之ヲ用フルハ、其勢制度ヲ一變シテ之レト相副ハシメサル可ラス、因テ人或ハ云フ、此二ノ者ハ建築ニ於テ終ニ用フ可ラスト、

此レ怪ムニ足ラス、何ツヤ、必ス曩時ノ制度ヲ守リテ失ハスシテ、其中ニ於テ此二者ヲ用ヒント欲スルキハ、其相適セサルヤ固ヨリ宜ナリ、但其ノ必ス曩日ノ制度ヲ守ラント欲スルハ、怪ム可キナリ、苟モ曩時ノ制度ヲ一變スルキハ、夫ノ熟鐵鋼鐵ノ二者ヲ用ヒテ、其建築ヲシテ堅牢ニシテ且ツ宏敞ナラシムルニ於テ、何ノ難キヲカ之レ有ラン、

予ノ玆ニ論スル所ハ、ウイオレールギョック氏ノ所見ト正ニ相同シ、而シテ以爲ラク百世不易ノ說ナリト、然レモ苟モ夫ノ博士家ノ徒、其偏見ヲ拘守シ、其狹隘ノ紀律ヲ迷取シテ、以テ我カ少年ノ子弟ヲ束縛スル間ハ、此改革ハ決シテ行フ可ラス、故ニ今日ノ尤モ急務トスル所ハ、我カ少年子弟ヲシテ博士家ノ言ニ従ハスシテ、必ス時世人情ノ同ク然ル所ニ隨テ以テ變易スル所有ラシムルニ在リ、嗚呼夫ノ博士家ノ徒ハ、永ク希臘羅馬及ヒ我カ中古ノ舊規ヲ顧戀シ、力ヲ極テ摸擬ヲ事トシテ以テ方今日

進ノ運ト相悖ラサント欲スル邪、何ツ其思ハサルノ甚キヤ、

○第三篇 彫刻

○第一章 象徴○彫刻術ニ於ケル象徴ノ効益○希臘種族ノ美  
貌○骨格○純美

人多ク云フ、凡ソ人目ヲ怡ハシムル藝術ノ中ニ就テ、建築術先ツ起リ、繪  
畫彫刻ノ二者ハ自然ニ其中ヨリ發出セリト、其所以ヲ詰ルキハ、輒チ曰  
ク建築ハ本ト神廟ノ爲メニシテ起レリ、是ニ於テ力ヲ極テ裝飾ノ美ヲ  
加ヘ、且ツ其梁棟若クハ墻壁ニ就テ種々ノ圖畫ヲ施シ、以テ神徳ヲ明ニ  
スルコトヲ求メサル可ラス、此レ乃チ上古ニ於テ彫刻繪畫ノ建築術中ニ  
包含セシ所以ナリ、設令ヒ此言ヲシテ果シテ信ナラシメハ、是レ建築ノ  
術未タ起ラサルノ前ニ當リテハ、彫刻ノ術モ亦徴ス可キ無キナリ、然ル  
ニ事實ニ據リテ考索スルニ、決シテ其然ラサルヲ見ル、何チ以テ之ヲ言  
フ、今上古載籍未タ有ラザル時ノ遺物ニ就テ搜檢スルニ、諸器具及ヒ特

八

ニ刀劍ノ屈、往々物形ヲ彫鑄セル有ルヲ見ル、此レハ則チ寺院神殿ノ建  
築未タ起ラサルノ前己ニ彫刻ノ術ノ萌生セシヲ知ルニ足ラズ乎、夫レ  
獸骨ノ扁平ナル者、若クハ石片ニ就テ彫鑄ノ巧ヲ施シテ、其圖形隱然ト  
シテ今猶ホ辨ス可キヲ見ルキハ、此レ當時ニ在リテハ、刀尖ノ頗ル深ク  
入リシヲ知ル可シ、然レハ則チ此ヲ以テ後世彫刻ノ濫觴ト爲スモ、少シ  
モ不可ナルコト無キナリ、

又エジプトノ古代ノ文字ニ就テ考フルモ亦復タ然リ、此レ蓋シ物形ニ象  
リテ以テ徴ト爲シ者ニシテ、文字ノ第一歩ト謂フモ可ナリ、而シテ今之  
ヲ觀ルニ、往々此等ノ文字ヲ石ニ刻セルニ、刀痕頗ル深ク入ルヲ見ル、若  
シ其文字ノ縁邊ニ就テ、更ニ刀ヲ入レ、然ル後其凸起セル處ヲ削リテ、稍  
ヤ圓ナラシムルトキハ、即チ後世ノ所謂「レリーフ」兩邊ヲ刻シテ圖形ヲ  
謂フチ成ス可シ、又其文字ノ中、或ハ石ノ外面ニ突起セシテ、裡面ニ於テ

隱起セルモノ有り、又近時テ一ブスニ於テ發見セル圖象有り、皆壁上ニ刻シテ周傍全ク削去スルヲ以テ、圖象高ク起リテ殆ント壁ニ貼附セル者ノ若シ、願フニ此ノ如クニシテ益々突起セシメテ、四面皆彫功ヲ施ストキハ、竟ニ以テ後世ノ彫像ヲ成ス可シ、然レハ則チ彫刻術ヲ以テ必ス建築術ノ中ニ包含セシト爲スノ説ハ、其纏妄タルヲ疑チ容レズ、凡ソ茲ニ云フ所ハ、畢竟彫刻術ノ起源ヲ論スルニ過キス、今其建築術ニ先チテ生シタルト、後レテ生シタルトヲ論セズ、其發起ノ始ニ於テ、何ノ狀ヲ爲セシカチ考索スルニ、何レノ邦ヲ問ハス、皆圖象ヲ形ハスニ由リテ始マリシチ見ル、蓋シ其中或ハ文字ヲ刻セシ者有り、或ハ神像ヲ刻セシ者有リト雖モ、之ヲ要スルニ皆物象ヲ形ハスニ過キス、即チエジト古代ノ文字ノ如キハ、皆物ノ形狀ニ象リテ成ル所ニシテ、又其崇奉スル所ノ太陽ノ神、光明ノ神、晦夜ノ神ノ如キハ、皆一種ノ形貌ヲ以テ之レチ形セリ、而

シテ彫刻ノ巧ハ正ニ之ヲ圖スルニ在リキ、蓋シ宗教ノ起ルヤ、初ハ專ラ禽獸草木ノ類ヲ以テ神ト爲シ、其後ニ至リ天象及ヒ雲物ヲ尊ヒテ神ト爲セリ、夫レ禽獸草木ハ一定ノ形ノ見ル可キ有り、天象雲物ニ至リテハ、多クハ光景ニ過キサルヲ以テ、意想ニ由リテ一種ノ圖象ヲ定ムルノ外他策無キナリ、

上古ノ時天象雲物ヲ圖セシコトハ、諸國皆然リ、但人ノ氣象其族類ニ由リテ各々相異ナルヲ以テ、圖象モ亦相同シカラス、夫レ圖象相同シカラスト雖モ、然レモ其旨趣ハ相同シ、何チ以テ之ヲ言フ、曰ク其初ヤ禽獸草木ノ類ヲ尊ヒテ神ト爲シテ其形ヲ圖シ、若クハ他ノ無形ノ物ヲ想像シテ、之ヲ尊ヒテ神ト爲シ、其後星辰水火及ヒ他ノ雲物ヲ尊ヒテ神ト爲シテ而シテ凡ソ尊崇スル所有ル毎ニ、必ス一種ノ形ヲ定テ之ヲ木石ニ刻シテ、以テ其崇敬ノ意ヲ寄ス、此ノ如キ者ハ上古ノ民皆同シ、但其無形ノ物

ヲ想像シテ神ト爲スニ方リテハ、既ニ形ノ見ル可キナキヲ以テ、其之ヲ畏ル、ト窮極無カリシモ、日月水火ヲ拜スルニ及ヒテハ然ラズ、唯其人  
生ニ功有ルヲ見テ其德ヲ仰キ、斯ニ以テ想像シテ以爲ラク日月ノ下土  
ヲ照スヤ、水ノ物ヲ濕ホスヤ、火ノ物ヲ蒸クヤ、其勢力實ニ測ル可ラサル  
者有リ、此レ皆其中神力有ルニ由リテ然リト、此ノ如キノ類ハ、諸國皆然  
ラサル莫シ、

相傳フ、希臘羅甸ノ民ノ如キモ、其初ニ在リテハ巖石ヲ尊ヒテ神ト爲  
シ、祭奠甚タ恪メリト、今ポーザニヤースノ書ニ據リテ考フルキハ、希  
臘宗教ノ濫觴ニ係ル者、歴々徴ス可シ、又近時レチーメダール氏著ハ  
ス所ノ希臘宗教ノ起源、及ヒ古昔ノ藝術ニ係ル神代記ノ二書ヲ考フ  
ルキハ、予ノ言フ所ト正ニ相符スルヲ見ル可シ、  
顧フニ印度人ノ三面神有リ、千手千足ノ神有ルカ如キモ、亦想像ヲ以テ

形ヲ圖スルニ起レリ、蓋シ其三面有リ、千手千足有ルハ、他無シ、其神ノ智  
力及ヒ體力ノ迥ニ人ニ超越スルヲ見ハスカ爲ニ過キズ、又エジプト人  
ハ嘗テ其崇奉スル所ノ諸神ニ就テ、皆其頭ヲ禽獸ニ擬シ、此ニ因リテ明  
カニ其諸神ノ德ヲ辨別セリ、之ヲ例ヘハ獅子ノ頭ヲ以テ圖スル神ハ、專  
ラ勇猛ノ德ヲ以テ勝チ、象ノ頭ヲ以テ圖スル神ハ、專ラ寛洪ノ德ヲ以テ  
勝ツ等ノ如キ、是レナリ、又エジプト人ノ動モスレハ巨大ノ塑像ヲ作りテ、  
之ヲ廟中ニ安置セシハ、他無シ、亦其神ノ威德ノ廣大ナルヲ示スカ爲  
メナリ、

凡ソ此ノ如キノ類ハ、皆彫刻術ノ其巧ヲ施ス所ナルヲ以テ、之ヲ指シテ  
此術ノ濫觴ト爲スモ不可ナルナキナリ、  
又アシリイ人ノ彫刻ハ、其宗旨ノ意ヲ寓スルヲ、エジプト人ノ甚キカ如ク  
ナラス、然レモ亦往々其圖象ヲ禽獸ノ形ニ假ル者有リ、但其エジプト人ノ



彫刻ト異ナル所以ノ者ハエジプト人ハ人形ニ禽獸ノ頭ヲ施シテ以テ常ト爲シ、アシリー人ハ禽獸ノ形ニ人頭ヲ施シテ以テ常ト爲ス、此レ其異ナリ、

蓋シニ様ノ式ハ希臘人或ハ並ニ之ヲ用ヒシコ有リ、即チ其「パン」シレ「ソス」「フネ」ソス「サントール」共ニ神等ノ神像ノ如キ、皆是レナリ、然レニ希臘ニ在リテハ、獸身人首ノ神ハ畢竟一種特異ノ意思ヲ寓スル者ニシテ、其數甚寡シ、餘ハ皆人身獸首ノ神ナリ、但其獸身人首タルト人身獸首タルトヲ論ビス、之ヲ要スルニ皆之ヲ以テ神ノ威徳ヲ表スルニ過キス、又希臘初年ノ彫刻家ノ「ゼユース」神ノ圖ハ、之ニ羽翼ト火焰トヲ加ヘ「エレ」神ノ圖ハ孔雀ヲ添ヘ、「アテーチ」神ノ圖ハ、槍矛ヲ持シテ鷓鴣ニ騎リ、「エルメース」神ノ圖ハ、其足ニ羽翼ヲ傳ケ、又蝮蛇ノ交纏セラル者ヲ以テ杖ト爲サシムルカ如キモ、亦此ヲ以テ各々其神ニ想像スル所ノ諸徳

ヲ表スルニ過キス、而シテ彫刻ノ術此ニ由リテ益々進メリ、其後ニ至リテハ、希臘人其神ノ形ト其威徳トヲ分別シテ、復タ之ヲ同クセズ、是ニ於テ其彫刻術益々進闡ス、何トナレハ禽獸ノ形ヲ以テ神徳ヲ表スルキハ、此ヲ以テ一目ニ瞭ス可クシテ、復タ他ニ巧ヲ求ムルコトヲ須ヒス、既ニ神ノ形ト其威徳トヲ分別シテ、復タ神ニ附スルニ禽獸ノ形ヲ以テセサルキハ、其勢神ノ容貌及ヒ手足ノ間ニ於テ、其徳ヲ見ハサバ、爾ヲ求ラス、是ニ於テ平彫刻家相競フテ思ヲ運ラシ慮ヲ致シ、以テ其巧ヲ求ムルヲ要ス、蓋所謂神ハ一身ニシテ盡ク諸徳ヲ有スルニ非スシテ、各々一徳ニ長スルヲ以テ、彫刻家タル者ハ、畢竟其神像ニ於テ其長スル所ノ一徳ヲ見ハシテ足ル、

希臘彫刻家ノ漸次ニ顔貌骨格ヲ圖スルニ巧妙ナルヲ致セシハ、全ク茲ニ云フ所ノ原因ニ由リテ然リ、プラトン及ヒ其他同氏ノ説ヲ奉シテ、玄

妙高遠ノ論ヲ爲ス者、往々以爲ラク彫刻家ノ顔貌ノ美ヲ求ムル所以ノ者ハ、他無シ、天地間一種美麗ノ極致ナル者存スル有リテ、迥ニ實物ノ上ニ位ス、而シテ人々其生ヲ此ノ世ニ受ケタル前、皆此極致ト相接スルヲ得タリ、是ヲ以テ已ニ地ニ落ル後モ、心中自ラ此極致ナル者ヲ識認スル有リ、此レ乃チ人ノ觀美ヲ愛スル所以ナリ、即チ彫刻家ノ人ノ顔面身體ヲ圖シテ美觀ヲ求ムルモ、臨本ハ之レヲ實物ニ假ルニ非スシテ、實ハ之ヲ其心中想像スル所ノ極致ニ假ルナリト、殊ニ知ラス夫ノ彫刻家ハ初ヨリ美麗ノ極致ヲ求ムルニ意アルニ非スシテ、特ニ其圖スル所ノ神ニ就キテ、其長スル所ノ一德ヲ表スルヲ求ムルニ過キス、是ヲ以テ其神德素ヨリ猛烈ナルキハ、其顔貌ヲシテ亦猛烈ナラシメ、其神德素ヨリ和柔ナルキハ、其顔貌ヲシテ亦和柔ナラシム、但此レ等ノ諸德既ニ神德ニ屬スルヲ以テ、其勢之ヲ尋常人ト同視スルヲ得ス、是ヲ以テ猛烈ナル

者和柔ナル者、皆必ス迥ニ常人ノ顔貌ニ超越セシメザル可ラス、此レ乃チ夫ノ玄妙ノ說ヲ爲ス者ノ其迷ヲ致セシ所以ナリ、蓋シ希臘彫刻家ノ諸神ノ像ヲ彫刻スルヤ、先ツ其ノ長スル所ノ一德ヲ胸中ニ想像シ、其顔貌ヲ刻スルニ及ヒテ、之ヲ表スルニ適スル者ハ、力ヲ竭シテ之ヲ發揮シ、凡ソ之レニ反スル者ハ、意ヲ極メテ之ヲ芟除ス、是ヲ以テ猛烈ナル顔貌ハ、一處ノ和柔ナル痕迹ヲ留メス、和柔ナル顔貌ハ一處ノ猛烈ナル痕迹ヲ留メス、若シ又神ノ美貌ナル者ヲ刻スルキハ、徒ニ其顔貌ノ美麗ヲ極メスシテ、苟モ美麗ヲ損スルノ患有ル者ハ、一々皆掃ヒ去リテ、唯端麗ノ觀ヲ是レ求ム、顧フニプラトン家ノ說ヲ爲ス者ノ、夫ノ美麗ノ極致ヲ以テ言ヲ爲スハ、蓋シ彫刻家ノ美貌ヲ發揮スルヲ見テ、遂ニ此繆見ヲ發セシナラン、希臘彫刻家ノ美貌ヲ彫鑄スルニ於テ、此ノ如ク巧妙ナル所以ノ者ハ、更

ニ又一原因ノ在ル有リ、蓋シ希臘ノ種族ハ、大率皆端麗ニシテ醜陋ナル者有ルヲ鮮シ、而シテ其族痛シ他ノ種族ノ人ヲ輕蔑シテ、肯ヘテ與ニ婚ヲ交ヘサルヲ以テ、形體純粹ニシテ絶エテ異種ノ骨相ヲ雜フルヲ無シ、加之一切體軀ヲ勞動スル業作ハ、奴隸ノ族類ノ負擔スル所ニシテ、良家ノ子弟ハ常ニ軍務ノ事ニ服シ、及ヒ體操ヲ學習シテ以テ業ト爲ス、是ニ於テ筋骨益々鍊熟シテ軀幹極テ整齊ナルヲ致セリ、獨リ此ノミナラス、既ニ體操ニ従事スルヲ以テ、人々相共ニ裸體ヲ觀ルニ習ヒ、一舉手一投足並ニ起立坐臥ヨリ、一切人ノ身軀ニ係ル瑣細ノ變、皆幼時ヨリ之ヲ熟視シテ遺ス所無シ、是ヲ以テ彫刻家ノ如キモ、苟モ美男女ノ顔面身體ヲ彫鐫セント欲スルキハ、先ツ真人ヲ視テ以テ臨本ト爲シテ、身體ニ至リテハ自ラ之ヲ胸臆ニ取リテ欠乏スルヲ有ルヲ無シ、我カ近代ノ彫刻家ノ如キハ、其日々ニ見ル所ノ者、復タ古昔希臘人ノ端麗ナルカ如クナラ

ス、且又平常ノ人ノ裸體ヲ觀ルニ由無ク、或ハ之ヲ觀ルヲ得ルモ、畢竟一時ノ事ニ過キサルヲ以テ、深ク記憶シテ心ニ着クルノ暇無シ、此レ其美麗ノ貌ヲ作スニ於テ大ニ劣ル所以ナリ、希臘ノ俗是ノ如シ、故ニ人々美麗ノ貌ト端整ノ體トヲ觀ルニ習フテ、眉目口鼻ヨリ手足胸背ノ屬ニ至ルマテ、皆自然胸裡ニ着在シテ遺ス所無シ、此ニ由リテ之ヲ言ヘハ、希臘ノ彫刻家ハ皆其胸臆中ニ於テ美男女ノ成像ヲ蓄フト謂フモ可ナリ、彼レ既ニ胸中ニ美男女ノ成像ヲ蓄フ、是ヲ以テ彫刻スル所有ラント欲スルキハ、直チニ其成像ヲ以テ樣式ト爲シ、眉目口鼻皆從フテ法ヲ取り、然ル後其ヲシテ或ハ凝立セル狀ヲ爲サシメ、或ハ俯伏セル態ヲ爲サシメ、好ニ隨テ形態ヲ作り、其筋骨皮肉ノ縮張ヨリ生スル諸種ノ變化ノ如キモ、亦意ニ任セテ之ヲ出ス、是ヲ以テ其心思ヲ勞スルヲ、近代ノ人ニ半ニシテ功ハ則チ之ニ過ク、

此ニ由リテ之ヲ觀レハ、希臘彫刻家ノ其名作ヲ爲シシハ、其源實ニ真美男女ヲ觀ルニ習フニ由ルト雖モ、人身諸種ノ位置ヨリ生スル諸變化ニ至リテハ、皆其記性ニ由リテ之ヲ出シリ、是ヲ以テ其作ス所ノ顔貌極テ清楚單簡ニシテ、一切蕪穢錯雜ノ處無ク、粹然至醇ニシテ天女ヲ見ルカ如ク、殆ント人寰中ノ物ニ非ス、是ニ於テ平理學幽微ノ言ヲ爲ス者、皆以爲ラク此ノ如キ美觀ハ臨木ヲ真人ニ求ムルモ、初ヨリ得可キノ理無シ、故ニ必ス夫ノ極致ノ理ヲ求メテ以テ臨木ト爲シテ、後始テ完粹ノ極ニ到ル可キナリト、

方今我カ博士家ノ徒ノ藝術ニ於ケル、其議論正ニフラトン家ノ理學ニ依傍シテ以テ基ト爲スニ過キス、其意以爲ラク人ノ骨相ナル者ハ萬種ナリト雖モ、其極致ヲ求ムルモ、必ス形而上ニ溯リテ、始テ之ヲ得可シ、天下實物中ニ就テ求ムルモ、終ニ得可ラス、何トナレハ極致ナル者ハ

一德ヨリ發スル所ノ諸種ノ骨相容貌ヲ總括シテ、其尤モ完粹ナル者ヲ聚メテ成ル所ナレハナリ、是故ニ德ノ善惡ヲ論ヒス、各々皆固有ノ骨相アリ、但其極致ニ至リテハ、復タ實物中ノ有スル所ニ非スト、又曰ク人智ハ猶ホ鏡ノ如シ、物苟モ前ニ來ルモ、之ヲ認知スルコトヲ得、若シ一物モ前ニ現セサルモ、ハ、認知セント欲スルモ固ヨリ得可ラス、夫ノ希臘彫刻家ノ如キハ、美男女ノ像ヲ刻シテ其顔貌此ノ如ク端麗完粹ニシテ、殆ント人寰中ノ物ニ非ス、此レ豈ニ臨木ヲ真ノ男女ニ取リテ然ラン哉、唯知ラス識ラス、其心ノ天上ニ嚮フテ冲騰シ、夫ノ無形高妙ノ世界ニ游離シテ、所謂極致ナル者ト交接シ、其形貌ヲ視テ恍然トシテ心ニ感悟スル有リ、斯ニ始メテ刀ヲ運シテ其貌ヲ摸寫ス、此其作ノ此ノ如ク妖麗ニシテ且ツ清楚ナル所以ナリト、

又曰ク所謂骨相ノ極致ハ、既ニ無形ノ道理ナルヲ以テ目視ル可ラス、耳

聽ク可ラス、手足ヲ以テ觸ル可ラス、而シテ之ヲ認知スル他無シ、天ニ獲ル所ノ良智ノ存スル有ルヲ以テナリ、人唯良智アリ、是ヲ以テ能ク皮肉腥穢ノ域ヲ脱シテ、夫ノ高妙清粹ノ骨相ト相接スルヲ得、之ヲ譬ヘハ家屋ニ窓牖有リテ、燈燭ノ明此レニ由リテ外ニ映射シテ、屋中ノ人ヲシテ外物ヲ見ルヲ得シムルカ如キナリ故ニ若シ良智無キハ、其日常見ル所ハ、畢竟皮肉ヲ被ル人體ニ過キサルヲ以テ、一時之ヲ視ルハ婉麗完美ナルカ如シト雖モ、實ハ腥穢汚濁ノ肉塊ナルノミ、彫刻家日ニ之ヲ視ルモ、何ヲ以テ其粹然至純ノ美貌ヲ作ルヲ得ン哉ト、此言ヲ述ニ之ヲ聽クハ、空虛飄逸ニシテ頗ル喜フ可キカ如シト雖モ、細ニ之ヲ釋スルハ、虛夸浮華ニシテ一モ信據ス可キ無シ、且ツ此言ヲシテ果シテ信ナラシメハ、彫刻家タル者其名作ヲ做スニ於テ、絶エテ世ノ美男女ヲ視ルヲ要セサル可シ、然ラヌンバ此輩ノ言フ所、前後矛盾

ノ患有ルヲ免レヌ、何トナレハ彫刻家各皆良智有リテ、能ク無形容妙ノ世界ニ昇騰シテ、所謂極致ナル者ト相接スルヲ得ルハ、復タ何ノ皮肉腥穢ノ物ヲ視テ、以テ臨本ト爲スコヲ須ヒン、唯自ラ反求シテ其良智ニ咨詢シ、其想像中記憶スル所ノ極致ヲ考察シテ、直チニ此ヲ以テ臨本ト爲シテ足ルナリ、然ルニ實迹ニ由リテ之ヲ徵スルハ、決シテ然ラザルヲ見ル、何ソヤ、曰ク彫刻家ノ爲ス所ヲ見ルニ、苟モ作ル所有ラント欲スルハ、必ス皆夫ノ皮肉ヲ被ル眞ノ男女ヲ見テ、其尤モ美麗ナル者ヲ得テ以テ臨本ト爲シテ、方ニ始テ美貌ヲ寫スコヲ得、此レ其實迹ナリ決シテ理學家ノ言フ所ノ如キニ非サルナリ、凡ソ彫刻家皆其極致トスル所ノ典型有リ、但此極致ハ決シテ玄虚空妙ノ物ニ非スシテ、即チ其自ラ生存スル種族ノ同ク美トスル所ニ在リ、故ニ歐洲人ハ自ラ歐洲人ノ極致有リ、支那人ハ自ラ支那人ノ極致有リ、故

ニ支那人ノ如キハ、苟モ美婦人ノ貌ヲ描クキハ、兩眼ノ外ニ嚮フ處、尖長ニシテ且ツ微ク上ニ向ヒ、面廣クシテ且ツ方ナリ、又其顴骨突起シテ高ク聳ユ、是ノ如キ者ハ支那人ノ視テ美麗ノ極ト爲ス所ナリ、若夫レ黑人ノ如キハ、其毛髮縮シ、鼻梁低扁、兩唇突起ヲ以テ美麗ノ極致ト爲ス可シ、顧フニ此ノ如キ者ハ、皆美麗ノ觀ニ於テ固ヨリ得タリト爲サス、獨リ希臘人ハ迥ニ此ト異ニシテ、其所謂美ハ眞ニ端莊完粹ニシテ、人ヲシテ遍ク之ヲ喜ヒテ異議ヲ容ル、一無カラシム、然レ此レ決シテ別ニ奇怪ノ原由有ルニ非ス、唯其種族ノ人一種天幸ヲ獲テ、骨相大率端整ニシテ、大ニ支那人黑人ノ比ニ非サルヲ以テノ故ノミ、

此ニ由リテ之ヲ觀レハ、藝術家ノ美麗ノ觀ニ於テ法則ヲ取ルコトハ、必ス其國人ノ同ク美トスル所ニ在リ、但其人嘗テ游テ他邦ニ在リテ、其邦俗ノ同ク美トスル所ヲ習觀セシコト有ルカ、若クハ美麗ノ觀ニ於テ別ニ教

ヲ承クル所有ルハ然ラス、此ノ時ヤ、其人ノ胸中ニ一種ノ典型有リテ、其國人ノ同ク美トスル所ト復タ其骨相ヲ同クセス、

嘗テ之ヲ論スル如ク、蓋シ骨相ノ典型ナル者ハ、他ニ非ス、各人ニ在リテ一種專ラ勢力ヲ有スル意思アルハ、必ス此意思ト相稱フ所ノ骨相若干有リ、此レ自然ノ勢ナリ、是ニ於テ此若干ノ骨相ヲ聚メテ、其粹然タル者ヲ擇ムハ、以テ此種ノ意思ニ係ル骨相ヲ想像スルコトヲ得可シ、此レ乃チ骨相ノ典型ナリ、蓋シ人各々意思有ラサルコト無シ、而シテ苟モ意思有ルハ、幾分之ヲ顔面ニ見ハスコトヲ得、之ヲ例ヘハ人ノ忿怒スルカ如キ、其人ノ容貌如何ニ柔和ナルモ、顔色自ラ畏ル可キノ狀無キコト能ハス、人ノ喜悅スルカ如キ、其人如何ニ兇猛ナルモ、顔色自ラ温和ノ相無キコト能ハス、故ニ人若シ此理ヲ推シテ之ヲ考ヘ、苟モ柔和ノ意思ニ係ル骨相ノ極致ヲ得ント欲スルハ、顔面ヲ摸寫スルニ於テ、凡ソ柔和ノ意思ニ

交渉無キカ、若クハ之ヲ破敗ス可キ骨相ハ、皆之ヲ除キ、獨リ柔和ノ相表ノミ之ヲ留ムルハ、所謂極致乃チ得可キナリ、初ヨリ玄妙高虛ノ域ニ游離スルヲ須ヒサルナリ、

是故ニ骨相ノ極致ナル者ハ、畢竟專ラ道理ヲ推シテ得ル所ナルヲ以テ、絶ニテ世間ノ真人ト肖似スル所無シ、他無シ、世間ノ真人ハ如何ニ溫柔ナルモ、必ス幾分剛猛ナル處無キヲ能ハス、如何ニ剛猛ナルモ、必ス幾分溫柔ナル處無キヲ能ハス、此レ乃チ人ノ至情ナリ、然ルチ彼ノ極致ハ溫柔ナルキハ純然温和ニシテ少シモ剛猛ノ氣象無ク、剛猛ナルキハ純然剛猛ニシテ、少シモ温和ノ氣象無シ、是ヲ以テ其形貌必ス極テ清楚單純ニシテ自ラ美麗ノ觀ヲ發スト雖モ、生氣意趣ニ至リテハ必ス欠乏スル有ルチ免レズ、他無シ、本ト唯事物ノ道理ヲ推シテ得ル所ニシテ、世上ノ真人ト迥ニ相異ナルカ故ナリ、

是故ニ彫刻家若シ是ノ如キ形貌ヲ求メント欲スルキハ、必ス希臘人ノ如ク平常美男女ヲ觀ルニ倣フテ、且ツ裸體ニ就テ筋肉皮骨ノ形況ヲ熟知スルニ非サレハ能ハス、是ノ如クナルキハ、己レ唯幾分ノ記憶力ニ由リテ、其平常熟知スル所ノ形貌ヲ發揮スルキハ、何ノ骨相ヲ論セズ、意ニ任セテ之ヲ作スヲ得可シ、

夫レ藝術家苟モ唯記憶力ニ因リテ、其平生見聞スル所ノ事ヲ摸寫シテ以テ名作ヲ得ルキハ、其事タル豈ニ甚タ易々ナラスヤ、夫レ彫刻ノ術ハ本ト人身解剖ノ學ト同シカラサルナリ、若シ人身解剖ノ學ト同キキハ、己レ幾分ノ記憶力有リテ、且ツ屢々人體ヲ剖分シ、甲部ノ運營過張ナルキハ、必ス何ノ部ニ於テ反動ヲ發シ、乙部ノ運營過張ナルキハ、必ス何ノ部ニ於テ反動ヲ發スルノ理ヲ明スキハ、其ノ目的トスル所復タ此ヨリ外ナル者有ルヲ無シ、

若夫レ藝術ニ至リテハ、其目的の復々此ノ如ク單簡ナラス、願フニ希臘ノ彫刻術ノ如キハ、近代ノ彫刻術ニ比スレハ、意趣ヲ發揮スルコト稍ヤ少キヲ以テ、其目的の隨フテ稍ヤ簡單ナリ、然レ此之ヲ解剖學ノ目的トスルハ、大ニ相逕庭スルコト有リ、何ソヤ、解剖學ニ在リテハ、專ラ人體筋骨神經ノ位置及ヒ縮張ノ理ヲ講スルヲ以テ、美麗ノ觀ハ固ヨリ問フ所ニ非ス、彫刻家ニ至リテハ、木ト形貌ノ端麗ヲ見ハスヲ以テ旨ト爲スカ故ニ、縱令ヒ一骨相ノ極致ヲ求ルモ、苟モ貌ノ不美ヲ致ス者ハ、皆之ヲ除カサル可ラス、要スルニ意思ハ必ス純一ニシテ無雜ナルベシ、而シテ全體ハ必ス活潑靈動ノ氣象有ルヲ要ス、是ノ二者相合シテ然ル後始テ謂テ彫刻ノ名作ト爲スヲ得可シ、故ニ曰ク藝術ノ目的ハ、復々解剖術ノ目的ノ簡單ナルカ如クナラスト、

夫レ彫刻家苟モ一神像若クハ一美男女ノ像ヲ刻シテ、必ス其意思ヲシ

テ純一ナラシメ、必ス其容貌ヲシテ活潑ナラシメント欲スルハ、獨リ記憶力ニ由リテ、平常ノ見ル所ヲ發揮スル而已ニテハ足ラス、必ス別ニ手段ノ在ル有リ、他無シ、藝術ノ作ト學術ノ作トハ、始ヨリ其目的ヲ同クセサルヲ以テナリ、

所謂別ニ手段ノ在ル有リトハ何ソヤ、曰ク設令ヒ彫刻家作ル所有ラント欲スルニ臨ミ、平常習見セシ所ノ諸骨相ニ就テ、撰擇シテ以テ臨本トナスモ、其生氣意趣ハ必ス己レノ腦裡ニ於テ之ヲ添補セサル可ラス、是レ猶ホ造化ノ土塊ヲ以テ人ヲ作ルカ如キナリ、土塊ハ誠ニ若干粒ノ聚レル者ニ過キスト雖モ、一旦性命ヲ得ルニ及ヒテハ、雜レルモ純ヲ成シ、頑ナル者モ靈ヲ成シテ、斯ニ以テ生人ヲ爲スコトヲ得、彫刻家ノ神人ノ像ヲ刻スルヤ、亦其胸中蓄フル所ノ諸骨相ヲ聚メテ、痛ク撰擇ヲ加ヘ、己レノ感情ヲ以テ之ヲ調和シ、咀嚼シテ之ヲ混融シ、然ル後一箇ノ形貌ヲ得、



果シテ然ルハ、意思必ス純一ニシテ、生氣必ス活潑ナルヲ疑ヒ無シ、若シ然ラスシテ、徒ニ記憶スル所ニ隨テ之ヲ作スハ、此レ猶ホ花枝ヲ整頓シテ之ヲ約束スルカ如シ、其色喜フ可キカ如シト雖モ、生氣ハ則チ絶エテ有ルヲ無シ、

然リト雖モ、所謂藝術家ノ意思ハ、勉強シテ之ヲ得可キニ非ス、其人一種物ヲ觀ルハ、情ニ富ミ、感慨ノ氣豐盛ニシテ、一タヒ作ル所有ラント欲スルハ、意思突如トシテ來リテ復タ過ム可ラス、此レ正ニ藝術家ノ藝術家タル所以ナリ、而シテ賞鑒家ノ作物ヲ觀ルヤ、一筆ノ痕一刀ノ迹、皆道理ニ由リテ之ヲ考ヘ、次序ヲ推シテ之ヲ察シ、以テ其作ノ高下優劣ヲ定ム、若夫レ作者自身ニ在リテハ然ラス、道理次序固ヨリ亦其間ハ所ナリト雖モ、決シテ此ノ二者ニ倚リテ輕重ヲ爲スニ非ス、唯一種想像感慨スル所存リテ、始テ其作ヲ做スヲ得、是レ此二人ノ者ノ相異ナル所以ナ

リ、世ノ賞鑒家皆云フ、希臘ノ彫刻ハ顔面ニ於テ往々意趣ヲ欠ク者有リ、特ニ神像ノ如キハ尤モ甚シ、其相表過嚴ニシテ、絶エテ靈動ノ様有ルヲ無シト、此レ洵ニ然リ、而シテ夫ノ美麗ノ極致ヲ以テ説キ爲ス者ハ、輒チ曰ク、希臘彫刻ノ此ノ如クナルハ怪ムニ足ラス、彼レ專ラ夫ノ純美ヲ發揮スルヲ求メテ、他念アルヲナシ、此其顔貌ノ靈活ノ氣象ヲ欠ク所以ナリト、願フニ此言ヤ、未タ以テ希臘ノ彫刻ヲ解釋スルニ足ラス、何トナレハ彼レ唯純美ヲ用ヒテ以テ解釋スル有ラント欲スト雖モ、此ノ一語モ亦畢竟解釋ヲ俟チテ始テ明ナル者ナレバナリ、蓋シ其所謂純美トハ、心中洞然開豁ニシテ一モ思惟スル所無ク、一モ願欲スル所無ク、喀然トシテ耦ヲ喪ヘルカ若キ者は是レナリ、凡ソ人苟モ情念有リ意思有ルハ、必ス之ヲ面ニ形ハシテ、斯ニ以テ筋肉ノ舒暢緊縮スルヲ致シテ、完粹ノ相表復タ得可ラス、極致ノ説キ爲ス者ノ意ハ、蓋シ此ニ在リ、

大凡ソ空虚玄妙ノ論ハ、予ノ一切取ラサル所ニシテ、尤モ之ヲ言フヲ喜バズ、然レモ議論ノ次序是ニ至ルヲ以テ、一タヒ之ヲ究ムルヲ得ン、蓋シ希臘人ノ道學ニ於ケルヤ、以爲ラク苟モ君子ト稱ス可キ者ハ、必スヤ事ニ臨ミテ動カズ、喜怒哀樂其心ヲ蕩スルコト無ク、平穩ナルヲ止水ノ如シ、此レ其貴シト爲ス所以ナリ、而シテ神ハ又適ニ人間ノ上ニ位スルヲ以テ其氣宇ノ高朗ニシテ且ツ澹寂ナルコト、又遠ク尋常ニ超過スト、是ヲ以テ彫刻家ノ如キモ、亦此說ヲ奉シテ、之ヲ其作物ノ間ニ發揮ス、此レ其彫像ノ太端麗ニシテ、或ハ意趣ニ乏キ所以ナリ、顧フニ氣宇ノ澹寂ナルヲ以テ、道學ノ極致ト爲スコトハ、獨希臘人ノミ然ルニ非ス、東方諸國ノ民ハ、其風俗開明ナル者ト鄙野ナル者トヲ論セス、大抵皆是ヲ以テ人物ノ高下ヲ爲ス、即チエビキール派ノ專ラ快樂ヲ以テ人生ノ目的ト爲シ、ゼノン派ノ專ラ苦行ヲ以テ人生ノ目的ト爲スカ如キハ、其說水炭膏ナ

ラスト雖モ、其極處ニ至リテハ全ク相同シ、蓋シエビキール派ノ學士ハ、此極處ヲ名ケテ「アタラキシ」ト曰ヒ、ゼノン派ノ學士ハ之ヲ名ケテ「アパチ」ト曰フ「アタラキシ」トハ不動ノ義ニシテ、「アパチ」トハ無欲ノ義ナリ、夫レ喜怒哀樂ノ情ヲ以テ君子ノ宜ク存ス可ラサル所ト爲スルハ、神明ノ像ヲ作ルニ於テ、一切ノ情念ヲ芟除シテ、唯澹泊空寂ノ相貌ヲ是レ求ムルハ、亦宜ナラス乎、

且ツ夫レ希臘人ノ其彫像ニ於テ、專ラ情念ノ相貌ヲ、除テ之ヲ留メサル所以ノ者ハ、其術ノ本ト目的ト爲シ所以ヲ考フルモ、亦之ヲ得可キナリ、何ツヤ夫レ彫刻ノ起ル本ト神像ヲ鑄ルニ始マレリ、而シテ其神像ヲ鑄ルヤ、專ラ宗教ノ說ニ依リ、一種ノ象徴ヲ定メテ以テ神ノ一德ヲ著ハスコトヲ求ム、此レ其彫像ノ澹泊空寂ノ觀ヲ免レサル所以ナリ、何トナレハ神ノ一德ヲ著ハサント欲シテ、先ツ一種ノ象徴ヲ求ム、是ニ於テ乎一

舉手、一投足、一俯一仰、皆深遠ノ寓意有ラサルヲ莫シ、而シテ此レ等ノ體容ハ、既ニ神ニ屬スルヲ以テ、復々尋常人ノ一時手ヲ舉ケ足ヲ投シ、頭ヲ俯シ、面ヲ仰クカ如クナラスシテ、必ス此ヲ以テ其神ノ司ル所ノ永遠不朽ノ職務ヲ示サ、ル可ラス、若シ此事ヲ徴シント欲セハ、試ニ希臘、パソテオン寺ニ往テ觀ヨ、其彫スル所ノ神各々一職ヲ司リ、相共ニ力ヲ協セテ以テ森羅萬象ヲ整理シ、以テ天地江海ヲ維持シテ、之ヲシテ墮壞セサラシムルノ意ヲ見ル、是ヲ以テ其諸神ノ相異ナル處ハ、獨リ司ル所ノ職ノ相異ナル處ニ存スルノミニシテ、容貌相表ニ至リテ一モ相異ナル無シ、

此ニ由リテ之ヲ觀レハ、希臘彫刻ノ神像ヲ作ルヤ、初ヨリ意ヲ生氣意趣ニ留メスシテ、唯其容貌ノ端嚴ナルヲ是レ求ムルノミ、然ルヲ理學士ノ徒、夫ノ純美ノ說ヲ爲シテ、強テ之ヲ解シント欲スルハ、特ニ此ヲ以テ

徒ラニ自ラ勞スルノミナラス、亦且ツ人ヲ欺キ、自ラ欺クノ弊ヲ免レス、豈ニ甚憫レム可ラス乎、

○第二章 希臘彫像ニ於ケル意趣 ○博士家ノ陋見 ○古昔彫像ノ長處ハ何處ニ在ル乎 ○近代ノ彫刻家何ヲ脩メテ以テ古昔ノ彫刻家ニ勝ルヲ得ル乎、

希臘彫刻家ノ專ラ狀貌ノ端嚴美麗ヲ求メテ、略ホ心ヲ意趣生氣ニ留メサリシハ、特ニ其神像ヲ作ル時ニ在リ、自餘ノ作ニ至リテハ、頗ル生氣意趣ノ觀ル可キ有ルヲ見ル、顧フニ是ニ察シスシテ、必ス希臘人ヲ以テ夫ノ純美ノ觀ヲ求ムルニ過キスト爲スハ、實ニ疎繆ノ甚シト謂フ可シ、請フ之ヲ論シ、

希臘神像ハ本ト其神ノ司ル所ノ職ヲ見ハスヲ目的ト爲スヲ以テ、其勢專ラ夫ノ象徴ヲ著ハスノ法ニ依ラサル可ラス、若夫レ尋常人物ヲ刻ス

ルニ及ヒテハ、初ヨリ象徴ヲ著ハスヲ須ヒス、是ヲ以テ希臘彫刻家ト雖モ、頗ル狀貌ノ間ニ於テ意趣情念ヲ發揮スルヲ求メリ、今其此ノ如キ者ヲ觀ルニ、或ハ手足ノ容若クハ眉目ノ貌各々一ナラズシテ、其逢フ所ノ境界ト並ニ心中蓄フル所ノ情意トテ、往々頗ル明識スルヲ得可シ、此レヲ以テ夫ノ一概ニ象徴ノ說ヲ執リ極致ノ言ヲ爲ス者ノ繆妄ヲ證ス可キナリ、即チヒタゴールトレギヨームノ刻セル覺者ノ像、プロタゴラーニスノ刻セルフィロクテートノ像、ミロンノ刻セルデスコポールノ像、スロバースノ刻セルニオビードノ群像ノ像、クレジラーニスノ刻セル重傷者ノ像、フロランヌノ刻セル衆力士ノ像、シラニヨンノ刻セルジュカストノ將ニ死シントスルノ像、ステニースノ刻セルギョトレフスノ矢ニ中リテマトロンヌノ涕ヲ垂レテ哀シムノ像、エビゴノースノ刻セル童子ノ其母ノ屍ヲ哀撫セル像等ノ如キハ、皆狀貌體容ノ間往々生意情

思ノ掬ス可キ有ルヲ覺ユ、又プリンスノ書ニ據リテ之ヲ考フルニ、羅馬人嘗テ希臘人ノ刻セルエルキルノ像ヲ其國都ニ徙セリ、ニルキルノ子シユースノ爲メニ燒カレテ幾ント死シトシテ、痛ク自ラ克責シテ苦痛ヲ忍ヘルノ意、滿面ニ形ハレシト云フ、

獨リ彫刻ノミナラズ、畫ニ至リテモ或ハ頗ル情念意思ヲ發シシ者有リシト云フ、今其畫幀ハ世ニ傳ハラスト雖モ、當時ノ學士ノ記載セシ所ニ由リテ考フルハ、往々之レヲ徵ス可シ、ウインケルコンノ言ニ據レハ、チモマシヨースノ描ケルメデーノ畫ノ如キハ、其顔色ヲ觀ルハ、メデーノ心中復讐ノ志ト子ヲ愛スルノ情ト交戦シテ自ラ決スルコト能ハザルノ意瞭然タリト云フ、又プリンスノ言ニ據ルニ、アリスチードノ描ケル兵丁ノ一都會ヲ攻陷シタル畫ハ、一嬰兒ノ創ヲ被リテ死ニ瀕セル母ノ乳房ニ向フテ匍匐セル圖ニシテ、其母ノ顔色ヲ察スル

ニ將ニ死セントスルモ、其兒ノ已レノ乳汁ヲ吮ヒ得ズシテ、誤テ鮮血ヲ飲ミテ自ラ害スルヲ恐ル、ノ狀有ルカ如シト云フ、又チモマジョースノ描ケルアジヤキスノ畫ハ、一見スルヒハ乍チアジヤキスノ深ク自ラ慚悔シテ、身ヲ容ル、ト能ハサルカ如キヲ見ルト云フ、蓋シアポニヨースドチヤンスノ此畫ヲ評セル言、今ニ傳ハレリ、曰ク苟モ賞鑒ノ眼有ル者、之ヲ觀ルヒハ皆アジヤキスノ自殺セント欲セシヲ知ル可シト、凡ソ此レ等ノ言ニ由リテ察スルヒハ、夫ノ專ラ純美ノ觀ヲ求ムルヲ以テ希臘ノ藝術ヲ評スル者ハ、其說ノ根據ナキヲ證スルニ足ル、然リト雖モ夫ノ博士家ノ徒モ亦之レヲ知ラサルニ非ス、但、其言ニ由レハ、凡ソ希臘藝術ノ貴尙ス可キハ、其初メ專ラ純美ノ極致ヲ求メシ時ニ在リ、意趣情思ヲ見ハセシ者ハ、多クハ其末年藝術ノ衰頽セシ時ノ事ナリ、否ラサレバ大家ノ作ト雖モ、一時誤リテ之ヲ爲セシニ過ギズ、固ヨリ

師法トス可キニ非スト、願フニ此論ノ如キハ、唯自家ノ僻見ヲ強辨スルニ過ギズシテ、實ハ何ノ意味有ルヲ無シ、且ツ生氣ヲ發揮シ、情意ヲ摸寫スルハ、凡ソ諸藝皆此ヲ以テ貴シト爲サル莫シ、獨リ彫刻ニ於テ必ズ澹泊空寂ノ觀ヲ以テ貴シト爲スハ、其說果シテ何ノ據有ル邪、願フニウイスコンテ一氏ノ如キハ、極テ希臘ノ藝術ヲ崇尙シ、又其彫刻家ノ中ニ就テハ、最モフィヂヤースヲ尊ヒテ之ヲ第一等ニ置クニ至レリ、然レヒ其言ニ曰ク、顔貌ニ於テ意趣ノ活潑ナルヲ形ハシ、及ヒ特ニ婦人ノ面ニ於テ、愛戀ノ情ヲ發揮スルノ一著ニ至リテハ、フィヂヤース動モスレハ他ノ彫刻家ニ及バズ、此レ其欠失ノ處ナリト、今博士家ノ徒ハウイスコンテ一ノ所謂欠失ヲ以テ、正ニ極致ト爲サント欲スルハ何ソヤ、予ヲ以テ之ヲ觀レハ、彫刻術ハ其用ナル所ノ材料ノ故ニ由リテ、夫ノ生意ヲ發揮スルニ於テ、固ヨリ他ノ諸藝術ノ如ク自ラ恣ニスルヲ得ス、

然レモ此ヲ以テ彫刻術ハ一切生意ヲ發揮スルヲ禁スト曰フキハ、大謬ナリ、且ツ博士家ノ輩固シ其極致ノ説ヲ執リ、之レカ根基ヲ得ント欲シテ、因リテプラトンノ理學ヲ以テ旨歸ト爲シ、遂ニ希臘ノ彫刻ヲ以テ夫ノ極致ノ模範ト爲ス、然レモ細ニ事實ニ就テ點檢スルキハ、希臘ノ彫刻家ト雖モ、必ズシモ專ラ美麗ノ觀ヲ求ルヲ、博士家ノ言フ所ノ如クナラス、此ニ由リテ之ヲ言ヘハ、博士家ノ徒ハ自家ノ僻見ヲ主張スルカ爲メニ、古昔ノ藝術ヲ戕賊シテ、強テ之ヲシテ己レノ範圍ニ入ラシムル者ト謂フ可シ、請フ更ニ此事ヲ暢言スルヲ得ゾ、

蓋シ希臘人ノ其神像ヲ刻スルカ爲メニ一種ノ象徵ヲ見ハスヲ求メシハ、特ニ其初年ノ事ニシテ、一旦諸神ノ像己ニ成リ、某神ハ某職ヲ司ルヲ以テ必ズ甲ノ象徵有ラザル可ラズ、某神ハ某職ヲ司ルヲ以テ乙ノ象徵有ラザル可ラスト、是ノ如クニシテ諸神ノ形貌一定シテ復タ動かス

可ラス、是ヲ以テ其後ニ及ビテハ、作者苟モ才能ヲ負フテ前人ノ足跡ニ循フヲ喜ハザル者ハ、皆漸次ニ神像ヲ刻スルヲ止メテ、他ノ手段ヲ求ムルニ至レリ、而シテ此ノ如キ者ハ獨リ彫刻ニ於テ然ルニ非ス、即チ詩ノ如キモ、初メハ專ラ「エポペ」希臘神代ノ英雄ノ事ヲ作り、又院劇ノ詩ノ如キハ、專ラ因果應報ノ理ヲ以テ大體ト爲シ、各齣ノ節目ヲシテ皆之ト相稱ハシム、是ヲ以テ或ハ人情ニ近カラザルノ弊有ルヲ免レズ、其後ニ及ヒテハ、詩人復タ神代記ヲ以テ題目ト爲サズシテ、尋常ノ人物ヲ演シ、特ニ院劇ノ詩ハ人情ヲ摸寫スルヲ主トスルニ至レリ、此ノ如キ者ハ蓋シ藝術自然ノ沿革ナリ、

顧フニ希臘初年ノ彫刻家ノ神像ヲ作り一種ノ象徵ヲ定メテ以テ神ノ一德ヲ形ハシ、專ラ完粹淨潔ノ觀ヲ求メシハ、亦其長處ニ非ズト爲サズ、獨リ奈何シ、是ノ如キ藝術ハ、本ト事理ノ自然ニ合セス、且ツ其區域太

タ狹隘ナルヲ以テ、作者相繼テ之ヲ祖述シ、一旦大ニ行ハル、時ハ、繼ギ  
 起ル者復タ手ヲ着クル所無シ、故ニ若シ首ヲ屈シ卑々トシテ前人ノ業  
 ナ蹈襲スルニ非サレハ、去リテ路ヲ他ニ問ハザルヲ得ス、此モ亦自然ノ  
 勢ナリ、然リト雖モ人若シ希臘彫刻術ノ沿革ヲ以テ、現ニ一々茲ニ云フ  
 所ノ如クニシテ歩ヲ進メシト爲スルハ、亦實述ト違フヲ免レズ、初ハ  
 神像ヲ刻スルノ一途專ラ行ハレ、フィヂヤースニ至リテ其盛ヲ極メ、繼ギ  
 起ル者皆一齊ニ其塗轍ヲ改メテ、專ラ人情ニ合スルヲ求メシト思フ  
 キハ未ダ必スシモ然ラス、凡ソ物ノ運轉ハ決シテ此ノ如クノ截然タル  
 者ニ非ス、即チ希臘彫刻ノ沿革ノ如キモ、亦判然タル二期ヲ以テ之ヲ論  
 ス可ラス、フィヂヤース以後ノ作者ハ洵ニ皆意趣生氣ヲ求メシト雖モ、意  
 趣ノ一途ハ其以前ニ在リテモ、絶エテ之レ無カリシニ非ス、今之ヲ徴セ  
 ント欲セハ、テゼー寺ノ裝飾ヲ觀ルニ若クハ莫シ、其梁楹及ヒ壁上ニ鑄

リタル諸作、固ヨリエジーンズノ寺ノ彫像ノ精麗ナルカ如クナラズト  
 雖モ、若シ生氣ノ靈活ナルヲ以テ言フキハ、遠ク相勝レル者有リ、予故ニ  
 意趣ヲ求ムルコトハ、初年ニ在リテモ間々之レ有リ、唯其益々盛ニ赴キシ  
 ハ當ニフィヂヤース以後ヲ以テ最ト爲ス可キノミ、

且又其時ニ當リ、畫家ボリグノット方サニ盛ニ其藝ヲ鳴ラセリ、同氏ハ天  
 姿剛果ニシテ奇ヲ好ミ、人ノ墻下ニ循フテ走ルコトヲ欲セス、是ヲ以テ其  
 傲ス所ノ畫、皆盡ク人ノ意表ニ出テ、專ラ意思情懷ヲ發揚スルコトヲ求メ  
 テ、肯ヘテ時人ノ作ニ比セス、是ニ於テ平名聲時ニ藉甚ニシテ、他ノ藝術  
 ニ從事スル者モ亦往々從テ則チ取レリ、相傳フ時人ボリグノットヲ號シ  
 テ「エトグラーフ」ト曰ヒシト、善ク人情ヲ摸寫スルノ畫人ノ義ナリ、此ニ  
 由リテ之ヲ考フレバ、當時ノ彫刻家モ亦必ス往々様式ヲボリグノットニ  
 取リシコト疑無シ、苟モ様式ヲボリグノットニ取リシキハ、其作ノ意趣有ル

トチ得タルヤ亦疑テ容レズ、未ダ獨リ外貌ノ美ヲ以テ希臘ノ藝術ヲ律スルコチ得サルナリ、

獨リ此レノミナラス、彫刻家夫ノ神代ノ事ヲ以テ題目トシテ、專ラ外貌ノ端麗ヲ求ムルノ時ニ方リ、是時ニ於テ又別ニ一種ノ彫刻家有リテ、其做ス所全ク相異ナリキ、蓋シ此輩ハ既ニ外貌ノ美ヲ求ムルニ非ス、又生氣意趣ヲ求ムルニ非ス、專ラ實物ニ肖似シテ少シモ違ハザルコチ務メリ、故ニ予ハ此流派ノ藝術家ヲ指シテ摸寫者流ト謂ハント欲ス、他無シ、其做ス所ハ象徴ヲ著ハスニ非ス、又人情ヲ出スニ非スシテ、唯化工ノ形迹ヲ摸寫スルニ在リシヲ以テナリ、

此種ノ作物ハ、近代ノ好事家古昔希臘ノ遺址ヲ搜索シテ之ヲ發見セリ、其數頗ル多クシテ或ハ陶器ニ於テ巧ヲ施セル有リ、或ハ單ニ土ヲ埴シテ之ヲ作ス有リ、又寶玉ノ屬ヲ以テ之ヲ做ス有リ、其題目各々一ナラズ

シテ、刀ヲ運スルノ法モ亦皆相異ナリ、

此ニ由リテ之ヲ考フレハ、希臘ノ藝術ハ獨リ刻鐫ノ一途ニ就テ言フモ、其區域極テ廣シ、神像ヲ彫刻シテ專ラ端麗ヲ求ムル者有リ、歴史ノ故事ヲ彫刻シテ專ラ生氣意趣ヲ發スル者有リ、化工ニ模擬シテ專ラ實形ヲ寫ス者有リ、何ノ類カ有ラサラン、然ルチ後世博士院ノ學士輩、希臘ノ作物中ニ於テ、獨リ夫ノ象徴ノ一派ヲ見テ之ニ感服シ、必ス此ヲ以テ第一ト爲シテ、乃チ夫ノ美麗ノ極致ヲ以テ旨趣ト爲シ、天下ノ藝術ヲ舉ケテ皆此狹隘ノ紀律ヲ以テ之ヲ束縛シント欲ス、嗚呼此輩ハ獨リ其狹隘ノ說ヲ以テ自ラ束縛シ、且ツ人ヲ束縛スルノミナラス、且ツ遠ク古ニ溯リテ以テ其作者ヲ束縛シント欲ス、何ソ其狂悖ノ甚キヤ、

予ノ希臘ノ藝術ヲ論シテ、必ス其詳ヲ悉サント欲シテ己マサルコチ、此ノ如クナル所以ノ者、他無シ、古來藝術ノ沿革ニ係リテハ、最モ盛隆ト稱ス



可キ時代其數甚多カラス、而シテ希臘ノ藝術ノ如キハ正サニ所謂盛隆ノ時代ナリ、故ニ苟モ思チ藝術ニ潜ムル者ハ、此ノ時代ヲ論スルニ於テ、決シテ勿々ニシテ之ヲ過クルヲ得ス、加之我カ官家ノ藝術論ハ、其根據トスル所正サニ希臘ニ在ルヲ以テ、苟モ之ヲ論駁シテ以テ文物ノ運ヲ進メント欲スルハ、其勢希臘ノ藝術ヲ詳論シテ、以テ博士家ノ根基トスル所ノ繆見ヲ破ラサル可ラス、故ニ予其煩冗ヲ厭ハス、喋々是ニ至リテ猶ホ己マス、讀者幸ニ以テ病ト爲スコ勿レ、

蓋シ我カ博士家ノ其極致ノ説ヲ唱フルコトハ、其源ヲ希臘ノ彫刻ニ取リシコト固ヨリ明ナリ、然レヒ希臘ノ彫刻モ亦類チ一ニセズ、蓋シ端倪ノ觀ヲ求ムル者有リ、意趣ヲ求ムル者有リ、實形ヲ求ムル者有リ、今博士家ハ己レ先ツ成説有ルヲ以テ、盡ク希臘ノ彫刻ヲ考察スルコトヲ欲セスシテ、獨リ其端倪ノ觀ヲ主トスル者ニ就テ、其議論ノ基ヲ寓スルニ過キズ、嘗

ニ此ノミナラス、今其爲ス所ヲ細察スルニ、夫ノ神像中ニ在リテモ、博士家ノ法則トシテ撰擇スル所ハ、特ニ二三ニ過キズ、此レ他無シ、其他ハ或ハ其議論ト矛盾スル有リテ、獨リ此二三ノ彫像ノミ、最モ其所見ト相適スルヲ以テナリ、

吾博士院ノ學士、希臘ノ彫刻中ニ於テ既ニ其所見ニ適合スル者ヲ撰擇シ、此ヲ以テ法律ト爲シ、其他苟モ自家ノ説ニ抵抗スル所有ル者ハ、皆之ヲ屏ケテ曰ク、此レ作者一時ノ弄巧ニ出テタル者ナリ、固ヨリ以テ典則ト爲ス可ラス、曰ク此レ希臘藝術ノ衰運ニ屬セシ時ノ作ナリ、固ヨリ以テ模範ト爲スニ足ラスト、嗚呼是レ何ソ古昔作者ヲ誣フルコトノ甚キヤ、今ヲ距ルコト數十年、ウインケルコン我カ邦文藝ノ事ヲ典トルニ方リ、專テ學士極致ノ説ヲ主張シ、希臘彫刻ノ中ニ於テ、獨リベルウエデルノアボロン希臘ノ名彫像、及ビメヂシーノウエニニス上ノ彫像、ラオコーンノグ

ル<sup>上</sup>同ノ彫刻ヲ取リテ模範ト爲シ、之ヲ生徒ニ示シテ必ス之ニ摸擬シテ作爲セシメリ、今日ニ在リテ官家ノ撰擇スル所ハ、ミロ<sup>ローノウ</sup>ニス<sup>コ</sup>ノ彫像、パルテ<sup>ノン</sup>寺ノ大理石ノ諸彫刻等ナリ、顧フニ擇取スル所ハ或ハ時ニ異ナリト雖モ、其紀律トスル所ノ旨趣ハ常ニ相同シ、何ソヤアラト<sup>ン</sup>ノ理學ノ說ニ基キテ、必ス端麗整嚴ノ觀ヲ主トスルヲ以テナリ、我カ學校ノ規則是ノ如シ、是ヲ以テ生徒タル者ハ、初ヨリ自家ノ嗜好及ヒ感情ニ隨テ作爲スルコトヲ得ズシテ、但官ノ示ス所ノ模範ヲ學習シ、此ヲ以テ業ヲ始メ此ヲ以テ業ヲ卒ヘ、千人一人ノ如ク、十年一日ノ如ク、苟モ少シク己レノ見ル所ニ隨テ作ル<sup>コト</sup>有ル<sup>ハ</sup>、放遺シラル、有ル<sup>ノ</sup>ミ、復々學校生徒ノ中ニ齒スル<sup>コト</sup>ヲ得ス、是ニ於テ平人々ノ性情品格及ヒ自然ノ感慨等ノ物ハ、皆痛ク之ヲ抑壓シテ、敢テ少シモ發露セシメス、唯其作ル所ノ彫像ヲシテ、必ス博士院ノ示ス所ノ模範ニ肖似スル<sup>コト</sup>ヲ

求メシム、而シテ所謂模範ハ其數頗ル多キ乎、曰ク否、前ニ言ヒシ如ク、特ニ二三ノ彫像ニ過キサ<sup>ル</sup>ノミ、此其規模ノ狹隘ナル<sup>コト</sup>何如ソヤ、此ヲ以テ生徒ヲ束縛セリ、其真ノ大家ト稱スルニ足ル者ヲ出ス<sup>コト</sup>能ハサルハ、豈ニ宜ナラス乎、

近時ヤ、ラン<sup>シー</sup>氏此事ニ係リ、一書札ヲ得テ之ヲ衆ニ示メセリ、其旨趣正ニ吾黨ノ所見ト符合ス、故ニ之ヲ左ニ舉ク、

足下何ノ故ニ此事ニ疑有ルヤ、我カ畫人及ヒ彫刻家ハ吾儕ト同ク佛蘭西種族ノ民ニ非ス乎、既ニ佛蘭西種族タル<sup>ハ</sup>、其妻若クハ其外妾ノ如キモ、亦佛蘭西種族ノ婦女タルヲ以テ、其鼻端必ス微ク亢張シテ、其眼光必ス活潑ニシテ愛ス可キノ狀有リ、顧フニ彼レ既ニ此ノ如キ婦人ヲ以テ妻ト爲シ、若クハ外妾ト爲ス<sup>ハ</sup>、其之ヲ愛シテ之ヲ美トスルヤ、亦明ナリ、獨リ之ヲ愛シ之ヲ美トスルニ止マラスシテ、彼レ其初メ未タ之ヲ

獲サルヤ、或ハ精神恍惚トシテ安カラス、其鼻目常ニ胸間ニ往來シテ絶  
 ユルヲ無シ、是ニ於テ人ノ指議ヲ顧ミズ、己レノ春戀ノ情ヲ通シテ、必ス  
 之ヲ妻トシ、之ヲ妾トシサレハ、己マサルニ至リシヤモ、亦未ダ知ル可ラ  
 ス、之ヲ要スルニ其自ラ美トスル所ハ、夫ノ鼻端ノ微ク亢張シテ眼光ノ  
 活潑タルノ一相ニ在ルヲ、疑ヲ容レズ、然リ而シテ其畫ヲ倣シ若クハ刻  
 スルニ於テ、臨本トスル所ノ美麗ノ貌ハ、果シテ此レト相類スル有ル乎、  
 足下試ニ想ヘ、彼レ其初メ其妻若クハ其妾ヲ擇フヤ、其嗜好ノ心直チニ  
 腦裡ヨリ發シテ、絶エテ誘導ノ力ヲ別物ニ假ルヲ無シ、此レ正ニ眞ニ其  
 妻其妾ヲ愛スト爲ス所以ナリ、作者ノ其作物ニ於ケルモ、亦當ニ是ノ如  
 クナル可シ、今然ラスシテ彼其臥牀ニ在ルキハ、其妻ノ顔貌ヲ以テ美ト  
 爲シ、且日起テ業ニ就クキハ、希臘ノ美婦人ノ像ヲ以テ美ト爲シ、之ヲ摸  
 寫シテ復タ其他ヲ求メス、此レハ則チ一身兩心ト謂フ可ク、愛情ニ在リ

テハ天真ヲ吐露シ作物ニ在リテハ矯偽ヲ脩飾スト謂フ可シ、  
 我カ作者ノ倣ス所是ノ如シ、而シテ足下其作ニ於テ生氣ノ活潑タルヲ  
 欠クニ怪ムハ何ソヤ、大凡ソ作物ニ於テ生氣ノ觀ル可キ有ルハ、他ニ非  
 ス、作者自ラ其作ル所ノ顔貌ヲ愛スル有ルヲ以テナリ、作者其作ニ臨ム  
 ノ時ニ於テ、一片誠實ノ感情腦裡ヨリ發出シテ、自ラ止ムルヲ能ハサル  
 有ルヲ以テナリ、今吾作者ハ然ラスシテ、獨リ他人ノ定ムル所ノ模範ニ  
 依準スルノミ、而シテ足下其作物ノ生意無キヲ怪ム、此レ僕ノ解セサル  
 所ナリ云々ト、  
 顧フニ此書ヤ語意頗ル媒黷ニ涉ルト雖モ、議論ハ極テ適切ニシテ、我カ  
 博士院ノ說ヲ擊刺シテ其要害ニ中タルモノト謂フベシ、苟モ官家其僻  
 見ヲ守リテ、必ス其生徒ヲ束縛シテ、唯其所謂模範ニ肖似スルヲ是レ  
 求メシムル間ハ、生徒タル者唯其ノ記性ヲ練習スルヲ得ルノミニシ

テ自己固有ノ想像力ハ復タ之ヲ發揮スルニ由シ無シ、是ノ如クニシテ手腕ノ巧ヲ求ムルキハ、或ハ之ヲ得可シ、意ヲ創スルノ奇崛ナルヲ求ムルキハ、千百中一ヲ得可ラス、夫レ人自ラ意ヲ創シテ奇氣ヲ發スルニ非ルヨリ、縱令ヒ手腕如何ニ巧ナルモ、畢竟摸擬裁制ノ巧ノミ、終ニ之ヲ作家ト稱ス可ラス、是故ニ若シ我カ少年生徒ノ博士院ノ紀律ニ依リテ學習スル者ノ中、或ハ一人能ク自ラ覺悟シテ其天然ノ情性ヲ保守シテ失ハサル者有ルキハ、此レ所謂萬死中ノ一生ニシテ、人間僥倖中ノ最モ大ナル者ナリ、何ソヤ、彼レ年少ニシテ未タ事ヲ解ビス、苟モ碩學人ノ言フ所ヲ聞クキハ、必ス之ヲ信シテ疑ハサルハ免ル可ラサルノ勢ナレバナリ、官家教則ノ人ノ才思ヲ害スルコト是ノ如シ、其最モ甚シキハ彫刻ノ一術ニ過クル莫シ、何トナレバ繪畫ノ如キニ至リテハ、希臘人ノ遺物得テ見ル可ラス、獨リ彫刻ニ至リテハ、希臘ノ名作今ニ存スル者頗ル多ク、是ニ

於テ官家其中最モ端麗ナル者ヲ擇ヒ、定メテ模範ト爲シ、從テ之ニ附スルニ評論ヲ以テシテ、其言フ所動モスレハ道理ニ合スルカ如シ、是ニ於テ生徒タル者、目ニ其模範ヲ視、耳ニ其說ヲ聽ク其謬ル所ト爲ラサル者幾ト希ナリ、願フニ官家ノ定ムル所ノ模範ノ如キハ、洵ニ巧妙ニシテ尊崇ス可キ者ナリ、然レモ其作者ハ初コリ他人ノ作ヲ摸擬シテ之ヲ作りシニ非ス、必ス自ラ思ヲ創シテ成ル所ナリ、然レハ則チ後ノ作者モ亦其典型ニ隨ヒ、必ス自ラ思ヲ創スルニ非サレバ、以テ跡ヲ古作者ニ追フ可ラス、

且ツ希臘人ノ軀幹ノ整齊ナルヲ愛好スルコト、此ノ如キノ甚キ所以ノ者ハ、獨リ其天性ノ嗜好然ルニ非スシテ、亦其風俗自ラ人ヲシテ此ニ至ラシムル者有リ、何ヲ以テ之ヲ言フ、曰ク彼ノ風土ヲ以テ我レニ比スルキハ、大ニ温暖ニシテ多ク被服ヲ重スルコトヲ須ヒス、又其俗好ミテ人ニ示

メスニ裸體ヲ以テスルカ故ニ、彫刻家タル者苟モ軀幹ノ壯強整齊ナル人ヲ見ルキハ、一目ノ間ニ於テ其筋骨皮肉ノ形狀ヲ詳知スルヲ得、若夫レ我カ邦ニ在リテハ、風土既ニ悽烈ニシテ被服ヲ重襲スルヲ要スルカ故ニ、若シ軀幹ノ形狀ヲ瞭知セント欲スルキハ、直チニ生人ニ就テ之ヲ見ルヲ得スシテ、唯博物館ニ赴キテ古人ノ作ヲ觀ルニ過キス、夫レ直チニ生人ニ就テ研究スルキハ、髣髴ノ間自ラ心ニ會得スル有ルヲ得、此レ乃チ其作ノ自ラ天然ノ趣有ル所以ナリ、今然ラスシテ古人ノ作ニ就テ研究スルキハ、其得ル所畢竟死物ニシテ、真趣ヲ獲ルニ道無シ、是ニ知ル人ノ軀幹ヲ摸寫スルノ妙ハ、吾儕終ニ希臘人ニ勝リテ、之ニ上ルヲ得可ラサルヲ、

且ツ希臘人ノ軀幹ノ整美ナルヲ愛好セシヲハ、一種ノ癖習ニシテ、今ニ於テ之ヲ察スルキハ、殆ント解ス可ラサルカ如シ、蓋シ其嗜好ノ力

動モスレハ法律ノ上ニ出ツルニ至レリ、獨リ法律ノ上ニ出ルノミナラス、即チ道德ノ力モ亦之ニ勝ツヲ能ハサルニ至リシヲ、往々ニシテ然リ、今茲ニ其證ヲ舉ケンニ、フリチーハ希臘ノ名妓ニシテ絶美ノ稱有リ、而シテ「オランビー」ノ祭日ニ値リ、全國男女ノ聚觀セシ中ニ於テ、全ク被服ヲ脱シ、赤身ニテ自ラ公衆ノ觀ニ供ヘシヲ二度ナリシト云フ、又フリチー罪ヲ以テ訴ヘラレテ法衙ニ出テシト、其辯護人辭窮シテ復タ爲メニ回護ス可キノ道ナキニ及ヒ、フリチーニ勸メテ衣ヲ脱シテ其體ヲ法吏ニ視セシム、法吏一見シテ其妖艶ナルニ驚キ、遂ニフリチーヲ直トシテ之ヲ放遣セリ、夫レ婦人ニシテ公衆ノ中ニ於テ裸體ト爲リテ、獨リ羞耻ノ心ヲ懷カサルノミナラス、亦此ヲ以テ自ラ誇リ、公衆モ亦此ヲ以テ之ヲ讚稱ス、此レ其風俗タル豈ニ甚奇怪ナラス乎、又法吏タル者必ス正チ秉リ義ヲ體シ、一意ニ律ニ據リテ處斷ス可

キハ、希臘人ト雖モ我ト異ナルヲ無シ、然ルニフリテノ美麗ナルヲ見テ、衆吏皆相期セズシテ法ヲ枉ケテ人モ亦略ホ之ヲ咎ムルヲ無シ、此レ希臘人ノ身體顔貌ノ美ヲ愛スルヲハ、道德法律ノ力ノ上ニ在リシ明證ニ非ス乎、

又クニードノウエニコースノ彫像ハプラキシテイルノ彫鑄スル所ナリ、アナヂヨメーンズノウエニコース畫像ハ、アッベルノ描キシ所ナリ、而シテ二人ノ此作有ルヤ、皆フリテノ謂テ親ク其顔貌體軀ヲ視テ以テ臨本ト爲セシト云フ、又アシバシーモ亦娼妓ニシテ、希臘第一ノ美婦人ノ名有リテ、之レニ係ル事跡略ホフリテト同シ、相傳フアスパシー其職ニ服スル間ニ、偶然孕メル有リ、之ヲ聞ク者、皆其分娩ノ爲メニ容色體貌ノ美ヲ減スルヲ懼レ、相傳ヘテ國中ニ遍テク、アレオパーシノ聞ク所トナリテ、特ニ聽シテ墮胎藥ヲ服セシメリ、夫レアレオパー

十

シハ希臘第一等ノ法術ニシテ、全國人ノ從フテ平ヲ決スル所ナリ、而シテ徒ニ母顔ノ美ヲ保ツカ爲メニシテ、其既ニ生ヲ享ケタル胎兒ヲ殺スヲ許セリ、今設令ヒ我カ巴理ニ於テ覆審院ノ法官相議シテ令ヲ發シ、一娼妓ノ形貌ノ美ナルヲ愛シテ墮胎ヲ許容セシキハ、之ヲ何トカ謂ハン、

此ニ由リテ之ヲ觀レハ、吾彫刻家タル者、顔貌軀幹ノ整齊ナル者ヲ作りテ、必ス此一途ヲ以テ希臘人ノ上ニ出テント欲スルハ、愚ニ非カレハ狂ナリ、人ノ裸體ヲ摸寫シテ至妙ヲ窮ムルコトハ、希臘人一種ノ長處ナリ、吾彫刻家此事ニ係リ、如何ニ苦慮スルモ、如何ニ巧ヲ盡スモ其成ル所ノ作物中自ラ欠失ノ處有ルヲ免レス、欠失ノ處トハ何ソヤ、天然ノ風趣是レノミ、他無シ、目ニ生人ヲ見ズシテ、專ラ死物ニ就テ研究スルヲ以テナリ、

且ツ人ノ裸體ヲ喜フコトハ、希臘人ニ在リテハ其勢殆ント一種宗教ノ勢  
力ノ若キ者有リ、若夫レ吾儕ニ在リテハ、苟モ生人ニ在リテハ初ヨリ之  
ヲ觀ルニ忍ヒス、彫刻物ニ在リテハ頗ル之ヲ觀ルコトヲ愛スルカ如シト  
雖モ、實ハ其天性ニ非スシテ、特ニ習慣ノ然ラシムル所タルニ過キス、然  
レモ予ヲ以テ之ヲ觀ルニ、裸體ヲ彫鑄スルコトモ畢竟一種ノ題目ナルヲ  
以テ之ヲ存シテ可ナリ、但必ス此ヲ以テ古人ノ上ニ出テント欲スルニ  
至リテハ、見識無キノ甚キナリ、吾彫刻家苟モ近代ノ人情風俗ニ適合シ  
テ作ル所有ラント欲セハ、別ニ一線路ヲ開クニ如クハ莫シ、一線路トハ  
何ソヤ、乃チ生氣意趣ヲ摸寫スル是ナリ、

吾彫刻家果シテ能ク眼ヲ此ニ著ケ、苟モ彫鑄スル毎ニ專ラ心ヲ顔貌ノ  
美麗ト體軀ノ整齊トニ留メスシテ、務テ其眼鼻及ヒ手足ノ間自ラ一種  
ノ情念ノ外ニ發露スル者有ルコトヲ求ムルモハ、獨リ古人ニ下ラサルノ

ミナラス、亦必ス駕シテ之ニ上ルコトヲ得ン、是レ今日ニ在リテ諸藝術ノ  
正路ナリ、嗚呼惜イ哉博士院ノ學士輩是ニ察セスシテ、藝術家ノ精神ノ  
自由ヲ束縛シテ、其レヲシテ此正路ニ就クコトヲ得サシム、此レ誠ニ何  
ノ心ソ歟、嗚呼少年諸生ノ才氣ヲ負フ者、年々學校ニ入りテ業ニ就キ、萬  
事ヲ閑キ唯古人ノ作ヲ摸寫習熟スルコトヲ是レ務メテ、敢テ或ハ其巧思  
ヲ發スルコトヲ得ス、豈ニ痛マザラン哉、此ヲ以テ一生ヲ錯マルコト幾人ソ  
ヤ、設令ヒ此輩ヲシテ予ノ所謂藝術ノ正路ニ由リテ學習セシムルモハ、  
異日大名ヲ世ニ擅ニスル者、何ソ遽ニ之レ無シト謂フニ今ノ彫刻  
家ニ就テ、シヤポ一氏、ヂユボア一氏ノ如キハ、最モ美ク裸體ヲ作ル者ナリ、此  
二人ハ一種天ニ獲ル者有リテ、此ノ一途ニ於テ極テ妙ヲ得タリ、予此レ  
ヲ喜ハズト雖モ、亦一種ノ題目ニシテ固ヨリ世ニ存ス可キヲ以テ、此二  
人ノ特ニ此ニ長スルハ、獨リ二人ノ爲メニ賀スルニ非スシテ、亦國ノ爲

メニ之ヲ賀ニサレテ得ス、但其他生徒ノ本ト此ニ於テ天然ノ長處有ルニ非スシテ、特ニ學士輩ノ言ニ徒テ自ラ省求スルヲ知ラス、一身ノ力ヲ極テ此レヲ學習シ、數年ノ功ヲ費ヤシテ、其終リヤ一モ得ル所無クシテ己ム者蓋シ鮮カラス、此レ予ノ此輩ノ爲メニ深ク痛悼スル所以ナリ。我カ近代ノ風俗希臘ト異ナルヲ是ノ如クニシテ、凡ソ農工ノ諸業皆良家ノ服スル所ニシテ、復タ奴隸ヲ蓄フヲ無シ、故チ以テ農工ノ業ハ皆人ノ貴重スル所ニシテ、此レヲ以テ藝術ノ題目ト爲スモ、少シモ不可ナル無シ、何故ニ吾彫刻家ハ題ヲ是ニ取ルヲ思ハズシテ、必ス希臘ノ神代記ニ依準スルヲ爲スヤ、人必ズ曰ハシ、此等ノ題目ノ如キ、近日頗ル之ヲ試ミシ者有リト、此レ洵ニ然リ然レト作者未ダ全ク近代ノ風俗ニ合ズルヲ求ムルヲ能ハスシテ、往々古人ノ作ニ模擬セシ迹有ルヲ免レズ、即チ近歲吾博覽會ニ列ビシ作物ノ如キ、其題目或ハ播種、耕耨、紡績、鍛

冶等ノ屬ニ取ル者有リシト雖モ、其容貌體格實ニ農夫工人ニ肖似スル者ハ甚希レニシテ、多クハ希臘ノ彫刻ヲ剽竊シテ成ル所ナリ、是ヲ以テ其像チ一見スルトハ、將ニ曰ハントス、是ハ尋常ノ農工ニ非ズシテ、希臘諸神ノ天上ヨリ降りテ暫ク農工ノ事ニ服シテ、自ラ戲ヲ爲ス者ナリト、此レ豈ニ眞ニ近代ノ風俗ニ適合スルヲ求ムルト謂フ可ケン哉、或ハ偶々「シャンドモンタルジ」ノ作者ノ如ク、近日ノ男女相悅フ像ヲ作ル者有リト雖モ、己ニ作ルノ後、俄ニ復タ賞鑒家ノ齟齬ニ遇フヲ恐レテ、自ラ措クヲ能ハス、因リテ別ニ又希臘人ノ題目ヲ襲フテ彫鐫シテ、以テ暗ニ罪ヲ贖フヲ求ムルニ至ル、何ソ其心ヲ設クルノ卑陋ナルヤ、  
 博士院ノ學士輩ハ我カ近代ノ風俗ニ適シテ、題目ヲ取ルハ固ヨリ深ク喜バザル所ナリ、故ニ彫刻家苟モ媚チ博士院ノ學士ニ容レテ、自ラ利スル有ラント欲スルトハ、農工ノ諸業ヲ以テ題目ト爲スヨリハ、寧ロ常



ニ希臘神代記ノ人物ヲ以テ題目ト爲スニ如カズ、是ノ如シスルモ、我  
レニ於テ獨リ功牌ヲ賜フノ榮有ルノミナラス、苟モ官家彫像ヲ要スル  
ト有ルモハ、必ス我レニ命シテ之ヲ作ラシメン、故ニ彫刻家苟モ利欲ノ  
念有ルモハ、其新奇ノ見識ヲ發スルコトヲ恐レテ、常ニ官家ノ規律ニ依準  
スルハ、初ヨリ怪ムニ足ラザルナリ、

然リト雖モ、藝術家タル者光榮ヲ求メ名聲ヲ求メント欲スルモハ、官家  
ノ優獎ヲ請乞スルノ外、果シテ別ニ手段無キ乎、國人公衆ノ讚稱ヲ得ル  
カ如キハ、亦光榮ト爲スニ足ラズ乎、若シ國人公衆ノ稱譽ヲ得ント欲ス  
ルモハ、必ス近代ノ習俗好尚ニ隨テ作ルコト有ルニ非サレハ能ハス、近日  
デランプラン氏エネユカシヨ「マテルテール」慈母子ヲ教ト號スル題目ヲ  
以テ彫鐫シ、ダルー氏ベイザン「ソナンクアン」農婦其子ニト  
號スル題目ヲ以テ彫鐫シテ、皆大ニ具眼ノ鑒賞スル所ト爲レリ、此ニ由

リテ之ヲ觀レハ、彫刻家公衆ノ稱譽ヲ得ント欲シテ、必ズアジャッキスア  
シールアンドロメードエベ共ニ希臘等ヲ以テ題目ト爲シテ、近代ノ  
習尚ニ乖背スルハ、吾レ其果シテ何ノ故タルヲ知ラサルナリ、

願フニダルーデランプラン二氏ノ彫刻ニ由リテ之ヲ察スルモハ、希臘  
神代記及ヒ博士家ノ紀律ハ、彫刻者必スシモ依準セシテ可ナリ、况ン  
ヤ必ス裸體ヲ彫鐫スルカ如キハ、初メヨリ心ヲ留メズシテ可ナリ、  
方今ノ作者ノ尤モ注目ス可キハ、獨リ意趣ノ活潑靈動スル所ノ處ニ存  
ス、怪ム無キナリ、此一著ハ古今ヲ論セズ、遠邇ヲ問ハズ、凡ソ藝術ノ作者  
ハ必ス皆潛心ス可キ所ニシテ、希臘作者ト雖モ、皆以テ之ヲ發スル有リ、  
特ニ第十二紀以來ハ公衆ノ習尚益々此ニ赴クノ勢有リ、他無シ、此レ正  
ニ藝術ノ正路ナルヲ以テナリ、  
然リト雖モ、彫刻術モ亦繪事ト同ク、凡人ノ情念意思ヲ擧ケテ、皆之ヲ發

揮シテ餘蘊無キヲ得ルト爲スルハ、大謬ナリ、蓋シ彫刻ノ一途ハ獨リ其用フル所ノ材料ノ故ノミナラス、亦別ニ一種ノ原由有リテ、情念意思ヲ發揮スルコト他ノ藝術ノ如ク自在ナルコト許サズ、今之ヲ實迹ニ徴センニ、詩人畫人ノ如キハ、人ノ憤懣シ若クハ悲泣スルノ状態ヲ摸寫スルモ固ヨリ妨無キノミナラス、摸寫シテ妙ニ入ルルハ、此ヲ以テ大ニ美學上ノ觀美ヲ増スコト有リ、若夫レ彫像ニ至リテハ然ラズ、設令ヒ彫像ニシテ目ヲ瞋ラシ口ヲ開キ、腕ヲ扼シ足ヲ躍ラシ、若クハ眼ヲ掩フテ垂泣スルノ狀有ラシメハ、其作巧緻ナルモ必ス人目ヲ厭ハシムルニ至ラン、顧フニ詩人ノ如キハ摸寫ノ巧ヲ寓スルニ於テ、其區域尤モ廣博ナリト爲ス、故ニウイ<sup>イ</sup>ル<sup>ル</sup>シ<sup>ル</sup>ノラオ<sup>コ</sup>ーンノ事ヲ詠スルカ如キ、其二蛇ノ爲メニ追マラル、ニ方リ、ラオ<sup>コ</sup>ーン窮窘シテ大ニ聲ヲ放テテ叫號ス、若シ彫刻家ヲオ<sup>コ</sup>ーンノ像ヲ鑄シテ、此ノ状態ヲ寫スルハ、觀ル者爲メニ酸鼻シ

テ、再ヒ視ルニ忍ヒサル可シ、此レ他無シ、詩ノ物タル讀誦シテ始ヨリ中ニ至リ又終ニ至リ、其一字ヲ經、一句ヲ經、一章一段ヲ經テ、決シテ一處ニ停着スルコト無シ、是ヲ以テ一編中或ハ此ノ如キ悲酸ノ狀ヲ有スルモ、僅ニ讀テ次段ニ至ルルハ、遽ニ又春風和煦ノ狀有リテ、人ヲシテ頓ニ自ラ慰スルコトヲ得セシム、是ヲ以テ彼此相映シテ大ニ全編ノ藻飾ヲ増スコトヲ得、獨リ此ノミナラス、凡ソ同一憂喜ノ状態ト雖モ、之ヲ耳ニ聽ク者ハ之ヲ目ニ視ル者ニ比スレハ、其人心ヲ感動スル者大ニ輕重有リ、是ヲ以テ人ノ屠戮ニ遭フカ如キモ、他人ノ語ヲ聞テ之ヲ知ルルハ、未ク必スシモ深ク心ヲ動かサズ、一旦其所ニ至リ、目ニ其屍ノ鮮血ニ塗スルヲ見ルルハ、其驚動スル者更ニ甚キ者有リ、今彫刻ノ如キハ、一見スルルハ終始變セズ、初ヨリ章ヲ逐ヒ、段ヲ易フルノ道無シ、是ヲ以テ一彫像悲慘ノ狀有ル者一處ニ屹立スルルハ、過觀ス

ル者一タヒ慘悽スルキハ、復タ自ラ慰ス可キ無シ、此レ其作者ニ於テ深ク注意ス可キ所ナリ、  
 繪畫ノ如キモ彫刻ト同シク、人目ヲ怡ハシムルノ一術ナルヲ以テ、詩歌ノ章ヲ追ヒ、段ヲ逐フテ變化スルカ如クナラズシテ、一見スルキハ、全形ヲ觀ル、然レモ畫ノ物タル既ニ主客遠近ノ勢有リ、又多ク數個ノ人物ヲ以テ一圖ヲ構成シ、又其間種々碎瑣ノ事ノ觀ル可キ者有リテ、彫像ノ簡單ナルカ如クナラス、是ヲ以テ其中一二悲慘ノ狀態有ルモ、未タ甚ク人心ヲ悲マシムルニ至ラス、他無シ觀ル可キ者錯雜ナルヲ以テ、人心隨テ少シク轉變スル有ルヲ以テナリ、此レハ則チ同一人目ニ關係スル藝術ナリト雖モ、彫刻ニ比スルキハ、其區域大ニ廣博ナリト謂フ可シ、  
 是ノ道理ニ由リテ之ヲ推スルキハ、巴理街上ニ建ツル所ノ大將子イノ彫像ノ如キハ、作者ノ用意大ニ當テ失ヒシト謂フモ可ナリ、作者蓋シテ

イノ勇剛ノ氣象ヲ著ハサント欲スルカ爲メニ、其容貌ヲシテ彼ノ如クナラシメタルニ論ナシ、然レモ子イノ一人街上ニ立チテ、口ヲ開キ目ヲ張り、手足ヲ揚ケ、氣ヲ作スノ態、遠ニ觀ル者其何ノ故タルヲ解セス、此レ其短處ナリ、若シ畫幀ニ在リテ一軍敵ニ向フテ進ムノ時、子イノ前列ニ居テ是ノ如キ狀態有ルキハ、觀ル者皆擊節シテ曰ハントス、子イノ勇剛ナル、戦合スルニ臨ミ、常ニ身ヲ挺シテ進前シ、以テ其衆ヲ鼓勵セリ、今作者此意ヲ摸寫シテ妙ニ入レリト、是レ他無シ、畫ニ在リテハ、子イノ外、又其率非ル所ノ兵士ヲ擧ケテ之ヲ圖中ニ入ル、コヲ得、彫刻ニ在リテハ、獨リ子イヲ圖スルニ過キサルヲ以テナリ、  
 以上論スル所ニ由リテ之ヲ言ヘハ、彫刻ノ一途ハ詩畫ニ比スルキハ、其區域大ニ狹隘ナリ、然レモ此ヲ以テ作者少シモ自己ノ精神ヲ發揮スルコト能ハスト爲スルキハ、又理ヲ得ルモノト爲サス、彫像ハ洵ニ激烈ノ容有

ル可ラス、洵ニ悲慘ノ狀有ル可ラス、然レモ作者必ス唯凝然直立シテ懷  
 フ所無ク、感スル所無キノ狀ヲ著スノ外、他策無シト爲スモハ大繆ナリ、  
 夫レ人ノ情懷思念モ亦其數種々有リ、激烈悲慘ノ情狀ヲ除キテ、果シテ  
 別ニ摸寫ス可キ者無シト爲サン哉、觀忻ノ情有リ、思念ノ情有リ、艷媚ノ  
 態有リ、峻整ノ態有リ、且ツ古今人ノ氣象性質是ノ如ク種々ナリ、故ニ彫  
 刻苟モ一人ノ物ヲ鐫ルモハ、各々其氣象性質ヲ考ヘテ之ヲ摸寫スルモ  
 ハ、以テ優カニ夫ノ意趣生氣ノ活潑ナルヲ得ルニ足ル、何ソ必スシモ  
 湧洞空漠ノ觀ヲ得テ自ラ足レリトセン哉、顧フニ此事ニ係リテ豫メ明  
 ニ區畫ヲ定ム可ラス、唯作者ノ取舍何如ニ在ルノミ、  
 夫レ藻鑑家ノ作物ニ於ケル、本ト其短處ヲ指擿シ、其長處ヲ讚揚シ、瓊瑜  
 相掩フヲ得セシメス、是ヲ以テ作者獨リ其題目ノ撰擇ニ注意スルヲ  
 要スルノミナラス、其線畫ノ瑣碎ト雖モ、皆當ニ尤モ心ヲ潜ム可シ、一線

窘窮ノ病有リ、一畫疎率ノ弊有ルナキハ、藻鑑家之ヲ指擿シテ遺ス所無  
 シ、是レ固ヨリ論無キノミ、然レモ藻鑑是ノ如ク深刻ナリト雖モ、其長處  
 ヲ讚揚スルニ於テハ、或ハ又溢美ニ至ルヲ有リ、是ヲ以テ彫刻家タル者、  
 苟モ其必ス守ラザル可ラザル所ニ於テ、深ク意ヲ用ヒテ敢テ自ラ恣ニ  
 セズシテ、其應當ノ處ニ於テ巧思ヲ寓シ、感慨ヲ寄セ、其作ヲシテ靈活ノ  
 態有ラシムルモハ、其名聲ヲ發スルヲ必ス疑無シ、復何ソ卑々トシテ古  
 作者ヲ摸擬シテ、以テ自ラ屈スルヲ用ヒン哉、

方今我カ彫刻家高流ノ一人ボールヂュボアー氏、フイアーノ像ヲ鐫リテ以  
 テ墓域ノ飾ト爲セリ、フイアーハ蓋シ信心ノ義ニシテ、本ト是人有ルニ非  
 ス、ヂュボアー氏其像ヲ刻シテ其レヲシテ兩手ヲ合シ且ツ微ク兩足ヲ曲  
 ケ、身ヲ挺シテ進マント欲スルノ態有ラシム、之ヲ觀ル者一見シテ其深  
 ク心ニ感激シテ自ラ身ヲ忘ル、カ如キヲ察セシム、顧フニ是ノ如キ狀

態ハ古人ノ作中一モ其例有ラサルヲ以テ、チゴボアー氏ノ此ヲ爲スヤ、絶  
エテ蹈襲スル所無クシテ、一々之ヲ胸臆ニ取リタル疑無シ、凡ソ和柔温  
藉ノ性有ル者、一旦宗教ヲ篤信シテ、心ヲ神明ニ委スルキハ、其精神發揚  
シテ復タ自ラ省ルコトヲ知ラズ、水火ノ難ニ赴クト雖モ、其心深ク自ラ恃  
ム者有リテ、始ヨリ畏懼スルコト無シ、彼レ其心全ク天上ニ冲騰シテ、復ク  
人間塵土ノ之ヲ障碍スル莫シ、今チゴボアー氏人ノ宗教ヲ尊信シテ自ラ  
身ヲ忘ル、ノ狀ヲ摸寫シテ、題目ヲ美婦人ニ取リシハ、正ニ此理ニ見ル  
有ル者ナリ、第タ其摸寫ノ妙實ニ人ヲシテ嘆稱ニ堪ヘザラシム、予ヲ以  
テ之ヲ觀ルニ、畫人ト雖モ其意趣ヲ發揮シ、生意ヲ摸寫スルハ、恐クハ是  
ノ如クノ巧妙ニ至リ難シト、

前ニ一千八百七十六年ニ於テ、シヤリテ「仁慈ト題號セル彫像、及ヒ」  
「ラー」ジミリテ「ル」戰陣ノ「勇ノ義」ト題號セル彫像ヲ作ル者有リテ、人皆之

ヲ讚稱シテ口ニ容レサル者ノ若シ、然レモ予ヲ以テ之ヲ觀ルニ、皆チゴ  
ボアー氏ノ作ニ及ハサルコト遠キコト甚シ、チゴボアーノ彫像ハ、蓋シ大將  
モルシニ「ノ」墓域ニ置クカ爲メニ作りテ、之ヲ今茲一千八百七十八  
年ノ博覽會ニ出サント欲スト云フ、

凡ソ此ノ如キ者ハ、正ニ方今ノ人情風俗ニ於テ、極テ適合スル者ナリ、他  
無シ、容貌骨相ノ表自ラ情思ノ觀ル可キ者有ルカ故ナリ、作家タル者各  
々皆意ヲ此ニ留ムルキハ、其希臘ノ作物ニ摸擬スルモ、相勝ルコト萬々ナ  
リ、何ソヤ古昔ハ自ラ古昔ナリ、今代ハ自ラ今代ナリ、今代ニ居テ古昔ノ  
事ヲ摸寫ス、其古人ニ及サルコト固ヨリ宜ナリ、若シ然ラズシテチゴボアー  
氏ノ如ク善ク人心ノ深微ヲ發揮シテ、之ヲシテ今代ノ人情ニ適シシム  
ルキハ、獨リ古人ト手ヲ把リテ同ク歩スルノミナラス、或ハ超乘シテ之  
ニ先ツモ可ナリ、

若シ彫刻家ヲシテ古昔ノ作者ニ模擬スルノ外、他術無カラシメハ、ゾーザン氏ノ言洵ニ當レリ、氏ノ言ニ曰ク、彫刻ノ一術ハ希臘人其妙ヲ窮極シテ遺ス所無シ、故ニ今日ニ在リテ彫鑿スル所有ラント欲スルハ、希臘人ノ跡ヲ模擬スルノ外無シ、若シ一クビ自ラ意匠ヲ運スルハ、必ス邪道ニ墮ルヲ免レズ、何トナレハ彫刻ノ物タル、形貌ノ整美ヲ著ハスヲ以テ主ト爲ス者ナリ、而シテ形貌ノ美ヲ嗜好スルノ至レルコトハ、バカニスム<sup>多神宗ノ義</sup>ノ教ヲ奉スル者最モ甚シ、吾儕ノ復タ能ク及フ所ニ非ルナリ、故ニ彫刻術ハ畢竟希臘ノ藝術ニシテ、今ハ之レ無シト謂フモ不可ナル無キナリ、

顧フニ此言マ少シモ事理ニ適當セズ、此レ蓋シ彫刻術ノ爲メニ賀セザル可ラス、夫レゾーザン氏理學ニ於テ專ラ古人ノ成說ヲ取り、裁緝シテ以テ己レカ説ト爲シ、號ヲ創メテ「エレクテスム」ト曰フ、折衷ノ義ナリ、自

ラ以爲ラク、豪傑復タ起ルモ必ス我カ言ヲ易ヘズト、而シテ其所見大謬戻有ルコト往々此ノ如シ、顧フニ方今畫ノ一道益々振ハス、獨リ彫刻ハ數年以來漸ク正路ニ向ハントスルノ勢有リ、若シ吾彫刻家果シテ正路ニ由リテ失ハザルハ、其功反リテ今ノ畫家ノ上ニ出ルコト得ン、ゾーザン氏是ニ察セスシテ斯言有ルハ、思ハザルノ甚シト謂フ可シ、

抑々外貌ノ美ハ果シテ何ノ處ニ存スル乎、前後左右能ク整齊ナル處ニ存シ、目的ト手段ト能ク相得ル處ニ存シ、線畫ノ能ク平均シテ形體ノ能ク安排セラル所ニ存ス、凡ソ此ノ如キ者ハ彫刻家タル者、固ヨリ意ヲ用ヒサル可ラス、然レモ此外更ニ大ニ注目ス可キ者有リ、即チ作者ノ其自身ノ感情ヲ寓シテ、以テ作物ヲシテ活潑靈動ノ狀有ラシムルコト、是レナリ、希臘ノ作者ハ大抵此前ノ者ヲ得ルニ過キス、或ハ偶マ此後ノ者ヲ得ルコト有ルモ、畢竟情思ノ最モ見易キ者ヲ發揮スルニ止マリテ、心中深微ノ

感ニ至リテハ、初ヨリ之ヲ出スヲ知ラス、意答利ミケランジ是ニ見ル  
有リ、是ニ於テ苟モ作ルヲ有ル毎ニ、甚タ意ヲ外貌ノ觀ニ留メズシテ、專  
ラ情意ヲ發揮スルヲ務メテ、至巧ヲ窮メ、是ヲ以テ名ヲ當世ニ擅ニセ  
リ、即チ後世彫刻家或ハ能ク外貌ノ觀ニ拘泥セズシテ、頗ル意趣ヲ發揮  
スル者有ルハ、皆ミケランジノ典型ニ由リテ然リ、人々能ク是ノ如クニ  
シテ益々習熟シ、益々古人ノ未タ至ラザル所ヲ發スルキハ、希臘作者ノ  
上ニ出ルヲ甚タ難キニ非ザルナリ、

近代吾邦一彫刻家有リ手腕其巧無シト雖モ、意趣ヲ發揮スルハ極テ至  
リ、甚キハ或ハ格調ヲ破壞スルニ至レリ、顧フニ若シ一人ノ手腕更ニ巧  
ミニシテ、才思更ニ高キ者有リテ、其ノ心ヲ意趣ニ用フルヲ是ノ如クナ  
ラシメハ、其作ノ人ヲ驚カスニ至ランコト、疑ヲ容レザル所ナリ、今ヤ吾彫  
刻家ノ中才思極テ富ミ、手腕極テ巧ニシテ、獨リ著目スル所ノ良カラザ

ルカ爲メニ、剽竊摸擬ノ陋ニ陥リテ自ラ脱スルヲ能ハス、此レ豈ニ闕レ  
ム可キノ至リニ非ス乎、

○第三章 建築ニ用フル彫刻 ○建築ニ用フル彫刻ノ衰頽ノ原因

○建築ニ用フル彫刻ニ係ル要款

人或ハ云フ、彫刻術ハ本ト建築中ニ發起セリト、此言ヤ實迹ニ於テ一モ  
信憑ス可キ者有ルヲ無シ、此レ予ノ前ニ既ニ論究セシ所以ナリ、但彫刻  
モ亦自ラ二種有リ、一ハ則チ器物ニ就テ刻鑄ノ巧ヲ施シ、及ビ人ノ像ヲ  
彫鑄スル者ナリ、一ハ則チ梁棟楹桷ニ就テ彫鑄ノ巧ヲ施ス者ナリ、故ニ  
此第二種ノ如キハ、洵ニ建築ト一體ヲ爲シテ殆ト分離ス可ラズ、若夫レ  
第一種ニ至リテハ、初ヨリ建築ト相交渉スル無シ、然リ而シテ汎ク彫刻  
ヲ稱シテ建築ノ中ヨリ發起スト謂フ、此レ乃チ予ノ取ラザル所以ナリ、  
茲ニ云フ所ノ第二種ハ、特ニ古昔ニ於テ行ハレシ者ナリ、今古代ノ建築

ノ遺構ヲ觀ルニ、彫刻術洵ニ建築ト交渉シテ一體ヲ爲ス、是ヲ以テ單ニ此一種ニ就テ云フハ、彫刻ヲ以テ建築ノ中ニ包在スト曰フモ甚タ不可ナルヲ無キナリ、

彫刻ト建築ト相合シテ一體ヲ爲スハ、古昔ノ遺構中ニ在リテエジトナ以テ尤モ著シト爲ス、今其建築ニ就テ細視スルニ、全體ヨリ細節目ニ至ルマテ、此二ノ者相倚リテ一體ヲ爲シテ分析ス可ラス、獨リ一體ヲ爲スノミナラズ、此二ノ者相共ニ混合セルト謂フモ可ナリ、

エジプト建築中、往々巨大ノ彫像ヲ安置スルヲ見ル、然レモ此彫像ハ徒ニ建築中ニ附在シ別ニ裝飾ヲ爲スニ非ズシテ、多クハ大門ノ兩傍ニ在リテ、正ニ門蓋ヲ支撐シテ地ニ墮ツルヲ無ラシムルノミ、故ニ其形狀ニ就テ言フハ、裝飾ノ具ニ過ギズト雖モ、其用ヲ言フハ、牆壁若クハ柱ト異ナルヲ無シ、

又柱ノ上部ノ屋蓋ヲ承クル處ノ如キモ、往々彫鐫シテ人像ヲ爲ス有リ、然レモ此レ等彫像モ亦其形制及ビ位置ノ故ヲ以テ、全ク柱ト附着シテ一物ヲ爲ス、加之裡面壁上或ハ歴史ノ典故ヲ彫鐫スル有ルモ、亦以テ純ラ裝飾ノ具ト爲スニ非ズシテ、其用蓋シ鬪鬪若クハ厚糊紙ヲ以テ壁ヲ蔽フカ如シ、他無シ、彫刻極メテ稠密ニシテ、一處ノ空隙ヲ留メサルヲ以テ自ラ此ノ如キ觀ヲ呈スルナリ、

又其彫鐫ノ法ヲ見ルニ、細微續密到ラザル所無ク、且ツ其實物ヲ摸擬シテ之ニ肖似スルヲ極メテ巧ナリ、然レモ之ヲ要スルニ其彫工專ラ建築ト一體ヲ爲スニ取ルヲ以テ、一處モ別ニ自ラ一區ヲ爲ス者無シ、此レ其他邦ノ彫刻ト相異ナル所以ナリ、加之其形狀極メテ美麗ナルモ、其旨趣ノ在ル所ニ至リテハ頗ル簡單ニシテ、且ツ包含スル所頗ル廣博ナリ、故ニ一人或ハ之ヲ解シテ甲ト爲シ、他ノ一人又之ヲ解シテ乙ト爲スヲ有



ルヲ免レズ、

夫レエジツトノ彫刻ノ建築中ニ施セル者、其善ク建築ノ全體ト溶合融化セルヲ此ノ如シ、是テ以テ一切他邦ノ建築ハ、其至巧ナル者ト雖モ之ヲエジツトノ建築ニ視ルキハ、彫刻建築ノ二術自ラ各々其區域ヲ畫キル有ルヲ見ル、是ヲ以テ其彫刻ハ、或ハ建築中ニ於テ實ニ司ル所有ルモ、畢竟裝飾ノ觀ヲ呈スルニ過ギズ、エジツトノ彫刻ハ正ニ之ト反シテ、即チ其本意裝飾ノ觀ニ在ル者ト雖モ、一見スルキハ、人必ス其實建構ノ間ニ司職有ルヲ見ル、

夫レ然リ、是故ニ偶像ノ如キモ、其如何ニ大ナルモ、亦如何ニ細ナルモ、建築ノ全體ト相稱ハザルハ莫シ、蓋シ偶像大ナル者ハ必ズ上ニ支撐スル所有リテ、牆壁ト自ラ一體ヲ成シ、其細ナル者モ亦必ズ應分ノ職有ルヲ以テ、其形ノ細ナルモ人其細ナルヲ覺エズシテ、少モ全體偉大ノ觀ト抵

觸スルヲ莫シ、凡ソ此ノ如キ者ハエジツト彫刻一種ノ長處ニシテ、他邦ノ皆及バザル遠キヲ甚シ、

エジツト彫刻ノ建築ニ係ル者、其巧妙是ノ如シ、然レヒ觀ル者唯其此ノ如キヲ見テ、少モ怪異ヲ生ゼズ、以爲ラク此レ皆自然ニ發シテ然リト、此レ其益々巧妙ト爲ス所以ナリ、何トナレハ凡ソ藝術ノ美ハ觀ル者ヲシテ略ホ作者苦心ノ處ヲ覺エシメザルニ在レバナリ、若シ觀ル者一見シテ作者苦心ノ處ヲ認知スルヲ得ルガ如キハ、其作必ス窘窮ノ處有ルヲ免レズ、

然レヒエジツトノ彫刻ノ如キ、當時作者ニ在リテハ、其苦心焦慮セシヲ如何ソヤ、夫レ其苦心焦慮シテ而シテ深ク其痕迹ヲ沒シテ、人ヲシテ絶エテ之ヲ覺エザラシム、此レ其苦心ノ益々大ナル所以ナリ、故ニ建築ニ係ル彫刻ノ能ク其建築ト溶合スル上ヨリシテ言フキハ、凡ソ古昔ノ諸國

一モエジットノ右ニ出ツル者無シ、  
 凡ソエジットノ彫刻ニ係リテ茲ニ言フ所ハ、皆ウイレールデヨック氏ノ論ニシ  
 テ、即チ其建築閑話ト題號セル書中ノ一段ヲ摘抄シテ之ヲ舉ゲシ者ナ  
 リ、顧フニ此言ヤ極メテ實迹ト合セル者ニシテ、即チ希臘彫刻ノ巧妙ナ  
 ルヲ以テ、其建築ニ施セル者ニ至リテハ、未タエジット人ノ混化ニ妙ナル  
 カ如キニ至ラス、今其遺構ニ就テ親ク檢閲スルニ、柱題ノ彫刻ト小壁間  
 ノ彫像トヲ除クノ外、其作者如何ニ功思ヲ運ビシ者ト雖モ、皆自ラ建築  
 ト兩物タルヲ免レズ、人或ハ言ハントスアグリジャントノ巨人寺ノ如キ  
 ハ、建築彫刻真ニ善ク相混融セルニ非ス乎ト、是レ洵ニ然リ、然レモ希臘  
 建築是ノ如ク其レ多クシテ、獨リ此一寺ノミ此二術ノ相混融スルヲ見  
 ルキハ、此レ正ニ其エジット人ニ劣ルノ證ニ非ス乎、  
 夫レ然リ、是ヲ以テ希臘建築中ノ彫鑿ハ、常ニ其固有ノ性ヲ暴露シテ、人

チシテ一見シテ之ヲ覺エシム、彫鑿ノ固有ノ性トハ何ソヤ、即チ裝飾ノ  
 觀是レナリ、若シ此言ヲ疑ハ、試ニ希臘建築ノ遺構ニ就テ其彫鑿ノ巧  
 ナ施セル部分ヲ割テ之ヲ取ル可シ、是ノ如クスルモ建築ニ於テ少シモ  
 痕迹ヲ留メスシテ、其彫鑿スル所ノ旨趣モ亦略ホ變易スルヲ無シ、是レ  
 他無シ、建築ハ自ラ建築ニ、彫刻ハ自ラ彫刻ニシテ、初ヨリ相交涉スルヲ  
 無キヲ以テナリ、次ニ又試ニエジット建築ニ就テ其彫刻ヲ除去セヨ、即チ  
 其建築必ス傾頽シ若クハ破敗シテ、其彫鑿スル所ノ物必其意義ヲ失フ  
 有ラン、  
 若夫レ羅馬ノ建築ニ至リテハ、其彫刻ト相涉ラサルヲ、又希臘ノ建築ヨ  
 リ甚シ、蓋シ羅馬ノ建築ハ、其全體率チ分チテ判然タルニ部分ト爲ス、一  
 ハ純然自國ノ制度ナリ、一ハ希臘ニ摸擬セル制度ナリ、其自國ノ制度ニ  
 由リテ構架セル部位ハ、其旨意目的誠ニ純粹ニシテ、前後極メテ整齊ナ

リ、故ニ觀ル者一見シテ快ト稱セサル莫シ、其希臘ノ制度ニ模擬シテ構架セル部位ハ、自ラ強テ外ヨリ貼付シテ以テ美觀ヲ求ムルノ態有ルヲ免レス、夫レ人ヲシテ強テ美觀ヲ求ムルノ痕迹ヲ覺エシム、此レ其人目ヲ怡ハシメント欲シテ、反リテ人心ヲ厭ハシムル所以ナリ

羅馬彫刻ノ建築ニ係ル者ハ、多クハ此等ノ部位ニ就テ之ヲ施セリ、唯此事ニ就テ考フルモ、其建築彫刻ノ二物善ク相混融スルコト、希臘ノ建築ノ如クナルコト能ハサルハ言ヲ待タズシテ明ナリ、羅馬國本ト彫刻ノ術無クシテ、其ノ之レ有ルハ希臘人ト交通スルニ由リテ始マレリ、故ニ其術常ニ希臘ニ模擬スルニ過キスシテ、之ヲ建築ニ施スニ唯此ヲ以テ裝飾ノ美ト爲スコトヲ知ルノミ、

然リト雖モ、羅馬建築中亦一種頗ル善ク建築彫刻ノ二物ヲ融合セル者有リ、何ツヤ、曰ク其戰捷ヲ賀スルカ爲メニ建立セシ大門是レナリ、此レ

ハ本ト神像ヲ安置スルガ爲メナラズ、又多ク人ヲ延集スルガ爲メナラズ、畢竟街衢ノ中央ニ之ヲ建テ、往來ノ人ヲシテ其下ヨリ過クルコトヲ得セシムルカ爲メナルニ過ギズ、故ニ彫刻建築能ク是ノ如ク相混化スルコトヲ得タルナリ、

若夫レ我カ中古ノ彫刻建築ニ係ル者ハ、又エジプト希臘ノ二法ノ外ニ於テ別ニ節角ヲ露セリ、蓋シ我カ中古ノ作者ハ、絶エテ巨像ヲ作ルコト無シ、此レ其ノ既ニエジプト希臘ト異ナル所以ナリ、人或ハ言ハントス、我カアミヤンノノートルダム寺ノ廊廡ニ列スル所ノ彫像ノ如キハ、長ク皆四メートルニ下ラス、此レ豈ニ巨像ニ非ス乎ト、洵ニ然リ、然レモ予ノ所謂巨像トハ、其安置スル所ノ部位ニ比較シテ自ラ偉大ノ觀有ル者ヲ謂フ、希臘エジプトノ巨像皆是レナリ、今ノートルダム寺ノ像ノ如キハ、本ト此ノ如ク大ナルコトヲ求メシニ非ズシテ、唯其廊廡ノ太ク高キヨリシテ、觀

ル者自ラ彫像ノ小ナルヲ覺ルノ患有ルヲ以テ、已ムコトヲ得ズ彫像ヲシテ四、メー、トル」ノ大ニ至ラシメリ、此レ其希臘エジプトノ彫刻ト旨趣ヲ異ニスル所以ナリ、

又我カ第十二紀第十五紀ノ彫像ノ建築中ニ施セル者ハ、多クハ若干數相列シテ一圖ヲ爲シ、此レ他無シ、作者ノ意此ヲ以テ一典故ヲ著ハシ、且ツ觀ル者ヲシテ自ラ院劇ヲ觀ルト同一般ノ感情ヲ發セシムルカ爲メナリ、加之エジプト希臘ノ彫像ハ、多クハ隱然突起スルニ過ギズシテ、刀痕深ク入ル者甚ク少シ、是ヲ以テ一望スルキハ、畫巧ヲ施セル剝氈ヲ貼付セシガ如ク然リ、我カ中古ノ彫像ハ人眼ニ近キ處ヲ除キテ、餘ハ皆刀ヲ用フルコト極テ深ク、線畫上ニ出ツル者皆圖形ヲ作セリ、但其眼旁ハ鏤刻ノ細ヲ盡スヲ以テ、遠ニ之ヲ見ルキハ畫幀ノ如キ狀有リ、此レ又相異ナル所以ナリ、

又希臘エジプトノ彫鐫ハ、多クハ凡ソ建築中之ヲ廣濶ノ部位ニ施シテ、其部位中ニ逼子カラシム、我カ中古ノ彫鐫ハ然ラス、大抵建築中ノ一處ニ攢聚シテ別ニ境界ヲ爲セリ、是ヲ以テ我カ中古ノ建築ヲ觀ル者、其彫鐫ヲ施セル處ニ至ルキハ、彩色絢爛トシテ實ニ驚心動魄ノ思ヲ爲シ、僅ニ過キテ他處ニ至ルキハ、又其素朴淳質ニシテ淨潔ノ情ヲ發ス、此レ其變化ノ處ニシテ又古昔ノ無キ所ナリ、

大凡ソ物ノ相反スル者ハ、人ヲシテ或ハ心ヲ驚シ、或ハ思ヲ安ンシ、此ヲ以テ大ニ神經ニ感觸スル所有ヲシム、詩文章ノ抑揚ノ如キハ、即チ此理ニ外ナラス、顧フニ近代ノ藝術皆意ヲ是ノ道理ニ用ヒテ以テ姿致ヲ取ラザル莫シ、而シテ我カ中古ノ建築家及ビ彫刻家ノ如キモ、早ク已ニ目ヲ此ニ着クルコトヲ知レリ、此レ甚ク贊美ス可キナリ、

且又我カ中古ノ彫刻ハ建築ノ體制ト溶合混融スルノ一著ニ於テモ、古

昔ノ作者ニ比シテ加フルコト有リテ減スルコト無シ、而シテ其最モ妙境ニ入リタル者ハ、獨リ其彫刻ノ形狀能ク建築ト一體ヲ成スノミナラス、亦大ニ建築ノ體制ヲシテ人目ニ瞭然タラシムルノ功有リ、今之ヲ徴セント欲セハ、直チニ其大門建築ノ制ヲ觀ルニ如クハ莫シ、凡ソ其門ノ上面ニ横フ所ノ石、及ヒ屋蓋ノ正面ニ當ル中央ノ處、穹窿中ノ承塵ノ如キ皆彫鐫ノ巧ヲ施サ、ル莫シ、而シテ其間各部皆彫鐫ノ巧ニ由リテ、人ヲシテ其職務ノ在ル所ヲ知ラシムル者歷々見ル可シ、此レハ則チ木ト續飾ニ取ルト雖モ、實ハ各々皆實益ノ職務有リト謂フ可シ、更ニ言フ可キ有リ、我カ中古ノ建築ハ風土ノ故ト、并ニ其構法ノ故トニ由リ、凡ソ彫刻ヲ施ス處、皆上ニ蔽フ者有リ、此レ又古昔建築ノ無キ所ナリ、

又我カ中古ノ彫鐫ハ皆彩色ヲ施スコト略ホ印度エジプト希臘ノ彫鐫ト異

ナルコト無シ、顧フニ古今彫刻ノ最モ盛隆ニシテ、一機軸ヲ出クニシト稱スルニ足ル者、其時代甚ク多カラズ、而シテ印度エジプト希臘及ヒ我カ中古ノ如キハ、正ニ所謂盛隆ニシテ一機軸ヲ出クニシ者ナリ、若夫レ羅馬及ヒ我カ方今ノ彫刻建築ノ裝飾ニ用ノ如キハ、特ニ前人ノ塗轍ニ循フニ過キサルノミ、夫レ印度エジプト希臘及ヒ我カ中古ノ彫刻家、皆自ラ機軸ヲ出シ、前人ヲ蹈襲セズシテ、獨リ其色彩ノ一途ニ至リテハ、相期セズシテ皆同シ、然レハ則チ彫刻ノ巧ヲ建築中ニ施ス者ハ、必ス彩色スルコトヲ要スルコト、蓋シ知ル可キナリ、

以上論ズル所ニ由リテ之ヲ考フレハ、建築ノ裝飾ニ施ス彫刻ハ、其法蓋シニ有リ、即チ一ハ亞細亞人民及ヒエジプト希臘人ノ用ヒシ所ニシテ、一ハ即チ我カ中古ノ作者ノ用ヒシ所ナリ、

此二法ハ、人或ハ前ノ者ヲ尙ビテ後ノ者ヲ斥クル有リ、或ハ後ノ者ヲ揚

ケテ前ノ者ヲ抑フル有リ、予敢テ其優劣ヲ定メス、但其何ノ法ヲ用フル  
 ヲ論ゼズ、苟モ彫刻ヲ以テ建築ヲ裝飾スルキハ、其大體ニ論勿ク、即チ細  
 微ノ處ニ至リテモ、皆必ス建築ト適合シテ略ホ虚飾ノ痕迹ヲ露ハサ、  
 ルコトヲ要ス、即チエジプト希臘及び我カ中古ノ作者ノ如キモ、其用フル所  
 ノ方法各々相異ナリト雖モ、其意ヲ此一著ニ注グコトニ至リテハ、期セス  
 シテ皆相同シ、就中我ガ中古ノ作ハ、其時代最モ後ニ在ルヲ以テ、文物益  
 ヲ進鬧スルノ際ニ遭遇シ、物ヲ觀ルノ情モ亦隨テ益々豐贍ニ赴ケリ、是  
 ニ於テ乎其彫刻ノ能ク建築ト混融スルコトハ古人ニ下ラスシテ、其體制  
 ノ變化ニ富メルコトハ遠ク古人ノ上ニ出テタリ、即チ第十二紀ノ半ヨリ  
 第十三紀ノ末ニ至ルノ間、我カ藝術家ノ作出セシ所、其夥キヲ勝テ計フ  
 可ラス、其中彫鑿ノ巧或ハ甚タ觀ル可キ無クシテ、僅ニ平庸ノ地位ニ在  
 ル者有リト雖モ、其巧ヲ施スノ道宜ヲ得ルヲ以テ、皆幾分建築ノ全體ニ

補ヒ有ラザル莫シ、今之ヲ徴セント欲セハ試ニ我カ中古ノ寺院即チモ  
 アサツクウセレノ諸寺ノ正門、及ヒシルトルノノートルダム寺ノ斜線  
 狀ノ諸門、ブールジョノ禮拜堂、ホルドノノサーンビラノ寺ノ斜線狀ノ  
 諸門、アミヤンノ禮拜堂ノ大門、巴理ノノートルダム寺ノ前面等ヲ觀ヨ、  
 其建築ノ宏壯ナル、彫鑿ノ細緻ニシテ且ツ建築ノ體制ト善ク混融溶合  
 シテ、益々之ヲシテ偉麗ノ觀ヲ發シシムルト何如ソヤ、是ヲ以テ苟モ好  
 事家意ヲ建築彫刻ノ二術ニ樂マシムル者ハ、此等諸寺ノ寫眞若クハ畫  
 像ヲ藏存シ、時ニ出シテ展玩シ、以テ其巧妙ヲ讚美セサル莫キハ、此レカ  
 爲メナリ、  
 此レ等諸寺ノ中、其最モ彫鑿ニ富メル者ハ、一寺ニシテ數千ノ彫像有ル  
 ニ至ル、其數蓋シ亦夥ト謂フ可シ、是ヲ以テ若シ運刀ノ細瑣ヲ論スル片  
 ハ、其中或ハ庸拙ナル者無キト能ハス、但其彫刻ノ巧ヲ施スノ旨趣、前後

整齊ニシテ、而シテ其中自ラ變化ノ處有ルヲ以テ、觀ル者此一處ヲ閱スルモ、自ラ此一處ノ樂有リ、他ノ一處ヲ閱スルモ、自ラ他ノ一處ノ快有リ、此ノ如クニシテ其全部ヲ了スルモ、必ス其各部ノ一意義有ル者相聚リテ、全體ノ旨趣ヲ完成スルヲ見ル、是ヲ以テ其彫鐫ノ平庸ナル者ト雖モ、絶エテ賞鑒家ノ眼ニ抵觸セシテ、各々幾分ノ愉快ヲ呈セサル莫シ、蓋シ其施設ノ意能ク建築ノ諸線ト調諧シ、加之其大小長短ノ制各々宜ク得テ、即チ空濶ノ處ニ在ル者、形制稍々大ニ、狹隘ノ處ニ在ル者ハ稍々小ニシテ、其度量尺寸ヲ爽へズ、大凡ソ彫刻ノ施設宜ク得ザル者ハ、其運刀ノ法如何ニ巧妙ナルモ、一見スルモ、必ズ建築既ニ成ルノ後、遠ニ之ヲ工場ヨリ齎ラシテ、漫然之ヲ布置セルカ如キヲ見ル、他無シ、既ニ此彫像ト彼彫像トヲ調諧スルノ旨趣無ク、又全彫刻ト全建築トヲ混融スルノ因縁無キヲ以テ、各々相合ハスシテ零碎錯雜ノ病ヲ免レサル

ナリ、我カ中古ノ諸寺ノ彫像ノ如キハ、名ハ彫像ト云フト雖モ、實ハ殆ント建築ノ一部ヲ爲ス、其旨意ノ能ク相合スルコト亦宜ナラス乎、玆ニ云フ所ノ道理ハ、我カ中古ノ作者皆之ニ依準シテ一人モ背戾スル者無カリキ、是故ニ獨リ右ニ擧ケシ所ノ諸寺ノ外、苟モ當時ニ造營セシ諸寺院ハ、規模制度ノ大旨皆相同シ、若シ之ヲ徴セント欲セハ、我カ中古ノ諸寺ノ圖ヲ擧クル書冊ニ就テ之ヲ細視セヨ、其最モ下劣ナル者ト雖モ、彫刻建築ノ二術皆相倚リテ其美ヲ爲サ、ル莫キ怪ムコト無キナリ、當時ニ在リテハ、此ノ如キノ者自ラ風習ヲ爲シテ、遍ク藝術家ノ中ニ行ハレシヲ以テ、苟モ建築家タル者ハ、既ニ成ル所ノ構築ニ就テ一見スルモ、必ズ心ニ得ル所有リテ、初ヨリ傳授秘訣ヲ須フルコト莫シ、故ニ若シ人有リ、彼輩ニ向フテ、建築ハ自ラ建築ナリ、彫刻ハ自ラ彫刻ナリ、公等苟モ自ラ名ヲ發セント欲セハ、唯自家ノ見ル所ニ循ヒ作りテ可ナリト曰ハ

、彼レ必ス答ヘテ曰ハン、否然ラス、苟モ彫刻ヲ建築中ニ施スルハ二種ノ作者必ス意ヲ合シテ一體ヲ爲スニ非サレハ、彼此俱ニ名作ヲ打出スルノ道無シ、吾子ノ言ハ大謬ナリト、

方今ハ則テ正ニ之ト相反シ、建築家彫刻家唯自ラ其手腕ノ巧ヲ揮フヲ是レ求メテ、其他ヲ顧ミス、獨リ此二家ノミ然ルニ非ス、即チ彫刻家中亦各々相競フテ旨趣ヲ發シテ、曾テ意ヲ建築ノ全體ト彫刻ノ全旨トニ用ヒス、

ウイオレールチヨク氏ハ博學ニシテ通セサル所無シ、建築彫刻ノ二ノ者ニ係リテ發明スル所極メテ多シ、故ニ予本書ニ於テ屢々其論ヲ引テ以テ予ノ所見ノ證ト爲セリ、氏又方今ノ彫刻ノ建築ニ施ス者ヲ論シテ、其言極メテ現今ノ病ニ切中セリ、故ニ予又之ヲ引テ以テ參證ニ備フルヲ左ノ如シ、

其言ニ曰ク、見スヤ現今藝術家ノ爲ス所、一寺院一樓觀ヲ起サント欲スルルハ、建築家先ツ之レカ様式ヲ制シ、之ヲ管轄ノ官衙ニ報シ、以テ其允准ヲ待ツ、是ニ於テ彫刻家之ヲ聞ク者、皆趨リテ建築家ノ門ニ造リ、一彫像ヲ制シテ之ヲ出スコノ允許ヲ請フ、建築家即チ名姓ヲ登録シテ、又之ヲ官衙ニ報シテ、官衙ハ則チ將ニ時ヲ以テ命スル有ラントス、既ニシテ建築家ノ事先ツ緒ニ就キ、次チ逐フテ構築シ、豫メ部位ヲ定メ以テ後日彫像ヲ置クノ地ヲ爲ス、曰ク此處ハ甲某ノ彫刻ヲ施ス處ナリ、曰ク彼處ハ乙某ノ彫刻ヲ施ス處ナリ云々ト、然レモ初ヨリ其彫刻ノ圖ノ果シテ何タルヲ知ラス、唯其形制ノ長短ヲ知ルノミ、曰ク此處ハ細鏤ヲ施ス處ナリ、曰ク彼處ハ深鏤ヲ施ス處ナリト、然レモ亦其圖ノ何タルヲ知ラズ、獨リ建築家之ヲ知ラザルニ非ズ、即チ彫刻家ニ至リテモ、甲ノ部位ニ預ル者ハ、初ヨリ乙ノ部位ノ何ノ圖ヲ爲スヲ知ラス、乙ノ部位ヲ領スル者



ハ、亦甲ノ部位ノ何ノ圖ヲ爲スヲ知ラス、曰ク某ノ處ハ一圖ヲ定メテ若干ノ立像ヲ施ス處ナリト、然レモ其果シテ紡績ノ圖ヲ施スカ、農桑ノ圖ヲ施スカ、音樂ノ圖カ、詩歌ノ圖カ、皆未ダ知ル可ラス、凡ソ此ノ如キ者ハ、建築但預メ其所處ヲ定ムル而已ニシテ、其圖ノ旨趣ニ至リテハ、其命ヲ受クル彫刻家獨リ之ヲ知ル、此ノ如クニシテ以テ其彫刻ノ能ク建築ノ制ト適合シテ、且ツ其彫刻ノ相合シテ一旨趣ヲ出スヲ望ム、狂ニ非サレハ妄ナリ

建築既ニ粗ホ成ルニ及ヒテ、官衙彫刻家ヲ召シテ各々命スル所有リ、是ニ於テ彫刻家ノ來リ聚ル者、相共ニ利ヲ爭フヲ戰勝ヲテ敵ノ輜重ヲ鹵掠スル者ノ狀ノ如シ、甲ハ一彫像ヲ出スノ命ヲ受ケ、乙ハ二彫像ヲ出スノ命ヲ受ケ、丙ハ其作ヲ左ノ部位ニ置クノ命ヲ領シ、丁ハ右ノ部位ニ置クノ命ヲ領シ、是ニ於テ乎退テ自ラ喜フ者有リ、又怨ム者有リ、曰ク官衙

素ヨリ我レノ巧ヲ知ル有リ、故ニ我レ是命ヲ領スルヲ得タリ、曰ク何ソ官衙ノ依怙ナルヤ、誰某ハ二彫像ヲ出スヲ得テ、我レハ即チ一彫像ノミ、曰ク何ソ官衙ノ不平ナルヤ、誰某ノ部位ハ尤モ人ノ觀覽ニ便ナリ、我レノ部位ハ最便ナラスト、

若シ其建築家本ト官家ニ寵有ルカ爲メニ建築ノ命ヲ得タルモ、彫刻家ノ中苟モ之レト相識ル者ハ、其命ヲ受クルニ於テ、大ニ他ノ彫刻家ノ比ニ非ス、若シ然ラスシテ其建築家特ニ僥倖ヲ得テ其命ヲ賜ヒシモ、ハ、初ヨリ彫刻家ト交通スルノ道無クシテ、官衙唯文書ヲ以テ告ケテ曰ク、吾等既ニ彫刻家某甲某ニ命シテ若干彫像ヲ作ラシメリ、乙某ニ命シテ某ノ部位ヲ置カシメント欲ス、卿其レ以テ之ヲ前知スル有レト、獨リ此ノミナラス、凡ソ建築スル所有ル毎ニ、彫刻家請フテ命ヲ求ムル者幾人ナルヲ知ラサルヲ以テ、官家固ヨリ皆盡ク採用スルヲ得ス、是

ニ於テ其命ヲ得ザル者ハ、不平ヲ懷クニ論無ク、即チ其命ヲ得タル者モ喜悅ヲ表スル者有ルヲ鮮シ、蓋シ其中若シ藝術博士ノ名号ヲ帶フル者有ルカ如キハ、必ス曰ハントス、我レハ博士ノ大号ヲ有ス、而シテ官家我ニ命シテ世ノ尋常ノ藝術家ト列チ同ウス、我レ何ノ過擧有リテ然ルヤ、此レ固ヨリ我ヲ寵異スルニ非ス、即チ我ヲ擯辱スルナリト、又其中官家若クハ博士院ト抗言スルヲ有リテ、少ク侵犯スル所有ルキハ、其命ヲ受クルヤ、特ニ建築ノ内部最モ隱暗狹隘ノ處ニ於テ、土ヲ搏シテ一物形ヲ爲シ若クハ人ノ顔像ヲ爲スニ過キス、蓋シ此ノ如キ者ハ少年諸生未ダ藝ニ習ハサル者及ビ既ニ頗ル鍊習スルモ、官家ノ甚タ之ヲ悦ハザルカ爲メニ命シテ之ヲ爲サシメ、纔ニ以テ口實ト爲シテ飢饉ニ至ラサルヲ得セシムルニ過キス、

美術博士ノ徒、苟モ彫刻ヲ言フモハ、必スフイヂヤースヲ舉ケテ稱首ト爲

シ崇敬甚タ至レリ、第ク彫刻ニ係リテ實際ニ施行スルニ至リテハ、曾テフイヂヤースノ爲ニシ所ニ循フヲ無シ、今設令ヒフイヂヤースヲ九原ニ起シ吾カ彫刻ノ建築中ニ施シ者ヲ視セシメハ、其怪訝果シテ如何ソヤ、蓋シ吾カ彫刻家一タヒ官衙ニ出テ、一作物ヲ出スノ命ヲ受クルヤ、先ツ之レガ様式ヲ爲シテ之ヲ官衙ニ呈シ、若クハ之ヲ建築家ニ送ル、其之ヲ官衙ニ呈スルヤ、官乃チ之カ委員ヲ命シテ其様式ヲ檢セシム、委員之ヲ檢シテ意ニ當ルトキハ、彫刻家ヲシテ從フテ彫刻セシム、此レ其次序ナリ、蓋シ彫刻家ノ様式ヲ作ルヤ、其題目及ヒ像ノ大小ノ如キハ、固ヨリ依準スル所有リ、若夫レ建築ノ制度ヲ考察シ、及ヒ其彫像ヲ置クニ於テ、果シテ何ノ效ヲ顯スカチ思惟スル者ハ千百中一有ルヲ無シ、其作物ヲ置ク所ノ部位果シテ利便ナルキハ、一心ノ注射スル所、唯自ラ利ヲ占メテ隣部ノ作物ヲ壓倒スルノ一念ニ在ルノミ、若又其命ヲ受クル所、十分

其意ニ中ラスシテ、特ニ第二著以下ニ在ルキハ、其彫刻家夫ノ様式ヲ爲スニ於テ、甚ク精神ヲ用ヒスシテ、唯速ニ官ノ允准ヲ受クルコトヲ是レ求メテ其他ヲ顧ミス、

凡ソ其彫刻ノ題目ハ、或ハ之ヲ「ミューズ」ノ文藝ニ取り、或ハ之ヲ「セーヴン」ノ神ニ取り、其布置ノ如何ナルト結局ノ如何ナルトノ如キハ、固ヨリ深ク關係セザル所ナリ、但尤モ驚怪ニ堪ヘザル所以ノ者ハ、凡ソ其題目婦人甚ク多クシテ男子甚ク少シ、即チ光榮ノ神ナリ、戰陣ノ神ナリ、信心ノ神ナリ、慈悲ノ神ナリ、平和ノ神ナリ、理學ノ神ナリ、星學ノ神ナリ、凡ソ此レ皆博士家ノ喜ヒテ題目ト爲ス所ニシテ、皆婦人ノ像ニ非ザル莫シ、其他商業ノ神、工業ノ神、春ノ神、夏ノ神、秋ノ神、冬ノ神ニ至リテモ、亦必ス婦人ノ像ヲ以テ之ヲ著ハス、想フニ今ヨリ二千若クハ三千ノ星霜ヲ經、物換リ時遷リ、今ノ建築ノ在ル所變シテ墟ト爲リ、荆棘其間ニ亂生スルニ及

ヒ、或ハ好事家有リテ草棘ノ中ニ於テ搜檢シテ、吾カ建築中ノ彫像ヲ發見スルキハ、必ス驚怪シテ曰ハントス、此レ何ソ婦人ノ多クシテ男子ノ寡キヤ、此レ必ス當時ノ法制男子ノ像ヲ刻スルコトヲ禁セシナラン、否ラサレハ其宗教ノ法之ヲ禁セシナラント、是ニ於テ其徒或ハ遍ク今日ノ史籍ノ世ニ存スル者ヲ蒐索シ、之レカ證據ヲ集輯シ、一書ヲ作りテ其時ノ博士館ニ呈スル有ラン、之ヲ要スルニ、方今ノ彫像ノ專ラ婦人ヲ刻シテ男子ヲ刻セザルコトハ、後世必ズ人々ヲシテ怪異ノ心ヲ生セシムルコト疑ヲ容レズ、

吾彫刻家ノ相競フテ官衙ノ命ヲ承ケ、因リテ先ツ様式ヲ呈シテ、速カニ允准ヲ得ルコトヲ務ムルコトハ、前ニ己ニ述ル所ノ如シ、但所謂様式ナル者ハ、其狀果シテ如何、蓋シ予常ニ親ク之ヲ觀ルニ、或ハ本像ノ十分一ノ大サ有リ、甚シキ者ハ二十分ノ一ニ至ル有リ、怪ムコト無キナリ、彼レ其様式

ナ以テ眞ニ其作ラント欲スル所ノ像ノ形狀ヲ示スニ非スシテ、特ニ此  
 ナ以テ其大小ヲ示スニ過キス、夫レ粘土若クハ陶土ヲ以テ一小板ヲ爲  
 シテ、之ニ施スニ彫鏤ヲ以テシ、若クハ此ヲ以テ像ヲ爲ス、縱令ヒ作者眞  
 ニ意ヲ用ヒテ之ヲ爲スモ、此ノ如キ様式ヲ以テ豈ニ復タ彫鏤ノ眞味ヲ  
 觀ルコトヲ得ン哉、賞鑒家如何ニ眼孔ヲ具フルモ、唯圖像ノ大小ト之ヲ置  
 カント欲スル所ノ部位ノ廣狹トチ度ルニ過キスシテ、此レニ因リテ生  
 スル所ノ全體ノ効用ニ至リテハ、初ヨリ之ヲ測ル可ラス、是ニ於テ彫刻  
 家其様式ヲ呈スルモ由シ末ケレハナリ、  
 彫刻家既ニ其様式ヲ呈シテ、果シテ允准ヲ得ルモハ、各々其様式ニ因リ  
 テ、事始テ緒ニ就キ、唯已レノ巧ヲ發スルコトヲ是レ求メテ、復タ他ノ作者  
 ノ爲ス所ヲ諮詢スルコト無シ、

ウイオレー氏又言フ、彫刻家既ニ允准ヲ得テ、事緒ニ就クヤ、時々他ノ作者  
 ノ所ニ詣リ、與ニ相見テ其作物ノ事ヲ謀ル者ハ、予現ニ僅ニ三兩人ヲ見  
 タリ、其他ハ大率己レノ工場ニ閉居シテ、一意ニ已レノ旨趣トスル所ヲ  
 發揮シテ、他人ノ何ノ狀ヲ爲スヲ顧ミス、若夫レ一群若干數ノ像ヲ作ル  
 ノ命ヲ得タル者、及ヒ石板ニ鏤刻スルノ命ヲ得タル者ニ至リテハ、官衙  
 爲メニ其建築場ノ前ニ於テ一板屋ヲ起ス、是ニ於テ作者皆入りテ業ニ  
 就ク、而シテ先生先ツ様式ヲ出シ、弟子ヲシテ之ニ依リテ刀ヲ運ビシメ、  
 大半成ルノ後、先生取リテ之ヲ潤飾シテ以テ功ヲ竣フ、此レ其例ナリ、試  
 ニ看ヨ其中一人隣屋ニ詣リ相與ニ咨議スル者有ルカ、絶エテ之レ有ル  
 コト無シ、

是ノ如クニシテ若干日ヲ經、衆作者皆功ヲ竣ハルモハ、小吏來リテ一齊  
 ニ板屋ヲ撤シ作物ヲ聚メ、車載シテ建築場ニ入ル、是ニ於テ彫刻家各々

其領スル所ノ部位ニ赴キ、其作物ヲ出シテ之ヲ置キ然ル後成ヲ告ク、夫レ是ノ如クニシテ衆作者各々別ニ其旨趣ヲ發揮シテ、絶エテ相共ニ諮詢スルコト無キヲ以テ、若シ一々其作ニ就テ點檢スルハ、或ハ頗ル巧妙ナル者有ルモ、之ヲ建築中ニ置クニ及ヒテハ、雜揉沓錯少シモ一定ノ状態旨趣ヲ發スルコト無シ、蓋シ其大小廣狹ハ豫メ之ヲ定ムト雖モ、其運刀ノ法或ハ細緻ナル者有リ、或ハ疎宕ナル者有リ、同一圓像ノ中ニ於テ此像ハ細緻ニシテ彼像ハ疎宕ナルヲ以テ一齊ニ之ヲ觀ルハ、略ホ聯合ノ態有ルコト無シ、又石板ノ鏤刻ノ如キ、或ハ專ラ暗景ヲ呈スル有リ、或ハ專ラ明景ヲ呈スル有リ、紛擾錯亂得テ收拾ス可ラス、衆作者既ニ皆其作物ヲ其部位ニ置クヤ、各々其交友ヲ延テ俱ニ之ヲ觀ル、絶エテ他人ノ作ヲ觀ルコト無シ、或ハ之ヲ觀ル有ルモ、虚心平氣以テ其短長ノ處ヲ指摘スルニ非スシテ、陰ニ毀訕シテ以テ己レノ意ヲ逞クス、

即チ賞鑒家モ亦各々愛スル所ノ作者有リテ、一見スルハ高ク之ヲ標榜シテ、餘人ノ作ハ唯之ヲ按抑スルノミ、若シ賞鑒家直ニ公平ノ心ヲ以テ觀察シテ之レカ優劣ヲ定メント欲スルハ、獨リ各像ノ巧拙ヲ察スルノミナラス、亦必ス全像ノ旨趣ヲ考ヘサル可ラス、然リ而シテ全像ノ旨趣ハ初ヨリ之レ有ラサルヲ以テ、姑ク己レノ愛スル所ノ作者ヲ讚稱スルノ外、復タ他策有ルコト無シ、

ウイテレ一氏又曰ク、凡ソ此建築ノ事ニ預ル者、官吏及ヒ美術博士ヨリ以テ建築家彫刻家ニ至ルマテ、其尤モ意ヲ用フル所ハ、其作ノ果シテ巧麗ニシテ、美術上ノ觀ニ適スルト否ラサルトニ在ラスシテ、專ラ各自ノ愛スル所ノ人ヲ進メテ、其惡ム所ノ人ヲ斥クルニ在リ、此ノ如キ者ハ官吏及ヒ博士ノ輩特ニ甚シ、是ヲ以テ建築家ナリ、彫刻家ナリ、苟モ其建築ニ係リテ命ヲ受クル有ラント欲スルハ、必ス官吏及ヒ博士ノ輩ノ旨ヲ

承順セサル可ラス、必ス其官吏及ヒ博士ノ輩ノ寵幸スル所ノ者ノ心ニ  
 迎合セサル可ラス、其他一言一語ノ間務メテ忤違スル所無キヲ求メテ  
 怠ラス、是ノ如クスルニ非サレハ、人ニ出ツルノ技巧有ルモ、初ヨリ作者  
 ノ列ニ圃ハルヲ得ス、而シテ其官吏博士及ヒ其徒ノ私人ノ旨ヲ承順  
 スルヤ、必ス屢々其家ニ造リ之レト閑談シ、之レト笑話シ、以テ交歡シテ  
 然ル後方ニ始テ其悦フ所ト爲ルヲ得、近日藝術家ノ形況蓋シ此ノ如  
 シ

大凡ソ建築家構築スル所有ラント欲シテ、其構築中彫鐫ノ巧ヲ肝要ト  
 スルハ、建築家タル者必ス彫刻家ノ巧拙ヲ判別シ、其拙ナル者ヲ斥ケ、  
 其巧ナル者ヲ用ニ、此ノ如クナラズンバ、其建築并ニ彫刻ノ幾分觀ル可  
 キ者有ルヲ求ムルモ、固ヨリ得可ラス、而シテ彫刻家モ亦苟モ功ヲ其建  
 築ノ中ニ加ヘント欲スルハ、獨リ建築家ニ從フテ指揮ヲ受クルノミ

ナラス、并ニ汎ク他ノ彫刻家ノ與ニ事ヲ共ニスル者ト往來諮詢シテ相  
 益セサル可ラス、此ノ如クナラスンバ、其彫像及ヒ鏤刻ノ一定ノ旨趣ヲ  
 發スルヲ求ムルモ、固ヨリ得可ラス、今ヤ然ラズ、建築家初ヨリ彫刻家ト  
 謀ラズ、彫刻家モ亦各々獨立シテ初ヨリ他ノ與ニ事ヲ共ニスル者ノ意  
 思ヲ問フコト無シ、此レ近日ノ一大弊風ナリ、  
 且ツ凡ソ建築家タル者、其構築中ニ施ス所ノ彫刻ニ係リテ、彫刻家ニ命  
 令スル有ラント欲スルハ、彫刻ノ術ニ於テ已レモ亦幾分通達スル所  
 有ラサルヲ得ス、今ヤ建築家ノ中ニ就テ、能ク彫刻術ノ大旨ニ通達シ、彫  
 刻家ト語リテ之ヲ指授スル有ルニ足ル者ハ、蓋シ有ルコト寡シ、或ハ之レ  
 有ルモ能ク已レノ所見ヲ書ニ筆シテ、彫刻家ヲシテ一覽シテ了解セシ  
 ムル者ハ、其得難キコト又何如ソヤ、  
 夫レ建築家中旁ラ彫刻ノ術ニ通スル者、既ニ得可ラス、然レハ則チ建築

家タル者ハ衆彫刻家ノ中ニ於テ一人ヲ撰擇シ、其レヲシテ他ノ彫刻家  
 ナ董率シテ指授經書ニシムルヲ要ス、是ノ如クスルキハ、其彫像或ハ  
 未ク建築ノ全體ニ適合スルニ至ラザルモ、衆彫刻ノ形制相ヒ適合シテ  
 一定ノ旨趣ヲ發スルコトハ、優ニ之ヲ爲ス可クシテ、今ノ錯亂擾雜ノ患ヲ  
 除クコトヲ得可シ、獨リ奈何セン是ノ如キ者ハ我カ官衙ノ善ハサル所ニ  
 シテ、我カ博士院ノ愛セザル所ナリ、且ツ設令ヒ建築家ヲシテ幸ニ一彫  
 刻家ヲ得テ之ニ託セシムルモ、衆彫刻家之ヲ妬害シ、言ヲ交ヘテ毀訕  
 シ、或ハ官衙若クハ博士院ニ請求シテ、之ヲ黜退スルコトヲ得ルニ至ルハ  
 必然ノ勢ナリ、

夫レ然リ、是ヲ以テ建築家苟モ身ヲ保チ利ヲ獲ント欲スル者ハ、皆深ク  
 自ラ戒メテ敢テ預メ彫刻家ノ爲ス所ヲ考察スルコト無シ、或ハ偶々勇斷  
 ニシテ未ク事情ニ達セザル者有リテ、彫刻家ニ命シテ指授スル所有ル

キハ、直チニ怨府ト爲リテ大ニ悔恨シ、自ラ後日ヲ戒メテ復タ是ニ出ツ  
 ルコト無シ、

近日藝術家ノ所爲蓋シ此ノ如シ、此ヲ以テ建築并ニ彫刻ノ美術上ノ士  
 ノ品格ヲ得ルコトヲ望ムモ、固ヨリ得可キノ道無シ、豈ニ甚々惜ム可キノ  
 非ス乎、ウイオレー氏ノ言此ノ如シ、而シテ苟モ方今藝術家ノ事情ニ通達  
 スル者ハ、皆此言ノ病根ニ切中スルコトヲ知レリ、

此ニ由リテ之ヲ考フレハ、方今我カ彫刻ノ建築ニ關セザル者ハ日ニ益  
 ヲ進ミテ、其建築ニ係ル者ハ日ニ益々衰頽スルコトハ、少モ怪ムニ足ラサ  
 ルナリ、顧フニ此景況ニシテ己マサラシメハ、彫刻ノ中ニ就テ、苟モ建築  
 中ニ施ス者ハ、遂ニ全ク地ニ墜ツルニ至ルコト、日チ數ヘテ俟ツ可キナリ、  
 蓋シ嘗テ之ヲ論ス、建築中ニ施ス彫刻ハ、其立像タリ、鏤板タルヲ論ヒス、  
 其運刀ノ跡甚細緻ナラサルヲ要ス、而シテ其形制規模愈々大ナルカ、若

クハ高ク上ニ掲ケテ地ヲ距ルコ愈々遠キキハ、其運刀モ亦愈々單純清楚ナルコ尤モ肝要ナリ、古來邦國苟モ彫刻ヲ以テ鳴リシ者ハ、皆此一著ニ注意セサル莫シ、

是ヲ以テ凡ソ高山ノ巔ニ立ツル彫像ノ如キ特ニエジト國ニール河口ニ置ケル者、及ヒニビ一ニ置ケル者ノ如キ、鼻目筋骨ノ形容、略ホ其大體ヲ發揮シテ、細微ノ處ハ絶エテ之ヲ存セズ、善ク彫刻ノ大法ニ合ヒリト謂フ可シ、人或ハ能ク此ノ如クナルキハ、作者如何ニ巧ナルモ、初ヨリ其巧ヲ施ス所無シト、是レ大ニ然ラス、何トナレハ多ク刀ヲ用ヒスシテ、其作物ヲシテ自ラ精細ノ形容有ラシムルコハ、天下ノ良工ニ非サルヨリハ、未ク之ニ當ルニ足ラス、豈ニ屑々トシテ唯細瑣ノ巧是レ求ムル者ノ能ク及フ所ナラン哉、

凡ソ茲ニ云フ所ハ、獨リ顔面ニ於テ之ヲ守ルノミナラズ、即チ其手足ノ容ニ至リテモ亦然リ、故ニ一切體軀ノ容錯雜ニ涉ル者ハ、皆斥ケテ用ヒス、特ニ吾佛蘭西ノ如キ風土ニ在リテハ、益々清楚單簡ヲ守ラサル可ラス、何トナレハ重霧濛々トシテ晝暗ク、或ハ天氣開霽ナルモ日光甚々朗明ナラサルハ、吾邦四時大抵然リト爲ス、是ヲ以テ垢汚苔蝕ノ患得テ防ク可ラス、若シ作者其彫像ノ顔面體容ニ於テ、巧ヲ施スコト太細密ナルキハ、數十年ヲ出テスシテ復タ何ノ狀タルヲ認ム可ラサルニ至ラン、希臘アテーンズノ如キハ、天氣常ニ快晴ニシテ、大ニ我カ地方ノ比ニ非ス、是ヲ以テフイデヤースノ其建築中ニ施ス彫刻ニ在リテモ、細密ノ巧ヲ用フルコ略ホ尋常ノ彫像ト異ナルコ無カリキ、若シ吾彫刻家ニシテ之ニ効フキハ理ニ達セスト爲スチ免レス、

且ツ希臘人ハ苟モ彫鑄スル所有ル每ニ、必ス彩色ヲ施シテ、其圖像ヲシテ一目ニ瞭然タラシムルコヲ求メリ、此レ固ニ良法ナリ、而シテ吾彫刻



家ハ絶エテ彩色ヲ施スヲ無シ、予未タ其何ノ故タルヲ知ラス、希臘人ノ如キハ、其建築中特ニ柱題ノ屋梁ヲ承クル處、及ヒ屋蓋ノ正面ノ破風等ニ於テ、輕々彩色ヲ施シテ、其彫巧ヲシテ分明ナラシメ、以テ法ト爲セリ、獨此ノミナラス、立像ノ如キハ本ト大理石ニ就テ鑄刻スルヲ以テ、玲瓏透明ニシテ彩色ヲ用ヒサルモ、鼻目筋肉自ラ判然タルヲ得ルト雖モ希臘彫刻家ハ猶ホ自ラ足レリトセスシテ、必ス微ク彩色ヲ施サ、ル莫シ、但是時ハ多クハ黃金若クハ他ノ金屬ヲ鍍スルニ過キスシテ、紅青黃綠ノ類ハ之ヲ用フルヲ有ルヲ鮮シ、

甯ニ此レノミナラス、希臘人ノ彫像ニ於ケル、其之ヲ置ク所ノ部位ヲ檢閱シテ、之ヲシテ其部位ト相稱ハシムルヲ求ムルニ注意セシコ、實ニ至レリト謂フ可シ、是ニ於テ獨リ太陽光線ノ程度階級ヲ量ルノミナラズ、亦光線ノ映射スル方向ヲ料リテ遺算有ルヲ無シ、蓋シ同一彫像ニシ

テ其置ク所ノ地位ニ由リテ、悉ク日光ノ映射ヲ受ケテ逃ル、ト無キト僅ニ日光ノ反射ヲ受クルニ過キサルトニ由リ、其人目ニ入ルニ及ヒテ、其外貌ノ相異ナルヲ尋常思量ノ及ハサル所有リ、彼ノ希臘人ハ是ニ慮ル有リテ、凡ソ以テ前知ス可キ者ハ、一モ之ヲ料度セサル莫シ、其心ヲ用フル至レリト謂フ可シ、

我カ彫刻家ハ常ニ言フ有リ、曰ク苟モ彫鑄スル有ラント欲スル者ハ、亦唯其運刀ノ精敏ニシテ其作物ノ巧妙ナルヲ求ムルノミ、光線ノ効ヲ假リ彩色ノ力ヲ要スルハ本ト其技ノ未タ至ラサルニ由リテ然リト、嗚呼此言ヤ蓋シ以テ自ラ其不注意ヲ掩飾スルカ爲メニ口辯ヲ以テ人ヲ禦クニ過キサルノミ、顧フニ此論ヲ爲ス者、大抵皆希臘ノ藝術ヲ祖尙シテ、自ラ號シテ其派流ヲ承クルト稱セザル莫シ、而シテ其爲ス所ハ希臘人ト相反セルコ、此ノ如シ、此レ將タ何ノ故ソヤ、希臘人ノ意蓋シ以爲ラ

ク太陽光線ノ物ノ外貌ニ於ケル、其及フ所至リテ大ナリ、故ニ彫刻家ノ如キ苟モ作ル所有ラント欲スルモ、先ツ其地位ヲ檢度シ、其光線ヲ承ルノ厚薄及ヒ方向ニ隨フテ、其運刀ノ際自ラ應變取捨スル所無カル可ラスト、今之ヲ徵セント欲シハ、試ニ「バルテノン」寺ニ造リ、仔細ニ其彫鑿ヲ點檢スルニ如クハ莫シ、凡ソ内部ノ閤闔ノ上ニ就テ彫鑿ヲ施シル處ハ、其表面皆微ク外ニ嚮フテ傾仄シシメ、而シテ其外部ノ閤闔ノ上ニ就テ彫鑿ヲ施シシ者ハ、表面皆微ク内ニ嚮フテ傾仄シシム、此レ其故何ソヤ、内部ニ在ル者ハ僅ニ日光ノ斜影ヲ承ルニ過キス、且ツ觀ル者モ亦直下ニ居テ頭ヲ昂ケテ之ヲ望マサルヲ得ス、是ヲ以テ微ク外ニ嚮フニ非サレハ、其圖像ヲシテ分明ナラシム可ラス、其外部ニ在ル者ハ正ニ之レト相反スルナリ、

又「ボンドロシヨーム」寺ニ造リテ觀ヨ、凡ソ十分ニ日光ヲ承ル彫像ハ、其

頭頸ヨリ手足并ニ體殼ニ至ルマテ、苟モ其圖像ノ中ノ尤モ人ノ注目ヲ要スル處ハ、粗ホ大體ヲ存シテ絶エテ瑣屑ノ巧ニ涉ルコト無シ、其必スシモ人ノ注目ニザル處ハ、刀痕縱横ニシテ畫線極メテ稠密ナリ、此レ他無シ、全像既ニ盡ク日光ヲ受クルヲ以テ、若シ人ノ注目スル處ニ於テ、細屑ノ巧ヲ逞ウスルモ、觀ル者錯亂シテ或ハ作者ノ大旨ノ在ル處ヲ喪失スルノ患有リ、若夫レ必ズシモ人ノ注目ニザル處ハ、細々畫線ヲ施シテ、凸凹ノ形ヲ繁錯ナラシムルモ、其光線ヲ受ルコト平坦ナル處ノ太甚ナルカ如クナラス、此レ猶ホ文章ニ在リテ、作者ノ最モ精神ヲ注ク處ハ、字句必ス簡潔ニシテ萬鈞ノ力有ラシメ、然ル後無用ノ處ニ於テ、反リテ疊嶂層澗ノ勢ヲ爲シテ、以テ其筆力ヲ恣ニスルカ如シ、

希臘アプテールノ小寺院ノ彫鑿ヲ觀ルモ、其作者用意ノ處少シモ右ニ舉グル所ト異ナル無シ、顧フニ希臘建築ノ今日ニ存スル者猶ホ頗ル多

クシテ、其徴證ス可キ者大抵皆相同シキヲ見ルキハ、此レ作者豫メ意ヲ此ニ用ヒシヲ知ル可シ、決シテ一時偶然ノ故ニ非サルナリ、夫レ希臘彫刻家ニシテ其建築ニ施ス者ニ係リテ意ヲ用フルコト此ノ如クナルキハ、我カ彫刻家ニ在リテハ尤モ當ニ心ヲ此一著ニ潜ム可キノリ、抑々我佛蘭西ノ氣候風土ヲ希臘ニ比スルキハ、彫像ニ於テ極メテ不便ナルヲ以テ、其日光ノ力ヲ料度スルコトハ、獨リ有益ナルノミナラス、亦必ス欠ク可ラス、夫レ希臘ノ風土温暖宜ヲ得ルコト彼ノ如ク、日光ノ清明ナルコト彼ノ如クニシテ、彫刻家ノ運刀ニ於テ猶ホ心ヲ用フルコト是ニ至ルキハ、吾彫刻家ニ在リテハ、其ノ手段ニ於テ益々精微ヲ加フルコト古人ニ倍シザレハ、其功效終ニ古人ニ及フコト能ハス、此レ彫刻家ノ必ス知ラザル可ラザル所ナリ、

然リ而シテ方今吾彫刻ノ建築中ニ施ス者ハ正ニ之レト相反シテ、陰陽

向背及ヒ運刀ノ疎密等ニ至リテハ、曾テ心ヲ致サス、怪ムコト無キナリ、彼レ唯夫ノ博士院ノ學士ノ言フ所ヲ是レ守リテ、而シテ博士院ノ學士ハ此レ等ノ事ニ至リテハ、深ク思慮ヲ加ヘズ、嘗ニ思慮ヲ加ヘザルノミナラス、苟モ作者心ヲ是ニ用フルヲ見ルキハ、罵詈シテ之ヲ鄙辱ス、曰ク此レ彫刻家ニ非ザルナリ泥工ナリト、而シテ其意自ラ以爲ラク方今美學上ノ道理ニ於テ誰レカ喙ヲ我儕ノ論說ニ容ル、者ソ、苟モ伎藝ニ於テ名ヲ成サント欲スル者ハ、皆唯吾儕ノ指授ニ依レト、殊ニ知ラス我カ第十二紀及ヒ十三紀ノ時ノ彫刻家ハ、其建築ニ係ル彫刻ニ於テ、心ヲ日光ノ力ニ用ヒシコト、一ニ希臘人ニ倣フテ以テ常ト爲セリ、此レ果シテ彫刻ニ非ズシテ泥工ナリト謂フ可キ邪、何ソ博士家ノ輩ノ理ニ悖レルヤ、我カ第十二紀及ヒ十三紀ノ時ノ彫刻家ハ、以爲ラク苟モ彫鐫ヲシテ顔面手足人ノ注目ス可キ處ニ於テ、必ズ賞鑒家ノ眼ニ漏ル、所無カラシ

メント欲スルハ、獨リ圖像ノ本質ヲ以テ足レリト爲サズシテ、必ス十分注意ヲ加ヘテ、更ニ本質ニ於テ自ラ表シテ人目ニ注射スルノ功ヲ得セシメザル可ラズト、此ニ由リテ之ヲ觀レハ彫刻家苟モ其巧ヲ建築中ニ施スルハ、其運刀ノ巧妙ナルノ恃ム可キニ非スシテ、亦更ニ其巧妙ノ處ヲ發揮シテ、觀ル者ノ眼ニ漏レザルコトニ注意ス可キヲ、章々トシテ明ナリ、

ウイオレールギニク氏ハ畢生力ヲ我カ中古ノ建築彫刻ニ竭シ、苟モ注目ス可キ處ハ、皆搜抉シテ遺ス所無シ、蓋シ其人天姿微密ノ才ヲ有シ、之ニ繼クニ勤敏ヲ以テス、是ニ於テ其言一々肯綮ニ中ラサル莫シ、故ニ予屢々其論ヲ引テ以テ參證ニ備ヘリ、而シテ茲ニ又其論ヲ舉グ、蓋シ其言ニ曰ク、我カ中古ノ彫刻家皆以爲ラク吾佛蘭西ノ氣候ニ在リテハ、凡ソ壁牆ニ傍フテ彫像ヲ置クハ、久チ經ズシテ其色暗然トシテ壁牆ノ色ヨリ

モ更ニ黎黒ヲ成スニ至ル、此レ他無シ、空氣寒且ツ濕ニシテ、石ノ表面ニ於テ至細ノ蠃蝕ヲ生スルカ故ナリ、是ヲ以テ初ハ其彫像ノ色壁牆ト分割シテ判然明瞭ナルモ、其終リヤ終ニ塊然タル一頑石ノ如キヲ成スニ至ル、此レ觀ル者ニ在リテ尤モ厭惡ヲ生スル所以ナリ、是ヲ以テ我が中古ノ作者、壁牆ニ傍フテ其彫像ヲ置クヲ甚タ希ナリ、若シ己ムコトヲ得ズシテ之ヲ置クハ、必ズ其傍ニ就テ「シポール」副壁及ヒ「モンタン」柱ノ類ノ屬ヲ施シテ以テ其上ヲ蔽フ、是ニ於テ空氣ノ侵襲ヲ免ル、ノミナラズ、且ツ此等ノ物各々固有ノ一色有ルヲ以テ、彫像ト相反映シテ益々人眼ニ明瞭ナラシムルヲ致ス可シ、

ウイオレール氏又曰ク、夫レ尋常壁牆ニ傍フテ彫像ヲ置クコトハ猶ホ可ナリ、其初メ之ヲ置クノ時ニ在リテハ、縱令ヒ彫像其色ヲ變ズルノ後ト雖モ稍々壁固有ノ色ト相異ナル者有ルヲ以テ、猶ホ頗ル觀ル者ノ眼ニ分

明ナルヲ得、若夫レ孔穴ヲ施セル牆壁ニ傍フテ彫像ヲ置シカ如キハ、吾レ其何ノ故タルヲ知ラズ、其牆壁既ニ孔穴有ルヲ以テ、空氣傍通シテ之ヲ侵蝕シ、點斑模糊トシテ表面ヲ蔽ヒ、又日光ノ射入スルヲ以テ、像ト壁ト并ニ光線ヲ受ケテ、此二物其固有ノ色ヲ以テ自ラ相反映スルヲ得ズ、是ニ於テ觀ル者極メテ近接スルニ非サレバ、殆ント一黒塊ノ駢立スルヲ見ルカ如キヲ免レズ、顧フニ我カ「ルーヴル」宮ノ新築ノ部分ノ前面ニ施ス彫巧ノ如キハ、必ズ久シカラズシテ此患ヲ生スルヲ疑無シ、但此ノ部分ノ彫鑄ハ本ト多ク工費ヲ糜セシト雖モ、實ハ極メテ拙劣ニシテ、獨リ裝飾ノ美ヲ發セサルノミナラス、反リテ建築全體ノ疵病ヲ致セリ、是ヲ以テ異日點斑模糊トシテ人目ヲ厭ハシムルニ及ヒテハ、之ヲ除キ去ルモ可ナリ、然レモ作者ニ在リテハ其心ヲ執ルヲ豈ニ是ノ如クナル可ケン哉、凡ソ「ルーヴル」宮ノ如キ大建築ニ就テ彫像ヲ作ルルハ、務テ運

刀ノ迹ヲシテ清楚ナラシメ、以テ十分ニ日光ヲ受ケシム可シ、此レ蓋シ彫刻ノ大法ナリ、然レモ當時ノ彫刻家ハ曾テ意ヲ此ニ用ヒズ、即チ建築家モ亦初ヨリ其彫刻家ヲシテ、此法ニ循ハシムルヲ思ハズ、此二人ノ者各々自ラ別ニ目的トスル所有リ、其作物ノ此ノ如クナルヲ固ヨリ怪ムニ足ラザルナリ、

ウイオレー氏ノ論洵ニ當レリ、是故ニ古昔ノ作ヲ觀ル者、唯其美麗整齊ナル處ヲ感服シテ、之ニ倣ハント欲スル者ハ、未ダ眞ノ作者ト稱スルニ足ラス、必ズ其作ノ能ク此ノ如クノ美麗整齊ナルヲ致ス所以ノ者ヲ得テ後可ナリ、是故ニ作家タル者ハ、獨リ其手腕ヲ運スルニ巧ナルノミニテハ足ラス、即チ詩人文人ノ如キモ、其字句如何ニ瑰麗ナルモ、其結構如何ニ奇傑ナルモ、其立意如何ニ盛大ナルモ、若シ其題目ト相蒙ラザルルハ、終ニ失體タルヲ免レズ、建築中ニ施ス彫刻モ、亦猶ホ是ノ如キナリ、若シ

彫刻家夫ノ日光ノ向背、刻鑄ノ表裏并ニ其刻像ヲシテ空氣ノ侵蝕ニ免レシムルノ處置等ニ注意スルニ非ザレハ、其作如何ニ巧妙ナルモ豈ニ能ク久ク星霜ヲ經テ後世ニ施ス、コトヲ得ン哉、

○第四篇 畫學

○第一章 筆畫 ○設色 ○渲染 ○濃淡

今畫幀ト彫像若クハ建築トヲ把リテ之ヲ比較スルハ、同一人目ヲ怡ハシムル藝術ナリト雖モ、其用フル所ノ手段全ク相異ナリ、此レ人々ノ皆知ル所ナリ、蓋シ彫像及ヒ建築モ亦種々ノ條線ニ因リテ以テ其體制ヲ構成スル者ニシテ、此一著ハ繪事ト異ナルヲ無シ、但彫像及ヒ建築ニ在リテ、其線畫現ニ高下淺深遠近ノ別有リテ、獨リ目力之ヲ分ツノミナラズ、即チ手ヲ以テ之ニ觸ル、コトヲ得、若夫レ畫ニ至リテハ然ラズ、蓋シ人之ヲ視ルハ、高キ處有リ、低キ處有リ、淺深有リ、遠近有ルカ如シト雖モ、實ハ平扁ノ一布幀ニシテ、初ヨリ此レ等ノ勢有ルヲ無シ、故ニ若シ手ヲ以テ之ニ觸ル、ハ、絶エテ之ヲ別ツ可ラズ、是故ニ高低遠近ノ勢ハ、彫刻建築ニ在リテハ多ク精神ヲ費ヤスヲ無シ、繪事ニ至リテハ其巧處

正ニ此ニ在リ、而シテ其術全ク明暗ノ二象ヲ和調スルノ一事ニ存ス、此レ其彫刻建築ト異ナル所以ナリ、  
 是故ニ繪畫ノ繪畫タル所以ノ者ハ、ペルスベク「チーヴ」ト「クローレール」ノ  
 二ノ者ニ在リ、遠近ト色彩トノ謂ナリ、色彩有リ、故ニ此物ト彼物トヲ分  
 別スルコトヲ得、若シ此レ無キハ亦一塊ノ塗抹ノミ、遠近有リ、故ニ見ル  
 所ノ物各々其位置有リ、若シ此レ無キハ亦一簇ノ青黃相混淆セル者  
 ノミ、世人筆畫ヲ尊フコト太甚ナリ、然レヒ筆畫モ亦實ハ色彩ノ發スル所  
 タルニ過キス、蓋シ筆畫ナル者ハ、畫家先ツ筆ヲ執リ、其圖セント欲スル  
 所ノ物ノ形象ヲ造作シ、然ル後從フテ彩色ヲ施ス者ナリ、然レヒ其畫成  
 ルノ後、或ハ高處有リ、或ハ深處有リ、或ハ表有リ、或ハ裡有ルハ、筆畫ノ然  
 ラシムル所ニ非シテ、畢竟色彩ノ潑スル所ナリ、色彩ニ因リテ高下深  
 淺ノ勢ヲ發スル之ヲ「モデレー」ト謂フ、蓋シ畫家色彩ヲ用フル、或ハ濃或

ハ淡、此レニ因リテ其部位ヲシテ高峻ノ勢ヲ發シ、深陷ノ狀ヲ生セシム、  
 其尤モ甚キニ至リテハ、高キ者ハ蒼穹ヲ摩スルカ如ク、低キ者ハ黃泉ニ  
 入ルカ若シ、此レ其効力少シモ筆畫ト相下ラス、故ニ畫家タル者、此二ノ  
 者ニ於テ一モ廢スルコト有ルヲ得ス、  
 抑々色彩ノ色彩タル所以ノ者ハ、何ニ山リテ然ル乎、請フ先ツ明暗ノ二  
 ノ者ヲ論スルコトヲ得ン、蓋シ明ハ太陽光線ノ致ス所ニシテ、其色タル白  
 シ、暗ハ則チ太陽光線ノ及バザルノ致ス所ニシテ、其色ハ之ヲ黒ト謂フ  
 モ可ナリ、但太陽光線白色タリト雖モ、初ヨリ單純無雜ノ物ニ非ス、故ニ  
 其分離スルニ及ヒテヤ、自ラ若干數ノ色彩ヲ發ス、曰ク黃色ナリ、曰ク赤  
 色ナリ、曰ク青色ナリ、此三ノ者ハ凡ソ色彩ノ原質トスル所ニシテ、其他  
 百種ノ色ハ皆此三色ノ調合スル所タルニ過キス、此ニ由リテ觀レハ、天  
 下萬種ノ色彩ハ皆白色中ニ現ハルト謂フモ可ナリ、

トレー氏曰ク、筆畫ノ繪畫ニ於ケルハ、猶ホ音節ノ音樂ニ於ケルカ如シ、人若シ聲音ヲ外ニシテ、別ニ所謂音節ナル者ヲ求メント欲スルモ得可ラズ、他無シ、音節ハ即チ聲音ノ節奏ナレバナリ、今筆畫モ亦然リ、色彩ヲ外ニシテ、別ニ所謂筆畫ナル者有ルヲ無シ、他無シ、筆畫ハ正ニ數種ノ色彩ヲ分畫シテ相混セシメザルニ過ギザレバナリ云々ト、氏又曰ク、世ノ筆畫ヲ尊フコト太甚ナル者動モスレハ云フ、プリュードンハ誠ニ賦彩ニ妙ナリ、獨リ其筆畫ノ法ヲ得サルヲ奈何ト、此レ大ニ然ラズ、プリュードンノ筆畫ノ法ヲ得サルニ非ス、其法自ラ他人ト別ナルノミ、予チ以テ之ヲ觀レハ、プリュードンノ筆畫法ハダウイットニ勝ルコト遠キコト甚シ、蓋シダウイットハ筆畫ヲ尊フコト太甚ニシテ、其畫ヲ作スヤ、先ツ諸線ヲ勾染シ、其形象ニシテ嚴整ナルコト幾何ノ諸形象ノ如クナラシメテ、自ラ以爲ラク繪事ノ妙此ニ盡キタリト、而シテ其諸線中ノ色彩

ニ至リテハ甚ク心ヲ用ヒズ、此レ直ニ其中物無クシテ徒ニ其外ヲ限ルト謂フ可シ、プリュードンハ則チ此ニ異ナリ、先ツ色ヲ施シテ以テ全幀ノ大勢ヲ經營シ、線條ハ則チ之ニ隨フ、此レハ則チ先ツ物有リテ然ル後其外ヲ限ルト謂フ可シ、其次序相反スルコト此ノ如シ、或人ノ之ヲ諒訕スルコト亦宜ナラズ乎、

トレー氏又曰ク、畫家シ、セリヨールハ先ツ彩色ヲ用ヒテ物體ヲ渲染シテ、然ル後從フテ各色ノ明暗ヲ調諧シテ、所謂筆畫隨フテ出ツ、此レ其法ナリ、今ノ所謂正法ナル者ハ此レニ異ナリ、筆畫ヲ用ヒテ物形ノ外邊ヲ鈎匡スルコト、猶ホ幾何學家ノ形象ヲ圖スルカ如シ、然ル後隨フテ彩色ヲ施シテ、其彩色タル平々凡々ニシテ一モ奇ヲ出タス所無シ、寧ン以テ正法ト爲スニ足ラン哉、シヤセリヨールハ正ニ之ト相反ス、先ツ種々ノ色彩ヲ用ヒテ其圖スル所ノ物形ヲ作り、明暗ノ力ヲ和調シテ其



高下遠近ノ勢ヲ制シ、物形既ニ成リテ其各部ノ勢布上ニ躍然タルニ至リ、然ル後油煙黒ヲ用ヒテ以テ各部ノ周邊ヲ勾畫シテ、其線條筆力實ニ人ヲシテ驚嘆セシム、此レ其貴フ可キ所以ナリ、

又曰ク、今ノ博士家ノ爲ス所ハ、專ラ筆畫ヲ主張シテ唯物形ノ部位ヲ畫斷スルヲ是レ貴フ、此レハ則チ喜テ事物ヲ分別シテ相接セサラシムルト謂フ可シ、眞ノ畫家ハ則チ是レニ異ナリ、先ツ色彩ヲ用ヒテ所謂物形ヲ造作シ、高下遠近既ニ成リテ然ル後之レガ勢ヲ畫成ス、是レ之ヲ眞ノ畫法ト謂フ、

凡ソ此レ皆彩色ヲ尊ヒテ筆畫ヲ抑フルノ論ニシテ、予ノ所見正ニ此ト同シ、

是故ニ諸種ノ物質ノ各々一彩色有ル所以ノ者ハ他無シ、其物ノ固有ノ性質ト夫ノ化學ノ道理トニ由リテ、太陽光線ノ中ニ就テ或ハ特ニ此色

線ト和シ、或ハ殊ニ彼色線ト和スルヲ致ス、此レ其物ノ色各々相異ナル所以ナリ、是ニ知ル、物體ノ白色ナル者ハ、其質ノ化學上ノ理ニ由リテ、太陽光線ヲシテ少モ竄入スルヲ得セシメズシテ、盡ク反射シテ之ヲ放ツニ由リテ然リ、其黑色ナル者正ニ之レト相反シテ、凡ソ光線中ノ彩色皆之ヲ吸收シ、一モ之ヲ放遺スルヲ無キニ由リテ然リ、

物ノ眞黒ナル者ト眞白ナル者トハ、蓋シ其兩極ナリ、此兩極ノ間、色ノ相異ナルヲ萬殊ニシテ、殆ント名狀ス可ラズ、然レモ此レ皆太陽光線ヲ吸收スルノ高下ニ由リテ生スルニ過キス、是ニ於テ乎兩色判然相異ナル者ノ中無數ノ少差異有リテ、遠ニ分別ス可ラサルニ至ル、

且彩色ヲ以テ言フキハ、天下ノ物一モ相分隔スル者有ルヲ無シ、何ヲ以テ之ヲ謂フ、曰ク兩物相接スルキハ、甲ノ物其色彩ヲ乙ニ射送シ、若クハ乙ノ物其色彩ヲ甲ニ射送スル是レナリ、是ヲ以テ凡ソ物皆其太陽ノ光

線ヲ喰收スルニ由リテ一種ノ色ヲ得ルノ外、又其隣接スル所ノ物ノ色彩ヲ勾引シテ、以テ己レノ固有ノ色ヲ和調セザル莫シ、而シテ其隣物ノ色彩ヲ勾引スルヤ、其度ト級ト一ナラズ或ハ甚シキ有リ、或ハ甚シカラザル有リ、他無シ、其色固有ノ化學上ノ性ト其物形ノ表面ト相異ナルノ致ス所ナリ、此ニ由リテ之ヲ觀レハ、天下ノ物形其彩色ノ相異ナルヲ殆ント窮詰ス可ラズ、予前ニ音聲ニ係リテ云ヘリ、顯微鏡ノ力ニ由リテ頭腦中聽神經一條ヲ觀察スルニ、各々三千枝有リテ、其形色相異ナリ、是ニ知ル、聲音ヲ聽クノ術益々進闡スルキハ、此レ等細枝各々一音ヲ傳フルヲ以テ、全聽神經ノ總フル所其音ノ種數幾何ナルヲ知ル可ラス、然レハ則チ今ノ音樂ノ聲律ニ倍スルコト又何如ソヤ、願フニ視神經ノ作用ニ係リテハ、學術ノ研究ニ由リテ得ル所、未タ聽神經ニ係ルノ明白ニシテ且ツ精微ナルカ如クナラスト雖モ、理ヲ推シ序ヲ追フテ之ヲ想像スルニ、

目ノ視神經ニ於ケルモ亦猶ホ此ノ如クナル可キナリ、果シテ然ラハ、今日ニ在リテ人ノ色彩ヲ分別スルコト己ニ甚ク夥キモ、異日視學益々進ムノ後ニ及ヒテハ、其夥キコト又何如ソヤ、

以上論スル所ニ由リテ之ヲ言ヘハ、畫學ノ畫學タル所以ノ者、唯色彩ノ一點ニ存スト謂フモ不可ナル無キナリ、若夫レ其他ノ名稱即チ筆畫ト云ヒ、匂引ト云ヒ、渲染ト云フカ如キハ、畢竟同一事ニシテ、其區別ハ本質ニ在ラスシテ特ニ表面ニ在リ、然レモ此レ等ノ語ハ、吾人ノ藝用已ニ久キヲ以テ、今必スシモ之ヲ省テ一ト爲スコト須ヒス、但苟モ繪事若クハ賞鑒ニ志有ル者ハ、必ス其眞ノ意義ノ在ル所ヲ知リテ、其外貌ノ惑ハス所ト爲ラサルヲ尙シト爲ス、

色彩ヲ用フルノ道ハ、畫學ニ於テ分ケテ二ト爲シテ之ヲ論ス、一ハ渲染ナリ、一ハ賦彩ナリ、賦彩トハ白色ト黑色トヲ除キ、其他一切ノ色ヲ用ヒ

テ以テ物形ヲ象ルヲ謂フ、渲染トハ同ク色彩ニ係ルト雖モ、特ニ明暗ノ二者ノ力ヲ調劑シテ、物形ヲシテ高下淺深ノ勢ヲ發セシムルヲ謂フ、渲染ノ語蓋シ二義有リ、茲ニ云フ所ノ意義ハ畫家尋常用フル所ナリ、他ノ一意義ニ至リテハ、大ニ此ト異ニシテ、決シテ相混ス可ラス、何ノ謂ソヤ、曰ク、近時大家特ニランブランドノ如キ、其畫ニ於テ一種異常ノ手段ヲ用ヒテ、以テ明暗ノ力ヲ判別スル者、之ヲ號シテ渲染家ト謂フ、此ハ尋常渲染ノ法ト殊ニ相類セス、然レモランブランドノ如キ誠ニ希世ノ大家ニ論無シ、然レモ畢竟同一畫家タルニ過キズ、之ヲ指シテ大家ト稱シ名家ト稱シテ可ナリ、何ソ必スシモ別ニ渲染家ノ語ヲ爲シテ之ヲ稱スルヲ須ヒン、然レモ、賞鑒家既ニ此ヲ以テ之ヲ稱ス、故ニ予必スシモ之ヲ廢スルヲ欲セス、即チ渲染ノ語ノ第二ノ意義ハ、此異常ノ手段ヲ指スナリ、

フロマンタノ氏曰ク、ランブランドノ畫法ニ於ケル、奇ナリト謂フ可シ、先ツ暗ノ一色ニ由リテ案ヲ起シ、一切ノ物皆舉ケテ之ヲ一黯澹ノ域中ニ入レ、然ル後徐々ニ明色ヲ引テ之ヲ揮洒ス、而シテ其明色タルヲ光暉遠ク射テ且ツ爛燦タルヲ大ニ他家ノ比ニ非ス、今之ヲ形容センニハ、一幀中苟モ明色ノ在ル處ハ、暗色必ス之ヲ環擁セルヲ、猶ホ蒼海ノ大地ヲ環ルカ如シ、而シテ所謂暗色モ亦一種ニ非ス、或ハ黢然トシテ深黒ナル處有リ、或ハ黝然トシテ淺黒ナル有リ、而シテ其最モ稀薄ナル者ハ、靄然トシテ全幀ノ上ニ浮ヒテ、人ヲシテ其下萬種ノ彩色ヲ認視セシム、是ニ於テ乎色彩ノ最モ濃ナル者モ、反映ノ功ニ由リテ自ラ善ク光線ヲ承受シテ黒色ヲ爲スニ至ラズ、此レ一種渲染ノ法ニシテ極メテ爲シ難キ者ナリ、而シテランブランド此法ニ於テ特ニ至巧ヲ究極シ、蓋シ此法ヤランブランド意ヲ以テ之ヲ創作セシニ非ス、但其天姿人ニ絶スルニ因

リ此法ニ就テ新意ヲ増加シ、從フテ之カ手段ヲ發見セリ、是ヲ以テ世人此法ヲ稱シテ「ランブランド」ト曰ヒ、又「ランブランド」ヲ號シテ渲染家ト曰フニ至レリ、

フロマンタン氏又曰ク、此一種ノ渲染法ニ由リテ描寫妙ニ入ルキハ、畫中有スル所ノ生氣自ラ活潑空靈ニシテ、大ニ尋常ノ畫ト勢ヲ異ニス、蓋シ其勾畫并ニ各部ノ周邊隱然トシテ雲烟ヲ帶フルカ如ク、又其淺深高下ノ勢ノ如キモ、勾畫ノ爲メニ一概ニ束縛セラレザルヲ以テ、自然ノ形容ヲ發スルヲ得、是ニ於テ其淺ナル者深ナル者高キ者低キ者并ニ細湔小漣ノ風ニ隨フテ起伏スルカ如シ、

又曰ク、此法ニ由リテ描寫スルキハ、其畫圖ノ尤モ生氣ヲ發揚スルヲ專ルハ蓋シ怪ムニ足ラス、何トナレハ此法ハ專ラ油煙筆ヲ以テ線條ヲ畫スル者ニ反シテ、先ツ各部ノ勢ヲ寫シテ、線畫ハ隨フテ自然ニ發起ス

ルカ故ニ、其形象最モ實物ニ肖似スルヲ致ス、此レ乃チ此法ノ畫ノ庶物ニ自然ノ生氣ヲ有スル所以ナリ、庶物既ニ自然ノ生氣ヲ有シテ、而シテ作者物ヲ觀ルノ情又寄ヒテ其中ニ在リ、此レ乃チ此法ノ畫ノ其作者ニ生氣ヲ有スル所以ナリ、夫レ此二種ノ生氣ヲ併有ス、其尤モ活潑靈動ノ狀有ルヲ豈ニ宜ナラス乎、

又曰ク、此法ヤ其色彩徒ニ布上ニ游在スルニ非ズシテ、深ク其背ニ透ル、此レ其一長ナリ、其遠近隱顯表裏ノ勢ヲ取ルヲ尤モ眞ニ逼ル、此レ其二長ナリ、凡ソ藝術ハ皆作者自己ノ感情ヲ寫シテ之ヲ作物中ニ輸ス者ナリ、故ニ凡ソ作物ト云フキハ、感慨ノ情必ス其中ニ在リ、而シテ此法ヤ畫人ノ感慨ヲ描寫スルニ最モ便ナリト爲ス、此レ其三長ナリ、

渲染ノ語ニ係リ一種ノ意義蓋シ此ノ如シ、若夫レ其尋常ノ意義ハ此レニ異ニシテ、凡ソ畫家皆之ヲ用ヒサル莫シ、即チ色彩ヲ用ヒテ明暗ノ二

者ヲ裁制スルヲ謂フ、蓋シ畫家ノ秘訣一ニシテ足ラズシテ、此法モ亦其一ナリ、

描ク所ノ物自ラ淺深高下ノ勢有リ、又其物中各部モ此勢有リ、此レ前ニ所謂「モデレー」ナリ、而シテ「モデレー」ハ色彩ノ渲染宜キヲ得ルニ由リテ發スル者ナリ、故ニ此二ノ者ハ畢竟之ヲ同一視スルヲ得可シ、何トナレハ「モデレー」ハ人ヲシテ畫幀中ニ於テ自ラ淺深高低起伏遠近ノ勢ヲ見セシムル者ニシテ、而シテ之ヲ發スルヲハ夫ノ太陽光線ヲ調諧シ、明暗ノ二物ヲシテ宜キヲ得セシムルニ非サレハ得可ラス、是ヲ以テ渲染法無キキハ「モデレー」ハ初ヨリ得可ラス、渲染法宜キヲ得ルキハ「モデレー」ハ求メズシテ得ベシ、

夫レ然リ是故ニ全布皆明色ヲ用ヒテ、絶エテ暗色ヲ置カザルキハ、夫ノ淺深高下ノ勢ヲ發スルヲ極テ難シ、他無シ、作者其色彩ノ濃淡ニ於テ異

常ノ注意ヲ加ヘテ、其レヲシテ少シモ突如急速ノ處有ラシム可ラサルヲ以テナリ、而シテ之ヲ爲スニハ、其眼力異常ニ精密ニシテ、且ツ彩料ノ相映シテ力ヲ發スルノ理ニ於テ異常ノ精鍊ヲ要ス、然ラザレバ全幀充分ニ光線ヲ曳キ、少シモ多寡無キヲ致シテ、一望スルキハ各部皆平坦ニシテ、少モ起伏ノ勢ヲ生スルヲ莫シ、

是故ニ物ノ淺深高下ノ勢ハ、皆渲染ノ發スル所ニシテ其遠近ノ勢モ亦此渲染法ノ發スル所ナリ、一物中ノ淺深高下ノ勢ハ、所謂「モデレー」ニシテ、一幀中ノ衆物ノ遠近ハ、所謂「ベルスベクチャーヴ」ナリ、是ニ知ル、渲染ノ法ハ既ニ物々ニ就テ淺深高低ノ勢ヲ裁制シ、又全布ニ就テ遠近上下ノ勢ヲ裁制シ、又一畫幀ノ巧拙ヲ爲ス所以ノ者ハ、此二者ノ宜キヲ得ルト否ラサルト尤モ其多キニ居ルヲ、

是故ニ畫家タル者ハ、獨リ物々ノ各部ニ就テ高下深淺ノ勢ヲ取ルノミ

ニテハ足ラス、必ス其物々ヲシテ又遠近表裏ノ勢有ラシメザル可ラズ、他無シ、彼レ本ト全幀ヲ以テ其伎ヲ施ス所ト爲シテ、而シテ全幀ハ必ス衆物相聚リテ以テ一圖ヲ爲ス、是ヲ以テ若シ衆物各々遠近ノ勢無キハハ、全圖ノ旨趣錯雜シテ一ニ歸スルヲ無シ、又一圖ノ中必ス作者ノ特ニ意ヲ用フル處有リ、此レ即チ主ナリ、其他ノ處ハ皆其實ナリ、夫レ遠近ノ勢賓主ノ別皆明暗ノ二者ニ由リテ之ヲ發ス、故ニ曰ク、渲染ノ一法ハ繪畫ニ於テ極メテ重要ナリト、蓋シ圖中ノ主トスル處ハ明色ノ最モ其力ヲ逞クスル所ナリ、故ニ之ヲ名ケテ光線ノ府ト曰フ、而シテ歴史ノ典故ヲ描クカ如キハ、大抵事迹ノ中央トスル處ヲ以テ亦光線ノ中央ト爲ス、即チ拿破崙ノ落日橋ノ戰ヲ描クカ如キハ、拿破崙ノ像ヲ以テ事迹ノ中央ト爲シテ、餘ハ皆之レカ賓タルニ過ギザル是レナリ、光線既ニ圖畫ノ中央ニ注射シテ以テ主位ヲ爲シ、然ル後主中ノ賓ヨリ

賓中ノ賓ニ至リ、是ノ如クニシテ漸次ニ却退シテ、遠方ニ至リテ光線全ク其力ヲ斂ム、此レ即チ全幀遠近ノ勢ナリ、此レ即チ題目結構ノ法ナリ、而シテ皆渲染法ニ由テ成ル、

題目ノ結構ハ作者ニ在リテ極メテ意ヲ致サ、ル可ラス、他無シ、圖中賓主ノ別ハ此ヨリ發起スルヲ以テナリ、作者若シ意ヲ此ニ用ヒサルハ、其描ク所ノ物々ノ深淺高下如何ニ自然ノ勢有ルモ、全圖紛錯シテ統屬スル所無キヲ致サン、此レ畫法ニ在リテ一大禁忌ナリ、古昔ノ畫家ハ明暗ノ勢ヲ制スルニ於テ未ダ所謂渲染ノ法ヲ得ズ、是ヲ以テ其圖ヲ制スルヤ唯一物ヲ以テ他ノ一物ノ後ニ有ラシメ、是ノ如クニシテ前後相并ヒテ以テ遠近ノ勢ヲ取ルニ過キスシテ、之ヲ觀ルハ唯衆物ノ層累スルヲ見テ、曾テ眞ノ遠近ノ勢有ルヲ無キヲ、猶ホ高ニ登リテ山麓ノ人家ヲ俯瞰スルカ如シ、

畫家明暗ノ勢ヲ取ルノ法ヲ得テヨリ、畫境大ニ進開シテ、其勢力大ニ建築彫刻ノ上ニ出ツルニ至レリ、他無シ、此二術ハ自ラ明暗ヲ明ニスルヲ能ハスシテ、必ス太陽自然ノ光線ニ資リテ常ニ之レカ制ヲ受ク、畫ニ至リテハ然ラス、其彩色ヲ調諧シ、渲染ノ法ヲ施シテ以テ明暗ノ勢ヲ出ス、全ク自家ノ胸中ニ在リ、此レハ則チ太陽ヲ左右シテ、意ニ任セテ之ヲ探縦スルト謂フモ可ナリ、蓋シ其畫ヲ作スヤ、先ツ圖中主宰ノ在ル所ヲ定メ、然ル後渲染ノ法ヲ以テ夫ノ明色ヲ引テ之ヲ致シ、視學ノ理ニ循フテ之ヲ裁成シ、明ナラシメシト欲スル處ハ之ヲ明ニシ、暗ナラシメシト欲スル處ハ之ヲ暗ニスルヲ、一ニ唯色彩ノ濃淡ニ資ルノミ、建築家ナリ彫刻家ナリ、其作一タヒ成ルキハ、明暗一ニ太陽ノ來リ照スニ任セテ、初ヨリ之ヲ裁割探縦スルノ道無シ、獨リ此ノミナラズ、一年四季ノ別ヨリ一日二十四時ノ差ニ由リ、或ハ明ヲ致シ或ハ暗ヲ致シテ、作者ハ唯手ヲ

拱シテ之ヲ觀ル有ルノミ、

畫家其圖ヲ作スヤ、春景ヲ寫サント欲スルキハ、其畫自ラ春景有リテ、時ノ四季ニ關スルヲ無シ、夏秋冬ノ氣候皆然リ、其朝晝暮ノ景皆同シ、其景一タヒ成ルキハ、布上ニ着在シテ復タ除ク可ラス、人或ハ曰ハシ、畫家ト雖モ其功成ルノ後、太陽ノ光右ヨリ照シ、左ヨリ照シ、或ハ上ヨリシ、或ハ下ヨリスルニ於テ、其采色ノ觀自ラ異ナルヲ無キヲ能ハズト、此レ大ニ然リ、但彼レ既ニ采色ノ渲染ヲ以テ自ラ明暗ヲ製セルヲ以テ、其功一タヒ成ルキハ、豫メ明ニ其畫幀ノ太陽光線ヲ受クルニ於テ、左右ノ孰レカ便ナルヲ知ルヲ得ルナリ、左ヨリ受クルニ於テ便ナル乎、右ヨリスルニ於テ便ナル乎、上ヨリスル乎、下ヨリスル乎、彼レ皆豫メ明ニ之ヲ知ル、是夫以テ其畫幀ヲ置クニ於テ自ラ至便ノ處所ヲ擇フヲ得、此レ其長處ナリ、夫ノ建築彫刻ニ至リテハ、唯眞ノ光線ノ力ニ任スノミ、

夫レ此明暗ノ一法ハ、之ヲ言語ニ述フルトハ極メテ單簡ニシテ、極メテ爲シ易キ者ノ如シ、但之ヲ實際ニ施スニ至リテハ、其理化學ヨリ生スル者有リ、視學ヨリ生スル者有リ、其事極メテ微妙ニシテ殆ント未タ明知ス可ラサル者有リ、蓋シ英人ハ明暗ノ一法ヲ名ケテ「ブラック、エンド、オワスト」ト曰フ、白及ヒ黒ノ義ナリ、而シテ其原理ヲ究ムルニ於テ尤モ意ヲ致スト云フ、

蓋シ物ノ色有ルハ、其物質中有スル所ノ化學上ノ性ニ由リテ此光線ヲ喩受シ、彼光線ヲ放棄スルノ致ス所タルヲハ、前ニ既ニ之ヲ論セリ、是故ニ赤色ノ木棉ノ如キハ赤色ノ光線ヲ放還シテ、其他ノ光線ハ皆之ヲ喩入ス、但其之ヲ喩入スルヤ、盡ク喩入シテ少モ痕迹ヲ留メサルニ至ラス、此レ正ニ夫ノ明暗ヲ調諧スルニ於テ尤モ當ニ意ヲ致ス可キ所ナリ、即チ吳絨ノ一片ト天鵝絨ノ一片トヲ把リテ、同一染汁ノ中ニ浸スルハ、獨

リ其采色相同シカラサルノミナラス、亦其隣接スル所ノ物ノ反映ヲ受ルヲモ亦相同シカラス、此レ他無シ、吳絨天鵝絨ノ二物固有スル所ノ化學上ノ性質本ト相異ナルヲ以テナリ、嘗此レノミナラス、物質固有ノ性ヲ闡キ、獨リ采色ニ就テ言フモ、或ハ明或ハ暗ニ於テ殊ニ親和力ヲ有スル者有リ、或ハ甚ク親和力ヲ有セサル者有リテ、其度ト級ト各々一ナラス、即チ畫家常ニ用フル所ノ「ワレール」ノ語ハ、正ニ諸種ノ色ノ夫ノ明暗ノ二者ト相和スルノ度ヲ指シテ言フナリ、「ワレール」トハ色采ノ光ノ義ナリ、

此ニ由リテ之ヲ觀レハ、采色ノ濃淡ハ畢竟二ツニ分ケテ之ヲ論セサル可ラス、一ハ則チ所謂濃淡ニシテ、一ハ其色ノ固有ノ光是ナリ、畫家其賦彩ノ中自ラ明暗ノ二者ヲ諧和スルニ於テ尤モ難シトスル所ハ、正ニ其色ノ濃淡ト其固有ノ光トヲ明辨スルノ一著ニ在リ、之ヲ例ヘ



ハ、黄ノ中ニ得タル者ハ、紫ニ比スルキハ、光力過ニ富ム者有リ、是故ニ若シ畫家ノ設色ヲ用フルコト、專ラ紅紫青黄等ノ如キ單簡ノ物ハ、其濃淡ヲ和シ其光明ヲ辨スルニ於テ、初ヨリ難キ者無シ、獨リ奈何セン、其旨趣本ト實物ニ肖似スルニ在ルヲ以テ、其求ムル所ノ彩色多クハ單純ナラス、或ハ紅ニシテ微ク紫ヲ帶ヒ、或ハ黒ニシテ少ク碧ヲ帶フル等、其類一ナラス、是ニ於テ少ク濃ニ失スルカ少ク淡ニ失スルカ、或ハ其光明過多ナルカ、或ハ少ク及ハサルキハ、皆以テ其作チシテ疵病ヲ發シシムルニ足ル、此レ即チ難シトスル所以ナリ、

人或ハ云ハントス、設色ノ難キコト此ノ如クナリト雖モ、其差異畢竟至テ微少ナルヲ以テ、畫家或ハ少ク諧和ニ失スル有ルモ、必スシモ人眼ニ觸レザル可シト、此言凡庸ノ看客ニ在リテハ洵ニ然リ、若夫レ賞鑑家ノ眼識ヲ具スル者ニ在リテ然ラス、其畫幀ヲ觀ルニ於テ其圖ノ結構如何ニ

奇傑ナルモ、其筆畫如何ニ精緻ナルモ、若シ設色ノ間少ク調和ヲ得ザル者有ルキハ、必ス之ヲ指摘シテ以テ疵病ト爲スコトヲ知ル、故ニ畫家タル者ハ尤モ意チ此ニ致サル可ラス、且ツ世上畫幀甚ク巧緻ニシテ動モスレバ觀ル者自ラ心ニ快ナラサルコト往々之レ有リ、此ノ如キ者ハ作者ニ在リテモ看客ニ在リテモ、或ハ疵病ノ在ル所ヲ指摘スルコト能ハズ、其病多クハ色彩ノ未ク全ク調諧シズシテ、濃淡ノ度若クハ反映ノ効ノ充分ノ地位ニ到ラサルヨリ起ル者ナリ、其疵病極メテ些少ナルヲ以テ是ヲ以テ明眼者ト雖モ明ニ之ヲ指摘スルコト能ハス、然レモ其疵病ハ終ニ其看破ヲ免レズ、此レ正ニ看客ヲシテ隱然心ニ快ナラサシムル所以ナリ、

目ノ色ニ於ケル亦猶ホ耳ノ聲ニ於ケルカ如キナリ、之ヲ習フコト愈々至ルキハ、其自ラ感スルヤ愈々精密ナリ、故ニ音律ニ精ナル者ノ耳ヲ干犯

セント欲スルキハ、其事極メテ易シ、例ヘバ一音ノ一秒時間ニ數百萬ノ鼓動ヲ爲ス者ノ中ニ於テ、更ニ他ノ一音ヲ雜ヘテ其鼓動少ク相及バサルキハ、彼レ必ス感覺スル有ラン、賞鑒家ノ書ニ於ケルモ亦猶ホ此ノ如キナリ、全圖如何ニ精妙ナルモ、其中一點ノ欠缺ノ處有ルキハ、必ス其精明ノ眼ヲ刺衝スル有ルヲ免レス、故ニ畫家タル者完璧ヲ作サント欲スルキハ極細瑣ノ處ト雖モ皆以テ意ヲ致サ、ル可ラサルハ、此レガ爲メナリ、

今夫レ小笛ノ調子ノ極高ナル者即チ「レ」ノ如キハ、一秒時間ニ四千七百五十二ノ鼓動ヲ爲スナリ、顧フニ極メテ音律ニ精ナル者ト雖モ、其之ヲ聽クノ間ニ在リテハ、能ク此鼓動ノ數ヲ記セザルヤ明ナリ、然レモ衆器并奏スルノ時ニ當リ、其小笛ノ音ノ鼓動此數ニ至ラザルキハ、彼レ必ス其和調セサルヲ知ル、此レ人ノ耳ニ於ケル其精密ナルヲ實ニ驚ク

可キニ非ス乎、即チ其目ニ於ケルモ亦同シ、但聽學ハ視學ニ比スルキハ、其道理更ニ分明ナルヲ以テ、乃チ聲音ノ如キ鼓動ノ數ヲ計ヘテ之ヲ豫定スルヲ得、若夫レ色采ニ至リテハ、其濃淡ノ度未タ之ヲ明數ス可ラス、目ノ色ニ於ケル其學問上ノ道理未タ耳ノ聲ニ於ケルガ如ク精密ナラズ、是ヲ以テ音律ニ善キ者ノ調子ニ於ケルハ、苟モ相和セサルキハ明ニ其然ル所以ノ故ヲ指斥スルヲ得ルモ、畫ニ至リテハ其欠缺頗大ナルニ非サルヨリ、賞鑒家モ未タ遽ニ之ヲ摘發スルヲ能ハズ、然レモ此レ等ハ畢竟學術上ノ事ニシテ美學上ノ事ニ非ス、美學上ニ於テ言フキハ、賞鑒家ノ能ク指摘スルト否ラザルトニ論勿ク、苟モ其畫ニ慊ナル所有ルキハ、以テ作者ノ瑕類ト爲スニ足ル、予故ニ曰ク、作者苟モ純然ノ完璧ヲ得ント欲スルキハ、設色ノ際至微至細ノ處ト雖モ皆極メテ意ヲ致サ、ル可ラスト、

## ○第二章 充補ノ彩色

充補ノ彩色ハ近代ノ發見ニシテ、古人ハ曾テ之ヲ知ル者無シ、此事蓋シ前章論セシ所ノ事ト交渉極メテ密ナルヲ以テ、茲ニ之ヲ舉ケテ以テ前章ノ未タ足ラサル所ヲ補ハントス、

凡ソ畫家タル者皆曰ク、色ナル者ハ其濃淡實ハ染具ノ中ニ在ラスト、蓋シ同一青黃若クハ紅色ニシテ且ツ同一濃淡ナルモ、之ニ隣接スル所ノ色ニ隨フテ、或ハ濃ヲ成シ或ハ淡ヲ成ス、故ニ曰ク設色ノ濃淡ハ其實染具ニ關ラズ、此レ初學者ニ在リテ極メテ難シトスル所ナリ、彼レ其染具ヲ取リテ之ヲ碟中ニ入レ、意ヲ留メテ攪和シテ、以爲ラク復タ失誤無シト、而シテ筆ニ浸シテ之ヲ布上ニ致スニ及ヒテハ、其初メ得ント欲スル色ト全ク相反スルヲ往々ニシテアリ、獨リ其布上ニ相並フ所ノ他ノ色采ト和調セサルノミナラス、即チ其濃淡ニ至リテモ本ト期セシ所ニ出

テズ、深碧ヲ得ント欲シテ反リテ淺青ヲ得、殷紅ヲ得ント欲シテ、反リテ淺綠ヲ得ルカ如キ是レナリ、又其數色ヲ合シテ成ル者ニ至リテ、其豫期ト隣違スルヲ更ニ甚キ者有リ、今夫レ酒人ノ善ク味ヲ解スル者ト雖モ、其用ヒテ以テ酒ヲ侑クル所ノ品物ノ性質ニ隨フテ、其酒味ヲ感スルコト一ナラズ、極メテ醜酒ナリト雖モ下物之レト和セザルモ、其味反リテ中以下ノ品ニ及ハズ、畫家ノ染色ニ於ケルモ亦猶ホ此ノ如キナリ、蓋シ同一青紅若クハ他ノ混合ノ諸色ト雖モ、其隣接スル所ノ色ニ隨フテ濃淡ノ度往々相異ナルヲ致ス、此レ乃チ充補ノ色采ノ理ノ然ラシムル所ナリ、

茲ニ論スル所ハ畫家ノ一大困難事ニシテ、近代ニ至ルマテ大家ト雖モ唯習熟ノ力ニ因リテ、僅ニ一時ノ用ヲ濟スニ過キザリシカ、一千八百十二年ニ至リ、シヨール、ブルジョア、氏此一事ニ係リ始テ理由ヲ推考シテ之

レカ説ヲ爲セリ、其後シヅレイユ氏復タ之ヲ主張シ、シヤル、氏ノ説ノ未  
 タ至ラザル所ハ、從フテ己レノ所見ヲ以テ之ヲ補フテ、頗ル完全ノ説ヲ  
 爲スコヲ得、因リテ一書ヲ著シテ「ロアーヂュ」「コソトラスト」「シミュルダチー」  
 「デクレーール」ト曰フ、諸色相反映スルノ道理ノ義ナリ、  
 其言ニ曰ク、太陽ノ光線ハ人ノ謂テ白色ト爲ス所ナリ、然レモ硝子若ク  
 ハ他ノ光澤アル物質ノ三方角ナル者ヲ用ヒテ之ヲ引クキハ、其色分折  
 シテ六色ヲ成ヌヲ見ル、曰ク黄、曰ク赤、曰ク青、曰ク紫、曰ク緑、曰ク橙黄、是  
 レナリ、此中ニ就テ黄赤青ノ三ノ者ハ之ヲ原色ト曰フ、他ナシ、他色ヲ合  
 シテ之ヲ得ント欲スルモ獲可ラザルヲ以テナリ、其餘ノ三色ハ複合若  
 クハ重合色ト云フ、他ナシ、紫色ハ青ト赤トヲ合シテ之ヲ得可ク、綠色ハ  
 黄ト青トヲ合シテ之ヲ得可ク、橙黄色ハ黄ト赤トヲ合シテ之ヲ得可キ  
 ガ故ナリ、若夫レ此レ等數色ノ間複合ノ諸色猶ホ幾何有ルヲ知ラズシ

テ、其濃淡ノ度實ニ窮極ス可ラズ云々ト、  
 エルムホルド氏又隨テ表ヲ作り、シヅレイユ氏ノ三方角ノ諸色ノ説ニ  
 基テ、其諸複合色ヲ明示セリ、今茲ニ之ヲ掲グ、蓋シ其上欄ニ平列スル所  
 ノ諸色ト及ヒ左方ノ上ヨリ下ニ列スル者ハ、即チ他ノ色ヲ合成スル諸  
 色ナリ、若夫レ此レ等ノ色ノ複合ニ由リテ成ル所ノ者ハ、即チ上方ノ一  
 色ト左方ノ一色ト相響フ處ニ在リ、之ヲ檢スルノ法ハ一ニビクゴール  
 乗算ノ法ト同シ

綠	黄	黄
色金	黄	橙
	黄	

此表ハ視學ノ經驗ヲ以テ夫ノ三方角諸色ノ複合ノ理ヲ揭示スル者ニシテ、畫家實地ノ用ニ於テハ未タ必スシモ大ニ補益有ルニ非ス、何トナレハ茲ニ掲クル所ハ太陽光線ノ致ス所ニシテ、其質極メテ精微ナルヲ以テ、毫モ相異ナルコト有ルコト無シ、若夫レ畫家ノ彩色ヲ調和スルニ至リテハ、多クハ固形物ノ粉末ヲ合研シテ成ル所ニシテ、太陽光線ノ若干部ハ既已ニ吸收スル所ト爲ル此レハ則チ光線ニ於テ既已ニ減スル所有リト謂フ可シ、是ヲ以テ其粉末粗ナルキハ、其色ヲ得ルヤ理論ノ示ス所ニ比シテ大ニ濃ナルヲ致ス、此レ其異ナル所ナリ、且ツ三方角ノ理ニ由リテ言ヘハ、黃色ト青色ト合スルキハ、白色ヲ成ス、畫家ノ碟中ニ在リテハ綠色ヲ成ス、又朱ト青トノ如キハ、之ヲ合スルキハ殆ント黑色ヲ成シテ紫色ノ痕ハ僅ニ之ヲ著ハスノミ、

又此表ニ由レハ、充補ノ色トハ三方角ノ二色相合シテ白色ヲ成ス者ヲ

	紫	グレーアン デゴ (未詳)	グレーン ニツク (未詳)	緑 青	緑
赤	黒 紫	紅 深	色 桃	白	黄 白
黄 橙	紅 深	色 桃	白	黄 白	黄
黄	色 桃	白	緑 白	緑 白	緑 黄
緑 黄	白	緑 白	緑		
緑	青 白	色 水	緑 青		
緑 青	青 水	色 水			
ニツク	グレーン ニツク	デゴ	グレーン		

謂フ、即チ赤ト青緑トハ所謂充補ノ色ナリ、相補フテ白色ヲ成スカ故ナリ、橙黄ト「ブレイシヤニク」トモ亦充補ノ色ナリ、其他黄ト「ブレイアン」トモ亦充補ノ色ナリ、「ウヰール」トモ亦充補ノ色ナリ、未詳ハ之ニ對スル單純ノ充補色無シ、但赤ト紫トヲ合シテ成ル所ノ深緑色ヲ以テ其充補色ト爲スノミ、

此ニ由リテ之ヲ觀レハ、此表ノ利益トス可キハ、畫家ヲシテ諸色ヲ調和スルノ間ニ於テ據ル所有ラシムルニ在ラスシテ、諸色相并ヒテ後相反映シテ得ル所ノ色ヲ釋明スルヲ得ルニ在リ、是ヲ以テ一切充補ト稱スル諸色ハ之ヲ并列スルハ各々益々其力ヲ逞クスルヲ蓋シ明ナリ、即チ黄緑ノ如キハ紫ト并列スルハ愈々其力ヲ増シ、橙黄ノ如キハ「ブレイシヤニク」ト并列スルハ愈々其力ヲ増シ、黄ノ如キハ「ブレイアン」ト并列スルハ愈々其力ヲ増ス可シ即チ紫青ノ如キモ黄及ヒ

橙黄ト并列スルハ、其色采愈々益々盛ナルヲ致ス、

又之レニ反シテ一切充補ニ非サル諸色相并フハ、互ニ相抵觸シテ交々其力ヲ失フヲ致スヲ免レズ、即チ赤ノ尤モ殷ナル者モ青ト并フハ其力ヲ減シ、紫色ハ黄ト并フハ淺紅ノ色ヲ發ス、

茲ニ論スル所ハ、即チ「シヤル」、ブル「シアー」シ「ヴレイ」ユ諸氏ニ由リテ學術上ノ經驗ナリ、顧フニ其此ノ如キヲ致ス所以ハ、抑々何ニ由リテ然ル邪方今ノ學術未タ一定ノ見無ク、竟ニ唯臆度ヲ以テ之ヲ推ス有ルノミ、但此事ニ係リテハ學修ノ際種々ノ發見之レ有リ、故ニ苟モ意ヲ此ニ致ス者ハ、此レ等ノ發見ニ由リテ益々研究スルハ、或ハ一旦大ニ悟ル所有ル可シ、故ニ茲ニ又之ヲ舉ク、

エッケルマン子氏其「ギョート」ノ閑話ト題シル書中ニ曰ク、余一日儕輩ト俱ニ深黄色ノ「クロキユース」未詳ヲ觀シニ、其周傍ノ均ニ紫色ノ斑點ヲ現出セ

シテ見タリト、此レ蓋シ一千八百二十九年ノ事ナリ、又モンシハ其幾何論中ニ於テ云ヘリ、今充分ニ日光ヲ受クル一室ニ在ラシムニ、若シ赤色ノ帳幃ヲ以テ其日光ヲ受クル窓ヲ蔽ヒ、其面ニ於テ三ミリメートル若クハ四ミリメートルノ徑ノ小孔ヲ穿テ、少ク距リテ白紙ヲ置キ、悉ク帳孔ヨリ射入スル所ノ日光線ヲ承ルキハ、其現色ノ必ス緑ナルヲ見ル、若シ帳幃ノ色緑ナルキハ其白紙ニ現スル色ハ必ス赤ナリ、是ノ如キ者ハ幾回之ヲ試ムルモ其必ス爽ハサルヲ見ル、

シャル、ブランドン氏ノ話モ亦此ト相似タリ、其言ニ曰ク、畫家ユーシェーンヌ、デラクロア一日畫ヲ作シ、黄色紙ヲ描キシニ、其黄ニシテ光澤ヲ發セシメント欲シテ百方スルモ得ス、最後ニ乃チ毫ヲ投シテ嘆シテ曰ク、クリュベンウエロチーズノ黄色ヲ用フルマ、其彩色爛然トシテ人ノ目ヲ奪フ、吾獨リ何ソ此ノ如キヲ得ザル哉ト、因リテルーヴル宮ノ古物館ニ造

リテ一見セント欲シ、僕ヲシテ車ヲ僦フテ至ラシム、蓋シ一千八百三十年ノ事ナリ、當時巴勒ノ馬車多ク黄色ヲ以テ裝飾ト爲シ、僕人車ヲ僦フテ至ルニ及ヒ、デラクロア一方ニ昇ラントシテ止メテ立ツト良ヤ久シ、蓋シ車ノ黄色光ヲ放テテ地ニ映シテ紫色ヲ爲シ、デラクロア之ヲ視テ大ニ驚テ曰ク、我レ之ヲ得タリト、因リテ車ヲ還ヘシテ復タ室ニ入り、再ヒ染具ヲ和シテ黄ヲ成セシニ、其色澤極メテ燦爛タリシト云フ、蓋シ各色ノ蔭必ス其色有スル所ノ充補ノ色ヲ現出スルヲ、此レ其不變ノ道理ナリ、而シテ特ニ日光甚ク明ナラズシテ且ツ其充補ノ色ヲ現スル地ノ滑澤ナルキハ、其現象愈々益々明ナリ、デラクロア是ニ悟ル有リ、故ニ其再ヒ毫ヲ執ルニ及ヒテ、其黄ヲ得タルヲ全ク初意ノ如クナルヲ致セリ云々ト、

シダレイユ氏既ニ書ヲ著ハシテ諸色相共ニ充補スルノ實驗ヲ論シテ

頗ル精微ヲ極メ、且ツ曰ク、凡ソ布上ノ一部ニ就テ一色ヲ點スルキハ、其色中有スル所ノ充補ノ色、必ス其部分ノ周邊ニ發シテ別ニ一色ヲ成シテ隱然見ル可シ、例ヘハ赤色ヲ點スルキハ、其周邊微綠色ノ輪ヲ成シ、橙黃色ヲ點スルキハ、其周邊微青色ノ輪ヲ成シ、眞黃色ヲ點スルキハ、其周邊微紫色ノ輪ヲ成ス、若シ之ニ反シテ紫色青色綠色ヲ點スルキハ、其周邊微黃色ヲ成シ、橙黃色ヲ成シ、赤色ヲ成ス、是ニ知ル、赤ト綠トハ相充補スルノ性有リ、又橙黃ト青ト及ヒ眞黃ト紫トモ亦相充補スルノ性有ルヲチ、又曰ク、其諸色ノ輪ヲ成スヤ、其最モ中心ニ近キ處ハ色最モ濃ニシテ、漸ク遠ケレハ漸ク淡ナリ、宛モ朝暉ノ天色ノ如シト、

夫レ然リ、故ニ天地庶物各々固有ノ色有リト雖モ、之ヲ望ムキハ其差異太甚ナラスシテ、自ラ相和調スルヲ見ル、此レ他無シ、一色ノ中自ラ他ノ色ヲ發シテ相充補スルヲ以テナリ、獨此レノミナラス、各色皆相共ニ反

映シテ以テ自ラ其光澤ヲ減殺シ、又雰圍氣ノ其間ニ布陳スル有ルヲ以テ、是ヲ以テ各色ノ相抵當スルヲ自ラ過甚ナラサルヲ致ス、若夫レ畫學ノ設色ノ如キハ然ラス、其色ヲ取リテ之ヲ布上ニ施スヤ、其相反映スルヲ未ク庶物ノ甚シキカ如クナラス、且又人ノ之ヲ觀ル、必ス近接スルヲ以テ雰圍氣ノ之ヲ隔ルヲ厚カラス、故ニ能ク調和ニ注意セサルキハ、其諸色ノ相抵當シテ人目ヲ厭ハシムルヲ無キヲ望ムモ得可ラス、

然リト雖モ、一色ヲ點スル毎ニ其周邊必ス他ノ一色ノ輪ヲ成ス者ハ、其故何ソヤ、實ニ果シテ此輪有ル乎、將タ吾人ノ目乃チ是ノ如キヲ見ルノミニシテ、實ハ之レ有ルヲ無キ乎、曰ク然リ、此レ蓋シ我カ視神經夫ノ布上點スル所ノ色ヲ分析シテ致ス所ナラン、何ヲ以テ之ヲ言フ、曰ク耳ノ聲ニ於ケルヤ、一音ヲ聽クキハ能ク之ヲ分析シ、一切其音ニ附屬スル所ノ小調子ハ皆之ヲ辨別スルヲ得、若夫レ目ノ色ニ於ケルハ、其精妙未



タ此ニ至ラズト雖モ、亦稍々此レト相似ル者有リ、是ヲ以テ一色ニ對スルキハ、必ス自ラ分析ノ術ヲ施シテ之ヲ區別ス、是レ其一色ノ周傍ニ於テ別ニ一色ノ輪ヲ見ル所以ナリ、

英國ノ碩學トーマス、イヨング氏ノ言ニ依レハ、凡ソ一色線人目ニ觸ル、キハ、必ス折ケテ三ト爲ル、此レ蓋シ人ノ目中色ヲ辨スル所ノ神經三種有ルヲ以テナリ、其一ハ赤色ニ感スル神經ナリ、二ハ綠色ニ感スル神經ナリ、三ハ紫色ニ感スル神經ナリト、ローシュル氏ハ又視學及ヒ學藝論ト號スル書ヲ著シテ云ヘリ、イヨング氏ノ言未ダ確然ノ憑據有ラス、且ツ目ノ色ニ於ケル人自ラ其之ヲ分析スルヲチ覺エズト、然レヒ耳ノ聲ニ於ケルモ亦自ラ之ヲ分析スルヲチ覺エス、顧フニ必スシモ自ラ之ヲ分析スルヲチ覺エスト雖モ、神經ニ在リテハ自然ニ之ヲ分析スルモ未ダ知ル可ラス、之ヲ要スルニイヨング氏ノ論ハ、之ヲ人類ニ擬スルハ未ダ確

然ノ據有ルヲ見ズ、若夫レ之ヲ禽蟲類ニ擬スルハ頗ル證徴ス可キ者有リ、蓋シ日耳曼ノ解剖學士マツキスユキルト氏ノ實驗ニ由ルニ、一種ノ毛族及ヒ蝮蛇ノ屬ハ、其頭腦ヲ解剖スルニ、目ノ諸膜最モ深奥ノ處ニ在ル者、必ス其表面ニ於テ二種ノ神經ノ幅淡セルヲ見ル、而シテ其一種ハ尖端必ス赤色ニシテ、一種ハ必ス綠色ナリ、此ニ由リテ之ヲ考フルキハ、此レ等ノ禽蟲ハ獨リ赤色ト綠色トニ感スルヲチ知ル者ナル歟、又イヨング氏ノ說ヲ證セント欲シテ往々一種ノ眼疾ヲ引徴スル者有リ、曰ク眼疾ヲ病メル者ノ中、或ハ能ク青綠黃等ノ色ヲ見テ、獨リ赤色ヲ見サル者有リ、顧フニ此人ノ如キハ其頭中有スル所ノ赤色ニ感スル神經ノ麻痺セルヲ疑無シ、然ラズンハ何ノ故ニ能ク他ノ色ヲ見テ獨リ赤色ヲ見ザルヤト、

近日學術益々進開スルニ隨ヒ、學士此種ノ事ヲ講究スル益々密ナリ、蓋

シ吾人必スシモ眼疾ヲ病マサルモ、目力ノ遠近ヲ論スルニ至リテハ、諸色ニ於テ現ニ一樣ナラス、即チ我カ目ト相距ルコト尤モ遠クシテ、而シテ見ル可キ者ハ青色ヲ以テ第一ト爲ス、黄色之レニ次キ、橙黄色又之ニ次キ、赤色又之ニ次キ、綠色又之ニ次ク、若夫レ紫色ニ至リテハ、極メテ近接スルニ非サレハ、人其果シテ紫色タルヲ見ス、若シ之ヲ微セント欲セハ、海上ニ居テ遠山ヲ見ルニ如クハ無シ、千里ノ遠ヲ隔ルト雖モ猶ホ青色ノ天際ニ髣髴タルヲ見ル、而シテ是ノ如キ者ハ人々皆同シ、  
 ランドー氏又此事ニ係リテ實驗スル所アリテ、其言極メテ信憑ス可シ、而シテ青色ノ最モ遠方ニ達シ、眞黄橙黄赤綠紫ノ遞次ニ相降ルノ說此ニ由リテ益々明ナルヲ致シ、氏又言フ、同一色ト雖モ其色線尤モ濃ナルキハ達スル處モ亦益々遠シト、  
 シャルコー氏モ亦曰ク、眼病者ノ中及ヒ特ニ婦人一種ノ神經病有ル者、其

病ノ方ニ發スルニ及ヒテハ、其色ヲ見ルコトノ遠近正ニ平時ト相反ス、夫レ病者ニ在リテ其次序相反スルキハ、平時ノ見ル所ノ次序獨リ人體固有ノ神經ノ理ノ致ス所タルコト益々疑無シト、又曰ク、余嘗テ此等ノ病者ヲ觀ルニ、其色ヲ見ルノ遠近ノ變スルコト僅ニ一時ノ事ニシテ、苟モ病勢稍々退クキハ漸次ニ本ニ復シテ、其全治ニ及ヒテハ略ホ平時ト異ナルコト無シ、而シテ其發スル毎ニ次序常ニ相同シ云々、

又病者中黄青ノ二色全ク目ニ觸レヌシテ、獨リ赤色ヲ見ル者有リ、又其病勢益々進ムニ及ヒテハ、諸色皆散シテ病者天地庶物ヲ觀ルニ於テ、獨リ黯澹トシテ雲烟ノ平鋪セルヲ見ルコト、猶ホ支那ノ墨描山水ノ景ヲ見ルカ如キニ至ル者有リ、願フニ此等ノ實驗ニ由リテ之ヲ考フルキハ、吾人頭腦中自ラ諸種ノ神經有リテ、各々司ル所ノ色有ルコト或ハ推ス可キナリ、

ガレツースキーモ亦種々ノ實驗有リテ、大率茲ニ云フ所ト相類ス、其言ニ曰ク、病者ノ中諸色ヲ論セズ若干尺ヲ距ルルハ都テ見ザル者有リ、是ニ於テ紙上ニ就テ數種ノ色ヲ施シ、之ヲ持シテ漸次ニ近接スルルハ、漸次ニ盡ク諸色ヲ辨シテ一モ遺ス所無シ、予因リテ其紙ト目ト相距ル間ヲ度ルニ、蓋シ二十[サンチメートル]乃至三十[サンチメートル]ナリ、而シテ之ヲ叩クニ、青色先ツ見ハレ、餘色之レニ次テ紫色ハ最後ニ見ハル、ト、仍ホ康健ノ人ト異ナルコト無シト、顧フニ此人ノ如キハ、其諸種ノ神經均ク皆病ニ罹リテ、而シテ其淺深ノ度モ亦皆相均キヲ推ス可キナリ、クシヅースキー氏又曰ク、余又一種ノ神經病者ヲ見シニ、其初テ病ニ罹ルヤ、青色ヲ見ルコト無シ、之ヲ頃クシテ又赤色ヲ失ヒシト、

ペール氏近日二種ノ實驗有リ、細ニ記述シテ之ヲ學術博士院ニ呈シ次ニ之ヲ佛蘭西共和新聞中學藝欄内ニ記入セリ、蓋シ一千八百七十

八年一月二十九日ノ事ナリ、其言頗ル奇ナルヲ以テ、予茲ニ之ヲ略舉ス、

若シ人若干ノ距離ニ在リテ、青色ノ光線ト黄色ノ光線ト交射シテ綠色ヲ成スヲ見ルルハ、其愈々遠クシテ愈々青色ナルヲ見ル、即チ街上ノ馬車燈ノ如キ往々此レ等ノ色ヲ以テ其硝板ヲ彩ヒリ、故ニ之ヲ觀ルルハ以テ色アルヲ見ル、既ニシテ車漸次ニ相近クルハ忽ニシテ青色ト黄色ト判然相分ル、ヲ見ル、但此實驗ヲ得ルニハ諸種ノ要款有リテ、其最モ肝要ナルハ、天氣暗曇ニシテ路上微ク水蒸氣ヲ帶フルノ時ヲ候スルノ一著ニ在リ、此ニ由リテ之ヲ觀レハ、青色ハ黄色ニ比較シテ、其光力眼ニ觸ル、ト更ニ烈ナリト謂フ可シ、

ペール氏又曰ク、若シ人若干ノ距離ニ在リテ紫色ノ物ヲ望ムルハ、其赤色必ス青色ニ剋ツヲ見ル、又橙黄色ノ物ヲ望ムモ亦赤色必ス黄色

ニ剋ツヲ見ル、此ニ由リテ之ヲ觀レハ、單ニ一色ヲ以テ言フキハ、青色最モ遠ニ達シテ、黃色之ニ次クモ、若シ合シテ之ヲ望ムキハ、赤色最モ遠ニ達シ、青色之ニ次キ、黃色最モ後ニ居ルヲ知ル可シ、

ペール氏又曰ク世ノ畫家頗ル大家ト稱ス可キ者ノ中ニ於テ、其畫ク所往々喜テ特ニ一色ヲ過用スル者有リ、余之ヲ試ムルニ、或ハ喜テ黃色ヲ用フル有リ、或ハ紫色ヲ用フル有リ、是ニ於テ賞鑒家之ヲ謂テ黃色ノ畫家紫色ノ畫家ト爲ス、予又之ヲ驗スルニ、同一畫家ニシテ其喜テ特ニ過用スル所ノ一色、往々其年齡ニ於テ變易スルヲ見タリ、即チデカンフノ如キハ、其末年ニ至リテハ其設色往々「草花ノ色」名未詳ノ色ヲ成スニ至レリ、顧フニ是レ其人ノ視神經ニ於テ大ニ變易スル所有リ、故ニ其見ル中正ナラスシテ終ニ是ニ至リシナラン云々、  
ペール氏既ニ此等ノ實驗ヲ得テ以爲ラク、此レ人身窮理并ニ美術ニ

於テ關係極メテ大ナリ、願ハクハ更ニ術ヲ設ケテ以テ此道理ヲ明ニスルヲ有ラント、是ニ於テ布若干尺ヲ取り、種々ノ采色ヲ施シテ、皆其レヲシテ頗ル濃厚ナラシメ、然ル後其友ノ素ヨリ畫ヲ業トスル者ヲ請ヒ、之ヲシテ遞次ニ種々ノ采色ヲ施シタル眼鏡ヲ着ケテ、夫ノ布上ノ采色ヲ視シシメ、因リテ請フテ之ヲ寫サシム、而シテ其之ヲ寫スヤ、采具ハ皆他人ヲシテ之ヲ碟内ニ入レシメリ、是ヲ以テ其畫家復タ其平生ノ習慣如何ヲ知ラサルヲ以テ、之ヲ調和スルニ於テ極メテ意ヲ用ヒザルヲ得サリキ、

既ニシテ夫ノ布上ノ采色ニ對シ、一々之ヲ寫シ、己ニ畢ハリテ相較フルニ少シモ異ナルヲ無シ、蓋シ彼レ采色ヲ施セル眼鏡ヲ着ケテ臨本ヲ視タルヲ以テ、其色ヲ見ルヤ固ヨリ肉眼ヲ以テ之ヲ見ルト同シカラス、然レモ其碟内ノ采具ヲ見ルモ亦肉眼ト同シカラサルヲ以テ、唯

臨本ヲ擬スルコトヲ是レ求メテ、自然ニ濃淡ヲ同クスルコトヲ得タルニ過ギザルノミ、

ペール氏素ヨリ其是ノ如クナルコトヲ期シルヲ以テ、事畢ハルニ及ヒ、喜テ曰ク、苟モ視神經常テ變じルハ、縱令ヒ采色ヲ施シタル眼鏡ヲ用フルモ唯摸擬スルニ難キノミ、決シテ摸擬スルコトヲ得可ラサルニ非サルナリト、ペール氏因リテ曰ク、縱令ヒ眼鏡ニ采色ヲ施スモ、擬シントスル所ノ臨本ノ色頗ル濃ナルハ、誠ニ之ヲ寫スヲ得、若シ其濃淡種々ニシテ相異ナルコト極メテ些少ナルハ、其之ヲ寫スヤ往々細微ナルコト能ハズ、即チ綠色ヲ以テ臨本ト爲シ、其レヲシテ濃淡相雜ハラシメ、然ル後同色ノ眼鏡ヲ着ケテ之ヲ寫スハ往々誤謬ヲ致スヲ免レズ、此レ怪ム無キナリ、既ニ綠色ノ眼鏡ヲ着クルヲ以テ、一望皆綠ナルヲ以テ、其濃淡ノ至微ナル處ハ、固ヨリ明ニ之ヲ知ルコトヲ得ス、又

綠色ノ眼鏡ヲ着ケテ赤色ノ雜ハ、レ爾諸色ヲ寫スハ、其難キコト更ニ甚キ者有リ、何トナレハ赤色ト綠色トハ本ト相充補スルノ性有ルヲ以テ、綠色ノ鏡ヲ用ヒテ赤色ヲ視ルハ、殆ンド黑色ヲ成シバナリ、是ヲ以テ何ノ色ヲ論セズ、苟モ赤色ノ雜ハル者ハ皆黯然トシテ分別シ難ク、一切濃淡ノ度ヲ擾リテ、人ヲシテ之ヲ辨識スルコトヲ得ザラシムルニ至ル、青色ノ眼鏡ヲ着クルトキハ、一切青色及ビ特ニ黃橙色ノ濃淡ノ微密ナル者ヲ寫スニ於テ極メテ不便ナリ、是ニ於テ其初メ臨本ヲ見ルノ誤謬延テ碟内ノ染具ニ及ヒテ終ニ臨本ト相合ヒザルニ至ル、此ニ由リテ之ヲ考フルニ、若シ一畫家アリテ、其天性ニ因リ若クハ一モ其視神經ノ欠缺有ルニ因リ、物ヲ觀テ稍ク紫色ヲ覺ユルハ、人或ハ其紫色ヲ用フルノ過多ナルニ於テ其病ヲ微シント欲スルヲ免レズ、此レ謬レリ、彼レ實ニ物ヲ觀テ稍ク紫色ヲ覺ユルノ弊有ルハ、

反リテ黄色ヲ用フルニ於テ其病ヲ徴ス可シ、何トナレハ黄色ハ正ニ  
紫色ト相充補スルノ性有ルヲ以テナリ、又其紫色ヲ用フルヤ、濃厚ノ  
處ニ在リテハ必スシモ謬誤ヲ致サスシテ、其濃淡相雜リテ變化ヲ成  
スノ處ニ於テ大ニ過不及ヲ致ス可シ、若夫レ物ヲ觀テ赤色ヲ覺ユル  
者ニ在リテハ、樹林ノ景中ニ就テ人物ノ裸體ヲ描クニ當リ、大ニ其弊  
ヲ發ス可シ、其弊タルヤ特ニ其人物ノ皮肉ノ色ヲ寫ス處ト及ヒ木葉  
ノ綠色ヲ寫ス處トニ在リテ之ヲ見ル、此レ他無シ、人物ノ皮肉ノ色ハ  
微ク赤色ヲ帶ヒテ其和調極メテ密ニシテ、又樹林ノ綠色ハ濃淡極メ  
テ變化有ルヲ以テナリ、

此レニ由リテ考フルニ、設色セル眼鏡ヲ着クルト天性視神經ノ病有  
ルトヲ論ゼズ、又何ノ色ヲ寫スヲ問ハス、凡ソ其弊ノ發見スルハ濃厚  
ノ處ニ於テモズシテ、專ラ濃淡相雜リテ變化ノ微密ナル處ト及ビ其  
十七

寫ス所ノ色ノ充補ノ處トニ於テ發見スルコト知ル可キナリ、  
ペール氏又曰ク、予ヲ以テ之ヲ考フルニ畫家往々喜テ用フル所ノ采  
色有ルハ、其視神經ノ弊ノ致ス所ニ非ズシテ、多クハ其人一種ノ性情  
ニ因リテ然リ、若夫レ濃淡ノ度ト充補ノ色トノ間ニ於テ過不及ヲ致  
スニ至リテハ、此レ其人現ニ視神經ニ於テ病源有ルコト疑無シ、

凡ソ茲ニ論スル所ノ實驗ハ皆極メテ微密ニシテ、畫家采色ノ和調ヲ釋  
明スルニ於テ極メテ益有リ、之ヲ要スルニシヴレイユ氏ノ所謂一色ノ  
周邊ニ於テ微ク他色ノ輪ヲ成スカ如キハ、現ニ實際ニ於テ著見スル所  
ナリ、故ニ若シ人白色黑色赤色橙黃色眞黃色綠色青色紫色等ノ布上ニ  
就テ淡黒ヲ用テ勾畫スルハ、同一淡黒色ト雖モ各々皆相異ニシ、乃チ  
八種ノ淡黒色ヲ成スヲ見シ、此レ他無シ、其布ノ色必ス其勾畫上ニ向テ  
其相充補スル所ノ色ヲ放射スルヲ以テナリ、是ニ於テ他人ニ之ヲ觀セ

シムルキハ、必ス曰ハシ、此淡黒ノ勾畫ハ素ヨリ其色ヲ殊ニス、ト、因リテ  
次ニ剪綵ノ巧ヲ施セル白紙ヲ以テ其布ヲ蔽フテ、僅ニ其剪空ヨリ勾畫  
ヲ見ル可ラシムルキハ、八種ノ淡黒色必ズ其本質ヲ發シテ全ク一様ト  
成ル、此レ他無シ、布上ノ采色復タ其充補ノ色ヲ放射スルヲ得ザルヲ  
以テナリ

エルムオルト氏ハ此道理ヲ解釋シテ曰ク、此レ特ニ目中「レチンヌ」ノ眼膜  
深處ニ在ルノ疲極スルニ由リテ然リ、蓋シ「レチンヌ」ハ人體中此ヨリ疲  
者ヲ謂フ  
レ易キハ莫シ、是ヲ以テ吾人赤色ヲ視ルカ如キ、見ルヲ未ク久シカラズ  
シテ之ヲ感ズルヲ復タ初ノ如クナラズ、此レ「レチンヌ」ノ疲ル、ニ由ル、  
是ニ於テ綠色ヲ視ルキハ之ヲ感スル充分ナルヲ得ルナリ、是ニ吾人  
赤色ヲ視ルヲ少間スルキハ、知ラス知ラス自然ニ綠色ヲ覺ユルヲ致  
ス、此レ他無シ、吾人ノ「レチンヌ」ノ尤モ習フ所ノ白色ノ光線ニシテ、而シ

テ此光線中自ラ綠色ヲ含ムヲ以テ、今赤色ヲ視テ疲ル、ニ及ヒテハ、忽  
ニシテ綠色ヲ覺ユルハ蓋シ自然ノ勢ナリ云々、

是故ニエルムオルト氏ノ言ニ據ルキハ、赤色中ヨリ綠色ヲ發スルカ如  
キハ本ト實ニ之レ有ルニ非スシテ、特ニ吾人視神經ノ致ス所ナリ、若シ  
信ニ然リト爲スルハ、此レ吾人ノ一色ヲ視ルヤ、必ス知ラス知ラス之ヲ  
剖析シテ二色ト爲ス者ナリ、

予モ亦此說ヲ以テ理ヲ得タル者ト爲ス、是ニ於テ此說ヨリシテ二箇ノ  
議論ヲ惹出シテ、益々前論ノ謬ヲサルヲ微セント欲ス、

第一、凡ソ並列セル二色本ト相充補スル者ニ非ザルキハ、各色ノ周邊ニ  
現スル色輪相抵撃シテ、以テ二色ヲシテ其觀ヲ變セシムルヲ致ス、此  
レ畫家タル者尤モ知ラサル可ラサルノ一著ナリ、若シ畫家此ニ注意セ  
ズシテ、一色ノ傍ニ於テ更ニ一色ヲ施シ、漫然トシテ其初ヨリ相充補セ

ザルコチ料ラザルキハ、獨リ其濃淡ノ度宜チ得ザルノミナラス、亦豫メ期セシ所ノ色ト全ク相反シテ、乃チ全畫ヲシテ大ニ瑕玷ヲ生セシムルニ至ラン、

第二、若シ並列セル二色素ヨリ相充補スル者タルキハ、其兩色ノ周邊ニ發スル色輪交々其本色ト色ヲ同クスルヲ其反映ノ功ニ因リ、兩色俱ニ益々最上點ニ登リテ益々般盛ナルヲ致サン、顧フニ此事若シ原因有ルキハ則チ已ム、若シ果シテエルクオルト氏ノ言ノ如ク、現ニ吾人目中ノ「レチ」ノ膜ノ疲ル、ニ因リテ然ルキハ、其理明ニ知ル可キノミ、曰ク吾人先ツ其一色ヲ視テ疲ル、ニ及ヒテハ、輒チ自然ニ之ヲ分折シテ其充補ノ色ヲ發シテ、之ヲ他ノ一色ニ放送シ、又他ノ一色ヲ視テ疲ル、キハ、亦輒チ自然ニ之ヲ分折シテ其充補ノ色ヲ發シテ、之ヲ前ノ一色ニ放送シ、此ノ如クニシテ吾ガ目力常ニ盛ナルヲ以テ、其色ニ於ケル十分ニ之

チ感スルコチ得、此レ兩色ノ交々般盛ノ觀チ致ス所以ナリ、然リト雖モ此レニ由リテ色ノ般盛ナルヲ求ムルニハ、赤色ニ在リテハ必ス綠色ト並ハシメ、橙黃色ニ在リテハ必ス「ブレ」シヤニツクト並ハシメ、黃色ニ在リテ必ス「ブレ」アソゴト並ハシメ、黃綠ニ在リテハ必ス紫色ト並ハシムルコチ要スト爲スキハ謬ナリ、縱令ヒ相並フ兩色俱ニ複合ニ成ルモ、苟モ別ニ微ク應當ノ色ヲ加ヘテ、其チシテ夫ノ色輪ヲ發セシムルキハ、般盛ノ觀猶ホ頗ル得可キナリ、但兩色ノ中ニ雜ハル者ノ中相同シキ者愈々少キキハ、相反映スルノ効愈々盛ナルヲ致スコトハ固ヨリナリ、夫レ然リ、是ヲ以テ凡ソ畫幀其設色尤モ人目ヲ感スル者ハ、大率作者用筆ノ間ニ於テ巧ニ其諸色ヲシテ相反セシムル者ナリ、此ノ如クスルキハ色ノ尤モ剛烈ナル者モ亦自然ニ相諧調シテ、甚ダ人目ニ抵觸セルコチ得、



凡ソ此諸色相共ニ其充補ノ色ヲ放射スルノ理ニ係リテハ、一例ノ尤モ  
 人ヲ驚カスニ足ル者有リ、シャル、プラン氏ノ言ニ據ルニ、氏一日リユシサ  
 ソプールの宮中ノ書庫ニ遊ヒ、ユーシェーンズ、デラクロアールノ書ヲ觀テ、其  
 設色ノ神奇ニ驚キテ、益々デラクロアールノ書學ニ深キヲ感ゼシト云フ、  
 蓋シ其畫ハ圓蓋ノ裡面ニ施シテ、日光ノ明ニ乏キヲ以テ、其設色ノ難キ  
 ヲ復々他處ノ比ニ非ス、他無シ、其明暗ノ勢ヲ制スルコトハ全ク采色ノ和  
 調ノ一著ニ在ルヲ以テナリ、而シテプラン氏遍ク之ヲ覽觀スルニ、其采  
 色皆爛燦トシテ人ノ目ヲ奪フ、就中一婦人樹木ノ下ニ居テ椅子ニ憑ル  
 者ノ如キハ、此幽暗ノ中ニ在リテ其顔色天々トシテ、愛慕ス可キ皮肉ノ  
 色、真人ト異ナルコト無シ、是ニ於テプラン氏立テ之ヲ觀ル者良久ク、低回  
 シテ去ルコト能ハズ、適々一人至ル有リ、此人デラクロアールノ親友ニシテ、  
 デラクロアールノ此畫ヲ作スニ方リ、其傍ニ居テ現ニ其染具ヲ和調スル

コトヲ見タリ、此人プラン氏ヲ見テ晒フテ曰ク、君今デラクロアールノ畫ヲ  
 觀テ極メテ感服ノ意ヲ見ハセリ、君若シ此婦人ノ顔色ヲ寫シタル染具  
 ノ如何ヲ知ルキハ、其驚キ更ニ甚シカル可シ、君若シ此諸色ヲ取リテ各  
 々別ニ之ヲ觀ルキハ、其濃ナルコト何如ソヤ、其甚キ者ハ殆ント泥濘ノ如  
 キ者有リト、蓋シデラクロアール一種ノ奇才有リテ、諸色相反映スルノ理  
 ニ於テ見識極メテ至レリ、是ニ於テ乎、此婦人ノ皮肉ヲ描クニ方リ、綠色  
 ヲ帶ビタル一色ヲ以テ縱横其上ヲ塗抹セリ、此レ其隣接スル所ノ薔薇  
 紅ノ色ト相反映シテ、方ニ恰好ノ色ヲ發スルコトヲ知ル故ナリ、  
 凡ソ此ノ如クシテ二色相接シ相映シテ別ニ一色ヲ出スコトハ、畫家之ヲ  
 名ケテ「メラシオプテック」ト曰フ、視學上混合ノ義ナリ、此術ヤ設色ノ途  
 ニ於テ其益極メテ夥シ、蓋シ此一術ニ由リテ畫家其布上ニ於テ初ヨリ  
 碟内ニ無カリシ所ノ一色ヲ作スコトヲ得、即チデラクロアールノ如キハ喜

テ此術ヲ用ヒタリ、是ヲ以テ他ノ畫家デラクロアノ設色ニ擬セント  
 欲シテ、幾度染具ヲ和調スルモ、一旦之ヲ布上ニ施スニ及ビテハ、曾テ肖  
 似スルヲ得ズシテ、其末ヤ往々毫ヲ投シテ嘆息スルノミ、  
 此一術ハ設色ニ在リテ誠ニ肝要ナリト雖モ、其道理并ニ手段未タ判然  
 タラザル者有ルヲ以テ、若シデラクロアノ其人ノ如ク自ラ天才ニ得ル  
 有ルニ非スシテ、強テ之ヲ求ムルハ、動モスレハ大ニ失スル有ルヲ致  
 ス、此レ又知ラザル可ラス、

以上論ズル所ノ外、學術上猶ホ種々細瑣ノ道理有リテ、作家タル者ハ皆  
 注意セサル可ラス、但予ノ旨趣トスル所ハ、唯夫ノ色采ノ濃淡及ヒ色澤  
 ノ本ト定形有ルニ非スシテ、多クハ格物化學及ヒ人身窮理ノ三ノ者ニ  
 起因スルヲ有ルヲ示スニ在ルノミ、且ツ方今學術極メテ進關ニ就キシ  
 ニ論無シト雖モ、細微ノ處ニ至リテハ猶ホ往々臆度ヲ免レサル有リ、是

ヲ以テ畫家ノ設色ノ如キモ、其學術ニ資スル部分未タ甚ク多カラズシ  
 テ、大抵自家ノ天才ト并ニ習慣トニ因リ、又事ニ臨ミ偶然感發スル所有  
 リテ之ヲ得ル者多キニ居ル、

フロマングンハ賦彩ノ一途ニ於テ、大ニ力ヲ致セシ人ナリ、其言ニ曰ク、  
 設色ノ術誠ニ多端ナリト雖モ、之ヲ要スルニ二有ルノミ、第一ハ染具ノ  
 中ニ就テ務テ佳品ヲ撰擇スルナリ、第二ハ之ヲ和調スルニ於テ極テ注  
 意シテ疎漏ニ失ヒサルナリト、余ヲ以テ之ヲ考フルニ、此言恐クハ次序  
 ナシヒリ、染具ヲ和調スルヲ第一ニシテ、佳品ヲ擇フヲハ第二ナリ、此レ  
 獨余ノ論ニ非ス、即チデラクロアノ論ナリ、顧フニ此一道ニ係リテハ、  
 方今誰カデラクロアノ言ヲ以テ信ズ可シト爲サ、ル者有ラン哉、

○第三章 設色ノ勻齊及布置○設色ヲ以テ畫ノ意趣ヲ發揮ス

ルヲ

前章論ズル所ニ由リテ之ヲ考フルキハ、諸彩ヲ整調シテ、各ヲシテ其宜  
 ヲ得セシムルコトノ畫學ニ欠ク可ラザルハ、彰々明ナリ、夫レ題目ニ就テ  
 各々其位置ヲ得セシメ、及び圖中ノ諸面貌ヲシテ各々其形狀ヲ呈セシ  
 ムルガ如キハ、其事極メテ重大ナルニ論無シト雖、未タ此レカ爲メニ諸  
 彩ヲ整齊スルノ一途ヲ廢スルコトヲ得ズ、又同シク諸彩ヲ調整スルニ在  
 リテモ、其全體ニ着目シテ全圖ノ活潑タルコトヲ求ムルコトハ極メテ重大  
 ナリ、然リト雖モ亦未タ此ヲ以テ細瑣ノ處ヲ遺棄スルコトヲ得ズ、之ヲ要  
 スルニ、予カ茲ニ云フ所ノ諸彩ノ調整ハ、其全局ニ關スルト否ザルトヲ  
 問ハズ、一切此彩ト彼彩ト相和シ、及び相映ズルノ理ヲ總テ之ヲ言フ、此  
 レ畫家ニ在リテ、尤モ平日ニ講セザル可ラザル所ナリ、  
 諸采ヲ調整スルコトハ、之ヲ分テテ二ノ目的ト爲ス、一ハ專ラ圖畫ノ題目  
 ノ意義ニ係ル者ナリ、一ハ專ラ人ノ目ヲ怡ハシムルニ係ル者ナリ、蓋シ

同一題ト雖モ、諸色ノ用法ニ由リテ、全ク其意義ヲ變ズルコトヲ得、之ヲ例  
 ヘハ歴史ノ典故ヲ描カンニ、其設色黯澹タルキハ、人ヲシテ慘悽ナラシ  
 メ、其設色爛燦タルキハ、人ヲシテ爽快ナラシム、即チリベソノ畫ニ就テ  
 余カ前ニ論セシ所ノ如ク、設色ノ濃淡ニ由テ圖畫ノ題目外ニ於テ、別ニ  
 一意義ヲ生ズルニ至ルハ、此レガ爲メナリ、  
 人ノ目ヲ怡ハシムルニ係ル者ハ、曰ク畫中彩色ヲ施スコト、各々其部位有  
 リテ、甲ノ部ハ自ラ甲ノ部ノ設色有リ、乙ノ部ハ自ラ乙ノ部ノ設色有リ、  
 此處ハ人ヲシテ悲マシメ、彼ノ處ハ人ヲシテ欣ハシム、此レ固ヨリ自然  
 ノ理ナリ、然レモ作者設色宜ヲ得ルキハ、其各部ノ相異ナル者、相合シテ  
 自ラ一體ヲ成スヲ得、是ヲ以テ賞鑒家一タビ之ヲ望見スルキハ、或ハ悲  
 ミ或ハ欣ブモ、觀テ全體ノ局面ヲ畢ルキハ、必ス變化中ニ極整齊ノ處有  
 ルヲ見ル、然ル後目ヲ怡ハシメ心ヲ快ニスルコト乃チ得ベキナリ、

夫レ畫家明晦ノ二者ヲ調整シテ宜ヲ得ルハ、其圖中或ハ凹處有リ、或ハ凸處有リ、或ハ隱處有リ、或ハ顯處有ルガ如シト雖モ、然レモ其中必ス看テ中央ト爲ス可キ處有リテ、全部ノ線條自ラ其處ニ輻湊スルガ如キヲ致ス、此レ余ノ既ニ前ニ論セシ所ナリ、而シテ所謂明晦ハ之ヲ太陽ノ光線ニ假ルニ非ズシテ、即チ設色ノ調整ニ由リテ之ヲ出ス、故ニ曰ク設色ノ調整ハ畫家ノ尤モ重ンズ可キ所ナリト、

是ノ如クニシテ、設色ノ法ヲ以テ各部ノ變化有ル者ヲ合シテ整齊ナラシメ、各位ノ混淆ナル者ヲ總ベテ單純ナラシメ、以テ賞鑒家ヲシテ目ヲ怡バシメ心ヲ爽ニスルヲ得シムルヲ、之ヲ名ケテ「アルモニ」ドテ、グーレールト曰フ、即チ諸采ノ調整ノ義ナリ、而シテ畫家相通シテ之ヲ「アンウロップ」ト曰フ、掩蔽ノ義ナリ、他無シ、諸采ノ調整ヲ以テ掩蔽シテ之ヲ取ルノ謂ナリ、

人若シ諸色ノ調整ノ畫道ニ大關係有ル所以ヲ知ラント欲セバ、試ニ同一畫家ノ作ル所ノ二畫幀ヲ比較シテ之ヲ視ルニ如クハ莫シ、之ヲ例ヘハ、ダウトノ描キシ所ノサビンヌノ名、羅馬人ノ故事ト其レカミエー夫人ノ像トノ如キ、同一畫人ニ出ツルト雖モ、相反スルヲ霄壤霄ナラズ、蓋シサビンヌノ故事ハ其輪郭及ビ線條一々博士家ノ法ニ依準シテ、之ヲ出シテ極テ嚴整ナリ、然レモ板直ノ處有ルヲ免レズ、又其設色ニ就テ論ズルモ、一モ取ル可キ所有ルヲ無シ、蓋シ其圖既ニ典故ニ屬スルヲ以テ、許多ノ人物相倚リテ全圖ヲ成スト雖モ、之ヲ一見スルハ絶エテ相合スルノ迹ヲ見ズシテ、各々全ク別天地ニ立チテ少シモ相關セザルカ如シ、即チ其ロミュリコース及ビクナースノ如キ、專ラ自己ノ容表ニ注意シテ眼中別ニ見ル所無キカ如ク、又其中在ル所ノ婦人モ、亦皆專ラ一身ノ容儀ヲ整フルヲ喜ビテ、其他ノ事ハ絶エテ意ニ經ザルカ如シ、夫レ母ノ子

ニ於ケル、天然ノ愛情窮極無キ者ナリ、今ダウイットノ圖中ノ婦人ハ皆然ラズシテ、己レノ子ト雖モ己レト少シモ交渉無キカ如シ、是ノ如キ者ハ何ゾヤ、諸采ノ調整宜チ得ズシテ、唯筆墨線條ノ觀ル可キ有ルニ止マルヲ以テナリ、夫レ歴史ノ典故ヲ描ク者ハ、必ズ其諸人物ヲシテ各々其情懷ヲ呈露セシムルヲ求メテ後得タリト爲ス、今ダウイットノサピンスノ畫ハ然ラズシテ、數個ノ人物偶然一處ニ聚リテ各々胡越ノ思有ルカ如シ、

夫レサピンスノ畫其題目ノ旨趣散亂シテ相合セザルコト此ノ如シ、此レ其故何ゾヤ、正ニ其設色宜チ得ザルニ坐スルノミ、設色宜チ得ズ、是ヲ以テ此顔面ト彼顔面ト此容儀ト彼容儀ト相離レテ相合ハズ、他無シ、青黃金碧ノ諸色徒ニ相雜リ相並ビテ、少シモ一體ヲ成スコト無キヲ以テナリ、若夫レレカミエー夫人ノ像ハ則チ適カニ此レニ異ナリ、同一畫人ノ手

ニ出ルト雖モ、其巧拙實ニ天壤ノ異有リ、其顔面ヨリ其體容ヨリ衣裳ノ微ニ至ルマテ皆相環響シテ一體ヲ成スカ如シ、此レ蓋シ凡ソダウイットノ諸像中ニ就テ最モ合作ト稱ス可キ者ナリ、ダウイット本ト典故ニ短ニシテ肖像ニ長ゼリ、此レ遍ク世人ノ知ル所ナリト雖モ、然レモ一切他ノ肖像ヲ把リテ此レト比較スルハ大ニ及バザル有ルヲ見ル、レカミエー夫人ノ像ハ未ダ成就セズ、蓋シダウイット俄ニ病死シテ業ヲ畢ハルコトチ得ザリキ、夫レダウイット素ヨリ博士家ノ說ヲ信奉シテ甚ク意ヲ設色ニ用ヒズ、是ヲ以テ線畫ハ極メテ巧ナリト雖モ、彩色ニ至リテハ、多クハ人ヲシテ遺憾ヲ懷カシムルヲ免レズ、故ニ此畫ノ如キモ若シダウイットチシテ業ヲ卒ハルコトチ得セシメハ、其線畫ヲ整齊スルノ太甚クシテ或ハ終ニ其設色ノ巧ヲ擾リシヤモ未ダ知ル可ラズ、果シテ此ノ如クナルハ、其業ヲ率ハルコトチ得ザリシハ、反テ作者ノ幸ト謂フ可キナリ、

設色ノ事極メテ重大ナリト雖モ、衆人觀ル者多クハ其重大ナルヲ知ラズシテ、書學ニ深キ者ニ非ザルヨリハ、此事ヲ語ルモ漠焉トシテ與リ關セズ、是ニ於テ畫家モ亦或ハ以爲ラク、設色ノ調整ハ必ズシモ意ヲ用ヒズト、此レ大謬ナリ、夫レ衆人ノ觀ル者本ト書學ニ染指セザルヲ以テ、此事ニ於テ甚タ關係無シト雖モ、其眼ハ則チ頗ル之ヲ看破スルヲ知ル、若シ之ヲ證セント欲シハ、試ニ善ク調整セル一幀ト善ク調整セザル一幀トヲ以テ之ヲ衆人ニ示スニ如クハ莫シ、彼レ其善ク調整スル者ヲ觀ルキハ、必ズ曰ハソ、此畫大ニ彼畫ニ勝ルト、又其善ク調整セザル者ヲ觀ナラズ、然レモ衆人ハ本ト自ラ畫ヲ學ハズ、又意ヲ畫學ニ經ザルヲ以テ、凡ソ繪事ニ係ル論理ハ、一モ之ヲ知ラズ、故ニ己レ視テ巧妙ト爲スモ、自ラ其巧妙ノ在ル處ヲ指摘スルヲ能ハス、余嘗テ一畫幀ノ尤モ善ク設色

ノ調整ヲ得タル者ヲ把リテ衆人ニ示メセシニ、皆一見シテ感嘆セザル莫シ、而シテ余之ニ謂テ曰ク、公等以爲フニ此畫ノ稱ス可キ處ハ安クニ在ルヤト、彼レ或ハ云フ甲ノ處ニ在リト、或ハ云フ乙ノ處ニ在リト、然レモ一モ其肯綮ヲ得ル者無シ、余因テ手ヲ拍ンテ曰ク、嗚呼公等皆頗ル鑑定ノ才有リ、但畫學ノ理ニ暗キヲ以テ、其巧ナル者ヲ觀テ之ヲ喜ブモ、自ラ其巧處ヲ知ラズト、夫レ衆人甚タ意ヲ經ザルガ如シト雖モ、其隱然相喜ブコトハ、必ズ設色ノ上ニ在ルコト是ノ如クナルキハ、畫人タル者深ク心ヲ此ニ用ヒザル可ラザルコト亦明ナリ、衆人觀ル者ノ指摘スルヲ能ハザルカ爲メニシテ、是ニ怠ルコトヲ得ザルナリ、然リト雖モ所謂諸采ノ調整ハ、天下ノ事此ヨリ曖昧ナルハ莫クシテ、之レガ爲メニ一定ノ方法ヲ作ラント欲スルモ、決シテ得可ラズ、是ヲ以テ其采色ヲ用フルニ於テ、或ハ相反スル者ヲ並列シテ其變化ヲ取ル有リ、或ハ相和スル者ヲ並列シテ

其整齊ヲ取ル有リ、蓋シ所謂相反スル諸色トハ、即チ前ニ云フ所ノ充補ノ諸色ナリ、此等ノ色ヲ用フルハ互ニ相反射シテ益々燦爛タラシムルヲ致ス、此レリコペンノ喜テ用ヒシ所ノ方法ナリ、所謂相和スル諸采トハ他ニ非ス、甲ノ采ト乙ノ采ト親和極メテ密ニシテ、相喻収スルヲ以テ其采色ヲ外ニ發スルヲ甚シキニ至ラズ、即チウエラスクノ用ヒシ所ノ傳彩ノ法ノ如キ正ニ是レナリ、

更ニ一言スベキ有リ、曰ク設色ノ法誠ニ一ヲ執リテ論ズ可ラスト雖モ、全體ヲ以テ言フハ、務テ白色光線ニ近接スルヲ求ムルヲ尤モ妙ナリ、此レ蓋シウエロチーゾノ極テ意ヲ用ヒシ所ニシテ、賞鑒家ウエロチーゾノ畫幀ヲ觀ル者、皆曰クウエロチーゾノ畫ハ、之ヲ觀ルヲ若干時間ノ後、去リテ他ニ適クモ猶ホ久ク白色光線ノ眼前ニ往來スルヲ覺ユ、是ニ於テ我カ目中ノ視神經皆俱ニ其力ヲ逞クスルヲ得テ、絶エテ疲憊スルヲ

ヲ知ラズ云々ト、

又一言有リ、而シテ此レハ凡ソ賞鑒家ノ皆同ク然リトスル所ナリ、何ノ謂フヤ、曰クフロマンクン氏ノ言ニ曰ク、凡ソ畫家傳彩ニ巧ナル者ハ、其濃ト淡トニ論無ク、其富贍ナルト簡淨ナルトニ別無ク、皆其色彩ノ中ニ於テ、一種固有ノ性質ヲ發揮シテ、他人ノ足跡ニ循ハズ、自ラ一機軸ヲ出ス者有リ、而シテ此ノ如キ者ハ、獨リ夫ノ晦處ニ於テスルニ非ズ、獨リ夫ノ濃處ニ於テスルニ非ス、亦其尤モ明瑩ナル處ニ於テモ亦之ヲ見ル、此レ正ニ諸派ノ分ル、所以ニシテ、諸家ノ各々自ラ樹立スル所以ナリ、若シ此レ無キハ、古今一轍ニ、彼此一軌ニシテ、絶ニテ分別スル所無キニ至ラズ、今試ニ一畫幀ヲ把リテ之ヲ披閱セヨ、其濃淡果シテ如何、其明處ニ於テ何ノ狀ヲ爲シ、其晦處ニ於テ何ノ觀ヲ爲ス、凡ソ此等ノ事ニ由リテ檢鑒スルハ、其畫ノ何ノ時代ニ屬スルト、及ビ何ノ邦ニ出デシト、並

ニ何ノ派ニ係ルト、皆明ニ之ヲ知リテ審ニ之ヲ別ツテ得ルヲ疑無シ、此一事ニ係リテハ、現ニ畫家相通シテ用フル所ノ語有リ、此レ又知ラザル可ラズ、蓋シ諸種ノ彩色其明處ト晦處トヲ論ゼズ、其本有ノ性ニ於テ一モ喪失スル所無キトキハ、畫家之ヲ指シテ明晦相合體スト謂フ、此レ其意以爲ラク明ナリ、晦ナリ、皆必ス用フル所ノ色彩ト親和シテ相離レザルヲ要スト、故ニ合體ノ語ヲ用ヒテ之ヲ著ハスナリ、然レモ諸采ヲ調整シテ其濃淡ヲ制スルヲハ、諸家各々方法有リテ、決シテ一ナラズ、即チリユベ<sup>ン</sup>ノシヨルシヨ<sup>ン</sup>ヌニ於ケル、ウエ<sup>ス</sup>レ<sup>ー</sup>ノウエ<sup>ロ</sup>子<sup>ー</sup>ズニ於ケル其相異ナルヲ遠ニ量ル可ラザル者有リ、是ニ知ル畫荷モ天ニ獲ルノ才性有ルトハ、意ヲ肆ニシテ色彩ヲ發シテ、絶エテ人ノ軌轍ニ從ハザルヲ得ルヤ疑無キヲナ、但其中必ス守ラザル可ラザル者一有リ、即チ茲ニ云フ所ノ明晦ノ合體是レナリ、此一事ハウエ<sup>ニ</sup>ー<sup>ズ</sup>ニ在リテモ、マド<sup>リ</sup>ー

ド<sup>ア</sup>ン<sup>ウ</sup>エ<sup>ル</sup>ア<sup>ル</sup>レ<sup>ー</sup>ムニ在リテモ、凡ソ畫家皆守リテ喪失スルヲ無シ、然リト雖モ茲ニ又一怪事有リ、所謂明晦合體スルヲハ畫家ノ遍ク守ル所ナルニ、近代一人ノ全ク此レト相反スル者有リ、其人ハ誰トカ爲ル、曰クランブランド<sup>ド</sup>是レナリ、夫レランブランドハ古今畫家中ノ最モ絶倫ト稱スル所ナリ、或ハ未ダ然ラザルモ、古今大家中ノ一タルヲハ疑ヲ容レザル所ナリ、而シテランブランドハ其着色ノ間ニ於テ諸家ノ遍ク守ル所ノ規則ヲ踏破シテ、別ニ自ラ節角ヲ出セリ、此レ實ニ驚怪ス可キノ至リニ非ズ乎、

ランブランドノ色彩ヲ施スヤ、明ト晦トヲ調合スルヲ求メズシテ、反リテ之ヲ分別ス、是ヲ以テ其描キシ所ヲ觀ルニ、明處ハ專ラ明ニシテ、其諸采皆白ナルニ似タリ、晦處ハ專ラ晦ニシテ、其諸采皆黒ナルニ似タリ、而シテ其色采タル、初ヨリ其固有ノ色ヲ用フルニ非ズシテ、唯其隣接ス



ル所ノ諸采ト相反シテ之ヲ出ス、凡ソ此ノ如キ者ハ、此レヨリ前絶エテ人ノ爲サバ、ル所ニシテ、ランブランド意ヲ創シテ之ヲ始メリ、ランブランドノ着色法、其奇創ナルコト此ノ如シ、而シテ近日メーソニエー又之ヲ學ビテ頗ル名作ヲ出スコトヲ得タリ、夫レメーソニエーハ方今畫家ノ中ニ就テ夫ノ明晦ノ二者ニ係ル所ノ諸事ヲ研究スルコト、最モ至レリト稱スル所ナリ、而シテランブランドノ法ヲ喜ビテ之ニ從フテ、而シテ其作彼ノ如ク其觀ル可キハ、所謂明晦合體ノ一規則モ、未タ必ズシモ拘泥ス可キニ非ザルハ知ル可キナリ、抑々着色ノ事ニ係リ、余喋々シテ已マザルコト此ノ如クナル所以ノ者ハ何ゾヤ、他無シ、采色ノ一事ハ正ニ畫道ノ基礎ナルヲ以テナリ、何ヲ以テ之ヲ言フ、夫レ輪廓ヲ調整シ線條ヲ勻齊スルコトハ、畫道ニ於テ誠ニ重大ナラズト爲サス、然レハ此事ハ獨リ畫道ニ於テ之レ有ルニ非ズシテ、彫

刻建築皆之レ有リ、唯着色ニ至リテハ畫道ノミ之レ有リテ、彫刻建築並ニ之ニ交渉セズ、是ニ由リテ之ヲ考フルニ、着色ノ一事ハ畫道ノ基礎タルヲ疑ハ容レズ、然リ而シテ夫ノ博士家ノ徒ハ、以爲ラク着色ノ畫道ニ於ケルハ、特ニ裝飾ノ觀ヲ爲スニ過キズト、是ニ於テ專ラ輪廓ヲ調整シ、線條ヲ勻齊スルコトヲ以テ重要ト爲サント欲ス、此レ大謬ナリ、夫レ此ノ二ノ者固ヨリ皆重要ナリ、然レモ着色ヲ輕ンシテ、特ニ之ヲ重ンゼント欲スルハ豈ニ偏頗ノ甚キニ非ス乎、着色ノ重大ナル所以ノ者抑々何ノ故ソヤ、曰ク作者此ニ由リテ其描ク所ノ人物ヲシテ意趣ヲ發セシムルヲ以テナリ、夫レ同一題目ト雖モ、着色ノ功ニ由リテ、或ハ爽快ノ態ヲ發シ、或ハ悲慘ノ狀ヲ發ス、即チ古今諸大家ノ歴史ノ典故ヲ摸寫シテ、其狀各々一ナラズシテ、皆觀ル可キ者有ルハ此レガ爲メナリ、人若シ此事ニ疑フコト有ラバ、試ニリッペンノ描キシ所ノモンテオーカ

ルウエール」ノ圖ト「マルチールドサインリゴワン」ノ圖トヲ觀ルニ如クハ莫シ、モンテ・オーカルウエール」トハ磔架ニ登ルノ義ニシテ、基督ノ刑ニ就キシ圖ナリ、マルチールドサインリゴワン」トハ高僧サインリゴワンノ刑ニ就キシ圖ナリ、リゴベン此二圖ヲ描キテ其着色尤モ絢爛ニシテ偉麗ヲ極メリ、是ニ於テ博士家往々之ヲ毀リテ云フ、此二事ハ皆人間ノ極テ悲惨ノ状態ナリ、今リゴベン之ヲ摸寫シテ其偉麗ヲ極ム、此レ題目ノ意義ト相稱ハザルナリト、此評論ノ正ヲ得タルト否ラザルトハ姑ク之ヲ置キ、此一言ニ由リテ考フルキハ、着色ノ効タル現ニ題目ノ意趣ニ關係スルコト知ル可キナリ、若シ着色ヲシテ少シモ意趣ニ關係スルコト無カラシメバ、此二圖ノ采色何如ニ絢爛ナルモ、博士家何ニ由リテ此評ヲ致スコト有ラン、此ニ由リテ之ヲ觀レハ、博士家ノ徒ノ畫道ニ於テ專ラ筆畫ヲ重シテ、着色ノ一途ヲ輕ンズト雖モ、實ハ知ラズ識ラズ自然ニ着色ニ注意スル

「明ナリ、此レ豈ニ自ラ矛盾スルニ非ズ乎、

夫レリゴベンノ「モンテ・オーカルウエール」ノ畫ハ、着色誠ニ燦爛トシテ悲惨ノ狀ニ乏シ、然レモ未ダ此ヲ以テリゴベンヲ咎ムルコトヲ得ズ、他無シ、リゴベンノ其采色ヲシテ此ノ如クナラシメタルハ、別ニ意ヲ寓スル所有ルヲ以テナリ、フロマンタン氏ハ近世賞鑒家ノ中ニ就テリゴベンノ畫ヲ研究スルコト尤モ詳密ト稱スル者ナリ、而シテフロマンタン氏ハリゴベンノ此畫ヲ評シテ曾テ非議スル所有ラズ、獨リ非議スル所無キノミナラズ、且ツ極テ稱讚ヲ致シ、其言ニ曰クリゴベンノ人ト爲リ、磊々落落トシテ、其心ノ皎然タル日月ノ如シ、是ヲ以テ其「カルウエール」ノ圖ヲ摸寫スルヤ、其意義中ニ就テ專ラ其爽快ナル處ヲ寫シテ、其悲惨ノ處ハ初ヨリ之ヲ寫スコトヲ求メズ、爽快ナル處トハ何ゾヤ、基督一タビ刑ニ就テヨリ、那蘇宗大ニ天下ニ行ハル、ニ終ハリシコト是レナリ、故ニ基督ノ一死ハ正サ

ニ正教大勝利ノ機會ナリ、リコベン意チ此ニ注ゲリ、故ニ此圖ニ於テ采色  
 ナシテ極テ絢爛ナラシメテ曾テ悲惨ノ狀ヲ存セズ、此レ其物ヲ觀ルノ  
 感大ニ人ト相異ナル所以ナリ、未ダ凡眼ヲ以テ遽ニ之ヲ非毀スルコト  
 得ズト、

フロマンタン氏又曰ク、人往々云フリコベンノ此畫ハ絶ニテ悲壯高大ノ  
 氣象無クシテ、反リテ喧譁浮靡ノ態有リ、是ヲ以テ恰モ演劇ヲ看ルガ如  
 クニシテ、基督ノ酷刑ニ罹リシ時ノ狀態ト絶ニテ相類セズト、殊ニ知ラ  
 ズリコベンノ意思ハ迥ニ庸手ノ所見ト科ヲ異ニシテ、以爲ラク此時基督  
 ノ胸中豁然トシテ一毫悲惨ノ念有ルコト無クシテ、反リテ異日我が道ノ  
 大ニ世ニ行ハル、コトヲ料度シテ、大ニ心ニ期望スル所有リト、是ニ於テ  
 乎、其狀態極テ活潑ニシテ極テ爽快ナリ、凡ソ此ノ如キ者ハ、筆畫采色ノ  
 間ニ於テ躍然トシテ表見スルヲ觀ル、然レモ此レ等ノ事ハリコベンノ畫

ニ深キ者ニ非ザレハ未ダ之ヲ知ルニ足ラズト、フロマンタン氏ノ「マル  
 チールドサーンリゴワン」ノ圖ヲ評スルヤ、其意亦此ト同シ、其言ニ曰ク、看  
 ヲサーンリゴワンノ白馬ニ跨リ、金飾ノ袍ヲ着ケ、二夫兒之ニ隨フテ皆目  
 チ張り、口ヲ哆シテ勇進スルノ狀有リ、馬モ亦踊躍奮迅ノ概有リ、而シテ  
 全幀ノ色采ニ就テ言フハ、淡黒ナル處有リ、純白ナル處有リ、淺蒼ナル  
 處有リ、黄金色ナル處有リ、皆相映シテ爛然トシテ人ノ目ヲ奪フ、夫レ此  
 圖ヤ高僧ノ慘刑ニ就クコトヲ寫シテ、而シテ其悲壯ノ態有ルコト、夫ノ「モン  
 テーオーカルウエール」ノ圖ト相類ス、是ヲ以テ人モ亦或ハ之ヲ非毀ス、此  
 レ特ニリコベンノ畫ヲ知ラザル者ノ論ナリ、夫レ悲惨ノ中ニ於テ盛大ノ  
 狀ヲ寫シ、醜穢ノ間ニ於テ潔清ノ態ヲ形シ、此ノ二ノ者ヲシテ相和調シ  
 テ一種不可識ノ妙味ヲ發スルコト、是レリコベンノ長處ニシテ、諸家能ク及  
 ブ者莫シ、而シテ「マルチールドサーンリゴワン」圖ハ又リコベンノ最モ得意

ノ作ナリ、豈ニ淺人ノ得テ議スル所ナラン哉ト、  
 フロマンタン氏ノ言當レリ、夫レ同一ノ故事ヲ描テ或ハ悲慘ノ狀ヲ呈  
 シ、或ハ盛大ノ態ヲ著ハシテ、絶エテ一定ノ形無キハ、是正ニ色彩ヲ專ト  
 スル畫家ノ本色ナリ、惟ムコト無キナリ、凡ソ畫家初メ一圖ヲ製セント欲  
 スルヤ、先ツ其題目ニ就テ感スル所有リ、而シテ輪廓ヲ專トスル畫家ハ、  
 畫ノ輪廓ヨリ感慨ヲ起シ、色采ヲ專トスル畫家ハ、畫ノ色采ヨリ感慨ヲ  
 起ス、此レ自然ノ情ナリ、然リ而シテリベシノ如キハ、尤モ色采ヲ發揮ス  
 ルヲ以テ篤尙スル者ナレバ、則チ其畫ノ常ニ采色絢爛タル處ニ於テ勝  
 チ取ルハ亦宜ナラス乎、

フロマンタン氏又曰ク、リベシノ畫ニ於ケル尤モ意ヲ實形ニ用フ、蓋シ  
 予ヲ以テ之ヲ觀ルニ、凡ソリベシト名ヲ齊クスル畫家ノ中ニ就テ、意ヲ  
 實形ニ用フルコトハ、恐クハ或ハリベシニ踰ユル者莫シ、但其感慨極テ激

昂ナルヲ以テ其奔逸絶塵スルニ及ビテハ、能ク之レト鑑チ並ベテ同ク  
 馳スルコト能ハズ、是ニ於テ往々之ヲ謂テ專ラ意ヲ浮華高尙ノ處ニ用フ  
 ト爲ス、特ニ知ラズリベシノ苦心ノ處ハ正ニ其卑々トシテ實迹ヲ摸寫  
 スルニ在ルコトヲ故ニ其人物ヲ描クガ如キ筋骨皮肉ノ形態ニ眞人物ニ  
 肖似スルヲ取ルコト彼レガ如シ、蓋シ其人天姿高亮雅逸ナルヲ以テ、其實迹  
 チ摸寫スルノ間ニ在リテモ、自ラ一種奇傑ノ態度ノ人ナシテ驚心動魄  
 セシムルニ足ル者有リ、是ヲ以テ人其實迹ニ近キ處ヲ見ズシテ、專ラ其  
 怪奇ノ處ヲ見ル、此レ其凡眼ニ入り難キ所以ナリト、博士家ノ徒畫ニ於  
 テ專ラ筆畫ノ整齊ヲ尙ヒテ、色采ハ特ニ裝飾ノ一途ト爲ス、乃チ曰ク、畫  
 ノ意趣有ルハ輪廓ニ因リテ發生スト、特ニ知ラズ畫ノ意趣ノ活潑タル  
 ハ、采色ニ因リテ發生スル者尤モ多キニ居ルコトヲ、博士家ノ徒又曰ク、世  
 ノ色采ヲ以テ勝チ取ル者ハ、特ニ明晦ノ二者ヲ調整スルコトヲ求ムルニ

過キズト、嗚呼明晦ノ二者ヲ調整スルコト豈ニ易事ナラン哉、凡ソ圖畫ノ人物各々一種ノ氣象ヲ發スルガ如キハ、皆明晦ノ二者ノ致ス所ナリ、然ルチ之ヲ屏クルコト此ノ如クナルハ、吾レ其何ノ故タルヲ知ラザルナリ、且ツ尤モ怪ム可キ一事ハ、夫ノ博士家ノ徒ノ意毎ニ以爲ラク、色采ヲ專ラトスル畫家ハ、線畫ヲ調スルニ於テ、曾テ意ヲ用ヒズト、此レ大謬ナリ、夫レリユベソウエロチーズチシヤンランブランドシヨルシヨンヌタントレーコレーシデラクロアノ如キハ、皆善ク色采ヲ發スルチ以テ家ニ名スル者ナリ、然レモ此輩モ亦線畫ヲ調スルニ於テ、或ハ他家ニ加フル有リテ減スルコト無シ、豈ニ其色采ヲ發スルコトノ巧ナルガ爲メニ、其線畫ノ巧ヲ掩フコトヲ得ン哉、

予ハ更ニ一層ヲ進メテ之ヲ論セントス、曰ク色采家ノ線畫ニ於ケルハ、專ラ線畫ヲ尙ブ者ニ比スレバ、更ニ大ニ勝レル者有リ、而シテ其相勝ルヤ、尤モ貴重ノ處ニ於テ之ヲ見ル、何トナレバ、色采家ノ畫ニ於ケルハ、其遠近高下ノ勢線畫家ニ比スルハ、最モ實物ノ自然ニ近シ、怪ムコト無キナリ、彼レ善ク采色ヲ用ヒテ渲染布置ノ巧ヲ究メ、高キ處ハ隱然トシテ高キガ如クナラシメ、低處ハ隱然トシテ低キガ如クナラシメ、絶ニテ急遽直截ノ病無シ、若夫レ線畫家ノ如キハ、高低遠近ノ勢一ニ線條ニ由リテ之ヲ出ス、是ヲ以テ其輪廓直截ノ病ヲ免レズ、予故ニ曰ク、色采家ノ線畫ニ於ケルハ、線畫家ノ線畫ニ比スレバ、尤モ貴重ノ處ニ於テ大ニ相勝ルト、

且世ノ線畫ヲ主トスル畫家ヲ尊ビテ色采家ヲ屏クル者ノ言ハ、大ニ根柢トスル所有ルニ非ズ、彼レ特ニウエロチーズリペンノ如キ采色ニ巧ナル畫家ノ作ニ就テ、僅ニ其一ニテ觀テ輒チ曰ク、此輩唯彩色ノ煥燦タルヲ以テ自ラ勝ツコトヲ知ルノミ、此レ特ニ人ノ目ヲ駭カスコトヲ喜ブコト

知ルノミ、若夫レ題目ノ意趣ヲ發揮スルハ、初ヨリ意ヲ留ムル所ニ非ズト、嗚呼何ツ冤ナルヤ、此二家ノ如キハ誠ニ彩色ノ尤モ燦爛タル者ナリ、故ニ其一二ノ作ハ或ハ専ラ人目ヲ駭カスヲ求メシ者無シト爲サズ、然レモ此ヲ以テ凡ソ色采家ノ畫ハ皆此ノ如シト謂フガ如キハ、豈ニ議論ノ正ヲ得タリト爲ス可ケン哉、且ツマリユベソノ畫ノ如キハ、尤モ燦爛ノ彩色ニ專ラニシテ、動モスレハ線畫家ノ請テ致ス圖ト雖モ、其間皆必ズ意趣ノ躍然タル者有ルヲ歷々徵有リ、即チ其モンテ「オーカルウヰール」及ビ「マルチールドサーンリウソ」ノ二圖ニ係リテ、フロマンタン氏ノ言フ所ノ如キ是レナリ、但ウヰロチーゾノ畫ハ其中ニ或ハ色采ノ外別ニ意趣ノ觀ル可キ無キ者有リ、此レ特ニ一時弄巧ノ作ニ過キズシテ、其餘ハ皆生氣意趣ノ外ニ發出スル有リ、且ツ此一事ヲ明ニシント欲セバ、諸家ヲ闕キ、獨デラクロアールノ畫ニ就テ研究スルニ如クハ莫シ、一タビ此

畫ヲ研究スルハ、夫ノウヰロチーゾノ一時弄巧ノ作ヲ以テ其他一切ノ色采家ニ推スノ謬戾ハ、多言ヲ須ヒスシテ自ラ明ナル可シ、夫レデラクロアールハ色采家ノ中ニ就テ最モ傑出セル者ノ一人ナリ、此レ固ヨリ世ノ賞鑒家ノ同ク然リトスル所ナリ、然リ而シテデラクロアールノ畫ハ、題目ノ意趣ヲ發揮スルニ於テ、是ノ如ク其レ至レリ、今其畫ヲ細視スルニ、獨其采色ノ濃淡一ニ題目ノ人物ノ氣象ヲ摸寫スルヲ以テ主ト爲スノミナラズ、畫幀全體ノ色采ニ至リテモ、皆意ヲ此ニ留メタルヲ歷々徵ス可シ、故ニデラクロアールノ畫ハ未ク近接セズシテ遙ニ望見スルモ、隱然トシテ自ラ意趣ノ外ニ湧出スルヲ見ル、之ヲ例ヘハ其題目悲酸ナル乎、遙ニ望ミ見テ乍々悲酸ノ狀有リ、其題目宏壯ナル乎、遙ニ望ミ見テ乍々宏壯ノ態有リ、然レモデラクロアールハ色采家ノ一タリ、決シテ之ヲ線畫家ノ中ニ列ス可ラズ、

テオファイールシルウエストルハ近代賞鑒家ノ中ニ就テ最モ畫學ニ深達ナル者ノ一ナリ、而シテ其「クリスアングロア」ノ畫ヲ論スルノ言尤モ味フ可シ、「クリスアングロア」トハ、十字架上ノ基督ノ義ニシテ、デラクロアノ手ニ出テタリ、シルウエストル曰ク、此畫ニ在リテハ、凡ソ人目ヲ傷メ、人心ヲ慘メシム可キ者ハ、デラクロア皆之ヲ發揮シテ一モ遺ス所無シ、天色黯淡トシテ黒雲墨ヲ翻ヘスカ如ク、太陽ノ光其間ヨリ映射シテ其色血ヲ噴クガ如ク、暴風雲ヲ捲テ東西ニ飛散シ、片々皆深黒ニシテ恰モ黒棉ヲ散スルカ如シ、又其聚觀スル者ハ其顔色慘然トシテ且ツ深ク畏悞ノ意ヲ懷クカ如クニシテ、一見スルハ其造化主宰ノ威怒ヲ憚ルヲ察スルニ足ル、蓋シ基督ノ刑死ハ、天下古今ノ最モ悲ム可キ事ナリ、是ニ於テデラクロア此畫ニ於テ獨リ人物ノ顔面ノミナラズ、天地庶物舉ケテ皆悲慘ノ狀ヲ呈セシムト、シルウエストル氏ノ言誠ニ當レリ、夫

レ是ノ如クナルハ、豈ニ色采家ヲ以テ題目ノ意趣ヲ發スルニ短ナリト爲スコトヲ得ン哉、

シルウエストル又曰ク、デラクロア「ピエター」ノ畫ヲ看ヨ、其景物亦悲慘黯淡トシテ、一ニ其圖中ノ慈母其子ノ屍ヲ擁シテ啼哭スル者ト相稱ハシム、又其ノ「フラーシドドンシアン」ノ畫ヲ看ヨ、颶風大ニ起リ、激浪天ヲ衝キ、帆破レ機摧ケ、船體將ニ水底ニ沈マントス、是ニ於テ一船ノ諸客皆天ニ向フテ號呼スルノ態有リ、人ヲシテ一見シテ酸鼻セシム、併シ凡ソ其慘狀ヲ發揮スル所以ノ者ハ、筆畫ノ巧ニ倚ルト雖モ、抑々彩色ノ布置宜ヲ得ルノ力最モ多ニ居ル、蓋シ天色ノ淺蒼ナル者其上ヲ掩ヒ、海面ノ深緑ナル者其下ニ湛ヘ、人ハ則チ其間ニ在リテ微紅色ヲ爲ス、是レ其傳彩ノ相映スル尤モ活潑ノ意趣ヲ呈スル所以ナリ、且ツ夫レ天ナリ、海ナリ、皆偉大ノ物ニシテ、人ノ其間ニ在ルヤ猶ホ一粟粒ノ微ナルカ如

シ、此モ亦觀ル者ヲシテ無限ノ感ヲ發セシムルニ足ル、而シテ其最モ人  
 ナ感スルニ足ル者ハ、ドンジョアンノ容貌ニ在リ、ドンジョアン此九死一生  
 ノ間ニ在リテ、其顔色獨深ク心ニ頼ム者有リテ、自ラ其性命ヲ營糊トス  
 ル者ノ如シ、凡ソ此等數種ノ感情相聚リテ一幅ノ名畫ヲ成ス、而シテ其  
 然ル所以ノ者ヲ尋繹スルキハ、畢竟傳彩ノ妙ヲ得ルノ致ス所ナリ、嗚呼  
 畫家彩色ヲ用フルノ妙是ニ至ルキハ、其青黃金碧ノ色各々一種ノ聲音  
 ナ發スルカ如キノ勢有リテ、其人心ヲ感動スルコトモザールベトウエー  
 ウエーベルノ音樂ト略ホ相下ラズ、此ノ如キ者豈ニ獨線畫ニ巧ナル者ノ  
 能ク及フ所ナラン哉、

人或ハ云フ、畫幀ノ意趣ヲ發揮スルコトハ彩色ノ功ニ由ルト雖モ、之ヲ究  
 ムルニ其實ハ明晦ノ二者ニ歸結スト、是ニ於テ青黃金碧ノ諸色ヲ舍テ、  
 特ニ渲染ノ一途ニ於テ妙處ヲ認メント欲ス、願フニ此言ヤ、誠ニ其理無

キニ非ズト雖モ、若シ此說ヲ主張スルコト太甚クシテ、或ハ中ヲ失フニ至  
 ルキハ不可ナリ、請フ一タビ之ヲ論ズルコトヲ得ン、

夫レ明晦ノ二者ヲ調和スルヲ以テ意趣ヲ發揮スルノ一途ト爲スコトハ、  
 誠ニ異論ヲ容ル可ラス、今之ヲ徴セント欲セバ、誠ニ一畫ノ絶エテ彩ヲ  
 傳ケザル者ニ如クハ莫シ、諸種ノ板本ノ如キ、即チ皆此物ナリ、其畫タル  
 獨リ白黒ノ二色ヲ以テ成ル者ニシテ、一切彩色ヲ施ス可キ處ハ、皆黒ヲ  
 用ヒテ之ニ充ツルニ過ギズ、然レヒ人之チ一見スルキハ、其人物ノ情狀  
 意趣頗ル觀ル可シ、此ニ由リテ之ヲ觀レハ、明晦ノ二者其勢力誠ニ勝テ  
 量ル可ラサル者有リ、且ツヤ世ノ一種ノ畫人渲染家ト號スル者、就中ラ  
 ノンブランドノ如キハ、其彩色ヲ用フル方サニ此道理ニ由リテ基礎ヲ爲  
 セリ、是ヲ以テ青黃紅碧ノ諸色ヲ用フト雖モ、其最モ力ヲ用フルコトハ、正  
 ニ明ト晦トチ調整スルノ一事ニ在リ、是ニ知ル意趣ヲ發揮スルコトハ輪



郭ノ間ニ在ラズシテ、竟ニ采色ノ間ニ在ルコトヲ、然リト雖モ世ノ所謂渲染家或ハ一切諸色ヲ除去シテ、獨明晦ノ二者ヲ以テ畫ヲ作サント欲スルニ至ルコトハ、畢竟亦中道ニ過クルト爲スヲ免レズ、何トナレハ渲染ノ法タル、予カ前ニ論セシ所ノ如ク、特ニ明晦ノ二者ヲ調和シテ、各々其宜ヲ得シムルニ在ルノミ、必ズシモ此二者ヲ專用シテ諸色ヲ除去スルヲ謂フニ非ズ、

又渲染ノ一法ニ就テ更ニ一事ノ言フ可キ有リ、今夫レ天地ノ兩間到ル處空氣瀰漫セザル莫クシテ、動植金石ヲ問ハズ、皆其罨フ所ト爲ラザル莫シ、是ヲ以テ同一色ノ物ト雖モ、距離ノ遠近ニ由リテ大ニ其色ヲ異ニス、他無シ、相距ルコト遠キトハ、空氣ノ其間ニ在ル者厚クシテ、相距ルコト近キトハ空氣ノ其間ニ在ル者薄ケレバナリ、是ヲ以テ畫家苟モ實物ニ肖似スルコトヲ求メント欲スルトハ、未ク專ラ彩色ノ絢爛ナルコトヲ務ムル

コトヲ得スシテ、必ズ渲染法ニ由リテ幾分色采ヲ除去セサルコトヲ得ス、之ヲ例ヘハ山巔ノ如キ、日光清明ナル時近ク接シテ之ヲ見ルトハ、其草木巖石ノ表靄然トシテ塵埃ノ掩蔽スル有ルヲ見ル、若夫レ遠ク之ヲ望ムトハ、藍色ノ外別ニ色ヲ雜ルコト無シ、

夫レ然リ、故ニ畫家苟モ意ヲ空氣ニ留ムルトハ、其畫ク所ノ何タルヲ論セズ、其采色ノ光線ニ於テ幾分除去スル有ラザル可ラスシテ、即チ明晦及ビ淺深高下遠近ノ諸勢ハ皆此ヨリ出ヅ、是ニ於テ其畫ヲ望觀スルトハ青黃紅碧ノ采色有リト雖モ、其上隱然掩蔽スル者有ルガ如キヲ致ス、此レ所謂渲染法ナリ、且夫レ物ノ太露ナル者ハ、氣象索トシテ含蓄ノ態ニ乏シ、之ニ反シテ物ノ少ク蔽ハル、者ハ、一種無量ノ意味ヲ發出ス、是レ自然ノ勢ナリ、故ニ夫ノ渲染宜チ得テ明晦ノ二者調和ノ妙ニ入ルトハ、其畫ノ題目ニ隨テ或ハ畏ク可キノ狀有リ、或ハ尊フ可キノ狀有リ、或

哀ム可キノ狀有り、或ハ憂フ可キノ、有り、凡ソ此等ノ狀態ハ所謂生氣  
意趣ナル者ナリ、

ランブランドノ渲染法ヲ喜ビ用ヒシハ、正ニ此レ等ノ狀態ヲ發揮スル  
カ爲メナリ、但其此法ヲ用フルノ太甚ニシテ、其畫中或ハ意趣曖昧ニシ  
テ、殆ント理會ス可ラザルニ至ル者有り、此レハ則チ其流弊ト謂ハサル  
ヲ得ス、即チ其「ロンドツスイー」ノ畫ノ如キハ、其始テ發スルヤ、人其何ノ  
圖タルヲ解シサリシカ、今日ニ至リ僅ニ略ホ其意ヲ了スルヲ得タリ  
怪ムヲ無キナリ、彼レ既ニ夜景ヲ描テ乃チ「ロンドツスイー」ト題シリ、然  
リト雖モ、其采色黯淡ナラズシテ反リテ白色ヲ呈スルヲ以テ、一見スル  
キハ人其夜景タルヲ省シズ、夫レ明晦ノ二者誠ニ貴フ可シト雖モ、之ヲ  
濫用スルヲ此ノ如キニ至ルハ、終ニ此ヲ以テ譏ヲ得サルヲ能ハズ、  
此ニ由リテ之ヲ觀レハ、世ノ所謂渲染家ハ其用ナル所ノ采色何タルヲ

論セズ、必ズ皆一種ノ白色ヲ隱帶シシメテ、然ル後得タリト爲スヲ知ル  
可キナリ、顧フニ此法ハ天下之ヨリ危險ナルハ莫シ、何トナレハ此一法  
ニ於テ尤モ妙ヲ得タリト稱スル畫人ランブランドノ如キモ、既ニ一タ  
ヒ失敗ヲ致シシヲ以テナリ、若又此法ヲ用ヒテ宜ヲ得ルキハ、其功ハ又  
勝テ量ル可ラサル者有り、即チランブランドノ諸名畫ノ如キ是レナリ、  
其青黃紅碧ノ諸色、縱橫長短ノ諸線並ニ皆一種模糊タル白色ノ中ニ埋  
ミテ、隱然トシテ其形ヲ見ハシ、近キ者ハ益々近シ、遠キ者ハ益々遠シ、注  
然トシテ深ク、隆然トシテ高ク、其目ヲ怡ハシムルヲ實ニ言フ可ラズ、而  
シテ其間一種活潑ノ生氣咄々人ニ逼ルノ概有リテ、其人心ヲ感スルヲ  
亦言フ可ラズ、

此ニ由リテ之ヲ觀レハ、畫ノ意趣ヲ發揮シテ、觀ル者ノ心ヲ感動スルヲ  
ハ、渲染ノ一法ヨリ善キハ莫シ、既ニ作者ノ感慨ヲ寫スニ便ニシテ、又庶

物ノ實形ヲ摸スルニ便ナレバナリ、然リ而シテ渲染ノ法ハ即チ采色ノ用法ニ存スル者ナリ、夫ノ線畫ヲ重ンスルノ徒是ニ察セズシテ、徒ニ采色ヲ以テ裝飾ノ具ト爲スハ豈ニ謬ラス乎、

○第四章 筆畫○生氣ヨリ發スル形貌○線條ヲ主トスル筆畫家及ヒ生氣ヲ主トスル筆畫家○生氣ヲ主トスル筆畫家ノ線條ヲ主トスル筆畫家ニ勝ル所以ノ理

予既ニ前ニ明晦ノ二者ヲ論シテ頗ル其詳悉ヲ致セリ、顧フニ人或ハ前ノ談論ヲ以テ太煩密ニ涉リタルト爲サン、予固ヨリ之ヲ知レリ、但世ノ筆畫ヲ主トスル者、動モスレハ采色ヲ斥ケテ甚タ肝要ト爲サザルカ故ニ、已ムコトヲ得ズ之ヲ論ズルコト是ノ如ク詳悉ナルニ至ル、讀ム者其レ之ヲ諒セヨ、

人或ハ予ノ采色ヲ重スルコト是ノ如クナルヲ見テ、將ニ曰ハントス、其弊

ヤ必ス筆畫ノ一途ヲ斥ケテ甚タ肝要ナラズト爲サント、是レ大ニ然ラズ、夫レ博士家ノ徒種々ノ僻說ヲ設ケテ筆畫ノ一途ヲ主張スルコト太甚ナリト雖モ、余ハ必スシモ此ヲ以テ此ノ一途ヲ斥クルコトヲ爲サズ、何トナレハ筆畫ヲ主トスル者ハ、固ヨリ不可ナリ、采色ヲ主トスル者モ亦不可ナリ、此二ノ者ハ畫事ニ於テ必ス相須テ用テ爲ス者ニシテ、決シテ偏廢ス可ラサレバナリ、

筆畫ヲ主張スルノ太甚ナル者ハ、其論ヲ爲スコト往々空妙ニ陥リテ自ラ知ラズ、其言ニ曰ク采色ナル者ハ濃淡一ナラズシテ、一定ノ論ヲ爲シ難シ、若夫レ筆畫ハ然ラス、本ト種々ノ線條ヲ以テ成ルカ故ニ、確乎トシテ易ク可ラズ、是レ其勝ル所以ナリト、此言ヤ大謬ナリト謂フ可シ、夫レ采色ハ何ノ一定セザルコトカ之レ有ラン、蓋シ諸種ノ色采相並ビ相映シテ濃淡ノ力ヲ變スルコトハ其色采ノ實質乃チ然ルニ非ズシ

テ、特ニ吾人ノ視神經ノ致ス所タルニ過キズ、若シ吾人ノ視神經ヨリシテ言フハ、線條ト雖モ亦一定ノ論ヲ爲シ難シ、之ヲ例ヘハ物體ノ如キモ其大小廣狹細麁厚薄曲直疎密各々定形有リト雖モ、一旦二物ヲ並ベテ俱ニ觀ルハ、各別ニ觀ル時ト大ニ狀ヲ異ニス、即チ物ノ大ナル者實ハ甚大ナラザルモ、他ノ小ナル者ニ比例スルハ、極テ大ナルヲ覺ユ、其廣狹細麁等ノ性皆然ラザル莫シ、然レバ即チ獨采色ヲ以テ定形無シト爲スハ至謬ナラズ乎、

采色ヲ斥クル者又別ニ論柄トスル所有リ、其旨意ノ怪僻ナルハ茲ニ云フ所ニ下ラズ、其言ニ曰ク、凡ソ天下ノ物愈々靈慧ナル者ハ愈々采色ヲ用フルヲ無クシテ、專ラ線畫ニ因リテ形ヲ爲ス、之ヲ例ヘハ土石金鑽ノ屬ハ、草木ノ靈慧ナルニ如カズ、草木ノ屬ハ、又動物ノ靈慧ナルニ如カズ、而シテ動物ノ中ニ就テ人類ハ最モ其靈慧ナル者ナリ、然ル

ニ土石金鑽ヲ以テ草木ニ比スルハ、大ニ采色有リ、草木ヲ以テ動物ニ比スルハ、又大ニ采色有リ、而シテ動物ノ中ニ就テ人類ハ最モ采色ヲ假ラザル者ナリト、此レ何ソ言ノ妄ナルヤ、夫レ禽獸ノ中羽毛極テ美麗ニシテ、草木金石ノ比ニ非ル者、現ニ之レ有ルニ非ス乎、無數細蟲ノ中、其色極テ爛熳トシテ殆ント花葉ニ勝ル者、現ニ之レ有ルニ非ス乎、論者又云フ禽獸蟲魚ノ中誠ニ采色ニ富メル者有リ、然レモ其物多クハ靈慧ナラズ、苟モ靈慧ナル者ハ皆采色ヲ假ラザル者ナリ、乃チ黃鸝ノ如キハ孔雀ニ比スルハ、迥ニ靈慧ナリ、而シテ其色翎ノ美ハ遠ク相及バズ、是ニ知ル采色ナル者ハ形貌ニ比スルハ、大ニ貴ブニ足ラザルヲチ、故ニ畫家モ亦當ニ線條ノ處ニ注意シテ、專ラ形貌ノ整齊ナルヲチ求ム可シ、采色ノ巧拙ハ甚心ヲ用フ可キニ非ズト、又云フ人身ノ如キハ唯線條ノ整齊ナルニ由リテ成ル、果シテ何ノ采色有ル乎、

是ニ知ル人類ヲ造リシ所ノ造化主宰ハ、猶ホ畫家ノ線條ヲ主トスル者ノ如クナルコトヲ、嗚呼繪事ヲ論シテ造化主宰ヲ引證スルニ至ル、何リ言ノ荒誕ナルヤ、是ノ如キ者固ヨリ共ニ論スルニ足ラサルナリ、予ヲ以テ之ヲ觀レハ、線畫ト采色トハ相須テ用テ爲ス者ニシテ、未ク定テ孰ヲ先トシ孰ヲ後トシ難キ者有リ、何トナレハ繪畫苟モ彩色無キハ、以テ繪畫ト爲ス可ラズ、苟モ線條無キハ亦以テ繪畫ト爲ス可ラザレバナリ、是ニ知ル線畫ト采色トハ繪畫ノ二原質ニシテ偏廢ス可ラズルコトヲ、恠ム無キナリ、畢竟繪畫ノ物タル、一言以テ之ヲ蔽フ、曰ク線畫中采色有リ、又曰ク采色中線畫有リ、

線畫ノ事ハ前ニ建築及ヒ彫刻ノ篇ニ於テ之ヲ論ズルコト頗ル詳密ナリシヲ以テ、茲ニ復タ之ヲ論ズルヲ要セザルニ似タリ、獨奈何セン、均ク是レ線畫ナリト雖モ、繪畫ノ線畫ト彫刻ノ線畫トハ、大ニ相異ナル者有リ

請フ先ツ之ヲ論セン、

繪畫ハ彫刻ニ比スルヒハ、作者ノ意趣ヲ發揮スルコト更ニ自在ナル者有リ、是ヲ以テ人物ヲ描クガ如キモ、其情性ヲ摸寫シ、其氣象ヲ發揮スルコト、彫刻ニ比スレハ大ニ緻密ナルコトヲ得、之ヲ證セハ人ノ喜極マリテ啼哭シ、若クハ忿恚シテ切齒扼腕スル狀ノ如キハ、之ヲ繪畫ニ發スルヒハ甚其ノ宜ヲ得ルモ、之ヲ彫刻ニ發スルヒハ人ヲシテ厭惡セシムルヲ免レズ、是レ他無シ、繪畫ハ大抵一全圖ヲ描クガ故ニ、人物若干數相聚ルヲ以テ、觀ル者容易ニ其意義ノ在ル所ヲ解スルコトヲ得、若夫レ彫刻ニ在リテハ、多クハ寥々一人ノ像ニ止マルヲ以テ、人唯其欣喜ノ顔、忿恚ノ面ヲ視テ、其何ノ故ニ欣喜シ、何ノ故ニ忿恚スルヲ見ズ、是レ其ノ異ナル所以ナリ、

彫刻ニ在リテハ、其人物ノ體容多クハ整齋肅正ナルコトヲ貴ブ、若夫レ繪

畫ニ在リテハ、鼓舞飛躍ノ狀ヲ描クハ屢々ナリ、即チリベソデラクロア  
 一ノ如キハ、其主トスル所生氣活潑激昂ナルニ在ルヲ以テ、其人物多ク  
 ハ踊躍蹶起ノ態ヲ見ハスヲ往々ニシテ然リ、蓋シ畫家ノ人物ヲ描クヤ、  
 其人ノ種々ナル體容ヲ形ハシテ、前後相繼クノ間ニ於テ特ニ其一ヲ擇  
 ビテ之ヲ圖スル者ナリ、之ヲ例ヘハ兩人相闘フカ如キ、先ツ各々劍ヲ執  
 リテ相向フ、是レ一體容ナリ、次テ其一人劍ヲ揮フテ其敵ヲ擊ツルハ其  
 敵亦劍ヲ舉ケテ之ヲ扞ク、是レ亦一體容ナリ、次テ其一人其敵ヲ擊テ  
 之ヲ殺スカ、若クハ之ヲ傷クルカ、若クハ相共ニ死スルカ、若クハ相共ニ  
 傷フ等、是レモ亦一體容ナリ、而シテ畫家ノ圖ヲ擇フヤ、或ハ此第一ノ體  
 容ヲ取り、或ハ第二ヲ取り、或ハ第三ヲ取ルナリ、同一人ヲ同一圖中ニ寫  
 シテ、并セテ種々ノ體容ヲ寫スコトハ、固ヨリ得可キニ非ズ、然レモ畫家摸  
 寫其妙ヲ得ルハ、一體容ノ中ニ於テ、數種ノ體容ヲ含蓄スルコトヲ得、何

ゾヤ且ツ前ニ云フ所ノ三體容ノ如キ、畫家其一ヲ擇取シテ圖ト爲シ、乃  
 チ劍ヲ執リテ敵ヲ擊ツノ狀ヲ描カンニ、其生意十分ニ著見スルハ、之  
 チ觀ル者更ニ其前ニ溯リテ、其人ノ目ヲ瞋ラシ疾視スルノ狀ヲ想像シ、  
 又更ニ其後ヲ推シテ其人ノ直チニ其敵ヲ擊殺スルノ狀ヲ想像セシム、  
 故ニ曰ク畫家ノ摸寫妙ヲ得ルハ一體容ヲ描テ其中自ラ數種ノ體容  
 チ含蓄スルコトヲ得ルト、若夫レ彫刻ノ如キハ然ラズ、其圖ヲ擇ブヤ更ニ  
 靜恬ナルヲ取リテ之ヲ寫ス、之ヲ例ヘハ馬ニ上リテ遠望スルカ如キ、牀  
 ニ倚リテ立ツカ如キ、其體容皆一瞬間ノ物ニ非ズ、故ニ觀ル者唯其體容  
 ノ無窮ニ延クコトヲ見テ、決シテ之レカ爲メニ其前後ノ體容ヲ想像スル  
 ニ至ラス、

夫レ彫刻家ノ圖ヲ擇フ其體容無窮ニ延ク者ノ如シ、是ヲ以テ其線畫モ  
 亦自ラ整齊ナラザルヲ得ズ、畫家ノ圖ヲ擇フヤ、其體容ハ畢竟一瞬間ノ

物ナルヲ以テ、其線畫モ亦自ラ變化有ラサルヲ得ズ、怪ムヲ無キナリ、今夫レ吾人馬ニ上リ願望スルカ、若クハ牀ニ倚リテ立ツカ如キハ、其體容固ヨリ若干時間ヲ經ルヲ得、何トナレハ是ノ如キ者ハ筋骨ノ位置ニ於テ、初ヨリ其擾動ヲ致スヲ無キヲ以テナリ、若夫レ劍ヲ揮フテ蹶起スルカ如キハ、其體容決シテ多少時間ヲ經ルヲ得ズ、何トナレハ是ノ如キ者ハ、其筋骨ノ位置木ト拂逆スル所有ルヲ免レザルヲ以テナリ、夫レ然リ、故ニ曰ク彫刻家ノ線畫ハ、其勢整齊ニ歸シ、畫家ノ線畫ハ、其勢變化無キヲ能ハズト、

夫レ畫家ノ圖ヲ作ス、其人物ノ體容中數種ノ體容ヲ包蓄スルヲハ、茲ニ論スル所ノ如シ、然レモ是レハ畢竟實ニ之ヲ包蓄スルニ非スシテ、特ニ觀ル者ノ胸中之ヲ想像スルニ由リテ然リ、故ニ畫家ノ摸寫妙ナラサルハ、觀ル者ヲシテ想像ヲ起サシムルヲ能ハサルヲ以テ、其人物ヲ觀ル

ハ彫刻ノ圖ト同ク無窮ニ延クカ如クナルヲ致ス、之ヲ例ヘハ劍ヲ揮フテ飛躍スルノ狀ヲ描クカ如キモ、其摸寫至ラサルハ、其人物ノ生氣索然タルヲ以テ、之ヲ觀ル者將ニ曰ハントス、此人々劍ヲ揮フノ際、俄ニ化シテ寂然不動ノ物ト爲リシナリト、是ノ如クニシテ可ナラン乎、故ニ畫家ノ一體容ヲ寫スハ、必ス生氣ヲシテ活潑ナラシメテ、觀ル者ヲシテ其體容ヲ認メテ一瞬間ノ物ト爲サシムルヲ要ス、今譬ヘバ幾何ノ環線ノ如キハ、之ヲ分ツハ無數極小ノ直線ト爲スヲ得、他無シ、極小ノ直線相繼テ漸次ニ微シク曲カルハ、以テ環線ヲ爲スヲ得レバナリ、若其直線太長キハ、之ヲ聚ムルモ以テ數角ノ環線ヲ爲ス可シ、以テ真正ノ環線ヲ爲ス可ラズ、畫人物ノ體容ノ如キモ亦此レト相類スル者有リ、蓋シ其體容ハ一瞬間ノ物ニシテ、猶ホ極小ノ直線ノ如キ者ナリ、此レ等ノ體容相繼テ數日ヲ經、又相繼テ數月數年ヲ經テ、其人一生ノ事

業畢ハル、此レ猶ホ一環線ノ如キ者ナリ、其一瞬時間ノ體容ヲ描テ輕爽ナラサルキハ、其人物生氣無クシテ、復タ其前後ノ體容ト相繼グテ能ハズ、是ノ如クナルキハ、其人物ハ初ヨリ生人ノ形ヲ見ハス、一能ハス、塊然タル屍肉ノ如キヲ致サンノミ、

是故ニ古今繪事ノ大家ト稱スル者ハ、其筆畫ノ間必ズ生氣運動有ラザル莫シ、是レ之ヲ生氣ノ筆畫家ト謂フ、リニベン、デラクロア、ラングラン  
ドノ如キ皆是レナリ、若夫レダウイット、アングルノ如キハ、專ラ意ヲ線畫ノ整齊ナルニ用ヒテ、生氣ハ則チ索然タリ、是ノ如キ者之ヲ線畫ノ筆畫家ト謂フ、其相異ナルコト唯霄壤ノミナラズ、今試ニリニベン、デラクロアノ畫ヲ以テ、ダウイット、アングルノ畫ニ比較センニ、獨其采色ノ法相異ナルノミナラズ、其輪廓線條モ亦大ニ相異ナル者有リ、蓋シリニベン、デラクロアニ在リテハ、一筆一畫躍然飛動ノ態有リテ、其人物恰モ布幘ノ外

ニ跳出セントスルガ如シ、ダウイット、アングルノ畫ニ至リテハ、其筆畫板直重遲ニシテ其人物恰モ彫像ノ寂然不動ナルガ如シ、

夫レダウイット、アングルノ二人、其畫法板直ニシテ生氣ヲ欠クコト此ノ如シ、而シテ博士家ノ輩ハ其筆畫ノ整齊ナルニ浸淫シテ、之ヲ喜フコト至レリ、是ニ於テ此二人ヲ稱シテ筆畫家ノ巨匠ト爲スニ至ル、何ソ溢美ノ甚キヤ、夫レ彫刻ノ線畫ト繪畫ノ線畫トハ、其性質相異ナルコト前ニ論スル所ノ如シ、今博士家ノ徒ハ、未タ此理ヲ解セザル邪、是レ實ニ怪ム可キナリ、

且ツ夫ノ畫家ノ偏ニ寂然不動ノ形ヲ描テ、自ラ以テ線畫ノ奧秘ヲ得タリト爲ス者ハ、人身窮理ノ道理ヲ知ラザル者ナリ、方今人身窮理ノ一道大ニ進關ニ就キ、發見スル所頗多シ、中ニ就キ視學ノ實驗極テ精妙ヲ致セリ、其實驗ニ據ルニ、凡ソ外物吾人ノ眼睛ニ映ズルキハ、已ニ其物ト相



去ルノ後ト雖モ、其印影猶ホ留リテ睛中ニ在ルヲ若干時ヲ涉ルト、此ニ由リテ之ヲ考フレハ、我レ若シ人ノ一事ヲ作スヲ觀ルキハ、其種々ノ體容相繼テ我レノ眼睛ニ映シテ、影ヲ成スヲ猶ホ明鏡ノ臺ニ懸レル時ノ如シ、而シテ其印影皆痕迹ヲ留ルヲ若干時ナルヲ以テ、前ノ體容ノ影未タ去ラズシテ次ノ者又至リ、是ノ如クニシテ層々相聚リテ、若干數ノ體容一時齊ク影ヲ我カ眼睛中ニ留ムルヲ有リ、是ニ知ル人ノ體容一々相繼テ前ノ者一去スルキハ復タ迹ヲ留メズ、次ノ者之ニ接シテ復タ起リ、是ノ如クニシテ必ズ遞次ニ進ムルハ、實迹乃チ然ルヲ實迹ハ乃チ是ノ如シト雖モ、其影迹ノ我カ眼睛中ニ存スルヨリシテ言フキハ、數種ノ體容一時齊ク影ヲ呈スルヲハ亦我視神經乃チ然ラシムルナリ、顧フニ畫家ノ人ノ體容ヲ寫スハ、必ズ實迹ヲ以テ據ト爲ス可キ乎、若シ然ルキハ、苟モ一體容ヲ寫スキハ、絶エテ人ヲシテ其前後ノ體容ヲ想像スルヲ

ヲ得セシメズシテ、其畫家ハ寂然不動ノ病ヲ免レズ、夫レ體容寂然不動ノ狀有ルキハ、是モ亦攝影術ノ類ノミ、何ヲ以テ畫ト爲スニ足ラン、苟モ稱シテ畫ト爲スキハ、必ズ生氣運動ヲ具フルヲ要ス、而シテ生氣運動ヲ具ヘント欲スルキハ、夫ノ實迹ヲ以テ據ト爲サズシテ、必ズ眼睛中ノ印影ヲ以テ據ト爲ス可シ、是ノ如クスルキハ、其畫一體容ヲ寫スト雖モ、其生氣活潑ナルヲ以テ、其中自ラ其前後體容ヲ含有スルヲ得可シ、余故ニ曰ク、夫ノ畫家專ラ寂然不動ノ狀ヲ寫シテ以テ自ラ足レリトスル者ハ、方今人身窮理ノ實驗ニ因リテ利益ヲ得ルヲ知ラザル者ナリト、人或ハ曰ハントス、前後ノ體容相繼テ並ビニ眼睛中ニ印影スルヲ有ルト雖モ、是レハ畢竟我視神經ノ然ラシムル所ニシテ、實體ヨリシテ言フキハ、前後體容相繼テ經過スルヲ以テ、前ノ者既ニ去リテ後ノ者之ニ代ハルキハ、痕迹ヲ留ムルノ理無シ、故ニ畫家タル者ハ、必ズ實迹ニ據リテ

基ト爲ス可シト、余ハ乃チ答ヘテ曰ハシ、然ラバ則チ采色ニ係リテモ亦必ス實體ニ據リテ基ト爲シテ、少シモ視神經ノ作用ヲ問ハザル可キ乎、夫レ青黃紅綠各々固有ノ色有リテ、濃淡一定ナルハ是レ實體ナリ、其諸采ト相並ビテ其相映射スルガ爲メニ、或ハ濃チ成シ、或ハ淡チ成シ、亦或ハ固有ノ色チ變ズルカ如キハ、皆吾視神經ノ作用乃チ然ラシムルナリ、物體ニ於テ實ニ此ノ如クナルニ非ズ、今畫家其采色チ施スルハ、皆此諸采相映ズルノ理チ推シテ、之ニ由ラザル莫シ、若シ論者ノ言ノ如クナル片ハ、畫家ノ采色チ施スカ如キモ、必ズ唯實體チ以テ基ト爲サザル可ラズ、是ノ如クナル片ハ其色實ニ青ナルモ、觀ル者ノ眼ニ於テハ或ハ黃ナルチ覺エ、其色實ニ綠ナルモ觀ル者ノ眼ニ於テ或ハ紅ナルチ覺ユルコト有ラン、而シテ是ノ時ニ於テ畫家タル者、其人ニ向テ吾子ノ視神經乃チ然ラシム、吾カ用ヒシ所ノ色采ノ實體ハ決シテ然ラスト曰ハ、可

ナラン乎、且夫レ畫ハ果シテ何ノ爲メニ作ル乎、人チシテ觀テ之チ樂マシムルカ爲メニ非ス乎、若シ人チシテ觀テ之チ樂マシメント欲ヒハ、必ズ人ノ視神經ノ理ニ據リテ之チ爲サザル可ラズ、若シ畫人畫チ作シテ徒ニ物ノ實體チ問テ視神經チ問ハズ、若シ樂人樂チ作シテ徒ニ物ノ實音チ問テ、聽神經チ問ハザル片ハ、其畫タル獨リ盲人ニ示メシテ後可ナルニ至ラン、其樂タル獨リ聾者ニ示メシテ後可ナルニ至ラン、

今撮影ノ妙ナル者チ視ルニ、其顔面骨格肖似スルコトハ則チ肖似ス、但生氣運動有ルコト無シ、此レ他ニ非ス、其人必ス牀ニ據リ、若クハ竝立シテ動カズシテ、唯其影ノ善ク映ズルコトチ是レ求メテ、他念無キガ故ナリ、夫レ撮影ハ善ク肖似スト雖モ、生氣運動無シ、此レ其精妙ナリト雖モ、終ニ畫チ排シテ之ニ代ハルコトチ得サル所以ナリ、今ダウイット、アングルノ畫ニ於ケル、其線畫整齊ナリト雖モ、其運筆精緻ナリト雖モ、之

ヲ要スルニ其體容絶ニテ運動ノ觀ル可キ無シ、此レ他無シ、彼レ其圖  
ヲ擇フヲ攝影家ト同クシテ、專ラ凝固不動ノ形ヲ寫シテ、鼓舞飛躍ノ  
狀ヲ寫サズ、此レ其畫ノ攝影ニ類スル亦宜ナラス乎、

○第五章 光線ニ因リテ發スル變形○輪郭○布置○線畫ヨリ  
發スル遠近ノ勢並ニ渲染ヨリ發スル遠近ノ勢

夫レ人ノ胸中思惟スル所有ルニ因リ、及ヒ手ヲ舉ケ足ヲ動かスニ因リ  
テ、體容ノ上ニ於テ變易ヲ生スルコトハ、前ニ已ニ之ヲ論ゼリ、今又光線及  
ヒ遠近ノ勢ニ因リテ變易ヲ生スルノ理ヲ論シテ、以テ前論ヲ畢ヘント  
ス、抑々光線ノ力ニ因リ、若クハ遠近ノ勢ニ因リテ、同一物體ト雖モ數々  
變易ヲ生スルコトハ、人皆之ヲ知ル、然レ此レ皆吾人視神經ノ然ラシム  
ル所ニシテ、其物ニ於テ變易有ルニ非ズ、之ヲ例ヘハ路傍ノ樹木ノ如キ  
モ、其愈々遠キ者ハ愈々小ナルヲ覺ユ、然レ此レ其樹實ニ小ナルニ非ズ、遠

近ノ勢乃チ然ラシムルナリ、人體ノ如キモ亦然リ、遠ク之ヲ望ムトハ至  
小ナルヲ覺ユ、然レ此レ其人實ニ小ナルニ非ズ、凡ソ此ノ如キ者ハ皆光線  
ノ力ト遠近ノ勢トノ由テ然ラシムル所ナリ、今畫人一圖ヲ作スルハ、必  
ス此二ノ道理ニ本キテ之ヲ爲サ、ル莫シ、若シ其大小ハ特ニ吾人視神  
經ノ然ラシムル所ニシテ、實ニ大小有ルニ非ズト曰テ、其圖中ノ物ヲシ  
テ皆同一ノ大サヲ呈セシムルトハ、縱横紛錯シテ絶エテ序次無キヲ致  
サン、是故ニ苟モ畫家タル者ハ、其采色家タルト線畫家タルトヲ論セズ、  
皆此道理ニ據リテ遠近ノ勢ヲ爲サ、ル莫シ、然ルニ體容ヲ寫スニ至リ  
テハ、必ズ實體ヲ以テ基本ト爲シテ、絶エテ視神經ノ作用ヲ問ハサラン  
ト欲スルハ何ゾヤ、且ツ縱令ヒ彼レ必ズ實體ヲ以テ基本ト爲シテ、絶エ  
テ視神經ノ作用ヲ問ハザルモ、其作ス所ノ畫果シテ人目ヲ怡バシ人心  
ヲ樂マシムルニ足ルトハ、猶ホ之レ可ナリ、今然ラスシテ其人物皆泊然

トシテ動かズ、塊然トシテ枯木朽株ノ如シ、而シテ此ヲ以テ自ラ足レリトスルハ獨何ゾ歟、

夫ノ博士家ノ輩、頑然自家ノ陋見ヲ守リテ之ヲ失ハズ、官家ノ威權ニ藉リ、自ラ誇リテ國中藝術ノ綱領ナリト稱シ、人家ノ子弟ヲシテ必ズ其陋見ニ循テ作ル所有ラシメント欲ス、此レ實ニ悼ム可キノ至ナリ、故ニ凡ソ以テ此陋見ヲ破ル可キ者ハ、余皆之ヲ主張シテ略ホ煩ヲ厭ハサルハ此レカ爲メナリ、

更ニ又輪郭ニ係リテ言フ可キ一事有り、抑々輪郭トハ畫家ノ圖ヲ作スニ於テ數箇ノ線條ヲ施シ、以テ諸種ノ采色ノ周邊ヲ限畫スルヲ謂フ、然レヒ實體ニ於テ實ニ此ノ如キ輪郭有ルニ非ズ、故ニ凡ソ色采ヲ主トスル畫家ハ、諸種ノ色ヲ施シテ其經界相接シテ自然ニ限畫ヲ爲スヲ以テ、必スシモ別ニ黑線ヲ引テ之レカ輪郭ヲ作ラズ、今博士家ノ所謂畫家ハ

然ラズ、皆先ツ墨ヲ用ヒテ縱橫輪郭ヲ施シ、然ル後諸采ヲ用ヒテ之ヲ粧飾ス、是ヲ以テ諸采ノ緣邊皆線畫截然タラザル莫シ、嗚呼實體ノ輪郭此ノ如ク截然タルコト有ラン哉、且黑線ヲ用ヒテ輪郭ヲ作スノ弊、更ニ又一有り、何ノ謂ソヤ、夫レ物ノ遠近高下深淺ノ勢ハ皆自然ノ形ヲ見ハス者ニシテ、決シテ截然切斷シタルカ如キ者ニ非ズ、然ルチ夫ノ線畫ヲ主トスル畫家ハ、專ラ墨ヲ用ヒテ輪郭ヲ作ルヲ以テ、其畫ノ遠近高下深淺ノ勢絶エテ實體ニ肖似セズ、此レモ亦其疵病ナリ、蓋シ墨ヲ用ヒテ輪郭ヲ作ス者ハ、之ヲ號ツテ線畫ヨリ生スル遠近ノ勢ト謂ヒ、采色ヲ用ヒテ自然ニ輪郭ヲ生スル者ハ、之ヲ渲染ヨリ發スル遠近ノ勢ト謂フ、此二ノ者ノ優劣實ニ勝テ量ル可ラサル者有り、

此ニ由リテ之ヲ觀レハ、夫ノ博士家ノ紀律ヲ守ル畫家、專ラ線畫ヲ用ヒテ輪郭ヲ作ルコトハ、其弊蓋シ二有り、一ハ以テ實體ノ道理ニ背クコト是レ

ナリ、一ハ以テ遠近ノ勢ヲ破ルコト是レナリ、且ツ墨ヲ以テ輪郭ヲシテ截然タラシムルコトハ、更ニ又議ス可キコト有リ、何ゾヤ、蓋シ人皆兩目ヲ有スルヲ以テ、其物ヲ觀ルヤ、一眼ハ一方ヨリ之ヲ見テ、他ノ一眼ハ又他ノ一方ヨリ之ヲ見ル、決シテ一直線ニ依リテ之ヲ見ルニ非ズ、夫レ其物ヲ觀ルヤ、既ニ兩方ヨリ之ヲ見ルキハ、其物ノ輪郭必ス隱然トシテ僅ニ限ル所有ルカ若クニシテ、絶エテ截然トシテ切斷シタルカ如クナラザルハ自然ノ理ナリ、然ルヲ必ズ墨ヲ用ヒテ線畫ヲ作シ、以テ物ノ輪郭ヲ作スハ、豈ニ理ニ悖ルノ甚キニ非ス乎、

且ツ夫レ墨ヲ用ヒテ輪郭ヲシテ截然タラシムルキハ、其弊ヤ觀ル者ヲシテ其物ノ平扁ニシテ厚カラザルガ如クナラシム、是ヲ以テ圓ナル者ヲ寫スモ、團圓ノ觀ヲ發セズ、若シ之ニ反シテ采色ヲ用ヒテ渲染スルキハ、其輪郭隱然トシテ定處無キガ如クニシテ、厚薄淺深ノ勢並ニ眞ニ逼

ルヲ致ス、之レ正サニ采家ノ線畫家ニ勝ル所以ナリ、

テオフィールシルウエストル此事ニ係リテ論著スル有リ、其言ニ曰ク、アングル及ビ其流派ノ畫家ハ、皆墨線ヲ用ヒテ形體ヲ描キ以テ諸色ノ輪郭ト爲ス、若シ夫レミヨリコロレーシノ如キハ、采色隱躍ノ間ニ於テ自然ニ輪郭ヲ發出シテ、其畫適カニアングル諸氏ノ作ニ勝ル、又ポールウエロチーズリユベンランブランドノ如キハ、采色ヲ用フルコト更ニ奇ニシテ、淺深凸凹ノ勢一目ニ瞭然タリ、其圖ノ活潑靈動ノ勢有ルニ至リテハ、諸家一モ與ニ比スル者莫シ、

夫レ人皆兩目有リ、故ニ其物ヲ觀ルヤ二方ヨリ之ヲ見ル、是ニ於テ一眼ヲ以テ望ミテ輪郭ト爲ス所ノ線ト、他ノ一眼ヲ以テ望ミテ輪廓ト爲ス所ノ線ト、自ラ別ナリ、夫レ兩眼各々別ニ輪郭トスル所有リ、是ヲ以テ其線界隱然トシテ有ルカ如ク無キカ如シ、此レ正ニ高低各々其狀ヲ成ス

所以ナリ、顧フニ此事ヤ、吾人物ヲ觀ルノ上ニ於テ極テ肝要ノ一件ニシテ、乃チ兩眼鏡ノ設ケハ正ニ此道理ニ由リテ起レリ、且撮影ノ如キハ尤モ善ク眞ヲ寫ス者ナリ、然レモ唯一個ヲ置テ之ヲ觀ルルハ、高下深淺ノ勢分明ナラサルコト、一ニアングル諸氏ノ畫ト異ナラズ、若シ同一ノ撮影兩個ヲ置キ、兩眼ヲ用ヒテ之ヲ觀テ、各々一眼ヲシテ一個ヲ見テ他個ヲ見ザラシムルハ、夫ノ高下深淺ノ勢俄然トシテ躍出ス、此レ他無シ、一眼ハ一個ヲ見テ其輪郭ヲ定メ他ノ一眼ハ他ノ一個ヲ見テ其輪郭ヲ定メ、兩線相合シテ隱然トシテ縁邊ヲ成スヲ以テ復タ單ニ一個ヲ觀ル時ノ輪郭截然タルガ如クナラザルヲ以テナリ、

線畫ノ道理ハ余既ニ頗ル之ヲ論セリ、若シ更ニ其詳ヲ言ハント欲スルハ、恐クハ或ハ遠ク本書ノ目的ト爲ス所ノ外ニ出ルニ至ラン、故ニ是レヨリ更ニアラベスシ及ヒ「ベルスベクナーヴ」ノ理ヲ論シテ、以テ本章

ノ義ヲ畢ヘントス、

「アラベスシ」トハ畫家ノ通語ニシテ、全畫ノ結構ヲ成ス所ノ諸線ヲ合スルノ稱ナリ、夫レ「アラベスシ」既ニ全圖ノ結構ニ關スルハ、其圖ヲ觀ル者ノ情念ハ正ニ此結構如何ニ在ルコト、固ヨリ論ヲ待タズ、故ニ同一ノ題目ト雖モ、其全體ノ諸線ノ結構ニ由リテ、或ハ甲ノ狀ヲ發シ、或ハ乙ノ態ヲ發スルハ、此レカ爲メナリ、全圖ノ結構ニ注意スルコトノ最モ周密ナルハ、意答利諸畫家ニ踰ユル莫シ、而シテ意答利ノ諸家ニ在リテモ、ラフエ最モ意ヲ此ニ用ヒタリキ、此レ賞鑒家ノ遍ク知ル所ナリ、故ニ茲ニ復ク贅セズ、

「ベルスベクナーヴ」トハ全圖中遠近ノ勢ヲ謂フ、「ベルスベクナーヴ」ニ二種有リ、一チ線狀ノ「ベルスベクナーヴ」ト曰ヒ、一チ空氣ノ「ベルスベクナーヴ」ト曰フ、

線狀ノ「ペルスベクチーヴ」ハ、吾人視神經ノ構造ヨリ生ズル者ニシテ、乃チ一物ヲ觀ルニ、愈々近接スルキハ其物ノ愈々大ナルヲ致ス、是レナリ、

此種ノ「ペルスベクチーヴ」ハ、其道理多ク幾何學ノ理ニ關涉ス、故ニ茲ニハ其幾何學ニ關涉スル者ヲ除テ特ニ畫道ニ關涉スル者ヲ取リテ之ヲ論セントス、

凡ソ畫家ノ圖ヲ作スヤ、其物形ノ大小ニ係リ、若シ一々幾何角度ノ理ニ從ヒ、之ヲ爲シテ少シモ美觀ニ害セザル以上ハ、務テ之ニ從フヲ要スルハ固ヨリナリ、若シ其大小ノ差一々幾何ノ理ニ從フニ於テ、或ハ美觀ヲ害スルノ恐れ有ルキハ、寧ロ幾何ノ理ニ違フモ、美學ノ理ニ違フヲ勿レ、他無シ、繪畫ノ物タル、美學科中ノ物ニシテ、初ヨリ幾何ト交渉無キヲ以テナリ、若シ之ヲ證セント欲セバ「ラファエル、ポールウエロチーヴ、ルプー

サン及ビ其他ノ諸大家ノ畫ヲ觀ルニ若クハ莫シ、其圖中幾何ノ角度ヨリシテ言フキハ、或ハ甲ノ物太大ニシテ、乙ノ物太小ナル等ノ病往々之レ有リ、然レモ賞鑒家曾テ此ヲ以テ病ト爲サズ、他無シ、若シ然ラサルキハ圖畫ノ觀美大ニ害ヲ受クル有ルヲ以テナリ、

「ラファエル」ノ描キタル「エターヌ」ノ學校ノ圖ヲ看ヨ、其觀客ノ眼ヲ着ク可キ中點二有リ、一ハ低クシテ一ハ高シ、低キ者ハ其屋ノ制ヲ觀ルカ爲メナリ、高キ者ハ其人物ヲ觀ルカ爲メナリ、假令ヒ其人物ヲ觀ルノ點ト其屋制ヲ觀ルノ點ト同一ナラシメハ、人物ノ形狀必ス甚不愉快ナルヲ致サン、何トナレハ其圖中ノ最モ後ニ居ル人物ハ、前ニ居ル人物ニ比スルキハ、適ニ低カラザルヲ得ザレバナリ、假令ヒ此ノ如クナルキハ、其「プロト」及ヒ「アリストット」ヲ環リテ立ツ所ノ人物ノ形狀、果シテ何如ノ觀チ爲ス乎、

此圖ニ在リテハ屋制ヲ觀ル可キ中點ハ、正ニプラトンノ左手、即チ其書冊ヲ執ル手ノ處ニ在リ、是ニ於テ若シ諸人物ノ軀幹ヲ以テ、略ホ同シ大サト爲シ列ノ最モ前ニ居ル人物即チアリストットノ頭ノ處ヨリ一線ヲ引キ、更ニプラトンノ右ニ至ルキハ、此中ノ最モ後ニ居ル人物ハ、其小ナルコト當ニ何如ゾ乎、ラファエル慧眼早ク是ニ察ル有リ、是ニ於テ其諸人物ヲ以テ皆屋ノ深奥ノ處ニ在ラシメ、此ヲ以テ其學校ノ庭城ヲ爲ス諸線ヲ蔽フ可ラシメタリ、

假令ヒ此圖ニ在リテ、屋制ノ中點ト人物ノ中點ト位ヲ同セシムルハ、夫ノ承塵ノ形狀ノ極テ偉麗ナル者ハ初ヨリ施スニ由無シ、此ノ如クナルキハ、其屋制ノ觀甚タ壯大ナラザルヲ以テ、其圖ノ美復タ是ノ如クノ奇傑ナルコトヲ得ズ、ラファエル是ニ慮ル有リ、故ニ屋制ノ中點ト人物ノ中點ト全ク處ヲ異ニセシメテ、以テ各々其美麗ノ觀ヲ發スルコトヲ得セシメリ、

然レモ若シ幾何ノ數ヲ以テ之ヲ推スルハ、究竟理ニ悖ルト爲サルヲ得ズ、幾何ノ理ニ悖ルト雖モ、其美學上ノ觀ニ於テハ、其人心ヲ怡バシムルコト是ノ如シ、此レ正ニ良工苦心ノ處ナリ、

ボールウエロテーズノ「ノースドカナ」ノ畫モ亦其結構ノ術此レト相類ス、是ニ知ル此レ等應變ノ手段ハ、諸大家ノ自ラ許シテ之ヲ行フ所ナルコトヲ、但一事ノ注意ス可キ有リ、凡ソ此等狡猾ノ手段ハ、衆人物相聚リテ各々別ニ境界ヲ爲ス者ニ在リテハ可ナリ、若シ衆人物相聚リテ一境界ヲ爲ス者、即チ歴史ノ故事ノ如キニ在リテハ、終ニ病ト爲スヲ免レズ、此レ又知ラザル可ラス、

空氣ノ「ベルスベクチーゾ」トハ、天地自然ノ理ニ由リテ發スル者ナリ、蓋シ天地間空氣到ラサル處無キヲ以テ、凡ソ物皆其罨フ所ト爲ラサル莫シ、是ヲ以テ愈々遠ニ在リテ望ムルハ、其間空氣愈々稠厚ナルヲ致ス、即



予物ヲ觀ルニ距離百メートルナルキハ、十メートルノ時ニ比シテ、獨リ其形ノ小ナルノミナラズ、亦其狀貌ノ曖昧ナルハ此レガ爲メナリ、是故ニ若シ畫家一圖ヲ描テ、其形勢稍濶大ナランニ、其最モ後ニ在ルモノヲシテ、其最モ前ニ在ルモノト同ク判然タラシムルキハ、所謂空氣ノ「ベルスベクナード」ニ係ル道理ニ違フコト免レズ、若又其大小相同シキキハ、所謂線畫ノ「ベルスベクナード」ニ違フコト免レズ、

若夫レ縮圖ハ則チ未ダ此理ヲ以テ律ス可ラズ、他無シ、縮圖ナル者ハ遠近ノ勢ヲ示スカ爲メナラズシテ、專ラ其圖ヲ縮小スルニ在ルヲ以テ、一切「ベルスベクナード」ノ理トバ、初ヨリ交渉無キヲ以テナリ、

縮圖ノ物タル其臨本トスル所ノ圖中有ル所ノ者ハ皆盡ク之ヲ寫シテ遺スコト無シ、此レ即チ縮圖ノ名ノ自リテ來ル所ナリ、

○第六章 手術 ○デラクロア、テオドール、ルーツー及ビリュベ

ソノ諸氏ニ係ル例則、

凡ソ畫家ノ理論ニ涉ル者ハ、余既ニ前ニ之ヲ論シテ頗ル其詳ヲ極メリ、今ハ將ニ其手術ニ係ル者ヲ擧ケテ之ヲ論セントス、本章ノ旨趣トスル所正ニ是レナリ、顧フニ人或ハ云ハントス、此書ノ旨趣トスル所本ト美學ニ在リ、美學ハ理論ヲ以テ目的ト爲ス、而シテ手術ニ係ル者ヲ以テ其中ニ入ル、此レ甚タ體裁ヲ失スル者ナリト、此論ヤ人必ス將ニ之ヲ擧ゲテ以テ余ヲ駁撃セントス、是レ固ヨリ余ガ心ニ豫期スル所ナリ、何トナレハ「プラトン」ナリ、カントナリ、シエリングナリ、エシュールナリ、シューフロアーナリ、ウイクトルクーザンナリ、古今美學ヲ論ズル學士、皆唯其高遠ノ道理ヲ叙列シテ、絶エテ實地手術ノ上ニ波及セズ、故ニ人余ノ手術ヲ論ズルヲ見バ、其爭フテ論駁スルヤ必然ナリ、

夫レ理論ヲ專ラトスル者ハ、苟モ人ノ手術ヲ論ズルヲ見ルキハ、必ス鄙

陋トシテ之ヲ細ク、此レ猶ホ夫ノ純美ノ觀ヲ愛スル者ノ、專ラ澹泊寂靜ノ狀ヲ喜ビテ一切悲喜忿怒ノ貌ハ、皆之ヲ斥クルカ如キナリ、然リト雖モ夫ノ理學ノ主張スル所ノ諸高遠ノ道理ハ、大率玄妙ニ過キテ實無ク、徒ニ幽晦解シ難キノ字面ヨリ之ヲ重疊シテ、以テ憑空ノ一論ヲ架設シ、自ラ以テ高ト爲ス、遽ニ之ヲ見ルキハ、貴ブ可キカ如シト雖モ、苟モ詰リテ實地ニ至ルキハ、茫平トシテ知ルコト無シ、宜ナリ本章ノ論ノ如キハ、其痛ク斥ケテ少シモ顧ミサルコトヤ、然レモ余ハ獨以爲テ、ク美學ナル者ハ文藝ノ美ヲ爲ス所以ノ者ヲ論ズルニ在ルヲ以テ、苟モ是ニ交渉有ル者ハ之ヲ手術ナリト曰テ斥クルコト得ズ、當ニ之ヲ斥クルコト得ザルノミナラズ、亦當ニ務テ之ヲ講シテ以テ益々理論ノ謬ラザルコト示ス可キナリト、

且ツ余ガ此書ヲ著ハスヤ、二三同志ノ士ト相謀リ、理學政學美學等、一切

方今文物ノ運ヲ進ムルニ益有ル者ヲ取リ、部ヲ分チテ俱ニ之ヲ論著シ、以テ世ノ頑陋ニシテ舊見ヲ泥守スル者ト抗敵シ以テ其蒙蔽ヲ破ラント欲ス、而シテ余美學ノ購求ヲ分任セリ、今ヤ夫ノ博士家ノ輩、方サニ專ラ幽晦ノ論ヲ主張シテ絶ニテ意ヲ手術ニ留メズ、故ニ余ハ故サラニ其好尚ニ反シ、并セテ手術ヲ論ジテ以テ之ヲ論駁セント欲ス、况ンヤ手術ノ事タル極メテ重大ニシテ、乃チ文藝ノ文藝タル所以ハ、正ニ手術ノ巧拙ニ在レバ、苟モ文藝ヲ論ズル者、豈ニ手術ヲ陋トシテ之ヲ細クルコトヲ得ン哉、

然リト雖モ、手術モ亦容易ニ論ズ可キニ非ス、必スヤ躬ラ其業ニ服シ、鍊習ノ久クシテ深ク心ニ獲ル有ル者ニ非ザレバ、未ダ漫然トシテ言説スルコト容サズ、而シテ余ヤ淺學未タ之ヲ能ク得ル有ラズ、故ニ本章ノ事ニ係リテハ、廣ク藝術ノ士ノ信ヲ取ルニ足ル者ヲ延訪シテ、其說ヲ採摭

記著ノ語  
能クニ見ル

シ、斟酌折衷必ズ正ヲ得テ後已マント欲ス、庶幾ハクハ専門ノ士、之ヲ讀  
 デ萬一ニ裨補スル有ランコトヲ、  
 方今藝術ノ士多シト雖モ、余ハ先ツユーシエンヌデラクロアールヲ引テ  
 其手段ヲ講求シントス、蓋シテオフィールシルウエストルハ素ヨリデラク  
 ロアールト親善ニシテ、又屢々親ク其筆ヲ執リテ畫ヲ做スコトヲ觀テ、大ニ  
 其手術ニ悟ル有リ、故ニ茲ニ其言ヲ引ク、  
 デラクロアールノ畫ハ、其始メ様式ヲ爲スヤ、極テ自在ニシテ絶エテ窘束  
 ノ態ナシ、蓋シデラクロアールハ天姿聰敏ニシテ、物ヲ觀テ心ニ得ルコト極  
 テ迅速ナリ、是ヲ以テ其様式ヲ製スルヤ、各部ニ就テ一々ニ之ヲ成サズ  
 シテ、一頓ニ全體ヲ揮洒シテ以テ常ト爲ス、故ニ其鉛筆ノ趨ク所早ク已  
 ニ一種ノ風趣ヲ生シ、一個ノ意思ヲ發シテ、人ヲシテ一目瞭然クラシム、  
 自餘ノ畫學ノ片々之ヲ成シ、段々之ヲ就シ、功ヲ竣ハルヲ俟テ、始テ圖ヲ

成スガ如クナラズ、

シルウエストル又曰ク、デラクロアールノ手段ハ、蓋シ畫家ノ正法ト謂フ可  
 シ、請フ一譬ヲ設ケテ之ヲ明ニシ、今此ニ一塑像有リ、水中ニ横ハリテ  
 僅ニ其半身ヲ露ハサシ、凡ソ其水中ニ在ル部分ハ、目之ヲ見ルコトヲ得  
 ズ、故ニ其線畫ノ見ル可キ者ハ獨リ水上ニ在ル部分ノミ、然レモ此水上  
 ニ在ル部分ノ一線一畫ハ、別ニ體ヲ爲スニ非ズシテ、必ズ其水中ニ在ル  
 部分ト一體ヲ成ス者タルヤ言ヲ待タズ、畫家ノ鉛筆ヲ執リテ其圖ノ様  
 式ヲ製スルモ亦此ノ如キナリ、其既ニ筆ヲ下シシ部分ハ、目之ヲ見ルコ  
 トヲ得、此レ猶ホ塑像ノ水上ニ出ル部分ノ如キナリ、其未ダ筆ヲ下サザル  
 部分ハ目未ダ之ヲ見ルコトヲ得ズ、猶ホ塑像ノ水中ニ在ル部分ノ如キナ  
 リ、既ニ筆ヲ下シタル處ノ一線一畫ハ、四散八落附屬スル所無キガ如シ  
 ト雖モ、實ハ其未ダ筆ヲ下ザズシテ、漸次ニ筆ヲ下サントスル所ノ處ト

緊ク相紐結セザル可ラズ、然ラザレハ頭ハ自ラ頭ニ、腹ハ自ラ腹ニ、足ハ自ラ足ニシテ、初ヨリ相屬スルコト無キヲ致サン、デラクロアーノ様式ヲ製スルヤ、深ク是ニ見ル有リ、故ニ其鉛筆ヲ走ラヌルヤ、先ツ草々全體ヲ結構シテ、其大小高下淺深ノ勢早ク已ニ布上ニ森然タリ、此レ豈ニ正法ト謂ハザル可ケン哉、グロースノ筆ヲ運スルモ亦此レト相類セリ、グロース後ニ媚ヲ博士家ニ納レ、務テダウイトノ法ニ從テ復タ自家ノ法ヲ守ラズシテ、大ニ世譽ヲ損セシガ、其未ダ然ラザルヤ、荷玉圖ヲ製スル有ル、必ス先ツ大體ヲ成就シテ然ル後細微ニ赴ケリ、シヨリエールノ彫刻ニ於ケル隱起ノ勢極テ雄雋ナルモ、亦此法ニ由リテ之ヲ得タリ、又曰ク彫刻家若シ標板ヲ刻スルカ、若クハ顔面ヲ鑄スルニ當リテ、先ツ線畫ノ處ヲ記シテ標ト爲シ、然後土ヲ搏テ其周傍ヲ填ムルカ如キ有ラハ、其刀ヲ運スル必ズ限畫セラル、所有リテ、其起伏高下ノ勢必ズ索然生氣無キ

ヲ致サン、畫家ノ様式ヲ做スモ亦猶ホ此ノ如キナリ、先一々ニ線畫ヲ成就スルキハ、尋デ采色ヲ施スヤ、必ズ檢束ヲ受シル有リテ、十分ニ筆ヲ馳スルコトヲ得ズ、且ツ夫レ線畫ハ僅ニ諸色ノ周邊ト云フニ過ギズシテ、實物現ニ此レ有ルニ非ズ、故ニ畫家ノ線畫ヲ施スヤ、特ニ此ヲ以テ其圖ノ大勢ヲ示スニ過ギズシテ足ル、

又曰クデラクロアーノ様式ヲ製スルヤ、其法創意ニ出ルニ非ズ、蓋シチシヤン、エール、ウエロチーズ、リュベソノ諸大家ニ做フテ之ヲ做セリ、其采ヲ用フルヤ、先ツ淡墨ヲ用フ、是ヲ以テ其様式ハ常ニ黯然トシテ一圖ヲ成シ、然後諸采ヲ用ヒテ漸次ニ成就ニ赴キ、最初ヨリ最終ニ至ルマテ、每次常ニ全體ノ意思躍然トシテ掬ス可シ、他ノ畫家ハ然ラズ、先ツ頭ヲ畫テ之ヲ成就シ、次ニ腕、次ニ手、是ノ如クニシテ片々段々一個ノ形態ヲ畫成シテ以テ常ト爲ス、是ニ於テ好事家ノ臨觀スル者、一片段ノ畢ハルヲ

見ル毎ニ輒チ喜ビテ云フ、又一片ノ好哉チ得タリト、蓋シ肴膳チ薦ムル者一膳成ルキハ輒チ之ヲ碟ニ盛り、出シテ以テ客ニ進ム、今世ノ畫家ノ爲ス所、此レト類スル者有リ、故ニ此ヲ以テ之ヲ譬フ、デラクロアールハ獨リ然ラズ、蓋シ其最モ意ヲ注スルハ、個々畫成シテ觀ル者ノ意ヲ喜ハシムルニ在ラズシテ、專ラ其全圖ノ中自ラ生氣活潑意趣靈動シテ、賞鑒家チシテ一見シテ感嘆セシムルニ在リ、故ニデラクロアールノ畫ニ就テ試ニ其諸人物チ視ヨ、各々皆情性ノ躍然トシテ顔面ノ外ニ湧出スル有リ、其尤モ甚キ者ハ、或ハ病狂人ノ顔色ノ如キ者有ルニ至ル、然レモ之ヲ全圖ニ合シテ觀ルキハ、尤モ其宜キチ得ルチ見ル、且ツ其意氣外ニ發露スルヲ太甚クシテ、奇怪ニ涉ルニ至ルカ如キハ、實物上ニ就テ言フキハ、或ハ必ズシモ合セザル有リ、然レモ吾人ノ想像ヨリシテ言フキハ、未タ必ズシモ然ラズンバアラズ、之ヲ例ヘハ一人ノ怒ル有リ、其尤モ忿怒スル

ノ時ト雖モ、其顔色ハ必ズシモ大ニ變スル有ラズ、然レモ我レ外ニ在リテ其言チ傳聞スルキハ、必ズ其人ノ顔色チ想像シテ、目眦裂ケ吻沫スルノ狀チ想ハザル、莫シ、デラクロアール是ニ見ル有リ、故ニ其言ニ曰ク畫家ノ主トスル所ハ、觀ル者ノ精神チ攪動シテ、其中ニ於テ一種ノ感情チ發セシムルニ在リ、畢竟變幻ノ術チ用ヒテ暫ク人チシテ蒙迷セシムルニ外ナラズト、

夫レ是ノ如シ、故ニデラクロアールノ畫チ倣スヤ、其勇將猛士チ描クキハ、眦上リ鬚張リ、顔面火ノ如クニシテ、筋肉ノ起狀復ク平常人ノ如クナラズ、其乘馬ノ如キモ騰躑飛舞慨然敵ニ赴クノ概有リ、或ハ滿身鮮血チ灑キ、氣息奄々トシテ將ニ觀ル者ノ足下ニ僵仆セントスル者ノ如シ、凡ソ其人物ノ怒レル者ハ、其眼球皆跳リテ眼窠ノ外ニ出ツ、又其戰敗レタル者、若クハ事チ敗リシ者ハ、落膽ノ狀鼻目ノ表ニ溢レ、一身チ擧ケテ之チ

大地ニ投棄セント欲スルカ若ク、又凡ソ人ヲ懲慰シテ謀叛シシメ、若クハ獄吏ニ命シテ人ヲ刑シシメ、若クハ天地ニ誓フテ自ラ報復ヲ圖ル者等ハ、其舉クル所ノ手拳大率肥大ニシテ、尋常體軀ト勻稱セザルニ至ル、此レ他無シ、其主トスル所ハ外貌ニ在ラズシテ意趣ニ在リ、其運筆ノ間或ハ抑揚太過ナル亦宜ナラズ乎、且ツ夫レ情念ノ太過ナルヨリシテ、骨相ノ攪亂セラル、コトハ實地上或ハ現ニ之レ有リ、例ヘハ重載シタル車ヲ牽テ衆人雜沓ノ地ヲ過ギ、嚴ニ慎ミテ加ヘスシテ、一婦人若クハ一嬰兒ヲ輓殺スル等ノ事有ラソニ、吾人ノ見ルトキハ身體之レカ爲メニ瑟縮シ、初メハ驚駭シ、次ニ哀悼シ、又次ニ憤怒シテ車夫ノ慎マザルヲ咎ム、是ニ於テ口吻俄ニ顛動シ、兩手俄ニ交叉シ、頭ハ則チ前ヲ望ミテ將ニ直チニ體ヲ離レテ其處ニ突入セントスル者ノ如シ、是時ニ於テ虛心平氣ヲ以テ之ヲ視バ、其人ノ顔面筋肉ノ形狀必ズ大ニ平日ト異ニシテ、

大ニ整齊ヲ損スル有ラソ、若シ畫人はノ如キ狀況及び其他此レト類スル者ヲ描テ、其人物ノ顔面骨相皆端莊肅靜ナルハ、豈復タ觀ル者ノ情ヲ動カスコトヲ得ン哉、此ニ由リテ之ヲ言ヘハデラクロアノ歴史ノ故事ヲ描テ其人物ノ骨相怪奇異常ナルコト有ルハ未ダ遽ニ之ヲ咎ム可ラザルナリ、

シトロンヌ氏ハデラクロアニ從テ業ヲ問ヒ、卒ニ一大家ヲ成スコトヲ得タリ其言ニ曰ク、余ノデラクロアノ先生ニ從テ學ブヤ、首ニ山水ノ景ヲ描テ之ヲ先生ニ呈ス、先生覽閱スルコト少許、意甚ダ可トシズ、徐ニ余ニ諭シテ曰ク、卿當サニ知ルベシ、凡ソ畫家ノ墨ヲ以テ線條輪郭ヲ做ス所以ノ者ハ、專ラ其整齊ニシテ端嚴ノ觀有ルヲ取ルニ非ズ、亦必ズ幾分變化生動ノ態有ルコトヲ要ス、且ツ山野天然ノ景ヲ描クガ如キハ、樹木復タ苑圃ノ果樹ノ枝ヲ矯メ幹ヲ曲ケ、縱橫束縛シテ團扇ノ狀ヲ爲スカ如ク

ナルヲ得ズ、必ズ皆意ニ任セテ滋長スルノ態有ル可シ、其他土地ナリ、河水ナリ、橋梁ナリ、皆幾分長廣厚チ有セザル可ラズ、今卿ノ畫チ觀ルニ、山容水態並ニ樹木巖石ニ至ルマデ、皆一扁板ノ如シ、夫レ畫家布上ニ於テ一物ヲ描クハ、必ズ其隱然突起スルカ如クナルヲ要ス、卿當サニ知ルマシ、凡ソ畫家幀中ノ物ハ、其布素ヲ除ク外、皆必ズ三面若クハ四面有ルヲ要ス、卿今始テ余ニ從テ學フ、此ヨリ痛ク自ラ戒メテ是扁平板直ノ物ヲ做サ、ル可シト、

シトロンヌ氏又云フ、異日吾師又余ニ語ケテ曰ク、吾子山水ヲ描カハ樹根ハ必ズ深ク土中ニ突入スルヲ要ス、枝ノ前ニ向フ者ハ必ズ布外ニ出ルノ勢有リ、其後ニ向フ者ハ必ズ布中ニ入ルノ勢有ルヲ要ス、是ノ如クナルハ、觀ル者將サニ曰ハントス、此畫幀ヤ初ニ前ニ居テ之ヲ望ムハ、殆ント人ヲシテ後ニ出テ、其後面ヲ觀ント欲セシムト、又布置

形勢ハ吾子尤モ當サニ意ヲ注メテ之ヲ調整ス可シ、布置一タヒ成ルハ、毫チ一下スル毎ニ皆必ズ之レト相副フヲ要スト、其後余ノ畫ヲ做シテ先生ニ呈スル毎ニ、先生絶エテ他言無シ、必ズ常ニ前言ヲ反覆スルノミ、又嘗テ余ニ謂テ曰ク、吾レノ畫ヲ做ス、采色ノ調和ヲ以テ勝ツ者ナリ、故ニ卿ノ初テ余ニ就テ業ヲ問フモ、亦定メテ采色ノ外復タ線畫ノ事ニ及バズト思量セシナラシ、夫レ采色ハ洵ニ肝要ナリ、然レモ線畫モ亦之ヲ忽ニスルヲ得ズ、卿其レ之ヲ思ヘト、

シトロンヌ氏又云フ、余一日様式ヲ描キ、先生ニ呈シテ評ヲ乞フ、先生曰ク草々様式ヲ描クハ必ズシモ學者ニ益セズ、何トナレハ毫迹ノ縱横自在ナルヲハ、苟モ年ヲ積ミテ習熟スルハ自然ニ得ル有ルヲ以テナリト、余因リテ曰ク然ラハ則チ弟子請フ此様式ニ就テ業ヲ卒リ、然ル後復タ呈スルヲ得ント、先生遽ニ曰ク、業ヲ卒ハルトハ吾子果シテ其何物

タルヲ知ル乎、畫人一圖ヲ做ス、先ツ草々様式ヲ製シ、次ニ其様式ニ就テ漸次ニ毫ヲ加ヘ采ヲ施シ以テ成就スルニ至ル、此レ固ヨリ所謂業ヲ卒ハルナリ、然リ而シテ畫ノ眞ノ佳不佳ハ正ニ是ニ在リ、古今高手ノ畫ヲ做スヤ、圖中細瑣ノ處ハ必ズシモ意ヲ經ズ、必ズ其中主眼トスル部分有リ、是處ニ於テ切ニ意趣ヲ洗發セザル可ラズ、且ツ幀ノ大ハ限有リト雖モ畫人胸中ノ意思ハ限有ルヲ無シ、故ニ其運筆設色布置宜ヲ得ルキハ、小々布幀ノ外廣大ノ境界ヲ舉ゲテ皆之ヲ觀ル者ノ眼ニ呈スルヲ得、即チ山水ヲ畫クガ如キモ、尺幅ニシテ千里ノ勢有ルハ此レガ爲メナリ、吾子若シ此ノ如クナルヲ欲スルキハ、何ノ題目ヲ論セズ、一圖中必ズ主眼トスル處有ル可シ、主眼一タビ立ツキハ、其他細瑣ノ部分ハ畢竟充補ト云フニ過ギズ、必ズシモ多ク精神ヲ費ヤサズシテ可ナリ、唯肝要トス可キハ其主眼トスル所ノ處ナリ、故ニ此處ハ様式ノ初ヨリ成就ノ時

ニ至ルマデ時々自ラ展覽シテ或ハ筆ヲ加ヘ、或ハ采ヲ施シ、必ズ遺憾無キニ至リテ後已ム、此レ所謂一圖ノ卒業ナリト、

先生既ニ此言ヲ爲シ、因リテ傍ニ在リシ所ノ古人ノ畫ヲ取リテ余ニ示シ、最後ニランブランドノ畫ヲ出シテ復タ余ニ謂テ曰ク、吾ガ言フ所ノ道理ハランブランド尤モ善シ之ヲ解セリ、卿必ズ此ヲ以テ正鵠ト爲ス可シト、又曰ク、若シ卿一圖ヲ做スヤ、片々段々一々精神ヲ加ヘ、粉飾シテ遺ス所無キキハ、觀ル者一見シテ絶エテ感慨ヲ生スル有ラズ、何トナレハ卿既ニ一々精神ヲ加ヘテ之ヲ做スキハ、觀ル者モ亦一々精神ヲ加ヘテ之ヲ視ル、夫レ一々精神ヲ加フルキハ、初ヨリ精神ヲ加ヘザルト異ナルヲ無シ、何トナレハ或ハ精神ヲ用フル處有リ、或ハ草々掃去スル所有リ、二ノ者相映シテ大ニ深味ヲ發シ、其精神ヲ用フル處ハ益々精采ヲ見ハシテ、其草々ナル處ハ益々筆力ヲ見ハス、此レ正ニ妙手ナリ、若シ然ラズ



シテ細瑣ノ處ニ至ルマテ皆精神ヲ用フルトハ、全段皆金碧ノ模糊タル者ノミ、何ノ人ヲ感ズルコトカ之レ有ラン、

又曰ク布幘限リ有リテ作者ノ意思限リ有ルコト無シ、故ニ卿若シ全幅細瑣ノ處モ皆精神ヲ用フルトハ、是レ畫幅ハ業ヲ卒ハルト雖モ、卿ノ意思ハ初ヨリ業ヲ卒ハルコト得ズ、故ニ是ノ如キ畫ハ之ヲ文章ノ浮靡冗漫ニシテ収結無キ者ニ譬フ、故ニ卿當サニ知ルベシ、畫家ノ所謂卒業ハ布面ノ上ニ在ラズシテ意思ノ上ニ在ルコトナ、

先生屢々ランブランド、クロードローレン及ビ、オッペマーノ畫ヲ出シテ余ニ示セリ、余一日先生ニ問テ曰ク、弟子イスロン及ビマリンヌノ畫ヲ瞻寫セント欲ス、先生以テ何如ト爲スト、先生曰ク已メヨ、如カズモンマルトル若クハバルビゾンニ赴キテ他家ノ畫ヲ觀ンニハト、又曰ク、卿其レ數々ルーヴル宮ニ往テ諸大家ノ畫ヲ觀ヨ、其手段迥カニ尋常ノ手

ト別ナル有リト、

以上云フ所ハ皆テオドールルーソーノ傳フル所ナリ、而シテフィリップピニルチー曰ク、ルーソーノ此言太冗漫ナルニ似タリ、然レモ畫家ノ肝要トス可キハ此ニ過グル無シ、是ヲ以テルーソー屢々此言ヲ舉ゲリト、フィリップ又曰ク、余テオドールルーソーガ木扁上ニ描ケル者ヲ藏有セリト、余ノ此ノ木扁ノ畫ヲ賜ハリシヤ、ルーソー余ニ謂テ曰ク、畫家ノ圖ヲ做スヤ、其個々ノ形皆當サニ先ツ一々整列シテ腦髓中ニ在ル可シ、而シテ其毫ヲ執リテ布幘ニ臨ムヤ、猶ホ物ヲ蔽フ所ノ幕ヲ開テ漸次ニ其ヲ露ハスカ如シト、言畢ハリ極薄ノ紙片ヲ取リテ之ヲ木扁上ニ置ケリ、是ニ於テ畫中細微ノ處ハ復々見ル可ラズ、既ニシテ又一紙片ヲ其上ニ置ク、是ニ於テ其畫熾然トシテ分明ナラズ、然レモ猶ホ頗ル見ル可シ、既ニシテ又一紙片ヲ置ク、是ニ於テ圖中ノ大體ノ處ヲ除キ、餘ハ復々見ル

可ラズ、ルーソー因テ余ニ謂テ曰ク、余ノ畫ヲ作スヤ正ニ此レト相反ス、蓋シ其初テ様式ヲ製スルヤ、唯大體ヲ示スノミ、次テ一タヒ毫ヲ執ルキハ、大體細微並ニ粗ホ形ヲ見ハス、然レモ未ダ分明ナルニ至ラズ、漸次ニ功ヲ加ヘテ最後ニ始テ成ル、然レモ其初ヨリ終ニ至ルマデ、別ニ外ヨリ物ヲ移シ來ルニ非ズ、唯其上ヲ蔽フ所ノ幕ヲ除去スルノミト、又曰ク畫人ノ圖ヲ作スヤ、猶ホ明ヲ引テ暗處ヲ照スガ如シ、明光益々入ルキハ、物々ノ形益々觀ル可シ、物ハ則チ終始一處ニ在リテ減スルコト無ク増スコト無シ、蓋シ畫家ノ采色ヲ施スヤ、即チ明光ヲ引テ物ノ形ヲ發スルニ外ナラズト、

フィリップ又曰ク、余屢々ルーソーノ畫ヲ爲スヲ觀テ甚ク之ヲ樂メリ、蓋シ其様式ヲ製スルヤ、或ハ白鉛筆ヲ用ヒ、或ハ「ヒ、ユザン」未詳等ヲ用ヒ、又或ハ支那墨ヲ用ヒ、以テ結構ノ大體ヲ倣シ、必ス先ツ天地ノ位置ヲ定メ、次

ニ其中間ニ於テ樹木ヲ施シ、次ニ巖石ヲ施シ、又次ニ樹ニ就テ枝葉ヲ着ケ、巖石ニ就テ皴ヲ着ケ、天ニ就テ雲煙ヲ着ケ、然後漸次ニ青黃ノ諸色ヲ施シ、鹿ヨリ細ニ入り、筆々毫々進ミテ已マズ、之ヲ觀ルキハ將サニ曰ハントス、物々漸次ニ暗地ヲ出デ、形ヲ明中ニ見ハスト、眞ニ其言ニ負カザル者ナリ、蓋シ線畫ヲ調整スルノ至レル者ト謂フ可シ、

リュベンノ畫ヲ倣スモ亦其手術極テ後學ニ益有リ、蓋シフロマンタンハリュベンノ畫ヲ研究シテ尤モ詳密ナル者ナリ、又屢々親ラ其畫幀ヲ視、中ニ就キ其ペーシミラキユレーズノ畫幀ヲ觀ルヲ得タリ、其言ニ曰ク、余ノペーシミラキユレーズノ畫幀ヲ觀ルマ、方サニ一學校ノ一室ニ置ケリ、其縁邊未ダ脩飾ヲ加ヘズ、横ヘテ白堊ノ壁下ニ在リ、其承塵ハ硝子ヲ以テ之ヲ造ルヲ以テ、太陽ノ光線直チニ射下シテ畫上ニ瀾漫シ、極テ細瑣ノ處ト雖モ皆之ヲ視ルコト甚詳悉ナルコトヲ得、蓋シ畫幀ヲ此ノ如キ處ニ

置クキハ、畫中ノ隱匿ス可キ處、皆盡ク人眼ニ呈スルヲ以テ、作者ニ在リテハ極テ不利ナリトス、然レモ賞鑒家若シ作者秘密ノ處ヲ探ラント欲スルキハ、此時ニ乘ズルニ如クハ莫シ、故ニ余ハ好機會ヲ得ルヲ喜ビ、一身ノ力ヲ竭シテ之レカ撿覈ヲ加ヘリ、

此ノ如キ際ニシテ、幀上ニ立テ俯シテ之ヲ觀、因リテ首ニ評ヲ下シテ曰ク、此畫ヤ斯位置ニ於テ之ヲ觀ルキハ、未ダ鹿筈ト曰ハズ、何トナレハ本ト古今絶類ノ大家ノ手ニ出テタルヲ以テナリ、但頗ル素朴質實ナル者ニシテ少シモ奇異ナル處無キカ如シ、蓋シ先ヅ兩人物有リテ皆唯胸鬲ヨリ上ヲ露ハスニ過ギズ、其一ハ前ニ向テ俯シ、其一ハ後ニ向テ微ク俯ス、其線畫整齊ニシテ、凡ソリュベソノ手ニ出テタル作中、最モ博士家ノ典型ニ適合セル者ナリ、但其運毫ノ迹極テ輕俊爽快ニシテ、一氣呵成セシト想フ可シ、而シテ其采色甚濃ナルモ模糊タルニ至ラズ、甚淡ナルモ明

瑩ナルニ至ラズ、其高下深淺ノ勢太劃然タルモ崎嶇硃碇タルニ至ラズ、又其漁者ノ如キハ頭髮全ク白クシテ且ツ黃ヲ帶ビ、鬚鬣然トシテ面ニ被ムリ、雙目炯々トシテ顔色極テ瑰偉ナリ、其鬚鬣或ハ騰リテ上ニ向ヒ、或ハ下リテ地ニ垂レントスルハ、蓋シ未ダ骨ヲ櫛ラザルヲ知ルニ足ル、其履ハ極テ大ニ、其相服ハ殷紅色ニシテ、毛質極テ疎大ナリ、之ヲ要スルニ、漁夫ノ状態ハ畫中人物ノ最モ鮮明ナル者ニシテ、其風采人ヲ射ルガ如シ、蓋シリュベソノ畫ハ凡ソ赤色ヲ用フル處ハ、大率極テ濃ニシテ、光彩目ヲ奪フ、即チ此畫ノ如キモ、漁夫ノ相服ノ色爛々然トシテ、人ヲシテ昏眩セシムルノ概有リ、是ニ於テ自餘ノ黯淡ノ色、若クハ清瑩ノ色ト相反映シテ、觀ル者ノ心絶エテ厭忌ノ氣ヲ生ズルヲ無シ、又其赤色極テ濃ナルヲ以テ、自餘ノ色ハ隱然トシテ綠色ヲ帶グルガ如シ、

此畫幀ニ於テ眞ニ奇トス可キハ他ニ非ズ、其在ル所ノ位置既ニ前ニ述

ブルカ如クナルヲ以テ、之ヲ觀ルコト極テ詳悉ナルヲ得ルハ、恰モリユベ  
ンノ筆ヲ執ルノ前ニ居リ、親シ其運筆及ヒ傳彩ノ秘密ヲ見シカ如シ、  
蓋シ予ノ是畫ヲ觀ルヤ、尤モ驚クニ足ル者ハ、リユベ<sup>ン</sup>ノ傳彩ノ一事ニ在  
ラズシテ、其斯ノ如キ傳彩ノ法ヲ用ヒテ、斯ノ如キ美觀ヲ發スルノ一事  
ニ在リ、何トナレバ仔細ニ之ヲ點檢スルニ、其手段タル極テ平凡ニシテ、  
其結構タル極テ簡單ニシテ一モ人ニ異ナル無クシテ、其全體ヲ望見ス  
ルハ意趣ノ靈活ナル、實ニ咄々人ニ逼ルノ概有リ、蓋シ其頓タル木板  
ヲ以テ之ヲ爲シ其面極テ滑澤ニシテ其色ハ純白ナリ、當時リユベ<sup>ン</sup>ノ筆  
ヲ執リテ之ニ臨ムヤ、其運用爽快迅疾ニシテ、其胸中慷慨シテ且ツ綽々  
餘裕有リシコト一見シテ想フ可シ、其諸人物ノ顔色ヲ視ルハ、洵ニ作者  
ノ意氣飛動激揚セシヲ察スルニ足ル、然レモ其運筆ノ迹ハ極テ恬靜ニ  
シテ少シモ窘束ノ狀無ク、亦流滑ノ態無シ、謂フ可シ志氣愈々激躍シテ

筆墨愈々沈着セシ者ナリト、

今人リユベ<sup>ン</sup>ノ畫ヲ觀ルハ、其精悍ノ狀奇傑ノ態ヲ見テ、以爲ラク作者  
當時ノ胸中一塊ノ慷慨心俄ニ湧出シテ、直ニ其筆端ヲ繞レリト、是レ  
大ニ然ラズ、作者洵ニ心ニ感ズル所有リテ、然ル後作ルコトハ固ヨリ言ヲ  
待タズ、但其筆ヲ運スルヤ、澹靜沈重ニシテ一モ輕忽ナラズ、深ク心胸中  
ニ思慮シテ、一筆一采皆豫メ其効ヲ算シテ後之ヲ下セシコト必然ナリ、然  
ラズンハ其線畫ノ變化中ニ整齊ヲ寓スルコト能ク是ノ如クナルコトヲ得  
ン哉、

此畫用フル所ノ諸采ヲ察スルハ、實ニ人ヲシテ感嘆セシムルニ足ル、  
蓋シ其調劑極テ簡單ニシテ、大率一二種ヲ合シテ得ル者ノ如シ、而シテ  
其采色ノ美ハ數種ヲ調シテ成ル者ニ似タリ、其濃淡ノ度極テ平庸ニシ  
テ、少年生徒ト雖モ能ク容易ニ爲ス可キカ如シ、而シテ其相合シテ効力

ヲ發スルコト實ニ人ノ意表ニ出ルモノ有リ、  
 蓋シ其赤色ハ朱砂若シハ丹鉛ヲ用フルニ過キズ、別ニ奇ナルコト有ルコト  
 無シ、細ニ之ヲ察スルキハ、直チニ之ヲ碟中ニ入レ、草々研和シテ即チ之  
 ナ用ヒタルコト想フ可シ、其黑色ハ「ノアール」中「ウオール」象牙ヲ燒灰ニシテ得ル者ニシテ  
 用フルニ過ギズ、又間々其中ニ於テ他ノ淡黑色ノ染具ヲ和調セリ、其青  
 色ハ或ハ甲品ヲ用ヒ、或ハ乙品ヲ用ヒ、都テ時ニ隨ヒ意ニ任セテ之ヲ取  
 リテ、絶エテ撰擇ヲ其間ニ置カザル者ノ如シ、其黃色ハ蓋シニ効ヲ發ス  
 ルニ用フ、其一ハ曰ク白色ハ善ク太陽ノ光ヲ引テ即チ幀中ノ明處ヲ成  
 スニ便ナリ、而シテ黃之ニ次ク、故ニ之ヲ用ヒテ以テ明處ヲ爲ス、其二ハ  
 曰ク、此ヲ以テ周傍ノ諸色ノ上ニ一種ノ光映ヲ放チテ微ク其質ヲ變セ  
 シム、夫レ黃色ハ其專ラ黃ナル上ヨリ言フキハ、諸色ノ中ニ就テリユベ  
 ノ最モ便トセザリシ所ナリ、若夫レ其他ノ諸色ニ反射スルヨリ之ヲ言

フキハ、他家一人モリユベニ勝ル者無シ、又同一黃色ノ中ニ就テ、黄金色  
 ハリユベノ甚便ト爲セシ所ナリ、  
 凡ソ此采色ノ用ハ少シモ奇トス可キ者無シ、其但他ノ諸色ト相並列ス  
 ルニ因リテ、其全體ノ采色ヲシテ人目ニ爛々タルコト、斯ノ如クナルコト  
 致ス、此レ正ニ奇ト爲ス所以ナリ、  
 大凡ソリユベノ畫ハ、人若シ其一ニ就テ詳密ニ點檢ヲ致スコト得ルキ  
 ハ、其他畫ト極テ變化有ルガ如シト雖モ、其方法ハ常ニ一ナリ、一トハ何  
 ヲヤ、虚心平氣ニシテ深ク諸効力ノ底ル所ヲ算シテ遺スコト無シ、此レ其  
 胸中愈々感慨シテ其手腕愈々鎮靜ナル所以ナリ、是ヲ以テ觀ル者、初ハ  
 其采色ノ絢爛ナルト其線畫ノ變幻ナルトニ驚キ、作者ノ當時ニ在リテ  
 感慨シテ自ラ禁セザル者有リト以爲ハ、詳ニ之ヲ察スルキハ、其中極  
 テ整齊ナル處有ルヲ見ル、

予ヲ以テ之ヲ觀ルニリ、リペンノ畫ハ其初ニ胸中ニ咀嚼スルコトハ、或ハ頗ル久キヲ經ルモ、其筆ヲ執リテ頓ニ臨ムヤ、大率皆咄嗟ニ辨セシ者ナリ、或ハ其然ラザルモ甚タ按排ヲ費ヤセシ者、絶エテ之レ無シ、若シ之ヲ徵セント欲セバ、此圖畫中、船及ビ海水ヲ畫キシ處ヲ觀テ見ル可シ、蓋シ其采色極テ濃ニシテ、幾ンド模糊タル處有リト雖モ、其間自ラ明瞭ナル者有リテ、頓面ニ游離スルカ如シ、又其他更ニ意匠ヲ費ヤス部分ニ在リテモ、絶エテ塗抹敷過セシ者ノ如クナラズ、

フロマンタンノ此論ヤ、少シク冗漫ナルガ如シト雖モ、余ハ丁寧ニ之ヲ引テ讀者ノ覽ニ供セリ、蓋シフロマンタン天姿聰敏ノ才ヲ具シテ、而シテ其リ、リペンノ畫ヲ研究スルコト極テ至レルヲ以テ、其細微ノ論着々皆肯綮ニ中レリ故ニ畫ヲ業トスル者ニ在リテハ、其言極テ益有リ、若夫レ畫ヲ業トセザル者ニ至リテハ、此言必ズシモ益有ラズ、又近日ノ畫家ノ如

キハ、一切此等細微ノ道理ハ之ヲ講ズルコトヲ屑トセス、以爲ラク手術ハ急ニスル所ニ非ズト、夫レ意匠極テ高シト雖モ、手術熟セザルハ以テ巧妙ヲ致ス可ラズ、而シテ今此ノ如シ、嘆ズ可キノ至リニ非ズ乎、

爰ニ人有リ、演說ヲ以テ人心ヲ感動セント欲シテ、專ラ古人ノ文辭ヲ研究シテ、某ノ段落ハ沈着ナリ、某ノ段落ハ激烈ナリ、某ノ處ハ勁健ナリ、某ノ處ハ流麗ナリト、反覆詳悉シテ復ク餘蘊無シ、而シテ其聲音ヲ調シ、其手容ヲ整フルコトニ至リテ、絶エテ心ヲ用ヒズ、是ノ如クナルハ、果シテ能ク人ヲ感動スルコトヲ得ル乎、然ラザルナリ、文辭洵ニ美ナリト雖モ、演說ノ人ヲ感ズルハ、專ラ其聲音ノ高下手容ノ疾徐ニ在ルコト多キニ居ル、畫モ亦然リ、紀律固ヨリ貴ブ可シト雖モ、其美ヲ爲ス所以ハ全ク筆力ノ遒逸ナルト采色ノ絢爛ナルトニ在リ、今世ノ畫家專ラ古人ノ法ヲ研究シテ、其手術ノ奧秘ヲ求ムルコトヲ知ラズ、余故ニ本章ニ於テ專ラ手術ノ

細微ヲ論ズルコト此ノ如クナルハ、他無シ、世ノ専門家ノ此レニ由リテ少ク自ラ奮拔スル有ランコトヲ欲スレバナリ、

○第七章

運筆並ニ作者固有ノ情性ヲ發揮シ及ビ物體ノ性ヲ

發揮スル事○リニベン○フランズアルス○ユーヂェー  
ンヌデラクロアール○美術博士院ノ謬迷ヲ論ズ

凡ソ人ノ手ニ出ル者ハ、必ズ幾分其人ノ固有ノ情性ヲ印證シテ自ラ他人ノ手ニ出デタル者ト相異ナル有ルハ、此レ自然ノ勢ナリ、世或ハ異説ヲ唱ヘ、此道理ヲ細クテ之ヲ用ヒザラント欲スル者有ルモ、其旨趣固ヨリ自然ノ理ニ反スルヲ以テ、終ニ何ノ益ヲカ爲サン、且ツ此道理ヤ、之ヲ日常ノ瑣事ニ觀ルモ歷々徴ス可シ、之ヲ譬ヘハ人ノ手迹ノ如キモ、己レ未ダ其人ト一面ノ識有ラザルモ、其單札隻簡ヲ得テ其字體ヲ檢スルキハ、以テ粗ホ其人ト爲リテ察スルヲ得可シ、此レ他無シ、其手迹中自ラ其

人固有ノ情性ヲ印證スル有ルヲ以テナリ、

然リト雖モ、手札ノ如キハ固ヨリ多ク一時草率ノ間ニ爲ス者ニシテ、且ツ多ク意ヲ經ズシテ成ル者ナリ、故ニ天性靜重ナル者モ或ハ字體頗ル糾紛ナルコト有リ、又輕躁ナル者モ或ハ字體頗ル峻整ナルコト有リ、此ヲ以テ常ニ人性ヲ推測シテ決シテ錯ルコト無ラント欲スルモ、固ヨリ得可ラズ、但古人苟モ仔細ニ意ヲ用フルキハ、往々筆迹ノ間ニ於テ人性ノ大概ヲ知ルコトヲ得ルハ蓋シ少カラズ、此ニ由リテ言ヘバ、夫ノ「グラフオロシー」墨色及ビ筆迹ヲ觀テ人ノ性ノ如キハ、其期望スル所ハ誠ニ過多ニシテ、情及ビ吉凶ヲトスルノ術ノ如キハ、其根據トスル所ハ必ズシモ道理無キニ非ズ、實ニ過クルト云フト雖モ、亦根據トスル所ハ必ズシモ道理無キニ非ズ、畫家ノ運筆ノ如キモ、亦此レト相類セリ、苟モ畫人自ラ其意匠ヲ運シテ畫ク所有リテ、前人ノ迹ヲ踏襲摸擬スルノ病無キキハ、其運筆ノ迹ニ由リテ其人ノ情性ノ大概ヲ得可キコト疑ヲ容レザル者有リ、世ノ庸工ノ如

キハ固ヨリ此ヲ以テ之ヲ律ス可ラズ、彼レ自ラ心ニ感ズル所有ルニ非ズシテ、只管ニ古人ニ模擬シテ以テ足レリト爲ス、猶ホ學校童子ノ字ヲ習フテ、一ニ臨本ニ肖似スルヲ求ムルガ如キ者ナリ、十人十幀百人百幀ナルモ、其運筆ノ法ハ絶エテ異ナルヲ有ルヲ無シ、此ノ如キ者ハ何ニ由リテ其性情ヲ發揮スルヲ得ン哉、

畫家紀律ヲ嚴守シテ、敢テ自ラ運筆ノ法ヲ創セザルヲハ、意答利ヲ最モ甚シト爲ス、但ウエニ一ズノ諸家ハ少ク自ラ肆スルヲ試ミタリ、然レモ亦未ダ十分ニ自家ノ情性ヲ發揮スルニ至ラズ、蓋シ運筆法ノ最モ自在ナルハ、フランドル及ヒ荷蘭ノ諸家ニ踰ユル莫シ、試ニ此二國ノ畫ヲ看ヨ、其條線其采色各々固有ノ習尙有リテ、絶ニテ他畫ト相似ズ、蓋シ作者各々自ラ意ヲ創シテ筆ヲ運シ、以テ自己ノ情性ヲ發揮スルヲ以テナリ、中ニ就テフランドアルスハ其最ナル者ナリ、若シ意趣ノ奇逸ナル品格

ノ高雅ナルヨリシテ言フキハ、荷蘭及ヒ其他ノ諸國皆フランドアルスニ勝ル者無シトモ、但其運筆ノ雄豪ニシテ深ク自己ノ性情ヲ印證スルニ至リテハ、未ダフランドアルスニ踰ユル者ヲ見ズ、蓋シフランドアルスハ、此一長ヲ以テ諸大家ト並稱スルヲ得タルノミ、予嘗テ屢々フランドアルスノ畫ヲ觀ルヲ得タリ、其運筆ノ迹縱横自在ニシテ端倪ス可ラザルヲ、實ニ人ヲシテ驚心動魄セシムルニ足ル、人往々評シテ曰フ、フランドアルスノ畫ヲ作スヤ、筆ヲ運スルニ非ズ、筆ヲ擲グルナリト、蓋シ其鋒穎ノ凛々トシテ生氣有ルヲ謂フナリ、夫レ是ノ如シ、故ニフランドアルスノ畫ハ、一見スルキハ其咄嗟シテ一時ニ揮洒シ去リタルヲ想フ可シ、世ノ畫家筆ヲ執リテ沈吟シ、纔ニ筆ヲ下サント欲シテ又止メ、復タ一筆ヲ下シテ踟躕シ、或ハ既ニ成リテ復タ改竄シ、苦慮百端シテ僅ニ成ルガ如キハ、フランドアルスノ畫中ニ絶エテ此ノ如



キ痕迹有ルヲ見ズ、

フランズアルスニ一欠所アリ、品格ノ高逸ナリ、意趣ノ奇傑ナリ、故ニ人若シ之ヲ以テリユメンランブランドノ輩ニ比セント欲スルキハ、固ヨリ當ヲ得タリト爲ス可ラズ、然レモ人其畫ヲ觀ルヲ盡日スルモ、略ボ厭クヲ知ラズ、然ルガ如キ者ハ何ゾヤ、其運筆自在ニシテ絶エテ摸擬ノ痕無ク、深ク自家ノ氣象ヲ發シテ一モ依傍スル所無キヲ以テナリ、

凡ソ茲ニ云フ所ハ、美術博士院ノ旨趣トスル所ト正サニ相反ス、博士家ノ言ニ曰ク、畫家務テ實物ニ肖似スルヲ求ム可シ、自家ノ意趣ハ務テ之ヲ除テ其痕迹ヲ留メズ、觀ル者ヲシテ唯其畫ノ適麗ナルヲ見テ、其作者ヲ忘レシムルヲ尙シト爲スト、若シ此說ヲシテ信ナラシメバ、天下古今ノ畫人フランズアルスヨリ下ナルハ莫シ、フランズアルスノ畫ハ、一見スルキハ其人ノ性情ヲ想像セザラント欲スルモ得可ラズ、蓋シ其畫

中自己ノ意趣ヲ發揮スル太甚クシテ、或ハ怪僻ニ涉ル者有リ、然レモ吾人絶エテ此ヲ以テ厭怠ヲ爲スヲ無シ、獨リ此ヲ以テ厭怠ヲ爲サザル而已ナラズ、反リテ此ヲ以テ樂ト爲ス、之ヲ夫ノ整齊端麗ノ極、寂然不動ノ態有ルニ至ル者ニ比スルキハ、相勝サルヲ萬々ナリ、且ツ畫人一頓ヲ描ク毎ニ必ズ落款シテ、自己ノ姓名ヲ記スルヲ諸家皆然リ、是ノ如クナレハ、何ノ故ニ自己ノ情性ヲ發揮シ、意ヲ創シテ筆ヲ運スルヲ禁ズル乎、創意ノ運筆ハ即チ自己性情ノ落款ナリ、然リト雖モ、余ハ此レカ爲メニ世ノ畫人ニ勸メテフランズアルスニ摸擬セシムルニ非ス、摸擬ノ類ハ文藝ニ於テ疵病之レヨリ大ナルハ莫シ、予ノ特ニフランズアルスノ事ヲ舉ゲテ喋々是ニ至ル者ハ、他無シ、世ノ畫家ノフランズアルスニ倣フテ、各々古人ノ法ニ拘泥セズ、自ラ意ヲ創シテ筆ヲ運スルヲ願欲スルナリ、

然リト雖モ、畫人ノ手術ニ於ケル、唯自家ノ性情ヲ發揮スルヲ以テ足レ  
 リト爲ス可キニ非ス、亦必ス物體固有ノ性質ヲ發揮セザル可ラズ、何ト  
 ナレハ物ヲ寫ス者ハ獨采色ノ重ンズ可キニ非スシテ、形狀モ亦重ンズ  
 可ケレハナリ、蓋シ物各々其形有リ、各々其色有リ、堅硬ナル者有リ、柔韌  
 ナル者有リ、重キ者有リ、輕キ者有リ、故ニ畫家苟モ物ヲ寫スルハ、人ナシ  
 テ一見シテ自ラ其質ノ堅硬ナリ、若クハ柔韌ナリ、重ナリ輕ナルヲ想  
 像セシムルヲ要ス、是ノ如クナラザルハ、初ヨリ物ニ肖似スルヲ  
 得ザルナリ、

若シ畫人人ノ筋肉ヲ寫スニ於テ、金屬ノ質若クハ布絹ノ類ヲ寫スト異  
 ナラザルハ、豈ニ之ヲ巧手ト謂フヲ得ン哉、夫レ同一衣服ノ屬ト雖モ、  
 絹類ノ天鵝絨ニ於ケル、毛織類ノ麻桌ニ於ケル、其染色全ク相同キモ、其  
 質大ニ相異ナルニ非ズ、平均ク是レ果實ナリト雖モ、桃實ノ膚ト橙實ノ

膚トハ自ラ其狀ヲ異ニス、均ク是レ禽獸ナリト雖モ、兔ノ毛ト鳥ノ毛ト  
 ハ自ラ其質ヲ異ニス、凡ソ此レ等皆決シテ混同スルヲ得ズ、若シ混同  
 スルハ、觀ル者其何物タルヲ知ラズ、果シテ然ルハ、其運筆如何ニ輕  
 巧ナルモ、未ダ以テ高手ト爲スニ足ラス、

畫人固ヨリ物體固有ノ性ヲ發揮セザル可ラズ、而シテ畫幀ノ大小及ビ  
 其位置モ亦知ラザル可ラズ、之ヲ例ヘハ一切畫幀ノ人ナシテ遠ク望ミ  
 テ近ク接スルヲ得セシメザル者ハ、其采色運筆並ニ過密ナルヲ得  
 ズ、過密ナルハ模糊髣髴トシテ形色ヲ辨ズ可ラズ、之レト反シテ諸縮  
 圖及ヒ一切近ク觀ル者ノ眼前ニ呈スル者ハ、運筆采色並ニ緻密ヲ厭ハ  
 ズ、決シテ疎豪ニ失スル勿レ、此レ又知ラザル可ラズ、

凡ソ人體ノ中ニ就テ其最疲極シ易キ者ハ、目ニ踰ユル莫シ、故ニ目一物  
 ニ對シテ眸ヲ凝ス一霎時ナルハ、必ズ眼ヲ轉ズルヲ思フ、今夫レ

吾人建築ノ様式ヲ觀ルキハ、少時ニシテ厭怠ノ情ヲ發ス、此レ其故何ツヤ、蓋シ建築ノ様式ハ唯整齊ナルヲ求ムルヲ以テ、長短高下必ズ「コンパス」ヲ用ヒテ之ヲ爲スヲ以テ、其線畫過直ニシテ絶エテ生氣無シ、此レ其人目ヲ疲ラス所以ナリ、其他一直線ノ如キモ亦然リ、觀ル者容易ニ倦怠ノ情ヲ發スルヲ免レズ、之ニ反シテ器械ニ由ラズシテ、手ヅカラ製シタル者ハ、人目ヲ疲ラスコト是ノ如クナラズ、是レ他無シ、其迹復タ幾何ノ理ニ拘泥セズシテ變化ノ處有ルヲ以テナリ、夫レ然リ、是ヲ以テ今人往々古昔ノ器具ヲ擬製スルモ、其雅趣決シテ古製ニ及バズ、他無シ、古人ハ手ヲ以テ之ヲ爲シテ變化ノ處有リ、今人ハ機械ヲ用ヒテ之ヲ爲シテ整齊ニ過グルヲ以テナリ、畫人ノ運筆モ亦然リ、古人ノ法ヲ摸擬シテ成ル者ハ幀中千筆皆一ノ如クナルヲ以テ、觀ル者絶エテ感情ヲ發スルコト無シ、故ニ畫人必ズ賞鑒家ノ讚稱ヲ博セント欲スルキハ、一幀中ノ運筆

或ハ俊爽ノ處有リ、或ハ沈着ノ處有リ、或ハ奇拔ノ處有リ、或ハ平坦ノ處有リ、此ノ如クニシテ相合シテ自ラ一體ヲ爲シテ、然ル後以テ名畫ト爲ス可キナリ、

夫レ然リ、是ヲ以テ東方諸國ノ絹布、及ヒ陶器ノ屬、其人目ヲ怡バシムルコト大ニ歐洲ノ物ニ勝サル者有リ、特ニ支那人ノ如キハ、其采色ヲ用フルコト尤モ精微ヲ極ム、蓋シ其采色ノ單純ナル者ト雖モ、皆必ズ濃淡相異ナラシメ、以テ板直ノ病ヲ除ケリ、即チ青ヲ以テ青ニ婉へ、黃ヲ以テ黃ニ婉へ、赤ヲ以テ赤ニ婉フト雖モ、其間必ズ微シ相異ナル者有リテ、自然ニ燦然トシテ亂ル可ラズ、吾人ノ觀ル者、自ラ愉快ヲ覺エテ、絶エテ厭倦ノ意ヲ生ぜズ、デラクロアノ設色蓋シ此レト類スル者有リ、

シャル、プラン氏其筆畫論ニ於テデラクロアノ手術ヲ論ジテ曰ク、デラクロアノ此法ヲ得ルヤ、自然ニ心ニ悟ル所有リテ然リシカ、將タ多

ク學ビ深ク究メテ然リシカ、是レ未ダ知ル可ラズ、但其采色ヲ用フルヤ其最モ坦平純粹ヲ要スル處、即チ天色ヲ寫シ、若クハ大厦ノ承塵ヲ寫ス等ニ至リテモ、決シテ濃淡一樣ナラシムルコト無ク、必ズ幾分變化ノ處有リ、蓋シ其法タル先ヅ一體ニ淡ヲ用ヒテ地ヲ爲シ、其上ニ就テ諸處ニ微濃ヲ施シテ、淡ナル者ヲシテ其間ヨリ映發セシム、是ヲ以テ述ニ看ルルハ、極テ平坦ナルガ如キモ、詳ニシテ之ヲ察スルルハ、一々變化有ラザル莫シ、世ノ大家ト稱スル者ト雖モ、或ハ是ニ得ル有ラズ、是ヲ以テ其亞非利加地方ノ風景ヲ寫スガ如キ、其天色千里相同クシテ、唯淺藍ヲ平鋪スルノミ、蓋シ以爲ラク、此地方ノ天色自ラ此ノ如シ、此固ヨリ實景ナリト、此レ其レ或ハ然ラン、獨奈何セン、觀ル者其此ノ如キヲ見ルルハ、徒ニ厭倦ノ意ヲ生ジテ、復タ實事ニ合スルト否ラザルトヲ問ハズ、然レハ則チ終ニデラクロアーノ法ヲ以テ尙ト爲ササル可ラズ、

トレー氏一千八百四十七年ヲ以テデラクロアーノ「オダリスク」ノ畫ヲ評シテ云ヘリ、余デラクロアーノ此幀ヲ觀ルニ、運筆ノ妙ナル、設色ノ巧ナル、當世與ニ比スル者無シト、因リテ其見ル所ヲ以テ仔細ニ評釋シテ極テ當チ得タリ、其大略シヤル、氏ト旨ヲ同クセリ、  
以上論ズル所ニ由リテ之ヲ考フレバ、畫家ノ手術蓋シ分チテ二ト爲ス、一ハ自家固有ノ筆法ヲ發揮スルナリ、一ハ物形自然ノ狀ヲ寫スナリ、此二ノ者共ニ偏廢ス可ラズ、但筆法ノ如キハ人々其天性ノ異ナル有ルヲ以テ未タ規律ヲ以テ之チ一ニス可ラズ、其人天性深沈柔和ナル乎、筆法ノ奇崛ナルヲ求ムルモ得可ラズ、其人豪邁濶達ナル乎、筆法ノ沈鬱ナルヲ求ムルモ亦得可ラズ、故ニ手術ヲ學ブノ最良法ハ各々其天ニ獲ル所ノ才ニ從テ、深ク習熟ノ功ヲ累チテ以テ其才ヲ成スニ如クハ莫シ、若夫レ氣質ヲ變化スルコトヲ求ムルハ、悖理之ヨリ甚キハ莫シ、

我が博士院ノ徒ハ曾テ是ニ慮ル有ラズ、其性情ノ如何ヲ論セズ、其才氣ノ如何ヲ問ハズ、一ニ律スルニ古人ノ法ヲ以テシテ、只管ニ古人ノ成圖ニ由リテ學習セシメテ、絶エテ固有ノ性ヲ發揮セシムルヲ求メズ、又其古人ノ畫ヲ評スルヤ、專ラ自家ノ好惡ヲ以テ之ヲ軒輊シテ、公平ノ見有ルヲ無シ、而シテ少年生徒ハ其未タ事ヲ更ザルヲ以テ、自ラ見識ヲ發スルヲ能ハズ、唯博士其人ノ言ヲ信ジテ、絶エテ自ラ其性ノ近キ所ニ隨テ業ヲ修ムルヲ思ハズ、相率キテ自ラ狹隘ノ範圍内ニ陷キリテ自ラ脱スルヲ知ラズ、此レヲ以テ大家ノ名ヲ爲シテ後世ニ施サント欲スルモ豈ニ得可ケン乎、

## ○第五篇 舞蹈

舞蹈トハ何ゾヤ、外物ノ五官ニ觸テ經絡ニ反動シ、之ヲ手足ノ作用ニ發スル者ナリ、故ニ其物タル音樂ト秋毫ノ異ナル者有ラズ、

(原註)音樂ハ後章ニ至リ、將ニ之ヲ詳論セントス、而シテ舞蹈ハ古人ノ尤モ尊重スル所ナリト雖モ、輒近之ヲ輕忽ニ附シ、方今ハ諸藝中ニ在テ下位ヲ占ム、故ニ予茲ニ其大體ヲ論シ、其詳ナル者ハ之ヲ後章ニ讓ラン、

凡ソ喜悅ナル者ハ心内ノ感動ナリ、音聲發シテ耳朶ニ觸ル、ハ、外形ノ感動ナリ、二者之ヲ動作ニ發シ、歩武ニ形ハシ以テ其情意ヲ外ニ示ス者、是レ即チ舞蹈ナリ而シテ心内ノ感動ト外形ノ感動ト調劑和諧シ、節度ニ依遵シテ後チ乃チ始メテ舞蹈ノ一技藝ヲ成ス、

舞蹈ハ運動ト位置トヲ以テ其奧義ト爲シ、情念ノ發動如何ニ由テ、其方

向チ定ム、情念喜ベハ則チ喜ブノ運動アリ、怒レハ則チ怒ルノ位置アリ、其運動位置ノ情念ト俱ニ變移スルコト、恰モ自然ニ出ルガ如ク、情念激厲ナレハ斯ニ運動位置モ亦峻急殘暴ノ様ヲ見ハス、是ヲ以テ喜悅ヤ、忿怒ヤ、悲哀ヤ、恐懼ヤ、賞嘆ヤ、慷慨ヤ、舞人各々相異ナルノ符徴ヲ以テ之ヲ外ニ露ハシ、觀客ヲシテ因テ以テ其喜悅ノ喜悅タリ、其慷慨ノ慷慨タルヲ辨セシム、然リ而シテ其外形ノ符徴タル運動位置ハ、其情念ノ異ナルニ隨テ、然カク其様態ヲ變ズルノミナラズ、人種性質及其人ノ天稟殊ナルニ隨ヒ、亦變易セザルコト能ハズ、故ニ運動位置ハ歐羅巴人ト亞細亞人トニ由テ異ナルノミナラズ、歐羅巴人中其性ノ緩急アルニ隨ヒ、亦異ナル無キコトヲ得ス、舞蹈モ亦難イ哉、

運動節アリ、位置度アリ、普通ノ準繩ニ據テ夫ノ區々殊別アルモノヲ規定合同スルニ至リ、乃チ始メテ一技ト爲スヲ得可キナリ、運動及位置ハ怒ルナリ喜ブナリ、情念發セハ斯ニ之ヲ定ム、而シテ其定ル毎ニ運動位置ヲ節度ニ合セ、人々心内ニ蓄フル所ノ情念發動ヲ此普通ノ程度ニ依テ抑束シ、百般情念ノ發動ヲ一緒ニ統率シ、以テ其情念ノ異同アルモノヲ調和シ、且運動位置ヲ節度ニ叶ヘテ、以テ全體ノ動靜ヲ調和セザル可ラズ、

人民蒙昧ニシテ文化未ダ普子カラザル國ニ於テハ、特ニ舞蹈ヲ以テ其心内ニ蓄フル所ノ情念ヲ發露スルコト、上文論ズル所ノ如シ、此國ニ於テハ國風舞蹈アリ、神教舞蹈アリ、又軍人舞蹈アリ、此類ノ舞蹈ハ特ニ情念ヲ外形ニ露ハス者ニシテ、内ニ思フテ偶然外ニ發スルニ過ギズ、蠻民戰ビ捷テ其喜ビ禁ズルコト能ハズ、知ラズ識ラズ、矛楯ヲ打テ舞蹈スル、是レ

其的例ナリ、

其他舞蹈ニハ遊觀舞蹈ト稱スル者アリ、此舞蹈ハ、我劇場ニ於テ演スル所ニシテ、邦人「バレエ」ト曰フ、「バレエ」トハ舉動如何ニ由テ其情意ヲ外ニ示ス者ナリ、而シテ此ノ如キノ舞蹈ハ、未タ必ズシモ言語ヲ以テ其意ヲ露ハサズト雖ヒ、特ニ其體裁、運動位置節度ト觀客ノ眼目ヲ悅ハシムルモノヲ撰擇シ、因テ以テ舞蹈スルヲ旨トス、是レ之レヲ粧飾舞蹈ト稱スルナリ、

殿廡舞蹈ノ如キハ、予舍テ論ゼス、何ソヤ、此舞蹈ハ散步遊行ニ少シク節度ヲ附スルノミニシテ、國風舞蹈ニ類スルコト猶ホ信徒賽行歩武ヲ節シテ、舞蹈スルガゴトク、毫モ異ナルコト無シ、何ニ由テ其之ヲ一藝中ニ班列スルヤ否ハ予ガ知ラザル所ナリ、

夫レ舞蹈ハ體育ト風教トノ上ヨリ攷フルモ、其世ヲ利シ民ヲ益スル甚

ダ多キコト今古ノ異ナルアル無シ、然リト雖モ今ヤ百事輕便ヲ貴ヒ、冗費ヲ省クヲ以テ旨トス、譬ヘハ燕席ノ辛ウシテ五百人ヲ容ル可キ者モ、強テ二三千人ニモ列セシムルヲ例トス、何ノ暇アリテ舞蹈ノ術ヲ施サンヤ、且ヤ人々宴遊ニ於テ舞蹈スルヲ以テ當ニ務ムヘキモノト爲ス時ハ、卒ニ之ヲ以テ一種ノ徭役ト爲シ、儼然タル禮式ト爲シ、又賓客ヲ款待スルノ例典ト爲シ、苟モ之ニ背馳スルコト能ハザラシムルノ弊ヲ來クサン、此ノ如キ世俗ノ所謂當務ハ汎ク人情ノ忌憚スル所ナリ、嗚呼人々ヲシテ咸ク舞蹈ヲ習ハシメントスルハ得テ行フ可カラズ、讀者宜ク意ヲ此ニ致スベシ、於是乎舞技ヲ弄スルノ饗燕ニ易フルニ、賓主團圍閑話靜談スルヲ以テシ、賓客ノ咸ク舞技ヲ習フハ甚タ罕ナリ、舞技ヲ習フコト既ニ甚タ罕ナリ、何ヲ以テ舞蹈ヲ當務ト爲サシメンヤ、昔者我カ泰西ノ民風ノ美ナル時ニ在テハ舞蹈盛ンニ行ハレ、節度精密一技藝ヲ成セリ、故ニ

世教改マリ、民風美ナルニ至レハ、輒チ今ノ舞蹈モ亦必ラズ堂々一美術  
 ナ爲シ、昔日ノ盛ナルヲ致サン、蓋シ舞蹈ハ本ト純然タル一技藝ニシテ、  
 其聲教ト關係アルヲ實ニ大ナリト謂フ可キナリ、

上古布臘ハバキユス神ノ祭日ニ當リ、舞蹈ノ技ヲ演ス、愁嘆詩歌ハ此技ヲ  
 演スルヨリシテ創マリシナリ、而シテ方今猶ホ古昔ノ樂隊ナル者アリ  
 テ、衆樂手音調ヲ齊一ニシ、以テ謳歌ス、是レ希臘バキユス祭日ノ舞蹈ノ古  
 風ヲ今ニ保存スル者ナリ、

予嘗テ舊誌ヲ讀ムニ、古國ノ民ハ皆ナ舞蹈ヲ以テ諸藝術中尤モ尊重ス  
 可キ者ト爲ス、因テ我カ先哲ハ神祭ニ供スル舞蹈ノ舊式ヲ維持シ、十二  
 世期ノ頃之ヲ寺觀及ビ陵墓ニ於テ演行ス、就中我カリモ一ジユノ地方  
 ノ如キハ、依然此舊式ヲ遵行シ、延テ十七期ニ及ブト云爾、  
 佛王顯理四世ノ朝廷ニ於テハ舞蹈快樂ヲ旨トシ、往々猥褻ニ涉リ、而シ

テ路易十四世ノ宮闕ニ於テハ、舞蹈威嚴齊肅ヲ本トシ、人ヲシテ倦怠ヲ  
 來タサシムルノ病アリキ、此舞蹈ト雖モ舞蹈ハ則チ舞蹈ナリ、當時何ゾ  
 舞蹈ノ存スル無シト謂ハンヤ、

今日我カ法朗西ハ劇場ノ外ニ舞蹈ノ行ナハル、ヲ見ス、但固ニ偏陬ノ  
 地及ヒ二三大府ノ聚樂場ニ於テハ、今猶ホ尋常舞蹈ノ行ナハル、ヲ見  
 ルト雖モ、中人以上ノモノハ舞蹈ノ何タルヲ知ル者莫シ、舞蹈ト舉動ヲ  
 以テ模擬スルノ術トハ、同一視ス可シト雖モ、此二者ノ調和ハ、大概外面  
 上ニ止マリ、其本ヲ并セテ合同セシムルヲ能ハス、蓋シ舉動ヲ以テ模擬  
 スルノ術ハ之ヲ舞蹈ニ用フレバ、特ニ其技ヲ粧飾シ、華美ナラシメテ舞  
 蹈ノ本旨ヲ誤ルノ弊アリ、且夫レ人々言語ニ因テ其情意ヲ發露セバ、其  
 義甚ダ明瞭ニシテ且其容易ナル可シト雖モ、舞蹈ニ此術ヲ用フル時  
 ハ、四肢ヲ動スノ法如何ニ由リ、觀客ヲシテ強テ舞人ノ本意ヲ察知セシ



ムルノ失無キヲ能ハズ、強テ舞人ノ本意ヲ察知セシメテ、自然ニ其情ヲ通ズルヲ能ハザルハ、是レ技藝ノ原法ニ乖戾ス、奚ヅ技藝ト爲スヲ得ンヤ、

肖像ハ名工ノ彫刻ニ係リテ世ノ賞美スル所ト爲ル者ト雖也、亦之ヲ以テ一技藝中ニ班スルヲ得ス、是ヲ以テ肖像ハ舞蹈ト並べ論ズ可ラズ、蓋シ肖像ハ死物ニシテ動搖セザルヲ可トス、是レ因テ以テ舞蹈ノ技ヲ釋解スルヲ得ザル所以ナリ、且肖像ハ又之ヲ畫學及ヒ彫刻ト同一視シテ論ズ可ラス、夫レ畫學及ヒ彫刻ノ本質タルヤ、純然タル人爲ノ作法ニ準據シテ、活物ノ容態ヲ摸寫スルヲ旨トスレバナリ、加之肖像ハ率チ婦女裸程ノ態ヲ寫スニ過キス、是レ既ニ一技藝中ヨリ擯斥スルニ足ル、希臘ミニ安置スル少シニユス女神ノ肖像ヲ見ズヤ、全軀裸程ニシテ片布ノ身ヲ覆フ無シ、人之ヲ一見スルモ慚愧ヲ懷シ無シト雖也、彼ノ半身皮肉

ヲ露ハス舞妓ノ壇上ニ現出スルヲ觀バ、孰レカ赧然面ヲ掩ハザル者アラシヤ、假令舞妓ノ短衣半身ヲ露ハスモ、國民ノ習慣之ヲ以テ時ノ流行ヲラシムルニ於テハ、一人ノ慚愧スル者無カル可シト雖也、美學上ヨリ之ヲ攷フレバ、肖像モ舞妓モ裸程ハ則チ裸程ニシテ、異物ヲ以テ視ルモノアラズ、奚ソ肖像ニ由テ舞蹈ヲ論說スルヲ得ンヤ、

○第六篇 音樂

○第一章 音樂沿革ノ概略

大率チ蒙味蠻夷ノ國ノ音樂ハ、齊一ノ高聲ヲ反覆發動シ、稍々音調ヲ定メテ句節ノ緩急ヲ異ニスルニ過ギズ、故ニ黑奴ノ歌ハ外物ニ觸レテ其音調ヲ變ズルニ非レバ、其音ノ句ヲ爲ス必ズ四數ニ止マリ、微妙ノ調ヲ爲サズ、是ヲ以テ此輩野民ノ謳歌ハ、更ニ變調ノ耳ヲ喜バシムル者無ク、平易齊一ノ調ヲ反覆シテ以テ自ラ其意ヲ慰ムルノミ、是ニ於テカ黑奴ハ太鼓ノ音ヲ以テ無比ノ美韻トナシ、常ニ聞テ甚ダ喜ベリ、黃色人種ノ中ニ就キ、殊ニ支那人ノ如キハ、夫ノ黑奴人種ニ比スレバ、其性略ボ秀俊ニシテ耳ノ官稍々鋭敏ナリ、故ニ音樂ヲ精選スルヲ務ムル、蓋シ甚ダ久シ、然レモ既ニ其材ニ堪フベキノ極度ニ達シ、更ニ寸歩モ之レヨリ進ムト莫シ、蓋シ其音樂ノ完全ナラザルハ、其耳ノ敏ナラズシ

テ、音聲ヲ判別スルノ審カナルヲ得ザルニ由ル、

是ヲ以テ支那ノ樂人ハ、嘗ニ音聲ヲ類別シ、又之カ音調ヲ審ニスル能ハザルノミナラズ、又畫家ニ於テ其采色ヲ識別スルヲ得ズ、故ニ黃色種族ハ遠近ニ循ヒ、高下ヲ別テ畫學ヲ爲ス能ハズ、是レ耳目ノ官ノ鈍ナルニ由ル、是ニ由リテ支那ノ音樂ハ僅カニ五律ニ過ギズ、

猶ホ茲ニ一ノ驚駭ニ堪ヘザル者アリ、何ツヤ、曰ク支那ノ樂人ハ、或ハ論理ニ徵シ、或ハ實際ニ質シテ、半律ノ制ヲ會得シタリト雖モ、半律ノ法ヲ調スルヲ欲セザルヲ、是ナリ、蓋シ音樂ハ本ト半律無ケレハ、決シテ其技ヲ成ス能ハズ、且支那樂人ハ歌フヲ至テ希ナリ、故ニ樂器ヲ鳴ラシテ以テ甚ダ喜ブ、此ノ如キハ嘗ニ支那人ノミニ非ス、黑奴モ亦然リ、而シテ支那樂人ノ高調ヲ好愛スルヤ、猶ホ畫學ニ於テ采色ノ甚ダ燦爛タルガゴトシ、

支那音樂ノ備ハラザルト上ニ論ズルカ如シ、是ヲ以テ支那音樂ニハ、一定ノ音律有ルヤ否、將タ終始音樂作者ノ適意ニ出ヅルヤ否、余輩ノ甚タ論斷スルニ苦ム所ナリ、畢竟支那ノ樂人ハ音樂ノ正調ヲ解スル能ハザル者ナリ、故ニ絃樂器風樂器及金石等ノ樂器ヲ調シ、之ニ依傍シテ太鼓ヲ鳴シ、以テ句節ヲ爲スニ過ギズ、樂師指令スレハ衆樂人別ニ音律ニ合フヤ否ヤヲ顧ミテ、唯歌曲ニ依傍シテ或ハ喇叭或ハ「ゼンガル」或ハ「ゴン」或ハ「タンタン」ノ樂器ヲ調シテ以テ合奏シ、其聲喧譁人ヲシテ殆ンド聾ナラシムルガ如キ者有リ、

予太古ニ溯テ歐洲音樂ノ起ル所以ヲ考フルニ、白哲人種ノ音樂モ亦初メハ唯句節ヲ制スルニ過ギザリシモ、審ニ之ヲ窮ムレバ、黒奴支那ト全ク其性質ヲ異ニス、歐洲音樂ハ殊ニ人ノ妄念切情ニ原クノ風アリ、而シテ踏舞ノ際ハ、音樂ノ調甚タ急激ヲ極ムト雖ヒ、黒奴支那ニ比スレバ、決

シテ中正ヲ失ハズ、音ニ中正ヲ失ハザルノミナラズ、夫ノ黒奴支那ニ比スレバ其調甚タ舒緩ナリ、

上古埃及ノ碑銘ノ圖畫ニハ、異様ノ態ヲ爲シテ歌ヲ謳フ者ノ像有リ、以テ歌謳ノ行ナハル、甚ダ盛ナルヲ明ニスルニ足ル、加之ナラズ、歐洲樂人ハ「アルプ」シ「タール」等音聲調和ノ樂器ヲ重シ、職トシテ之ヲ用フ、又

以テ黃色人種ノ音樂ト全ク其性質ヲ異ニスルヲ知ル可シ、  
又玆ニ白哲人種ノ音樂ト黃色人種ノ音樂ト、全ク相異ナルヲ明ニスルニ足ル可キ者アリ、請フ下文ニ之ヲ論ゼン、

黃色人種ハ半律ヲ用フル能ハズト雖ヒ、白哲種族ノ者ハ、耳ノ官能ノ更ニ穎敏ナルヲ以テ、音律ノ句節甚ダ接近スル者ト雖ヒ能ク之ヲ識別シテ之ヲ比較シ、都テ此類ノ音律ヲ擴張シテ、音律第一類中ニ列セリ、「サンスクリット」ノ書ノ最モ古代ニ溯リテ、且最モ信ヲ置クニ足ル者ニ就テ、印

度人ノ古代ノ音樂ヲ檢究スルニ其律蓋シ七有リ、而シテ各律皆半律有  
リテ、其數蓋シ二十二ノ多キニ至ル、但其間節ハ或ハ急ナル有リ、或ハ緩  
ナル有リテ、決シテ相均シカラズ、

獨リ印度ノミ然ルニ非ズ、ペラスシヤ人ノ如キモ、亦二十四律有リ、亞刺伯  
人ハ十七律有リ、ペラスシヤノ法モ亦八律ニシテ、其中ノ半律ヲ合シテ  
二十四律ヲ成ス、其後ニ至リ、希臘音樂一變シテ復タペラスシヤノ舊ニ  
非ズ、是ニ於テ律數更ニ細微ニシテ、所謂「デアトニク」正音半音ヲ以テ法  
ナル者出デ、正音半音其數極メテ稠密ニ赴ケリ、即チ我カ中古ノ音律  
及ビ藝術中興ノ時ノ音律ハ、正ニ是ヨリ起レリ、蓋シ此ヨリ前ニ在リテ  
ハ、音ヲ分ツニ常ニ四數ヲ以テシテ、即チ音ノ高下四ト四ト相連ナリ、號  
シテ「テトラコルト」ト云ヒシモ、是ニ至リ又變ジテ音ヲ八數ト爲シ、所謂  
「オクタトプ」ヲ成スコトヲ得タリ、四ト四ト相連ナルノ律ヲニ變ジテ半音

ヲ用ヒ、以テ本然半律ノ制ヲ定メシハ、是レ乃チ「デアトニク」ノ法ニ循フ  
所ナリ、

然リト雖モ、希臘ノ音樂ハ別ニ一種ノ法則ヲ成スコト能ハズシテ、常ニ歌  
曲ニ依傍シテ、僅ニ以テ樹立スルコトヲ得ルニ過ギズ、蓋シ其旨趣本ト詩  
韻ノ節ヲ著ハシ、歌フ者ノ音ニ配スルニ在リテ、音樂ハ畢竟詩ノ性質ノ  
大體ヲ表發スルニ止マル者ナリ、

院劇ノ如キモ、優人各々固有ノ音調ニ依リテ歌ヒ、以テ其打扮スル所ノ  
人物ノ性質ヲ表發スルヲ以テ常ト爲シ、是ヲ以テ其蒙ムル所ノ假面モ、  
或ハ憂憤ナルアリ、或ハ開濶ナルアリ、若クハ莊厲畏ル可キ者アリ、若ク  
ハ順柔愛ス可キ者アリ、是ノ故ニ凡ソ事皆ナ時ヲ量リ勢ヲ審ニシ、一定  
ノ法ニ由ラザルヲ得ズ、

曩キニハ優人其打扮スル所ノ人物ノ性質如何ヲ顧ミズ、各々固有ノ音

調ニ依リ、唯己レノ意ニ適フ所ニ隨テ其動靜ヲ爲スヲ得タリト雖モ、爾後院劇ニ不變ノ大則ヲ定ムル此ノ如キニ至リ、乃チ放肆據ル無キノ風ヲ改ム、

於是乎音樂既ニ一變シテ支離紛雜、人々各々異ナルノ弊ヲ更メ、始メテ不易ノ法ヲ立ツル、ヲ得タリ、故ニ其法タル、速カニ之ヲ觀レハ紛錯ニシテ容易ニ指數ス可ラサルガ若シト雖モ、善ク其本ヲ推シテ之ヲ大別スレバ左ノ三法ノ外ニ出デズ、曰ク「リシヤン」曰ク「プリシヤン」曰ク「ドリヤン」是ナリ、而シテ「リヂヤン」ハ痛悼悲嘆ノ情ヲ表シ、「プリシヤン」ハ慷慨悲憤ノ意ヲ發シ「ドリヤン」ハ第一ニ安靜幽閑ノ態ヲ形ハシ、次キニ勤儉勇武ノ美德ヲ顯ハス、乃チ孝子慈孫ノ父祖ノ喪ヲ哀ミ、婦妻ノ良人ノ遠征ヲ怨ムノ意ハ、第一法ニ由リテ之ヲ表シ、烈士ノ義ニ勇ミ、忠臣ノ冤ヲ憤ルノ情ハ、第二法ニ由リテ之ヲ發シ、隱士ノ麋鹿ヲ友トシテ、悠然生テ

樂ミ、君子ノ情ヲ制シ慾ヲ塞ギ、勇士ノ奮闘快戰スルノ狀ハ、第三法ニ由テ之ヲ著ハス、優人蒙ムル所ノ假面モ、亦右三法ニ準據シテ之ヲ定ム、故ニ其容態ニ三アル、予ガ既ニ之ヲ記スルガ如シ、右第三法ノ如キハ、管ニ音樂ニ於テ良法ト爲シテ殊ニ之ヲ用フルノミナラズ、築造術ニ在テモ亦之ヲ重ンズルヲ甚シトス、

古ニ在テハ講讀論談ヲ問ハズ、必ズ音律ニ由テ其句節ヲ制スル者ト爲ス、故ニ講讀論談スルニ當リテハ、音律ニ配シテ發聲ノ舒疾ヲ定メ、音調ノ高下ヲ和ゲ、各自固有ノ方便ヲ以テ苟モ適宜取捨ヲ加フル能ハズ、今ノ人若シ此ノ如ク音律ヲ嚴酷ニシ、樂師ヲ痛ク拘束シテ、各々其長ズル所ニ隨テ自ラ恣ニスルヲ得ザルヲ見ハ、應サニ忽チ厭嫌シテ聞クニ堪フルヲ能ハザルベシ、蓋シ古者一ニ音律ニ配合シテ句調ヲ和スルノ風盛ニ行ナハレ、音樂ト說辯トニ論無ク皆十之ニ率由スルヲ以テ常ト

爲シ、音樂ヲ奏スルノ始メヨリ、其終ニ及ブ迄、音調齊一ニシテ幽渺ノ音  
 チ發スル無キモ、人皆ナ聞テ倦ム者アルコト無シ、古ノ人皆ナ以爲ラシ、院  
 劇ヲ演シ詩歌ヲ調スルニハ、夫ノ齊一ニシテ變化無キノ音調ニ非レハ、  
 他ニ用フ可キ者無シト、是ニ於テカ音樂改正ニ志有ル者、アレキサント  
 レン<sup>十二</sup>ノ綴字ヲ以テ<sup>十二</sup>ヲ調スルニ、此ノ如キ音調ノ人心ヲ感動スルニ  
 足ラザルヲ知リ、此音調ヲ用フルノ制ヲ更メ、別ニ精巧ノ音律ヲ作り、大  
 ニ音樂ノ體面ヲ改ム、此事タル今ヲ距ル蓋シ邈焉遼遠ノ世ニ非ズ、僅々  
 五十年ノ星霜ヲ經閱スルニ過ギズ、  
 古ハ詩ノ體ト雖モ、必ズ音律ノ調ニ配セザル可ラザル者ト爲ス、予希臘  
 エヒールノ曲本ヲ視ルニ、其篇章タルヤ、各々詩句ノ數ヲ同クシ、又對句  
 ナ以テ照應シ、又其言辭ノ彙類ヲ均ウス、昔者此ノ如キ音調ノ行ナハル  
 ル、蓋シ此ノ如ク其レ盛ナリ、希臘古書ニ音律ヲ論ズル者アリ、其何人ノ

手ニ成ルヲ知ラズ、嘗テ<sup>十二</sup>ンサン氏取テ之ヲ國字ニ翻譯セリ、今此書ニ  
 由レハ、希臘人ハ「メロデー」<sup>後ニ詳</sup>ナリ<sup>ナリ</sup>ヲ分テ二ト爲ス、一ハ散文體ニシテ、段  
 落變換スル毎ニ句調ヲ高下スルナリ、二ハ詩文體ニシテ、適宜聲音ヲ調  
 和スルナリ、

凡ソ樂人タラン者、歌曲ヲ作りテ音調謬戾無カラシムニハ、衆音各々相接  
 スル所ノ自然ノ關係ヲ審ニシ、又音聲固有ノ性質ヲ明ニスルヲ以テ足  
 ル可キナリ、夫レ人情ト音聲トノ相關係スルヤ、甚タ密着シテ離レズ、故  
 ニ思切ナレハ聲必ズ激昂シ、否ラザレハ其聲平易ナリ、然ルチ古ハ毫モ  
 此ニ意ヲ留ムル者莫シ、蓋シ古ノ音律ヲ修ムル者ノ意ヲ察スルニ、人々  
 言語ヲ以テ其思想ヲ發露スルモ、歌曲ニ調和シテ之ヲ發露スルモ、其法  
 毫モ異ナル無シト爲セリ、且ツ古人ハ唯音律ヲノミ事トシテ、思想ノ緩  
 急ニ依リ、音律ヲ調和スルヲ顧ミズ、此事ノ如キ實ニ音樂ニ大關係有ル

者ナリ、蓋シ希臘人ハ固ヨリ技藝ニ長ズト雖モ、獨リ音樂ニ至リテハ、未  
 ダ其精ヲ究ムト謂フ可カラズ、

古昔音樂ヲ論ズル者ノ言ニ曰ク、凡ソ音律ナル者ハ或ハ甲ノ音ト乙ノ  
 音トヲ合セ、或ハ丙ト丁トヲ和シテ、音聲ヲ調スル所ノ諸法ナルノミト、  
 彼レ音律ハ初メ心ノ理ニ原テ成ルヲ知ラズ、妄ニ云フ、吾人音樂ヲ聞テ  
 或ハ喜ビ或ハ怒ル所以ノ者ハ、乃チ單ヘニ甲乙音聲ヲ調和シ、之ヲ音律  
 ニ配スルノ致ス所ナリト、笑ツ其レ見ルノ淺キヤ、故ニ彼レノ意曰ク、音  
 律トハ其旨趣全ク人心ヲ感動スルニ足ル可キ機械ヲ備フル者ノ謂ナ  
 リ、故ニ音律一タビ動テ心始メテ之ニ應シ、或ハ喜ビ或ハ怒ル、是ヲ以テ  
 音律ハ主ナリ、心ハ客ナリト、其實決シテ然ラズ、音樂ノ始メテ起ル所以  
 ナ明ニセバ、音律豈ニ人心ヲ感動セシムルノ淵源ニ非ズシテ、人心反テ  
 音律ヲ成スノ本原ナリ、何ゾヤ、曰ク初メ人心ニ思フ所有リ、之ヲ語ニ露

ハシ之ヲ歌ニ發シ、而シテ后チ其語音ヲ正シ、其句讀ヲ調シテ始メテ音  
 律ナル者作レリ、然ラハ則チ彼レノ音樂ヲ論ズルヤ、本末ヲ轉倒スルノ  
 甚キ者ト謂フ可シ、

音律若シ果シテ纔カニ音ト音トヲ調和スルヨリ成ル者トセハ、何ヲ以  
 テ國風ヲ化シ、名教ニ功アルヲ得ンヤ、然レモ其本ト人心ニ原ク者ナル  
 ニ由リ、其功ノ及フ所此ノ如ク其レ大ナリ、要スルニ人初メ思ヒ心ニ發  
 シテ后チ之ヲ音律ニ由テ形ハシ、以テ他人ニ傳ヘ、之カ心ヲ感ゼシムル  
 ニ過ギズ、此ニ由テ之ヲ觀レハ、人々音樂ヲ論ズルニ當リ、古ハ則チ外物  
 ナ以テ本トシテ、人心ヲ以テ末ト爲ス、今ハ則チ人心ヲ以テ本原ト爲シ  
 テ、外物ヲ以テ功果ト爲ス、吾人輒近諸藝術ノ一變スル所以ヲ知ラント  
 欲セバ、一ニ意ヲ此ニ留メザル可ケン哉、

希臘ニ於テハ其音律尤モ備リタルノ世ト雖モ、之ヲ今日精妙ナル者ニ

比スレハ、實ニ霄壤ノ差無キ能ハズ、樂師アリピユス氏ノ譜標ヲ見ルニ、其樂器ニ配スルキト、歌曲ニ調スルキトニ論無ク、僅カニ音律ニ三、オクタブト一律アルノミ、而シテ「オクタブ」ト雖ヒ、其中ノ一ハ實際曲ヲ演スルニ至リ、未タ之ヲ用ルノ術ヲ知ラズ、往古音樂ノ振ハサル以テ見ル可シ、

人予ノ古ヘハ音樂振ハズト云フヲ難シ、或ハ云ハン、希臘アラトシハ殆ント五、オクタブヲ以テ譜ヲ成セリ、豈ニ備ハルニ非ズ哉、ト然レヒアラトシ自ラ言ヘル有リ、曰ク我カ譜タルヤ、未タ以テ人ノ耳ニ觸レテ之カ心ヲ動スニ足ラザル者アリト、然ラハ則チアラトシト雖ヒ、自ラ我カ譜ヲ視テ事ニ行フ可ラサル空想ト爲ス、推シテ知ル可シ、是ニ由レハ希臘人ハ音律ヲ調理スルノ念ノ發暢スル、猶ホ未ダ今日吾人ノ如クナラズ、是ヲ以テ衆音ヲ調和シテ合奏スル「アルモニ」法ノ如キ、彼レニ在テ

ハ未タ甚ク備ラズ、寢ク今日ニ至リテ精密ヲ加ヘ、之ヲ用フル日ニ月ニ盛ナルヲ致セリ、希臘人ハ樂器ヲ以テ歌曲ニ依傍スルキニ非ザレバ、衆音合奏ノ音律ヲ用フルヲ無シ、

希臘樂人ハ其郷土ヲ羅馬人ニ奪ハル、後、移リテ意答利ニ住シ、其技ヲ伊人ニ傳フト雖ヒ、爾後音樂ノ技毫モ進ム所有ラズ、其後中古ノ初代ニ及テハ、人皆ナバイヤン宗門ヲ排斥シ、并セテ其技術ヲモ一切厭忌セリ、希臘人ハ固ヨリバイヤン宗徒タルヲ以テ、希臘音樂モ亦頓ニ人ノ拋擲スル所ト爲リ、全ク其迹ヲ滅スルニ至レリ、

夫ノ佛帝查耳曼ハ夙ニ音樂ノ國俗ヲ化シ、風教ヲ改ムルニ須要ナルヲ悟リ、潜心默思以テ之カ衰頹ヲ挽回センコトヲ計ルト雖ヒ、民舉テ殺伐ヲ旨トシ、武ヲ尙ビテ、時會甚ク宜ラズ、卒ニ事就ラズシテ崩ズ、其後神學校ノ徒弟、主トシテ音樂ヲ修メ、僅カニ以テ存スルコトヲ得タリ、



希臘音樂ハ大抵算數ノ理ニ由ル者多シ、是ヲ以テ學士輩音樂ヲシテ一ニ數理ニ由ラシメ、樂ヲ奏スル者ヲシテ固ク規矩ヲ履マシメ、秋毫ノ差アルヲ許サズ、且便宜音調ヲ變化スルヲ禁ズ、故ニ音樂ハ此輩ノ翫弄スル所ト爲リ、其譜標甚タ異様ニシテ、貫珠ノ譜アリ、十字架形ノ譜アリ、楕圓ノ譜アリ、菱形ノ譜アリ、而シテ樂人ヲシテ決シテ此藩籬外ニ出テ、音樂ヲ奏スルコト能ハサラシム、規矩ヲ以テ音樂ヲ拘束スル奚ソ其レ甚キヤ、

疇昔人々音樂ノ法ヲ討究スル、甚タ勉メタリト雖ヒ、未タ鑄録ノ得ル所有ラズ、寢々降テ十七世期ノ初メニ及ヒ、適宜正音ト半音トヲ以テ音樂ヲ調スルノ風行ナハレ、始メテ「ギアトニツク」法出テタリ、而シテ「ギアトニツク」法ハ方今吾人ノ殊ニ重用スル所ノ者ニシテ、此法ノ出ルヨリ音律遽ニ進ミ、日ニ精妙ヲ極メ、月ニ完備ニ赴クノ勢有リ、

凡ソ「メロヂ」ノ法此法ハ「アルモニ」ノ法ト全ク相反シ、決シテ衆音ハ直情並ビ發セズ、順次聯續シテ調ヲ爲ス者ヲ謂フ、徑發スルニ宜シク、内ニ思有テ即チ之ヲ外ニ形スニ甚タ適スル者ナリ、故ニ人文開ケザルノ時ヨリ、此法獨リ先ツ行ナハル、「リキコ」猶ホ夫ノ畫學ノ進マザル昔日ニ在テ、獨リ圖野ノ一法用ヒラル、ガゴトシ、是レ他無シ、「メロヂ」ト圖野ノ二法ハ、甚タ平易ニシテ學ヒ易キガ故ナリ、且ツ夫レ音律未タ明カナラザルノ時ニ當リ、獨リ「メロヂ」法ノ行ナハレシハ、其間蓋シ久シ、爾後「メロヂ」ハ音樂院劇ヲ演スルノ時ニ際シ、數多ノ樂人隊ヲ成シテ之ヲ調和スルニ由リ、其法漸ク精妙ヲ極メ、其音愈々幽微ニ涉リ、聞ク者ヲシテ快ト呼バシムルニ至レリ、初メ「メロヂ」ヲシテ此域ニ達セシメタルハ、意答利ノ樂人與カリテ力アリ、是ニ於テカ意答利樂人ハ自然「アルモニ」衆音ヲ調和シテ并ビ發スル者ヲ云フ、ノ調ヲ發暢スル、其功大ナリト雖ヒ、本ト「アルモニ」ヲ用フルハ、其素志ニ非ズ、即チ意答利樂人ノ其「アルモニ」ヲ視ル

ヤ、僅カニ「メロヂ」ヲ補フ者ト爲スニ過ギズ、是ニ於テ院劇樂隊歌曲ヲ演スレハ、又之ニ依傍シテ歌フ者アリ、故ニ遽カニ之レヲ聞ケバ、衆音調和シテ自然「アルモニ」ノ調ニ合フカ若キ者アリト雖モ、究竟「アルモニ」ノ調若シ本然ノ旨趣ニ出デザルモ、ハ「メロヂ」天ニ行ハル、ニ至ラバ、忽チ痠痺シテ其勢「メロヂ」ノ奪フ所ト爲ルヤ必セリ、

意答利ノ樂師ギユグリエルミバエシエロシマロザノ輩ハ、心ヲ專ニシ力ヲ致シテ以テ「アルモニ」ノ調ヲ擴張センコトヲ欲セリ、意答利人ハ天稟音樂ニ精巧ナル者ナリ、然リ而シテ未タ心理ヲ審ニシテ以テ音樂ヲ制スルノ必須タルヲ知ラズ、夫レ人心ハ其動靜決シテ放恣法無キ者ニアラズ、必ズ一定不易ノ法ニ由ル者ナリ、凡ソ事物皆「アルモニ」ノ理アルハ蓋シ人心既ニ此理アルニ由ル、意答利樂人ハ「アルモニ」ノ法ヲ以テ纒カニ「メロヂ」ノ高下ヲ節シ、之カ變化ヲ和スルノ法ト爲シ、以テ音樂ヲ調ス

ルコトヲ欲スト雖モ、未タ「アルモニ」ニ由テ以テ内心ノ感動ヲ表發スルヲ求メズ、抑モ「アルモニ」ノ法ハ「メロヂ」ト俱ニ院劇ノ調ニ配スルコトヲ得可シ、而シテ意答利ノ樂人ハ此理アルヲ想ハズシテ、獨リ「メロヂ」ニ非レハ、院劇ノ調ニ配スル能ハズト爲ス、夫レ「メロヂ」ノ法ハ人ノ思想ノ面色ニ形ハレテ甚タ親易キ者ヲ表發シ、人ノ容易ニ判別ス可キ者ヲ露洩スルニ過ギズ、然リ而シテ人ノ内心ニ發シ、隱微ニシテ能ク形容ス可ラサル者ノ如キハ、夫ノ區畫狹隘ナル豈ニ「メロヂ」法ノ能ク表發ス可キモノナランヤ、此ノ類ニ至テハ、獨リ「アルモニ」ノ法ノミ、其微妙ノ者ヲ能ク寫スヲ得可キナリ、故ニ「アルモニ」ハ人心ノ幽微ニシテ殆ンド窺フ可ラザル變動ヲ發露スルニ方リ、之ヲ「メロヂ」ニ比スレバ、其調更ニ低クケレモ、而モ其遠キニ及ブコトハ「メロヂ」ノ能ク及ブ所ニ非ズ、

「アルモニ」ハ人ヲシテ近クハ當下現前ノ實景ヲ觀、遠クハ之カ聲音ヲ聞

カシムルノ二益有リトスグリクエードンモザルベトバンノ如キ著名ノ作者ガアルモニノ功用ヲ論ズル蓋シ上文ノ如シ、意答利樂師ノ音樂ヲ論ズルハ未タ此ノ如キノ高妙ニ至ラズ、其術タルヤ甚タ淺薄ニシテ、音樂ヲ以テ人心ヲ感動セシムルヲ求ムル能ハズ、是ヲ以テ意答利人ハ「メロヂ」法ニシテ、太々規矩ニ拘束セラル、者アルニ當リ、之ヲ開舒シ、少シク放肆ナラシメンカ爲メ、特ニ「アルモニ」ヲ用フルニ止マル、故ニ「アルモニ」ノ「メロヂ」ニ於ケルヤ、恰モ彩色ノ濃薄ニ偏スル者ヲ調和シテ、人目ニ快ヲ覺エシムルカ若キ者アリ、何トナレハ、今「アルモニ」ノ法タルヤ、メロヂノ其調或ハ高キニ失シ、或ハ下キニ失スル者ヲ節制シテ、以テ人ノ耳目ヲ喜ハシムルニ過ギザレバナリ、故ニ曰ク意答利樂師ノ「アルモニ」ノ法ヲ待ツヤ、畫工ガ彩色ノ遠ニ濃ク遠ニ薄キ者ヲ塗抹スルニ用フル夫ノ模糊色ト奚ソ異ナランヤ、

是ニ由テ之ヲ觀レバ、所謂「アルモニ」ノ法ヲ發明シタル者ハ、決シテ之ヲ意答利ニ就テ求ム可ラズ、意答利音樂ノ作者ハ、固ヨリ創メテ院劇樂隊ノ制ヲ定ムト雖モ、初メハ樂隊ヲ以テ院劇ニ須臾モ離ル可ラザル者ト爲シタルニ非ズ、纔ニ以テ院劇ニ補足ノ者ト爲スヲ免レズ、故ニ樂隊ノ其本職ヲ舉グルニ至リタルハ、偶然ノ爲メニ出テ、意答利音樂作者ノ力ニ由ルニアラズ、是ヲ以テ始メテ院劇樂隊ノ性質ヲ審ニシ、之レヲシテ當然ノ務ニ就カシメタルハ、乃チ日耳曼樂師グリユクナル者ヲ開テ殆ントト他ニ其人無カル可シ、グリユクハ其ノ院劇ヲ演スルニ當リ、樂隊ノ外更ニ之ニ依傍シテ樂ヲ調スルノ技ヲ設ケ、更ニ樂隊ガ奏スル所ノ意ヲ申明ス、イフイシエニ、アン、トリドノ曲本ハグリユクノ作ナリ、而シテ其篇中ノ一段ハ樂人ノ屢々引稱スル所ニシテ、此曲本ノ未タ全ク「アルモニ」ノ法ニ適ハザルハ、人ノ能ク知ル所ナリ、其一段ヲ演スルニ當リ、オレス

トナル者出デ、謠テ曰ク、我が心方サニ安靜ナリト、而シテ其之ニ依傍スル所ノ音調ハ甚ダ喧噪ヲ極ム、乃チ觀ル者グリコクノ此段ヲ編スルニ、音調ノ牴牾スルヲ誹リテ曰クオレストノ言聞ク可ラズト、乃チ佛然厲聲シテ曰ク、我が心安靜ナリト、口ニハ安靜ヲ云フモ、其調ハ激切ナリ、吁詎庸ア人ヲ騙クヤト、グリコク氏ノ作、未ダ「アルモニ」ノ本旨ニ適ハザル以テ見ル可シ、エドソナル者アリ、グリコクト略ボ世ヲ同クス、亦グリコクノ志ヲ繼テ音樂ヲ一變セソトテ勉ム、

其後モザル氏ニ至リ、辛ウシテ音樂改正ノ業ヲ成ス、是ヨリシテ「アルモニ」法ノ用フ可キヲ明ニシ、樂人ヲシテ院劇ヲ演スルニ、斷然「アルモニ」ノ法ニ率由セシム、即チ院劇ヲ演スルニ當リ、樂隊必ズ之ニ與カリ、以テ俳優打拵スル所ノ人物ノ性質ヲ表發シ、又之ガ性質ノ長短ヲ形容ス、是レ「アルモニ」ノ功ニ職トシ之レ由ル、夫レ「アルモニ」ノ法ハ、モザル氏ノ手ヲ

經テ始メテ精選シ、人ノ意想ヲ形容ス可キ本然ノ言辭ト爲リ、隱密ニシテ解ク可ラザル者ヲ釋明スルノ言辭ト爲リ、又譬ヲ以テ解ク可キノ隱語ト爲リ、又心中窺測ス可ラザルノ機密ヲ發洩ス可キノ言辭ト爲レリ、「アルモニ」ノ功ヤ誠ニ大ナリト謂フ可シ、

其レ此ノ如ク人ノ思想ヲ表發シ、又之カ心内ノ機密ヲ形容シ、之カ精神ノ動作ヲ寫シ出スニ至テハ、遙カニモザル氏ノ右ニ出ツル者アリ、是レ何人ヅヤ、曰ク日耳曼樂人ベトウアンノ如キ其人ナリ、抑々ベトウアンノ此技ニ達スルヤ至レリ盡セリ、孰レカ得テ加フ可ケンヤ、今日音樂ノ技ハ他ノ百般技藝ト均ク亦人々心性上ノ發動ニ原テ、之ヲ制定スルニ至レリ、而シテ人々心性上ノ發動ハ、古ヨリ今ニ及ンデ息マザルノミナラズ、人智愈々啓發スルニ至リテ、應サニ益々熾ナルヲ加フベシ、而シテ「アルモニ」ノ法モ亦隨テ漸ク進歩シ、既ニ「メロヂ」ト並ビ用ヒラル、トテ致

セリ、音ニ「メロヂ」ノ法ト並ヒ用ヒラル、ノミナラズ、果シテ一大樂師ノ言ノ如クナラバ、將ニ獨リ「アルモニ」ノ法行ナハレテ「メロヂ」ハ廢棄セラレントス、一大樂師トハ即チウ「ギエル」氏ヲ謂フ、ウ「ギエル」氏ノ人ト爲リヤ、耳聰ニシテ樂技ニ長シ、加フルニ舊說固俗ヲ破ルノ斷アリ、然レヒ爲メニ往々謬妄ニ陷ル爲シトセズ、其ノ將來ノ音樂ヲ論ズルヲ見テ知ル可シ、然レヒ彼レハ巧樂ノ士ナリ、故ニ唯「アルモニ」ヲ改正スルノミニテ、更ニ意ヲ「メロヂ」法ノ精選ニ用ヒザルキハ、音樂ノ技ヲ傷害シテ全カラサラシムルヲ知ルヲ得ン、若シ其レ果シテ此ノ如クナラハ、意答利樂人ノ一偏ニ僻スルト、其害奚ソ輕重ノ差アラシク邪、何ヲ以テ然ルヤ、曰ク彼レハ「メロヂ」ノ法ニ偏シ、而シテ此レハ「アルモニ」ノ法ニ僻スルニ至ル可ケレバナリ、意答利樂人ハ既ニ唯「メロヂ」ノミヲ貴ビテ、今ハ又唯「アルモニ」ノ法ノミヲ重ンズ可キノ理アラシクヤ、人苟モ音樂ノ本原ヲ明ニシ、

以テ之ガ功用ヲ審ニセハ、即チ右二法ノ并ビニ貴重ス可キヲ知ルニ於テ、亦何ノ難キヲカ之レアラシクヤ、予後章ニ於テ詳ニ之ヲ論ゼントス、

○第二章 音樂ハ學ト術トノ二科ニ涉ルヲ論ス ○音響ノ意義音樂ハ學ト術トノ二科ニ涉ルヲ、猶ホ建築術ト異ナル無シ、且其音律ノ如キ算數ノ理ニ出デザルハ莫シ、而シテ樂人之ヲ講究スルニ、往々算數ノ理ヲ外ニシテ顧ミザル者アリ、然レヒ、彼レ若シ全ク棄テ、顧ミザルキハ、音樂ノ何ニ由テ原クヤ否ヲ知ル能ハザルベシ、

人或ハ云フ、音樂ハ音聲ヲ撰擇シ、又之ヲ調和シ、然シテ後ニ適合スルノ術ナリト、若シ果シテ然ラハ豫メ音聲ノ意味ヲ明ニシ、甲乙音聲ノ關係ヲ審ニシ、音聲ヲ撰擇シ、又之ヲ調和シテ適合スルノ主意有ルヲ要ス、今音聲ノ意義ヲ知り之カ關係ヲ審ニセンニハ、潛心焦慮シテ音樂ノ原理ヲ考究スルニ非レハ能ハズ、而シテ爾カク潛心焦慮シテ音樂ノ原理

ヲ考究スルハ、即チ音樂ノ中ニ就キ、殊ニ學科ノ部ニ屬シ、又音聲ヲ撰擇  
調和シ、又適合スルハ則チ之ヲ技藝ノ部ニ屬スルナリ、  
以上學者ノ論述スル所ハ、未タ以テ音樂ノ奧義ヲ窮メタリト爲スニ足  
ラズ、請フ下文ニ其由ヲ陳ヘン、

論者既ニ音聲ノ意味ヲ明ニス可シト云フト雖モ、本ト音聲ニハ自然一  
定ノ意味アル乎否ヤ、予當サニ之ヲ論ズベシ、彼レ又甲乙音聲ノ關係ヲ  
審ニスベシト云フト雖モ、所謂甲乙音聲ノ關係トハ、其義何ノ謂ナルヤ  
否ヤ、予又當ニ之ヲ明ニスヘシ、

夫レ音聲ハ我カ意匠ノ如何ニ由テ意義ヲ生ズル者ニシテ、初メヨリ自  
然ニ意義有ルニアラズ、此理甚ク明白ニシテ、予ノ喋々スルヲ待テ後チ知  
ラザルナリ、此ニ由テ之ヲ觀レハ、音聲ハ全ク人ノ其内心思想スル所ニ  
隨ヒ、始メテ意義ヲ生ズルナリ、何ヲ以テ然ルヤ、曰ク心憤ルルハ音聲自

ラ激切ニ喜ブキハ自ラ爽快ナラザルヲ得ザレバナリ、

諸音聲ノ關係モ亦自然ニ有ル可キ者ニ非ズ、人々固ヨリ肆ニ諸音聲ヲ  
接合シ、適宜ニ甲ト乙トチ合セ、丙ト丁トチ和スルヲ得可シト雖モ、或ハ  
聞テ快ヲ覺ユル者アリ、或ハ憤ヲ發スル者アリ、是ニ至リ始メテ音聲ニ  
關係ヲ生ジ來ル者ニシテ、初メヨリ一定不變ノ者アルニアラズ、夫レ音  
樂ハ技術ヲ以テ之ヲ視レハ、人ノ耳ヲ喜バシムルヲ以テ、特ニ其首ト爲  
ス、故ニ音ノ美ナル者ハ之ヲ取リ、惡キ者ハ之ヲ去ラザル可ラス、

予今技術上ヨリ音樂ヲ論究スルニ、先ツ須ラク三様ノ法ニ由リテ之ヲ  
説明スベシ、三様ノ法トハ何ツヤ、曰ク人身窮理學、曰ク物理學、曰ク數理  
學是ナリ、左ニ漸次音聲ノ意味ヲ論究セントス、

凡ソ人ノ感覺ニ觸ル、所ノ者ハ、皆チ腦髓ニ感シ、又神經ニ由テ一個若  
クハ數個ノ經絡ニ反動スルヲ以テ常ト爲ス、之ヲ命ケテ反動ノ作用ト

謂フ、是レ人ノ物ニ感ズルノ大體ニシテ世ノ普ク知ル所ナリ、  
 初メ感覺ニ動テ腦髓ニ感シ、移テ筋肉ニ反動スルハ、則チ其事タル人生  
 中尤モ欠ク可ラザル者ニシテ、人ノ榮養ニ功有ル甚ダ大ナルナリ、而シ  
 テ膏ニ筋肉ニ反動スルノミナラズ、又一切諸機關ニ其影響ヲ及ボス、故  
 ニ心臟血脈消化機ノ如キ機關ハ、皆チ感覺反動ノ功ヲ受ケテ以テ其作  
 用ヲ爲ス、即チ人々物ニ觸レテ少シク心ニ感ズレハ、必ズ血液ノ循環ヲ  
 促シ、一舉ニ心臟ニ其餘勢ヲ及ボシ、以テ之レカ排洩ヲ疾クス、然レモ物  
 ノ我カ心ニ感シテ、上文ノ如キ功無ク、反テ我チ害スルコトアリ、此レ絶エ  
 テ無クシテ希レニ有ル所ナリ、譬ヘバ凶報達カニ到リ、慄慄怖懼、心悸シ  
 胸動キ、血管ノ流通ニ窒塞ヲ來スノ類是ナリ、然レモ物ノ我カ身ニ觸ル  
 ヲ、穩靜ナレバ、神經ニ感シテ他ノ官能ニ其澤ヲ及ボスヲ以テ常ト爲  
 ス、

夫レ人其心一タビ外物ニ感ズレハ、斯ニ慮起リ又情發ス、既ニ慮起リ情  
 發スレバ、之ニ關係スル所ノ者一トシテ其心裏ニ發セズンハアラズ、初  
 メ物我レニ觸レテ思内ニ發シ、思内ニ發シテ外之ヲ四肢ニ形ハス、此ノ  
 如クスルコト循環窮リ無ク、知ラズ識ラズ卒ヒニ習ヒ性ト成リ、又精神ノ  
 不朽ヲ成ス、故ニ人々精神ノ不朽ヲ成スハ、乃チ物ニ觸レテ其心ヲ用フ  
 ルノ致ス所ナリ、世上ノ人身窮理ニ暗キ理學者ハ、此ノ如キノ理ヲ明ニ  
 セスシテ、妄ニ精神ノ不朽ヲ論ズ、吁其惑ヘルモ亦宜ナルカナ、  
 故ニ神經ノ作用ヲ爲スニ其法三アリトス、曰ク外物我レニ感シテ、毫モ  
 筋肉ト直接ノ關係無キ他ノ神經ニ傳ヘ、以テ喜怒哀樂ノ情生シ、是非善  
 惡ノ念發ス、曰ク凡ソ物一二ノ神經ニ並ビ動テ之ヲ四體ニ表發ス、曰ク  
 既ニ腦髓ニ感シ、反動シテ一若クハ二個ノ内臟ヲ刺衝ス、大抵神經ハ以  
 上三様ノ法ニ由テ其作用ヲ爲ス、神經ノ作用ヲ論ズル此ノ如キハ、誠ニ

當チ得ル者ト爲ス、然レモ神經ノ作用ハ必ズシモ其功均シク諸機關ニ及ブ能ハズ、或ハ其一機關ニ厚クシテ他ニ薄キヲアリ、豈ニ察セザル可ケンヤ、

以上論正スル所ハ音樂ト關係スル所有ルヤ否ヤ、將サニ左ニ之ヲ説カントス、

人々神經ニ感ズル所アレバ、必ズ我が機關チ動カシ、以テ其神經ニ感ズル所チ外カニ表發ス、夫ノ聲チ發スルノ筋肉モ、亦必ズ此理ニ由ラザルチ得ズ、故ニ神經感ズル所有レバ、此筋肉其影響チ受ケテ以テ聲チ發スルヲ自然ノ勢ナリ、夫レ人ト獸トニ論ナク、生チ覆載ノ間ニ寄スル者ハ、情其内ニ發スル有ラバ、或ハ手チ舉ゲ足チ搖カシ、或ハ喜悅ノ聲チ發シ、又ハ悲哀ノ音チ爲シ、以テ其想チ發露ス、故ニ其情如何チ判知センニハ、之ガ叫號動作チ聞知シテ以テ足ル、

エルベルト、スベンセルハ英人ナリ、夙ニ理學チ以テ鳴ル、嘗テ反覆考究シテ人獸發聲ノ理チ明ニス、其言ニ曰ク、凡ソ人畜音聲ノ調チ變化スル所以ノ者ハ、他無シ、外物其心ニ觸レテ情内ニ變リ、其功四肢ニ反動スルノ致ス所ナリ、故ニ獸畜ノ嗥號スルニ當テ其勢チ變化シ、人類ノ唱歌スルニ其調チ高下スルハ、毎チニ其時内ニ感動スル者既ニ變化シテ、知ラズ識ラズ自然之チ外面ニ表發スルナリ、是ニ由テ之チ觀レバ人ハ其聲チ以テ詳ニ其思想チ吐露スルヲ得ベシ、樂器ノ精巧ナル者ト雖モ惡ク能ク之ニ及バンヤ、其ノ然ル者ハ正ニ初メ外物神經ニ動テ筋肉ニ傳ヘ其間一定ノ關係有テ然カク發音ノ調チ變化スルニ及ブナリト、善イ哉スベンセルノ言ヤ、

然ラバ則チ人心感動スル所チ表發スルハ、既ニ神經ノ作用ト筋肉ノ作用トニ不易ノ關係アルニ由ル、是チ以テ吾人若シ目チ此ニ注グニ非レ



ハ、音樂ノ音聲ノ意義如何ヲ知ル能ハザルベシ、故ニ吾人日常其情ニ感ズル所ノ異ナルニ隨テ、又叫號ヲ變ヘ音調ヲ異ニシ、音聲ヲ易ヘ、内喜ベハ喜ブノ聲アリ、内怒レハ怒ルノ調アリ、此ノ如クスルノ久キ、卒ニ以テ常習ヲ成ス、是ヲ以テ人一ツビ他人ノ叫號スルヲ聞キ、其音調ヲ變ズルヲ知リ、其音聲ヲ易フルヲ覺ユルアラバ、必ズ内ニ自ラ省テ既ニ其心ニ動ク所ノ情ヲ回想シ、乃チ喜怒ノ情發セザルヲ得ズ、人々平素人身窮理ヲ考察シ、類ヲ推シ理ヲ窮ムルニ非レハ、此ノ如ク音聲ノ意義ヲ知ル能ハザル可シ、是レ豈ニ理ナラン哉、スメンセルノ言稍々事實ニ戻ルノ弊無キ能ハズ、且ツ其論ヤ高遠ニ失スルヲ免レズ、

夫レ人喜ベハ必ズ喜ブノ音ヲ以テ之ヲ表發シ、怒レハ怒ルノ調ヲ以テ之ヲ表發ス、然ラバ則チ人ハ生ル、ノ初メヨリ情ニ感シテ想フ所アル毎ニ、特定ノ徵證ヲ以テ之ヲ表發スルヲ得可キコ昭々トシテ明ナリ、此

ノ如キ外ニ表發スル所ノ者ノ意義ハ、人皆ナ容易ニ之ヲ知ル、奚ゾスベシ、ンセルノ言ノ如ク經驗學識ヲ待テ后チ知ランヤ、是レ固ヨリ當ニ然ルベキ所ナリ、豈ニ怪ムニ足ランヤ、故ニ人若シ艱然トシテ怒ラハ、三尺ノ童子ト雖モ、其聲音相貌ヲ窺テ忽チ慄然恐懼措ヲ失フ可シ、奚ゾ熟慮シテ后チ彼レノ聲音相貌タル忿怒ノ徵證ナルヲ知ランヤ、禽獸ト雖モ猶ホ且感情ノ徵證ヲ悟ル、而ルチ況ヤ人ニ於テチヤ、

予人身窮理ヲ學テ后チ音聲ノ意味ヲ知ルノ謬妄ナルハ、既ニ已ニ之ヲ辯ズ、今猶ホ別ニ喋々スルヲ須ヒンヤ、請フ更ニ進テ重要ノ事ヲ論セン、スメンセル又曰ク、凡ソ神經ニ觸ル、所ノ者ハ皆チ發聲ノ筋肉ト發聲ノ機關トニ反動シテ、以テ音聲ヲ發シ、乃チ之ニ特別ノ性質ヲ生シ、而シテ此性質ハ人々自ラ其良智ニ問テ自然其意味ヲ覺ルアリ、或ハ平生ノ經驗アルニ由テ之ヲ知ルアリ、且其意味ハ甚ダ明瞭ニシテ、容易ニ之ヲ

辨シ、一目シテ其何タルヲ知ルト、

スベシセル氏ハ多ク類例ヲ引稱シテ其說ヲ主張ス、曰ク人々心ニ感動スルノ異ナルニ隨テ、或ハ音聲ノ發出ヲ異ニシ、或ハ音聲ニ清濁ヲ生シ、或ハ音響ニ強弱アリ、或ハ音調ニ高下アリ、或ハ句節ニ長短アリ、或ハ發音ニ疾舒アリテ、以テ其感動スル所ヲ發洩スト、今中心感動スルガ爲メニ、此ノ如ク音聲ニ變調ヲ生シ來ルハ、是レ正ニ歌曲自然ノ常ニシテ、尋常言辭ノ上ニ在ラズト雖ヒ、人其心ニ痛悼ノ念ヲ發シ、若クハ愉快ノ意ヲ覺ユルニ於テハ、自然稍々音調ヲ變ゼザルヲ得ズ、故ニ歌曲ハ必ズ其調ヲ高ウシテ、此意念ヲ表發スルニ過ギズ、是ヲ以テ歌曲ノ本質ハ、人々ノ思想ヲ寫出シ、之ヲ擴張シ、又之ヲ調和スルニ在リ、

音調變化ノ理、更ニ之ヲ明ニセントス、夫レ物我レニ感ズレハ則チ筋肉動テ體力充實スルヲ以テ常ト爲スト雖ヒ、亦往々然ラザルヲ有リ、人或

ハ憤怒シ、或ハ戰慄シ、或ハ期望シ、或ハ喜悅スルヲ良久クシテ、容態弛怠シ、毫モ體力充實スルヲ覺エザルヲアリ、故ニ外貌ノ徵候ニ由レバ、都テ體力痿痺シ、支體震慄シテ、物ノ我ニ感ズル無キガ若シ、體力既ニ痿痺シ、四體既ニ震慄スルガ爲メニ、其影響口舌ニ及ビ、音聲ヲ顫動セシム、歌師ノ其技ニ長ズル者ハ、悲憤慷慨ノ段ヲ演スルニ方リ、往々此ノ如キ音調ヲ以テ聽ク者ヲシテ流涕襟ヲ霑サシムルノ良法ト爲ス、

「スタカト」ナル譜ノ如キハ、或ハ開濶活潑ノ歌曲ヲ奏シ、或ハ有爲果敢ノ狀態ヲ演スルニ甚ダ宜キ者ナリ、何トナレバ歌人其曲ヲ「スタカト」ノ譜ニ配スルキハ謳歌スル所ノ人物ノ氣象ニ合ヒ、勉メテ其聲ヲ張皇セザル可ラザレバナリ、夫ノ父子相親ニ、男女相憐ムガ如キ平易ノ情念ニ至テハ、歌フ者ニ於テ間斷甚ク稠密ナル譜ニ配シテ謳ヒ、以テ之ヲ表發シ、強ク聲ヲ張ルヲ要セズ、蓋シ句節近接スレバ聲ヲ張ルニ及バズ、修長

ナレハ張ラザルヲ得ズ、是ヲ以テ音聲ノ人ヲ感動セシムルニ、温和激切ノ異ナルアルハ、音聲ヲ皇張スルト否トニ由ル、夫レ音律ニ數種有リテ音調ノ變化ヲ規定スルハ、又上文ノ理ニ由ラズンバアラズ、即チ音律ヲ大別シテ二トナス、一ハ音調舒緩ニシテ「アルゴ」「アダシオ」ノ如ク、一ハ急切ニシテ「アンダント」「アレグロ」「フレスト」ノ如キ是ナリ、蓋シ歌人甲ノ音律ヨリ移リテ乙ニ變ジ、以テ聞ク者ヲシテ其心ニ感動スルノ情ヲ變セシムルヤ實ニ鮮少ニ非ズ、是レ人ノ皆ナ能ク知ル所ナリ、夫ノ「リトム」法ト雖ヒ、蓋シ上文音律ト均シク、人ノ感情ヲ變動セシムルガ爲メニ設クル所ノ者ナリ、凡ソ何ノ歌曲ト雖ヒ、音調一タビ高ク張リ、既ニ語氣ヲ強クスレバ、必ズ尋テ斷節ヲ存シ、少シク間斷無カル可ラズ、此句節能ク音律ニ協ヒ、能ク調和セバ、斯ニ「リトム」法ナル者出ヅ、

是ニ由テ之ヲ觀レバ、世ノ學者カ音聲ノ意味ヲ求メント欲シテ、其音聲

ヲ撰擇スルハ、夫ノ論者ノ言ノ如ク、決シテ之ヲ偶然ニ委ス可キニ非ズ、必ズ據ル所有ヲ然ルナリ、論者云フ、凡ソ音樂ハ僅カニ算數ノ理ニ由テ音律ヲ接合スル者ニシテ、全ク夫ノ幾何學ニ原ク所ノ殿廡ノ彫刻ノ如ク、又規矩ニ適ク所ノ圖書ノ如シト、奚ツ其見ノ謬レルヤ、然レヒ歌曲作者ハ夫ノ理學者ノ如ク、凡ソ音ノ其義ハ何ノ理ニ合フヤ否ヲ審ニシテ、后チ之ヲ撰擇スル者ニ非ズ、唯其耳ヲ喜ハシムル者ヲ取テ之ヲ調和シ、音律ヲ成スニ過ギズ、故ニ樂ノ譜ヲ調和スルノ前、豫メスペンセル氏ノ如ク、主トシテ此譜ノ本質ヲ解説スルコトヲ爲ス者ニ非ズ、音樂ノ學ト術トノ二部ニ別ル所以ハ、此ニ至リテ豈ニ別ニ求ムルコトヲ須ヒンヤ、故ニ作者ノ爲ス所ハ術ナリ、學者ノ事ト爲ス所ハ學ナリ、音樂ニ志ス者ハ宜ク此ニ意ヲ留ムベシ、

是ヲ以テ歌人ハ我が心ニ感ズル所ヲ表發スルヲ主旨トシ、當下口ニ發

スル所ノ音聲ヲ以テ歌ヒ、之ガ意義ヲ考察スルヲ事ト爲サズ、唯其音ノ宜キ者ヲ撰擇シテ之ヲ調スルニ止マル、理學者ノ如キハ否ラズ、本ト事ノ物理ヲ究ムルヲ以テ其主旨ト爲スガ故ニ、作者ノ心中知ラズ識ラズ音聲ヲ撰擇シシ所以ノ理ヲ求メザル可ラズ、作者ハ固ヨリ毫モ此ニ意ヲ用フル所無シ、然レヒ視テ以テ音聲ノ意味ヲ難ズルノ徒ナリト爲ス可ラズ、

然レヒ音樂作者ハ故ラニ算數ノ理ニ原テ樂ノ譜ヲ調スル者ニ非ズ、又學者カ異日音聲ノ發動ヲ測度ス可キノ器械ヲ發明スル日ヲ俟テ、始メテ音樂ヲ制スル者ニ非ズ、唯其耳ニ觸レテ快ヲ覺ユ可キ音聲ヲ撰擇シ、以テ歌曲ヲ編成スルヲ旨ト爲スノミ、學者ハ乃チ作者ノ知ラズ識ラズ自然算學ニ由テ音聲ヲ調和シ、以テ其耳ニ適スル所ノ音響ヲ表發スル所以ヲ證明スレバ足ル、又作者ハ聲音ノ人心ニ適スル所ノ者ヲ取ルヲ

旨トナシ、學者ハ乃チ其人心ニ適スル所以ノ理ヲ明ニシザル可ラズ、

○第三章 音聲ノ本質ヲ論ズ

エルモルト氏嘗テ音樂ニ就テ發明スル所有リ、予既ニ之ヲ論載ス、因テ今直チニ本章ノ問題ニ移ルコトヲ得ン

何チカ音ト謂フヤ、曰ク物ノ動テ我ガ耳朶ニ達スル者、之ヲ音ト謂フナリ、若シ其レ之ヲ知ラント欲セバ、請フ試ミニ糸ヲ張り、木片ヲ以テ之ヲ打ツ可シ、乃チ此糸ノ掉フコ愈々微ニシテ愈々急ナレハ、其音益々清クシテ高ク、而シテ其糸ノ掉フコ愈々大ニシテ愈々緩ナレバ其音益々濁テ低カラン、是ニ於テ乎、其音響ヲ調スルノ法ヲ得タリ、乃チ先ツ糸ヲ切斷シテ之ガ長短ヲ異ニシ、第一ヨリ漸ク第二ニ及び、第三第四ニ上ルニ隨ヒ、其調愈々高カク、以テ完備ノ音調ヲ集大成スルコトヲ得可シ、此ノ如ク音調ヲ和スルノ糸ハ、二三四五等ノ比準ヲ以テ漸ク其長サヲ

減殺シ、其長短ニ由テ糸ノ震掉ニ疾舒アラザル可ラズ、是ニ由テ糸ノ掉  
フヤ、漸ク短キニ及ブニ隨ヒ本譜ヨリ二倍或ハ三倍或ハ四五倍ノ急激  
ナルヲ加フ、故ニ震掉ノ緩急ニ隨テ譜ヲ定メ音ヲ和ス、是ニ於テ平糸ノ  
微動スルヤ、其調漸ク高クシテ能ク律ニ適ヒ、衆響一モ相抵觸スルコト無  
シ、

(原註)凡ソ音調ハ唯本譜ニ依傍スル者ノミニ非ズ、本原二譜一舉ニ發  
動スルキハ、自然之ヨリ餘音ヲ生ジテ偶然別ニ二譜ヲ成ス、一ハ之ヲ  
差異音調ノ譜ト云ヒ、一ハ之ヲ追補音調ノ譜ト云フ、何ヲ以テ差異音  
調ノ譜ト謂フヤ、曰ク此譜ハ本原二譜發動スルノ數相異ナルヨリ其  
調ヲ生ズレバナリ、又何ヲ以テ追補音調ノ譜ト謂フヤ、曰ク此譜ハ本  
原二譜ノ發動スルノ數ニ同シク、之ニ依傍シテ調ヲ爲シバナリ、而シ  
テ此追補ノ譜ハエルト氏ノ發明スル所ニ係レリ、

凡ソ物ノ動テ音ヲ爲ス者ハ、皆ナ各種音律ニ譜ヒ、其聲ヲ放ツ毎ニ必ズ  
樂ノ譜ニ配スル者ナリ、然レモ其物ノ震動スルノ勢ニ至テハ、終始齊一  
ナル能ハズ、是レ音響高下ノ差因テ生ズル所以ナリ、  
夫レ樂器ノ中ニ就キ、尤モ各種ノ音調ニ協ヘル者ハ、糸ニ若ク者アラズ、  
故ニ一舉ニ糸十六條ヲ列テ之ヲ張り、各々音調ヲ異ニセシムルコトヲ  
得ベシ、而シテ其ノ糸ヲ張ルノ法ハ、毫モ音聲ノ性質ヲ變ズルノ効無シ、  
是レエルトモルト氏ノ證明スル所ナリ、  
均シク樂ノ譜ニシテ、甲乙ノ譜一舉ニ發動スレバ、聽テ厭倦シ、而シテ丙  
丁ノ譜合奏スレバ、聽テ愉快ヲ覺ユルアリ、是レ何ヲ以テ然ルヤ、人或ハ  
之ニ答ヘテ云ハシ、曰ク音聲ノ發動算數ノ理ニ由ルト否トニ在リト、此  
言ハ未ダ以テ或人ノ感ヲ解クニ足ラズ、何トナレバ彼レ又問ハシ、一ハ  
則チ算數ノ理ニ由テ我ヲ喜バシメ、一ハ則チ然ラズシテ我ヲ怒ラシム

其喜怒セシムル所以ハ何ツヤト、彼レノ問ハ答フルニ隨テ益々出デ、我  
ノ答ハ問ハレテ益々窮ス、故ニ曰ク算數ノ理ハ未ダ以テ音聲ノ意味ヲ  
明ニスルニ足ラズ、別ニ之ヲ審ニス可キ者アルヤ昭々トシテ明ナリ、請  
フ次ヲ逐テ之ヲ論ゼン、

昔者瑞西ユレル氏測量學者ナリ、千七百七年ニノ世ニ當テハ、人皆ナ以  
爲ラク、兩音調和スレハ耳ヲ悅バシムル者ナリ、何トナレハ兩音相悖テ  
錯雜スルハ、人ヲシテ紛亂膠擾ノ念ヲ生ゼシムト雖モ、二音調和齊一  
ナルハ、平易安靜ナラシムレハナリト、此ノ法ニ由テ音調ノ義ヲ釋明  
スルノ風行ナハル、ヤ甚ク久シ、此ノ釋明ハ毫モ意義ヲ成サズト雖モ、  
人皆以テ理ニ合フト爲ス、奚ソ誤レルヤ、謂ツ可シ心理學ヲ以テ音樂ニ  
適用スル者ナリト、此ノ如キノ法ヲ以テ音樂ヲ釋明スルハ、數百年ノ古  
ニ創マリテ今猶ホ行ハレ、今ノ世ノ美學ト雖モ、上文論ズル所ヲ舍テ、

外ニ理アルコト無シト爲ス、是レ亦惑ヘルノ甚クシキ者ナリ、

然リ而シテ予音聲ノ如何ニ由テ人心ニ感ズルノ異ナル所以ヲ求ムル  
ニ、全ク人身窮理ノ學ニ原キ、其ノ體格結構如何ニ關スル者ナリ、奚ソ  
心理學者ノ如ク遠ク之ヲ論理ニ問ハンヤ、

人若シピアノ、ウーベルト琴ニ類スル樂器ノ名ナリニ依傍シテ歌フハ、樂器ノ系

皆ナ樂ノ譜ニ配シテ微動ス、此ノ樂器ノ如キ、其音ヲ爲スヤ誠ニ能ク調  
和スト謂フ可シ、聽膜モ亦此ノ如キ者アリ、蓋シ聽膜ヲ組成スル所ノ線  
緯ナル者ハ、其數大凡ソ三千アリ、此三千ノ線緯ハ樂器ノ系ニ譬フルコ  
ト得ン、此三千ノ系ハ假令微動シテ精妙ノ音ヲ發スルモ、各々皆ナ本音  
ニ調和ス、

若シ音響齊諧セスシテ、支離紛紜ヲ極ムルニ於テハ、句節ノ段ニ至リ、衆  
音相障礙シ、交々相害スル者ナリ、此時ニ際シ聽膜ニ感ズル所ハ、固ヨリ

齊一調和ノ音ニアラズシテ、衆音相悖リ、其調速カニシテ高ク速カニシテ下ク、或ハ強ク或ハ弱ク、斷節ノ接屬セザルモノアラン、而シテ此ノ如キ斷節ヲ生ジ來タルハ、本ト音調ヲ變化シテ之ヲ高下スルノ太ク速カナルニ由ル、音聲發動シテ此ノ如ク斷節生ジ來レバ、我カ心ニ感動スルニモ亦間斷無キヲ能ハズ、而シテ然カク我カ心ニ感動スルニ間斷アルハ、耳ノ尤モ悦バザル所ナリ、之ヲ譬ヘハ猶ホ目ノ光耀ノ隱顯出沒シテ、間斷有ル者ヲ觀テ喜コバザルト、笑フツ異ナランヤ、音聲發動シテ僅カ一秒時ニ斷節ヲ生ズルコト、三十乃至四十ナルキハ、聴ク者ヲシテ嫌厭セシムルコト最モ甚クシトス、然レモ斷節ヲ生ズルコト此ノ定數ニ踰ル乎、若クハ及バザルキハ此ノ如ク斷節アルモ人ヲシテ厭嫌ノ念ヲ覺エザラシム、

(原註)夫レ燈火ノ或ハ暗ク或ハ明カニシテ其光耀ニ間斷アルハ目ノ

視テ甚ク悦バザル所ナリ、然ル所以ノ者ハ、他無シ、光ノ瞳子ヲ注射スルヤ、乍チ光明ニ、乍チ幽暗ニシテ、眼絶エズ動テ休息スルノ暇無キニ由ル、耳ノ聲ニ於ケルモ亦然リ、物ノ動テ聲ヲ放ツ、或ハ高ク或ハ下ク、斷節ノ接屬セザルニ於テハ、聽膜絶エズ勞シテ其勢ノ撓ムニ由ル、其レ此ノ如ク耳目ノ斷節アルヲ喜バザルハ、並ビニ人身窮理ニ原キ身體結構ノ作用ニ出ル所ナリ、

以上斷節ノ接屬セザル者ハ、音ニ本原諸譜ノ相調和セザルヨリ生ズルノミナラズ、又一ノ補助譜ト他ノ補助譜トノ牴觸ヨリ生ジ、又補助譜ト本譜ノ齟齬ヨリ生ジ、又補助譜ト調和譜イット、ド、コンビチーレン既ニ原註ニ記載スルガ如ク、差等ヲ云ノ牴觸ヨリ生ズルコトアリ、既ニ此ノ如クナルニ際シ、其斷節ノ我カ耳朶ヲ感動スルハ、夫ノ本原諸譜牴觸ノキノ如ク甚クシキヲ覺エズ、而シテ補助譜互相ノ牴觸等ヨリ生ズル斷節ノ如キ、其勢甚ク微ニシテ

詳カニ之ヲ測定スル能ハズト雖也、唯聽者ノ耳ニ敏鈍ノ異ナル有リ、樂器ノ構造ニ精粗ノ同シカラザル有テ、此斷節ヲ判別スルニ詳略ノ異ナルアルヲ免カレズ、耳鈍ク器粗ナル、惡ク能ク堪ヘンヤ、

(原註)方今ノ音樂ト雖也、猶ホ不叶音音調ノ錯雜シテ齊一ヲ用フルヲ以テ常ト爲ス、音之ヲ用フルヲ以テ常トナスノミナラズ、方今音樂ノ中ニ就キ尤モ貴フ所ノ譜ハ、殊ニ不叶音ニシテ、此音ハ「トニク」ノ正律ニ抵觸シテ、大ニ之ヲ激昂シ、更ニ之カ音響ヲ著明ニス、但今日「アルモニ」ノ法ヲ奏スルニハ、大抵不叶音ヲ調和シテ用フル者甚ク多シ、而シテ「アルモニ」ニ不叶音ヲ調スルハ、猶ホ詩文ニ於テ至善ヲ顯ハサンカ爲メニ、反テ極惡ヲ揭ゲ、大智ヲ明ニセンカ爲メニ至愚ヲ示スカ如ク、不叶音有テ以テ「アルモニ」ノ齊肅ナルヲ著ハセリ、且音調ノ或ハ高キニ失シ、或ハ下キニ過クルニ於テ之ヲ調和セントスルハ、必ズ此不

叶音ヲ用ヒザル可ラズ、而シテ人皆此高下ニ偏スル者ヲ和スルヲ名ケテ節制ノ調ト謂フ、是レ嘗テロジエール氏ノ釋明スル所ナリ、

正音大律ニハ兩句長短相等キ者アルヲ無シ、若シ「オクダ一」ノ譜ニ、カ、ハ、シ、ヨ、ハ、ヒ、ニ、レ正律音ノミナ調スルニ於テハ、其音ノ相抵觸スルヲ甚クシテ、殆ント聽クニ堪ヘサル者アラン、正律音トハ即チ真正ノ音律ニ譜フ者ニシテ、「オクダ一」音律三數半ヲ以テ「カルト」ニ數「チエルス」成ルモノヲ云フ、

正音ト半音トヲ以テ成リ、若クハ等ノ類ヲ謂フナリ、

樂人以爲ラク音律ノ本旨ニ原カンニハ、宜シク「オクダ一」ヲ正律音ニ配シ、各「オクダ一」ノ句節ヲ同クスベシ、然ランニハ容易ニ上文ノ如キ音調ノ抵觸ヲ避クルヲ得可シト、此ノ如キ音律ハ、之ヲ調スルニ其法甚ク平易ナリ、故チ以テ其音樂ニ功アルヤ、蓋シ鮮カラス、此音律興リシヨリ、音樂ノ編成ヲ容易ニシ、又樂器製作ノ業ヲ難カラザラ



シメタリ、加之ナラス此音律ハ歌曲ノ變制ヲ易カラシム、即チ甲ノ音律ヨリ乙ニ移ルニ當リ、判然斷節ヲ存シズシテ平易靜穩ナラシムルコトヲ得、然レモ樂人此時ニ際シ、苟モ音調ノ緩急宜キヲ失セハ、遽カニ樂譜秩序ヲ亂タシ、轉倒錯雜シテ樂ノ體ヲ成ス能ハズ、乃チ節制譜ト本原譜ト關係スルノ間ニ少シク差異ヲ生ジ、爲メニ多少歌曲ニ間斷ヲ存スルニ至ル、譬ヘハ變音ケントノ名譜ノヨリ正音ケントニ移ル、其間每一秒ニ一ノ差異ヲ生ズルノ類是ナリ、故ニ正律ニ戻ル無キ能ハズ、是ヲ以テ別ニ音調ノ可ナル者ヲ假テ、此ノ如キ正律ノ錯誤ヲ正サズ、然レモ不叶音ノ音樂ヲ害スルヤ實ニ大ナリ、故ニエルモルト氏ハ叶

音ヲ用フルノ舊制ニ復シ不叶音ノ如キ調和法ヲ廢絶セシメ、ソコヲ欲セシモ、不幸ニシテ此樂器ハ「ピアノ」ノ調ニ比スレバ、甚タ微妙ニシテ樂人往々使用ノ法ニ苦ム、エルモルト氏ノ音樂ヲ一變セント欲シテ其志ヲ遂グル能ハザリシハ、此音樂ノ作ノ精良ナラザルニ由レリ、希臘人ハ「チエルス」ヲ以テ不叶音ト爲ス、夫レ不叶音ハ之ヲ歌曲ニ調シ、又絃器類琴瑟ニ配セバ、其調甚タ厭忌ス可シト雖モ、オルグ若クハ簫笛若クハ「ピアノ」等ニ依傍スルキハ、其音甚タ幽微ニシテ殆ント耳ニ感ゼザルガ如シ、エルモルト氏ハ實驗ニ由リテ音律ノ順序ヲ定ムルコト左ノ如シ

專一葉音  
コンソナンス、アブソリソリユ

「オクダマーブ」グーテム 第十一音 重複「オクタマーブ」グーブル、オクタマーブ

完全叶音 コンソナンス、ハルフエート

「ケント」叶音 「カルト」叶音

中正叶音 コンソナンス、モアイヤンヌ

「シキスト」コンソナンス、モアイヤンヌ 以テ成ル者 叶音 大律「チエールス」チエールス、シヨール

半律叶音 コンソナンス、アンハルフエート

短「チエールス」チエールス、ミノール 減「シキスト」シキスト、シミニエス

以上諸律ノ下ニハ唯不叶音アルノミ、而シテ此不叶音ナル者ハ、歌曲ノ斷節激切ナルヨリ生ズル者ナリ、是ニ由レハ叶音ノ清爽ナル所以ノ者ハ、他無シ、是レ音調ノ齊一ニシテ不時ノ變調無キニ出テ、決シテ本原樂譜ヲシテ數理ニ原カシメタルカ爲メニ非ズ、  
エルモルト氏ハ素ヨリ物理ノ學ニ長シ、又音樂ニ就テ發明スル所蓋シ

鮮少ナラズ、予今茲ニ盡ク氏ノ論說ヲ指摘スルヲ要セズ、唯氏ノ說ク所ニ由テ發音ノ撰擇ト樂譜ノ整理トハ、偏ヘニ人身窮理ノ本旨ニ出ヅルヲ明ニシ、次キニ世ノ理學者ノ高遠法ヲ以テ音樂ヲ說クハ、毫モ自然ノ理ニ由ラズシテ偶然ノ妄想ニ出ヅルヲ證スルニ足ル、  
予是ヨリ將サニ以上論スル所ヲ推シテ、美學ノ爲メニ其得失ヲ說カントス、

○第四章 圖書彫刻ノ法ニ由テ音律ヲ定ム ○音樂ハ各自ノ思想ヲ表發ス

昔者音樂ヲ以テ幻術ト爲ス者アリ、此輩ノ云フ所ニ由レハ、凡ソ音樂ニ精キ者一タビ樂ヲ奏スレハ、鬼神斯ニ踏舞シ、二タビ演スレハ群伏斯ニ顯ハルト、予今此妄ヲ辯セントシテ、奚ゾ無用ノ辯ヲ須フルヲ爲サン、幸ニシテ此ノ如キ音樂流行ノ時既ニ全ク逝ク、縱使ヘ未タ全ク逝クニ

至ラザルモ、今ニシテ其風ヲ習フ者甚ク鮮ナク、殆ント之ヲ稱譽スル者莫シ、是ニ於テ之ニ代ハリテ別ニ音樂ノ一變スル者行ナハル、而シテ彼ノ既ニ逝ク所ノ音樂ハ、人ニ妄想ヲ醸サシムルヲ旨トスルノ弊有テ、此ノ新ニ行ナハル、音樂ハ、主トシテ雅美ヲ貴ビ、音聲ヲ以テ圖書彫刻ヲ成スガ若キノ僻アリ、

今ノ音樂ヲ脩ムル者ハ、音樂ノ雅ト淫トヲ問ハズ、唯音樂ト云ヘバ則チ之ヲ愛好スルノ僻アリ、故ニ彼ノ音樂ヲ幻術ト爲ス者ニ比スレバ、其聲教ニ害アル太甚シカラントス、

今ノ樂ヲ爲ス者、皆ナ云フ、音樂ノ自然ニ人ノ耳ヲ喜バシムルヤ、猶ホ熏香ノ鼻ニ適ヒ、珍羞ノ口ニ適フガ如シ、鼻能ク熏香ノ好ム可キヲ知テ、后チ之ヲ好ムニ非ズ、唯熏香芬タリ、故ニ好ムノミ、口モ亦能ク珍羞ノ愛ス可キヲ知テ、后チ之ヲ愛スルニ非ズ、唯珍羞美ナリ、故ニ愛スルノミ、美音

ノ耳ニ於ケルヤ亦之ト異ナルナシ、耳能ク美音ノ喜ブ可キヲ知テ、后チ之ヲ喜バン、唯美音鏗タリ、故ニ喜ブノミト、又曰ク音律齊和シテ善ク、筭數ノ理ニ合フキハ、人ヲシテ快樂ノ念ヲ發セシメ、且ツ夫レ耳ノ官タルヤ他ノ官能ニ比スレバ、一種異様ノ娛樂ヲ享ク可キノ性アリ、而シテ此娛樂ノ神妙ナル、言語ノ能ク命ズ可ラザルノミナラズ、又未ダ之ヲ玩味セザル者ヲシテ、其真味ヲ了解セシムルヲ得ズト、

是ニ於テ乎此ノ如ク人心ニ感動シテ之ニ娛樂ヲ覺エシムルコト此ノ如キ所以ノ者ハ、他無シ、音聲發動シテ其反響ノ一部若クハ全部移テ我が耳朵ニ觸ル、ニ由ルナリ、而シテ音聲ノ發動ヲ調和スルハ、是レ即チ專ラ耳ヲ喜バシムルノ術ニシテ、夫ノ文章ノ眼目ヲ樂マシムルト其法ヲ同クスルガ若キ者アリ、故ニ今茲ニ音聲ノ發動ヲ調和スルハ、之ヲ譬ヘバ夫ノ圖書彫刻ナリ、燭臺裝飾具ナリ、布帛毛氈ノ花文ナリ、都テ文飾華

麗ヲ以テ主ト爲ス者ト其業毫モ異ナルナキガ如シ、夫レ綾羅ノ文繡ノ如キ、舊觀古城ノ彫刻ノ如キ、其法タル論理ニ合フ者アルヲ觀ズ、又人情ニ適フ者アルヲ觀ズ、又眞物ニ摸擬スル者アルヲ觀ズ、又文理ニ原ク者アルヲ觀ズ、今ノ音樂モ亦猶ホ此ノ如ク纖毫モ此ニ慮ル所ナシ、蓋シ綾羅ノ文繡ヲ事トシ、殿樓ノ裝飾ヲ業トスル者ノ如キハ、徒ニ其想フ所アルニ方リ、筆墨ヲ以テ之ヲ形ハシ、采色ヲ以テ之ヲ粉飾ス、今ノ音樂ヲ修ムル者ハ、唯音律ヲ調和スルヲ旨トシテ音聲ヲ翫ブノミ、之ヲ譬ヘハ句節ヲ以テ圖畫シ、アルモニ前ニ出ツヲ以テ采色スルカ如シ、

是ノ故ニ今ノ音樂ハ、衆音ヲ調諧シ、英華ヲ旨ト爲スカ故ニ、人ノ音樂ヲ聞クヤ、猶ホ一大畫額ヲ觀ルカ如ク、音聲發動スレハ畫額當下ニ現出シ、且ツ現レ且ツ隠レテ定形アラズ、是ニ於テ音樂ノ耳朵ニ觸ル、ヤ、變幻不測音響無涯、猶ホ鏡ニ衆影ヲ寫シテ隱顯出沒セシメ、以テ人目ヲ喜ハ

シムルト奚ツ異ナラン、

以上音樂ヲ論ズル如キハ未タ以テ至レリト謂フ可ラズ、僅ニ以テ淺見俗衆ノ稱贊ヲ招クニ足ルノミ、今日猶ホ我カ各地樂會ニ於テ精巧樂人音曲ヲ度スルニ當リ、或ハクラリツト樂ノ音ヲ變シテ時ニオトボト上ニ擬シ、或ハ時ニ笛ニ摸シ、僅カ十五分時間ニシテホルテ樂ノ音ヨリ移テビアノニ轉ズルヲ、十四回ノ多キニ至リ、其音ヲ強クシテ忽チ之ヲ殺シ、餘音ヲ張テ漸ク喧聒ノ高調ヲ奏ス、是レ即チ圖畫彫刻ノ法ニ由テ音律ヲ制スル者ニシテ、人情ニ原カザルノ弊ナリ、然リ而シテ庸衆之ヲ聞テ喜ビ、手ノ舞ヒ足ノ踏ムヲ知ラズ、妄リニ快ト稱シテ止マズ、豈ニ奇怪ナラズヤ、

此ニ樂師アリ、製作ノ甚ク精巧ナルウイオロンセル大ナル者ナリウイオロンノ彈シ、刻苦黽勉シテ爲メニ異曲ヲ奏シ、今ノ音樂ニ暗キ者ヲシテ之ヲ聞カ

シメバ、尋常「ウイオロン」ヲ以テ之ヲ視、敢テ以テ奇ト爲サズト雖ヒ、彼ノ  
 樂師靜然トシテ望ヲ失フコト無シ、以爲ラク之ヲ今ノ好事者ニ聞カシメ  
 バ、反リテ必ズ三嘆シテ措カザルベシト、果シテ好事者ニ聞カシメバ、必  
 ズ云ハシ、夫ノ熊ヲ使フ者ニ輕態舞踏ヲ習ハスハ甚ク難ク、太鼓ヲ鳴ラ  
 シテ小笛ノ音ニ擬スルモ亦容易ナラズ、而ルニ況ンヤ、「ウイオロンセル」  
 ナ以テ「ウイオロン」ト彷彿ヲラシムルナヤト、今ノ音樂ヲ論ズル者、大率  
 子此ノ如シ、奚ソ變調淫樂ヲ好ムノ甚キ耶、

此時ニ當リ、樂人ハ衆音ノ其調互ニ甚ク齟齬スル者ヲ齊和シテ、人ノ耳  
 ナ喜バシムルヲ旨トシ、殆ンド樂會ヲ變シテ佳聲美音ノ排列場ト成ス、  
 又音樂ノ編成者ハ、歌曲ヲ作ルニ毫モ各自ノ意想ヲ表發スルヲ願ミズ  
 シテ、專ラ至高ノ調ヲ變シテ極下ニ移シ、或ハ低ク或ハ高ク、勉メテ發音  
 ナ微妙ナラシメ、以テ偏ヘニ衆庶ノ讚稱ヲ買ハントナ務ム、

此ノ如キ音樂ハ、要スルニ聲音ヲ弄フ者ニシテ、一定ノ律呂音調ナク放  
 恣羈束ス可ラザル、猶ホ鄭衛ノ音ノ如シ、且此輩ハ謂レ無ク妄ニ音樂ヲ  
 僻好シテ音樂ノ旨ヲ誤ル者ト謂フ可シ、豈ニ之ヲ呼テ本然ノ音樂ト稱  
 ス可ケン哉、

人或ハ云フ、吾人鏡ヲ觀ルハ、神經ニ通シ、五官ニ感シ、爲メニ血液ノ循  
 環ヲ促カシ、大ニ人身ノ榮養ニ補ヒアリト、學者ノ或ハ鏡ノ功ヲ論シテ  
 其實ニ過グルト謂フハ、猶ホ可ナリ、然レヒ獨リ音樂モ亦此ノ如キ功有リ  
 ト云フニ至テハ、決シテ當ヲ失フ者ト爲ス可ラズ、是レボーキエ氏ノ主  
 張スル所ナリ、ボーキエ氏又曰ク、音樂ノ我心ニ感シテ快キ所以ノ者ハ  
 乃チ物動テ我耳ニ達シ、我カ神經ニ感ズルニ由ルト謂ハザル可ラズ、即  
 チ音樂ノ我カ身ニ感ズルハ、乃チ唯神經ノミニ非ズ、必ズ其功四體ニ波  
 及シ、滿身精氣充實シテ榮養ヲ助クト謂フヘシ、且夫レ物ノ動テ音ヲ爲

シ能ク法ニ適フモハ、耳ニ感シ心ニ通シテ爽快ヲ覺ユルナラン、蓋シ物ノ動テ音ヲ爲シ能ク法ニ適フトハ、即チ音聲ノ發動スルニ當リ、我カ五官ニ感觸ス可キ萬物ノ理ニ由ルヲ謂フナリ、夫レ果シテ音聲ノ發動スル此理ニ由ルアラバ、吾人乃チ感シテ自然ニ快カル可ク、否ラザレバ自然ニ厭フ可シ、若クハ樂ミ若クハ哀ミ、俄ニシテ奮ヒ、俄ニシテ沮ム、是レ音聲發動ノ其法ニ由ルト否トノ致ス所ニシテ、未ダ聞カザルノ前ハ、心海帖然トシテ情波アラザルナリト、ボークユ氏ノ論或ハ然ラン、然レモ未ダ以テ盡セリト謂フ可ラズ、猶ホ音樂ニ須臾モ欠ク可ラザル者アリ、彼レ猶ホ未ダ之ヲ得ルコト有ラズ、

所謂音樂ニ須臾モ欠ク可ラザル者トハ何ゾヤ、曰ク人々胸臆ニ藏スル所ノ思想ヲ音樂ニ表發スル是ナリ、昔者音樂ヲ以テ全ク各自ノ思想ヲ表明ス可キノ言辭ト爲サンコトヲ欲セシ者アリシガ、此ノ如キハ予ノ甚

ダ取ラザル所ナリ、音樂豈ニ明ニ人ノ思ヲ表ス可キノ言辭タルヲ得ンヤ、

嘗テグリユク氏ハ音樂ニ就テ其有セザル所ノ者ヲ求メ、又其得テ生ズ可ラザル所ノ者ヲ得ント欲ス、何ゾヤ、曰クグリユク氏ハ音樂ニ由テ詳ニ人ノ思想ヲ表發シ、又人々内ニ蓄フル所ノ説ヲ明ニ吐露セシトス、故ニ音樂ヲ以テ全ク人々ノ意匠ヲ表明ス可キ言辭ト爲ス、嗟呼音樂ノ旨ヲ誤ルニ非ズ耶、夫レ言辭ナル者ハ人ノ意見ヲ發露シ、又之ガ思想ヲ表明スルニ於テ、宜ク的確明亮ナラザルベカラズ、然ルチ音樂ノ物タル、何ゾ能ク此ノ如クナルヲ得ンヤ、故ニ吾人音樂ニ由テ各自ノ思想ヲ明ニスルチ得ズ、唯概略之ヲ諒スルニ過ギズ、

予今音樂ニ就テ發明スル所ノ者アリ、其事タル、甚ダ明カニシテ、固ヨリ學者ノ異論ヲ容レズ、何ゾヤ、曰ク音樂著作ニ巧ミナル者ノ歌曲ヲ編成

スルヤ、各々固有ノ性質ニ循ヒ、平素ノ鑑識ニ原キ、又自己ノ常習ニ由ル  
 一必セリ、決シテ相齟齬スルノ跡アルヲ見ズ、是レ予ノ稱賛シテ自ラ禁  
 ズル能ハザル所ナリ、音樂作者マンドルソン氏ナル者アリ、人ト爲リ聰  
 慧ニシテ甚ダ義理ニ精シ、叔母アリ、一日書ヲ寄セテ詩韵ヲ音律ニ配セ  
 ンコトヲ請ヘリ、マンドルソン氏之ニ答テ曰ク、卿必ズ知ラン、夫レ音樂ヲ  
 編成スルハ予ニ於テ甚ダ重大ノ者ト爲ス所ナリ、故ニ今卿ヨリ投セラ  
 ル、所ノ詩韵ノ如キ、其主旨審カナラザル者ヲ取テ音律ニ配セントス  
 ルハ、我が心忤惶トシテ安ンゼズ、若シ果シテ予自ラ欺キテ卿ノ請ニ應  
 セバ、此ノ歌曲ノ如キハ其人ノ思想ニ副ハザル偽物ト成ランノミ、蓋シ  
 樂ノ譜ナル者ハ究竟其意甚ダ明瞭ニシテ、日用言辭ノ如ク然ルノミナ  
 ラズ、其ノ義ヤ甚ダ微妙ニシテ言辭ノ能ク盡ス可キ者ニアラズ、然ルチ  
 今明瞭ノ譜ヲ以テ主旨明カナラザル所ノ詩賦ニ配シテ歌曲ヲ編成セ

ハ、何チ以テ誤無キヲ得ンヤト、誠ニ然リ、然リト雖ヒ氏ノ音樂ヲ論ズル  
 稍々過言ニ涉ルノ弊ヲ免レズ、

夫レ人ノ情ノ譜ニ於ケルヤ、其間自然一定ノ關係アル者ニシテ、内喜ブ  
 所アレバ、譜モ亦之ニ應ジ、内怒ル所有レバ、譜モ亦之ニ適フ、又譜ハ怒ル  
 ノ情ヲ起シ、喜ブノ情ヲ發ス、情ノ譜ト并ヒニ變化スルノ理固ヨリ異論  
 ス可ラザル者ナリ、夫レ情ト譜トノ關係、本ト此ノ如キノ切ナルヲ致ス  
 ト雖ヒ、マンドルソン氏ノ如ク譜ノ人情ヲ表發スル、奚ク能ク言辭ノ明  
 且確ナルヲ得ンヤ、

ホーキエ氏ガ嘗テ音樂ヲ論ジテ、其功チ人身窮理ニ歸スルガ如キ音律  
 ノ大體ヲ論ズルキハ、大ニ取ル可キアリト雖ヒ、更ニ音樂ノ本質ヲ審ニ  
 スルキハ、未ダ然ルヲ得ザル者アラン、抑モ短律正音ト半音ト複雜ト大  
 律正律ヲ以テ成ルトハ我が耳ニ感シテ發音ニ強弱アルヲ覺ユル固ヨ  
 ヲル者ヲ云フナリ

リ疑チ容レズト雖也、凡ソ音樂ヲ以テ皆ナ僅カニ大小音律ノ作用ニ歸シ、人身ノ結構ニ原クルガ如キハ、是レ亦音樂ノ大旨ヲ誤ル者ト謂ハザル可カラズ、故ニ音樂ヲ脩ムル者ハ、宜ク音聲ノ性質ヲ明瞭シ、音聲ヲ撰擇シ、又之ヲ調齊シ、因テ以テ我カ思想ヲ表發シ、人心ニ感動セシメンコトヲ求ムベシ、然ラザレバ音樂ハ纔カニ一科ノ小技術ニ止テ、能ク物類ノ眞性ヲ明ニシ、人心ノ作用ヲ審ニスルヨリ成ル者ニ非ズ、果シテ然ラントハ都テ歌曲ノ短律ト大律トニ論無ク、人心ノ之ヲ感ズルニ至テハ、短律ノ短律タルヲ覺エズ、大律ノ大律タルヲ知ラズ、唯音聲ヲ之レ聽クニ過キザルニ至ラン、此ノ如キハ事實ニ徴シテ萬有ル可キノ理無シ、音樂ニ志ス者其レ意ヲ此ニ留メザル可ケン哉、

騷人逍遙トシテ樹蔭ニ行吟シ、童幼猶爾トシテ巷街ニ放歌スルモ、本ト是レ内ニ存スル所ヲ外ニ形ハシ、口ヨリ出ス者ナリ、物心ニ觸レテ情外

ニ發シタル者ナリ、故ニ喜怒哀樂ノ情内ニ興ルヤ、自ラ此情ニ適フ所ノ音聲ヲ撰擇シテ以テ己レノ思想ヲ表發スルニ過ギズ、

エルベルト、スベンセル氏曾テ音樂ヲ論シテ曰ク、人皆ナ痛ク心ニ感ズルキハ、必ズ筋肉ニ動キ、四體ニ顯ハレ、爲メニ發音ノ調ヲ變ジ、或ハ高ク或ハ低ク、其節或ハ急或ハ緩ナラザルヲ得ズト、誠ナル哉言ヤ、願フニ人ノ音樂ヲ調ジテ種々ノ變化ヲ生ズルアルハ、究竟音樂ナル者ハ人々音聲ヲ調和シテ以テ内ノ想フ所ヲ表發スルニ外ナラザレハナリ、且夫レ人ハ物ニ觸レテ心ニ感ズルノ如何ニ由リ、亦自ラ其語調ヲ變化セザルヲ得ズ、然ラバ則チ音樂ヲ奏スルニ至リ、復タ此語氣ノ顯レテ其音樂ノ調ヲ變化スルヤ亦知ル可キナリ、

學者或ハ音樂ヲ視テ纔カニ音律ヲ配合シタル者ト爲シ、偏ヘニ算數ノ理ニ原ク所ノ技術ナリト倣シ、乃チ曰ク心ト樂ト毫モ相關係セズト、彼



レ既ニ音樂ノ旨ヲ誤ル、此言アルモ復タ奚ゾ異ムニ足ラン哉、此輩音樂ノ技ノ初メ算數物理ノ學ニ先ンシテ樹立シタルヲ知ラズ、夫レ算數物理ノ學出テ、音樂ノ一變スルハ固ナリト雖ヒ、學者若シ果シテ唯此學ニ由ルヒハ、樂人カ撰擇シテ以テ其思想ニ適フ所ノ音聲ヲ表發スル所以ノ理ヲ求ムルコト能ハザラン、

凡ソ物理學者ト數理學者トハ、固ヨリ音聲ノ意味ヲ考明ス可キ者ニ非ズ、唯己レノ學科上ヨリ音聲ノ性質ヲ究ムルノミ、而シテ此二家ハ是ノ道ニ由テ多ク音樂ニ係ル重要ノ件ヲ釋明スルコトヲ得ルト雖ヒ、本ト一科ニ就キ講究スルヲ以テ未ダ全ク音樂ノ術ヲ完成スルヲ得ズ、夫レ音樂ノ人ノ感情ニ出ヅルヤ否ヲ講明スルガ如キハ、固ヨリ右二家ノ敢テ干與ス可キ所ニ非ザルガ故ニ措テ論セズ而シテ、假令僻論者ト雖ヒ曷ヲ以テ音樂ノ感情ニ出ヅルコト無キヲ證スルニ足ランヤ、

凡ソ音聲ニハ意義有テ或ハ善ナル有リ、或ハ惡ナルアリ、若クハ理有リ非アリ、然ル所以ノ者ハ他無シ、人ハ類ニ觸レ縁ニ因リテ思ヲ起スニ由ル、類ニ觸レ縁ニ因リテ思ヲ起ストハ何ツヤ、曰ク音聲ノ清亮ナルヲ聞テハ、烈士ノ義ニ殉スルヲ想ヒ、音聲ノ幽鬱ナルヲ聞テハ、奸人ノ邪慝ヲ行フヲ思フノ類是ナリ、蓋シ音聲ハ人々類ニ觸レ縁ニ因リテ思ヲ起スニ至リ、始メテ意味ヲ生シ來ルナリ、其レ此ノ如シ、是ヲ以テ其意味妄想ニ出ツルト云フカ如キハ、是レ甚ダ理無キナリ、

嘗テポーキユ氏言ヘルアリ、曰ク吾人薔薇ノ芬々タルヲ聞カハ、固ヨリ既ニ聞見シテ快樂ヲ覺エシ事ヲ或ハ心中ニ回想スルコアリト雖ヒ、汚穢ノ臭俄カニ來リテ鼻ヲ衝クニ至リテハ、孰レカ汚辱ノ言、邪曲ノ行皆ナ我カ胸理ニ想出ヅルト謂フヲ得ンヤ、音樂モ亦然リ、人音聲ノ雅美ナルヲ聞ケハ、固ヨリ心氣爽快ナルヲ覺エテ、世間ノ美事ヲ追懷スルコト有

ル可シト雖也、淫聲ヲ聞クニ因テ心中必ズシモ奸曲ヲ回想スル者ニ非ズ、人々遭遇ノ異ナルニ隨ヒ、心志ノ同シカラザルニ隨テ、音聲ノ清明ナルモ福利嘉祥ノ念作ラズ、淫猥ナルモ凶災殃禍ノ思生セズ、然ラバ音樂ノ人ニ及ブノ功ハ何ゾ的確ノ之レ有ラン哉、但タ其聲ヲ聞テ内ニ藏スル所ノ念ノ正サニ發スルノミ、故ニ曰ク音聲ニ意味アリト爲スハ妄ナリト、誤レリト云フ可シ、

所謂類ニ觸レ因テ以テ思ヲ起ストハ、決シテ人々ニシテ異ナル如キ一定ノ法無キ者ヲ謂フニ非ズ、然ルテ若シ果シテ此ノ如キ一定ノ法無キ者ヲ以テ音聲ノ意味ヲ判別シ、之ヲ撰擇シタランニハ、ボーキユ氏ノ難詰スル所ト爲ルモ、亦決シテ理無キニ非ルナリ、今ヤ音樂ヲ聞キ類ニ觸レ因テ以テ思ヲ起シ、因テ以テ音聲ノ心ニ快キ者ヲ取り、否ラザル者ヲ舍テ之ガ意味ヲ判知スル如キハ、其法決シテ人々ニシテ異ニス可キ者

ニ非ズ、古今萬國並ニ一轍ニ歸ス可キ者ナリ、是ノ故ニ音律固ヨリ古今ノ異、各邦ノ不同アリト雖也、其然ル者ハ決シテ音聲ノ意味時ニ隨テ異ナル爲メニ非ズ、又國ニ隨テ不同ナルガ爲メニ非ズ、唯算數ノ理ニ原テ音聲ヲ撰擇調齊スルノ法同シカラザルノ致ス所ナリ、其レ之ヲ明ニセント欲セバ、予ガ既ニ掲グル所ノスペンセル氏ノ論ヲ參觀セザル可ラズ、故ニ曰ク所謂類ニ觸レ縁ニ因リテ思ヲ起シ、以テ音律ヲ制シ音聲ノ意味ヲ定ムルハ、決シテ人々ニシテ異ナル可キ者ニ非ズ、古今萬國咸ニ其法ヲ同ウスル者ナリト、

以上學者ガ音聲ノ意味ヲ非斥スルハ、要スルニ心性上ノ理ヲ謬ルニ起因スル者ナリ、夫レ世ノ學者ト雖也、初メ必ズ音聲ニ自ラ意義有ランヲヲ想ヒシナラン、然レモ求メテ得ザルガ爲メニ、卒ニ音聲意義無シト云フノ謬誤ヲ致セシナラン、吁人智涯リ有リ、豈ニ盡ク真理ヲ求ムルヲ得

ンヤ、涯リ有ルノ人智ヲ以テ眞理ヲ求メント欲ス、其ノ謬誤無キ期ス可  
ラザルナリ、

## ○第五章

各自固有ノ性質ニ隨テ音樂ヲ調ス○音學ト詩學ノ

連合○メロヂ及アルモニ○音樂ノ區域

凡ソ何ノ技術タルヲ問ハズ、皆ナ其本原無カル可ラズ、今予音樂ノ本原  
ヲ論セントス、何チカ音樂ノ本原ト爲スヤ、曰ク人々固有ノ天性ニ隨テ  
音樂ヲ調スルナリ、

抑々音樂ハ技術ナリ何チ以テ技術ト爲スヤ、曰ク音樂ハ決シテ一科專  
門ノ學ニ係ル所ノ事ヲ推明スル者ニ非ズ、唯人々之レニ因テ以テ固有  
ノ思想ヲ發洩スルヲ得可ク、又因テ以テ平生ノ見識ヲ表發スルヲ得可  
ク、又己レノ思想見識ヲ表發シテ以テ他人ヲ感動セシムルノ能ヲ顯ハ  
スヲ得可ケレバナリ、故ニ音樂ハ術ニシテ學ニアラズト謂フ所以ナ

リ、

世ノ技術ヲ爲ス者、或ハ人ノ耳ヲ感ゼシムルノ事ニ達スルアリ、或ハ人  
ノ目ヲ喜バシムルノ事ニ通ズルアリ、此ノ如キノ類屈指ス可ラズト雖  
モ、其事ヲ異ニスル所以ノ者ハ、他無シ、唯其人ニ在テ耳ノ官特ニ備ハリ  
テ、能ク音聲ヲ判別スルノ材ニ富ミ、因テ人ノ耳ヲ感ゼシムルノ事ニ達  
ス、又其人ニ在テ目ノ官特ニ具リテ、能ク色ヲ辨知スルノ能ニ豊カニ、因  
テ人ノ目ヲ喜バスノ道ニ通ズ、右二者ノ行フ所固ヨリ異ナリト雖モ、並  
ニ純然タル技術ナリ、豈ニ之ヲ稱シテ學ト謂フヲ得ンヤ、

人固ヨリ生レナガラ體格ノ機關ヲ備具スト雖モ、此機關皆ナ咸ク鋭敏  
ニシテ一モ痿痺スル無キ者ノ如キハ、未ダ嘗テ之レ有ラザルナリ、今ノ  
世ノ開明ト雖モ、人身窮理ノ學猶ホ未ダ進マズ、人ヲシテ審ニ其機關ノ  
長短ヲ知ラシムルニ由シナシ、然レモ人或ハ父子遺傳ノ性ニ由リ、或ハ

教育ノ功ニ由リ、神經ノ一部殊ニ備具シ、隨テ一技ニ長ズルコトアルハ、決シテ疑ヲ容ル可ラズ、此ノ如ク神經ノ一部殊ニ備具スルニ於テハ、又隨テ此一部ニ應ズル所ノ機關特ニ暢發ス、此機關己ニ暢發スルキハ、又必ズ專ラ此機關ヲ運用スルヲ以テ常習ト爲ス、夫レ人ニ所長ノアル所以ノ者ハ、蓋シ特ニ此機關ヲ運用スルヲ以テ常習ト爲スニ由ル、人々其機關ノ一時ニ發達スルニ於テハ、自然ニ此機關ヲ運用ス可キノ事ニ趨カザルコト得ズ、人ノ夙ニ其神經ノ具備スル一部ヲ表發スル、是レヲ之レ稱シテ天稟ノ材ト謂フ、果シテ然ラハ宜ク其人ノ材能ヲ審ニシテ、手技ニ長ズルヤ否、將ク學藝ニ達スルヤ否ヲ明ニセザル可ラズ、宜ク留意シテ長ヲ舍テ短ニ就クノ拙ヲ爲スベカラズ、蓋シ政ヲ爲シテ名聲ヲ竹帛ニ垂ルニ足ルノ賢士モ、理學者ト爲リテ陳編ヲ剽竊シ、碌々庸儒ヲ以テ身ヲ終フル者アリ、天性ヲ誤ルノ禍亦大ナル哉、慎マザル可ケ

ンヤ、

人ノ天性ニ長短アル殊ニ著キ者ハ、就中技術ヲ爲ス者ノ上ニ在リ、是ニ於テ乎畫工ハ殊ニ目ニ頼リ、樂人ハ殊ニ耳ニ頼ル、故ニ畫工ハ目明ナラザル可ラズ、樂人ハ耳聰ナラザルヲ得ズ、而シテ畫工ハ圖線ヲ畫シ采色ヲ以テ其思フ所ヲ發露シ、樂人ハ音律ヲ調和節制シテ以テ其懷フ所ヲ表發セザルヲ得ズ、是レ猶ホ論理學者ノ理ヲ推シ、數學者ノ數理ニ由テ其内ニ見ル所ヲ顯スガゴトシ、寧ソ一ニ天性ノ長短ニ依ラザル可ケンヤ、凡ソ工藝ヲ脩ムル者ハ、其運用スル機關ノ異ナルニ隨テ、各々其所業ノ法ヲ殊ニセザルヲ得ズ、是ヲ以テ耳ニ專ラナル者ハ、其思ヲ音樂ニ發シ、目ニ專ラナル者ハ、其思ヲ圖畫ニ顯ハス、然リ而シテ樂人ノ其耳ニ感ズルハ畫工ノ目ニ於ケルカ如ク切實ナラズ、又樂人ノ耳ヲ以テ識別スルハ、畫工ノ目ヲ用フルガ如ク明カナラズ、樂人ノ物ニ感ズルヤ固ヨリ畫

工ノ如ク其レ深切ナラズト雖ヒ、樂人獨リ物ニ動カザルノ理アラソ哉、故ニ樂人内ニ動テ想生ズルヲ有レバ、其術ヲ音樂ニ表洩スルヲ得可シ、其物ニ動クヲ愈々深ケレバ、歌曲ニ表發スルモ亦益々痛切ナルヲ得ン、樂人ノ物ニ感ズルヤ固ヨリ畫工ノ切ナルカ若キニ非ズト雖ヒ、其思想ヲ音樂ニ表發スルニ方リテ、人孰レカ此樂人ノ衷情如何ヲ察スルヲ得ザランヤ、

學者或ハ云ハン、夫レ音樂ハ本ト一定ノ調無ク不易ノ律無シ、唯人々其意ノ適スル所ニ隨テ之ヲ判別シ、己レ内チ既ニ憂フルヲ有レハ聞テ悲哀ノ音ト爲シ、己レ内チ既ニ喜フヲ有レハ、聞テ福祥ノ音トナス、今假ニ之ヲ譬ヘンニ、猶ホ人ノ雲霓ノ空間ニ蹇蹇タルヲ觀テ、己レカ思フ所ニ從テ之ヲ批判シ、或ハ龍ト爲シ、或ハ虎ト爲スガ如シト、此ノ如キノ音樂ハ何ヲ以テ眞正ノ音樂ト爲スヲ得ンヤ、乃チ未タ猶ホ備ラザルノ音

樂ト謂ハザルヲ得ズ、知ル可シ、此ノ如キノ音樂ヲ編成スル者ハ凡庸人タルヲナ、

論者又云フ、人若シ句節ヲ變化シ、音律ヲ更正スルニ於テハ、隨テ歌曲ノ性質ヲ一變シ、痛悼ノ風モ慶福ノ調ト爲スヲ得ン、故ニ音律及ヒ句節ハ、音樂ニ於テ尤モ重要ノ者ナリ、音樂ハ人々一定不變ノ思想ヲ表洩シテ成ル者ニ非ザルナリト、此言ノ如キ奚ヲ以テ可ト爲スヲ得ンヤ、學者既ニ言ヘル有リ、曰ク音樂ハ人々因テ以テ其思想ヲ發露ス可キ者ニ非ズト、又將タ云フ、音樂ハ人々因テ以テ邈然其意ヲ表スルニ過ギズ、故ニ人々音樂ニ由テ發露スル所ノ者ハ、其意甚々曖昧ニシテ、他人之ヲ聽テ其人ノ思想ヲ窺フ能ハズト、此輩必ズ云ハン、曖昧ハ音樂ノ本質ナリ、故ニ人假リニ音聲ノ意義ヲ定メ、某々音ハ何ノ義ヲ表シ、某々音ハ何ノ意ヲ示スト爲スヲ得ズ、音樂ノ技タル本ト言辭ノ物ヲ名ケ事ヲ示ス

ノ明瞭的確ナルノ優レルニ若カザルナリト、此輩淺見者ノ此言ヲ唱フ  
ルハ、固ヨリ尤ムルニ足ラザルナリ、此輩云フ院劇ハ本然ノ音曲ニアラ  
ズ、其音律ヲ調和スルヤ、穿鑿ニ失シ衰世ヲ徵ス可キノ淫聲ナリト、吁何  
ソ言ノ誤レルヤ、

建築術ハ全ク彫刻及畫學ト其模範チ一ニスト雖ヒ、彫刻畫學ノ緻密ナ  
ルニ若カズ、今音樂ノ尋常言語ニ於ケルモ亦然リ、人々音樂ニ由テ其思  
ヲ發スルハ言語ノ明瞭ナルニ如カズ、彼ノ輩此理ヲ審ニセバ、音樂ノ其  
功全ク言語ト均シカラザルヲ云フノ誤レルヲ知ルナラン、

彼レ既ニ院劇ヲ評シテ音律穿鑿ニ失スルノ淫聲ナリト謂フト雖ヒ、是  
レ大ニ誤レリ、本ト音樂ハ音聲ヲ審ニシ、句調ヲ和シ勉メテ精妙ヲ極ム  
ルニ在リ、豈ニ穿鑿ニ過グト謂ハン哉、音律ノ穿鑿ニ過グルヲ論ズルハ、  
寧ロ創メテ音樂ヲ制スルヲ非トスルノ優レルニ若カザルナリ、蓋シ俚

歌俗謠ノ如キ、尋常謳歌ハ樂器ニ配スルノ音樂未ダ興ラザル前ニ成ル  
者ナリ、孰レカ尋常謳歌ノ興ラザル前ヨリ音樂ノ成ルヲ想フ者アラ  
ンヤ、孰レカ音樂ノ興ルニ至リテ、人々始メテ其思想ヲ言語ニ發シ、直チ  
ニ之ヲ樂器ニ配シテ謳歌スト謂フ者アランヤ、音樂未ダ興ラザルノ昔  
日ニ在テハ、人々固ヨリ律ヲ協ヘズ、句ヲ節セズ、唯任意聲ヲ放テ其思ヲ  
發スルノミ、院劇ヲ非トスル者之ヲ取テ音樂ト爲シテ可ナリ、豈ニ俱ニ  
眞ノ音樂ヲ談ズルニ足ランヤ、

人動モスレバ云フ、メロヂハ音聲ヲ列序シテ之ヲ圖書スル者ナリ、故ニ  
之ヲ譬ヘバ畫ナリ、アルモニハ音聲ヲ調和シテ之ヲ脩飾スル者ナリ、故  
ニ之ヲ譬ヘバ色ナリト、誠ニ然リ、善ク近カク譬ヲ取ル者ト謂フ可シ、彼  
レ又云フ、是ニ由テ之ヲ觀レバ、畫ハ本ナリ、色ハ末ナリ、メロヂハ本ナリ、  
アルモニハ末ナリ、メロヂ無レバ何ヲ以テ音樂タルヲ得ン、アルモニ無

キモ音樂ノ本質ニ於テ何ノ損スル所アラシヤト、謂ツ可シ此輩ハ茲ニ至テ大ニ音樂ノ本旨ヲ誤ルト、胡ヅアルモニ「メロヂ」ニ本末ノ輕重アラシヤ、並ニ音樂ニ欠ク可ラザル者ナリ、  
 今「メロヂ」ヲ視テ畫ニ譬フル輩ノ音樂ヲ制スルヤ、句節甚ダ嚴ニシテ音律甚ダ肅ナリ、此輩ノ「アルモニ」ヲ貴バザルハ、是レ免レザルノ弊ナリ、何ヲ以テ然ルヤ、曰ク「アルモニ」ハ調ノ太ダ高キ者ヲ和ケ、又太ダ低キ者ヲ張り、二節ヲシテ能ク連續セシメ、「メロヂ」ノ太ダ拘束スル者ヲ節制シテ音調ヲ婉曲ナラシムルヲ旨トスレバナリ、  
 然リト雖モ、夫ノ音樂ノ本旨ヲ明ニシ、之ガ大體ニ通ズル者ハ、皆十音樂ヲ視テ人々各自ノ意想ヲ發露スルノ道ナリト爲スヲ以テ、彼レト見ル所ヲ異ニセリ、先ヅ此流ノ名家ヲ舉グレバ、曰クグリユク氏ナリ、曰クウニベル氏ナリ、曰クベトパン氏ナリ、此輩ノ音樂ヲ釐革スルニ至リ、始メ

テ「アルモニ」ハ「メロヂ」ト俱ニ兩ツナガラ音樂ニ欠ク可ラザル者ト爲リ、大ニ之ガ調ヲ助ケ、之ガ勢ヲ張ラシム、故ニ「メロヂ」ハ「アルモニ」ヲ待テ后ヲ高調ニ配スルヲ得タリ、

リユバン及ランブランノ兩畫工ハ、畫學ニ采色ノ忽ニス可ラザルヲ悟リ、畫學ノ爲メニ大ニ精選ヲ加フト雖モ、音樂作者ニ至テハ今猶ホ「アルモニ」ノ音樂ニ欠ク可ラザルヲ知テ、之ヲ進マシメシ者幾ンド希ナリ、故ニ此樂人ノ如キハ猶ホ夫ノ世ノ畫工ノエングル氏ヲ師トシテ、圖畫ノミヲ貴ビ、采色ヲ輕ンズルガ如ク、「メロヂ」ヲ主トシテ「アルモニ」ハ微妙ニ涉ルト爲シ、斥ケテ用ヒズ、時有テ之ヲ斥クルニ至ラザルモ、其微妙誤リ易キヲ恐レ、敢テ之ヲ調セズ、昔日「フロラン」ス技術學校ノ畫工ハ采色ヲ用フルニ拙ナリト雖モ、當時皆ナ仰ギ望テ名畫ト爲セリ、今樂人モ亦然リ、其弊ヤ此ノ如キノ甚シト雖モ俗衆貴ンテ名工樂師ト爲ス、而シテ此

二者ハ眞ノ巧樂名畫ノ士ニ非ザルナリ、夫レベニ一六人トフランド  
 ル人及和蘭人ハ畫學ニ采色ノ重要ナルヲ知り、主トシテ之ヲ施スノ法  
 ナ改メ以テ畫學ヲ進マシム、音樂ヲ脩ムルノ人ト雖モ亦アルモニチ調  
 スルノ術ヲ精選シテ、音樂ノ技ヲ一變スルヲ得ザルノ理アラソヤ、  
 今茲ニ吾人ノ宜ク意ヲ留ムベキ者アリ、曰ク人ノ音樂ニアルモニナル  
 者ヲ知リタルハ、乃チ今ヲ距ル蓋シ甚ダ遼遠ノ古ニ非ズ、樂師始メテア  
 ルモニノ調ヲ用ヒテ之ニ本然ノ功用ヲ爲サシメシハ、未ダ二百年ノ星  
 霜ヲ經ザル可シ、故ニ昔日ニ在テハアルモニノ何者タルヲ知ラズ、適意  
 音樂ヲ調スルニ過ギズ、

是ヲ以テ夫ノ偏ヘニ樂器ニ配スルノ音樂ハ、全ク近世ノ發明ニシテ、俚  
 歌風謠ノ如ク、古ノ事ニ非ズ、蓋シ其ノ興ルヲ僅々二百年ヲ過ギズ、而シ  
 テ其進歩ノ大ナルハ實ニ駭然ニ堪ヘザルナリ、此ヲ推シテ考フレバ、今

ヨリ以往此音樂ノ進ミテ如何ノ極ニ達ス可キヤ豫メ得テ窺フ可カラ  
 ザル者アラソ、

古者畫工ラソグナル者アリ、其言ニ曰ク、畫學ハ唯筆墨ヲ以テ物ヲ象  
 トルニ在ルノミ、各自ノ性情ヲ得テ寫シ出ス可キ者ニアラズト、今ノ樂  
 人モ亦然リ、此輩ハ音樂ヲシテ纔ニ彼ノ畫學ト其功用ヲ均クセシメン  
 ガ爲メニ、夫ノ單ヘニ樂器ニ配スルノ音樂ヲ引用シタリ、請フ左ニ之ヲ  
 明ニセソ、

ボトキエ氏曰ク、夫ノ單ヘニ樂器ニ配スルノ音樂ハ、之ヲ譬ヘバ衆音ヲ  
 羅列シテ建築シタルノ構造物ナリ、但ク其尋常構造物ト異ナル所以ノ  
 者ハ乃チ形態ノ動搖スルニ在ルノミ、故ニ樂器ニ由テ發スル所ノ音聲  
 ニハ、別ニ意義アルヲ覺エズ、是ヲ以テ某々音ハ何ノ意ヲ表シ、某々音ハ  
 何ノ義ヲ示スノ如キコアル無シ、故ニ音樂著作者ハ大率チ音樂ニ因テ



其思想ヲ發露セシメテ欲シテ其道ヲ得ズ、是ニ於テ乎纔カニ音樂ノ體裁ヲ整理シ、音聲ヲ調和スルヲ旨トスルニ止マリ、更ニ音聲ノ意義ヲ定メテ各自ノ思想ヲ表發セシメテ求ムル者アラズト、此言或ハ然ラン、然レモ世ノ音樂ヲ編成スル者、衆音ヲ調和スルニ、或ハ此法ヲ廢シテ彼ノ法ヲ舉ゲ、彼ノ法ヲ棄テ、此法ヲ取り、今ノ音聲ヲ調和スルハ必ず前日ト其法ヲ異ニシ、後日ト同カラズ、即チ此ノ如キハ、各自適意音樂ヲ制スル所ニ出ヅル乎、否、是レ豈ニ然ランヤ、音聲ニハ自然意義有テ、作者因テ以テ其思想ヲ表發セシメテ欲スルニ由ル、

作者衆音ヲ配合シテ之ヲ調和スルノ法宜キヲ得ルニ於テハ、聽ク者ヲシテ作者ノ郷土ヨリ其習慣及其心匠ニ至ル迄、盡ク之ヲ察知セシムルヲ得可シ、然ルヲ若シ吾人作者ガ音律ヲ調和スルヲ見テ、其之ガ適宜作爲スル所ニ出ヅルトセバ、豈ニ何ヲ以テ此ノ如ク察知セシムルヲ得

ンヤ、誰レカ偶然適意ノ作爲ニシテ能ク人心ヲシテ感動セシムルヲ此ノ如シト云ハシヤ、

マンブルソン氏嘗テ言ヘルアリ、曰ク凡ソ樂ノ譜ノ意味ハ、言語ノ能ク釋明ス可キニ非ズト雖モ、因テ以テ樂ノ譜ニ意味無シト謂フヲ得ザル可シト、誠ニ然リ、要スルニ人々良智ヲ以テ識別スル所ヲ表明スル言語ト、五官ニ痛感スル所ヲ適意發洩スル樂ノ譜トハ、固ヨリ相ヒ通用ス可キノ定準アラズ、故ニ樂ノ譜ハ言語ヲ以テ詳カニ其意味ヲ釋明スルヲ得ザル可シ、夫レ今日ノ如キ人智未ダ全ク進マズ、事理甚ダ明カナラザル世代ニ於テハ、言語ハ未ダ全ク各自ノ思想ヲ表明スルニ足ラズト雖モ、人孰レカ物ニ感シテ思ヲ起スヲ無シト謂フヲ得ンヤ、又孰レカ人々其思ヲ表發スルノ偶然ニ出テ、決シテ定理有テ起ルニ非ズト謂フヲ得ンヤ、

抑モ言語ナル者ハ、述ニ之ヲ考フレバ、甚ダ明晰ナルガ若シト雖モ、人々之ヲ會得スルニ、皆ナ必ズシモ其旨趣ヲ均クスルヲ得ズ、又同一ノ論議ヲ聞テ之ヲ了解スルニ、彼我淺深ノ異ナル無キヲ得ズ、然リ而シテ人孰レカ言語ヲシテ決シテ其意義ヲ明瞭ナラシムル能ハズト謂フヲ得ンヤ、音樂モ亦然リ、音聲ノ意味甚ダ曖昧ナリト雖モ、其明晰ヲ後日ニ期スルヲ得ザルノ理アラシヤ、

學者音樂ヲ論シテ其當ヲ失スルヲ無カラシムルニハ、須ラシク音樂ニモ亦他ノ技術ト均シク其分域ヲ畫スベシ、即チ須ラシク五官中音樂ニ需ツ所ノ者何レニ在ルヤ否ヲ定ムズシ、蓋シ音樂ニ需ツ所ノ感情ハ、音樂ニ由ルニ非レバ、決シテ其思ヲ發露スルヲ得ズ、何ゾ畫學ヲ以テ之ヲ表スルヲ得ン、何ゾ文學ヲ以テ之ヲ形ハスヲ得ンヤ、

然リト雖モ、吾人若シ音樂ニ由テ發露スル所ノ音聲ニ就キ、一々審カニ之ガ釋解ヲ下サンコトヲ試シ、歟、蕩然散滅シテ收拾ス可ラザル、恰モ手ノ塵芥ヲ撈スルガ如ク、又水ヲ撮ムト奚ゾ異ナラン耶、手ヲ以テ塵芥ヲ撈シ又水ヲ撮ム、始メヨリ得可キノ理無シ、其得可ラザルヲ以テ塵芥無シ水無シト謂フ、是レ豈ニ理ナラン乎、音樂モ亦然リ、其表發スル所ノ音聲、審カニ之ガ意義ヲ釋明センコトヲ欲シテ得ズ、其得ザルヲ以テ音聲ニ意義無シト謂フ、吁、是レ惑ヘルノ甚ダシキニ非ズ耶、

嘗テ世ノ學者、碩學キデロ氏ノ說ク所ニ由リ、專ラ理論上ヨリ畫學ヲ論シ、大ニ之ガ本旨ヲ害セシ事アリ、是レ人ノ皆ナ知ル所ナリ、果シテ此論ノ如クナラシメバ、到底畫學ハ眞物ニ象ルコトヲ旨トセズシテ、論理ニ原テ物類ノ衆形ヲ概示ス可キ小技タルニ過ギズ、何ヲ以テ畫學ハ人々内ニ動ク所ヲ表發シテ以テ天稟ノ才ヲ開暢スルヲ得ンヤ、凡ソ技藝ニハ皆ナ各々本然欠ク可カラザル者アリ、之レ無レバ以テ畫學ノ畫學タル

ヲ得ズ、建築術ノ建築術タルヲ得ズ、今畫學ヲ論ズル者動モスレバ此ニ慮ル所無クシテ、卒ニハ將ニ畫學ヲシテ本然欠ク可ラザル采色光耀ヲ廢絶セシメントス、假令未ダ此ノ如キノ甚キニ至ラザルモ、將ニ畫學ヲシテ之ガ本旨ヲ舍テ、枝葉ノ技ニ止ラシメントス、故ニ畫學ハ唯論理ニ原クナ旨トシテ、人々各自ノ思想ニ由ルヲ求メズ、是ニ於テ乎、畫人ハ既ニ各自天稟ノ才ヲ以テ心ニ想フ所ヲ寫スヲ息メ、而シテ將ニ理學者ガ專ラ理ヲ推シテ論ズル所ニ率ハントス、嗚呼怪シムベキ哉、

音樂ニ於ケルモ亦此ノ如キ者アリ、今ノ學者ハ皆テ每事ニ遠ク之ガ義理ヲ求索シテ、審ニ之ヲ演繹スルノ僻アリ、故ニ音樂ニ由テ調スル所ノ音聲ニ就テモ、亦一々明カニ之ガ意ヲ析キ、之ガ義ヲ解カンヲ欲ス、夫レ術ハ固ヨリ學ニアラズ、學ハ固ヨリ術ニアラズシテ、其旨各々異ナリ、然ル所以ノ者ハ他無シ、第一、術ハ則チ義理ヲ演繹セズ、故チ以テ論理ハ

乃チ術ノ管ス可キ所ニ非ズ、第二、術ノ正鵠ハ本ト萬古不易ノ定理ニアラズ、唯各自天稟ノ才能ヲ暢發スルヲ旨トス、學ハ則チ然ラズ、反テ義理ヲ講明シ普通ノ情誼ヲ論究スルヲ本トス、是ヲ以テ工藝ノ士ハ、技術ニ由テ其思想ヲ表發シ、以テ其詩人タリ、畫工タリ、又樂人タルノ資徳ヲ顯ハシ、理學者ハ夫ノ人々ニシテ異ナラズ、世々ニシテ易ラズ、國々ニシテ變ラザルノ通理常道ヲ明ニス、今ノ學者往々音樂ノ本ト技術タルヲ知ラズシテ、之ガ義理ヲ理學ニ求メントス、其誤リ亦甚シト謂フ可キナリ、凡ソ畫工ハ生レナガラ目明カナル者ナリ、故ニ畫工ノ物ニ感ズルヤ專ラ目ノ官ニ由ル、是ニ於テ圖野ヲ畫シ、采色ヲ施シテ以テ其思想ヲ發露ス、樂人ハ天資耳聰ナル者ナリ、故ニ樂人ノ物ニ動クヤ專ラ耳ノ官ニ由ル、是ニ於テ音律ヲ定メ音聲ヲ和シテ、以テ其心ニ感ズル所ヲ表發ス、然リ而シテ理學者往々畫工ノ目ニ專ラナルヲ誹リ、又樂人ノ耳ニ專ラナ

ルヲ誇リ、右二者ヲシテ己レト同シク推理ノ法ニ由テ其心ニ感動スル所ヲ論議セシメント欲ス、然ルガ若キ者ハ、猶ホ英書ヲ讀ムモノ、其法朗西文法ニ率由セザルヲ見テ、怫然書ヲ抛ツト奚ツ異ナラン哉、夫レ學藝ヲ脩ムル者ハ其長ズル所ノ材ニ由ル、豈ニ一轍ニ歸セシメントヲ望ム可ケンヤ、

讀書一タビ人身窮理ノ書ヲ緝覽セバ、畫工ノ見ルニ銳クシテ、樂人ノ聞クニ敏キ所以ハ、蓋シ了然タル可シ、夫レ電光閃爍シ、火焰炎上シ、音響轟然タル、第一ニ目ノ官ヲ以テ之ヲ知ルハ、是レ萬物ノ色ニ由ルニ過ギズ、又唯耳ノ官ヲ養フテ之ヲ銳敏ナラシメン歟、凡ソ物ノ色アリ味アリ、香アルモ、咸ナ之ヲ顧ミズ、獨リ音ニ由テ知ル、是ニ於テ平人皆ナ云フヲ得ン、曰ク樂師ハ必ズ耳ノ官聰ニシテ聞クニ銳敏ナリ、故ニ耳ハ殆ンド他ノ諸官ニ代テ其能ニ敏ク、卒ニ之ヲ以テ首官ト爲スニ至ル、是ヲ以テ

外物ノ來テ我レニ感ズルハ、一ニ耳ノ官ニ由ラザルヲ得ザル、猶ホ畫工ノ物現ハレテ目必ズ之ニ感應スルト毫モ異ナルヲ無キナリト、樂人ノ物ニ感應スルヤ、一ニ之ガ音聲ニ由ラザルハ莫シ、故ニ心ニ感ズル所ヲ表發スルニハ、亦必ズ樂ニ由ラズンバ有ラズ、而シテ其耳ノ作用他官ニ勝サル愈々盛ナレバ、其凡庸樂人ヲ距ル益々遠シ、苟モ耳官ノ其他官能ト優劣無キハ、以テ其良樂人ニ非ルヲ知ルニ足ラン、今此ニ耳聰ナラズシテ目明カナルノ人アランニ、此人ヲシテ音聲如何ニ由リ事物ヲ判別セシメントニ、彼レ必ズ之ヲ知ルノ道無キニ窮シテ措クヲ知ラザラントス、又此ニ目明カナラズシテ耳聰ナルノ人アラン、此人ヲシテ采色如何ニ由テ物ノ性質ヲ辨知セシメントニ、此人必ズ滯滯遲疑シテ決スル能ハザラン、智ハ以テ千載ノ後ヲ知ルヲ得ルモ、耳聰ナルニ非レバ惡ク能ク音聲ニ由テ物ノ性ヲ明ニシ、事ノ理ヲ審ニスル能

ハズ、夫レ音聲ニ由テ知ルハ耳官ノ鋭敏ナル者、獨リ之ヲ能クスベシ、古  
 ヘ理學者ゴットナル者アリ、樂師マソデルソント友トシ善シ、平居閉有レ  
 バ門ヲ叩テ悠々閑話シ、往々譚音樂ノ蘊奧ニ涉リ、音樂ノ談其耳ニ絶エ  
 ズト雖ヒ、卒ニ終ニ悟ル所有ラズシテ止ム、抑モ何ノ故ヅヤ、ゴットハ固ヨ  
 リ智慧ニ富ムト雖ヒ、天資音樂ニ長セザルニ由レリ、耳聰ナル者ニ非ズ  
 ンバ、奚ゾ能ク鐘鼓ノ聲ヲ辨シ、管絃ノ音ヲ知ルニ堪ヘンヤ、  
 樂人音聲ノ其耳ニ感ズルヤ、能シ之ヲ判別スト雖ヒ、審カニ之ガ意義ヲ  
 釋明スルヲ能ハズ、蓋シ其耳ニ感ズル所ノ音聲ハ、始メヨリ之ヲ釋明ス  
 可キノ言辭ナク、又文字ナク、唯樂ノ譜ヲ調和シテ以テ耳ニ感ズル所ヲ  
 表發スルニ過ギズ、蓋シ音聲ノ意義ハ本ト審カニ之ヲ演繹スル能ハズ、  
 樂人ノ音樂ヲ奏スルハ、即チ之ヲ釋明スル者ナリ、豈ニ別ニ其法アラシ  
 ヤ、強テ之ヲ釋明セント欲セバ、到底附會タルヲ免レズ、

是ニ由テ之ヲ觀レバ、音樂美學ナル者ハ要スルニ専門技術ニシテ、其區  
 域甚ダ狭ク、普通學科ニ涉ル者幾ンド希ナリ、今音樂ノ要ヲ舉テ之ヲ云  
 ヘバ、左ノ數言ニ過ギズ、曰ク良好ノ音樂ヲ作ラシムニハ、須ラク其人ニ在  
 テ樂師タルノ稟性ヲ備フヘシト、難イ哉、樂師トシテ、ラ、パリス氏ト雖ヒ猶ホ  
 且之ヲ論難スルヲ無シ、以テ此言ノ謬戾ナラザルヲ知ルニ足ル、然ラバ  
 則チ音樂ハ初メヨリ萬古不易ノ規矩ヲ設ケテ、以テ樂ヲ學ブ者ヲシテ  
 皆ナ咸ク之ニ由ラシムルヲ得ザルナリ、

## ○第七篇 詩學

## ○第一章 詩學トハ何物ナル乎○詩人ノ才性

「ポエジー」ノ語ハ意義頗ル多シ、其義ノ最博キ者ヲ取リテ言フハ、文藝ノ才即チ是レナリ、必ズシモ獨詩學ヲ指スニ非ズ、蓋シ文藝ノ物タル、詩畫建築音樂等何ノ種類ヲ論ゼズ、作者必ズ一種天ニ獲ル所ノ才性有リテ、之ヲ詩ニ著ハシ、畫ニ著ハシ、建築ニ音樂ニ著ハシテ、然ル後此等文藝ノ形乃チ見ル可シ、「ポエジー」ノ語ハ正サニ此才性ヲ云フ、

文藝ノ才トハ何物ヲ指ス乎、曰ク此レ精神一種ノ感動ナリ、一種ノ想像力ナリ、作者唯此一種ノ感動ノ性有リ、故ニ物ヲ觀ルニ於テ深ク心ニ感ズル有リテ、自ラ禁セズ、是ニ於テ平作ル所有リテ、以テ自家ノ感動ヲ泄瀉シテ、然ル後始テ平ナルヲ得、此ニ由リテ言ヘバ、所謂文藝ノ才トハ、一種人心ノ感動ス可キ性ニ外ナラザルナリ、以下請フ詩學ニ就テ之ヲ

暢言セシ、

詩人ノ物ヲ觀ルヤ、庸人ノ物ヲ觀ルト自ラ情ヲ異ニスル者アリ、彼レ既ニ庸人ト情ヲ異ニスル者有リ、故ニ其物ヲ觀ルノ點、庸人ノ物ヲ觀ルノ點ト亦自ラ相異ナル者有リ、蓋シ詩人ノ物ヲ觀ルヤ、庸人ニ比スルハ、更ニ其大處ヲ見ル、此レ其感慨ノ大ナル所以ナリ、之ヲ譬ヘバ物理家ノ顯微鏡ヲ以テ物ヲ觀ルガ如シ、其物ノ大小初ヨリ變ズルニ非ズト雖ヒ、吾レノ目ニ在リテハ、之ヲ觀テ極テ大ナリト爲ス、詩人ノ物ヲ觀ルコト蓋シ之レト相類ス、但共相異ナル所以モ亦一有リ、夫レ物理家ノ物ヲ觀テ大ト爲スハ、鏡ノ力然ラシム、詩人ニ至リテハ然ラズ、其神經ノ作用自ラ物ノ大處ヲ觀セシム、故ニ物理家ノ物ノ大處ヲ見ルハ外ナリ、詩人ノ物ノ大處ヲ見ルハ内ナリ、

更ニ言フ可キ有リ、物理家ノ物ニ於ケル、苟モ其顯微鏡ヲ用フルハ、物

トシテ大ナラザル莫シ、詩人ニ至リテハ然ラズ、既ニ器具ノ力ニ頼ラズシテ、專ラ自家ノ神經ニ頼ルヲ以テ、或ハ視テ大ナリト爲ル有リ、亦或ハ否ラザル有リ、其視テ大ト爲スハ正サニ其心ニ感ズルガ故ナリ、其否ラザルハ其心ニ感ゼザルガ故ナリ、其心ニ感ズル者ハ、取リテ題目ト爲シテ以テ自家ノ感慨ヲ寫出ス、此レ其作ノ發スル所以ナリ、若夫レ其感ゼザル者ハ、猶ホ庸人ノ物ニ對スル時ト異ナラズ、故ニ詩人ト雖モ、取リテ以テ題目ト爲スニ由シ無キナリ、

然リト雖モ、詩才ハ人々皆之レ有リ、獨リ詩人ノミニ非ザルナリ、但詩才モ亦其他ノ才能ト同ク、其人ノ智愚ト性質トニ隨フテ、大ニ大小ノ別有リ、故ニ庸人ハ詩才ノ小ナル者ナリ、詩人ハ其大ナル者ナリ、是故ニ天下ノ人、其白痴ナル者ヲ除ク外、皆或ハ時ニ詩興ヲ發セザル莫シ、何ツヤ、詩興ナル者ハ他ニ非ス、物ヲ觀ルニ於テ心ニ感ズル所有リテ、

其精神稍ヤ尋常ノ位置ノ上ニ冲騰スルヲ、即チ是レナリ、是故ニ人苟モ物ニ感ズルキハ、其感慨ノ猶ホ存スル間ハ、詩人ト略ホ心胸ヲ異ニスルヲ無キヲ以テ、之ヲ詩人ト謂フモ不可ナル無キナリ、

是ノ如クニ看做シ來ルキハ、天下ノ人或ハ時ニ詩人ノ列ニ入ラザル莫シ、然レモ眞ノ詩人ナル者ハ、是ノ如キ而已ニテハ未ダ足ラズ、蓋シ其感慨如何ニ大ナルモ、之ヲ外ニ發セザルト、或ハ之ヲ發スルモ、其方法拙ニシテ人ヲシテ之ヲ解セシムルヲ能ハザルキハ、未ダ以テ眞ノ詩人ト爲ス可ラズ、

大凡ソ吾人ノ物ニ於ケル、其物如何ニ美ナルモ、己レ之ヲ美トセザルキハ、終ニ其美ヲ覺エズ、詩人ノ詩ニ於ケルモ亦猶ホ此ノ如キナリ、彼レ感慨如何ニ厚大ナルモ、吾人ノ心ニ其感慨ノ大ナルヲ知ルヲ得ザルキハ、彼レノ心胸ハ終ニ之ヲ知ル可ラズ、是故ニ詩人タラント欲スル者ハ、

物ヲ觀テ感發スルノ性ト、並ニ自ラ其感情ヲ寫シテ、人ヲシテ明ニ之ヲ解セシムルノ技能トヲ有セザル可ラズ、

夫レ自家ノ感慨ヲ寫シテ、人ヲシテ明ニ之ヲ解セシムルコトハ、甚タ爲シ易ラズ、此レ正サニ詩學ノ難シト爲ル所以ナリ、

自家ノ感慨ヲ寫シテ、人ヲシテ明ニ之ヲ解セシムルノ道如何、曰ク第一ニ其感慨頗ル廣大ナラザル可ラズ、第二ニ其感慨ノ狀頗ル明瞭ナラザル可ラズ、蓋シ厚大ナラザルキハ、初ヨリ之ヲ寫スニ意無キヲ致ス可ク、明瞭ナラザルキハ、之ヲ寫サント欲スルニ及ビテ、既ニ自ラ之ヲ記憶セザルヲ致ス可シ、

蓋シ人ノ方サニ感慨スルヤ、精神極テ激動スルヲ以テ、之ヲ言語文字ニ寫サント欲スルモ得可ラズシテ、多クハ手足ノ容、眼ノ運動若クハ顔面ノ筋肉等ヲ以テ、之ヲ外ニ發スルニ過ギズ、或ハ能ク言語ヲ用フルモ、急

促ニシテ前後連續セザルヲ致ス、故ニ是ノ時ニ在リテハ、自ラ之ヲ寫シテ之ヲ人ニ示サント欲スルモ、決シテ得可ラズ、此ニ由リテ之ヲ觀レバ、詩人ノ作ハ其方サニ感ズルノ時ニ於テ發スルニ非ズシテ、其既ニ感ズルノ後ニ於テ發スル者ナリ、此レニ由リテ之ヲ觀レバ、詩人ノ作ハ直チニ其感慨ヲ寫スニ非ズシテ、其感慨ノ影像ヲ寫スナリ、

夫レ詩人既ニ感ズルノ後ニ於テ其影像ヲ發シテ以テ作ル所有リ、是故ニ其感慨頗ル厚大ナラザルキハ、以テ之ヲ蓄フ可ラズ、又頗ル明瞭ナラザルキハ、之ヲ文字ニ著ハサント欲スルニ及ヒテハ、己テニ其詳ヲ得可ラズ、

夫レ自家ノ感慨ノ影像ヲ蓄養シテ、之ヲシテ消散セシメズ、以テ之ヲ文字ニ詳寫スルコトハ、其事極テ爲シ難シ、今夫レ吾人心ニ感ズルコト有リテ、之ヲ人ニ語ラント欲センニ、其大體ヲ叙スルコトハ、固ヨリ難ラス、苟モ其



詳チ舉ケント欲スルモ、往々曖昧模糊ノ患チ免レズ、是ニ知ル物ニ感ズルノ性ハ、人トシテ之レ無キハ莫キヲチ、若夫レ其感慨ノ影像チ著存シテ之チ文字ニ著ハスニ至リテハ、一種ノ才性有ルニ非ザレバ、終ニ之チ爲スチ得ズ、且ツ夫レ物ノ影像チ寫シ蓄フルコトハ、獨リ無形物ノミ難シト爲スニ非ズ、有形物ト雖モ亦頗ル難シ、之チ例ヘハ吾人親友ト日々相往來セシニ、其眉目口鼻ヨリ並ニ手足ノ容ニ至ルマテ詳知シテ遺ス所無キガ如シト雖モ、一旦之レト相面セザルノ時ニ於テ、胸中ニ於テ之チ想像シテ、平時相見ル時ト少シモ異ナルコト無カラント欲スルモ、往々自ラ其難キチ覺ユ、

又之チ例ヘハ、人ノ山水ノ美景、若クハ美婦人ノ顔面チ話スルチ聽カンニ、人皆其胸中ニ於テ自ラ想像スル所有ラザル莫シ、然レモ若シ自ラ其詳チ盡クシテ、之チ他人ニ知ラシメント欲スルハ、詩人ノ極テ巧ナル者

カ、若クハ畫家ノ極テ妙ナル者ニ非ザレハ得可ラズ、

以上論ズル所ニ由レバ、詩學ノ物タル知ル可キナリ、作者先ツ心ニ感ズル所有リテ、而シテ其感慨タル頗ル深厚ニシテ且詳明ナリ、然ル後之チ文字ニ著ハシテ、讀者チシテ明ニ之チ理會スルコトチ得セシム、是ニ知ル詩ナル者ハ凡百藝術ノ中ニ就テ、其性タル最モ作者ノ自由ニ成ル者ナルチ、何チ以テ之チ言フ、夫レ作者耳ニ聞ク所有ルカ目ニ見ル所有ルカ、若クハ心ニ思フ所有リテ、此レカ爲ニ感發シ、然ル後己レノ感情チ文字ニ寫ス、故ニ其感情愈々大ナレバ、其作愈々奇麗ナリ、其文字チ用フルノ術愈々巧ナレバ、其讀者ノ心チ感ズルコト愈々大ナリ、是レハ則チ詩ノ善惡一ニ作者ノ感情如何ト、文辭ノ高下如何トニ在ルノミ、故ニ曰ク、凡百藝術ノ中ニ就テ、其性タル最モ作者ノ自由ニ成ル者ナリト、  
是故ニ詩中有スル所ノ聲價ハ、一ニ其作者ノ感慨ノ大小高下ニ在リ、更

ニ之ヲ詳言センニハ、其聲價ハ專ラ作者ノ自ラ其感情ヲ寫スノ高下ニ在リ、然リト雖モ、茲ニ云フ所ハ純然ノ理論ナルヲ以テ之ヲ實際ニ推スニ及ビテハ、亦少ク限畫ヲ加ヘザル可ラズ、請フ之ヲ言ハソ、夫レ詩人若シ天姿太怪奇ニシテ、其意想過カニ常人ト同ジカラザル有ランニハ、其物ヲ觀ルニ於テ感慨スルコトモ、亦過カニ常人ト同ジカラズ、是ニ於テ其自ラ感慨ヲ寫スニ及ビ、讀者曾テ之ヲ解スルコト能ハズ、若シ天下果シテ是ノ如キ人有ランニハ、其感慨如何ニ大ナルモ、其才思如何ニ奇ナルモ、終ニ之ヲ指シテ大家ト爲ス可ラズ、他無シ、彼レ或ハ高ク自ラ標榜スルモ、一世終ニ其高キヲ知ルコト能ハザレバナリ、是ニ由リテ之ヲ觀レバ、詩人苟モ作ル所有リテ、人心ヲ感セント欲スルキハ、獨リ其感慨頗ル深厚ナルノミニテハ足ラズ、亦其感慨ノ狀略ホ當

世ノ人物ト相同ジカラザル可ラズ、夫レ人ノ相聚リテ一社會ヲ爲スヤ、一代毎ニ必ズ其一代ノ論說、意嚮、嗜好等ノ類有リテ、以テ其一代ノ性質ヲ爲ス者ナリ、然レ庸人ニ在リテハ、文字ノ用巧ナラザルヲ以テ、此レ等ノ論說、意嚮、嗜好ノ類ヲ叙述スルモ、或ハ鄙野ノ病有リ、或ハ不備ノ病有リ、或ハ板直輕薄ノ病有リテ、十分ニ其精粹ヲ舉グルコト能ハズ、是ニ於テ詩人有リ、代リテ之ヲ叙述スルキハ、同一ノ論說、意嚮、嗜好ナリト雖モ、其文辭更ニ適麗ニシテ、又其前後ヲ調整スルノ法モ亦宜ヲ得ルヲ以テ、其一代ノ人之ヲ讀ミテ感發スル所有ルコトヲ得、他無シ、其論說、意嚮、嗜好皆我レト同ジキヲ以テナリ、故ニ曰ク、詩人其才思如何ニ大ナルモ、其感慨如何ニ深キモ、其物ヲ觀ルノ情、盡ク當世ノ人物ト反シテ少シモ相同カラザルキハ、終ニ以テ詩人ト爲スニ足ラズト、

## ○第二章 人心ヲ感スルノ要欸

以上論スル所ニ由リテ言ヘハ、人若シ詩人ノ人心ヲ感ズル所以ノ者ヲ見テ、此レ己レノ感慨ヲ彼レニ移シテ然リト以爲フキハ、大謬ナリ、夫レ詩人ノ自ラ其感慨ヲ移シテ之ヲ讀者ニ與フルコトハ、初ヨリ爲シ得可キニ非ズ、設令ヒ詩人ノ感慨ヲシテ神ノ下附スル所ナラシメバ、之ヲ移シテ他人ニ與フルコト或ハ得可キナリ、然ルニ詩人ノ感情ハ神ノ下附スル所ニ非ズ、即チ自ラ之ヲ心ニ取ル者ナリ、讀者モ亦自ラ之ヲ心ニ取ル者ナリ、若シ讀者亦自ラ其腦中ニ於テ感受ノ性ヲ蓄フルニ非ザレバ、詩人ノ作千百篇有リト雖モ、復タ何ノ感慨カ之レ生ゼン、是ニ由リテ之ヲ觀レバ、詩人ノ其詩句ヲ以テ讀者ノ心ヲ感動スルハ、決シテ其感慨ヲ移シテ之ヲ讀者ニ與フルニ非ズシテ、畢竟其感慨ヲ以テ讀者ノ感慨ヲ惹起スニ過キザルコト知ル可キナリ、

夫レ人皆感慨ノ氣有ラザル莫シ、是故ニ古戰場ヲ經過シ、城壘ノ傾圮スルヲ見ルカ、若クハ古昔ノ廢宮ヲ望ミテ其荒草ノ蕪穢スルヲ見ルカ、或ハ高山峻嶺ノ突兀トシテ雲表ニ拔ク等ヲ見ルキハ、其心必ズ感愴悚懼ノ情ヲ發セザル無シ、是ノ如キ者ハ何ゾヤ、我初ヨリ感慨ノ氣無キキハ、百回此等ノ物ヲ見ルモ復タ何ノ感スルコト之レ有ラン、

且又一切物ノ破壊セル者、若クハ高峻空際ニ聳ユル者等ノ、人心ヲ感ズル所以ノ者ハ、蓋シ亦原因有リ、蓋シ人ノ情タル、太明カナルキハ感慨スルコト罕レナリ、太暗キキハ亦感慨スルコト罕レナリ、故チ以テ中夜暗黒ニシテ咫尺見ルヘカヲサルノ中ニ立ツカ、若クハ白晝光明萬物燦然タルノ間ニ在リテハ、感慨ノ氣ヲ發スルコト鮮シ、朦朧月夜若クハ半陰半晴ノ景ニ至リテハ、自ラ心ニ感ズルコト有ルヲ覺ユ、即チ物ヲ觀ルモ亦然リ、夫ノ古城ノ破壊セル者、及ヒ高山ノ空ニ聳ユル者ノ如キハ、我レ之ヲ望見

ナルニ於テ、意思太明瞭ナルヲ、白晝ノ物ヲ見ルガ如クナラズ、太暗晦ナルヲ、黑夜ノ物ヲ望ムカ如クナラズ、是ヲ以テ我レノ心ニ於テ自ラ思想ヲ加ヘテ之ヲ料度ス、此レ乃チ感慨ノ由リテ發スル所以ナリ、是故ニ詩人ノ其作ニ於ケルモ、亦稍々此レト相類スル者無カル可ラズ、其意思ヲ整調スル、其文辭ヲ綴属スル、太晦澁ニシテ解チ下シ難キヲ、暗夜ノ如クナルルキハ、讀者此レカ爲メニ感慨ヲ發セント欲スルモ由シ無シ、若シ又字句太明瞭ニシテ、其事ヲ叙シ言ヲ立ツル、細大盡ク舉ケテ一々自ラ釋明ヲ加ヘテ、絶エテ讀者ヲシテ思考ヲ費ヤサマラシムルキハ、其詩タル必ズ人ヲシテ倦厭セシムルヲ免レズ、何ノ人ヲ感ズルヲカ之レ有ラン、夫レ議論精密ニシテ細大盡ク舉ケ、只管ニ人ノ了解スルヲチ期スルヲハ、藝術家ノ任ニシテ詩人ノ任ニ非ズ、故ニ夫ノ人身窮理ノ書、解剖學ノ書等ノ如ク一切學術ノ書ハ、之ヲ精ニスルヲ愈々至レバ、人ニ

益スルヲ愈々大ナリ、詩人ニ至リテハ然ラズ、其旨趣トスル所ハ、人心ヲ感ズルニ在リテ、人心ヲ啓牖スルニ在ラズ、

夫レ然リ、是ヲ以テ詩人若クハ畫人ハ、其腕力極テ高キモ、賞鑒家ト俱ニ他人ノ作ヲ批評スルキハ、往々正鵠ヲ失スルヲ免レズ、何トナレハ藝人ノ長ズル處ハ、人心ヲ感ズルニ在リ、賞鑒家ノ長處ハ、人ノ作ヲ細論スルニ在リ、天下ノ物此二者ヨリ相反スルハ莫シ、是故ニ予ヲ以テ之ヲ觀ルニ、古今詩人ノ大家ト稱スル者ハ、ギョートヲ除ク外、一モ賞鑒ノ術ニ得ル者無シ、而シテギョートノ詩タル、其病ハ正サニ條理餘有リテ、氣韻足ラザルノ一點ニ在リ、此レ其賞鑒ノ術ニ得ル有ル所以ナリ、夫レ詩人ノ事ヲ叙シ言ヲ立ツル、太精密ナルヲ欲セズ、是ヲ以テ夫ノ譬喩ノ類ハ、之ヲ詩句中ニ用フルキハ、尤モ當チ得タリト爲ス、此レ他無シ、譬喩ノ物タル、僅ニ其相類スル所ヲ舉ケテ之ヲ示スヲ以テ、其意義太明

瞭ナルニ至ラザレハナリ、大凡ソ心ニ感スル所有リテ、直テニ之ヲ寫シテ譬喩ヲ用ヒザルキハ、其感情タル、必ズ幾分限畫セラル、一無キ一能ハズ、怪ム一無キナリ、今夫レ吾人不幸ニシテ哀シム可キノ地ニ陷キリ、默々トシテ之ヲ忍ブキハ、觀ル者ノ我レヲ憐恤スル一、我レノ喋々哀訴スルニ比スレバ大ニ相勝サル者有リ、詩人ノ其作ニ於ケルモ、亦猶ホ此ノ如シ、哀シム可キノ狀ヲ寫サント欲シテ、直チニ其事實ヲ叙ブルキハ、觀ル者先ヅ詩人ノ自ラ悲シムヲ見テ、反テ其事實ノ哀シム可キヲ見ズ、此レ其人ヲ動ス一ノ少ナキ所以ナリ、之ニ反シテ譬喩ヲ用フルキハ、詩人ノ叙セント欲スル所ノ事實ハ、擧ゲテ皆譬喩ノ中ニ在リテ、作者ハ恰モ其處ニ在ラザルガ如シ、是ニ於テ讀ム者、其事實ノ作者ノ口ニ出ヅル一ヲ忘レテ、眞ニ自ラ之ヲ目撃スルガ如シ、是ニ於テ乎其譬喩ノ義ニ由リテ旁推シテ、益々想像ヲ加へ、感慨ト

感慨ト層々相連リテ、餘情窮盡有ル一無シ、是ニ知ル詩人事實ヲ直寫スルキハ、讀者ト事實トノ間、自ラ詩人ノ在ル有リテ、或ハ妨碍ヲ爲スヲ免レザルモ、譬喩ヲ用フルキハ、讀者ヲシテ直チニ事實ト相對シテ、初ヨリ讀者ト相識ラザルガ若クナラシムル一ヲ、此レ其益々人心ヲ感ズル所以ナリ、

古昔ノ詩ハ譬喩ヲ用フル一、今代ノ詩ニ比スレバ尤モ多シ、此レ正サニ其品格ノ雅逸ナル所以ナリ、

然リト雖モ、予ノ此論ニ由リテ或ハ之ヲ極メ、必ズ專ラ人心ヲ感動スル一ヲ務メテ、一篇ノ詩中ニ於テ作者ノ絶エテ自ラ讀者ノ想像ニ表見スル一無キニ至ルキハ、亦大ニ文藝ノ美ヲ爲ス所以ノ道ニ非ズ、何トナレバ、實際ノ感動ト美學上ノ感動トハ、大ニ相異ナル者有レバナリ、請フ更ニ此意ヲ暢論セン、

凡ソ吾人事物ノ喜ブ可ク哀シム可キニ遇フテ、欣悦ノ念ヲ發シ、悲慘ノ情ヲ發スルガ如キハ、所謂實際ノ感動ナリ、若夫レ美學上ノ感動ハ此ニ異ナリ、其叙スル所ノ事果シテ欣喜ス可キモ、吾人ノ欣喜ノ情ハ、其實事迹ノ爲メニ發スルニ非ズシテ、作者ノ才能ノ爲メニ發スル者ナリ、其叙スル所ノ事ノ悲哀ス可キ時モ亦然リ、之ヲ要スルニ其事ノ喜ブ可キト哀シム可キトヲ問ハズ、吾人ノ感動ハ專ラ其實迹ノ上ニ在ラズシテ、作者ノ才能ヲ感ズルニ在リ、故ニ作者若シ一概ニ讀者ノ心ヲ感動シテ、之ヲシテ欣喜若クハ悲哀ニ專ラナラシムルヲ務メテ、絶エテ自ラ其間ニ表見スルヲ無キニ至ルキハ、美學上ノ感動ハ全ク消滅スルヲ致サン、是ニ知ル畫人ニシテ若シ專ラ其事實ヲ以テ人ヲ感ズルヲ務メテ、絶エテ自ラ其間ニ表見スルヲ無キキハ、其畫タル攝影ノ寫真ト異ナルヲ無ク、詩人ニシテ專ラ其事實ヲ以テ人ヲ感ズルヲ務メテ、絶エテ自ラ

其間ニ表見スルヲ無キキハ、其詩タル法廷ノ供狀ト異ナルヲ無キヲ致サン、

此ニ由リテ之ヲ觀レハ、今世ノ詩人或ハ專ラ事實ヲ詳悉シテ、其眞狀ヲ寫シテ鋪敘ヲ遺スヲ無ク、自ラ號シテ記實家ト稱スル者有レトモ、實ハ眞ノ正路ヲ得タル者ト謂フ可ラズ、此ノ如キ者ハ、其才能畢竟自家ノ腦裡ニ在ラズシテ、題目ノ撰擇ニ在リト云フモ可ナリ、何トナレハ、其題目人ヲ感ズルニ足ルキハ、其詩モ隨フテ人ヲ感ズルニ足ル、其題目若シ人ヲ感ズルニ足ラサルキハ、其詩モ亦初ヨリ人ヲ感ズルヲ得ザルナリ、之ヲ要スルニ是ノ如クニシテ專ラ實迹ヲ詳寫シテ、以テ人ヲ感動スルコトハ、其感動タル到底美學上ノ感動ト大ニ其性ヲ異ニス、他無シ、美學上ノ感動ハ、本ト觀ル者ヲシテ作者ノ才能ヲ感ゼシムルニ存スルヲ以テナリ、若シ此事ヲ疑ハ、請フ一例ヲ舉ケテ之ヲ證スルヲ得ン、夫レ世人ウイル

シル羅馬ノ「エチイード」ヲ讀ミタル者、其第四卷「アドン」ノ死ニ臨ムノ時ヲ叙スルノ一段ニ至リテハ、誰レカ感慨悲哀ノ情ヲ發セザラン、夫レ「アドン」一婦人ニシテ其戀愛スル所ノ男子ノ爲メニ欺カレテ非命ニ殞ツ、ウイルシル其事ヲ叙シテ悲慘ノ狀ヲ極メリ、然レモ讀ム者ノ心ハ專ラ「アドン」ノ不幸ヲ哀ミテ之ヲ悲ムノミニ非ズシテ、并セテウイルシルノ此事ヲ叙シテ人ヲシテ哀マシムルコト、是ノ如キニ至ルノ巧ヲ感嘆スルコト多キニ居ル、此レ其詩ノ美ヲ爲ス所以ナリ、

向キニウイルシルヲシテ專ラ此事述ヲ叙寫シテ讀者ノ悲哀ノ情ヲ惹起スノ外、絶エテ他念無カラシメバ、其事ヲ記スルコト詳細遺スコト無ク、一々讀者ヲシテ直ニ其形狀ヲ見ルガ如クナラシメン、果シテ是ノ如クナルキハ、讀者必ズ厭惡ノ心ヲ生シテ卷ヲ投シテ嘆息セン、果シテ此ノ如クナルキハ、何ノ美カ之レ有ラン、夫レ美婦人愛情ノ爲メニ激セラレテ非

命ノ死ヲ致スガ如キハ、天下ノ最モ人ヲシテ酸鼻セシムル者ナリ、吾人若シ實ニ此ノ如キ事ニ遇フキハ、何ノ喜ブ可キコトカ之レ有ラン、今ウイルシルノ此事ヲ記シテ真ニ逼ルト雖モ、然レモ其間隱然自ラ其摸寫ノ巧ヲ以テ人ニ示ス者有ルガ故ニ、讀ム者時々ニウイルシル其人ト直チニ晤話スルガ若キヲ覺ユ、是ヲ以テ愈々其事實ヲ哀シムキハ、愈々作者ノ才能ヲ感シテ悲哀ニ專ラナラザル所以ナリ、此レ正サニ此詩ノ美ヲ爲ス所以ナリ、

「ラオコーン」ノ詩モ亦猶ホ此ノ如シ、蓋シ其事實悲ム可キト喜フ可キトヲ問ハズ、實際ノ感情ト美學上ノ感トハ、常ニ大逕庭ノ存スル有リ、故ニ作者若シ十分ニ美學上ノ感ヲ惹起サント欲スルキハ、實際ノ感ハ必ズ幾分損棄スル所有ラザル可ラズ、而シテ作者若シ實際ノ感情ニ於テ、幾分損棄スル所有ラント欲スルキハ、必ズ事實ト讀者トノ間ニ於テ、時々

自ラ表見シテ以テ自家ノ才能ヲ發揮セザル可ラズ、  
 此ニ由リテ之ヲ觀レバ、作者ノ事ヲ叙スル絶エテ譬喩ヲ用ヒズシテ、一々直寫シテ常ニ自ラ事實ト讀者トノ間ニ進入シテ、以テ讀者ヲシテ厭怠セシムルガ如キハ、固ヨリ病累ナルニ論無シ、然レモ專ラ讀者ヲシテ事實ト相對シテ、全ク詩人ノ其間ニ在ルヲ忘レシムルニ至ルコトモ、亦美學上ノ旨趣ニ害スルコト無キヲ能ハズ、此二病ニ陷イラズシテ叙寫宜ヲ得ルコト、此レ正サニ詩人ノ難シト爲ス所以ナリ、  
 今世「メロードラーム」ト稱シテ一種ノ詩ヲ作り、悲慘ノ狀ヲ摸寫シテ眞ニ逼マリ、專ラ人心ヲ哀マシムルコトヲ務テ、其他ヲ知ラザル者有リ、而シテ眞ノ美學上ノ美ヲ知ル者ハ、大ニ之ヲ取ラズシテ乃チ云フ、此ノ如キ者豈ニ以テ詩ト爲スニ足ラン哉、昔ハ羅馬人其神祭ノ日ニ於テ、罪人ヲ聚メテ之ニ授クルニ刀劍ヲ以テシテ相闘ハシメ、衆人縱觀シテ其傷ヲ

負ヒ、或ハ死ニ至ルヲ見テ以テ笑樂トセリ、殘忍ノ極ト謂フ可シ、今「メロードラーム」ノ一體ヲ喜フ者ハ、何ヲ以テ此ニ異ナラント、又云フ西班牙人時々韃牛ヲ集メテ之ヲシテ闘ハシメ、其流血淋漓タルヲ觀テ以テ樂ト爲ス、此レ其慘酷未タ羅馬人ニ及バズト雖モ、抑々亦惻隱ノ心有ル者ノ所爲ニ非ズ、今「メロードラーム」ヲ喜ブ者ハ、亦此西班牙人ノ類ト謂フ可シト善イ哉言ヤ、

此ニ由リテ之ヲ觀レバ、美學上ノ美タル其性知ル可キナリ、文藝上ノ感情タル其質知ル可キナリ、其悲慘哀シム可キノ狀、其爽快喜ブ可キノ態、皆以テ人ヲ感ズルニ足ルト雖モ、此狀態中必ズ幾分餘地ヲ留メテ、作者其間ニ於テ時々ニ自ラ表見シテ、以テ自家ノ機軸ヲ發揮シ、讀者ヲシテ誦讀ノ際自ラ作者ノ心胸面目如何ノ人タルヲ想像セシムルコトヲ要ス、何トナレバ吾人ノ文藝ノ作ヲ愛好スルハ、當ニ其形貌ノ美麗ヲ喜ブノ



ミナラズ、亦必ズ并セテ作者ノ才思ヲ喜ブニル由ガ故ナリ、  
 凡ソ此ノ如キ者ハ、古今何レノ國ヲ論ゼズ、又其藝ノ何タルヲ論ゼズ、荷  
 モ美學ノ一科ニ屬スルキハ、皆然ラサル莫シ、夫レ希臘羅馬ノ作者ハ、今  
 代ノ作者ニ比スルキハ、自家ノ性情ヲ發揮スルコト稍ヤ寡シ、此レ固ヨリ  
 今人ノ遍ク知ル所ナリ、此レ他無シ、古昔ノ時人々獨立ノ道未ダ開ケズ、  
 相倚リテ力ヲ爲スコト多キニ居ルヲ以テ、是ヲ以テ其藝人作ル所有ルキ  
 ハ、自家一己ノ性情ヲ發揮スルコト知ラズシテ、多クハ其屬スル所ノ種  
 族ノ性情ヲ發揮シテ、以テ常ト爲ス、夫レ人々自ラ其性情ヲ發揮スルト、  
 其種族ノ性情ヲ發揮スルト、其事異ナリト雖モ、其性情ヲ發揮スルハ則  
 チ一ナリ、若シ然ラズシテ作者唯題目ノ形貌ヲ叙寫シテ、絶エテ性情ノ  
 觀ル可キ無キキハ、何ノ美カ之レ有ラン、是ニ知ル今代ノ藝術ノ美ヲ爲  
 ス所以ノ者ハ、作者自ラ其性情ヲ發揮スルニ在リテ、古昔ノ藝術ノ美ヲ

爲ス所以ノモノハ、作者各々其種族ノ性情ヲ發揮スルニ在ルコトナリ、故  
 ニ曰ク性情ヲ發揮スルコトハ、古今ヲ問ハズ、作者ノ必ズ務ムル所ナリ  
 ト、

夫レ古昔ノ時諸國各々其境界ニ雄據シテ、動モスレバ強、弱ヲ暴シ、衆、寡  
 ナチ虐シ、爭亂己ムコト無シ、是ニ於テ一國民タル者ハ、心チ一ニシ力ヲ協ヘ  
 法制並ニ風俗ノ力ヲ以テ痛ク相拘牽約束シテ相離ル、コト無ク、以テ外  
 侮ヲ禦ガザル可ラズ、是ヲ以テ民タル者、自家獨立ノ道ハ之ヲ舍キ、只管  
 ニ衆ト共ニ國ノ獨立ヲ圖ルコトヲ是レ務ム、希臘羅馬ノ形勢蓋シ此ノ如  
 シ、是ニ於テ乎藝人タル者モ亦其胸中一身獨立ノ情無クシテ、國ノ爲メ  
 ニスルノ念尤モ熾ナリ、此レ其作ル所有ル毎ニ、往々自家一己ノ性情ヲ  
 發揮セズシテ、其屬スル所ノ種族ノ性情ヲ發揮スル所以ナリ、  
 近世ニ至リテハ然ラズ、人々獨立自尊ノ道日チ逐フテ益々盛ニシテ、荷

モ他人ノ自由權ヲ妨害セザルヨリハ、人々意ニ任セ心ヲ肆ニシテ、其天ニ獲ル所ノ情性ヲ發揮暢遂スルコトヲ是レ務テ、顧忌スル所無シ、是ヲ以テ人各々心有り、各々情有リ、同一事同一物ヲ觀ルモ、之ヲ觀ルノ情自ラ相異ニシテ、絶エテ他人ト相類スルコト無キニ至ル、此レ其作者ノ各々自己ノ機軸ヲ出シテ以テ自ラ表見スル所以ナリ、

近代ノ人ハ人々自ラ其身ヲ主リテ、絶エテ他人ニ繫屬スルコト無シ、古人ニ在リテ人々ノ身ハ、各々皆其一國人ノ守ル所ニシテ、人々各々皆其一國人ニ繫屬セザル莫シ、若シ是道ニ反スルキハ、復タ生ヲ計ルノ道無シ、是ヲ以テ公衆相倚リテ事ヲ爲スノ風、父ヨリ子ニ傳ヘ、又孫ニ傳ヘ、以テ一國ノ基址ヲ爲セリ、且ツヤ當時智識未タ大ニ進暢セズシテ、疑義ヲ討論シ、相攻撃辨難シテ眞理ヲ搜索スルカ如キハ、人ノ未タ知ラザル所ナリ、是ヲ以テ論說ナリ、風習ナリ、大抵因襲シテ之ヲ保チ、變更スルコト有ル

コト無シ、故ニ各邦國各種族ニ就テ云フキハ、其情性深ク相異ナル有ルモ、同一國同一種族ノ中ニ就テ觀ルキハ、人々未タ必ズ相同シカラズンバアラズ、是ヲ以テ人若シ印度希臘古昔日耳曼スカンヂナーク等ノ詩ヲ觀ルニ、其作者ノ數頗ル多シト雖モ、其政治、人倫、宗教等ニ至リテハ、大抵相同シカラザル莫シ、

此ニ由リテ之ヲ觀レバ、或ハ自家一己ノ性情、或ハ己レ屬スル所ノ種族ノ性情ヲ發揮スル古今藝術ノ差異、誠ニ相異ナリト雖モ、之ヲ要スルニ其性情ヲ發揮スルコトハ則チ一ナリ、此レ作家タル者ノ知ラザル可ラザル所ナリ、

○第三章 私愛ノ念 ○文藝ノ作ヲ評スルニ於ケル私愛ノ念ノ力  
文藝ノ作ノ美不美ヲ爲ス所以ノ者ハ、作者ノ自ラ其性情意趣ヲ發揮スルコトノ巧拙ニ在ルコトハ、前ニ既ニ之ヲ論ゼリ然レモ茲ニ又一事ノ論ス

可キ有リ、曰ク吾人ノ人ノ作ヲ評スルヤ、其所論中ノ意思ノ現ニ吾人ノ意思ト同キト否ラザルトニ由リテ、之ヲ軒輊スルコト多キニ居ル、夫レ既ニ藝術ノ美ヲ以テ作者一己ノ意思ヲ發揮スルニ在リト爲スルハ、其意思ノ我レト同キト否ラザルトニ由リテ之ヲ軒輊スルハ、畢竟不公平ト謂ハザルヲ得ズ、且ツヤ意思ノ物タル、古今或ハ相異ニ、諸國或ハ相異ナリ、然ルヲ今代ノ意思、我國ノ意思ヲ以テ、古昔ノ意思、外國ノ意思ヲ評スルハ、此レ猶ホ今代ノ學術ヲ以テアリストット若クハアルシメードノ學術ヲ評スルカ如シ、不公平ト謂ハザル可ケン哉、夫レアリストットアルシメードハ希臘ノ最博通ト稱スル者ナリ、然レモ之ヲ今代ノ學者ニ比スルキハ、大ニ相劣ルヲ免レズ、此レハ則チ古今文物ノ進否乃チ然ラシムルナリ、然ルヲ今人ヲ以テ此二人ヲ評シテ可ナラン乎、今己レノ國ノ意思ヲ以テ人ノ國ノ意思ヲ評シ、此ヲ以テ作物ノ高下ヲ品第スルハ、何ヲ

以テ此ニ異ナラン、

夫レ己レト意思ヲ同クスルカ爲メニ一作物ヲ愛スルハ、是レ之ヲ私愛ノ念ト謂フ、此レ固ヨリ不公平ト謂ハザルヲ得ズ、然レモ之ヲ要スルニ吾人ノ終ニ免レザル所ナリ、吾人一タビ藝術ノ作ヲ觀ルキハ、必ズ先ツ自己ノ意思ヲ以テ之ヲ推シ、其意思我レト相同シキキハ、陰カニ之ヲ愛シ、相同シカラザルキハ、陰カニ之ヲ妬ク、此ノ如キ者ハ務メテ自ラ克クント欲スルモ、往々此ニ陥キリテ自ラ知ラザルナリ、  
今一例ヲ舉ケンニ、夫ノスカンヂナーヴ國ノ詩「エダー」及ヒ「ニーベロンゲン」ノ如キハ、其藝術上ノ美何如ニ高大ナルモ、之ヲオメールノ「イルリヤード」及ヒ「オヂセー」ニ比スルキハ吾人必ズ其遠ク相及バザルヲ見ル是ノ如キ者ハ何ソヤ、夫レオメールノ詩ハ時代我レト相距ルコト遠シト雖モ、其中發見スル所ノ政治風俗、往々我レト相類スル所有リ、又其人倫

ノ道モ亦略ホ相同シ、是ヲ以テ吾人之ヲ一讀スルキハ、自ラ其中詠スル所ノ人物ト相和スルカ如キヲ覺ユエクトルナリアンドロマックナリベ  
 子ロップナリ、吾人自ラ之ヲ愛戀シテ已ムコト能ハズ、此レ正サニ吾人ノ此  
 詩ヲ美トシテ之ヲ愛スル所以ナリ、エダー及ヒニローベロンゲン中ノ人  
 物ニ至リテハ然ラズ、其國風俗習尙我ト相反スルコト此ノ如クナルヲ以  
 テ、其人物我ニ於テ少モ愛戀ノ情ヲ起スコト無シ、獨愛戀ノ情ヲ起サザル  
 ノミナラズ、其人物ノ兇猛闘ヲ好ムノ氣象、正サニ我ヲシテ之ヲ憎疾セ  
 シム、夫レ然リ、是ヲ以テ一タビ此詩ヲ讀テ其人物ニ對スルキハ、恰モ別  
 天地ノ人ト晤話スルカ如ク、其言語動作一々我ヲシテ驚怪セシムルニ  
 足リテ、絶エテ我ヲシテ夫ノ私愛ノ情ヲ起サシムル無シ、顧フニ此二詩  
 ノ如キ、其作者ノ自ラ意思ヲ發揮スルコトハ、極テ巧妙ナルニ論無シト雖  
 モ、唯其意思ノ我ト相類セザルヲ以テ、我レノ之ヲ喜フコト、オームルノ詩

ノ甚キガ如クナラズ、故ニ曰ク私愛ノ念ノ藝術ノ作ニ於ケルハ、不公平  
 ナルニ論無シト雖モ、吾人ノ終ニ免レザル所ナリ、

夫レ吾人ノオームルノ詩ヲ愛シテ、スカンヂナーヴノ詩ヲ愛セザル所  
 以ノ者ハ、蓋シ我國ノ道德實ニ嘉尙ス可キ者有ルガ爲メナリ、我レノ道  
 徳ニ於ケル、其國ニ奉スルノ際ト、家ニ居テ自ラ守ルノ際トヲ論セズ、其  
 意思ノ高キコト遠クスカンヂナーヴノ諸人ニ勝ルコト固ヨリ言ヲ待タズ、  
 然レモ此事ヲ以テ之ヲ美術上ノ作物ニ用フルキハ、理論ニ於テ當ヲ得  
 タリト爲サズ、他無シ、文藝ノ美ヲ爲ス所以ハ、道德ノ純粹ナルニ在ラズ  
 シテ、作者ノ能ク其感情ヲ發揮シテ、讀者ヲシテ明ニ之ヲ解スルコトヲ得  
 セシムルニ在レバナリ、是故ニ純然ノ理論ニ由リテ言フキハ、凡ソ詩ノ  
 貴フ可キハ、其詞句ノ瑰麗ニシテ意趣ノ靈活ナルニ在ルノミ、其餘ハ必  
 ズシモ問フ所ニ非ズ、且ツ凡ソ文藝ノ作ヲ賞鑒スルニ於テ、吾人自ラ有

スル所ノ道德若クハ智識ヲ以テ之ヲ斷シテ、絶エテ作者ノ感情如何ヲ問ハザルキハ、其弊ヤ茫乎トシテ據ル所無キニ至ラン、世ノ僻說ヲ爲ス者、動モスレハ輒チ云フ、文藝ノ優劣ハ本ト評定スルヲ得可キ者ニ非ズ、何トナレハ嗜好ナル者ハ、人々異ナルヲ以テ、甲ノ美トスル所ハ、或ハ乙ノ不美トスル所ナルヲ以テナリト、是ニ於テ乎專ラ讚稱スル者ノ多寡ニ由リテ軒輊ヲ定メント欲ス、顧フニ此論ノ如キハ、繆戾ノ甚キ者ナリ、夫レ鑒賞ノ識ハ庸人ノ有スル所ニ非ズ、然ルヲ專ラ衆評ノ數ヲ以テ之ヲ決スルコト、議院ノ事條ノ如クセント欲スルハ、妄ニ非サレバ狂ナリ、然レモ一タビ作者ノ感情ヲ去リテ別ニ尺度ヲ求メント欲スルキハ、其弊終ニ此繆戾ニ至ルヲ免レズ、故ニ曰ク凡ソ文藝ノ美不美ハ、唯作者ノ能ク自ラ感情ヲ發揮スルト否ラザルトニ在リト、且ツ若シ文藝ノ賞鑒ニ於テ讚稱者ノ多寡ヲ以テ尺度ト爲スルハ、具眼

者ノ所見ハ全ク其力ヲ喪フニ至ラン、今畫ヲ以テ之ヲ證センニハ、レオナールドワンシーミケランシランドノ如キハ、古今絶類ノ大家ニシテ、尤モ善ク夫ノ意趣ヲ發揮スル者ナリト雖モ、眞ニ其畫ヲ賞玩シテ、作者ヲシテ遺憾無カラシムルコトハ、具眼者ニ非ザレバ能ハズ、若夫レラファエルノ聖母ノ像、及ヒアルバンヌギードノ諸美婦人ノ像ノ如キハ、端麗有リテ風骨足ラズ、然レモ庸衆人ハ往々此ヲ以テ迥ニレオナールミケランシランドノ畫ノ上ニ置カント欲ス、然ルニ若シ多寡ヲ以テ之ヲ定ムルキハ、竟ニ此說ニ從ハザルヲ得ズ、而シテ可ナラン乎、此ニ由リテ之ヲ觀レバ、詩學ノ理タル知ル可キナリ曰ク詩人苟モ事物ヲ觀察スルノ才有リテ、此ニ由リテ心ニ感ズル所有リ、又其感ズル毎ニ能ク自ラ其感慨ノ狀ヲ記憶シテ之ヲ筆スルコトヲ得、又其詞句瑰麗ニシテ、讀者ヲシテ一唱三嘆ノ味有ラシム、此ノ如クナルキハ、以テ詩人ト爲

ス可シ、若夫レ其論叙スル所ノ事實ノ道德ノ旨趣ニ適スルト否ラザルトハ、少シモ問フ所ニ非ズ、  
 茲ニ云フ所ハ即チ詩學純然ノ理論ニシテ、其意至テ簡單ナリ、然レモ實際ニ由リテ云フモ亦常ニ此ノ如クナルヲ能ハス、蓋シ吾人少時ヨリ習慣ニ由リテ漸次ニ心ニ獲ル所ノ者、即チ政治上ノ論說ナリ、道德ノ旨趣ナリ、風俗ナリ、禮儀ナリ、此等ノ事皆深ク吾腦中ニ印シテ復タ消除ス可ラス、是ヲ以テ一作物ニ對スル毎ニ、此レ等ノ念必ス全然トシテ湧出シ、以テ尺度ト爲シ、以テ其作物ノ高下ヲ定ムルハ、此レ自然ノ情ナリ、是ニ於テ夫ノ純然ノ理論ニ據リ、專ラ作者ノ感情意趣ヲ權度シテ、其他ノ事ヲ問ハザラント欲スルモ甚難シ、此レ固ヨリ賞鑒ノ正法ニ非スト雖モ、抑モ實際ノ已ムヲ得ザル所ナリ、  
 夫レ然リ、是ヲ以テ吾人一作物ヲ觀ル毎ニ、其趣向情意苟モ吾人ノ習尙

ニ適合スルカ、若クハ其道德ノ旨趣、苟モ吾人ノ崇奉スル所ト相類スルモ、其美學上ノ巧未タ甚至ラザルモ、動モスレハ之ヲ問ハザラント欲ス、即チ院劇ノ詩ノ如キモ、其作如何ニ巧ナルモ、若シ兎惡ノ徒全勝ヲ得テ、善類此レカ爲メニ摧敗シテ、絶エテ報復ノ快ヲ得ザルガ如キハ、吾人ノ甚惡ム所ニシテ、復タ其叙寫ノ巧ヲ顧ミルニ暇アラズ、獨リ其巧ヲ顧ミサルノミナラズ、或ハ其作者ノ爲メニ憎怨ノ念ヲ發スルニ至ラントス、此レ自然ニ已ムヲ得ザル所ナリ、而シテ此情ヤ庸衆人ノ少シモ文藝ノ美ノ在ル所ヲ知ラサル者ハ尤モ甚シ、此レモ亦作者ノ知ラザル可ラザル所ナリ、

凡ソ此ノ如キ者ハ、皆實際上必ス免レザル所ナリ、故ニ賞鑒家タル者、必ズ盡ク理論ノ旨趣ニ由リテ、藝術ヲ判斷セント欲スルモ終ニ得可ラス、然レモ苟モ賞鑒家ヲ以テ自ラ任ズルモ、宜ク務テ是ニ注意シ、痛ク自

ヲ戒メテ苟モ作物ヲ賞玩スルキハ、力ノ及ブ所、其作者ノ才能如何ヲ觀察シテ、其他ノ旨趣ハ問ハザルコトヲ求ム可キナリ、是ノ如クスルキハ、庶クハ美學ノ道理益々明ニシテ、其判斷公平ニ近キコトヲ得ン、夫レ美學ト道德トハ固ヨリ其旨趣ヲ異ニスト雖モ、然レモ此ヲ以テ必ズ此二者ヲ分割シテ終ニ相合ス可ラズト爲スルハ、亦繆戾ヲ免レズ、予ヲ以テ之ヲ觀ルニ、美學ヲ以テ專ラ形貌ノ美ニ基セント欲スルハ、固ヨリ非ナリ、美學ヲ以テ專ラ道德ノ美ニ基セント欲スルモ亦非ナリ、然レモ作家タル者、若シ專ラ其才能ヲ發揮スルニ注意シテ、絶エテ意ヲ道德ニ注メズ專ラ奇異ノ旨趣ヲ摸寫シテ絶エテ人情ヲ問ハザルキハ、亦中庸ヲ得タリト爲カズ、之ヲ例ヘハ人物ヲ摸寫スルガ如キ、若シ一意ニ兇猛慘忍ノ狀ヲ叙シテ、絶エテ善良仁厚ノ態ヲ寫サス、或ハ其趣向ニ於テ專ラ逆亂ニ比シ、殘暴ニ黨シテ、善類ヲシテ摧折シ盡キシムルカ如キハ、

甚良好ノ手段ニ非ズ、設ヒ作者常ニ此ノ如クナルモ、其藝術ノ上ヨリシテ言フキハ、固ヨリ間然ス可キ無シト雖モ、獨リ心ニ愧ツルコト無キヲ得ン乎、且ツ夫レ善ヲ好ミ惡ヲ惡ムコトハ、人ノ人タル所以ニシテ、修身ノ業此ニ由リテ立チ、治國ノ道此ニ由リテ存ス、此レ天下ノ尤モ重ンズ可キ所ナリ、故ニ作者其美學上ノ感情意趣ヲ發揮スルニ於テ、并ビテ意ヲ是ニ用フルキハ、其光譽モ益々遠近ニ馳スルヲ致ス、即チ看客ニ在ルモ、其目ヲ怡バシ、心ヲ樂マシムルノ間ニ於テ、自ラ以テ戒ムル有リテ、斯ニ以テ夫ノ道德ノ域ニ躋ルコトヲ得バ、其利益タル蓋シ鮮少ナラズ、但賞鑒家ニ在リテ飽クマデ注意ス可キ有リ、他ニ非ズ、夫ノ道德ノ美ト藝術ノ美トヲ以テ一般ニ看做シテ作者ヲシテ冤ヲ蒙ラシメザルニ在リ、更ニ一事ノ言フ可キ有リ、蓋シ兇惡ノ狀ヲ叙スルコトハ、善良ノ態ヲ寫スニ比スルキハ、其巧ヲ見ハスコト更ニ易キ者有リ、何トナレバ惡事ナ

ル者ハ、自ラ奇幅ノ狀有リテ、善事ハ多クハ平易ナルヲ以テナリ、是ヲ以テ稗史家バルザックノ如キ、其惡漢ノ所爲ヲ摸寫スルキハ、精采益々加ハリ、實ニ人ヲシテ切齒扼腕自ラ禁セザラシムルニ至ル、若シ夫レ其善人ノ事ヲ叙スルキハ、往々冗漫踈腐ニシテ、人或ハ倦怠スルヲ致ス、獨シエークスビールモリエールハ然ラス、其惡人ハ愈々兇惡ニシテ、實ニ人ヲシテ齟齬セシメ、其善人ハ愈々善良ニシテ實ニ人ヲシテ歎慕セシム、此レ其腕力ノ鉅大ニシテバルザック輩ノ遠ク及バザル所ナリ、

○第四章 詩ノ語 ○諧韵ヲ用ヒサル詩 ○詩ノ境界

凡ソ古今何ノ國ニ在リテモ、詩ナル者ハ語言ノ用法ニ於テ一種特異ノ性ヲ有セリ、而シテ其用法タルヤ、自ラ其語言ヲシテ極テ鏗鏘ナラシメ、又其意義ヲシテ極メテ奇幅ナラシム、此其大概ナリ、蓋シ所謂用法ハ其

類頗多端ナリト雖ヒ、之ヲ要スルニ必ス一種相通スル所ノ性質有ラザル可ラズ、他無シ、此レ無ケレハ初ヨリ詩ヲ成サマルヲ以テナリ、凡ソ詩ハ何ノ國ニ在リテモ、措辭句法共ニ散文ト體ヲ異ニシ、或ハ倒句ヲ用フル有リ、或ハ略語ヲ用フル有リ、又其譬喻ノ如キモ一種極テ奇險ニシテ斬絶ノ態有リ、凡此等ノ事ハ皆散文ニ於テ嚴ニ禁スル所ニシテ、詩ニ在リテハ極テ當ヲ得タリト爲ス、

顧フニ音樂ナル者ハ、聲音ヲ以テ構成スル者ナリ、然レヒ其音調大ニ平時ノ音調ト相類セズ、蓋シ人ノ言語ノ間、自ラ幾分ノ音調有リト雖モ、音樂ノ音調ニ至リテ、其抑揚ノ盛ナル、大ニ平時ノ音調ノ及フ所ニ非ス、唯詩モ亦猶ホ是ノ如シ、其用フル所ノ文字ハ、尋常散文ト異ナルヲ無シト雖モ、之ヲ綴リ之ヲ離テ、或ハ翕セテ之ヲ張り、或ハ放チテ之ヲ肆スルニ及ビテ其鋪陳排比ノ法、大ニ散文ト體ヲ異ニス、此ノ如キ者ハ、一ニ音樂



ノ平時ノ言語ト異ナルニ類スルニ非ズ乎、

詩ノ屬辭ノ法、之ヲ分テハ二ト爲ス、曰ク作者ノ自ラ其意趣ヲ發揮スルニ係ル者ナリ、曰ク讀者ヲシテ作者ノ意趣ニ感ズルヲ得セシムルニ係ル者ナリ、

此ノ二者ニ就テ其作者ノ自ラ意趣ヲ發揮スルニ係ル者ハ、前ニ既ニ之ヲ論セルヲ以テ、茲ニ復タ之ヲ言ハズ、他無シ、作者苟モ心ニ感ズル所有ルキハ、自ラ意趣ヲ發シテ自ラ之ヲ解スルヲハ、本ト難事ニ非ザルヲ以テナリ、若夫レ讀者ヲシテ之ヲ解セシムルニ至リテハ、其事難クシテ大家ノ大家タル所以ハ、正ニ此ニ在リ、故ニ以下將ニ之ヲ論セントス  
前ニ余ノ書學ヲ論ズルヤ、蓋シ云ヘリ、人ノ目ニ於ケル、同一采色若クハ同一形貌ヲ觀テ、良々久キキハ、目力疲頓シテ復タ支ヘザルニ至ル、唯耳モ亦然リ、同一ノ音調ヲ聽クヲ良々久キキハ、聽力疲頓シテ復タ支ヘザ

ルニ至ル、故ニ畫家ノ采色線畫ニ於ケル、音律家ノ聲音節奏ニ於ケル、務テ變化ヲ致シテ觀ル者、聽ク者ノ神經ヲシテ、屢々弛張シテ倦マザラシムルヲ要スト、即チ詩ノ屬辭モ亦同シ、蓋シ吾人ノ意識神經ノ力タルヤ、其若干時間ニ於テ費用スル者、其量固ヨリ定限有リ、此限ヲ踰ユルキハ、疲極シテ復タ舉ラザルニ至ル、是ヲ以テ詩人苟モ其讀者ヲシテ盡ク己レノ意趣ヲ了解シテ、己レト感ヲ同クセシメント欲スルキハ、當サニ務テ讀者ノ意識神經ヲ重嵩シテ、之ヲシテ大ニ疲ル、ニ至ラシメザル可シ、

今夫レ詩ヲ讀ム者ハ、先ヅ其句ヲ分チ章ヲ別チテ、然後其義ノ在ル所ヲ求ム、然ルニ若シ其句法太難深ニ、其章法太錯雜ニシテ之ヲ讀ムニ於テ大ニ力ヲ費ヤスキハ、讀了ハルノ後、心神己ニ疲倦スルヲ覺ユ、此ノ如クナルキハ、何ノ暇アリテ其感情ノ美ヲ味フルヲ得ン、且ツ言語文字ハ

本ト何ノ爲メニシテ設クル乎、己レノ意思ヲ載セテ之ヲ人ニ達スルガ爲メニ非ズ乎、果シテ然ルキハ、苟モ言語文字ヲ用テ己レノ意趣ヲ宣ベント欲スル者ハ、當ニ務テ明瞭ナルヲ求メ、一切本旨ヲ明ニスルニ便セズシテ、反リテ之ヲ昧クスルニ足ル可キ者ハ、皆芟リテ之ヲ去ル可キナリ、

今夫レ機關ヲ用ヒテ物ヲ製スル者、若シ其機關ノ構法太錯雜ニシテ、或ハ甲ノ部ト乙ノ部ト相軋シ、或ハ丙ノ部ト丁ノ部ト相抵スルガ如キヲ有ラバ、此數部徒ラニ力ヲ費ヤスヲ多クシテ、其物ヲ製スルノ力、之カ爲メニ大ニ減殺セラル、ト必セリ、人ノ意識神經ノ力モ、亦猶ホ此ノ如キナリ、若シ字句ヲ剖析シ、章段ヲ分別スルニ於テ、過半ノ精神ヲ用フルキハ、遺ル所幾分無シ、何ヲ以テ明ニ作者本旨ノ在ル所ヲ知リテ、感ズルヲノ深キヲ得ン哉、

今夫レ山水ノ勝景ヲ愛スル者、山ヲ攀テ嶺ニ升ルニ、若シ其逕路太崎嶇ニシテ、躋登ノ勞吾人ノ體力ト太相副ハザルキハ、其絶頂ニ達スルニ及ビ、必ズ呼吸奄々トシテ心神耗竭スルヲ免レズ、是ノ如クナルキハ、一望千里ヲ極ムルノ快有ルモ、復タ何ノ心ヲ怡バシムルヲ有ラン、又其甚キ者ニ至リテハ、中途ニシテ斃躋センノミ、詩句ノ太艱深信屈ナル者ハ、此ト異ナルヲ無シ、

此事ニ係リテハ實際上種々ノ要款有リ、若シ之ヲ論ズルキハ、議論或ハ太煩密ニシテ、本書ノ前後ト相稱ハザルニ至ラン、是故ニ先ヅ其尤要ナル者ヲ把リテ之ヲ言ハン、餘ハ類ヲ以テ推ス可キナリ、凡ソ言語ノ詩句ニ入ル可キ者ハ、務テ其緝綴簡短ニシテ字音清楚ナル者ヲ取リテ、必ズ其言ハント欲スル所ノ意思ト緊切ニシテ曖昧ナラザラシム可シ、夫レ然リ、是故ニ一切文字ノ其音ノ直チニ物象ニ擬スル者

ハ、詩句ニ於テ極テ宜シ、何トナレバ其音早ク己ニ物ノ形ヲ見ハスヲ以テ、誦讀ノ際人ヲシテ直チニ意義ノ在ル所ヲ知ラシム、或ハ其未タ此ニ至テザルモ、畢竟意義ヲ解スルニ於テ、必ズ心神ノ勞ヲ減スルコトヲ得夫レ人ノ詩ヲ讀ムニ於テ、精神甚ク疲レサルキハ、其意ヲ了スルニ於テ生氣餘リ有リ、是ニ於テ乎、其感情正ニ作者ト其高下ヲ同クスルコトヲ得、是ノ如キ者ハ音ヲ以テ物象ニ擬スル文字ノ、他ノ文字ニ勝サル所以ナリ、

又其他ノ文字ヲ用フルニハ、務テ其意義切當ニシテ、直チニ其言ハント欲スル所ノ事ヲ指シテ、有餘不足無キ者ヲ取ル可シ、一切意義ノ廣汎ナル者ハ、之ヲ用フルヲ避ク可シ、他無シ、意義廣汎ナルキハ、既ニ解シテ以テ甲ト爲ス可ク、亦解シテ以テ乙ト爲ス可クシテ、讀者自ラ之ヲ限定シテ、作者ノ本旨ヲ求ムルニ於テ、其勞必ズ過多ナルヲ致セバナリ、

文字ヲ排置スルコトモ、亦詩ニ於テ極テ肝要ナリ、我佛蘭西ノ文法ニ於テ、總テ形容ノ辭ヲ以テ實辭ノ後ニ置クコトハ、意義ノ明瞭ニシテ且ツ速ニ解スルヲ得ル上ニ於テ言フキハ、甚ク欠クル所有リテ即チ詩句ニ於テ甚宜ヲ得ザル者ナリ、之ヲ例ヘハ「アルブル」木ノ「デセシエー」乾燥シタト云フカ如キ「アルブル」ハ實辭ナリ「デセシエー」ハ形容辭ナリ、然ルニ形容ノ語ヲ以テ後ニ置キ實辭ヲ以テ前ニ置テ即チ「アルブル、デセシエー」ト曰フキハ、之ヲ聽ク者先ツ「アルブル」ノ語ヲ聞テ、便チ以爲ラク、尋常ノ樹木ナリト、是ニ於テ枝幹ナリ、葉花ナリ、凡ソ尋常樹木ノ有スル所ハ、皆瞬時ニ心ニ浮ヒテ之ヲ想像ス、然ルニ次ニ「デセシエー」ノ語ヲ聞クキハ、其樹木タルヤ、畢竟尋常ノ樹木ニ非ズシテ、枯燥シタル樹木ナリ、是ニ於テ其初ニ想像セシ所ノ枝葉等ノ意思ノ如キハ、皆之ヲ除テ易フルニ摧敗枯槁ノ意思ヲ以テセザル可ラズ、此レハ則チ人ノ言語ヲ聽キ、人ノ文辭ヲ讀ムニ於

テ、甚不便ナル者有ルヲ免レズ、若シ又是ノ如クニシテ、俄ニ意思ヲ易フルノ害ヲ免レント欲スルモ、其初メ「アルブル」ノ語ヲ聽テハ、未タ「デセシエ」ノ語ヲ聽カサル間ハ、自ラ戒メテ何ノ想像ヲモ下サズ、必ズ「デセシエ」ノ語ヲ聽テ、然後其意思ヲ全クスルヲ求ム可シ、此ノ如クスルモ、當初ノ枝葉等ノ意思ヲ除テ、俄ニ摧敗枯槁ノ意思ヲ下スノ不便無キヲ得、然レモ其初「アルブル」ノ語ヲ聽ク時、自ラ戒メテ何ノ想像ヲモ下サハ、カ如キハ、畢竟自然ノ情ニ非ス、何トナレハ人ノ性タル一語ヲ聽キ、一字ヲ讀ムモ、必ズ直チニ想像ヲ起シテ、一切此語若クハ此字ニ属スル意思ハ、皆之ヲ心ニ浮ブル者ナリ、然ルチ今自ラ之ヲ抑ヘテ發セサルカ如キハ、豈之ヲ人情ノ常ト謂フヲ得ン哉、故ニ余ハ以爲ラク、形容ノ語ハ之ヲ實辭ノ前ニ置クニ如カズト、即チ「アルブル、デセシエ」ノ語ノ如キモ、之ヲ反シテ「デセシエ、アルブル」ト曰フナリ、此ノ如クナルモ、聽ク者先ツ

摧敗枯槁ノ意思ヲ得テ、次ニ樹木ノ意思ニ及フヲ以テ、其想像ノ順序大ニ正ヲ得テ、人ノ性ニ悖ラサルヲ得可シ、

且詩ノ如キハ感慨ヲ發スルヲ以テ、旨趣ト爲ス者ナリ、然ルニ其一語ヲ聽キ、若クハ一字ヲ讀ミテ自ラ戒メテ想像ヲ發セズ、必ズ次ノ語ヲ得テ始テ意思ヲ發ス、此ノ如クスルモ、吾カ意識自然ニ疲頓シテ其物ニ感ズルヲ純然ナラザルヲ致ス、之ニ反シテ、一語ヲ聽ケハ一意思ヲ發シ、又一語ヲ聽ケハ又一意思ヲ發シ、此ノ如クニシテ、順次ニ結局ニ至ルモ、吾レノ意識少シモ障礙ヲ受クルヲ無クシテ、其感慨斯ニ以テ純然ナルヲ得、余故ニ曰ク我佛蘭西ノ文法ニ於テ、形容辭ヲ以テ實辭ノ後ニ置クヲハ、甚自然ノ順序ニ非ズト、

夫レ然リ、是故ニ我邦ニ在リテモ、詩ニ於テハ動モスレハ倒句法ヲ用ヒテ、形容辭ヲ前ニ置クヲ有リ、此レ以テ少シク其弊ヲ醫スルニ足ル、然レ

此之ヲ要スルニ、倒句ハ罕レニ用フル所ナルヲ以テ、畢竟文法ノ弊ヲ免  
 レズ、顧フニ我邦一種文法家ト稱スル者、苛細ノ規ヲ主張シ、天下ノ詩文  
 章ヲ舉ケテ、之ヲ其規律中ニ入レント欲ス、即チ形容辭ヲ以テ前ニ置キ、  
 實辭ヲ以テ後ニ置クガ如キ、文法家ノ規律ナリ、其他句法章法ノ類一ニ  
 シテ足ラズ、皆我邦古來ノ習慣ヲ泥守シ、若クハ一時自己ノ私見ヲ鼓倡  
 スルノ定ムル所タルニ過キズ、而シテ諸大家ノ輩ハ、往々文法家ノ非ヲ  
 知リテ、肯テ之ニ從ハズ、因リテ考フルニ、今ヨリ以往世人皆其非ヲ知ル  
 ニ及バ、夫ノ苛細ノ規律ハ皆廢レテ句法章法並ニ自然ノ順序ニ歸入  
 スルコトヲ得ン、

譬喩ノ用ハ、人ノ意識ノ勞ヲ省クニ於テ、其功極テ大ナル者有リ、蓋シ譬  
 喩ノ用タル作者一事物ヲ擇ヒ、其中ノ一意思ノ己レノ言ハント欲スル  
 所ノ意思ト相類スルキハ、則チ此ヲ舉ケテ之ニ易フ、而シテ讀者モ亦其

語中ニ於テ、特ニ作者ノ言ハント欲スル所ノ意思ト相類スル者ヲ取り  
 テ之ヲ想像シテ其他ノ意思ハ、皆之ヲ除去ス、是ニ於テ其意義大ニ活潑  
 靈動ナルコトヲ得ズ、之ヲ例ヘバ物ノ高大ナル者ヲ言ハント欲シテ、山若  
 クハ海ヲ以テ之ヲ譬ヘンニ、讀者ハ山海ノ二者ニ就テ、唯其巍峨タル處  
 ト渺茫タル處トヲ取りテ、山中有ル所ノ草木禽獸、海中有ル所ノ濤瀾魚  
 介等ノ意思ハ、皆之ヲ除去ス、而シテ山ノ高キ狀ト海ノ廣キ狀ト、直チニ  
 眼前ニ著ハル、ヲ以テ其意思自ラ活潑ナルヲ致ス、此レ皆人ノ意識ノ  
 勞ヲ省ク所以ナリ、

其他人ノ意識ノ勞ヲ省ク所以ノ文法一ニシテ足ラズ、曰ク變化ノ法ナ  
 リ、此レハ種々ノ事ヲ舉ケテ、或ハ大ナリ、或ハ小ナリ、或ハ高ナリ、或ハ低  
 ナリ、人ノ神經ヲシテ常ニ變轉シテ倦マザラシム、曰ク層累ノ法ナリ、此  
 レハ小ヨリ大ニ之キ、低ヨリ高ニ之キ、人ヲシテ之ヲ覺エザラシム、蓋シ

亦變化法中ノ一種ナリ、曰ク反對法ナリ、物ノ尤モ相反スル者ニテ舉ケ、其一ヲ以テ其一ヲ照映シ、相俱ニ益々活潑ナルヲ得セシム、此レ皆人身窮理ノ道理ニ源スル者ニシテ、決シテ一時偶然ノ規律ニ非ス、今其例ヲ舉ケンニ、雪白ノ紙上ニ於テ一墨點ヲ施スルハ、墨ハ益々黒ク、紙ハ益々白クシテ、黑白俱ニ章々タルヲ、淡黒色ノ紙上ニ印スル時ニ比シテ大ニ相勝サル有リ、此レ正ニ反對法ナリ、吾人若シ百斤ノ重ヲ持シテ半時許ヲ經ルルハ、手腕大ニ疲ル、ヲ覺ユ、若シ其初ニ於テ二十斤ヲ持シ、次ニ三十斤ヲ持シ、漸々上リテ百斤ニ至ルルハ、其疲ル、ヲ俄ニ百斤ヲ持スル時ノ如クナラズ、此レ正ニ層累ノ法ナリ、吾人山ニ遊バンニ、數十里ヲ躋攀シ或ハ數十里ヲ降下スルルハ、脛脚疲レテ歩スルヲ能ハズ、若シ之ニ反シテ、羊腸彎環シテ或ハ躋リ或ハ降ルルハ、終日歩スルモ甚疲ル、ニ至ラズ、此レ正ニ變化ノ法ナリ、

又聲韻ヲ諧スルカ如キモ、畢竟變化ノ法ニ外ナラズ、何トナレバ一句ヲ讀ミテ又一句ニ至リ、其結尾ノ音相同キルハ、吾人ノ精神自ラ往テ而シテ返ルカ如キヲ覺ユ、夫レ其往テ而シテ返リ、返リテ而シテ又往ク、此レ正ニ吾カ精神ヲ變化スル所以ナリ、

凡ソ此レ等ノ手段ハ、皆詩人實際ノ用フル所ニシテ、其他細微ノ諸法一ニシテ足ラズ、若シ一々之ヲ舉グルルハ、恐クハ煩密ニ過グル有ラン、故ニ姑ク其梗概ヲ舉ケテ以テ例ヲ示スノミ

此ニ由リテ之ヲ考フルニ、詩ノ文學ニ於ケルハ、猶ホ音樂ノ聲音ニ於ケルカ如シ、其諸法ハ皆物理自然ノ有スル所ニシテ、庸人ト雖モ、或ハ之ヲ用フルヲ有リ、但詩人樂人之ヲ用フルニ至リテハ、其法愈々密ニ愈々精ニシテ、復タ遺憾無キニ至ル、之ヲ要スルニ、詩人樂人自ラ之ヲ臆ニ取ルニ非ズシテ自ラ事物ノ間ニ存スル者ナリ、

此ニ由リテ之ヲ觀レハ、近時詩人「ロマンチック」家新調ト號スル者、諧韻ノ法  
 ニ於テ極テ意ヲ致スガ如キハ、其理甚明白ニシテ間然ス可キ無シ、此ヨ  
 リ前ニ在リテハ、「ロマンチック」家、往々諧韻ニ於テ自在ヲ欠ク者有リ、蓋シ  
 中古ノ時「ロマンチック」大家ノ才ヲ以テ改革スル所有ラント欲スレトモ得  
 ズ、繼テマレル「ロマンチック」起ルニ及ビ、其人天姿強剛峻直ナルヲ以テ、詩ノ調モ亦  
 隨フテ峭直ニ過ギテ婉逸ノ態ニ乏ク、往々人ヲシテ倦厭セシムルヲ免  
 レズ、其後博士家ノ説起ルニ及ビ、法ヲ用フルヲ煩細ニシテ、作者復々大  
 ニ意ヲ肆ニシテ作ル所有ルヲ得ズ、蓋シ博士家ノ言ニ從フキハ、紀律過  
 密ニシテ、一字ヲ下シ一句ヲ作ルモ、推敲百遍セザルヲ得ズ、是ニ於テ人  
 巧餘リ有リテ天趣足ラズ、流弊ノ極詩學竟ニ亡ナルニ幾シ、近世ニ至リ  
 幸ニ一豪傑出テ、之ヲ麾シ、「ロマンチック」家復々起リテ之ニ應ジ、世ノ讀  
 者モ亦翕然トシテ之ニ靡シ、終ニ夫ノ古法家ヲシテ亦轍ヲ改メシムル

ニ至レリ、此レ豈ニ文運ノ一大幸福ニ非ズ乎、豪傑ノ士トハ誰ソウイクト  
 ルユゴ一是レナリ、

夫レ詩ノ韻礎有ルハ、猶ホ音樂ノ聲律有ルガ如シ、其貴ブ可キヲ固ヨリ  
 言ヲ待タズ、然レモ其實詩ノ詩タル所以ハ、韻礎ニ在ラズシテ、感情ニ在  
 リ、蓋シ韻礎ハ詩ノ形貌ニシテ、感情ハ其精神ナリ、故ニ若シ專ラ韻礎ヲ  
 重ンジテ、感情ヲ外ニスルキハ、猶ホ畫人ニシテ線畫ヲ重ンジテ、生氣ヲ  
 外ニスルガ如キナリ、若シ之ヲ徵セント欲セバ、誠ニモリエールノ「アワ  
 ール」ノ作ヲ視ルニ如クハ莫シ、此ノ作ヤ韻礎有ルニ非ズ、然レモ其形容  
 ノ奇峻ナル、其摸寫ノ巧妙ナル、其譬喩ノ活潑ナル、讀ミテ首ヨリ尾ニ至  
 ルキハ、一章一章ヨリモ愉快ニシテ、人ヲシテ感嘆已マザラシム、且ツヤ  
 其「アワール」ノ貪吝人ノ常態ヲ寫ス、直ニ一種其人ニ面スルガ如ク、其  
 感情ノ深厚ナルヲ、尋常散文ノ遠ク及ブ所ニ非ズ、此レ固ヨリ韻礎無キ

ガ爲メニ之ヲ詩中ニ入レザルヲ得ザルナリ、其他同人ノ作ル所ノ「ト  
シユアゾ」ノ如キモ亦是物ナリ、  
此ニ由リテ之ヲ觀レバ、詩ノ詩タル所以ハ、韻礎ニ在ラサルヲ亦明ナリ、  
獨モリエールノミナラズ、其他ノ作者、往々散文ノ體ヲ用ヒテ詩趣ヲ發  
揮セル者、蓋シ鮮カラズ、即チ「ボールエールウ、ルジニ」ノ如キ、「マールオー  
ヂヤールブル」ノ如キ、「オワゾー」ノ如キ、諧韻無シト雖モ豈復タ之ヲ尋常散  
文ト謂フヲ得ン哉、

人或ハ云フ、作者必ズ自己ノ感情ヲ發揮スト爲スルハ、モリエールノ  
「アワートル」ヲ摸寫スルガ如キ、是レモリエールノ必ズ貪吝ノ不徳有ル  
ニ因テ、其巧妙復タ是ニ至ル者ナリト、嗚呼何ソ其レ然ラン、余ガ所謂  
自己ノ感情ヲ發揮スルトハ、此ノ如キ者ヲ謂フニ非ザルナリ、予ガ所  
謂自己ノ感情ヲ發揮スルトハ、己レ實ニ其徳有リ其不徳有ルト否ザ

ルトヲ問ハズ、是レ有徳若クハ是レ不徳ヲ見ルニ於テ、心ニ感ズル所  
有リ、因リテ其感情ヲ舉ケテ之ヲ文辭ニ著ハシ、斯ニ以テ一篇ノ詩ヲ  
爲ス、此レ乃チ所謂自己ノ感情ヲ發揮スルナリ、即チモリエールノ「ア  
ワートル」貪吝「ミザントロ、ア」狹隘ニシテ人ヲ容ルノ作ノ如キ、モリエール  
ル初ヨリ貪吝ナルニ非ズ、又狹隘ニシテ人ヲ容レザルニ非ズ、唯此二  
様ノ人ヲ觀察スルニ於テ、深ク心ニ感スル有リ、是ニ於テ其言語動作  
ヲ摸寫シテ以テ此二篇ヲ作レリ、蓋シ其臨本ハ誠ニ外ニ在リト雖モ、  
然レモリエールノ善ク其人ト爲リヲ推測シ、善ク其狀態ヲ形容シ、  
種々細微ノ罅隙ヲ探リテ、一々之ヲ舉ケ、其摸寫ノ妙眞ニ迫リテ、實ニ  
己レ自ラ其人ト情ヲ同クスル者ノ若シ、是レハ則チモリエールノ才、  
造化ニ代ハリテ自ラ一種此様ノ人物ヲ陶鑄シテ之ヲ出セシト謂フ  
モ可ナリ、而シテ其能ク此ノ如クナル所以ノ者ハ、他無シ、モリエール



嘗テ此様ノ人ノ所爲ニ感スル有リテ、其感情極テ深厚ニシテ心ニ忘  
 ル、コト無シ、又其自ラ其感情ヲ發揮スルノ巧極テ至レルヲ以テ、是ヲ  
 以テ吾人其作ヲ觀ルニ於テ、爲メニ又感發セラル、コト此ノ如キナリ、  
 此ニ由リテ之ヲ觀レハ、詩人ノ人情ヲ摸寫スル其材料ハ、之ヲ外ニ取  
 ルト雖モ、既ニ其材料ヲ具フルノ後、之ヲ彫琢シ之ヲ排列シテ、以テ一  
 篇ヲ構成スルニ至リテハ、必ス自家ノ腦液ヲ注テ之ヲ爲ス、若シ然ラ  
 ズシテ唯卑々トシテ摸擬蹈襲スルニ安ニスルキハ、何ノ人ヲ感スル  
 コカ之レ有ラン、且ツ凡ソ自家ノ感情ヲ發揮セント欲シテ、必ス自ラ  
 臨本ヲ其心ニ取ルキハ、是レ凡ソ善人ノ行ヲ摸寫スル者、皆善人ニシ  
 テ、凡ソ惡人ヲ摸寫スル者ハ、皆惡人ナリ、此レ豈ニ通論ナラン哉、  
 又凡ソ詩人ノ篇什ノ中、一種實ニ韻礎ト一體ヲ爲シテ相離レ難キ者有  
 リ、近時ウイクトルユゴーノ諸作ノ如キ是レナリ、ウイクトルユゴーノ諸作

ヲ觀ルキハ、吾人必ズ想像シテ曰ク、此詩ヤ必ズ韻礎ヲ待チテ方サコ始  
 テ成レリ、若シ韻礎ヲ除クキハ、初ヨリ詩ヲ成サバル可シト、是ノ如キ者  
 ハ何ソヤ、蓋シウイクトルユゴーノ作ハ、多クハ歌行ノ體ナリ、而シテ歌行  
 ノ體ハ、實ニ韻礎ノ鏗鏘タルヲ以テ始テ妙ヲ見ル、ウイクトルユゴー此一  
 體ニ於テ天下與ニ比スル者無シ、故ニ他ノ諸體ト雖モ自ラ歌行ノ氣味  
 ナヲ帶フ、此レ吾人ノ其詩ヲ以テ韻礎ト一體クリト爲ス所以ナリ、  
 ウイクトルユゴーノ諸作、其結構自然ニ出テ且其立意ト行文ト相得テ、讀  
 ム者其押韻ノ痕迹ヲ見ズ、是ノ如キ者ハ世人ノ遍ク知ル所ナリ、必ズシ  
 モ茲ニ喋々セズ、  
 又諸講筵ノ論說及ビ政治家ノ演辭ノ如キモ、其中往々之ヲ詩中ニ入ル  
 可キ者有リ、蓋シ論說演辭ノ類ハ、本ト事ノ理非ヲ辨析シテ之ヲ人ニ示  
 スニ在ルヲ以テ、其肝要トスル所ハ前後共ニ旨趣整齊シテ條理貫徹ス

ルニ在リテ、詩篇ノ專ラ人ノ感動ヲ博スル者ト大ニ道ヲ異ニス、然レモ  
 辨士場ニ上リ、其旨趣ヲ演述シ、佳境ニ入ルニ及ビテハ、往々感激シテ自  
 ラ禁ゼズ、是ニ於テ乎或ハ瞋目張膽シテ之ヲ震盪シ、或ハ舞踏蹶起シテ  
 之ヲ發揚シテ、其心復々條理ノ整齊ナルト否ザルトヲ顧ルニ暇アラズ  
 シテ、唯自家ノ感情ヲ發揮シテ之ヲ聽衆ノ腦裡ニ注輸スルコトヲ是レ求  
 ム、是時ヤ辨士ノ胸中ト詩人ノ胸中ト其感情何ソ遽ニ相同ジカラザラ  
 シヤ、  
 夫レ然リ、故ニ凡ソ辨士ノ講說中、其尤モ佳境ニ入ル處ハ、辭句極テ瑰麗  
 峭傑ニシテ、詩人ノ警句ト異ナルコト無シ、試ニデモステーションスシセロン  
 ボシユエーミラボーノ演辭ヲ把リテ之ヲ看ヨ、其詞句ノ遒傑ナル其規模  
 ノ正大ナル、其感慨ノ誠實ナル、詩人ノ尤モ雄健ナル者ト比スルモ相劣  
 ルコト有ルコト無シ、

然リト雖モ、美學ノ理論ヨリシテ言フモ、散文ト詩トハ終ニ相混ズ可  
 ラザル者有リ、何ソヤ、曰ク文章家ハ事ノ實ヲ舉クルヲ以テ旨趣ト爲ス  
 者ナリ、故ニ其摸寫如何ニ妙ナルモ、其結構如何ニ奇ナルモ、其事實ハ必  
 ズ得テ易フ可ラザル者有リ、詩人ニ至リテハ然ラズ、其旨趣大抵皆之ヲ  
 胸臆ニ取リテ之ヲ造作シ、事實ハ必ズシモ問フ所ニ非ズ、故ニ此レニ就  
 テ言フモハ、略ホ稗官家ト相類ス、但稗官家ハ假ニ是事有リト爲シテ之  
 ヲ叙述ス、詩人ニ至リテハ初ヨリ是事ノ有無ヲ問ハズ、專ラ自家一種ノ  
 想像ヲ著ハシテ、之ニ被ワラスニ其感情ヲ以テスル者ナリ、  
 更ニ一層ヲ進メテ之ヲ言ハンニハ、理學化學ノ類總ヘテ物理ヲ講ズル  
 諸科ト雖モ、其中亦詩家ノ感情ト相類スル者有リ、之ヲ例ヘハ諸科中有  
 ル所ノ諸發見ノ類ノ如キ、其學士ノ初テ之ヲ得テ之ヲ筆スルヤ、其心中  
 ノ感慨果シテ何如ソヤ、夫レ庶物ノ質タル、本ト頑蠢ニシテ識ルコト無キ

者ナリ、又極テ叢雜ニシテ倫無キカ如キ者ナリ、而シテ學士輩其搜索蒐討經驗ノ苦ヲ積ミテ、之カ類ヲ推シ之レカ倫ヲ尋ヌルニ及ヒテハ、其頑蠢ナル者モ靡然トシテ各々列ニ就キ、統緒燦然トシテ復タ擾ル可ラズ、夫ノ星學化學理學重學本草學ノ如キ、其益タル皆庶物ノ頑ナル者ヲシテ、皆吾人ノ命令ニ順ヒ、各々其列ニ在リテ其力ヲ致シ、以テ人生日用ノ需求ニ應シテ以テ其生ヲ厚クセシム、顧フニ此等學士ノ其前人未ダ見ザル所ヲ見ルニ方リテヤ、其心ノ欣悅感喜スルヲ實ニ想フヘシ、此レハ即チ諸科中感情ノ湊マル處ニシテ、即チ之ヲ一篇ノ詩ト謂フモ不可ナル無キナリ、

然リト雖モ、此中亦相異ナル所以ノ者有リ、此レ固ヨリ知ラザル可ラズ、蓋シ此等諸學科ニ在リテハ、其人ヲ感シ自ラ感スルヲ、初ヨリ旨趣ト爲ス所ニ非ズシテ、特ニ偶然之ヲ得ルニ過ギズ、若夫レ詩人ニ至リテハ、理

ヲ説テ人ヲ喻シ、及ヒ人ニ益スルヲハ其目的ニ非ズシテ、唯人ヲ感シ人ヲ怡マシムルヲ是レ求ム、此レ其相異ナル所以ナリ、又稗史ノ如キハ其詩ト類スル者更ニ多シ、蓋シ稗史ノ物タル旨趣ヨリ結構ヨリ作者皆之ヲ造作シ、又其人物ノ性質ヲ摸寫シテ或ハ寬厚ナラシメ、或ハ剛直ナラシメ、或ハ怯懦或ハ姦詐種々ノ情性皆一々其想像ヲ以テ之ヲ描寫ス、此レ其所爲何ソ詩人ノ業ニ異ナラン、今チ距ルコ五六十年、學士輩稗史ノ一體ヲ鄙トシテ之ヲ攻撃シテ餘力ヲ遺サズ、而シテ其尤モ甚キハ博士家ノ徒ニ過クル莫シ、其言ニ曰ク、凡ソ古今豪傑ノ士ノ爲ス所ハ迥カニ流俗ノ表ニ出テ、凡眼ヲ以テ之ヲ窺測ス可ラズ、今稗官家ハ豪傑ノ士ヲ捏造シ、之ニ附スルニ閭閻里巷ノ情態ヲ以テシテ言語ヨリ動作ヨリ略ホ凡庸ノ徒ト異ナルヲナカラシム、是レハ即チ自家ノ心ヲ以テ豪傑ノ心ヲ忖度シテ以テ之ヲ人ニ示メス者ナリト、然レ

此爾來稗史ノ道益々行ハレ、學士苟モ筆硯ヲ業トスル者、往々是ニ從事  
 スルニ至リ、今日ニ及ビテハ蓋シ盛チ極メタリ、然ル所以ノ者ハ他無シ、  
 蓋シ人ノ性タル本ト事ノ誠實チ好ミテ虛飾チ好マズ、眞率チ愛シテ矯  
 僞チ愛ヒズ、夫レ豪傑ノ士ト雖モ其情性豈ニ一々人ト異ニシテ、鬼神ノ  
 測ル可ラザルガ如クナラン哉、然ルニ其博士家ノ徒ハ豪傑チ以テ一ニ  
 人情ニ近カ、ラザル者ト爲シテ、專ラ矯僞虛飾チ以テ之チ形容ス、此レ  
 其衆人ノ喜ハザル所ナリ、顧フニ文章ト云ヒ議論ト云ヒ、苟モ成說チ執  
 リテ動カズ、天下ノ人チ率キテ皆己レノ卑狹ノ域中ニ入レント欲スル  
 キハ、其末ヤ必ズ人心ニ背キテ自ラ敗壞スルニ至ル、博士家ノ文章ノ如  
 キ正サニ此ニ坐スルノミ、  
 又古昔ハ院劇ノ作專ラ「トラジエヂー」ノ一體チ以テ之チ爲シテ、其紀律極  
 テ煩密ナリシモ、近代ニ至リテハ之ニ易フルニ「ドラーテム」體チ以チシテ

作者意匠チ出ス「ト」更ニ自在ナル「ト」チ得タリ、夫レ「ドラーテム」チ以テ「トラ  
 ジエヂー」ニ易ヘ、稗史チ以テ「ニボベー」ニ易フルガ如キハ、皆以テ文運ノ漸  
 進チ徵スルニ足ル、中ニ就キ稗官ノ益々行ハレテ衆耳ニ入り易キチ致  
 セシガ如キハ、特ニ方今文藝ノ智ノ進關セシチ見ルニ足ル、但此一事ハ  
 余更ニ後章ニ於テ之チ詳論セントス、  
 詩ノ諸體ニ就テ仔細ニ講究チ加フルノ前、當ニ先ツ汎ク諸體チ總論シ  
 テ以テ前論ノ未タ盡サ、ル所チ補フ可シ、此レ本章及ビ下數章ノ旨趣  
 トスル所ナリ、  
 凡ソ詩ノ諸文藝ニ勝サリテ之ニ上ル所以ノ者ハ何ソヤ、曰ク其封疆ノ  
 最モ博大ニシテ、作者其感情チ發揮スルニ於テ殆ント限畫セラル、所  
 無シ、唯此一事優ニ以テ詩チシテ他ノ文藝ノ上ニ出デシムルニ足ル、蓋  
 シ詩ニ韻礎有リ、聲調有リテ讀誦ノ際早ク己ニ抑揚節奏ノ態チ發ス、是

レハ則チ詩ノ力ハ音樂ニ匹敵スト謂フモ可ナリ、又其鋪叙ノ偉麗ナル、形容ノ華豔ナル、一誦ノ際直チニ目ニ金碧紅翠ノ美ヲ見ルカ如シ、是レハ則チ詩ノ力ハ人目ヲ怡バシムル建築彫刻繪畫ノ諸術ト敵チ爲スト謂フモ亦可ナリ、若夫レ詩ノ善ク情性ヲ發揮シテ人ヲシテ感慨已マサラシムルカ如キハ、他ノ諸藝ノ遠ク及バザル所ナリ、故ニ曰ク凡百文藝ノ中ニ就テ詩ノ封疆最モ博大ナリト、

音樂ノ人心ヲ感ズルコトハ人ノ遍ク知ル所ナリ、然レモ之ヲ詩ニ比スルキハ、其意趣ノ詳密ニシテ高下各々度有ルコトハ遠ク相及バズ、蓋シ音樂ハ特ニ音聲ノ抑揚疾徐ヲ以テ意趣ヲ發スルニ過キズシテ、心性細微ノ事ヲ鋪叙スルコトハ、詩ノ自在ナルカ如クナラズ、他無シ、詩ニ在リテハ獨リ聲音ノミナラズ、亦文字ヲ用ヒテ而シテ文字各々意義ヲ有スルカ故ニ、議論ト云ヒ叙事ト云ヒ、如何ナル細微ノ事モ、皆其レヲシテ燦然トシ

テ人ノ想像ニ上ラシム、此レ其人必チ感ズルノ尤モ盛ナル所以ナリ、更ニ言フ可キ有リ、凡ソ他ノ文藝ハ特ニ人心ヲ感ズルニ止マリテ、事物ノ條理ヲ推シテ人ノ智識ニ告諭スルコトハ、其區域ノ外ニ在リ、獨リ詩ニ至リテハ文字ヲ以テ之ヲ將フカ故ニ、議論モ亦其區域中ノ一事ナリ、即チ「ボエーム」ボエーム「ダダ」ダダ「ツク」ツクノ議論體ノ一體ノ如キハ、正サニ事物ノ條理ヲ推シテ人ノ智識ニ告諭スル所以ナリ、

詩ノ旨趣タル、他ノ諸藝ト同ク人心ヲ感ズルヲ以テ主ト爲シテ、條理ヲ窮究スルガ如キハ其緒餘ナリ、故ニ美學上ノ理論ヲ以テ言フキハ、「ボエーム」ボエーム「ダダ」ダダ「ツク」ツクノ一體ハ畢竟之ヲ第二着ニ置カザルヲ得ズ、他無シ、此一體ニ在リテハ、詩モ亦一等ヲ降リテ殆ント散文ト隣接スルガ故ナリ、然レモ古今詩人ノ此一體ニ於テ大名ヲ發シテ其作ノ人目ヲ震耀スル者蓋シ鮮カラズ、即チエシヨードノ「トラウター」トラウター「シュール」シュールノ二篇ノ如キ、

リコクレースノ「フォルマシヨ」ンデューモンドノ篇ノ如キウイリシルノ「シヨルジック」ノ篇ノ如キ及ビ其他諸家ノ作、人口ニ膾炙スルコト枚擧ニ遑アラズ、又其他諸體即チ「サチール」ノ諷刺ノ如キモ、往々議論ヲ以テ之ヲ出スコト散文ト異ナルコト無キ者有リ、獨リ此レノミナラズ、其旨趣尤モ人心ヲ感ズルニ在ル者ト雖モ、其間處々事物ノ道理ニ推及スルコトハ、自ラ免レザル所ナリ、而シテ詩人常ニ自在ニ之ヲ發スルコトヲ得、此レ固ヨリ他ノ諸藝ノ及バザル所ナリ、

夫レ彫刻ナリ繪畫ナリ、其形貌ノ中自ラ意趣ヲ發揮スルコトヲ得ルハ固ヨリ言フヲ待タズ、然レモ其手段トスル所、特ニ條線彩色ノ外ニ出テザルヲ以テ、所謂意趣モ直チニ人ノ智識ニ告諭スルコトヲ得ズ、此レハ則チ此二藝ノ本質乃チ然ラシム、蓋シ此二藝ノ意趣ニ於ケル、畢竟人ヲシテ旁推類搜シテ間接ニ之ヲ得セシムルニ止マル、但ミケランシブアサン

ノ二人ハ然ラズ、此二人ノ作ハ其理學ノ旨趣ヲ發揮スルコト極テ明ニシテ、實ニ人ヲシテ驚カシム、是ノ如キ者ハ千百人中一有ルヲ望ム可ラズ、ミケランシブノ彫刻ニ於ケルブアサンノ畫ニ於ケル、其人種天分高絶ニシテ、理學ノ旨趣ニ於テ平時極テ焦思苦慮スル所有リ、之ヲ久クシテ此レ等ノ旨趣、漸次ニ其想像ノ中ニ浸入シテ、腦裡ニ充滿スルニ至レリ、是ヲ以テ其刀ヲ運シ筆ヲ揮フテ作ル所有ルニ及ビ、其平時腦裡ニ蓄フ所ノ旨趣、自ラ其作物ノ表ニ發見スルヲ致セリ、此レ二人ノ作ノ尋常彫刻繪畫ノ類ト迥ニ別ニシテ、獨美學上ノ意趣ノミナラズ、亦并セテ理學上ノ旨趣ヲ發揮スルコトヲ得タル所以ナリ、

此ニ由リテ之ヲ觀レハ、彫刻繪畫ニ於テ理學幽微ノ旨趣ヲ發スルコトハ、古今千百作者ノ中、特ニミケランシブアサンノ二人有ルノミ、其他ノ作者ハ皆此二藝ノ本分ヲ守リテ、敢テ其外ニ馳スルコトヲ求メズ、是レハ則

チ此等作者ノ見識ノ低キニ非ズシテ、其業トスル所ノ藝術自ラ然ラザルヲ得ズ、何トナレハミケランジプーサンノ二人ハ、一種特異ノ才ニシテ餘人ノ望ム可キ所ニ非ズ、若シ人此二人ノ情性ヲ有セスシテ、妄リニ其彫刻若クハ繪畫ニ於テ理學幽微ノ旨趣ヲ發セント欲スルキハ、其作往々美麗ノ觀ヲ摸スルヲ免レズ、何トナレハ美學上ノ旨趣ト理學上ノ旨趣トハ、其質此ノ如ク相異ナルヲ以テ、言語文字ヲ以テ之ヲ將フニ非ザレハ、條線彩色ノ手段ヲ以テ之ヲ合スルヲ得可ラス、

夫レ然リ、故ニ彫刻繪畫ノ諸作ハ、古今大家ト雖モ皆唯美學上ノ旨趣ヲ發スルニ過ギズシテ、理學上ノ旨趣ハ其絶エテ心ヲ用ヒザル所ナリ、詩ニ至リテハ、其手段文字ニ在ルヲ以テ、此二ノ旨趣ヲ合シテ並ニ之ヲ出スモ、絶エテ觀美ニ害スル有ラス、獨リ觀美ニ害セサルノミナラス、此二者且ツ映シ且ツ反シテ、各々以テ其美ヲ發揚シテ益々其作ノ道逸ナル

ト往々ニシテ然リ、

今試ニ之ヲ證セント欲セハ、アルフレッド、ヅシニセー、ウイクトルユゴーノ二人ノ詩ヲ把リテ之ヲ誦セヨ、アルフレッドハ專ラ美學上ノ意趣ヲ發スルヲ務テ、其作大抵皆流麗婉美ノ觀有ルニ過キズ、ウイクトルユゴーハ美學上ノ意趣ノ外、往々道義政術等ノ論ヲ發シテ之ヲ其詩中ニ著ハセリ、是ヲ以テ賞鑒家苟モ高遠ノ眼識有ル者ハ、皆云フアルフレッドノ作チ一誦スルキハ、人ヲシテ愛玩ニ堪ヘザラシム、然レモ一タヒ之ヲウイクトルユゴーノ作ニ比スルキハ、頓ニ高華ノ氣ヲ喪フヲ覺ユト、然ル所以ノ者ハ他無シ、ウイクトルユゴーノ詩ハ獨リ其風趣華麗ナルノミナラズ、凡ソ天下國家ヲ經綸スル所ノ諸大義、即チ自由ノ論ナリ、平等ノ論ナリ、道德ナリ、及び其他財穀兵制等ノ事皆其中ニ散見セザル莫シ、是ヲ以テ吾人ノ之ヲ讀ム者、其韻礎ノ鏗鏘ナル、措辭ノ瑰麗ナル等、一切美學上ノ觀

ノ外、又理學幽微高遠ノ觀ヲ感スルヲ得、此レ其詩ノアルフレッドヨリ高キヲ數等ナル所以ナリ、

○第五章 近世詩風ノ性質

夫レ詩學ノ諸學科ト相助ケ、美學上ノ感情ト理論ノ條理ト相須テ、以テ用ヲ爲スコトハ、正ニ近世詩風ノ性乃チ然リ、蓋シ物理化學其他百般ノ學術益々其奧ヲ極ムルハ、第十九紀ノ今日チ最モ盛ナリト爲ス、此ヨリ前未ク曾テ有ラザル所ナリ、顧フニ此等學術愈々進闡スルキハ、詩學ノ此レト用ヲ相爲スコトモ亦愈々近密ニシテ、竟ニ相離ル可ラザルニ至ルコト想フ可キナリ、世ノ僻說ヲ唱フル者、美學ニ於テ動モスレバ專ラ古昔希臘羅甸ノ諸藝ヲ讚稱シテ已マズ、以テ近代ノ諸藝ヲ細ケント欲ス、其言ニ曰ク、希臘ノ藝人皆其神代記ノ典故ヲ以テ題目ト爲ス、此レ其諸作ノ雅趣有ル所以ナリ、今ヤ諸學科ノ論ヲ引テ之ヲ詩中ニ入ル、條理愈々密

ニシテ雅致ハ則チ地ヲ掃フテ盡クト、吁何ゾ其レ繆レルヤ、希臘人ハ其神代記ノ典故ニ感シテ作ル所有リテ、其感情洵ニ深厚ニシテ、能ク人ヲシテ亦之ヲ感ゼシム、近代ノ作者ハ諸學術ノ道理ニ感シテ作ル所有リテ、其感情モ亦深厚ニシテ、能ク人ヲシテ之ヲ感ゼシム、何ノ相劣ルコトカ之レ有ラン、

且ツ夫レ所謂神代記トハ何物ソヤ、古昔人ノ想像シテ天地庶物ノ道理ヲ推考シテ作ル所ニ非ズ乎、然レバ則チ近代ノ學士ノ天地ノ庶道理ヲ推考シテ立ツル所ノ理學化學星學ノ類ト其目的蓋シ相同シ、但古昔人智未ク闡ケズ、故ニ其言怪奇ニシテ喜ブ可キガ如シ、希臘神代記ノ如キ即チ是ナリ、近世學術大ニ闡ケ、一々實迹ニ據リテ之ヲ徵ス、星學化學ノ類即チ是レナリ、然レバ則チ近代詩人諸學術ノ理ヲ引テ之ヲ詩中ニ入ルコトハ、其旨趣ゾル正ニ古昔作者ノ神代記ノ言ヲ引テ之ヲ詩中ニ入ル



ト相同シキノミ、

人或ハ云フ、諸種ノ意思ヲ暢發シテ之ニ被ムラスニ偉麗ノ貌ヲ以テスルコトハ、希臘羅甸ノ作者ノ天ニ獲ル所ノ才乃チ然ラシム、近代ノ作者皆相及バズ、雅致ニ乏キ所以ナリト、是言ヤ僻者往々之ヲ倡ヘテ己マズ、其尤モ甚キ者ハ、希臘作者ノ諸作ヲ觀テ、其旨趣ノ怪奇恍惚タルヲ見テ極テ心醉シ、竟ニ第十九紀ノ今日ニ於テ殆ソド希臘神代記ニ據リテ多神宗ノ一類ヲ再起セント欲スルニ至ル、顧フニ此說ヤ、畢竟繆迷タルニ過キス、而シテ其繆迷ハ他ニ非ズ、正ニ其心性ノ道理ヲ知ラザルニ坐スルノミ、請フ更ニ之ヲ論ゼン、

人往々言フ、古昔人ハ才情ニ富メリ、今人ハ皆相及バズト、然レモ所謂才情モ亦二種有リ、蓋シ其一ハ曰ク、物ヲ觀ルニ於テ必ズシモ條理ヲ推シテ其實迹ノ在ル所ヲ考ヘズ、專ラ其形貌ヲ採撫シ、又其言ヲ立ツルニ於

テ無形ノ道理ト雖モ、皆實物ヲ以テ之ヲ著ハス、是ノ如キ者ハ空華浮夸ノ才情ニシテ、希臘人ニ在リテ尤モ富ム所ナリ、是ヲ以テ其神代記ヲ閱スルキハ、愛惡喜怒等ノ如キ、無形ノ道モ亦一々以テ神ト爲シテ之ニ擬スルニ種々ノ形態ヲ以テスルヲ觀テ知ル可シ、

其一ハ曰ク、物ヲ觀ルニ於テ必ズ其真理ノ在ル所ヲ推究シテ之ヲ講明シ、萬事ニ於テ鑄鍊ヲ分チ毫釐ヲ析チ、細大ノ理一モ遺スコト無シ、是ノ如キ者ハ着實確的ノ才情ニシテ、近代人ニ在リテ尤モ富ム所ナリ、理化星學ノ類ノ大ニ近代ニ進關スル、以テ觀ル可シ、此ニ由リテ之ヲ觀レバ、希臘人ノ夫ノ浮華ノ才情ニ富ミシハ、正ニ其無學ナリシヲ徵スルニ足リテ、近代ノ人ノ夫ノ着實ノ才情ニ富ムハ、正ニ其智識ヲ徵スルニ足ルナリ、且ツ夫レ希臘人ノ浮華ノ才情ハ、物ヲ觀ルニ於テ唯其美處ヲ見ルニ止マルノミ、深ク其理ヲ眞探リテ前人ノ未タ見ザル所ヲ見テ、以テ自ラ

創作スル所有ルコトハ、絶エテ其能クスル所ニ非ザルナリ、顧フニ此ノ如キ者ハ他ニ非ス、當時心性ノ學未タ明ナラズシテ、物ヲ觀ルニ於テ徒ラニ其外ニ著ハル、所ヲ見テ、深ク其幽微ニ入ルコトヲ知ラズ、故ニ其議論ノ如キモ畢竟唯實迹ヲ叙述スルニ過ギズシテ、原由ノ如キハ漠焉トシテ見ルコト無キナリ、

然リト雖モ、人ノ見ザル所ヲ見テ其理ヲ發スルコトヲ求ムルハ、人ノ情ナリ、故ニ當時ニ在リテモ人往々物ノ道理ヲ探究スル有リ、唯諸學術未タ闡ケサルヲ以テ、見ル所動モスレハ臆度妄想ヲ免レズ、此レ其神代記ノ言フ所ノ荒誕無稽ナル所以ナリ、今第十九紀ノ世ニ當リ、學術盛大ノ日ニ於テ、夫ノ神代記ノ荒誕無稽ナル者ヲ見テ之ヲ喜ヒ、顧テ此ヲ以テ才情ノ在ル所ト爲シテ、以テ詩人ノ高下ヲ定メント欲スルハ、豈ニ繆妄ノ甚シキニ非ズ乎、

蓋シ神代記ノ物タル、畢竟庶物ノ道理ヲ推考スルニ成リシ者ナリ、但其理學極テ淺薄ナルヨリシテ、凡ソ人ノ心中、無形ノ現象即チ喜怒哀樂等ヨリ並ニ意想ノ類ニ至ルマテ、皆一種盛大ノ徳ヲ有スル鬼神ノ然ラシムル所ト爲シ、斯ニ以テ諸神ヲ想像シテ之ヲ杜撰シテ曰ク、喜ナル者ハ某神ノ司トル所ナリ、怒ナル者ハ某神ノ司トル所ナリ云々ト、又其庶物ノ理ヲ論スルヤ、曰ク太陽ハ一種ノ火輪車ニシテ、天ノ一神常ニ之ヲ挽テ空際ヲ飛行スルナリト、其太陰ヲ論スルモ大抵此レト相同シ、又其風雷ノ變ヲ論ズルヤ、曰ク此レ魔神「アフィース」チタンノ類、上帝「ジュピテル」ト戰フニ由リテ發スト、而シテ所謂「アフィース」チタン「ジュピテル」ノ名ハ皆杜撰ニ外ナラズ、之ヲ要スルニ希臘人ノ想像ニ由レハ、世界ハ一大時儀ノ如キ者ニシテ、其諸器具ハ一々皆神ノ司トル所ニシテ、是物有レハ必ズ是神有リ、以テ無窮ニ相繼クコトヲ得ルト、

類フニ此ノ如キ者ハ即チ希臘神代記ノ起ル所以ニシテ、其中一種ノ雅趣無キニ非ズト雖モ、之ヲ要スルニ不學無術ノ臆想タルニ過ギズ、而シテ希臘ノ詩人ニ心醉スル者ハ、神代記ヲ喜フノ甚シクシテ、輒チ云フ近代學術ノ進闢ニシヨリ、詩ノ雅趣亡ヒタリト、吁何ソ思ハザルノ甚キヤ、學術如何ニ進闢スルモ、物理如何ニ縝密ナルモ、人ノ庶物ノ美ヲ感ズルコトハ、豈ニ此レカ爲メニ少シモ損滅スル有ラン哉、獨リ此レカ爲メニ損滅セザルノミナラズ、亦此ニ由リテ益、深厚ナルヲ致ス、苟モ人ノ感情深厚ナルトハ、何ノ雅趣ノ亡フルコトカ之レ有ラン、

試ニ看ヨ、近代本草ノ學益、精微ヲ極メタリト雖モ、吾人原野ニ出テ、草木ノ暢茂スルヲ見ルトハ、感慨ノ念未ダ始ヨリ發出セズンバアラズ、高山ノ巔ヲ望ミ、幽谷ノ底ニ臨ミ、或ハ深叢ニ入り、或ハ峻坂ヲ攀ルコト有ランニ、勝景ノ樂未ダ始ヨリ發出セズンバアラズ、音ニ此レノミナラズ、近

日地質ノ學大ニ開ケシヨリ、土石若クハ鑛物ノ類ヲ檢覈シテ、深ク造化ノ秘ヲ探リ、獨リ載籍以後ノ事ノミナラズ、亦人類未ダ有ラザルノ古ニ溯リテ、殆ント吾人ヲシテ幾萬歳ノ昔ニ再生セシムルガ若キヲ致ス、此ノ如キ者ハ人ノ感情ヲ惹キ起スコト如何ゾヤ、感情苟モ發起スルトハ、其作ノ雅趣無キヲ求ムルモ得可ラザルナリ、何ゾ古今相及バズト謂ハン哉、

希臘人ノ星學ニ於ケルヤ、曰ク天ナル者ハ一種穹窿ノ如キ者ニシテ、現ニ空際ヲ掩蔽シ、星辰ノ属ハ皆此穹窿ニ就テ金釘ヲ以テ之ヲ釘シテ墜チザルヲ致セリ、而シテ此妄想深ク人心ヲ感ジテ、即チ詩人モ亦此感情ヲ把リテ之ヲ題目ニ入レテ、以テ其詩ノ雅趣ヲ爲セリ、近代ニ在リテハ、其天地日月ヲ論スルコト益、精密ニシテ、引力遠心力ノ理益、明ニシテ復タ希臘人ノ妄想臆度ノ比ニ非ズ、然レモ吾人一タビ目ヲ放チテ、天空ヲ望

ムキハ、其心ヲ感ズルコト夫ノ希臘人ト少シモ異ナルコト無シ、然ラバ則チ學術ノ進開セシガ爲メニ人ノ感情ノ衰殺ニ赴キシト謂フガ如キハ、豈ニ通論ナラン哉

且ツヤ近代心性ノ學益々精微ヲ致セシヨリ、人ノ情欲及ビ人ノ緩急疾徐勇怯剛弱ノ性ヲ分別シテ、其奧秘ヲ探グルコト尤モ古昔ノ比ニ非ズ、是ヲ以テ院劇ノ詩及ヒ稗官ノ如キ、其人情ヲ摸寫スルコト極テ精微ニシテ一讀スルキハ直チニ其人ト面晤シテ其言語ヲ聽キ、其動作ヲ視ルガ若シ、是豈ニ貴ブ可フザラン乎、

夫レ近代心性ノ道理ヲ推究スルコト是ノ如ク其縝密ナルキハ、其人ト交ルノ際相愛スルノ情モ亦自ラ親密ナラザルヲ得ズ、此レ自然ノ情ナリ、是ヲ以テ人ノ諸善徳即チ仁慈寬恕ヨリ及ビ婦女童兒ノ么弱ナルヲ憐愍シ、人ノ性命ニ於テ極テ貴重ノ心ヲ加フル等ノ如キハ、皆近代ノ美德

ニシテ大ニ古昔人ノ殘暴ナルガ如クナラズ、獨此ノミナラズ、獸畜ト雖モ之ヲ使役スルコト自ラ法有リテ、復ク妄リニ種楚ヲ加フルコト無シ、夫レ婦人童子ハ我レト類チ同クスル者ナレバ、其仁慈ヲ致スコト固ヨリ宜ナリ、禽獸ノ賤チ以テ猶ホ愍恤ヲ加フルコト此ノ如シ、此レ豈ニ近代ノ美德ニ非ズ乎、古昔人ニ在リテハ然ラズ、夫ノ神代記ノ述ブル所ノ諸神ノ行爲ヲ見ズ乎、或ハ忿悁ノ心ヲ肆ニシ、或ハ憤怒ノ氣ヲ泄ラスガ爲メニ、其虐威ヲ奮ヒ、其暴力ヲ逞ウシ以テ其敵ヲ死ニ致スコト往々ニシテ然リ、嘗此レノミナラズ、或ハ貪婪憤憤ノ情ヲ發泄シ、或ハ狙詐欺瞞ノ術ヲ行ヒ、凡ソ天下ノ惡爲サマル所莫シ、設令ヒ庸人ニシテ是ニ出デシメバ、希臘人ト雖モ必ズ唾棄セザル莫シ、然リ而シテ此等ノ惡行ヲ想像シ舉ケテ之ヲ諸神ノ身ニ萃メ、以テ崇敬ノ意ヲ致セリ、是ノ如キ者ハ其心性ノ理ニ於ケル、其道德ノ義ニ於ケル、其眼識ノ淺短ニシテ多ク得ル所有ラザ

ルヲ想フ可キナリ、  
 凡ソ近代ノ諸美德即チ仁慈寛恕及ビ人ノ憂ヲ急ニシ、婦孺ノ么弱ヲ恤  
 レミ、信義ヲ貴ビ、詐欺ヲ惡ム等ノ如キハ、皆以テ其心性ノ學ニ達ニシテ、  
 道德ノ義ニ深キヲ徵スルニ足ル、而シテ此等ノ美德ハ詩人ノ感情ニ於  
 テ未ダ必ズシモ其効無クンバアラズ、願フニ近代文物ノ運彌進ミテ止  
 ラズ、學術日々ニ盛ニ、道義月々ニ明ナルキハ、人ノ情性モ亦益善ニ遷ル  
 一固ヨリ期ス可キナリ、然レバ則チ詩人ノ感情モ亦隨テ益純粹ニ赴キ  
 テ、益高遠ニ躋ランヲ疑フ容レズ、是ニ察セズシテ徒ニ古昔ヲ景慕シテ  
 其汚穢ヲ知ラザルハ豈ニ繆戾ノ甚キニ非ズ乎、之ヲ要スルニ希臘人ハ  
 學術道德並ニ未ダ大ニ闡ケズシテ、其神代記ノ叙スル所正邪混淆スル  
 ナ免レズ、是ヲ以テ詩人ノ感情モ亦清濁相雜ハリテ純然ナラザルヲ致ス、  
 但其感情極テ深厚ナルヲ以テ、讀誦ノ際自ラ人ヲシテ其美麗ヲ歎稱セ

シムルニ足レバ、則チ近代ノ作者其學術ノ精ナルト道德ノ粹ナルトニ  
 資リ、以テ其正直ノ感情ヲ發揮スルキハ、何ソ遠ニ古人ニ駕シテ之ニ上  
 ルヲ得可ラザラン哉、

○第六章 詩學ニ係リ道德並ニ心性ノ學ノ進歩○稗官

古昔詩ノ初テ起ルヤ、其體タルニ二過ギズ、一ハ「イーム」ナリ、一ハ「エポペ  
 ー」ナリ、「イーム」ハ歌謠ノ體ニシテ神德ヲ稱讚スルヲ主ト爲シ、「エポペ  
 ー」ハ豪傑ノ功業ヲ稱讚スルヲ主ト爲ス者ナリ、蓋シ此二ノ者ニ就テ  
 「イーム」先ツ起リ、「エポペー」之ニ次ケリ、「ドラマーム」ニ至リテハ、最後ニ起リ  
 シヲ疑フ容レズ、「ドラマーム」トハ院劇ノ詩ノ一體ナリ  
 「イーム」ハ專ラ宗教ノ爲メニ作ル所ニシテ、其旨趣タル己ノ畏懼ノ念ヲ  
 叙ブルト己レノ冀望ノ情ヲ寫ストニ在リ、蓋シ昔人災厄ニ罹ルキハ、或  
 ハ妄想シテ以爲ラシ惡魔ノ致ス所ト、或ハ臆度シテ以爲ラシ神明ノ譴

罰ナリト、是ニ於テ或ハ神ニ乞フテ惡魔ヲ降伏スルヲ求メ、或ハ神ニ  
 哀請シテ其威怒ヲ霽ラスヲ求ム、此レ「イーム」頌歌ノ起原ナリ、夫レ古  
 昔人文未タ開ケズ、法度未タ立タズ、人寧息スルヲ得ズシテ、百般禍害  
 ノ類常ニ己レノ頭上ニ懸在スルガ若シ、是ヲ以テ人情危迫ニシテ唯禍  
 チ免ル、ヲ求ムルノ外、絶エテ他事ヲ思フノ暇無シ故ニ夫ノ「ウエダ」及  
 ヒ「プソーム」ノ頌歌ノ如キ、皆此意ニ非ザル莫シ、此ニ由リテ之ヲ觀レバ、  
 「イーム」ノ一體ハ專ラ己レヲ利スルヨリシテ起リシヲ知ル可キナリ、其  
 後「エホベール」ノ體ノ如キモ亦然リ、但其利己ノ念ノ熾ナルヲ「イーム」ノ甚  
 キガ如クナラザルノミ、蓋シ「イーム」ニ在リテハ、直チニ神德ヲ歌頌シ、エ  
 ホベールニ在リテハ、豪傑ノ功業ヲ歌頌ス、但其己ヲ利スルヲ喜ブコハ  
 則チ一ナリ、

「イーム」ノ詩タル、「アンドラー」若クハ「ヤウエール」ヲ崇敬スルヲ甚ク至レリ、  
 蓋シ當時ノ人晦夜及ビ暴風ヲ以テ、惡鬼ノ役使シテ其威虐ヲ行フ所ノ  
 地ト爲ス、是ニ於テ「アンドラー」若クハ「ヤウエール」神ヲ拜禱シテ、此惡鬼ヲ驅  
 除スルヲ求ム、若夫レ「エホベール」ニ在リテハ、豪傑ノ戰勝ヲ敵ヲ殲シ  
 タルヲ歌頌スルニ成ル者ナリ、夫レ惡鬼ノ災ヲ降スナリ、寇敵ノ禍ヲ  
 來スナリ、皆己レニ害有ル者ナリ、是ニ於テ幸ニシテ此害ニ免ル、キハ、  
 其想像スル所ノ神ノ諸德ヲ稱シ、若クハ其崇奉スル所ノ英傑ノ功ヲ頌  
 シ、以テ厄ニ脱スルヲ祝ス、之ヲ要スルニ神ナリ豪傑ナリ、皆迥ニ尋常  
 人ノ表ニ出ル者ニシテ、而シテ其之ヲ頌稱スル畢竟自家ノ微弱ヲ憂フ  
 ルカ爲メニシテ起ルモノナリ、古昔人ノ豪傑ノ功業ヲ頌歌スルヤ、其戰  
 闘ノ狀ヲ摸寫シ、或ハ劍ヲ揮テ敵ノ首ヲ斫リ、或ハ矛ヲ盤シテ敵ノ胸腹  
 チ洞シ、積屍山ヲ爲シ、流血河ヲ成スカ如キ、悲酸ノ狀至ラザル所無シ、蓋  
 シ當時ノ人情皆以爲ラシ凡ソ人ノ功名ハ戰勝ヲテ敵ヲ殺獲スルヨリ

榮ナルハ莫シト、夫ノ仁恕寛厚、徳以テ衆ヲ撫シ、民ヲ緝スルカ如キハ、絶エテ其貴尙ス可キヲ知ラズ、故ニ其エボモ一、中此等ノ徳ヲ叙述スルコト甚タ稀ナリ、

其後人智稍ヤ進ミ、生ヲ爲スコト稍ヤ安キニ及ヒテハ、災害ニ遭フコト漸次ニ希レニシテ、其畏懼ノ念モ亦隨テ少ク、滅殺スルヲ致セリ、是ニ於テ平其利己ノ鄙情復タ曩昔ノ熾盛ナルカ如クナラズ、何ヲ以テ之ヲ徵スル、曰ク其漸次ニ父子夫妻ノ属相親愛シテ以テ家族ノ樂ヲ爲シ、又同邦ノ人稍ヤ相和シテ争ハザルヲ觀ルキハ、其道德ノ稍ヤ進歩セシコト蓋シ證ス可キナリ、是ヲ以テ繼テ起リシ所ノ「イーム」エボモ「中」往々室家和樂スルノ情ヲ叙へ、國人相恤レムノ義ヲ述ベテ、復タ戰陣ノ勇ヲ頌讚スルコト無シ、尋テオメルニ至リテハ其徳義ノ美更ニ明ナル者有リ、即チ其「オヂセー」及ヒ「イルリヤード」ノ二篇ノ如キハ、其徵歷々觀ル可シ、又其他

印度大家ノ詩篇ノ如キモ往々此意ヲ見ル、

凡ソ此ノ如クニシテ武功ヲ抑ヘテ文徳ヲ揚クルコトハ、世運ノ進歩ヲ徵スル所以ニシテ、獨リ詩篇ノミナラズ、一切文藝ノ類皆漸次ニ此意ヲ昭著セリ、但其間動モスレハ寇擾暴亂ノ禍ヲ免レザルヲ以テ文徳ヲ貴フノ際、往々猶ホ武功ヲ喜ブノ情態有リ、此レ他無シ、邦國制度未タ完備セズ、又鄰國ト往復交際スルノ道モ亦未タ整備セザルニ因リテ、武力ノ用ヲ須フルコト時々之レ有ルヲ以テナリ、

夫レ其武ヲ抑ヘ文ヲ貴ヒ、仁慈寛恕ノ徳ヲ以テ戰陣ノ勇ノ上ニ置クノ情益進ミ、中古ニ至リテ更ニ益著見セリ、蓋シ當時文物ノ運未タ今日ノ盛ナルガ如クナラズト雖ヒ、然レヒ之ヲ古昔ニ比スルキハ、遠ク相勝サル者有リテ、人々復タ日夜性命ノ憂ヲ慮ルカ如クナラズ、此レ其文徳ノ益人心ヲ感ズルニ赴キシ所以ナリ、アテーンヌ羅馬ノ盛ナル、文物頗ル

豊備ニシテ道德モ亦頗ル力ヲ得、繼デ日耳曼夷侵入スルニ及ビ、歐洲到ル處戰鬪ノ衝ト爲リ、文明ノ光熄ムニ幾シ、既ニシテ英佛諸國寢ヤ強盛ナルニ及ビ、時運駸々乎トシテ進ミ、竟ニ今日歐洲諸國ノ形勢ヲ馴致シ、文藝ノ風一變シテ復タ昔日ノ比ニ非ズ、詩人ノ如キモ復タ意ヲ神徳ヲ頌シ豪傑ヲ稱スルニ用ヒズシテ、專ラ人ノ情性ヲ叙述ス、然ル所以ノ者ハ他ニ非ズ、文藝ナリ學術ナリ、皆夫ノ理學心性ノ教ノ浸漸スル所ト爲リテ、日々ニ幽晦ヲ去リテ着實ニ赴キシヲ以テナリ、

夫レ然リ、故ニ現今ニ在リテハ「リリク」ノ體ト稗史ノ體ト盛ニ世ニ行ハル、蓋シ「リリク」ハ歌謠ノ體ニシテ、其意大ニ夫ノ「イーム」ニ似タリト雖モ、其摸寫スル所復タ此レト相類セズ、又稗史ハ記事ノ體ニシテ其意大ニ夫ノ「エボベ」ニ似タリト雖モ、其須フル所ノ人物復タ豪傑ニ止マラズシテ、里閭ノ情態ト雖モ舉ゲテ之ヲ叙述シテ遺ス所無シ、此レ其極テ人

情ニ近キ所以ナリ、獨此レノミナラズ、理學ノ如キモ古昔ニ在リテハ專ラ臆度ヲ以テ論ヲ立テ、其言幽晦ニシテ茫乎トシテ影ヲ捕フルカ如シ、今日ニ至リテハ一切人智ノ得テ推測ス可ラザル所ハ之ヲ舍キ、諸人ノ事ニ適切ニシテ吾人ノ耳目ニ照映スル所ノ者ヲ取りテ之ヲ研究ス、是ニ於テ平格物學化學本草等ノ諸科益々精微ヲ極テ、其餘効ノ及ブ所益々理學ヲシテ着實ナラシムルヲ致セリ、併シ現今ニ在リテ最モ此進歩ヲ助クル所以ノ者ハ、曰ク鐵道電線ノ行ハル、ヨリ百工ノ業及ビ商販ノ業日々益々盛大ニシテ、四方諸國ノ民相往復交接シテ、日ニ其未ダ見ザル所ヲ傳ヘ、其未ダ聞カザル所ヲ授ケ、苟モ意ヲ創シテ獲ル所有ル所ハ、天下ノ人ヲシテ皆之ヲ傳ヘテ其利ヲ蒙ルヲ得セシム、蓋シ方今文物ノ運此ノ如ク其盛大ナリト雖モ、帝王ノ屬猶ホ或ハ功ヲ貪リ威ヲ振ヒ隣國ヲ憑陵スルヲ以テ事ト爲ス者無キニ非ズ、世ノ進歩ヲ害スル



ヤ之ヨリ甚シキハ莫シ然レモ之ヲ要スルニ平民ノ苟モ智慮有ル者ハ  
族類ノ異同ヲ問ハズ邦國ノ強弱ヲ論ゼズ其生計ノ相關スルヨリ其道  
義ノ相益スルヨリシテ其交情益々親密ニシテ復タ曩日ノ相挑ミテ疾  
視スルカ如クナラズ凡ソ此ノ如ク世運ノ進歩スル所以ノ者ハ詩人ノ  
其意趣ヲ養成シ其感情ヲ陶鑄スルニ於テ未ダ必ズシモ大益無クンバ  
アラザルナリ、

且夫レ人智ノ益々進ミテ止マラザルコトハ自然ノ常道ナリ是ヲ以テ獨  
方今ノミナラズ遠ク古昔ニ溯ホリテ之ヲ察スルモ亦以テ之ヲ徴ス可  
シ且ツドドラームノ一體ニ就テ之ヲ論ゼンニ希臘エシールノ時ニ在リ  
テハ其意旨全ク宗教ノ說ニ局シテ復タ其他ニ及バザリシモソフキル  
繼テ起ルニ及ビテハ其功德威力ヲ夫ノ測ル可ラザル鬼神ニ歸スルコト  
己テニエレールノ甚キカ如クナラズユーリビード又之ニ繼クニ至リ

テハ其人情ヲ摸寫スルコト頗ル縝密ニシテ又ソフキルノ及ハサル所ナ  
リ厥後メアンドンルフイレモンノ諧謔ノ詩ノ如キ益々人情ニ近ツキ閩閩  
里巷ノ言往々詩中ニ見エタリ其後羅馬ノ盛ナルプロートテランスノ  
二人遠クメアンドンルフイレモントノ意ヲ紹テ諧謔ノ詩益々精巧ヲ究ム  
ルニ至レリ、

我カ中古以後ノ院劇ノ作ニ至リテハ其進歩更ニ著明ナル者有リ蓋シ  
中古以來諸國ノ民相接スルコト益々密ニシテ人情習俗漸次ニ相混シテ  
復タ曩日ノ各其封疆ニ據リテ自ラ守ルカ如クナラズ是ニ於テ乎詩人  
ノ眼界益々豁開シテ其題目復タ一部ニ踰越セズ凡ソ此ノ如キ者ハ正  
サニ古昔ト近代トヲ割斷スル所ノ一大鴻溝ト謂フモ不可ナル無キナ  
リ

大凡ソ人智未ダ開ケザル時ニ在リテハ制度ナリ文藝ナリ一切ノ事自

然ノ勢ニ任セズシテ、往々私智曲數ヲ用ヒテ之ヲ束縛シテ、自ラ以テ得  
 タリト爲ス、智術己テニ進ムニ及ビテハ、凡ソ此等私智曲數ヲ用ヒテ定  
 ムル所ノ紀律自然ニ崩壞シテ、復タ此ヲ以テ人ノ智識ヲ妨害スルコトヲ  
 得ズ、即チ詩ノ如キモ曩日ニ在リテ作者自ラ以爲ラク、凡ソ詩題中ニ入  
 ル可キ事ハ必ズヤ高雅幽遠ニシテ、迥ニ實迹ノ表ニ出ル者ニシテ後可  
 ナリ、里巷ノ鄙事ハ之ヲ使フ可ラズト、是ヲ以テ或ハ人情ヲ摸寫スル有  
 ルモ、皆唯大體ノ處ヲ把ルニ止マリテ、一切精細ノ狀態ハ皆鄙トシテ之  
 ヲ斥ク、此ノ如キ者ハ所謂私智曲數ノ紀律ナリ、夫レ詩題ヲ撰擇シテ必  
 ズ之ヲ實迹ノ外ニ取ル、是ヲ以テ其叙スル所往々荒誕ヲ免レズ、人情ヲ  
 摸寫シテ必ズ大體ノ處ヲ取ルニ止マル、是ヲ以テ其事陳腐ニシテ人ヲ  
 感ズルニ足ラズ、此レ皆古昔ノ作ニ浸淫スル者ノ免レザル所ナリ、  
 近代人情荒誕ヲ厭ヒ、陳腐ニ倦ムコト尤モ甚シク、以テ公衆ノ輿論ヲ爲ス

ニ至レリ、而シテ作者最モ首ニ是ニ注意セシハ、ワルテルスコットバルザッ  
 クヲ以テ始ト爲ス、蓋シ此二人皆歴史ノ故事ヲ以テ題目ト爲シテ、之ニ  
 加フルニ自家ノ想像ヲ以テシテ稗史ヲ作レリ、請フ特ニバルザックニ就  
 テ之ヲ論セシ、

バルザック其「コメザールユメーション」ト題號スル稗史ニ於テ、現今社會ヲ構  
 成スル所ノ種々ノ族類、即チ商賈農工士人ヲ取リテ、一々其習俗人情ヲ  
 摸寫シテ遺ル所無シ、蓋シ近代ノ名作ナリ、然レモ亦頗ル議ス可キ有リ、  
 蓋シバルザック門地清顯ニシテ庶人ノ情念俗尙等ニ於テハ、未タ其微細  
 ヲ得ズ、是ヲ以テ其書中摸寫スル所ハ大抵里巷ノ惡弊ニシテ、其善處ハ  
 往々未タ之ヲ知ルニ及バズ、又バルザック人ト爲リ才思極テ富贍ニシテ  
 着實ノ見ニ乏シ、故ニ其叙寫スル所極テ人目ニ眩耀スル者有ルモ、深ク  
 之ヲ察スル所ハ或ハ實迹ノ外ニ出ル有ルヲ免レズ、

又シヨルサンドハ婦人ニシテ筆力極テ高シト雖モ、其士トシテ發揮スル所ハ男女相悦ブノ情態ノ外ニ出デズ、若夫レ眞ニ人情ヲ摸寫シテ其善處惡處並ニ舉ケテ遺スコト無ク、人ノ全體ヲ舉ゲテ盡ク之ヲ人目ニ呈スルニ至リテハ、近日ノ作者ニ非ザレハ一モ之レ有ルヲ見ズ、顧フニ此一派モ其源流ハ洵ニバルザクニ出テタルニ論無シト雖モ、深ク之ヲ論ズルハ、バルザクト此派流ノ作者ノ間大ニ相異ナル者有リテ存ス、蓋シバルザクノ稗史タル實迹ヲ摸寫スルニ在リト雖モ、其目的トスル所ハ結構ニ在リ、蓋シ實驗ニ獲ル所ノ事ヲ聚メテ以テ材料ト爲シ、自家ノ腦液ヲ用ヒテ之ヲ混融シテ以テ一種華麗ノ構築ヲ成ス、是レチバルザクノ手段トス、近日ノ作者ニ至リテハ然ラズ、材料ヨリ構築ヨリ一ニ之ヲ實迹ニ照ラシ、專テ怪奇ヲ去リテ平實ニ就キ、讀ム者ヲシテ眞ニ此事有リシト思ハシム、此レ乃チ「レアリスト」ノ名ノ出ル所以ナリ、「レアリス

ト」トハ實事ヲ摸寫スルノ義ナリ、近日稗官ノ最モ高手ト稱スル者ハ、曰クフローベル氏ナリ、曰クゴンクール氏ナリ、曰クヅラー氏ナリ、アルフォソ氏ナリ、ドーデット氏ナリ、エクトルマロー氏ナリ、其作ル所ハ曰ク「マダムボアリー」ナリ、曰ク「マチットカロモン」ナリ、「シエルミニラセルテ」ナリ、「レチーモーペラン」ナリ、「ルーゴンマカール」ナリ、「アソモアール」ナリ、「フロモンシエトヌ」ナリ、「リスレルユーチー」ナリ、「ナッパップ」ナリ、其他猶ホ多少有リ、凡ソ此レ等ノ作ハ皆專テ人情ヲ摸寫シテ遺ス所無ク、以テ自家ノ觀察ノ微密ナルヲ示メシテ、人ヲシテ之ヲ感ゼシム、凡ソ此様ノ作ヲ做ス者ハ、其人必ズ一種天ニ獲ル所ノ才性有リテ、平生事物ヲ觀ルニ於テ能ク其眞情ノ在ル所ヲ洞見シテ、深ク其奧ニ入ルニ非ザレハ能ハズ、是ニ於テ農ナリ、工ナリ、商ナリ、學士ナリ、醫師ナリ、凡ソ社會人民ヲ成ス所ノ族類ハ、皆盡ク觀察シテ之ヲ摸寫シ、善處惡處並ニ

舉ケテ遺サズ、蓋シ一世ノ諸人物諸情性諸習尚ヲ舉ケテ盡ク之ヲ筆端  
 ニ上ボス、嗚呼亦勤メタル哉、若夫レ怪奇偉大ノ人物遠ク流俗ノ表ニ拔  
 クガ如キニ至リテハ、初ヨリ此輩ノ意ヲ置ク所ニ非ザルナリ、  
 近時畫家クールベールナル者有リ、專ラ物形ヲ寫シテ其眞ニ逼マルコトヲ  
 主トセリ、近日稗官家ノ所爲蓋シ此レニ類スル有リ、然レヒクールベ  
 ノ畫ニ於ケルハ、能ク實形ヲ寫スト雖モ、然レヒ之ヲ要スルニ其着目ス  
 ル處ハ外貌ノ外ニ出デズ、又其線條點畫過整ニシテ一モ紀律ノ外ニ出  
 デズ、是ヲ以テ其作索然トシテ生氣無シ、此レ他無シ、能ク貌ヲ寫シテ未  
 タ神ヲ寫スト能ハザルヲ以テナリ、近日稗史ノ如キハ然ラズ、凡ソ其寫  
 ス所ノ人物ハ、其德ナリ、不德ナリ、習癖ナリ、顔面骨相ナリ、冠履被服ナリ、  
 一々舉ケテ遺スト無クシテ、而シテ其精神躍然トシテ書冊ノ上ニ立ツ  
 カ如シ、是ヲ以テ吾人帙ヲ緝イテ之ヲ讀ムキハ、直チニ此等人物ノ口語

ヲ聽キ舉動ヲ視ルカ如クニシテ、復タ其作者ノ想像ニ出デタルヲ覺エ  
 ズ、此レ又クールベールノ畫ノ無キ所ナリ、  
 ミシユレー氏ノ史學ヲ論ズルヤ、曰ク史家ノ旨趣ハ往事ヲ引テ之ヲ丘墓  
 ノ中ヨリ出シ、讀者ヲシテ親ク之ヲ見ルガ如クナラシムルニ在リト、テ  
 オドール、ルソーノ畫學ヲ論ズルヤ、曰ク畫家ノ旨趣ハ布幘上ニ就テ  
 物ヲ畫クニ在ラズシテ、蔽フ所ノ幕ヲ取リテ漸次ニ物ヲ人ノ目前ニ出  
 スニ在リト、近日稗官家ノ所爲モ亦猶ホ此ノ如キナリ、蓋シ其稗史ヲ作  
 ルヤ、平生諸人物ノ言語容貌ヲ聽視シ、又其情性ヲ考察シテ深ク撿覈ヲ  
 加ヘ、然ル後之ヲ胸中ニ蓄ヘ、筆ヲ把リ紙ニ臨ムニ及ビテハ、一々此等  
 人物ノ肖像ヲ其胸中ヨリ取リテ之ヲ布列ス、是ニ於テ其生氣ノ靈活ナル、  
 獨リ讀者ヲシテ其人物ヲ想像セシムルニ止マラズシテ、直チニ其人物  
 ニ接見スルガ如クナラズ、此レ其手段タルミシユレーノ歴史ヲ論ジ、ル

ソノ畫ヲ論ズルト符節ヲ合スルガ如クナラズ乎、  
 吾人近日ノ稗史ヲ讀ムハ、直チニ其諸人物ト晤話シテ其囁嚅ヲ聽ク  
 ガ如クニシテ、復タ是レ書籍ノ敘述ナルヲ覺エズ、昔者作者ノ人物ヲ  
 叙寫スルヤ、作者屢々自ラ出テ場ニ上リ、其人ヲ延テ然ル後之レヲシテ  
 之ニ接セシム、今ノ作者ハ此レニ異ナリ、直チニ讀者ヲシテ其人ニ接セ  
 シメテ、作者ハ初ヨリ與知セザル者ノ若シ、其摸寫ノ眞ニ逼マルヲ此ノ  
 如キ者有リ、而シテ其摸寫スル所ノ人物タルヤ、或ハ農有リ、工有リ、商有  
 リ、士人有リ、醫師有リ、學士アリ、各々自ラ其心中ノ秘ヲ吐露シ、其族類ノ  
 習尚ヲ暴白シテ會テ隱諱スル所無シ、又昔人ノ諸人物ヲ叙スルヤ、必ズ  
 其レヲシテ禮容ヲ設ケ邊幅ヲ飾リテ、稍ヤ眞人ト異ナル所有ラシム、是  
 ナ以テ吾人ノ其作ヲ讀ム者、自ラ院劇ノ人物ヲ觀ルト一般ノ意思ヲ發  
 セシム、今ヤ然ラズ、書中ノ人物皆眞率ニシテ絶エテ自ラ戒ムル所無シ、

之ヲ例ヘハ昔ノ作ニ在リテハ、其人物皆王公貴人ノ廟堂ノ上ニ在ルガ  
 如シ、今ノ作ニ在リテハ、其人物皆里巷小民ノ相會シテ宴ヲ張リ、歌呼舞  
 蹈シテ顧憚スル所無キガ如シ、

夫ノ博士家ノ徒ハ、近今ノ稗史ヲ讀ムニ於テ、其人物ノ此ノ如ク眞率ニ  
 シテ脩飾無キヲ見テ、往々不滿ノ意ヲ懷テ輒チ云フ、此レ何ソ禮法ヲ慢  
 棄スルノ甚キヤト、而シテ其最も喜ハザル所ノ者更ニ一有リ、蓋シ博士  
 家ノ稗史ヲ作ルヤ、其人物ハ必ス之ヲ士太夫ノ屬ニ取ル、今ノ作者ハ區  
 別スル所無クシテ、或ハ賈豎走卒ヲシテ公侯ノ屬ト列チ同クセシメ、或  
 ハ娼婦乞丐ヲシテ學士太夫ト俱ニ遊バシム、蓋シ博士家ノ旨趣ハ專ラ  
 閥閥位階ヲ別ツニ在リテ、今ノ作者ハ專ラ眞情ヲ寫スニ在リ、此レ其相  
 容レザル亦宜ナラズ乎、

且ツヤ今ノ作者其文ヲ屬スル、苟モ適切ナル文字ハ皆之ヲ用ヒテ、絶エ

テ諱避セズ、是ヲ以テ糞洩尻腋等ノ語、動モスレハ文中ニ見ユ、昔ノ作者ハ文字ヲ用フルニ於テ極テ意ヲ致シ、糞洩尻腋等ノ語ニ論無ク、其甚キ者ハ狗豚等ノ字ト雖ヒ亦避ケテ用ヒサリキ、即チビユツフィンノ如キハ其文論中ニ於テ云ヘリ、凡ソ文字意義ノ廣汎ナル者ハ自ラ雅致有リ、適切ナル者ハ露骨ノ病有リ、故ニ文ヲ作ル者苟モ意義ノ廣汎ナル者ヲ用フルコトヲ得ルキハ、務テ之ヲ用フルニ如カズ、其後デリールノ如キモ痛ク意ヲ此ニ用ヒテ、日常人ノ用フル所ノ言語ハ務テ之ヲ避ケ、或ハ之ニ易フルニ更ニ雅ナル者ヲ以テシ、或ハ一語ニ叙述セズシテ、一句若クハ數句ヲ用ヒテ其意ヲ致セリ、夫レ意義ノ廣汎ナル字面ハ、或ハ明瞭ヲ欠クノ患有リ、又一語ヲ以テ言ヒ盡クス可キ處ニ於テ、一句若クハ數句ヲ填スルキハ、或ハ冗漫ノ病有リ、故ニデリール輩ノ尤モ苦心スルハ正ニ此病ヲ免ル、ニ在リ、其後ニ至リ公衆讀者眼界漸次ニ開發シテ、讀誦ノ間

如何ノ字面有ルモ、絶エテ怪異ヲ致サズ、唯意義ノ明ナルコトヲ是レ求メテ其他ヲ問ハズ、是ニ於テ作者モ亦自ラ戒メズシテ、專ラ適切ナル字面ヲ求メテ顧憚スル所無キヲ致セリ、然レヒ今ノ博士家ノ徒猶ホ是ニ察セズ、其文字ヲ用フルヤ、曰ク此字ハ俗ナリ、彼字ハ雅ナリ、彼字ハ意義雋永ナリ、此字ハ意義太切直ナリト、是ニ於テ意義ノ晦澁ナルヲ顧ミズシテ、唯字句ノ美麗ナルコトヲ是レ求ム、嗚呼何ソ愚迷ノ甚キヤ、又稗史及ヒ院劇ノ作ノ如キハ、畢竟人ノ徳ト不徳トヲ叙寫シテ、以テ觀ル者ノ心ヲ怡バシムル者ナリ、昔ノ作者ハ徳ト不徳ト一ニ人物ヲ公侯貴人ニ取リテ、之ヲ摸寫セリ、今ノ作者ハ貴賤上下擇フ所無シ、蓋シ下等人民貧困ノ地ニ居ル者ハ、其童子タル時ニ在リテモ、多クハ庭訓ノ素無ク、其長ズルニ及ビテモ、學術ノ以テ身ヲ持スル無ク、之ニ加フルニ疾病窮餓種々ノ苦難ニ免レズ、是ヲ以テ窮迫ノ餘往々惡事ニ陷キリテ、竟ニ

一生ヲ誤マルニ至ル、又其然ラザル者ハ或ハ兇人ト接スルコト久クシテ漸次ニ其誘惑スル所ト爲リテ自ラ知ラズ、凡ソ此ノ如キ者ハ古今ノ免レザル所ナリ、是ニ於テ近日ノ作者稗史若クハ院劇ノ詩ヲ作り、此等ノ事ヲ叙シテ動モスレバ眞ニ逼ル、而シテ夫ノ博士家ノ徒ハ其人物ノ下賤ナルヲ以テ鄙トシテ之ヲ斥ク、嗚呼同一不徳ニシテ公侯ニ在リテハ、之ヲ叙シテ人心ニ抵觸セズ、下賤ニ在リテハ之ヲ叙シテ人心ニ抵觸ス、天下寧リ此理有ラシ哉、更ニ一層ヲ進メテ之ヲ論センニハ、下賤ノ徒ハ教訓素無ク且常ニ貧困ニ苦ムヲ以テ、其或ハ不徳ノ行有ルモ稍ヤ矜恕ス可キ者有リ、王公貴人ハ既ニ學殖ノ富有リ、又財賄ノ饒有リ、然リ而シテ不徳ノ行ニ陷イルキハ、其惡ム可キコト孰レカ之ヨリ甚シカラン、今博士家ノ輩ハ貴人ノ不徳ノ惡ム可キヲ叙述スルキハ、之ヲ鄙トセズシテ、下賤ノ不徳ノ矜レム可キヲ叙述スルキハ顧テ之ヲ鄙トス、此レ豈ニ繆

戻ノ甚キニ非ス乎、

設令ヒ博士家ヲシテ眞ニ道義ヲ貴バシメ、近日ノ作者ヲシテ不徳ノ行ヲ叙スルコトヲ惡マシメバ、猶ホ可ナリ、今然ラズシテ特ニ其下賤ノ徒ノ不徳ヲ叙スルコトヲ見テ、之ヲ惡ミテ以爲ラシ此ノ如キ下賤ノ人物ハ宜ク作中ニ入ル可ラズト、顧フニ此レハ特ニ其門流ヲ貴フノ鄙念ヨリシテ然ルナリ、彼レ既ニ鄙念ヲ執リテ文藝ヲ非議ス、是ヲ以テ公衆人ハ漸次ニ博士家ノ賞鑒ノ不平ナルコトヲ知リテ、肯テ之ニ左袒セス、是ニ於テ近日ノ作者ハ益々力ヲ得テ復々顧忌スル所無シ、顧フニ今ノ勢ニ由リテ已マザレバ、久ク出デズシテ夫ノ稗官家ノ全勝ヲ見ルニ至ルコト疑ハ容レズ、

然リト雖モ、今ノ作者モ亦頗ル議ス可キ者有リ、何ノ謂ソヤ、曰ク其事ヲ叙スル太密ニシテ極テ細瑣ナル者ト雖モ、皆之ヲ載セテ漏サマルコト是

レナリ、大凡ソ事ヲ紀スル者太密ナルキハ、事迹錯雜シテ人ノ精神ヲ疲  
ラシテ厭倦ノ念ヲ生ゼシム、顧フニ作者ノ心必ズ曰ハソ、余ハ叙事ヲシ  
テ務テ實ニ近カラシム、故ニ瑣事ト雖モ之ヲ漏ラスコトヲ得ズト、此レ大  
謬ナリ、蓋シ人事極テ煩密ナリト雖モ、然レモ其間肝要ナル者有リ、肝要  
ナラザル者有リ、故ニ作家タル者ハ、其肝要ナル者ヲ舉ケテ其肝要ナラ  
ザル者ヲ略シテ可ナリ、今然ラズシテ網羅シテ遺ス所無キキハ、其弊ヤ  
其肝要ナル者、其肝要ナラザル者ノ中ニ埋没シテ求ム可ラザルヲ致ス、  
或ハ然ラザルモ其肝要ナル者ヲシテ甚著明ナラザラシム、此レ近日稗  
官家ノ通病ナリ、

且ツ夫レ撰擇ノ術ハ諸藝皆此ヲ以テ要ト爲ササル莫クシテ、乃チ全體  
ノ美ハ正サニ其撰擇ノ宜ヲ得ルト否ラザルトニ在ルコト往々是レナリ、  
且ツ畫幀ヲ見ズ乎、若シ畫人專ラ實形ニ肖似スルコトヲ務テ、一々微細ノ

處ヲ描テ遺ササルキハ、其畫タル太煩密ニシテ人目ヲ厭ハシムルニ至  
ラン、文章モ亦猶ホ是ノ如キナリ、予嘗テツラノ氏ノ稗史ヲ讀ムニ、正ニ  
此病有ルヲ見ル、瑣碎ノ事一モ舉ゲザル莫シ、故ニ肝要ノ事著明ナラザ  
ルヲ致セリ、

且又稗史ト院劇ノ詩トヲ論ゼズ、凡ソ載スル所ノ人物ハ太々多カル可  
ラズ、若シ已ムコトヲ得ズシテ多ク人物ヲ舉グルキハ、必ズ詳略スル所有  
ラザル可ラズ、人物太多キキハ、作者如何ニ腕ヲ奮フモ、誦讀ノ際往々錯  
雜ヲ致シテ一々之ヲ記スルコト能ハズ、是ニ於テ讀者一人物ニ逢フ毎ニ、  
其既ニ前ニ之ニ逢ヒシト否ラザルトヲ覺ルコト能ハザルニ至ル、故ニ若  
シ一作中多ク人物ヲ要スルキハ、獨リ其眼目トスル所ノ人物ニ就テ精  
細ヲ致シテ、其他ハ大率子之ヲ略シテ可ナリ、

余本書ニ於テ稗史ヲ論ズルコト頗ル詳密ニシテ、讀者或ハ將ニ曰ハソ



トス、是レ何ソ稗史ヲ尊崇スルコトノ甚キヤト、然レ此方今學士苟モ高  
 手ト稱スル者ハ、往々稗史ヲ以テ其瑰奇ノ文章ヲ發スルノ地ト爲シ  
 テ其勢益々盛ナリ、此レ予ノ之ヲ論シテ詳密ヲ加フル所以ナリ、  
 稗史モ亦自ラ二種有リ、一ハ視察ノ稗史ト稱スル者ニシテ、其旨趣タ  
 ル專ラ人ノ起居動作及ビ情性ヲ觀察シテ以テ之ヲ摸寫スルニ在リ、  
 一ハ論說ノ稗史ニシテ、其旨趣タル作者、政體若クハ道德ノ上ニ就テ  
 一成說有ルガ爲メニシテ、人物ヲ假託シ事迹ヲ結構シテ其間ニ於テ  
 己レノ說ヲ宣發スルニ在リ、近時ロベルトアルト氏ノ作りシ所ノ「ラ  
 キニールヂョードンテールボルタリ」及ビ「マダームフレ」子「キス」ノ二  
 篇ノ如キ、正ニ論說ノ稗史ナリ、蓋シ此一體ハユージョーンヌシヨ「及ビ」  
 ルシヤンドノ二氏尤モ其妙ヲ得タリシガ、ロベルトアルト氏其旨趣  
 ヲ繼テ此二篇ヲ作りテ、其文章ノ妙論理ノ高弁ニ實ニ尊崇スルニ足

ル、ロベルトアルト氏文名未ダ甚ク世ニ高カラザルヲ以テ、此二篇ノ  
 如キ、人或ハ未ダ妙處ヲ知ルニ及バズ、此レ誠ニ惜ム可キナリ、余故ニ  
 特ニ之ヲ論ズト云フ、

大凡ソ論說ノ稗史ヲ作ル者ハ、動モスレバ前人ノ說ヲ蹈襲スルヲ免  
 レズ、此レ其人ヲシテ厭倦セシムル所以ナリ、今ロベルトアルト氏ノ  
 作ハ然ラズ、其說全ク自家ノ肺腑中ヨリ流出シテ、而シテ其結構ノ變  
 化中極テ整齊ノ處有リテ、萬種ノ事項皆一ニ歸スルコト、眞ニ人ヲシテ  
 驚歎セシム、加之其意趣ノ怪奇ニシテ而シテ迂僻ニ至ラズ、其觀察ノ  
 微密ニシテ而シテ煩細ニ至ラズ、又作者胸中一種仁愛ノ念ノ藹然タ  
 ル者有リテ、自ラ筆墨ノ表ニ著見シテ、大ニ世ノ進歩ヲ裨補スルニ足  
 ル者有リ、此レ尤モ余ノ此作者ヲ尊崇スル所以ナリ、

○第七章 「ドラーム」

凡ソ前節論ゼシ所ハ、「ドラーム」ノ一體ニ就テ言フモ亦同一般ナリ、蓋シ古昔ニ在リテハ、人々盛衰存亡ノ理ヲ以テ一ニ之ヲ天命ニ委附シ、此レヲ以テ一篇ノ大旨ト爲セリ、即チ院劇ノ詩ノ如キモ、一ニ皆此大旨ヲ定ムルキハ、作中諸人物賢愚ヲ問ハズ、正邪ヲ論ゼズ、一ニ皆此大旨ニ依準セシムルコト、猶ホ繩ヲ以テ物ヲ申シガ如シ、エシールウフツルノ諸作皆然ラザル莫シ、其後心性ノ學ノ進步スルニ及ビ、作者漸次ニ人ノ情性ヲ發揮スルコトヲ務メリ、是ニ於テ作者大旨ノ在ル處ハ、固ヨリ一定スト雖モ、其諸人物ハ必ズシモ皆盡ク之ニ依準スルニ至ラズ、此レ其大ニ相異ナル所以ナリ、

エシールノ院劇ノ詩ノ一種盛大ニシテ、畏ル可キノ形狀有ル所以ノ者ハ、他無シ、其一篇ノ大旨常ニ諸齣ノ中ニ著ハレテ蔽フ可ラズ、此レ其慣用ノ秘訣ナリ、蓋シ其作ヲ觀ルキハ、初齣ヨリ第二齣ニ第三齣ニ至リ、是

ノ如クニシテ愈々進ムキハ、其大旨ノ在ル處愈々明ニシテ一物ノ之ヲ障妨スル無クシテ、讀者將ニ曰ハントス、每齣中種々ノ人物有リテ各々爲ス所有リト雖モ、然レモ夫ノ大旨ナル者隱然其頭上ニ吊掛シテ去ラズ、蓋シ愈々進ムキハ、夫ノ大旨ノ勢愈々剛烈ニシテ、末段ニ至リテ諸人物皆盡ク其擊碎スル所ト爲ルコト、猶ホ火輪車ノ軌道上ニ走り、速力極テ盛ニシテ、觸ル、者ハ皆之ヲ粉齏シ、必ス一道ニ由リテ進ミテ肯テ他ニ趨カザルカ如シ、

且ツヤ希臘詩人ノ院劇ノ詩ヲ作ル、其事迹ハ必ズ神代記ニ取リテ之ヲ演シ、而シテ神代記ハ本ト口碑ノ傳フル所ヲ記シテ、一定ノ說ヲ爲スヲ以テ、詩人タル者自己ノ想像ヲ用ヒテ、妄リニ其結局ヲ變易スルコトヲ得ズ、是ヲ以テ詩人ノ其手腕ヲ示スコトハ、畢竟神代記中ノ事迹ニ就テ、幾分色澤ヲ加ヘテ、此ヲ以テ觀ル者ノ心目ヲ驚カスニ過ギズ、

夫レ希臘院劇ノ詩ノ必ス豫メ一篇ノ大旨ヲ定メテ、萬事ヲシテ皆此ノ大旨ニ歸宿セシムルコト是ノ如シ、是ヲ以テ其詩中ノ最モ威力ヲ有スル者ハ此大旨ニ踰ユルコト無クシテ、諸人物ハ畢竟其使役スル所ト爲ルニ過ギズ、此レ猶ホ一種目ニ視ル可ラザル妖物ノ如シ、其ノ正邪強弱ヲ論セズ、此物必ス之ヲ率キテ以テ皆其天ニ稟ル所ノ命ヲ遂ゲシム、此レ其大體ナリ、

希臘ノ院劇詩ノ大體是ノ如シ、是ヲ以テ賞鑒家動モスレハ云フ、因果應報ノ理ハ希臘院劇詩ノ大旨ナリト、是レ大ニ然ラズ、希臘人ノ心性ニ於テ素ヨリ自由ノ理ヲ崇信シテ、以爲ラク人タル者ハ、其行爲ニ由リ或ハ福ヲ得或ハ禍ヲ得、故ニ必ズ自ラ勉メザル可ラズ、手ヲ拱シテ天命ヲ待ツハ決シテ人タルノ道ニ非ズト、希臘人ノ此ニ觀ル有リシコトハ、其諸行事ヲ觀テ知ル可キナリ、但其少シク因果應報ノ理ヲ信ズ

ルニ似タル所以ノ者ハ、抑々亦故有リ、蓋シ希臘人ハ凡ソ其未來ニ屬スル事ニ係リテハ、一ニ自由ノ理ニ據リテ自ラ斷シテ、絶エテ天命ニ委スルコト無シ、過去ノ事ニ至リテハ、極テ細碎ノ事項ト雖モ皆因ル所有リテ必ズ一大旨趣ニ統屬スト爲ス、此レ其少シク因果ノ説ニ肖似スル有ル所以ナリ、

凡ソ天下ノ事極テ細碎ナル者ト雖モ、一タビ發現シテ時ヲ過クルモハ、神明ト雖モ復タ之ヲ消除ス可キ無シ、此レハ則チ因果ノ説ノ出ツル所以ナリ、而シテ希臘ノ詩人ハ、一ニ其神代記ノ載スル所ノ事迹ヲ以テ題目ト爲シテ、以テ其院劇ノ詩ヲ作ル、是ニ於テ以爲ラク是事ヤ既ニ發現シテ若干年所ヲ經タリ、神明ノ力ト雖モ復タ之ヲ回ス可ラズ、吾輩詩人タル者ハ當ニ其事ニ因テ推シテ之ヲ明ニシ、次ヲ逐ヒ序ニ順テ之ヲ叙シテ、方ニ始テ題目ト副フコトヲ得可シ、一事モ想像臆度

シテ裝飾スル所有ル可ラズト、夫レ其過去ノ事ヲ鄭重ニスルヤ是ノ如シ、加之其道德ノ説ニ於ケル、一種ノ所見有リテ福善禍惡ノ旨趣深ク腦裡ニ着ケリ、是ヲ以テ其詩第一齣ヨリ取次ニ進ミ、一齣毎ニ益々直行シテ止マズ、以テ末齣ノ大結局ニ至ル、而シテ觀ル者ニ在リテハ、以爲ラク其終局ノ事ハ皆豫メ首齣ノ時ニ定リテ復タ動カス可ラズ、其間微細ノ事ト雖モ皆此大結局ヲ釀成スル所以ニ非ザル無シト、是ヲ以テ今ノ賞鑒家動モスレバエシールノ諸作ニ於テ、因果應報一定不易ノ説ヲ見ルヲ致ス、然レモ仔細ニ之ヲ察スルキハ、畢竟過去ノ事迹ニ於テ其順序ヲ鄭重ニスト云フニ過ギザルノミ、

エシールニ繼テ起リシ者ハソフケルナリ、ソフケルノ手段ハ復タエシールト同シカラズシテ、事迹ノ進歩ト人物ノ自由ト更ニ相雜ハリテ、更ニ平均ノ態ヲ見ハセリ、啻此レノミナラズ、其諸作中最モ人物ノ自由ヲ

發揮シ、其性情ヲ摸寫セシ者ニ至リテハ、觀者或ハ將ニ其一モ天命ノ理ニ拘泥セザリシヲ疑ハントス、其「フィロクテート」「アジキス」「アンチゴン」等ノ院劇ノ詩ノ如キ即チ是レナリ、其人情ヲ摸寫スルコト頗ル妙ヲ極メタリ、

願フニソフケルノ詩今日ニ傳フル者ノ外、猶ホ幾何有リシカ固ヨリ知ル可ラザレハ、則チ其他ノ詩作モ亦或ハ人情ヲ摸寫スルコト「アジキス」等ノ篇ノ如クナリシカモ亦知ル可ラズ、若シ專ラ今ニ存スル者ニ就テ言フキハ、此等ノ篇ノ外ハ往々エシールノ遺法ニ據レル者有リ、即チ其「エヂッブアローア」「エヂッブアコロニス」「エレクトル」「トラシニエニス」等ノ諸篇ハ、皆一篇ノ大旨ヲ本トシテ、事迹ヲシテ之ニ率テ進歩セシメ、以テ豫メ大結局ノ地ヲ爲シテ、人物ノ自由ハ極テ寡少ナリ、向キニ希臘彫刻ノ諸作ヲ論ズルヤ、余以爲ラク其旨趣ト爲ス所ハ專ラ

神代記ノ事迹ニ在リテ、作者ハ唯其事迹ニ就テ色澤ヲ加フルニ過ギズト、ソフヲクルノ院劇ノ詩ニ於ケル其手段正ニ是ノ如シ、此レ其少クエシ  
 ールト異ナル所以ナリ、

エシールノ手段ハ専ラ事迹ノ順序ヲ重ンシテ、人物ノ情性ハ少シモ顧ル所ニ非ズ、ソフヲクルモ亦其遺法ニ據リ、事迹ノ順序ヲ重ンズト雖モ、其間幾分意ヲ人物ノ情性ニ用ヒテ、其ナシテ其天ニ獲ル所ノ自由ニ率テ自ラ發舒セシム、此レ其心性ノ學ノ進歩ヲ徵スル所以ナリ、

ユーリビードニ至リテハ、手段又一變セリ、蓋シ其諸題目ハ猶ホ之ヲ神代記中ニ取ルト雖モ、然レモ其主トスル所ハ、事迹ヲ叙述スルニ在ラズシテ人物ノ情性ヲ摸寫スルニ在リ、之ヲ要スルニ希臘ノ院劇詩、ユーリビードニ至リテ大ニ我が近代ノ風ニ近似セシト謂フ可シ、

エシールノ詩ニ在リテハ、其人物ハ特ニ天命ノ犧牲タルニ過ギズソフ

クルニ在リテハ、人物稍ヤ自由ニシテ復タ天命ノ犧牲ニ非ズト雖モ、猶ホ其使役スル所ト爲ルヲ免レズ、ユーリビードニ至リテハ、人物各々其性ニ隨テ自ラ發舒シテ、以テ天命ヲ左右スルヲ得、更ニ乞フ一言セン、エシールニ在リテハ事迹ノ順序一直線ニシテ、人物ハ特ニ之ニ隨テ歩ヲ進ムルニ過ギズ、ソフヲクルニ在リテハ、人物ノ步驟猶ホ直線ニ由ルト雖モ、或ハ時ニ自ラ遲速スル有リ、ユーリビードニ至リテハ、其人物各々歩ニ任セテ進テ以テ事迹ヲ構成ス、此レ正ニユーリビードノ院劇ノ我が作者ニ庶幾スル所以ナリ、

我が第十八紀ノ作者コルチイユラシンヌノ如キハ、其才性はノ如ク相異ニシテ、其用フル所ノ手段是ノ如ク相殊ナリト雖モ、然レモ其事迹ト人物ノ平均ヲ求ムルニ至リテハ、期セズシテ同シ、蓋シ其事迹ノ順序ニ着目スル所ハ、大ニエシールソフヲクルニ類スル有リテ、其人物ヲ摸寫ス

ル處ハ、大ニユリビードニ類スル有リ、然レモ之ヲ要スルニ人物ヲ摸  
寫スルコト多キニ居ル、

ラシクヌノ「トラジエヂ」ニ於ケル、其事迹ノ順序ト人物ノ情性ト相混融  
シテ分離ス可ラザル者極テ多シ、蓋シ其初メ筆ヲ把リテ紙ニ臨ムヤ、必  
ズ曰ク我レ必ズ一事迹ヲ叙述シテ其規模一ニソフクノ典型ニ倣フ  
テ之ヲ爲シテ、即チアリストトノ詩論ノ示ス所ニ於テ少シモ違フコト無  
カラント、是ニ於テ題目ヲ撰ミテ之ヲ定ム、既ニシテ漸次ニ事迹ヲ推演  
スルニ及ビテハ、其天ニ獲ル所ノ才性、知ラズ識ラズ發舒シテ復タ止ム  
可ラズ、加之當時ノ習俗人情又深ク其腦裡ニ粘着シテ、是ニ至リ滔々ト  
シテ發出シテ、自ラ其筆端ヲ繞リテ去ラズ、是ニ於テ心性ノ學ニ據リテ  
人ノ情性ヲ摸寫スルノ一著、自然ニ旨趣ト爲リテ斯ニ以テ其一篇ノ詩  
ヲ落成ス、蓋シ此ノ如キ者ハラシクヌト雖モ自ラ然ルコトヲ期セズシテ

然リシコト疑無シ、

夫レ然リ、故ニラシクヌノ院劇ノ詩ノ事迹ノ順序ト人物ノ摸寫ト相稱  
フテ極テ平均ヲ得タリト雖モ、之ヲ要スルニ人情ノ一著尤モ多キニ居  
ル、人若シ之ヲ徵セント欲セバ、直チニ其諸作ヲ把リテ之ヲ讀ムニ如ク  
ハ莫シ、其君臣相與ニスルノ道、男女相悅ブノ情ヨリ以テ父子兄弟ノ狀  
態ニ至ルマデ、摸寫シテ其妙ヲ極ム、此レ其作ノ尤モ人心ヲ怡バシムル  
所以ニシテ、事迹ノ順序ハ觀者自然ニ之ヲ忘レテ自ラ知ラザルヲ致ス、  
然リト雖モラシクヌノ院劇ノ詩モ亦短處無シト爲サズ、其短處ハ即チ  
ラシクヌノ才ノ至ラザルニ在ラズシテ、當時ノ風俗人情乃チ然ラシム、  
何チ以テ之ヲ言フ、曰ク當時ルイ一十四御ニ在リ、諸侯伯第ヲ連子テ巴  
勒ニ在リテ、上下相競フテ奢侈ヲ尙ビ、又其平生相交ルノ際、專ラ風流才  
智ヲ以テ相高ブリ以テ風ヲ成セリ、是ニ於テ貴遊子弟才子ヲ以テ自ラ

標シ、其相會シテ晤話スルヤ、一言一語ト雖モ漫然トシテ之ヲ吐カズ、必ズ雅麗ノ辭ヲ撰ミテ之ヲ出シテ以テ自ラ喜ビ、又婦人ノ如キモ動モスレバ夫ノ男女相悅ブノ情ヲ話スルニ於テ、理學士ノ論理ヲ以テ之ヲ解釋シテ、以テ自ラ其才ヲ示セリ、當時ノ風俗此ノ如シ、故ニラシンヌノ詩中ノ人物、或ハ此ノ如キノ弊無キヲ能ハズ、顧フニ當時ノ人ニ在リテハ、ラシンヌノ院劇ヲ觀ルニ於テ、其風流才子ノ状態ヲ見テ深ク之ヲ喜ビシニ論無シト雖モ、今日ニ在リテ之ヲ觀ルルハ、大ニ人情ニ近カラザル者有リ、此レハ則チ作者ノ罪ニ非ズシテ乃チ時世ノ變ナリ、其後、時運益々進ミ、風俗隨テ改マリ、院劇ヲ觀ル者其好尙復クラシンヌノ時ト同ジカラズ、是ニ於テ作者モ亦時好ヲ酌量シテ之ニ合スルヲ求メザルヲ得ズ、蓋シラシンヌノ時以來人情ヲ摸寫スルヲ益々盛ニシテ、事迹ノ次序ハ必ズシモ意ヲ致サザルニ至レリ、既ニシテ近代ニ至リ

テハ、院劇ノ風又一變シテ、事迹ノ次序再ヒ主眼ト爲リテ、人情ノ細微ヲ寫スコトハ漸ク減降スルヲ致セリ、蓋シ第十八紀ニ在リテハ、院劇ヲ觀ル者大抵貴紳ノ徒ニ止マリシモ、近代ニ及ヒテハ四方ヨリ巴勒ニ來リ聚ル者、農工商賈ヲ問ハズ皆往テ觀ザル莫シ、而シテ看客多クハ一時耳目ヲ怡ハシムルヲ以テ主ト爲シテ、意義ノ深奥ナル處ハ、或ハ深ク之ヲ察セズ、往々乃チ云フ、院劇ノ院劇タル所以ハ、人情ノ過激ナル處ヲ寫スニ在リト、又云フ院劇ノ主トスル所ハ畢竟一時ノ快ニ在リト、是ニ於テ作者或ハ男女ノ状態ノ最モ鹿笨ニシテ解シ易キ處ヲ寫シ、或ハ歌舞ノ態ヲ雜ヘテ以テ人ノ耳目ヲ眩スルヲ求ム、此レ其人情ノ細微深密ヲ寫スノ風ノ衰フル所以ナリ、近代ノ院劇此ノ如キヲ見ルルハ、其勢乃チ知ル可シ、曰ク將ニ變セントシテ未ダ變セズ、所謂變革ノ時候ニ際スル者ナリ、顧フニ曩日ニ在リテ

ハ、院劇ノ作ハ詩中ノ一體ノ最モ盛ナル者ニシテ、優ニ他ノ文藝ト並立  
 ツコチ得タリシモ、方今ニ及ビテハ、其勢大ニ衰ヘテ僅ニ人間智巧ノ數  
 ニ列スルニ過ギズ、顧フニ其此ノ如キヲ致セシ所以ノ者ハ何ソヤ、人或  
 ハ云フ、現今院劇ノ作ノ振ハサル所以ノ者ハ、人智ノ實ニ下レルニ非ズ  
 シテ、公衆ノ好尚ニ合スルコトヲ求ムルガ爲メニ、已ムコトヲ得ズ此ノ窮シ  
 テ將ニ變セントスルノ勢ニ至レリ、故ニ今日ノ勢ハ院劇ノ退歩ノ時ニ  
 非ズシテ、特ニ猶豫狐疑ノ時ト云フニ過ギズト、又云フ近時智巧大ニ闕  
 ケ、四方通行ノ道大ニ其便ヲ得タルヨリシテ、旅客ノ都下ニ來ル者日々  
 ニ多シ、是ヲ以テ曩日ニ在リテハ貴紳ノ徒獨リ院劇場ニ赴キシモ、今日  
 ニ至リテハ貴賤貧富其別無シ、而シテ學問素無ク智識麁鄙ナル者看客  
 ノ過半數ヲ占メ、作ノ高下ハ全ク此輩ノ評定スル所ト爲ル、是ニ於テ作  
 者先ツ此輩ノ心ニ合スルコトヲ求メテ其他ヲ問ハズ、此レ乃チ今日院劇

ノ作ノ降下セシ所以ナリト、顧フニ此言ヤ或ハ大ニ然ラン、之ヲ要スル  
 ニ今日院劇ノ作ノ進歩セザルコトハ余モ亦異論ヲ容レズ、又今ヨリ以往  
 如何ノ形勢ニ赴クカ、是レモ亦余ノ豫知スルコト能ハサル所ナリ、  
 方今院劇ノ作誠ニ進歩ノ勢無シ、然レモ作者ノ尤モ著名ナル者ニ就テ  
 言フキハ、其着眼スル所未タ必ズシモ知ラズンバアラズ、併シ其主眼ハ  
 猶ホ余カ前ニ論セシ所ノ外ニ出デズ、即チ事迹ノ次序ヲ一定スルト人  
 情ヲ摸寫スルト是レノミ、  
 蓋シ此事ハ獨今日ニ在リテ務ム可キニ非ズシテ、昔日ノ作者モ亦意ヲ  
 此ニ用ヒシ者有リ、シベコトスビールモリエールノ如キハ、尤モ其最ナル  
 者ナリ、  
 夫レ希臘作者ソフオクルユーリビードノ事迹ノ次序ヲシテ整齊ナラシ  
 ムルニ專ラニシテ、人情ヲ摸寫スルニ專ラナラザルコトヲ致セシ所以ノ



者ハ他ニ非ズ、其題目一ニ之ヲ神代記ニ取リテ、而シテ其事本ト人口ニ  
贈炙スルヲ以テ、作者意ニ任セテ之ヲ接排スルヲ得ズ、是ヲ以テユ一  
リビードノ如キ、大ニ院劇ノ面目ヲ新ニセシト雖モ、其大局面ニ至リテ  
ハ、竟ニエシールソフケルノ典型ヲ出ツルヲ能ハズ、或ハ儘々規則ノ外  
ニ馳セ、意ヲ肆ニシテ作ルキハ、種々妨碍紛生シテ回避ス可ラズ、動モス  
レハ錯雜無紀ノ弊ヲ免ル、ヲ能ハズ、

我カ第十八紀ノ作者モ、苟モ「トラジエギ」ノ一體ヲ倣スキハ、亦希臘作者  
ニ倣フテ幾分意ヲ事迹ノ次序ニ致サバルヲ得ザリキ、此レ他無シ、其  
題目常ニ希臘神代記ヲ取リシヲ以テナリ、ラシンスコルチイユノ如キ  
皆是レナリ、ラシンス嘗テトルコノ史中ニ於テ當時ノ一事迹ヲ取リテ  
題ト爲シテ、「ドラジエギ」一篇ヲ作りシガ、其土地相隔ルヲ此ノ如ク其遙  
ナルヲ以テ、古代ノ事ニ非ズト雖モ人モ亦請ヲ致スヲ無カリキ、其他ハ

一モ神代記ニ由ラザル莫シ、

「トラジエギ」ノ詩ハ必ズ題ヲ希臘神代記ニ取ル、否ラザレバ他ノ史籍中  
必ズ人口ニ贈炙スル者ヲ取ル、是ヲ以テ詩人意ヲ肆ニシテ事實ヲ左右  
スルヲ得ズ、是ヲ以テ「トラジエギ」ノ一體ニ係リテハ、事迹ノ次序ハ最  
モ其主眼トスル所ニシテ、人物ノ情性ヲ摸寫スルヲハ、終ニ第二着ニ置  
カザルヲ得ズ、蓋シ當時ノ人皆以爲ラク、院劇ノ題目ハ古代ノ事迹ニ非  
ザレバ、衆觀者ノ心ヲ怡ハシムルニ足ラズト、  
若夫レ「コメギ」ノ諸作ニ至リテハ、第十八紀ノ時ニ在リテモ、題目ヲ取ル  
ヲ此ノ如クノ狹隘ナラズシテ、作者自在ニ人物ヲ杜撰シテ之ヲ摸寫ス  
ルヲ得、是ヲ以テモリエールノ諸篇ノ如キ、皆肆唯猖狂毫モ檢束ヲ受  
ケズ、

院劇ノ作モ亦稗史ト同ク二體有リ、一ハ事迹ノ怪奇ナルヲ主トスル

者ナリ、一ハ人情ヲ摸寫スルヲ主トスル者ナリ、蓋シ人智ノ未タ甚進マザル時ニ在リテハ、事迹ノ怪奇ナルヲ主トスル者多ク、人心ノ悦フ所ト爲ル、心性ノ學稍ヤ進ミ、人々物ヲ觀ルノ情稍ヤ精密ナルニ及ビテハ、公衆觀ル者モ亦自ラ人情ヲ摸寫スルヲ主トスル者ヲ看テ之ヲ悦ブ、然リ而シテ「コメデー」ノ一體ハ事迹ノ束縛スル所ト爲ラザルヲ以テ、作者意ニ任セテ作爲シテ、自然ニ時好ニ適合スルヲ得タリ、故ニ若シ此ノ一着ニ就テ言フキハ、「コメデー」ノ一體ハ「トラジエデー」ニ比シテ大ニ相勝サル處有リ、

「ロマンチック」詩文ニ係リテ新家漸ク盛ナルニ及ビ、口ヲ極テ古文家ノ非ヲ駁撃シ、今日ニ至リテ其勢益々張り、天下ノ作者喁々然之ニ歸嚮スルヲ致セリ、是ニ於テ古昔ヲ祖述スルノ風復タ曩日ノ如クナラズシテ、作者往々題ヲ眼前ノ事ニ取リテ、復タ神代記及ヒ古史類ヲ問フヲ無シ、然

レヒ「ロマンチック」家ノ始テ起ルヤ、其題ヲ取ルヲ未タ今日ノ自在ナルガ如クナラズ、先ツ中古ノ事迹ニ就テ其意ニ適スル者ヲ取リ、以テ之ヲ演セリ、其後ニ及ビ漸次ニ益々放蕩ニ赴キ、今日ニ至リテ極マレリ、但一ニ陋見ヲ守ル者、猶ホ自ラ境界ヲ畫シテ、肯テ其外ニ出デズ、然レヒ今日ノ勢ヲ以テ之ヲ推スキハ、久シカラズシテ降テ文壇ニ乞フニ至ランヲ疑ヲ容レズ、

予ヲ以テ之ヲ觀ルニ、畢竟院劇ノ作ノ旨趣トス可キ所ハ、果シテ何クニ在ルヤ、其體ノ「トラジエデー」タルト「コメデー」タルトヲ問ハス、其大要ハ人物ヲシテ人ノ眼前ニ生動セシムルニ非ズ乎、蓋シ人ノ性タル千差萬別ニシテ、或ハ強有リ或ハ弱有リ、或ハ緩有リ急有リ、或ハ智有リ愚有リ、又其情慾タル或ハ愛スル所有リ、或ハ憎ム所有リ、或ハ喜ヒ或ハ悲ミ、或ハ樂ミ或ハ悞ル、其他人ノ嗜好各々一ナラズ、是ニ於テ或ハ意ヲ得テ揚々

タル者有リ、或ハ快々トシテ樂マザル者有リ、以テ社會ノ形狀ヲ成ス、惟  
 フニ其一切喜フ可キノ類ハ、皆「コメヂー」ノ題目ニ非ズ乎、其一切悲ム可  
 キノ類ハ皆「トラジエヂー」ノ題目ニ非ズ乎、作者苟モ此レ等ノ情ヲ摸寫シ  
 テ皆自然ニ出テ、矯僞ニ失セズ、按排ニ拘セズ、其狀態躍然トシテ公衆ノ  
 目ニ露呈シテ、而シテ其前後ノ旨趣貫徹シ、首尾相應シテ虧滿無ク、又其  
 間自ラ勸善懲惡ノ微意有リテ、大ニ世ノ道義ニ違ハザルキハ、皆以テ人  
 ナ怡ハシメテ且ツ裨益スル所有ル可キナリ、作者ノ能事全ク是ニ至リ  
 テ畢ル、豈復タ別ニ義理ヲ生シテ相攻撃ス可キノ理有ラン哉、  
 其作「トラジエヂー」ナル乎、人ナシテ其事迹ノ畏ル可ク、或ハ驚ク可ク、其人  
 物ノ重ンズ可ク、或ハ哀ム可キヲ見テ之ヲ感ゼシム、其作「コメヂー」ナル  
 乎、人ナシテ其滑稽諧謔ヲ見テ頷キ解キ、心ヲ開カシム、作者ノ旨趣蓋シ  
 是ノ如キノミ、若夫レ其人物ハ其果シテ古昔豪傑人ノ眼目ニ照映スル

者タルト其果シテ賈豎農夫タルト、皆問フ所ニ非ズ、夫レ其ノ人物ノ名  
 ノ果シテシヤル、マニ「佛蘭西中古」ト稱スルト「ヂユランド」佛蘭西中古ト  
 稱スルガ如キハ、其作ノ高妙ナルト下劣ナルトニ於テ絲毫モ關係スル  
 「有ル」無シ、然リ而シテ此等ノ事ヲ以テ之レガ軒輊ヲ定メント欲ス  
 ルハ、豈ニ繆妄ノ甚キニ非ズ乎、  
 院劇ノ詩ニ貴ブ所以ノ者ハ、諸人物ナシテ活潑飛動シテ、各々其情性ヲ  
 露出シ以テ衆人ヲシテ心ヲ怡ハシムルニ在リ、苟モ是ニ得ル有ルキハ  
 「トラジエヂー」ナリ、「コメヂー」ナリ、皆以テ名篇ト稱スルニ足ル、  
 又方今ノ院劇ノ作ニ於テ肝要トス可キ所ノ者一有リ、事ノ大體ニ屬ス  
 ル者ヲ去リテ、節目ノ微細ナル者ヲ取ル「是レナリ、蓋シ古昔人智未ダ  
 開ケザル時ニ在リテハ、人ノ情性モ亦大ニ相遠カラズシテ、同一族類ノ  
 民ハ自ラ相似タル者有リ、即チ希臘羅馬ノ民ノ如キ皆然ラザル莫シ、而

シテ我が第八紀ノ「トラジエギ」ハ常ニ神代記ノ事迹ヲ演セシテ以テ、其人物大抵一樣ナラザル莫シ、故ニ若シ詩人其人物ヲ摸寫スルニ於テ、大體ヲ取ルニ非ザレバ、觀ル者細ケテ以テ鄙野ト爲ス、加之當時指紳ノ徒ニ一種ノ風俗有リテ、其性ノ異同ヲ問ハズ、一般ニ好尙スル所有リ、故ニ詩人其人物ヲ摸寫スルニ方リ、并セテ此ノ好尙ヲ發揮シテ之ヲ出スニ非ザレバ、觀ル者モ亦心ヲ怡ハシムルニ至ラズ、之ヲ例ヘバ「ビリコー」スノ如キ其戀愛スル所ノ婦人ニ迫リテ其情ヲ宣ベ、若シ從ハザレバ將ニ其子ヲ刺殺セントス、其事タル極テ危急ナリ、而シテ「ビリコー」スノ言一々韻ヲ諧シテ自ラ「マドリゴ」ノ體ヲ爲セリ、夫レ人危急ノ地ニ立テテ其言能ク自然ニ詩ヲ成ス、豈ニ果シテ此ノ如キヲ有ラン哉、且ツヤ言ヲ出シテ自然ニ詩ヲ成ス者ハ、此レ其人必ズヤ風流醜藉愛ス可キ人物ナリ、然ルニ人ノ妻ニ迫リテ濫行有ラント欲ス、此レ其醜豈ニ容レサルニ非ズ

乎、然レモ當時ニ在リテハ曾テ人心ニ抵觸スルコト無カリキ、又「イフイシエ」ニ「ア」ノ「リ」ドノ詩ノ如キモ、其中不倫ナルコト極テ多シ、此レ其故何ソヤ、作者必ズ當時ノ風俗ノ大體ニ合スルコトヲ求メテ人情ノ微細ニ拘ハラズ、此レ其此病ヲ致ス所以ナリ、今日ニ在リテハ人々幾ント意ニ任セテ生ヲ爲シテ人ノ束縛ヲ受ケズ、是ヲ以テ同一情慾ト雖モ其性ニ由リテ各々本色有リテ、千差万別一モ相同シキコト無シ、是ヲ以テ作者人物ヲ摸寫スルニ於テ、徒ニ大體ノ處ヲ取リテ微細ノ節目ヲ問ハザルモ、其作必ズ疎笨ニシテ人心ヲ感ズルニ足ラズ、此レ其肝要トス可キ所ナリ、然リト雖モ作者若シ奇ヲ好ムノ太甚クシテ其人物ヲシテ一々人ト同キ處無ク、專ラ怪奇迂僻ノ行有ラシメテ、以テ今代ノ風俗ニ抵觸スルニ至ルモ、亦悖理ト謂ハザルヲ得ズ、何ゾヤ人ノ院劇ヲ觀ルニ樂ム所以

ノ者ハ他無シ、其摸寫スル所ノ人物ノ種々百般ナルヲ視テ、之ヲ日常眼前ノ實事ニ照ラシテ毫釐ノ違ナキヲ徵ス、此レ其樂ト爲ス所以ナリ、若シ其人物ノ言語動作一モ實事ニ似ズシテ、皆盡ク別世界ノ人ノ如クナラシメハ、何ノ樂ム可キヲカ之レ有ラン、此レニ由リテ之ヲ觀レハ、作者ノ旨趣トス可キ所知ル可キノミ、曰ク同中異有リ、異中同有リ、以テ世上ノ實迹ト相照映ス是レノミ、

第八章

歌行ノ詩及ヒ諷刺ノ詩○詩ニ於ケル感情ヲ發揮スル手段ノ他ノ諸藝ニ勝サルヲ論ズ○詩及ヒ學術

歌行ノ一體ハ、古昔ニ在リテハ專ラ神德ヲ歌頌スルニ用ヒテ、曾テ他ノ人事ヲ演スル有ラズ、パンダールカチールオラース及ヒ英吉利日耳曼ノ諸大家起リテ、此體ヲ唱フルヨリ其境界益々廣博ニ趣キシヲ、一ニエボペー「ドラーム」ノ諸體ト異ナルヲ無シ、

此一體ハ中古以來英吉利日耳曼ノ作家往々之ヲ脩メテ我佛蘭西ノ作者ハ幾ント之ヲ廢棄セシガ、近日ニ至リ此體俄ニ行ハレ、名篇高什續々トシテ出テ、將ニ英吉利日耳曼ニ勝チテ之ニ上ラントス、第十八紀ニ在リテハ、此體ニ據リテ作りシ者ハ、獨エステル「アタリー」ノ二篇中ノ一段及ビシユール「ラプリーズドナミユール」ノ篇中ノ一段有ルノミ、而シテ此等段落モ亦專ラ歌行ノ體ニ由リテ言フキハ、未タ之ヲ名作ト稱ス可ラス、是ニ於テ人或ハ云ヘリ、歌行ノ一體ハ佛人ノ天性ト相副ハズト、然ルニ近日ニ至リテハ諸大家輩出シテ駭々乎進ミテ止マズ、方ニ知ル或人ノ論ノ幸ニシテ竟ニ驗セザリシヲ、

歌行ノ體ノ再ヒ勢ヲ我佛蘭西ニ得シハ、全クロマンチック家ノ性靈ヲ本トシテ摸擬ヲ斥ケ、力ヲ出シテ夫ノ博士家ノ陋見ヲ破リシニ是レ由ル、蓋シ博士家ノ詩ニ於ケル、苛細ノ規律ヲ設ケ、專ラ古昔ノ作者ニ摸擬ス

ルヲ求メテ其他ヲ問ハズ、是ニ於テ「ロマンチック」家ノ徒起リテ新タニ其說ヲ唱ヘテ、以爲ラシク天下萬事古今相拘セズ、獨詩ノミニ非ザルナリ、中ニ感スル所有リテ之ヲ文辭ニ著ハシ、以テ讀者ヲシテ亦之ヲ感セシム、詩ノ旨趣此ノ如キノミ、何ツ規々トシテ古ヲ學ビ模擬剽竊シテ以テ詩ト爲サント、而シテ博士家ノ門下ニ列スル者ハ、頑然トシテ其說ヲ守リテ變ゼズ、是ニ於テ作者分レテ兩陣ト爲リ壘ヲ對シテ相撃ツ、此ニ十有餘年ナリ、蓋シ一千八百二十五年一千八百四十年ニ至ルマデ、兩家相争フテ已マズ、而シテ「ロマンチック」黨ハ此争ノ爲メニ人々相競フテ其新調ニ據リテ作爲シ、名篇高什勝ケテ計フ可ラズ、竟ニ古文家ヲシテ幾ンド兵ヲ曳テ却走セシムルニ至レリ、顧フニ後世ノ人史ヲ讀ミテ我が今日ノ文壇ノ競争ニ至ルトハ、將ニ歎ジテ曰ハントス、嗚呼是レ古今文藝ノ變革ノ最モ奇ト稱ス可キ者ナリト、何ツヤ、凡ソ兩黨相争フガ爲メ

ニシテ、眞ニ才思ヲ懷キシ者ハ、此風濤ノ激動スル所ト爲リテ、性情益々奔騰シ、意氣益々激揚シテ、多少名篇ヲ吐露セシモ、夫ノ中庸ニ出デザル者ノ如キハ、亦此間ニ居テ蕪陋ノ作ヲ做シテ愧ルヲ知ラズ、自ラ以爲ラシク優ニ身ヲ藝文ノ間ニ廁フルニ足ルト、是ヲ以テ近日「ロマンチック」家ノ作ヲ觀ルニ、其妙ナル者ハ奇傑人ヲ驚カシ、其拙ナル者ハ人ヲシテ嘔噁セシム、此レ豈ニ文藝中ノ一大奇事ニ非ズ乎、蓋シ「ロマンチック」家ノ說起ルヨリ、少年銳氣ヲ負フ者、争フテ其門下ニ聚リ、言ヲ騰ケテ以テ敵黨ノ非ヲ駁シテ自ラ快トシ、其戰勝ヲ益々進ムノ際、往々自ラ其天姿詩人ノ才ニ非ザルヲ顧ミズ、相競フテ作ル所有リ、此レ乃チ「ロマンチック」中往々蕪陋ノ作有ル所以ナリ、又其眞ニ詩才ヲ有セシ者ニ至リテハ、其詩才ヲ發揚スルノ機タル實ニ今日ヨリ便ナルハ莫シ、何トナレハ曩日煩碎ノ規律ヲ脱シテ、意ニ任セテ作爲スルヲ以テ苟モ才氣有ル者ハ恣

唯猖狂絶エテ荆棘ノ其歩ヲ礙フル有ラザルヲ以テナリ、  
夫レ然リ、是ヲ以テ僅々十五年ノ間ニシテ、オードノ歌謠ノ體ノ新クニ作  
リシ者幾何篇ナルヲ知ラズ、而シテ其中眞ニ後世ニ施スニ足ル者ハ、余  
未ク其果シテ多キヤ否ヤヲ知ラズト雖ヒ、之ヲ要スルニ其奇傑ナル者  
ハ、實ニ磊々天地ニ軒スルヲ以テ、之ヲ後世ニ傳フルハ、優ニ以テ今代  
ノ光譽ト爲スニ足ル、此レ豈ニ文藝上ノ戰爭ノ一大奇觀ニ非ズ乎、  
凡ソノロマンチックノ說ノ起リシヨリ、其黨ノ作者恰モ狂病人ノ如ク、志氣  
激揚シテ自ラ禁セズ、然レヒ人ノ才ハ本ト天ニ獲ル所ニシテ、暴カニ増  
殖ス可ラズ、是ヲ以テ、作者往々行文ト立意ト相稱ハザルヲ致セリ、蓋シ  
煩碎ノ紀律己ニ除キシヲ以テ、文辭ノ歩ハ極テ自在ニシテ、逍逸ナルヲ  
ヲ得レヒ、立意ハ意ニ任セテ之ヲ出サント欲スルモ得可ラズ、是ヲ以テ  
近日作者ノ諸篇動モスレハ外華麗ニシテ内空虚ナルヲ免レズ、此レ其

通病ナリ、全ク此病ニ陥ラズシテ立意ノ奇傑ト行文ノ雄健ト常ニ相稱  
フ者ハ、ウイクトルユゴーニ踰ユル者莫シ、

ユゴーハ天姿聰敏ニシテ才思極テ富ミ、又其文極テ逍逸ニシテ摸捉ス  
ス可ラズ、是ヲ以テ凡ソ其歌謠ノ詩盡ク人ノ意表ニ出デザル莫シ、賞鑒  
家口ヲ極テ讚稱シ、號シテ生ケル歌謠ト曰フニ至レリ、

歌謠ノ一體ニ係ル特別ノ性質ニ至リテハ、必ズシモ余ノ之ヲ細論スル  
コトヲ須ヒズ、即チ諷刺ノ詩ニ至リテモ亦然リ、請フ此ヨリ詩ノ他ノ諸藝  
ニ勝サル所以ヲ論ゼン、

詩ナル者ハ凡百藝術中ニ就テ人情ヲ叙寫スルニ於テ最モ自在ナル者  
ナリ、蓋シ藝術之ヲ大別スルキハ、曰ク人耳ヲ怡バシムル者ナリ、曰ク人  
目ヲ怡バシムル者ナリ、而シテ其人耳ヲ怡バシムル者ハ、其人目ヲ怡バ  
シムル者ニ比スルキハ、人ノ感情ヲ動かスヲ更ニ大ナリ、此レ余ノ前ニ

己ニ之ヲ論ゼシ所ナリ、同一人耳ヲ怡ハシムル藝術ノ中ニ就テ、詩ノ人  
 ナ感ズルコトハ音樂ヨリモ甚シ、然ル所以ノ者ハ他無シ、他ノ諸藝ハ其用  
 フル所ノ手段畢竟皆間接ノ手段タルニ過ギズ、何ゾヤ、聲調ナリ條線ナ  
 リ、此レ皆自ラ意義ヲ有スルニ非ズシテ、作者僅ニ此二ノ者ニ於テ其胸  
 中有スル所ノ意義ヲ寄セテ以テ其感情ヲ發揮ス、繪畫彫刻音樂建築ノ  
 類是レノミ、詩ニ至リテハ則チ然ラズ、其用フル所ノ手段ハ即チ言語文  
 字ニシテ、皆自ラ完全ノ意義ヲ有スル者ナリ、故ニ曰ク、詩人ノ其感情ヲ  
 發揮スルノ手段ハ直接ノ手段ナリト、

且ツ夫レ人目ヲ怡ハシムル藝術彫刻繪畫ノ如キハ、作者一タビ題目ヲ  
 撰擇シテ作クル所有ルキハ、之ヲ人ノ眼前ニ呈ス、而シテ之ヲ觀ル者ハ、  
 一見シテ即チ其全部ヲ盡スコトヲ得、故ニ曰ク人目ヲ怡ハシムル藝術ハ  
 徐進ノ性質ヲ有セズト、詩ニ至リテハ然ラズ、筆ヲ把リテ首句ヨリ第二

句ニ至リ、第三句ニ至リ、是ノ如クニシテ漸次ニ其感情ヲ叙寫シテ然ル  
 後一篇以テ成ル、而シテ讀ム者モ亦一瞬時ニ全篇ヲ誦スルコトヲ得ズシ  
 テ、必ズ首句ヨリ第二句ニ至リ、第三句ニ至リ、是ノ如クニシテ漸次ニ進  
 ミテ方ニ始テ全篇ヲ讀了ハルコトヲ得、是ヲ以テ其感情タル或ハ急ナル  
 コト有リ、或ハ緩ナルコト有リ、又其形容ノ如キモ或ハ流麗ナルコト有リ、或ハ  
 峻峭ナルコト有リ、即チ叙スル所ノ事ニ至リテモ、或ハ喜ブ可キ有リ、或ハ  
 悲ム可キ有リテ、而シテ讀ム者方ニ其一處ニ感ズルキハ、他處ハ曾テ其  
 心ニ觸レズ、詩ノ物タル是ノ如シ、故ニ曰ク人目ヲ怡ハシムル藝術ハ徐  
 進ノ性質有リト、然リ而シテ詩ハ正ニ人耳ヲ怡ハシムル藝術中ノ一ナ  
 リ、  
 詩ノ物タル此ノ如シ、是ヲ以テ心性ノ學進關シテ作者ノ人ノ心性ヲ觀  
 察スルコト微密ニ赴キシヨリ以來、詩ノ情性ヲ發揮スルコト駭々乎トシテ



大ニ進ミ、遠ク他ノ諸藝ノ上ニ出ヅルニ至リシコトハ、復タ怪ムニ足ラザルナリ、畫家ダウイト「モールドソクラット」ト題セル一幀ヲ畫キ、ソクラットノ意趣ヲ宣發シテ其妙ニ至リ、觀者眞ニソクラットノ毒酒ヲ把リナガラ、意氣自若トシテ其弟子ト語晤スルガ如キノ狀ヲ見ル、顧フニ此畫ノ如キハ人ノ情性ヲ發揮シテ其極ニ至リシ者ト謂フ可シ、然レトモ此レハ所謂一有ル可クシテ二有ル可ラサル者ナリ、若シ畫人苟モ拙ク所有ル毎ニ、必ス常ニ人ノ情性ヲ發揮スルコト此ノ如クニシテ、以テ詩ノ上ニ出ント欲スルキハ、幽晦ニ陷ルルニ非ザレハ、迂怪ニ流レテ反リテ大ニ美麗ノ觀ニ損スル有ルヲ致サシ、

夫レ畫家ノ人物ヲ寫スヤ、畢竟其顔面身軀ヲ描クニ過ギズシテ、其意趣ノ如キハ或ハ之ヲ鼻目ノ容ニ出タシ、或ハ之ヲ手足ノ狀ニ出タスニ過ギズ、夫レ鼻目ノ容ナリ、手足ノ容ナリ、人々大ニ相異ナルニ非ズ、是ヲ以

テ畫幀ノ中ニ於テ人ノ情性ヲ寫シテ至密ニ至ルキハ、其畫タルヤ必ス錯雜ニシテ反リテ解ス可ラザルニ至ルコトハ、固ヨリ言ヲ待タズ、

又音樂ノ如キハ人耳ヲ怡バシムル藝術ニシテ、即チ詩ト列チ同クシ、加之其徐進ノ質有ルヨリシテ言フモ、亦詩ト同一ノ位ヲ占ム、然レトモ其意趣ヲ發揮スルノ境界ハ、繪畫ニ比スレバ更ニ狹隘ナリトス、蓋シ音樂ノ物タル、其層累シテ上リ、漸次ニ佳境ニ入ルコト正ニ詩ト類チ同クスト雖トモ、其發揮スル所ノ感情タルヤ、種類極テ寡ク、且ツ生質極テ廣汎ニシテ、特別ノ義有ルコト無シ、是ヲ以テ一切適切ノ意義ハ、音樂ヲ以テ之ヲ發揮スルニ由無シ、之ヲ要スルニ凡ソ音樂ヲ以テ發揮スルヲ得ル感情ハ、其深厚ノ度極テ盛ニシテ、他ノ諸藝ノ及ブ所ニ非ズ、但此種ノ感情タル、其類極テ寡キヲ以テ其區域ノ廣狹ヲ論ズルキハ、終ニ大ニ詩ニ及ブコト能ハズ、

是ノ故ニ詩ナル者ハ、凡百文藝ノ中ニ就テ最完全ニシテ缺クル處無キ者トス、蓋シ諸藝各々其主旨トスル所ノ感情有リテ、之ヲ發揮スルヲ以テ其職ト爲ス、故ニ彫刻ハ線畫ヲ發揮スル者ナリ、音樂ハ聲調ヲ發揮スル者ナリ、繪畫ハ采色ヲ發揮スル者ナリ、其他建築舞蹈各々皆主トスル所有ヲザル莫シ、若シ此等諸藝ノ自ラ主トスル所ノ感情ヲ以テ、之ヲ詩ニ比スルキハ、固ヨリ相勝サルニ論無シト雖モ、若シ其感情ノ博サヲ以テ之ヲ言フキハ、一モ詩ニ如ク者莫シ、何ヲ以テ之ヲ言フ、夫レ詩ハ言語文字ヲ以テ手段ト爲スヲ以テ、建築ノ美モ之ヲ叙スルヲ得可ク、舞蹈ノ美モ之ヲ叙スルヲ得可ク、繪畫彫刻音樂皆其形狀聲調ヲ叙スルヲ得可シ、獨此レノミナラズ、其他天地萬物苟モ耳目鼻口ニ觸ル、者ニ論無ク、則チ心事無形ノ道理ト雖モ、皆之ヲ論述ス可シ、其區域タル豈ニ至大至博ナラズ乎、

且ツ凡ソ藝術ノ旨趣トスル所ハ、畢竟人心ヲ感ズルニ過ギズ、若夫レ人ノ智識ヲ以テ旨趣ト爲シテ之ヲ解論スルニ至リテハ、深ク其與カラザル所ナリ、然ルニ詩ノ如キハ亦是ニ與カル有リ、何ヲ以テ之ヲ言フ、曰ク詩人若シ事物ノ道理ニ於テ見ル所有ランニハ、之ヲ其詩ニ著ハシテ人ヲシテ之レヲ讀マシム、而シテ其所見果シテ眞理ニ違ハザルキハ、讀者獨リ其言語文字ノ美麗ヲ感ズルノミナラズ、亦必ズ其論ノ道理ニ適スルニ服ス可シ、故ニ曰ク詩ハ人ノ智識ヲ以テ主ト爲シテ之ヲ解論スルコトモ亦其ノ與カル所ナリト、  
夫レ然リ、故ニ詩ノ物タル凡百學術ノ類ト其關係極テ近密ナリト爲ス、請フ更ニ之ヲ論ゼン、  
昔者學術ノ未タ闢ケザルヤ、宗教荒誕ノ說、理學幽晦ノ論、此二ノ者獨其勢ヲ奮フテ一切學術ノ類ハ皆之ヲ左右セザル無シ、是ニ於テ格物ナリ

化學ナリ星學ナリ、皆唯臆度妄測ヲ以テ規矩ト爲シテ、一モ實驗ニ據リテ之ヲ徵スル莫シ、是ヲ以テ凡ソ其論ズル所皆浮華矯僞ニシテ、一モ人ヲ服スルニ足ルモノ莫シ、是ノ時ニ方リテヤ、詩學ト學術トハ相隔タルヲ別天地ノ人ノ如シ、怪ム無キナリ、設令ヒ詩人ヲシテ此レ等荒誕幽晦ノ論ヲ取リテ之ヲ詩中ニ入レシメバ、獨リ人心ヲ感ズル能ハザルノミナラズ、實ニ人ヲシテ嘔噦セシムルニ至ラン、是ノ如キ者ハ中古歐洲諸國皆然、ラザル莫シ、是ノ故ニ方今中古ノ學術ヲ指シテ之ヲ「シロジスム」派ト曰フ、「シロジスム」派トハ三段ノ文義ニシテ、冒頭承接結末ノ三ノ者ヲ謂フ、蓋シ中古ノ時一切學術皆理論ヲ主トシテ實驗ヲ事トセズ、而シテ凡ソ理論ハ皆必ズ之ヲ文章ニ著ハシテ後其意義ヲ見ル、而シテ文章ナル者ハ其體數種有リト雖モ、之ヲ要スルニ冒頭承接結末ノ三段ニ過ギズ、蓋シ冒頭以テ其端ヲ起シ承接以テ其詳ヲ致シ、結末以テ其義ヲ終

ヘテ、然ル後一篇ノ論方ニ成ル、此レ中古諸學術ノ「シロジスム」派ノ號有ル所以ナリ、故ニ曰フ是ノ時ニ在リテハ詩ト學術トハ深ク相關係セザリシト、

近代ニ至ルニ及ビテハ、凡ソ學術皆實驗ヲ以テ基ト爲シ、必ズ目ニ其理ヲ明ニシテ後方ニ得タリト爲ス、則チ格物ナリ化學ナリ、星學ナリ地質ナリ醫學ナリ、凡ソ方今百般ノ學術皆諸家ノ實驗ヲ聚メテ之ヲ構成シテ、架空ノ理論ハ一モ之ヲ容受セズ、此レ古今學術ノ一大變革ナリ、顧フニ今ヨリ以往此實驗ノ一道益々進關スルキハ、學術益々精密ニ赴キテ、今日人ノ未ダ知ラザル所ヲ知リ、未ダ見ザル所ヲ見ルニ至ルヲ、固ヨリ疑ヲ容レズ、此ノ如クナルキハ其力ノ波及スル所、遂ニ天下ノ形勢ヲ舉ゲテ大ニ變革スル所有ラントス、蓋シ宗教ノ差異ナリ、種族ノ差異ナリ、邦國ノ差異ナリ、凡ソ此レ等差異ノ類人心ヲシテ相仇敵視セシムル所

ノ者ハ、皆漸次ニ地ヲ掃フテ消散シ、加之天下人民皆漸ク窮困ノ域ヲ出  
デ、富樂ノ境ニ進ミ、仁慈ナリ正義ナリ友愛ナリ、凡ソ人生ノ利益ヲ爲  
ス所以ノ情念寢ク遂長シ、到ル處人々其目的ヲ同クシテ、其手段ヲ共ニ  
セザル莫キニ至ラン、誠ニ此ノ如クナルキハ、一種ノ詩風其中ヨリ發出  
シテ、其諸學術ト交渉有ルコト今日ヨリモ更ニ大ニシテ、古昔ノ詩ト全ク  
其趣ヲ異ニスルニ至ルコト想フ可キナリ、

○第七篇 結局論

凡ソ美學ニ於テ最モ意ヲ致ス可キ者ハ、賞鑒ノ才ト作者ノ才トヲ明辨  
スルノ一着ニ踰ユル莫シ、而シテ古今人々動モスレバ此二ノ者ヲ混淆  
シテ之ヲ同一視シ、以テ謬誤ヲ致セリ、此レ余ノ尤モ爲メニ痛惜スル所  
ナリ、故ニ茲ニ之ヲ論セントス、

凡ソ賞鑒家ノ由リテ以テ藝術ノ作ヲ品第シテ錯マルコト無キヲ得ル所  
ノ者ト、作者ノ由リテ以テ善ク己レノ感慨ヲ寫ス所ノ者ト、其才性初ヨ  
リ相同シカラズ、蓋シ賞鑒家ハ必ズ議論ノ次序ヲ得テ、且ツ必ズ物ノ相  
雜ル者ヲ辨析スルヲ以テ尙シト爲ス、作者ニ至リテハ正ニ之レト反シ  
テ、必ズ事物ヲ湊合スルヲ以テ尙シト爲ス者ナリ、何ヲ以テ之ヲ言フ、曰  
ク賞鑒家ノ作者ヲ品藻スルヤ、曰ク某レノ處ハ某レノ趣有リ、某レノ處  
ハ某レノ態有リ、曰ク何々、曰ク云々ト、凡ソ其指摘ヲ下ス所以ハ皆物ノ

相雜ル者ヲ離析スルニ在ラザル莫シ、而シテ作者ノ作ル所有ルヤ、其初メ事物ノ觀ニ於テ心ニ感スル所有リ、斯ニ以テ其感慨ヲ湊合シテ以テ一個ノ物ヲ構成ス、是故ニ作者ハ材料ヲ聚メテ構架スルヲ主トスル者ナリ、賞鑒家ハ其材料ヲ指摘シテ之レカ名ヲ命スル者ナリ、然リト雖ヒ作者ト賞鑒家ト相同キ所モ亦一有リ、藝術ヲ愛好スルノ一念是レナリ、作者若シ其藝ヲ愛好スルヲ無キハ、何ニ由リテ以テ作ル所有ルヲ得ン、賞鑒家若シ其藝ヲ愛好スルヲ無キハ、何ニ由リテ以テ之ヲ品藻スルヲ得ン哉、此一着ヲ除キテ餘ハ皆相異ナリ、獨相異ナルノミナラズ、其才性動モスレハ正ニ相反ス、是ヲ以テ作者ニ在リテ大家ヲ成ス所以ノ者ハ、賞鑒家ニ在リテ適ニ其庸劣ヲ成ス所以ナリ、何ヲ以テ之ヲ言フ、曰ク賞鑒家ノ賞鑒家タル所以ノ者ハ、能ク計較量度シテ事ノ次序ヲ得ルニ在リ、作者ハ感慨淋漓一氣ニ進ミテ作ル所有ルニ在

リ、作者ニシテ若シ事物ノ理ニ於テ一々計較量度ヲ下スハ、復タ何ノ感慨カ之レ生セン、

作者ノ事物ニ於ケルヤ、其大處細處並ニ之ヲ觀テ遺ス所無シ、然レモ其旨趣ハ之ヲ剖析スルニ在ラズシテ、之ヲ湊合スルニ在リ、是ヲ以テ其感ヲ受ケシ所ノ處、既己ニ把握ニ入ルキハ、自餘ノ部分ハ畢竟之ヲ裝飾スルノ具タルニ過ギズ、若シ作者ニシテ專ラ按排シ、專ラ整頓シ、苦心焦慮シテ始テ成就スルキハ、其作タル必ズ生氣索然トシテ人ヲ感ズルニ足ラズ、是ニ知ル作者ノ貴ブ可キ所ハ、平時多ク意思ヲ腦中ニ蓄ヘテ以テ需用ノ時ヲ俟テ、苟モ心ニ感ズル有ルキハ、其蓄フル所ノ意思中ニ就テ、最モ其用ニ適切ナル者ヲ出シテ之レニ寄スルニ其感情ヲ以テスルヲ、其作ノ能ク人ヲ感ズルニ足ル所以ナリ、

賞鑒家ノ才性ハ理學家ノ才性ト類ヲ同クス、必ズヤ熟視精察ノ勞ヲ積

ミ、順序ニ率テ一々ニ理ヲ推シ、然ル後之レカ斷キ下ス、此レ賞鑒家ニ貴  
グ所ナリ、

作者ノ才性ト賞鑒家ノ才性ト相反スルコト是ノ如シ、然リ而シテ世ノ學  
士輩動モスレハ是ニ察セズ、往々書ヲ著ハシテ其作者ニ望ム可キ所ヲ  
以テ之ヲ賞鑒家ニ望ミ、其賞鑒家ニ告ク可キ所ヲ以テ之ヲ作者ニ告ク、  
是ヲ以テ其所謂美學論ノ言フ所、錯雜紛紜シテ一定ノ說無ク、既ニ論理  
ニ合セズ、又實際ニ適セズ、皆此病ニ座スルノミ、

作者ノ感情タル突如トシテ來リテ原因無キカ如クニシテ、作者自ラ思  
量スト雖モ其故ヲ解スルコト能ハズ、其既ニ來ルヤ、必ズ之ヲ發揮シテ物  
ニ著ハスニ非ザレバ復タ抑遏ス可ラズ、之ヲ要スルニ一種天ヨリ落ツ  
ルカ如キ者有リ、是ヲ以テ古昔ノ人ハ諸名作ヲ論ズルニ於テ、必ズ曰ク  
此レ神助ナリト、即チ希臘人ノ如キハ想像臆度シテ數個ノ神ヲ定メテ

乃チ云フ、此等ノ神各々司トル所ノ藝術有リテ、苟モ人ヲシテ名作ヲ得  
セシメント欲スルキハ、神必ズ作者ノ心ヲ感ジテ、之ヲシテ其作ヲ成サ  
シムト、其所謂アポロンミューズチオニヅー等ノ神ハ即チ是レナリ、此說  
ヤ荒誕無稽ナルニ論無シト雖モ、其意ハ大ニ理ニ合スル者有リ、蓋シ作  
者ハ何ノ種類ヲ問ハズ、其腦髓一種ノ知覺有リテ、其事物ニ遭遇スルニ  
方リテハ、神經亢張シテ自ラ禁セズ、狂病人ノ事物ニ於テ異常ノ感有ル  
ト同一一般ナリ、唯其異ナル所以ハ他無シ、狂病人ハ其感情中條理有ルコ  
ト無シ、作者ノ感情ハ極テ激昂ナリト雖モ、自然ニ條理ノ其間ニ井然タル  
有リ、

凡ソ茲ニ論スル所ハ、余ノ私言ニ非ズシテ天下古今ノ公論ナリ、若シ此  
ヲ疑ハ、試ニ之ヲ實迹ニ徵スルニ如クハ莫シ、今試ニ古作者ノ中ニ就  
テ其大家ト稱スル所ノ者ト、其否ラザル者トヲ把リテ之ヲ比較セヨ、其

構架ヨリ細節目ニ至ルマテ一モ相似タル者無シ、蓋シ大家ノ作ニ在リテハ意趣極テ錯綜セルモ、片段極テ瑣碎ナルモ、其間自ラ至密ノ條線ノ存スル有リテ、首ヨリ尾ニ至ルマテ隱然貫徹洞達シテ、略ホ斷絶スル無シ、是ヲ以テ吾人觀ル者唯作者ノ一氣呵成セルヲ見テ、絶エテ苦心ノ跡ヲ覺エズ、此レ他無シ、其感情極テ深厚ニシテ一種特異ノ力有ルヲ以テナリ、若夫レ小家ノ作ニ至リテハ、其接排何如ニ巧ナルモ、其裁制何如ニ精ナルモ、前後首尾ノ間必ズ一二粘合貼附セルカ如キ處有ルヲ見ル、此レ他無シ、彼レ必ズシモ深ク中ニ感ズル有ルニ非ズシテ、專ラ計較量度シテ以テ作爲スルカ故ナリ、

モリエールシエークスビールノ古今絶類ノ大家タル所以ノ者ハ他ニ非ズ、彼レ其天分高絶ニシテ一種天ニ獲ル所ノ才性有リテ、其物ヲ觀ルヤ感慨極テ深ク、其筆ヲ執リ紙ニ臨ムヤ、意思滔々トシテ發シ、汨々トシテ來リテ復タ過ム可ラズ、凡ソ其作爲スル所ハ皆飄然勃然ノ間ニ得ル者ニシテ、絶エテ計較接排ヲ假ルコト無シ、人或ハ此二人ノ作ヲ以テ希臘ノ彫像ニ比スル者有リ、顧フニ希臘ノ彫像ハ容貌端麗ナリト雖モ、其刀ヲ運スルヤ手段極テ清楚ニシテ、絶エテ錯綜變化ノ處無シ、モリエールシエークスビールノ詩ハ、其人物ヲ形容シ、情性ヲ摸寫スルコト極テ精細ニシテ、又其前後旨趣起伏出沒端倪ス可ラズ、其希臘刻像ニ視ルニ少シモ相類セザルニ似タリト雖モ、更ニ之ヲ熟察スルハ、大ニ或人ノ論ノ如キ者有リ、何ゾ、曰ク希臘ノ刻像ハ多クハ自然ニ成リテ接排ヲ假ラザル者ナリ、モリエールシエークスビールノ詩モ亦多クハ自然ニ成リテ接排ヲ假ラザル者ナリ、是ヲ以テ極テ錯綜變化スルト雖モ、其間一種極テ清楚單純ナル者有リ、之ヲ譬フレバ水源ノ如シ、其水苟モ清ニシテ且ツ多キハ、流レテ下ニ就キ、分流千百スト雖モ、皆必ズ奔注シテ海ニ達ス、モリ

エールシェークスピアノ諸人物ハ、才性極ク相異ナリト雖モ、一々皆此人ノ腦髓中ヨリ流出シテ、他ヨリ之ヲ捏造セシニ非ズ、其自然ニ單純ノ觀有ルハ亦宜ナラズ乎、以上論ズル所ニ由リテ之ヲ觀ルキハ、作者ノ貴グ所ハ物ニ遇フテ一時ニ感激シ、是ニ於テ其記性中有スル所ノ材料ヲ出シテ之ヲ使ヒ、以テ作ル有リ、是ノ如クスルキハ、其作如何ニ錯綜スルモ自ラ清楚ノ觀ヲ發スルコト疑無シ、然レモ若シ賞鑒家ニシテ必ズ作者ニ勸メテ清楚ノ觀ヲ求ムルキハ、大謬ナリ、希臘刻像ノ最モ高妙ト稱スル者及ビ其他詩篇ノ妙ナル者ノ如キ、皆誠ニ清楚單純ノ觀有リ、然レモ此レ決シテ故意ニ此ノ觀有ラシメタルニ非ズシテ、自然ニ之ヲ得タル者ナリ、夫レ賞鑒家ハ計較量度ヲ以テ旨趣ト爲シ、事ノ次序ヲ逐フテ觀察スル者ナリ、其作者ノ手段ト正ニ相反ス、然ルチ強テ作者ヲシテ其繩尺ニ就カシメント欲スルハ、豈ニ悖ラズ乎、

作者ノ其作ニ於テ清楚單純ノ觀ヲ得ル所以ノ者ハ他ニ非ズ、其物ヲ觀ルヤ感情必ス一處ニ由リテ、發シテ他處ニ關係セズ、是ヲ以テ凡ソ其感情ニ交渉有ル意思ハ、取リテ以テ材料ト爲スモ、其他ハ皆棄テ、顧ミズ、夫レ其意思ニ於テ取捨スル所有ルハ、計較量度シテ然ルニ非ズ、自然ニ此ノ如クナラザルチ得ザルチ以テナリ、作者一タヒ感ズル有ルヤ、其時ニ方リテハ、此感情ニ係ル意思ノ外別ニ意思有ルコト無シ、猶ホ吾人深ク一物ヲ視ルキハ、他物有リト雖モ復タ見エサルガ如シ、作者ノ意思是ノ如シ、故ニ其作自然ニ清楚ナルチ致ス、故ニ曰ク賞鑒家強テ己レノ所見ヲ以テ作者ニ命シテ、以テ清楚ノ觀ヲ求メント欲スルハ謬ナリト、且夫レ諸藝中痕迹最モ單簡ニシテ清楚ノ觀ニ富ム者ハ彫像ニ過クル莫シ、然リ而シテ彫刻者ノ其像ニ於ケルモ、決シテ計較量度シテ以テ此觀ヲ求ムルニ非ズ、之ヲ例ヘハ彫刻家ノ勇力者ノ像ヲ做サント欲スル



乎、則チ希臘神代記ニ據リテ、キユル神ノ像ヲ寫シテ、以テ其意趣ヲ致ス可シ、又趨捷者ノ像ヲ倣サント欲スル乎、則チ亦神代記ニ據リテ、メルキユル神ノ像ヲ寫シテ、以テ其意趣ヲ致ス可シ、顧フニ此二者ノ像ヲ倣スニ於テ、作者果シテ豫メ體中諸筋ヲ計較シ、某ノ筋ハ實ニ人ヲシテ力有ラシムル者ナリ、某ノ筋ハ必スシモ然ラズ、某ノ筋ハ實ニ人ヲシテ趨捷ナラシム、某ノ筋ハ必スシモ然ラズト、是ニ於テ一臂力ノ強ト體軀ノ捷トニ關セザル諸筋ハ、之ヲ寫スコト無ク、特ニ此二者ニ効有ル者ヲ取り、然ル後象現器ヲ以テ其大小ヲ度リ、之ヲシテ極テ偉大ナラシム、苟モ然ルキハ、其像タルヤ唯勇力趨捷ノ態有ルノミニシテ、他狀有ルコト無シ、清楚ノ觀ノ極ト謂フ可シ、而シテ彫刻家果シテ豫メ計較按排スルコト是ノ如クナル乎、決シテ然ラザルナリ、何トナレハ藝術ノ物タル、其狀必ス活潑飛動ノ態有ルヲ要ス、而シテ此態有ルヲ欲スルキハ、作者ノ神經必ス亢

張シテ腦中感慨ノ氣外ニ溢ル、有ルコトヲ要ス、若シ作者專ラ苦心焦慮シテ唯計較按排スルキハ、其感慨ノ氣ハ消散シテ迹無キニ至ラン、此ノ如クナルキハ、其作何ヲ以テ能ク活潑飛動ノ態ヲ呈スルコトヲ得ン哉、賞鑒家ニ在リテハ計較按排ハ固ヨリ禁ズル所ニ非ズ、當ニ禁ズル所ニ非ザルノミナラズ、亦必ズ須要トスル所ナリ、故ニ賞鑒家若シメルキユル神若クハメルキユル神ノ像ヲ觀テ、其計較量度ノ法ヲ下シテ曰ハ「ンニ、某ノ筋ハ人ヲシテ力有ラシムル者ナリ、故ニ作者特ニ之ヲ寫シテ其偉大ヲ極メタリ、某ノ筋ハ人ヲシテ趨捷ナラシムル者ナリ、故ニ作者特ニ之ヲ寫シテ其偉大ヲ極メタリ、是ノ如キ者ハ作者用意ノ在ル處ナリト、賞鑒家ニシテ此評ヲ爲スキハ、少シモ非議ス可キ無シ、獨非議ス可キ無キノミナラズ、亦能ク其職ヲ盡ス者ト謂フ可キナリ、若シ作者ニシテ豫メ此ノ如キ意思ヲ以テ其作ニ臨ミ、筆ヲ運シ刀ヲ用フル毎ニ、此意思ニ循

フテ功ヲ致シ、其胸中鬱勃ノ氣ヲシテ絶エテ自在ニ發泄セシメザルキ  
 ハ、其害タルヤ測ラレズ、他無シ作者ノ主トスル所ハ感慨ノ氣ヲ寫スニ  
 在リテ、賞鑒家ノ主トスル所ハ計較觀察ヲ致スニ在リ、若シ此兩人ニシ  
 テ其意思ヲ相易フルキハ、各々其職ヲ失フコト有レハナリ、  
 且ツヤ藝術ニ在リテハ夫ノ清楚ノ觀モ時有ル乎、必スシモ譽ム可キニ  
 非ズ、蓋シ作者若シ筆ヲ運シ刀ヲ用フルニ於テ專ラ清楚單純ヲ求メテ、  
 務テ自ラ檢束シテ敢テ自ラ肆ニセザルキハ、其作タルヤ枯淡寒酸ニシ  
 テ何ノ人心ヲ感ズルコト有ラン、夫レ枯淡寒酸ノ態ハ諸藝ニ在リテ忌ム  
 可キコト之レヨリ甚キハ莫シ、  
 今試ニモリエールノ「コメディー」諧諷ノ作ヲ看ヨ、其最モ絶妙ト稱スル者  
 ハ「アルバゴン」タルチニツフニ過グル莫シ、然レモ此二篇ハ決シテ疎枝大  
 葉ヲ以テ之ヲ評ス可キニ非ズ、蓋シ其中無數ノ意思有リテ錯綜變化極

リ無シ、若シ一々其意思ヲ把リテ之ヲ評スルキハ、其中一篇ノ大旨ト絶  
 エテ交渉無キカ若キ者幾何有ルヲ知ラズ、若シ賞鑒家深ク察セスシテ  
 輕々ニ看過シ、凡ソ其大旨ト交渉無キ意思ハ、皆之ヲ去ルコト欲セン、此  
 レ即チラブリヨイエールノ嘗試セシ所ナリ、ラブリヨイエール博學ニシテ  
 文ヲ善クシ、道德ノ義ニ於テハ素ヨリ其講習セシ所ナリ、然レモ藝術ノ  
 事ニ至リテハ未ダ通曉セズ、是ヲ以テモリエールノ「タルチニツフ」ノ作ニ  
 於テ其絶妙ノ處ヲ知ラズ、妄リニ自ラ筆ヲ把リテ別ニ「タルチニツフ」ト號  
 スル諧諷ノ詩一篇ヲ作レリ、今之ヲ觀ルニ、實ニ所謂疎枝大葉ノ文ニシ  
 テ、凡ソ意思ノ大旨ニ關セザル者ハ、皆芟除シテ一ヲ留メズ、首ヨリ尾ニ  
 至ルマテ唯整齊嚴肅ヲ務メテ、絶エテ錯綜變化ノ妙有ルコト無シ、之ヲ要  
 スルニラブリヨイエールノ「タルチニツフ」ハ、一枯骨ノ荒原上ニ子立セルカ  
 如クニシテ、一モ適麗ノ態ノ人ヲ感スル莫シ、然レモラブリヨイエールノ

意蓋シ此ヲ以テモリエールヲ規正シテ、之ヲシテ後來必ス清楚單簡ノ一事ニ悟ル有ラシメント欲セリ、殊ニ知ラズモリエールハ古今獨歩ノ作者ニシテ、ラブリコイエール輩ノ遠ク及バザル所ナルヲ、

モリエールノ「タルチ」ハ、詩人感慨ノ氣ノ陶鑄スル所ナリ、ラブリコイエールノ「タルチ」ハ、道學先生ノ理論ノ捏造スル所ナリ、モリエールノ「タルチ」ハ、獨リ此ヲ以テ一貪吝ノ人物ヲ摸寫スルニ非ズシテ、直チニ其ヲシテ讀者ノ眼下ニ於テ活潑飛動シテ以テ其貪吝ノ態ヲ露呈セシム、此ノ如キ者ハ他無シ、モリエール嘗テ貪吝人ノ所爲ヲ觀テ深ク心ニ感ズル有リテ、其感慨ノ氣凝リテ散セズ、以テ其胸中ニ横塞セリ、是ニ於テ一旦「タルチ」ノ作ニ臨ムニ及ヒ、其胸中鬱塞ノ氣滔々トシテ來リテ止マラス、四出迸射シテ以テ一篇ノ作ト爲ル、此ニ由リテ之ヲ言ヘバ、モリエール自ラ貪吝ノ不徳有ルニ非ズト雖ヒ、然レヒ「タルチ」

其人ハ久クモリエールノ胸中ニ居リテ、モリエールト一體ヲ成ス者ナリ、嗚呼モリエールノ「タルチ」ハ筆ヲ把リテ之ヲ紙ニ書セシニ非ズシテ、直チニ之ヲ胸中ヨリ出シテ之ヲ讀者ノ目ニ呈セシナリ、其作ノ靈活飛動ノ態有ル亦宜ナラズ乎、

世ノ理學家動モスレバ希臘プラトンノ說ヲ引據シ、架空ノ論ヲ構成シテ云フ、藝術ノ旨趣ハ美麗ノ觀ヲ發揮スルニ在リ、而シテ美麗ノ極致ハ神ノ徳ヨリ發ス、故ニ尋常有形ノ物ハ美ヲ無形ノ神ニ假リテ僅ニ其美觀ヲ成ス者ナリ、故ニ作者ハ必ズ意ヲ無形ノ道理ニ注メテ、然ル後其作ヲシテ眞美ノ觀ニ近カシムルヲ得可シト、顧フニ此言ヤ荒唐曖昧ニシテ信憑ス可ラズ、苟モ之ヲ實際ニ施サント欲スルヒハ、茫乎トシテ倚據ヲ可キ無シ、余ハ將ニ此輩ニ向テ曰ハントス、古今藝術ノ大家ト稱スル者ハ、公等ノ高遠ノ議論ハ其ノ深ク解セザル所ニシテ、公等ノ所謂極

致ハ曾テ其想像セザル所ナリ、然リ而シテ其作能ク公等ヲシテ感嘆セシム、願フニ公等高遠ノ論ヲ主張シ極致ノ說ヲ鼓唱ス、是レ其學術遠ク藝術家ノ上ニ出ルト謂フベシ、而シテ公等一作ヲ出シテ人ヲ驚カスヲ能ハザルヒハ、公等ノ高遠ノ論極致ノ說ハ、既ニ以テ其浮華ニシテ事ニ益無キヲ證スルニ足ラズ乎ト、此レ等學士ハ果シテ何ノ辭ヲ以テ之ニ答ヘン哉、

余又告ゲテ曰ハントス、更ニ一層ヲ進メテ之ヲ言ハシニハ、公等ノ論說ハ人ノ智見ヲ開發スルニ、誠ニ補有ル可シ、然レモ藝術ノ士ニ在リテハ、獨智識ノ人ニ出ル有ルノミニテハ足ラズ、必ズ更ニ一事ノ肝要トス可キ者有ル可シ、而シテ所謂一事トハ正ニ余ガ所謂一種天ニ獲ル所ノ才性ニレナリ、公等此一事ニ慮及セズシテ、唯理論ヲ鼓唱シテ以テ藝術家ヲ打出セント欲スルハ、豈ニ甚疎ナラズ乎ト、則チ此等學士ハ果シテ何

ノ說ヲ以テ之ニ答ヘン哉、

世ノ學士常ニ賞鑒家ノ旨趣トスル所ヲ唱ヘテ、以テ藝術家ヲ律セント欲スル者、一タビ是道理ニ慮及スルヒハ、復タ計較ヲ以テ感慨ニ易ヘ、量度ヲ以テ生趣ニ易フルニ至ラザル可シ、今乃チ然ラズシテ、往々細微ノ規律ヲ以テ藝術家ヲ律セント欲ス、其弊實ニ言フニ勝フ可ラザル者有リ、若シ此ニ疑フ有ラバ、試ニ學士輩ノ爲ス所ノ字典ヲ把リテ之ヲ觀ヨ、其藝術ノ字ヲ註スルヤ、皆曰ク藝術トハ若干ノ規條ニ循フテ作ル所有ルヲ謂フト、果シテ此ノ如クナルヒハ、藝術ナル者ハ畢竟記憶ノ一事ニ過ギズシテ、感慨生趣ノ類ハ復タ用フル所ニ非ズ、可ナラン乎、夫レ所謂若干ノ規條ニ循フテ作ル所有ルトハ、冠履被服ノ類ヲ作ルニ於テ之ヲ言ヘハ可ナリ、若シ詩文繪畫等ニ於テ之ヲ言フヒハ、其害實ニ測ル可ラズ、

夫レ煩碎ノ規律ヲ以テ藝術ヲ束縛スルノ弊ニ就テ、其最モ小ナル者ヲ言ハントニ、曰ク少年生徒藝術ニ於テ本ト天ニ獲ル所ノ才無キ者ト雖モ、必ス自ラ曰ハントス、我若シ畫家ト爲ラント欲セハ、我師ノ示ス所ノ規律ニ循フテ學習シテ足ラシ、此レ爲シ難カラズト、是ニ於テ斷然決意シテ自ラ畫家ノ中ニ廁ヘ、規々トシテ學ヒ汲々トシテ習ヒ、壯歲ニ至ルニ及ビテ何ノ得ル所無クシテ、徒ニ當初術ヲ擇フコトノ善カラザリシヲ追悔スルニ至ル、此レハ則チ學士輩ノ所爲遂ニ人ノ前途ヲ誤リテ之レカ大害ヲ爲スト謂フ可シ、

嘗ニ此レノミナラズ、我カ博士家ノ徒一タビ紀律ヲ以テ藝術ノ士ヲ打出セント欲セシヨリ以來、少年生徒才ヲ負フ者ト雖モ、其誤ル所ト爲ル者幾何ヅヤ、彼レ才氣有リト雖モ、年幼ニ識淺クシテ未タ自ラ事ヲ斷スルコトヲ知ラズ、一意ニ教師ノ言フ所ヲ守リテ、敢テ或ハ違フ有ラズ、是

ニ於テ其天ニ獲ル所ノ才氣ハ日ニ消亡ニ就テ、唯規律是レ守リ、物ヲ觀ル者之レカ爲メニ感發スルコト無ク、昏々夢々トシテ自ラ知ラズ、唯古人ノ形迹ニ摸擬シテ之ヲ肖似スルコトヲ務テ其他ヲ知ラズ、此ノ如キ者豈ニ能ク眞ノ藝術家ノ域ニ上ルヲ得ン哉、顧フニ夫ノ博士ノ輩ト雖モ、人心ノ自由ヲ貴ブコトハ固ヨリ疑ヲ容レズ、然リ而シテ其爲ス所ハ終ニ人心ノ自由ヲ抑壓スルニ免レズ、顧フニ夫ノ博士ノ輩其藝術ヲ愛好スルヤ至レリト謂フ可シ、然リ而シテ其爲ス所ハ終ニ藝術ヲシテ衰頽ニ就カシムルヲ免レズ、此レ豈ニ深ク悼ム可ラス乎、

今夫レ羊ヲ飼フ者、群羊ヲ牽テ之ヲ圍ヨリ出スニ、四面皆隔障シテ獨リ一方ニ就テ、戸ヲ設ケ、牧人其戸ヲ開テ其群ヲ驅ルキハ、衆羊累々トシテ歩シテ皆其戸ヨリ出ツ、或ハ他處ヨリ出テント欲スルモ、隔障既ニ牢キヲ以テ破リテ出ツ可ラズ、而シテ其此ノ如キニ習フコト己ニ久キヲ以テ、

亦他處ヨリ出ント欲スルノ意有ルコト無シ、余夫ノ博士院ノ少年生徒ヲ待ツヲ觀ルニ、正ニ此レト相類ス、彼レ其天ニ獲ル所ノ才各々相異ナルヲ以テ、其初ヤ皆其性ノ欲スル所ニ從テ以テ自ラ暢發セント欲スルモ、紀律嚴ニシテ得可ラズ、其末ヤ相率キテ皆一定ノ範型ニ入リテ復タ出ルコトヲ知ラズ、是レ之ヲ人性ヲ戕賊シテ強テ己レノ範型ニ入ラシムルト謂フ、

余嘗テギランシー氏著ハセシ所ノ小冊子中ニ於テコンスタール氏ノ言ヲ引證セシヲ見タリ、コンスタール氏ハ意ヲ創シテ山水ノ景ヲ描テ其妙ヲ極メ、方今山水ノ景ヲ描ク者、皆從テ法ヲ取ラザル莫シ、今其言フ所ヲ觀ルニ、少年生徒ノ藝術ヲ學フ者ニ於テ、極テ益有リ、故ニ茲ニ之ヲ掲グ、

コンスタール氏ノ言ニ曰ク、余ヲ以テ今ノ畫家ヲ觀ルニ、其爲ス所實

ニ人ヲシテ驚訝セシム、顧フニ其規律トスル所ハ或ハ頗ル學者ニ益スル有ル可シ、然レモ余ハ終ニステルンヌノ一言ヲ以テ師法ト爲サ、ルコト能ハズ、ステルンヌ云ヘリ、凡ソ畫ヲ學ブ者ハ各派ノ言ニ於テ少シモ意ヲ留メズ、必ズ己レノ情性ヲ發揮シテ直行シテ顧ミザル可シ、此ノ如クナラザレハ未タ以テ千秋ノ業ヲ爲スニ足ラズト、

コンスタール氏又曰ク、人ノ余ノ畫ニ於ケル、或ハ之ヲ譽ムル有リ、或ハ之ヲ毀ル有リ、余曾テ其沮勸スル所ト爲ラズ、余ノ畫ノ佳ト不佳トハ余モ亦自ラ知ラズ、但余ノ畫ハ眞ニ余ノ腦中ヨリ發出シテ絶エテ他人ノ様ニ依ラズ、此レハ則チ余ノ自ラ信ズル所ナリ、

大凡ソ名ヲ成サント欲スル者、唯二途有ルノミ、摸擬ト創意ト是レナリ、摸擬ノ道ハ創意ノ道ニ比スレバ大ニ易シ、何ソヤ、摸擬ノ道タル古名家ノ畫ニ就テ其長處ヲ取り、其短處ヲ棄テ補葺裁綴シテ以テ之ヲ作ル、夫

レ古人ノ作ハ人ノ久ク敬服スル所ニシテ而シテ、我レ取リテ以テ吾カ  
 作中ニ竄入ス、故ニ人ノ吾作ニ於ケル、大ニ其目ニ入り易キ者有リ、故ニ  
 摸擬ノ法ニ由リテ作ス者ハ、名聲ヲ博スルコト速ナリ、若夫レ創意シテ作  
 ス者ハ然ラズ、古人ノ陳述ハ棄テ、用ヒズ、必ズ自家腦裏ヨリ取リテ之  
 チ倣ス、人ノ未タ吾作ヲ見ルニ習ハザル間ハ、多クハ其毀ル所ト爲ル、且  
 ツヤ世人ノ藝術ニ於テ眞ニ賞鑒ノ才有ル者ハ、極テ鮮クシテ多クハ平  
 庸ノ徒ナリ、故ニ古人ノ作ニ類似スル所有ル者ハ、之ヲ觀テ巧ト爲スモ、  
 苟モ常規ノ外ニ出ル者ハ、其眼孔之ヲ看破スルニ及バズ、故ニ創意シテ  
 作ル者ハ名ヲ成スコト甚難シト、

又曰ク摸擬シテ作ル者ハ畢竟勞ヲ厭フテ逸ヲ喜ブ者ト謂フ可シ、何ソ  
 ヤ、彼レ唯古人ノ迹ヲ剽竊シテ己レノ精神ハ曾テ之ヲ勞スルコト無ク、唯  
 手ヲ動カシテ足ルノミ、此レ其ノ安逸ヲ喜ブ者ニ非ズ乎、夫レ逸ヲ喜ビ

勞ヲ厭ヒ、庸衆人ヲ瞞着シテ以テ虛名ヲ博ス、此レ予ノ敢テセザル所ナ  
 リト、

又曰ク昔者英國學士嘗テ世ノ鄉愿ノ徒ヲ評シテ曰ヘリ、此輩外溫柔ニ  
 シテ内實ニ狡猾ナリ、而シテ世俗是ニ察セズ、往々此輩ノ爲ス所ヲ見テ  
 指シテ以テ君子ト爲ス、天下ノ事コレヨリ嘆ズ可キハ莫シト、今摸擬家  
 ノ藝術ニ於ケル猶ホ鄉愿ノ道德ニ於ケルカ如シ、而シテ世人其狡猾ナ  
 ルヲ知ラズ、眞ノ藝術ト並稱シ、又其甚キ者ハ之ヲ眞ノ藝術家ノ上ニ置  
 カント欲ス、此レ豈ニ深ク嘆ズ可キニ非ズ乎、是ヲ以テ余ハ初ヨリ當世  
 ノ聲譽ヲ得ルニ意無ク、唯以テ自ラ樂ムノミ、嗚呼毫ヲ把リテ布ニ臨ム  
 ヤ、其尤モ注意スル所ノ者ハ、凡ソ嘗テ觀シ所ノ古人ノ畫ハ一忘シテ少  
 モ痕迹ヲ留メズ、曰ク我レノ業唯此一事ニ存ズト、

コンスタール氏ノ此說ハ余ノ此書ニ於テ主張スル所ノ旨趣ト正ニ

相同シ、作者唯其生靈ヲ陶寫シ、誠心ヲ以テ之ヲ出シテ矯偽ヲ事トスル  
 一無シ、此レ其主トスル所ナリ、夫レ我カ理學家希臘ノ彫像ト意答利中  
 興ノ時ノ畫トニ浸淫シ、從テ臆度ヲ以テ苛細ノ紀律ヲ設爲シ、天下ノ藝  
 術ヲシテ皆其模範ニ入ラシメ、以テ其奇氣ヲ消滅スルコト己ニ久シ、此習  
 ヲ一洗セント欲シハ、諸作者皆コンスタブルノ畫ニ於ケルニ倣フテ、  
 各々意ヲ創シテ作ルニ非ザレバ不可ナリ、

然リト雖モ數十年ノ弊習ヲ去リテ、一朝ニシテ新途ニ就クコトハ、亦爲シ  
 易カラズ、今ニ於テ之ヲ爲サント欲スルモ、果シテ獨博士院ヲシテ其  
 苛細ノ紀律ヲ消除セシメテ以テ足ル乎、曰ク未タ足ラザルナリ、必ズヤ  
 少年生徒藝術ニ從事スル者ヲシテ、各々其所見ヲ一變シテ眼ヲ新途ニ  
 着クルニ非ザレバ、縱ヒ舊來ノ紀律ヲ除クモ、慣習ノ久キ生徒猶ホ隱然  
 其束縛スル所ト爲ルヤ疑ヲ容レズ、此レ賞鑒家トレー氏ノ明ニ見シ所

ナリ、トレー氏學博ク才高クシテ且ツ人ノ足跡ヲ踏ムコト喜バズ、近代  
 藝術ノ風ニ於テ大ニ意ニ滿タザル有リ、一千八百五十七年ヲ以テ一小  
 冊子ヲ著ハシ、號シテ藝術改進論ト曰ヒ、希臘フィヂヤリスヨリ方今諸作  
 ニ至ルマテ、評隲シテ遺スコト無ク、其言極テ簡潔ニシテ其論極テ肯綮ニ  
 中レリ、故ニ茲ニ之ヲ引證シテ以テ余カ說ノ未タ及バサル所ヲ補ハン  
 ト欲ス、

トレー氏ノ言ニ曰ク、古ヨリ今ニ至ルマテ藝術常ニ一論說ノ籠絡スル  
 所ト爲リテ其域ヲ出ルコト能ハズ、蓋シ古昔ニ在リテハ多ク神宗ノ論說  
 之ヲ籠絡シ、近代ニ在リテハ耶蘇宗ノ論說之ヲ籠絡ス、其論說ノ旨趣相  
 異ナリト雖モ、之ヲ均クスルニ皆宗教ナリ、或ハ間々宗教ノ籠絡スル所  
 ト爲ラズシテ、別ニ題目ヲ求ムルコト有ルモ、又王公貴人若クハ豪傑ヲ  
 以テ題目ト爲ス、畫人ナリ彫刻家ナリ、皆然ラザル莫シ、若シ夫レ尋常人



類ヲ以テ題目ト爲スコトハ、藝術家ノ屑トセザル所ナリ、獨荷蘭ノ畫家第十七紀ニ在リテ始テ尋常人類ヲ以テ題目ト爲シ、其後第十八紀ニ及ヒ、佛蘭西ノ畫家モ亦是ニ發明スル有リ、然レモ其人數極テ寡シ、顧フニ詩人ハ遠ク畫家ニ先チテ是ニ見ル有リテ、即チラブレールセルワソテスシエールクスピールモリエールノ如キ其題目ト爲シテ摸寫スル所ハ、帝王ニ非ズ、將相ニ非ズ、亦豪傑ニ非ズシテ、皆尋常人類ナリ、當時畫人モ亦此輩ノ詩ヲ讀ミテ之ヲ玩味セシニ、何チ以テ自ラ感發シテ轍ヲ易フルニ至ラザリシヤ、何ソ詩ノ速ニ進ミテ獨リ畫ノ後レタルヤト、

又曰ク抑々畫及ヒ彫刻ノ久ク舊轍ニ循テ敢テ自ラ肆ニセザル所以ノ者ハ何ゾヤ、詩學ニ係リテハ、博士院ノ徒十分ニ其意ヲ行フコトヲ得ザルモ、畫ト彫刻トニ係リテハ、直チニ生徒ヲ陶鎔スルコトヲ得ルヲ以テ、此二ノ者ハ其毒ヲ蒙ムルコト更ニ深シ、此レ其大ニ詩人ノ後ニ在ル所以ナリト、

又曰ク世ノ淺見ニシテ事物ノ深奥ニ達セザル者、及ヒ頑陋ニシテ遠ク前途ヲ望ムコト能ハザル者、此レ皆藝術ノ蠹ナリ、彼レ常ニ古人ノ名作ヲ眷戀シテ以爲ラク、復々其右ニ出ツ可ラズト、夫レ古人誠ニ名作有リ、然レモ、彼モ人ナリ、我モ人ナリ、我若シ新ニ意ヲ創シ自ラ別途ヲ開テ之ニ進入スルモ、或ハ古人ノ上ニ出ツルコト未タ知ル可ラズ、是レ之ヲ慮ラズシテ唯古人唾棄ノ餘ヲ掇拾シテ以テ自ラ藝人ノ間ニ廁ラント欲ス、今此輩ノ言ヲ聞ケハ、凡ソ藝術ノ美ヲ爲ス所以ノ者ハ、希臘ニ非ザレバ意答利ナリ、此二者ヲ去リテ別ニ師法ノ求ム可キ無シ、其レ然リ、豈ニ其レ然ラン乎、嗚呼此輩何ソ一タヒ之ヲ思ハザルヤ、凡ソ人ノ腦裡ヨリ出テ、形ヲ發スル者、一モ變轉セザル莫シ、而シテ藝術モ亦人ノ腦裡ヨリ出テ、形ヲ發スル者ナリ、何ソ獨變轉セザラン、且ツ此輩モ亦何ソ一タヒ其祖尙スル所ノ意答利ノ藝人ノ事ヲ見ザル乎、夫レミケランゾノ如

キヲフアエルノ如キ、若シ其ヲシテ獨リ希臘人ニ模擬シテ絶エテ自ラ創意セズ、卑々トシテフイヂヤース、アッメルヲ剽竊シテ自ラ其性靈ヲ發揮セサラシメハ、其貴フ可キヲ何ソ此ノ如キニ至ラン、夫レ此二人ノ者ハ唯古人ニ拘泥セズ、自ラ意ヲ肆ニシテ作クルヲ知レリ、是ヲ以テ其業ノ赫赫タル反リテ希臘人ヲ凌テ之ニ駕スルニ至レリト、  
又曰ク夫レ畫ナリ彫刻ナリ、皆己レノ意思ヲ發揮シテ之ヲ外ニ形ハス者ナリ、而シテ人ノ意思ハ宗教理學及ヒ諸制度ノ類ヨリ發作スル者ナリ、希臘人ハ自ラ希臘ノ宗教有リ、希臘ノ理學有リ、希臘ノ制度有リテ、我カ今日ノ風俗ト一モ相同シカラズ、故ニ其藝術ニ發スル者モ亦自ラ相同シカラズ、此レ自然ノ理ナリ、是ニ察セズシテ今日ノ歐洲人ニシテ必ズ法ヲ希臘ニ取ラント欲ス、豈ニ固陋ノ甚キニ非ズ乎ト、  
又曰クラフアエルミケランシノ後、今日ニ至リ何ヲ以テ復タ此二人ノ如

キ大家ヲ生ゼザル邪、此二人ノ者ハ少シモ希臘人ニ模擬スルヲ無クシテ、皆自家ノ機軸ヲ出セリ、方今ノ諸家モ亦ラフアエルミケランシニ模擬スルヲ無クシテ、皆自家ノ機軸ヲ出スルハ、何ソ遽ニ此二人ニ及ハサラン、若シ然ラズシテ常ニ規々トシテ舊法ヲ守ルヲ今日ノ如クナルハ、我カ畫ト彫刻トハ益々衰頽シテ復ク救フ可ラザルニ至ラン、然リト雖モ我カ畫家及ヒ彫刻家果シテ更ニ大ニ改革スル有ラント欲スルハ、宜ク先ヅ自家ノ意思ニ就テ改革ノ功ヲ施ス可シ、獨リ外貌ヲ改革スルモ決シテ裨益スル所無シ、蓋シ外貌ヲ改ムルヲハ事ノ爲シ易キ者ニシテ、其刀ヲ運シ筆ヲ揮フノ際、少シク意ヲ用フルハ、自ラ異ナル所有リ、若夫レ意思ヲ改ムルニ至リテハ、一朝一夕ノ之ヲ爲ス可キニ非ズ、然ルヲ況ンヤ畫家彫刻家人々其意思ヲ改メテ以テ國中ノ藝術ヲ一變スルガ如キハ、豈ニ一時鹵莽輕躁ノ能ク爲ス所ナラン哉、

トレー氏ノ此言ヲ爲セシハ、今ヲ距ルコト二十許歳ナリ、當時トレー氏藝術ノ改革ニ於テ未ダ果シテ好結果ヲ得可キト否ラザルトヲ知ラザリキ、顧フニ吾儕方今ニ在リテ、果シテ好結果ヲ得可キト否ラザルトヲ知ルコトヲ得可キ乎、余ヲ以テ之レヲ觀ルニ好結果ハ必ズ得可キナリ、今日ノ形勢ヲ推スニ諸藝術皆駸々トシテ新途ニ嚮フノ勢ヲ呈セザル莫シ、且ツ稗史ノ一科ノ如キハ、己ニ全ク舊規ヲ去リテ新轍ニ循ヒ、曩日ノ遺習ハ一洗シテ拭フガ如シ、而シテ「ドラーム」ノ如キモ漸ク將ニ變轉セントス、然レバ則チ彫刻ナリ繪畫ナリ、何ゾ亦之ニ隨テ變セザルコト有ラン、余故ニ曰クトレー氏ノ時ニ在リテハ、藝術ノ改革ニ於テ好結果ヲ得ルト否ラザルト未ダ前知ス可ラザリシモ、今日ニ在リテ之ヲ言ヘバ其好結果ヲ得可キコト斷シテ待ツ可キナリト、且ツ彫刻ノ一道ニ於テモ作者專ラ線條ノ整齊ナルヲ求メズシテ、亦性

靈ヲ發揮スルコトヲ求ムルコト、茲ニ己ニ數歳ナリ、其一意ニ外貌ノ端麗ニ汲々タラズシテ、更ニ情意ヲ摸寫シ、手足ノ容ニ孜々タラズシテ並ニ念慮ノ微ヲ宣發スルコト、近歲殊ニ其微ヲ見ル、是ノ如キ者ハ己ニ以テ此一道ニ係ル改革ヲ徵スルニ足ラズ乎、

近世彫刻家ノ中ニ就テカルボー氏最モ意ヲ情性ニ注メテ其勇往果敢ナル、眞ニ人ヲシテ驚駭セシムルニ足ル、蓋シ氏ノ意ヲ是ニ注シテ作ル有ルヤ、夫ノ外貌ノ美ニ規々タル輩ハ、相競フテ口ヲ極メテ毀誦シテ己マズ、曰ク是人ヤ妄意ニ古人ノ良規ヲ破壊シテ後世少年ノ徒ヲ誘フテ、盡ク邪徑ニ陷キルト、殊ニ知ラズ意ヲ創シテ造作シ、以テ古人ノ上ニ出ヅルコトヲ圖ルコトハ、正ニ方今人心ノ勢ノ然ラシムル所ナルコトヲ、是ヲ以テカルボー氏ノ如キモ、方今ニ至リテ大ニ公衆ノ稱讚スル所ト爲リ、又他ノ彫刻家往々カルボー氏ノ爲セシ所ニ倣テ新途ニ趨ク者有

リ、顧フニ此道一たび開クルキハ、日ヲ逐ヒ月ヲ追フテ其勢駭々トシテ  
進ミテ已マザルヲ疑チ容レズ、果シテ此ノ如クナルキハ、今ヨリ五十年  
ヲ出デズシテ他ノ彫刻家皆盡クカルポー氏ヲ彫刻中興ノ作者ト謂フ  
ニ至ランコト亦疑チ容レズ、

然リト雖モ彫刻術ニ於テ外貌ノ美ニ規々タラズシテ、情性ヲ發揮スル  
コトハ、カルポー氏始テ此道ヲ唱ヘシニ非ズシテ、意答利中興ノ時ノ作者  
己ニ意チ此ニ留メシ者有リ、獨此レノミナラズ遠ク希臘ニ溯リテ之ヲ  
觀ルモ、亦其例ヲ見ルコト寡ラズ、然レバ則チカルポー氏モ亦祖述スル所  
有リテ然リ、但今日ニ在リテカルポー氏ノ伎倆ノ大ニ新奇ノ觀有ル所  
以ノ者ハ、他無シ、夫ノ博士家ノ徒一意ニ摸擬ヲ以テ最良法ト爲シテ、此  
ヲ以テ衆ヲ率キテヨリ、天下ノ作者其籠絡スル所ト爲リテ自ラ知ラズ、  
苟モ作ルコト有ル毎ニ、唯古人ノ作ニ摸擬シテ夫ノ外貌ノ美ヲ是レ求メ

テ其他ヲ知ラズ、是時ニ於テカルポー氏獨慨然トシテ起チテ此風潮ノ  
邊スル所ト爲ラズ、專ラ自家ノ感慨ヲ發揮シテ之ヲ其作中ニ形ハシテ  
復タ摸擬チ事トセス、此レ其業ノ新奇ノ觀ヲ呈スル所以ナリ、  
夫レ博士家ノ徒ノ希臘ノ彫刻ヲ以テ皆唯外貌ノ美ヲ求メタルト爲ス  
ハ、畢竟謬見タルヲ免レズ、希臘ノ作者モ亦豈ニ此ノ如ク其レ狹隘ナラ  
ン哉、此事余既ニ己ニ之ヲ論ゼリ、蓋シアテーンズノ正ニ盛ナル彫刻家、  
神像ヲ作ル者極メテ多シ、而シテ作者ノ意ニ以爲ラク神ハ聰明正直ニ  
シテ迥ニ情欲ノ表ニ立ツ者ナリト、是ニ於テ其像ヲ倣スヤ、必ズ其容貌  
ヲシテ端嚴美麗ニシテ一モ情念ノ指ス可キ者有ラシメズ、此レ固ヨリ  
宜ク然ル可キナリ、又作者殊ニ建築ノ美ヲ裝飾スルカ爲メニシテ、作ル  
コトヲ以テ業ト爲ス者有リ、而シテ其意ヲ用フルコトモ亦專ラ外貌ノ美ニ  
在リテ、必ズシモ情性ヲ發スルコトヲ求メズ、此レ他無シ、既ニ建築ノ觀チ

飾ルヲ以テ主ト爲スヲ以テ、美麗ノ一事尤モ肝要ナルヲ以テナリ、夫レ是二目的ニ由リテ作爲セシ者ハ、皆眞ニ博士家ノ言フ所ノ如ク、一意ニ條線ノ整齊ヲ求メシヲ固ヨリ論ヲ待タス、然レモ當時アテーンスノ作皆盡ク此ノ如クナラン哉、蓋シ亦頗ル情性ヲ發揮スルヲ求メシ者亦之レ有リ、而シテ博士家ノ徒ハアテーンス作者ノ中ニ就テ、獨リ其宗教ノ爲メニ作りシ者ト、建築ノ裝飾ノ爲メニ作りシ者トヲ撰擇シテ之ヲ取り、乃チ曰ク、希臘ノ彫刻家皆此ノ如シト、嗚呼希臘ノ彫刻モ亦豈ニ此ノ如ク其レ狹隘ナランヤ、

アテーンスノ方ニ盛ナル彫刻家蓋シ二種有リ、其一ハ前ニ云ヘル如ク宗教ノ爲メニ作りシ者ト、建築ノ裝飾ノ爲メニ作りシ者トニシテ、此種類ノ作者ハ專ラ條線ノ整齊ナルト、容貌ノ端粹ナルトヲ求メテ其他ヲ知ラス、其一ハ爲メニスル所有リテ作ルニ非スシテ、自家ノ感スル所ニ

隨フテ作りテ以テ自ラ樂メル者ナリ、此種類ノ作者ハ頗ル生意ノ活潑ナルヲ以テ目的ト爲セリ、顧フニ今日ニ至リ此第一種ノ作者獨リ世ニ顯ハレテ、此第二種ノ作者ハ殆ント人ノ稱述スル所ト爲ラサルハ何ノ故ソヤ、曰ク此レ怪ムニ足ラサルナリ、請フ其故ヲ言ハシ、

蓋シ此第一種ノ作物ハ常ニ寺院若クハ大厦高堂ノ中ニ列セシヲ以テ、衆人來リ觀ル者甚タ多ク、且ツ享祭ノ儀觀ノ盛ナルト屋宇ノ構造ノ大ナルト、並ニ以テ其彫刻ノ觀ヲシテ特ニ世ニ發見セシムルニ足ル、是ヲ以テ當時ニ在リテモ、此種ノ作ハ第二種ノ作ニ比スルキハ、大ニ人ノ注目ヲ惹ク者有リキ、又希臘寺院ノ遺構ノ今日ニ存スル者往々之レ有リテ、而シテ此第一種ノ作ハ此遺構ト俱ニ永ク壞レザルヲ得タルヲ以テ、吾人モ亦今日猶ホ之ヲ觀ルヲ得、若夫レ第二種ノ作ニ至リテハ既ニ宗教ノ爲メニセシニ非ス、又建築ノ裝飾ノ爲メニセシニ非ザリシヲ

以テ、人ノ之ヲ觀ル者甚寡ク、且ツ其置ク所ノ處甚タ世ニ顯ハレザルヲ以テ、星霜ヲ經ルニ隨テ毀壞ニ就キシ者勝ゲテ計フ可ラズ、近代好事家希臘ノ舊地ヲ搜索シ、塵土ノ中ニ於テ往々此第二種ノ作ヲ發見シテ、始メテ希臘ノ作者モ亦頗ル情性ヲ發揮スルニ注意セシ者有ルヲ知ルヲ得タリ、

且ツヤ此一種ノ作獨後世ニ傳ハリシヲ頗ル久キヲ以テ、夫ノ博士家ノ輩モ亦之ヲ觀ルヲ極テ熟セリ、是ニ於テ以爲ラク希臘ノ彫刻ノ美ヲ爲ス所以ノ者ハ、特ニ其條線ノ整齊ナルト容貌ノ端麗ナルトニ在リト、而シテ此第二種ノ作漸ク塵土ノ中ヨリ出ルニ及ヒテハ、博士家ノ說己ニ成リテ復タ動カス可ラズ、是ヲ以テ第二種ノ作ハ力ヲ喪フテ第一種ノ作ト並立スルヲ能ハズ、而シテ世人モ亦往々以爲ラク希臘ノ作ハ特ニ美麗ノ觀是レ求メリ、然レバ則チ吾儕モ亦宜ク法ヲ是ニ取ル可シト、殊

ニ知ラズ此第二種ノ作ノ如キハ、均ク是レアテーンスノ作ナリト雖モ、其生意ノ活潑ナル情性ノ發揚セル決シテ外貌ノ美ニ局束セラル、者ニ非ズ、余故ニ曰ク、彫刻家ノ情性ヲ發揮スルヲ求ムルヲハ、獨カルボ

一氏以來然ルニ非ズシテ、遠ク希臘ニ溯ルモ亦其例ヲ見ルト、

然リト雖モ余ハ決シテカルボ一氏ヲ以テ希臘ノ第二種ノ作ヲ觀テ悟ル所有リシト爲スニ非ズ、蓋シカルボ一氏ノ能ク當時ノ人ノ爲ス所ニ倣ハスシテ、專ラ情性ヲ發揮スルヲ求メタルハ、其天姿奇傑ノ然ラシムル所ニシテ、夫ノ希臘第二種ノ作者ト相期セスシテ自ラ然リ、但余カ必スカルボ一氏ノ前ニ於テ、己ニ情性ニ注意セシ作者ノ在ル有リシヲ證明スル所以ノ者ハ、抑々亦故有リ、蓋シ博士家ノ外貌ノ美ヲ以テ作者ヲ率ヒシヨリ以來、作者皆其籠絡スル所ト爲リテ自ラ擺脫スルヲ知ラズ、獨リ自ラ脫スルヲ知ラザルノミナラズ、亦以爲ラク博士先生

ノ徒學術是ノ如ク其レ淹博ニシテ而シテ其言然リ、吾儕必ズ其言ニ從ハザルヲ得ズト、是ヲ以テ其中或ハ頗ル自ラ意ヲ創シテ作ラント欲スル者有リト雖モ、前ニ其例無キヲ疑テ敢テ自ラ恣ニセズ、カルポー氏ノ如キ有リテ斷然意ヲ創シテ作ルヲ見ルハ、或ハ危懼ヲ懷キテ之ニ倣フヲ願ハズ、故ニ余ハ希臘ノ作物ニ就テ其情性ヲ發揮セシ者有リシトテ證明シテ、以テ此輩ヲシテ實ニ既ニ先例有リテ決シテカルポー氏ノ獨リ是ニ出デシニ非ザルヲ知ラシメント欲セリ、嗚呼博士家ノ輩動モスレバ輒チ云フ、美麗ノ觀ヲ專トスルヲハ希臘人以來是ヲ以テ之ヲ傳ヘタリト、余モ亦之ニ答ヘテ言ハントス、情性ヲ發揮スルヲ主トスルトモ、亦希臘人以來是レヲ以テ之ヲ傳ヘタリト、則チ彼輩將ニ何如カ之ニ對ヘントスル乎、

凡ソ余ガ彫刻術ニ係リテ言フ所ノ者ハ、之ヲ繪事ニ推スモ亦其相同ジ

キヲ見ル、蓋シ希臘ノ方ニ盛ナル、是道ニ妙絶ナル者、想フニ當ニ彫刻家ニ下ラザル可シ、但彫像ハ存シテ今日ニ傳フル者有レト、畫幀ニ至リテハ一モ存スル者無シ、是ヲ以テ博士家ノ徒希臘ノ畫家ヲ以テ祖述ノ基ト爲スヲ得ズシテ、專ラ意答利中興ノ時ノ畫家ヲ以テ模範ト爲シテ、天下ノ畫家ヲ率非テ皆之ヲ摸擬セシメント欲ス、夫レ意答利中興ノ畫家ノ如キハ、妙絶ナリト雖モ、一意ニ之ヲ摸擬スルニ至リテハ、余ノ甚取ラザル所ナリ、且ツヤ博士家ノ最モ尊崇ヲ加フルヲハ、中興ノ畫ノ中ニ就テ其宗教ノ典故ヲ寫セシ者ニ踰ユル莫シ、顧フニ意答利畫幀ノ宗教ノ典故ヲ寫セル者ハ、其適麗ナルヲ固ヨリ論ヲ待タズ、但此レモ亦希臘彫刻ノ第一種ノ者ト同ジク、其旨趣トスル所ハ特ニ宗教ニ在ルヲ以テ後世藝人ノ宜ク法ヲ取ル可キ所ニ非ス、然ルチ博士院ノ徒一意ニ之ヲ稱讚シテ、凡ソ繪畫ニ從事スル者ヲシテ皆盡ク之ヲ摸倣セシメント欲

スルハ、豈ニ怪迂ノ極ニ非ス乎、

夫レ意答利中興ノ畫家多ク宗教ノ故事ヲ以テ題ト爲シテ描寫スル有  
リテ、其圖ハ盡ク之ヲ聖者ニ取レリ、故ニ後世畫人宗教ノ典故ヲ描寫セ  
ント欲スル者ハ、法ヲ是ニ取ルキハ必スシモ不可ナル無シ、今然ラスシ  
テ一切是ヲ以テ典型ト爲サント欲スルキハ、竟ニ謬迷タルヲ免レス、夫  
レ神明ナリ聖者ナリ、其情狀一モ尋常人ト相似タル者無シ、然リ而シテ  
必ス此道ヲ推シテ之ヲ尋常人ニ通セント欲スルキハ、在ニ非サレハ妄  
ナリ、嗚呼里巷凡庸ノ人物ヲ描クニ於テ、其顔貌ヲシテ必ス端莊嚴整諸  
美麗ノ相ヲ具ヘシメント欲ス、吾レ其何ノ故タルヲ知ラサルナリ、  
摸擬ノ一道ハ余ノ甚ク取ラサル所ナリ、摸擬シテ其方ヲ得ルキハ、猶ホ  
是レ可ナリ、今摸擬シテ其方ヲ失フコト此ノ如シ、若シ必ス古人ヲ摸擬シ  
テ以テ得タリト爲スルハ、法ヲ意答利ニ取ルヨリハ、寧ロ法ヲ荷蘭ニ取

ルニ如カス、荷蘭ノ畫家リニベンランブランドノ如キハ、皆生氣ノ活潑ナ  
ルト意趣ノ發揚セルトヲ以テ旨趣ト爲シテ、斯ニ以テ描寫スル有リ、故  
ニ此レヲ以テ典型ト爲スルハ、均ク是レ摸擬ナリト雖モ、意答利ノ畫家  
ニ倣フニ比スルキハ其益大ニ勝ル者有リ、

畫人ノ意趣ヲ描寫スルコトハ、中古以來多ク之ヲ見サリシカ、近代ニ至リ  
此道駭々乎トシテ進ミ、方今ニ至ルニ及ヒテハ、希臘神代記經典ノ類ニ  
取リテ題目ヲ爲ス者、漸次ニ鮮少ニ赴クヲ見ル、余是ニ於テ益々博士家  
ノ所見ノ謬戾ナルヲ知レリ、試ニ看ヨ、年々畫會ノ形勢寢ク變遷シテ復  
タ曩日ノ状態ニ非ス、凡ソ博士家ノ褒賞スル所ノ畫幀、諸宗教及ヒ神代  
記ノ故事ヲ描ケル者ハ、具眼ノ賞鑒家往々之ヲ排斥シテ幾ント藝術ノ  
中ニ齒セス、之ニ反シテ其日常ノ瑣事ヲ以テ題ト爲ス者、即チ工商農ノ  
業ヲ描寫スル者、山水ノ景ヲ描寫スル者、人ノ肖像ヲ爲ス者等、一切博士



家ノ羈絆ヲ受ケズシテ自家ノ胸臆ヲ發揮スル者、動モスレバ噴々稱讚  
 スル所ト爲ル、顧フニ今日ノ勢ヲ推スルハ、久シカラズシテ繪畫ノ道一  
 變シテ、全ク新途ニ入り、喜怒哀樂其他百般人生ノ情念ヲ描寫シテ、其精  
 細ヲ極ムルニ至ルコト足ヲ翹ケテ待ツ可キナリ、是ノ如クナルハ、人  
 ノ顔面體容ヲ描クニ於テモ、專ラ條線ノ齊整ナルヲ求メズシテ、務メ  
 テ鼻目ノ間ニ於テ胸中蓄フル所ノ意思ヲ發揮スルニ至ラン、是ノ如ク  
 ナルハ、彼ノトレー氏ノ所謂眞ノ繪畫始テ世ニ發顯スルヲ見ン、眞ノ  
 繪畫トハ何ソヤ、曰ク尋常人ヲ以テ題ト爲シテ描寫スルヲ是レナリ、  
 夫レ詩學ノ如キハ其古昔ノ紀律ヲ去リテ新途ニ進入セシテ、己ニ完全  
 ニシテ復ク言フ可キ無シ、此レ余ノ既ニ前ニ論セシ所ナリ、顧フニ詩ナ  
 リ繪畫ナリ、均ク是レ藝術ナリ、詩學一タビ變スルハ、繪畫モ亦之ニ隨  
 テ一變セザルヲ得ズ、獨奈何セシ、現今繪畫ニ在リテハ、博士院猶ホ頗ル

勢力ヲ有シテ、少年諸生此道ニ從事スル者其保護ヲ受ケ、因リテ其薰陶  
 スル所ト爲リテ、方法ヲ誤ル者幾何ナルヲ知ラズ、故ニ畫道ノ眞ニ一變  
 スルヲ望ムルハ、博士院ノ勢力ノ全ク地ニ墜ツルノ時ニ至ラザレバ  
 不可ナリ、顧フニ此事未タ遽ニ今日ニ得可ラズト雖モ、然レモ今ノ勢ヲ  
 以テ之ヲ料ルルハ、亦甚ク相遠カラザル可シ、

凡ソ藝術ノ類ノ目的ト爲ス可キ者、蓋シ二有リ、曰ク眞實ナリ、曰ク意趣  
 ナリ、眞實トハ何ソ、寫ス所ノ事物ノ實迹ト適合スルヲ是レナリ、意趣ト  
 ハ何ソ、寫ス所ノ人ノ能ク自家ノ情性ヲ發揮スル是レナリ、而シテ此二  
 者ハ之ヲ密察スルハ、二ニ似テ實ハ一ナリ、何ヲ以テ之ヲ言フ、夫レ事  
 物ヲ寫シテ實迹ト適合スルハ他ニ非ズ、即チ作者ノ其事物ヲ寫スニ於  
 テ、直チニ己レノ感スル所ヲ取リテ之ヲ發揮スルニ在リ、而シテ人ノ情  
 性各々相異ナルヲ以テ、其感スルヲ亦一ナラス、是ヲ以テ同一事物ヲ

寫スト雖モ、其藝術ニ形ハル、處ハ必ス人々相異ナリ、人々相異ナリト雖モ、而シテ各々其實ヲ失フコト無シ、余故ニ曰ク事物ヲ寫シテ實迹ニ適合スルト、作者ノ其己レノ感情ヲ發揮スルトハ、兩事ニ似テ實ハ兩事ニ非スト、然ラズンハ天下ノ最モ善ク物ヲ寫シテ實迹ト合スル者ハ、攝影ノ一術ニ過クルハ莫シ、然レモ其描寫タル畢竟物ノ外貌ニ止マリテ、作者ノ情性ハ絶エテ暢發スルコト無シ、故ニ終ニ之ヲ藝術中ニ入ル可カラズ、

方今藝術家ノ中一種專ラ事物ニ肖似スルコトヲ求テ其他ヲ顧ミザル者有リ、號シテ實迹派ト曰フ、人或ハ云ハン、此輩ノ爲ス所此ノ如シ、然レモ終ニ之ヲ藝人ニ非スト謂フ可ラス、然レハ則チ自家ノ感情ヲ發揮スルコトハ必スシモ貴フ可キニ非スト、豈ニ然ランヤ、夫レ實迹派ノ徒誠ニ事物ニ肖似スルコトヲ求ムルニ專ラナリト雖モ、然レモ其間幾分自家ノ感

情ノ發見スル有リ、此レ其能ク藝人ノ中ニ圃ル所以ナリ、若シ之ヲ疑ハ、試ニ其作ヲ把リテ之ヲ看ヨ、同一物ヲ寫スト雖モ、甲ハ自ラ甲ノ趣有リ、乙ハ自ラ乙ノ趣有リテ、決シテ撮影ノ全ク相同シキカ如クナラズ、夫レ其相同シカラサル處ハ正ニ其人ノ自家ノ感情ヲ發揮シテ自ラ知ラザル故ナリ、

且ツ夫レ美術ト學術ト相異ナル所以ノ者ハ、果シテ何クニ在ル乎、美術ハ己レヲ主トスル者ナリ、學術ハ物ヲ主トスル者ナリ、是故ニ學術ニ従事スル者ハ、其人必ス詳審精密ニシテ、物ヲ觀ルニ於テ妄リニ自家ノ想像ヲ發シテ、物ノ眞理ヲ亂ササル者ニシテ後可ナリ、理學家化學家星學家等ノ如キ皆是レナリ、美術ニ従事スル者ハ正ニ之ニ反ス、其人ヤ必ス感慨ノ性ニ富ミ、物ヲ觀ルニ於テ一種ノ感情胸ヲ衝キテ發作スル者ニシテ後可ナリ、是ヲ以テ一事一物ヲ寫ス毎ニ、其間自ラ自家ノ情性ノ

隱然トシテ印證ヲ見ハス有リ、是ヲ以テ古今藝術ノ大家ト稱スル者ハ、  
 各々必ズ一種ノ筆法有ラザル莫シ、而シテ所謂筆法ハ正ニ其情性ノ印  
 證ノ寓スル處ニ外ナラザルナリ、  
 然リト雖モ亦一事ノ必ズ肝要トス可キ有リ、曰ク藝術ノ士誠ニ各々自  
 家ノ情性ヲ發揮シテ肯ヘテ前人ニ依傍セズ、然レモ若シ怪奇ヲ好ムノ  
 甚クシテ、絶エテ當世ノ人情ト相似ザルニ至ルキハ、聲名ヲ世ニ發セン  
 ト欲スルモ終ニ得可ラズ、何トナレバ藝術ノ物タル己レヲ主トシテ物  
 ヲ主トセズ、而シテ所謂己レトハ作者ノ身情ニ外ナラズ、然ルニ作者モ  
 亦人ニシテ必ズ其一代ノ風俗人情ノ中ニ在リテ生ヲ爲ス者ナルヲ以  
 テ、其情意自ラ當代ト合スル所有ラザル可ラズ、是ヲ以テ古來ノ藝術ヲ  
 把リテ之ヲ察スルニ、エジプトノ藝術ハ自ラエジプトノ藝術ニシテ、バビロ  
ンノ藝術ハ自ラバビロンノ藝術ナリ、其他希臘、支那、印度、羅馬、意答利、各

ヲ自ラ其藝術有リテ、他邦ノ藝術ト相似ズ、而シテ其中ニ就テ言フキハ、  
 苟モ同一種族ニシテ同一時代ナルキハ、其間幾分相似ル處有リ、是レ他  
 無シ、其作者自家ノ感情ヲ發揮スルニ論無シト雖モ、其人情風俗本ト他  
 人ト相異ナルヲ無キヲ以テナリ、若シ然ラズシテ一々他人ト少シモ相  
 似ザルキハ、其外ニ見ル、處怪奇迂僻ニシテ、觀ル者其意趣ノ在ル處ヲ  
 察セント欲スルモ得可ラズ、是ノ如クナルキハ、自ラ信シテ作家ト爲ス  
 ト雖モ、人誰レカ之ヲ賞スル者有レン、

此ニ由リテ之ヲ觀レバ、藝術ノ士ノ肝要トス可キ者知ル可キノミ、事物  
 ノ實迹ヲ寫シテ枯淡ニ至ラズ、自家ノ感情ヲ發シテ怪僻ニ至ラス、此ニ  
 者宜ヲ得テ然ル後大家ノ名得テ擅ニス可キナリ、今チ距ルヲ五十年、我  
 佛蘭西ノ詩人夫ノ「ロマンチック」ノ説ニ浸淫スルヲ甚クシテ、其意ヲ立ル  
 一動モスレバ幽晦ニ陷イリ、其興ヲ寄スル一動モスレバ怪僻ニ流レ、唯

高遠是レ求メテ其他ヲ知ラズ、凡庸ノ徒ト雖モ皆自ラ視ルコトシエークス  
 ビールトルチルニ下ラズ、是ニ於テ其格律往々敗壞シテ、人ヲシテ嘔噦  
 セシムルニ至ルヲ免レズ、然レモ之ヲ要スルニ其原因ハ人々各々己レ  
 ノ感情ヲ發揮シテ、絶エテ前人ヲ蹈襲セザルニ在リ、現今ニ至リテハ詩  
 風又一變シテ人々意ヲ實際ニ注シ、里巷細微ノ事實ヲ摸シ、人情ノ秘密  
 ヲ索メ唯描寫ノ實ニ近クコトヲ求メテ復タ旨趣ノ高下ヲ論セズ、而シテ  
 之ヲ要スルニ其原因ハ亦人々各々己レノ感情ヲ發揮シテ、絶エテ前人  
 ヲ蹈襲セザルニ在リ、但前ニハ旨趣ノ高大ナルコトヲ求メ、事跡ノ奇崛ナ  
 ルコトヲ喜ビテ、絶エテ奇ヲ求メズ、願フニ此ノ如キ者ハ果シテ詩學ノ曩  
 日ヨリ下リシヲ徵ス可キ乎、曰ク然ラザルナリ、夫レ學術ニ就テ言フモ、  
 曩日ハ學士專ラ妄想臆度ヲ以テ說ヲ立テ、事實ノ如何ヲ問ハズ、方今  
 ニ至リテハ著々之ヲ實驗ニ徵シテ疑ヲ容レザルニ非ザレバ、敢テ以テ

說ヲ立テズ、然ルニ此ヲ以テ方今ノ學術曩日ニ下ルト謂テ可ナラン乎、  
 詩學モ亦然リ、曩日ハ奇ヲ好メリ、方今ハ眞ヲ好ム、豈ニ眞ヲ好ムコト果シ  
 テ奇ヲ好ムニ下ルト謂ハン哉、

## 美學附錄

## プラトンの美學

余ノ始メ此書ヲ作ルヤ、首ニ古來美學ノ沿革ヲ敘述シ、其中ニ於テ希臘ノプラトンアリストット日耳曼ノカントシエルリングエーシェル佛蘭西ノラムチーシェーフロアークーザンピクテットリユスカンレウエークテーンス等ノ學士ノ說ヲ列シテ其長短得失ノ處ヲ示セリ、既ニシテ卷帙ノ太タ浩瀚ナルヲ致スヲ恐レ、因リテ其業ヲ廢シテ特ニプラトンノ美學ヲ存シテ以テ一章ト爲シ、之ヲ卷末ニ置キ、以テ此書ノ附録ト爲セリ、抑々希臘ヨリ今代ニ至ルマテ、學士美學ヲ論スル者此ノ如ク其レ夥シ、而シテ余ハ特ニプラトンヲ舉ケテ其他ハ一切略シテ之ヲ舉ケズ、然ル所以ノ者ハ他無シ、プラトンノ美學ハ其言往々藝術ニ係リテ、現ニ効驗ヲ著ハスヲ以テ、苟モ是學ニ志有ル者ハ、之レガ得失ヲ論ゼザルヲ得ズ、

カント以下ノ諸說ニ至リテハ、畢竟學士家ノ理論ニ過ギズシテ、藝林ノ實際ニ於テ一モ効驗ヲ見ズ、此レ余ノ之ヲ略セシ所以ナリ、博士家ノ美學ニ於ケル、其議論往々プラトンニ根據シテ以テ力勢ヲ爲ス、若夫レ其他ノ學士ニ至リテハ、博士ノ徒必ズシモ之ヲ引カズ、是ヲ以テ博士家ノ說ノ紕繆ヲ暴白セント欲スルハ、必ズプラトンノ說ヲ講求シテ直チニ其本ヲ拔キ其源ヲ塞ガザルヲ得ズ、我邦毎歲期ヲ定メテ藝術ノ作ヲ評論シ、名ケテ「サロン」ノ期ト曰フ、是時ヤ賞鑒家ノ中博士家ノ說ヲ信奉スル者、往々言ヲ立テ、以テ自家ノ僻說ヲ鼓倡シ、毎ニプラトンノ言ヲ引キテ以テ據ト爲ス、然リ而シテ其稱シテプラトンノ言ト爲ス所ノ者ハ實ハプラトンノ言ニ非ズシテ、一家ノ私言タルニ過ギズ、今プラトンノ著書ヲ覽閱スルハ、明ニ之ヲ知ルヲ得可シ、豈ニ矯誣ノ甚キニ非ズ乎、

抑々此輩敢テプラトソノ言ヲ引テ、必ズシモプラトソノ眞ニ是言有リシト否ラザルトチ問ハズ、而シテ人モ必ズシモ深ク之ヲ究メザル所以ノ者ハ抑々何ゾヤ、蓋シ博士家ノプラトソナ尊奉シテ美學ノ開祖ト爲スヤ、日タルコ己ニ久シ、故ニ世人モ亦深ク察セズシテ、一ニ博士家ノ説ヲ信受シ、常ニ曰クプラトソ是言有リ、此レ必ズ守ラザル可ラズ、曰クプラトソ是言有リ、此レ必ズ戒メサル可ラズト、殊ニ知ラズプラトソ未ダ嘗テ美學ノ書ヲ編モシコト有ラザルコチ、謂テプラトソノ言ト爲ス所ノ者ハ、余未ダ嘗テ之ヲ其書中ニ見シコト有ラズ、

プラトソ專ラ心性及ヒ道德政術ヲ論シテ、別ニ美學ヲ論ゼシコト無シ、然レモ其藝術ニ係リテ議論セシコト、往々其著書中ニ散見セリ、故ニ若シ吾人ノ遍ク其書ヲ緝閱シテ、其藝術ニ係リテ論ゼシ所ヲ採摭シテ、別ニ一編ヲ爲シテ之レカ次序ヲ定ムルキハ、プラトソノ説ノ全豹始テ見ル可

シ、今博士家ノ徒ハ然ラズシテ、唯プラトソノ書中ニ就テ其片言隻句ヲ切取リ以テ證ト爲スニ過ギズ、而シテ余ヲ以テ之ヲ察スルニ、其中往々實ニプラトソノ言ニ非ザル者有リ、又其甚シキニ至リテハ、其言前後相容レザル者有リ、顧フニ博士家ノ徒ノ好ミテプラトソノ説ヲ引證スル者ハ、他ニ非ズシテ正ニ其言ノ次序無キヲ以テナリ、何トナレバ其言若シ次序有リテ、眞ニ一編ノ美學論ヲ爲スキハ、吾人其書ヲ誦讀一過スルキハ、明ニ其旨趣ヲ知ル可シ、今然ラズシテ數書ニ散見スルヲ以テ、若シ博士家ノ説ノ根本ヲ窮メント欲スルキハ、プラトソノ全集ヲ講究セザル可ラズ、此事タルヤ一朝一夕ノ事ニ非ズ、是ヲ以テ世人往々直チニ博士家ノ言ニ據リテ信ト爲シ、相率キテ其稱シテプラトソノ言ト爲ス所ノ者ヲ口ニシテ、曰ク此レ美學ノ奧秘ナリト、而シテ其藝林ノ災ヲ爲スコト實ニ勝ゲテ計フ可ラズ、

賞鑒家中博士家ノ説ヲ奉シテ、又其學術淹博ト稱スル者、動モスレハ輒  
 ナ云フ、プラトノン云ハズ乎、美トハ眞ノ精華ナリト、顧フニ此言タル高遠  
 ニ過ギテ極テ曖昧ナリ、又プラトノンノ書中絶エテ此言無シ、然レモ世人  
 ハ皆信シテ疑ハズ、亦曰ク美トハ眞ノ精華ナリト、嗚呼此言ヤ設シアリ  
 ストットナシテ之ヲ言ハシメバ、猶ホ或ハ信ズルニ足ラン、今然ラズシテ  
 之ヲプラトノンニ歸シテ、而シテ大ニプラトノンノ本論ト違フコト有ルヲ顧  
 ミザルハ何ゾヤ、夫レアリストットハ摸擬ヲ以テ藝術ノ道ト爲ス者ナリ、  
 故ニ事ノ眞ヲ以テ美麗ノ在ル所ト爲スモ、必ズシモ不可ナル無シ、プラ  
 トノンニ至リテハ、摸擬ヲ以テ藝術ノ道ト爲サズシテ、美ノ極致ナル者ヲ  
 以テ其道ト爲セリ、猶ホ何ゾ別ニ所謂眞ナル者ヲ引テ之ヲ口ニスルコ  
 有ラン哉、

博士家ノ徒又プラトノンノ所謂極致ノ語ニ於テモ往々誤解ヲ致セリ、顧

フニ此語ニ係リテハ、プラトノン屢々解釋ヲ下シテ其言極テ明瞭ナリ、然  
 リ而シテ博士家ノ徒猶ホ誤解ヲ致セルハ何ゾヤ、

夫レ極致ノ語ハ詳ニ解釋ヲ加ヘザルモハ、曠漠曖昧ニシテ殆ンド解ス  
 可ラザル者ナリ、然ルニ世人ハ絶エテ之ヲ推究セズシテ、明ニ之ヲ解セ  
 ル者ノ若シ、此レ余ノ解セザル所ナリ、看ズヤ賞鑒家中博士家ノ言ヲ爲  
 ス者ハ、苟モ藝術ニ係リテ論著スルコト有ルモハ、終始極致ヲ以テ言ト爲  
 ササル莫シ、一ニハ則チ曰ク極致、二ニハ則チ曰ク極致ト、而シテ所謂極  
 致ノ何物タルコトハ絶エテ之ヲ言ハズ、

極致ノ語其實此ノ如ク曖昧ナリト雖モ、然レモ博士家ハ曾テ以テ疑ヲ  
 致スコト無クシテ、輒チ曰ク藝術ノ要ハ極致ニ在リト、是ニ於テ世ノ藝術  
 家或ハ古來ノ舊習ヲ破壊シテ、別ニ自ラ機軸ヲ出ス有ラント、欲スルモ  
 ハ、曰ク博士家ノ徒毎ニ云フ、藝術ノ要ハ極致ニ在リト、彼輩何ゾ此ノ如

キヲ得ン、

博士家ノ恒言終始夫ノ極致ノ語ニ在ルヲ以テ、余始メ以爲ラク彼輩此語ニ於テ其意義ヲ領スルヲ極テ明瞭ナリト、既ニシテ彼ノ徒ノ此語ニ附スル所ノ意義ヲ把リテ、仔細ニ之ヲ究察スルニ及ヒテ、始テ其然ラサルヲ知レリ、蓋シ彼輩徒ニ此語ヲ口ニスルヲ知リテ、意義ニ至リテハ絶エテ一定ノ説有ルヲ無シ、或ハ頗ル一定ノ説有ルガ如キ者ト雖モ、其詳ヲ究ムルキハ、略ボプラトンノ所謂極致ノ者ト相似タルヲ無シ、而シテ彼輩ハ常ニプラトンヲ引テ以テ新途ニ從事スル者ヲ駁撃スルノ具ト爲スハ、豈ニ咄々怪事ニ非ズ邪、

博士家ノ徒ノ夫ノ極致ノ語ヲ解スルヲ觀ルニ、或ハ之ヲ以テ事物ノ全體ト爲ス有リ、或ハ之ヲ以テ神ト爲ス者有リ、是ニ於テ平輒チ曰フ、物ノ美麗ノ極致ハ大體ノ處ニ在リト、或ハ曰フ神ニ源本スト、殊ニ知ラズ

ラトンハ書ヲ著ハシテ明ニ其所謂極致ナル者ヲ解釋シテ、意ヲ致スル極テ丁寧ナリト雖モ、絶エテ物ノ大體若クハ神ト毫モ交渉有ルヲ無キコトヲ、

博士院ノ學士ハ皆世ノ所謂博物閱覽ノ士ニシテ、國中ノ崇尊ヲ致ス所ナリ、而シテプラトンノ極致ノ語ヲ解シテ或ハ物ノ大體ト爲シ、或ハ神ノ本體ト爲ス、是ニ於テ凡庸ノ徒ハ、直チニ其言ニ據リテ信ト爲シテ疑ハズ、豈ニ哀シム可ラズ邪、凡ソ博士家言フ所ノ類皆此ノ如キニ過ギズ、而シテ賞鑒家皆據リテ以テ法ト爲シ、苟モ藝術ノ作ヲ觀ルキハ、必ズ此ヲ以テ軒輊ヲ定ム、是ニ於テ藝術家モ亦漸ク則チ是ニ取ルニ至リテ、其弊害勝ゲテ計フ可ラサルニ至レリ、故ニ予以爲ラクプラトンノ所謂極致ナル者ヲ講求シテ其詳ヲ得ルキハ、博士院ノ邪説ヲ開クニ於テ、眞ニ拔本塞源ノ功ヲ呈スルヲ得ント、



プラトンの所謂極致ノ語ハ、意義極テ高遠ニシテ一二語ノ盡ス所ニ非  
 スト雖モ、然レモ余ハ將ニ力ヲ竭シテ之ヲ講求シ、以テ務メテ明瞭ニシ  
 テ且ツ簡約ナルヲ求メントス、

希臘ノ理學有ルコト久シ、ソクプラトニ至リテ大ニ變革ヲ致シテ復タ從前  
 ノ面目ニ非ズ、蓋シ此變革ハソクプラト之ヲ行フテプラトン之ヲ書ニ筆  
 シテ始メテ大成スルコトヲ得テ、希臘人皆據リテ以テ基址ト爲スニ至レ  
 リ、而シテ吾人今日ニ於テ此二人ノ說ノ詳ヲ得ント欲スルキハ、一事ノ  
 極テ肝要ナル者有リ、曰ク先ヅ此二人ノ說ノ大體ノ處ヲ提ゲテ、以テ其  
 詳細ノ處ニ波及スルノ根基ト爲ス是レナリ、

夫レソクプラトプラトン二人ノ說ノ大體ノ處ハ一ニシテ足ラズ、而シテ  
 其中或ハ書中ニ明言セル者有リ、或ハ明言セズシテ徒ニ含蓄セル者有  
 リ、其書中ニ明言セル者ハ、余復タ之ヲ論ズルヲ須ヒズ、他無シ、世人ノ遍

ク知ル所ナルヲ以テナリ、其書中ニ明言セザル者ハ、當時ノ人ノ意ニ在  
 リテハ、極テ明瞭ニシテ初ヨリ疑ヲ置クコトヲ要セズト爲シテ、曾テ異議  
 ヲ容ル、コト無ク、又其甚シキ者ハ、自家ノ說ヲ以テ暗ニソクプラト  
 ノ二人ノ說ヲ駁撃スルモ、自ラ其然ルヲ知ラズシテ然ル有リ、

抑々プラトンノ其書中ニ明言セズ、且ツ自ラ信ジテ疑ハザル者、即チ余  
 ノ所謂其說ノ大體ノ處ナル者ノ中、其最モ肝要ナル者ハ、曰ク人智ヲ以  
 テ不動ノ物ト爲スコト是レナリ、蓋シプラトンノ意ヲ推スニ、人智ハ寂然  
 トシテ動カズ、必ズ外物ノ來リ觸ル、ヲ待チテ始テ發作スル者ナリ、而  
 シテ其所謂發作ナル者ハ、畢竟唯其外ヨリ來ル所ノ事物ノ影象ヲ受ケ  
 テ之ヲ心ニ通ズルニ過ギズ、之ヲ要スルニ人智ハ特ニ鏡ノ如シ、其來リ  
 映ズル物ハ、皆之ヲ心ニ致スヲ以テ職ト爲シテ、其物ノ果シテ實際ノ形  
 態有ルト否ラザルトハ之ヲ問フコト無シ、

夫レ人智ヲ以テ寂然不動ニシテ唯外物ノ影象ヲ感受スル者ト爲ス、是レ乃チソクプラトンプラトン二人ノ據リテ以テ其論說ノ根基ト爲ス所ナリ、而シテ方今ニ在リテモ、博士家ノ言ヲ爲ス者、猶ホ此說ヲ稱讚シテ衰ヘズ、然レモ此說ヤ一大妨害ノ來リ抵ル有リ、請フ之ヲ詳論スルヲ得ン、

古來人智ノ益々進漸シテ已マズ、萬事ニ係リテ善美ヲ盡竭スルヲ求ムルコトハ、自然ノ勢ニシテ、史籍ニ徵スルニ其迹歴々觀ル可シ、蓋シ上古蒙昧ノ時ニ在リテハ、人々自ラ進開スルヲ求ムト雖モ、自ラ其然ルヲ知ルコト無シ、自ラ知ルコト無シト雖モ、其之ヲ求メシコトハ甚明ナリ、而シテ理學家人性ノ此ノ如キヲ見テ、以爲ラク天地ノ間最上ノ道理三有リ、曰ク純眞ノ理ナリ、曰ク純善ノ理ナリ、曰ク純美ノ理ナリ、純眞ノ理ハ學術ノ目的トスル所ナリ、純善ノ理ハ道德ノ目的トスル所ナリ、而シテ純美

ノ理ハ文藝ノ目的トスル所ナリ、唯是三道理ノ在ル有リ、故ニ人心自然ニ之ヲ求メテ以テ其進開ヲ致スナリト、然レモ所謂三道理ハ皆無形ノ物ニシテ、世實ニ此物有ルニ非ザルヲ以テ、未ダ曾テ影象ヲ我が智ニ映セシコト有ラズ、未ダ曾テ影象ヲ映セズシテ我智能ク之ヲ想像スルハ何ゾヤ、若シ我智ヲシテ眞ニ寂然不動ニシテ、唯外物ヲ感受スルコト司ドルニ過ギザラシメバ、何ニ由リテ能ク此三道理ヲ感受スルコト得ン、此レ余ノ所謂一大妨害ノ來リ抵ル、者ナリ、

此事ヤ人智不動ノ說ノ爲メニハ極テ困難ノ件タルニ似タリ、然レモプラトン輩ハ曾テ以テ困難事ト爲サズ、怪ム無キナリ、彼ノ理學者ノ慣手タル、苟モ事理通シ難キ處ニ遇フモハ、毎ニ臆度ノ見ヲ以テ之ヲ辨疏ス、夫レ臆度ノ見ハ愈々出テ、愈々窮リ無キ者ナリ、即チプラトンノ如キモ、此困難ニ係リ凡ソ三ノ臆見ヲ創メテ以テ之ヲ解セリ、以下請フ之ヲ

論究セシ、

第一ノ説ニ曰ク、吾人ノ覆載ノ間ニ在ルヤ、二種ノ物相聚リテ各々別ニ一境ヲ爲ス、一ハ天地庶物ニシテ目ニ視ル可ク、手ニ捉ル可ク、鼻嗅ク可ク、口味フ可ク、耳聽ク可キ者ナリ、一ハ無形ノ世界ニシテ物ノ精華ナリ、此第一ノ境界中ノ物ハ、既ニ定形有ルヲ以テ廣狹長短高下厚薄等一定ノ限畫無キヲ能ハズ、又時日ヲ經テ壞滅スルヲ無キヲ能ハズ、若夫レ第二ノ境界中ノ物ハ、夫ノ庶物ノ精華ニシテ、即チ所謂極致ナルヲ以テ、形態ノ求ム可キ無ク、又成壞有ルヲ無シ、此レ蓋シ神ノ智力ノ造作スル所ニシテ、未ダ曾テ人間ノ汚穢ヲ受ケザル者ナリ、

第二ノ境界中ノ物ハ庶物ノ統領ニシテ、即チ吾人ノ五官ニ觸ル、庶物ハ皆此ヲ以テ法則ト爲ス、之ヲ例ヘハ此境界中ニ鳥ト稱スル者有リ、木ト稱スル者有リ、而シテ此鳥ヤ此木ヤ、鳥ノ極致ト木ノ極致トニシテ、即

チ桃ニ非ズ、杏ニ非ズ、鶯ニ非ズ、鳥ニ非ズ、一名ヲ以テ稱ス可ラズ、他無シ、鳥ノ精華ト木ノ精華トニシテ一ノ欠缺無ク一ノ點汚無クシテ、即チ其種類ノ法則ナレバナリ、即チ吾人尋常見ル所ノ鳥木ハ、皆此法則ノ一部ヲ得テ生出スル者ナリ、是ニ知ル此境界中有ル所ノ類ハ、他ノ境界中有ル所ノ數ニ比スレハ、更ニ寡少ナルヲチ、又第一ノ境中ニハ美、善、真ノ語ハ畢竟物ノ形容ニ過ギズシテ、必ず事物ニ就テ見ル所ノ美色善行、若クハ眞說等ノ物ノ類是レナリ、第二ノ境界ニ至リテハ、純美ナル者有リ、純善ナル者有リ、純真ナル者有リ、蓋シ第一境界中ノ美人美行、若クハ眞說等ノ類ハ、即チ第二境界中ノ純美純善純真ノ一滴ヲ得テ、始テ其觀ヲ發スル者ナリ、

然リト雖モ、此ノ第二境界中ノ物ハ、我カ五官得テ之ニ觸ル可ラズ、然リ而シテ吾人何ヲ以テ之ヲ知ルヲ得ル乎、曰ク此レ正ニ第二説ニ由リ

テ明白ナルヲ得ン

第二説ニ曰ク、吾人ノ心タル二種ノ作用ヲ有ス、一ハ感受ノ作用ニシテ、  
五官ニ觸ル、者ハ一切皆之ヲ覺知スルヲ得、一ハ良智ノ作用ニシテ、  
其職タルヤ一切無形ノ理ヲ覺知スルニ在リ、蓋シ此二作用有リ、有形ノ  
物ト無形ノ理トノ間ニ居テ、之ヲシテ相通スルヲ得セシム、

良智ノ作用ハ之ヲ譬ヘハ屋上ノ硝窓ノ如シ、人唯之レ有リ、故ニ能ク眼  
ヲ庶物ノ上ニ放チテ夫ノ物ノ精華ヲ覺知スルヲ得、

然レモ此作用モ亦寂然不動ニシテ、曾テ自ラ進ミテ夫ノ第二ノ境界中  
ニ突入スルニ非ズ、蓋シ感受ノ作用ハ寂然不動ナリ、故ニ外物來リ觸ル  
、コ有ルキハ、感シテ之ヲ受ク、良智ノ作用モ亦寂然不動ナリ、故ニ無形  
ノ理來リ觸ル、有ルキハ覺リテ之ヲ知ル、唯其相異ナル所以ハ、其來リ  
觸ル、者ノ有形ナルト無形ナルト、疎ナルト精ナルトニ在リテ、其寂然

不動ナルハ則チ一ナリ、

凡ソ吾人ノ口ニ擧ゲ及ビ書ニ筆スル論説ノ如キモ、其精華極致ハ皆夫  
ノ第二ノ境界中ニ在リ、故ニ自ラ意ヲ創シテ一説ヲ立テ、一論ヲ發スル  
カ如シト雖モ、實ハ夫ノ第二境界中ノ物ヲ摸擬剽竊スルニ過キサルノ  
ミ、理學者ノ奇説ヲ唱フル、藝術家ノ美畫妙刻ヲ製スル、文章家ノ名文ヲ  
草スルハ他ニ非ズ、其人ノ良智一種清明ニシテ細ニ夫ノ精華ヲ覺知シ  
テ、又善ク之ヲ物ニ形ハシテ、他人ヲシテ解スルコトヲ得セシムルヲ以  
テナリ、

然リト雖モ、人ノ良智ノ作用果シテ唯明鏡ノ臺ニ在ルカ如クニシテ、僅  
ニ夫ノ精華ノ來リ映ズルヲ待チテ之ヲ覺知スルニ過キサルキハ、吾人  
ノ夫ノ美善真ノ諸物ニ於ケル、之ヲ愛スルコト是ノ如ク其甚シキ者ハ、何  
ノ故ンヤ、凡ソ吾人ノ物ニ於ケル、唯其來リ觸ル、ニ任セテ之ヲ覺ルニ

過キザルキハ、初ヨリ多ク意ヲ經ス、然ルニ吾人ノ夫ノ善美眞ノ三ノ物ニ於ケル、之ヲ嗜好スルヲ現ニ甚シキ者有リ、此レ抑々何ノ故ヅヤ、曰ク此レ正ニ第三説ノ明解スル所ニシテ、其立意ノ巧便ナルヲ前ノ二説ニ比スレバ更ニ甚シ、

第三説ニ曰ク、人ハ其先皆神ニシテ天堂ニ在リ、降リテ人ト爲リテ始テ斯世ニ生ズ、故ニ常ニ其先世ノ事ヲ顧念シテ自ラ知ラズ、此レ其第二境界ノ物ヲ嗜好スルノ甚シキ所以ナリ、

プラトノ言ニ曰ク、人ノ此世ニ在ルヤ、事々物々在々處々盡ク窮苦荼毒ニ非ザル莫シ、人ノ神智其五官ノ爲メニ束縛セラレ、其體軀ノ爲メニ囚繫セラレテ、斯ニ諸ノ疾苦荼毒ヲ感シテ之ヲ能ク擺脫スルヲ無シ、蓋シ其未タ斯世ニ降ラサルヤ、天堂ニ在リテ神ト俱ニ生ヲ爲シ、唯一片ノ神智ニシテ曾テ肉體ノ束縛ヲ受ケズ、飛揚游離シテ諸ノ精華極致ノ間

ニ往來シ、一切眞美善ノ類皆直チニ之ニ接シテ、絶エテ他物ヲ假用スルヲ無シ、是時ヤ眞ニ所謂極樂世界ナリ、

其降リテ斯世ニ生ル、ヤ、中心髣髴トシテ其先世天堂ニ在リテ、嘗テ諸神ノ列ニ廁リシヲ追記シテ自ラ知ラズ、唯此追記ノ性有リ、故ニ夫ノ天堂ノ生ヲ顧戀シ、先世ノ福樂ヲ眷念シテ已マス、眼ヲ放チテ此世ノ庶物ヲ觀ルニ及ヒ、其汚穢ノ中自ラ夫ノ精華ノ痕極致ノ迹有ルヲ見テ、因リテ知ラズ識ラズ精華極致ヲ追想ス、然レヒ其追想スル所ノ精華極致ハ畢竟摸索暗討シテ得ル所ニ過ギザルヲ以テ、幾分欠缺ノ處有リテ、復タ前日完全ノ物ニ非ス、此レ乃チ吾人ノ藝術ノ美ヲ愛シ、道德ノ善ヲ尊ビ、學術ノ眞ヲ嗜ム所以ナリ、此説ヤ號シテ「レミニカンス」ト曰フ、追憶ノ義ナリ、其源蓋シ印度輪廻ノ説ニ基ケル者ニシテ、世界何レノ國ヲ問ハズ、凡ソ宗教ノ原因ハ多クハ此様ノ説有リ、唯其言ヲ立ツル或ハ同シカラズ

シテ精粗ノ別有リト雖モ、其天堂穢土ヲ以テ説テ爲シ、有形ヲ以テ言テ爲スハ則チ一ナリ、

プラトノ「レミニサノス」ノ三説既ニ粗ホ之ヲ明ニスルヲ得タリ、請フ其美學ニ就テ之ヲ論セン、

プラトノ意蓋シ以爲ラク、吾人日常感受スル所ノ庶物モ、其長處ヲ把リテ言フキハ、亦頗ル美麗ノ觀無キニ非ス、但未タ完全無缺ナルヲ能ハス、蓋シ固ヨリ完全無缺ナル容ヲサルナリ、何ソヤ、夫レ完全無缺ナル者ハ、諸種ノ質ヲ合シテ方ニ成ル、而シテ此質ヤ、必ス一ニ專ニシテ他ノ此種ノ質ト並立ス可ラス、是故ニ眞ニ所謂完粹無疵ナル者ハ、一有リ二有ル可ラス、若シ二ツ有ルキハ、互ニ限畫スル所無キヲ能ハス、苟モ限畫セラル、所有ルキハ、復タ完粹無疵ト爲スヲ得ス、故ニ曰ク眞ニ完粹無疵ト稱ス可キ者ハ、一有ル可シ二有ル可ラスト、夫レ然リ、故ニ造化主宰

ノ庶物ヲ造ルヤ、之ヲシテ完粹無疵ナラシメント欲シテ得ズ、是ニ於テ之ニ分附スルニ自己完粹ノ質ノ少許ヲ以テシテ、之ヲシテ幾分ノ美觀有ラシム、是ニ知ル眞ノ完粹無疵ハ、獨造化主宰ノミ是質ヲ具有シテ、其他ハ得テ之ヲ全ウスルヲ得サルヲ、又造化主宰ハ純平一ナル者ナリ、純平整齊ナル者ナリ、其他ノ物ニ至リテハ造化主宰ヲ去ルヲ愈々遠キキハ、其數愈々夥多ニシテ、其形態亦錯亂シテ整齊ナラス、而シテ夫ノ諸ノ極致ノ如キハ、庶物ニ比スルキハ造化主宰ニ接近スル者ナリ、故ニ鳥ナル者有リ、木ナル者有リテ、桃杏ナル者無ク、鶯鳥ナル者有ルヲ無シ、其類タル寡少ニシテ其形態タル整齊ナリ、他無シ、初ヨリ肉體ヲ具セザルヲ以テナリ、若夫庶物ニ至リテハ其類是ノ如ク其レ夥ク、又其形態タル汚穢ニシテ且ツ亂雜ナリ、

且ツ凡ソ有形ノ物タル、皆長廣厚ノ限ル所ト爲リ、又時日ヲ經テ壞敗消

滅スル所ト爲ル、所謂無常ノ物ナリ、夫レ既ニ長廣厚ノ限ル所ト爲リ、又時月ヲ經テ壞滅スル所ト爲リテ、絶エテ獨立自在ナルヲ能ハス、其始テ生ズルヨリ、便チ漸次ニ毀壞シ、毀壞スレバ即チ復タ生ズ、是ノ如クニシテ輾轉已ムヲ無ク、永ク自ラ保チテ變ゼザルヲ能ハズ、是ノ如キ者ハ固ヨリ完粹純全ノ美ヲ有スルヲ能ハズ、是故ニ吾人ノ庶物ニ於ケル、少シク其美ヲ喜ブ有ルモ、終ニ其嗜好ヲ飽カシムルヲ得ズ、然リト雖モ庶物モ亦幾分觀美ヲ具フル者ナリ、是ヲ以テ吾人其美ナル者ヲ見ルキハ、美ヲ好ムノ情之ガ爲メニ發起シ、隱然トシテ前ニ嘗テ天堂ニ在リテ、物ノ精華ト俱ニ游揚シタルヲ追記シ、想像ノ念復タ止ム可ラズ、是ニ於テカ或ハ之ヲ詩歌ニ著ハシ、或ハ繪畫ニ著ハシ、彫刻ニ建築ニ舞蹈ニ音樂ニ著ハシテ、以テ純美ノ觀ヲ求メント欲ス、此レ乃チ藝術ノ起ル所以ニシテ、亦藝術ヲ愛好スル所以ナリ、

夫レ吾人ノ左右前後皆無常ノ物ナラザル莫シ、皆可壞體ナラザルハ莫シ、吾人其中ニ在リテ隱然トシテ先世ノ純美ノ觀ヲ追想シテ已マズ、是ニ於テ作ル所有ルヤ、務テ其物ヲシテ完粹ナラシメント欲シ、又其物ヲシテ縱令ヒ不窮ニ傳フルヲ得ザルモ、冀クハ永遠ニ傳フルヲ得セシメント欲ス、是ニ知ル詩人ナリ、畫人ナリ、彫刻家ナリ、建築家ナリ、凡ソ藝人タルモノ皆題目ヲ庶物ニ取リテ作ル有リト雖モ、庶物ノ力タル特ニ藝人ノ美ヲ好ムノ情ヲ感發スルニ過ギズシテ、其取ル所ノ法ハ必ず夫ノ天堂精華極致ノ中ニ在ルヲチ、是故ニ藝人ナル者ハ、夫ノ先世極致メ觀チ記憶スルヲ、常人ニ比スレバ更ニ堅實ナル者ナリ、故ニ其庶物ニ於テ其美麗ノ處ヲ發覺スルヲモ、尋常人ニ比スレバ亦精敏ナル者ナリ、凡ソ此類ノ者ハ、皆其良智ノ鏡更ニ昭明ニシテ、其極致ノ影象ヲ感受スルヲ更ニ眞ナルニ由リテ然リ若シ

然ラズシテ卑々トシテ唯庶物ヲ寫スルハ、其作初ヨリ人ヲ感ゼシムルニ足ル者有ルヲ得ズ、是故ニ藝人專ラ實物ヲ摸寫シテ少シモ相異ナルヲ無キヲ求メテ、其他ヲ顧ミザラント欲スルモ、實ハ決メテ得可ラズ、何トナレハ其實物ニ對スルヤ、何如ニ美麗ナル者ト雖モ、自ラ亂雜汚穢ノ所有ルヲ覺エテ、十分ニ其好美ノ心ヲ飽カシムルヲ能ハズ、他無シ、夫ノ極致ノ觀自ラ其前ニ現ハレ、自ラ其良智ニ映寫シテ得テ拂ヒ去ル可ラザル者有ルカ故ナリ、此ニ由リテ之ヲ觀レハ、藝人ノ作有ルヤ、自ラ二種ノ臨本有リ、一ハ庶物ニシテ一ハ極致ナリ、庶物ハ以テ其好美ノ情ヲ感發シ、極致ハ以テ其美麗ノ觀ヲ充補ス、是二ノ者相須ナテ用ヲ爲シテ、然ル後藝術ノ作始テ成ス可キナリ、蓋シ藝人ノ首ニ庶物ヲ見テ感發シテ作ニ臨ムヤ、庶物ノ狀

態全然其目ニ在リ、既ニシテ功ノ進ムニ隨ヒ、庶物ノ狀態ハ漸次ニ去リテ夫ノ極致ノ地ヲ爲ス、是ニ於テ極致ノ美觀代ハリテ藝人ノ良智ノ前ニ當リテ、之ヲシテ其作ヲ大成セシム、是レ藝人業ヲ爲スノ次序ナリ、是レニ由リテ之ヲ觀レハプラトンノ所謂物ノ極致ハ畢竟吾人ノ先世ノ事ヲ追憶スルニ由リテ、彷彿トシテ心ニ感ズル所ノ美麗ノ觀ト曰フニ過ギズ、夫レ吾人既ニ肉體ノ束縛スル所ト爲リテ、十分ニ夫ノ無形ノ理ヲ覺知スルヲ能ハズ、是ヲ以テ吾人ノ極致トスル所モ、真ノ純美ノ觀ニ比スルルハ、其相去ルヲ未タ其ノ幾何ナルヲ知ル可ラザルナリ、茲ニ云フ所ノ極致ハ即チプラトンノ美學ニ於テ根基トスル所ナリ、而シテ余ハ更ニ細ニ之ヲ論セント欲ス、何トナレハ則チ是極致タルヤプラトンノ著書ニ就テ講スルルハ、其義極テ明白ナリト雖モ、後世理學家自ラ號シテプラトンヲ祖述スルト稱スル者ノ書中ニ在リテハ、此義極



テ曖昧ニシテ依準ス可キ無キヲ以テナリ、余屢々尋思シテ以爲ラク夫  
 レ極致ノ語ハプラトン之ヲ創メテ之ヲ其書ニ載セテ、其義極テ明瞭ナ  
 リ、然ルニ後世理學家之ヲ論ズルニ及ビテハ、其義此ノ如ク其レ曖昧ナ  
 リ、此レ何ノ故ソヤト、己ニシテ大ニ悟ルコト有リ、夫レプラトン本ト人類  
 ナ以テ此世ニ下降セル者ト爲シテ、其追憶ノ說ヲ主張セリ、是ヲ以テ其  
 極致ノ語、意義此ノ如クノ明瞭ナルヲ致セリ、後世理學家プラトンノ追  
 憶ノ說ハ之ヲ取ラズシテ、亦別ニ之ニ易フル說無シ、而シテ極致ノ語ハ  
 因仍シテ之ヲ用フ、此レ其曖昧ヲ致セシ所以ナリ、夫レ所謂極致ハ必ス  
 追憶ノ說ヲ以テ基礎ト爲ス者ナリ、今其基礎ヲ失フテ依據スル所無ク、  
 猶ホ翩然トシテ空ニ懸レルカ如シ、其義ノ曖昧ナルヲ致セシコト亦宜ナ  
 ラス乎、

今人「イデアール」即チプラトンノ語ヲ解スル者ハ、皆此ヲ以テ美麗ノ總

稱ト爲ス、然ルニ今プラトンノ書ヲ閱スルヒハ、口ヲ極テ此語ヲ以テ美  
 麗ノ總稱ノ義ト爲スノ不可ヲ辨セリ、嗚呼世ノ理學家自ラ號シテプラ  
 トンヲ祖述スト爲シテ、而シテ其旨趣ニ反スルコト此ノ如シ

凡ソ物ノ總稱ハ畢竟眞ニ其物有ルニ非スシテ、唯人智ノ作用ニ賴リテ  
 之レカ名ヲ定ムルニ過キズ、之ヲ例ヘハ人ト言ヒ獸ト言フ、世實ニ所謂  
 人ナル者獸ナル者有ルニ非ス、苟モ人ナルヒハ必ス名有リ、苟モ獸ナル  
 ヒハ必ス猿猴狐狸若クハ何、若クハ何ト、一定ノ物ニ非サル莫シ、是故ニ  
 人ナリ獸ナリ、皆所謂總稱ナリ、而シテ此レハ人智ノ作用ニ賴リ、思考ヲ  
 勞シテ之レカ名ヲ定ムルニ過キスシテ、畢竟此物有ルニ非ス、

蓋シ人ノ庶物ヲ觀ルヤ、其極テ蕃庶ニシテ統紀ナキヲ憂ヒ、撿覈ノ勞ヲ  
 積ミ思考ノ功ヲ累テ、之ヲ久シテ庶物ノ中ニ於テ自ラ若干ノ種類有ル  
 ナヲ發見セリ、即チ草木禽獸土石ノ類是レナリ、夫レ草木ノ類極テ蕃ニシ

テ、其花葉枝幹ノ屬各々相異ナリト雖モ、然レモ苟モ草木ナルキハ自ラ相通スル所ノ性質有リ、禽獸土石皆然リ、是ニ於テ其性質ノ相通ズル者ヲ觀テ、因リテ之レカ總稱ヲ定メテ、曰ク草ナリ、曰ク木ナリ、曰ク禽ナリ、曰ク獸ナリ、曰ク土ナリ、曰ク石ナリト、然レモ細ニ之ヲ論スルキハ、世實ニ草木禽獸ナル者有ルニ非スシテ、特ニ人智ノ作用之レカ名ヲ命セシニ過ギズ、

是故ニ凡ソ總稱ハ其實物ヲ包含スルコト愈々多キキハ、其物ノ性質ヲ舉クルコト愈々疎ナリ、之ヲ譬ヘハ木ト言ヒ草ト言フ語ハ、桃若クハ菜ト言フ語ニ比スレバ、實物ヲ包含スルコト殊ニ多シ、故ニ一切ノ木一切ノ草ヲ舉ケテ、皆其中ニ入レテ別ニ木中ノ一類、草中ノ一類ヲ成ス所ノ性質ヲ舉クルコト莫シ、若夫レ桃菜ト言フ語ハ、之ヲ他ノ木他ノ草ニ用ヒント欲スルモ得可ラズ、何トナレバ桃ノ一類ト菜ノ一類ヲ定テ之ヲ稱スルカ

故ナリ、若又植物ト言フ語ヲ以テ草及ヒ木ト言フ語ニ比スルキハ、其包含更ニ大ナルヲ以テ、其性質ヲ舉クルコト更ニ疎ナリ、何ヲ以テ之ヲ言フ夫レ草ト言フ語ハ復々之ヲ木ニ用フ可ラズ、他無シ、特ニ草ノ性質ヲ舉クルカ故ナリ、木ト言フ語ハ復々之ヲ草ニ用フ可ラズ、他無シ、特ニ木ノ性質ヲ舉クルカ故ナリ、之ニ反シテ植物ト言フ語ハ、草木ニ通シテ之ヲ用ブルコトヲ得、何トナレバ、物ノ性質ヲ舉クルコト疎ニシテ、包含スル所廣キヲ以テナリ、

是ニ知ル凡ソ語言ハ其物ニ切當スルコト愈々甚キキハ、其物ノ性質ヲ舉クルコト愈々密ナルコトヲ、猿ト言フ語ハ復々之ヲ狐ニ用フ可ラズ、獸ト言フ語ハ復々之ヲ禽ニ用フ可ラズ、餘ハ以テ推ス可シ、是ニ知ル凡ソ總稱ハ其獸ノ中ニ就テ一切甲ト乙トノ異ヲ爲ス所ノ特別ノ性質ハ、皆之ヲ除去シ、特ニ其相通シテ有スル所ノ性質ノミヲ舉ケ

テ之ヲ指ス者ナルヲチ、故ニ物ノ性質ヲ除去スルヲ愈々多キキハ、物ヲ包含スルヲ愈々大ナリ、之ヲ例ヘハ狐ト狸トノ如キ、各々固有ノ性質有リテ以テ狐ヲ爲シ、以テ狸ヲ爲ス、故ニ此二語包含スル所未タ廣カラズ、是ニ於テ心智ノ作用ニ由リテ是ノ二ノ者ノ中ニ就テ其固有ノ性質ヲ除去シ、特ニ其相通シテ有スル所ノ質ヲ取ルキハ、以テ獸ト言フ語ヲ爲スヲ得テ、其包含スル所更ニ廣キヲ得可シ、凡ソ總稱ノ物タル皆是ノ如シ、是故ニ今人云フ所ノ美麗ノ總稱ノ如キモ亦然リ、若シ夫ノプラトソノ極致ヲ以テ衆美ノ會即チ美麗ノ總稱ト爲ルキハ、凡ソ天下ノ物ニ就テ一切其物固有ノ美ヲ爲ス所以ノ者ハ、逐次ニ之ヲ除去シ、然ル後庶物相通シテ有スル所ノ美麗ノ觀ヲ留メテ、方ニ始テ見ル可キナリ、然レモ吾レ未タ庶物相通シテ有スル所ノ美麗ノ觀ナル者ノ如何ヲ知ラザルナリ、空華無實ノ極ト謂フ可キナリ、

且ツ縱令ヒ所謂庶物相通シテ有スル所ノ美麗ノ觀ナル者、果シテ之レ有リト爲スモ、其美觀タルヤ終ニ各箇ノ物ノ美觀ニ及ブヲ能ハズ、何トナレバ彼レ既ニ固有ノ美觀ヲ除去シテ、獨リ其相通スル所ノ者ヲ留ムルニ過キザルヲ以テナリ、之ヲ例ヘバ花ノ如キ其種族是ノ如ク其レ蕃ニシテ、各々固有ノ形ト固有ノ色ト有リテ、以テ其美ヲ爲ス、然ルニ若シ其形ト其色トヲ去リテ特ニ相通スル所ノ形色ノミヲ存スルキハ、何ノ美カ之レ有ラン、

且ツヤ極致ノ語ヲ此ノ如ク解シ來ルキハ、畢竟純然理論上ノ物ニシテ、絶エテ實物ニ切當スルヲ莫シ、夫レ苟モ實物ニ切當セザルキハ、是レモ亦空幻ノ物ノミ、然ルヲ此ヲ以テ美麗ノ極ト爲シテ藝術ノ士ヲシテ模範ヲ是ニ取ラシメント欲スルハ、豈ニ繆戾誕謾ノ甚シキニ非ズ乎、夫レ藝術ナル者ハ其何ノ種類ヲ問ハズ、皆必ズ人ノ五官ニ呈シテ以テ

其美ヲ示サ、ル莫シ、詩歌音樂ハ人ノ耳ヲ怡バシムル者ナリ、建築彫刻  
 繪畫ハ人ノ目ヲ怡バシムル者ナリ、其他皆然ラザル莫シ、然リ而シテ人  
 ノ耳目ヲ怡バシメント欲スル者ハ、必ズ聲音形色ノ實ヲ求メザル可ラ  
 ズ、若シ藝術ノ士作ルコト有ラント欲シテ、夫ノ美麗ノ總稱ニ入ル可キ者  
 ナ模範トスルコトハ、如何シテ爲シ得可キヤ、既ニ一定ノ聲音形色有ルキ  
 ハ、復ク之ヲ他ノ聲音形色ニ推ス可ラズシテ、既己ニ物ノ一類ニ止マル  
 ナ免レズ、此ニ由リテ考フレバ、今人ノ云フ所ノ「イデアール」ハ之ヲ藝術  
 ニ實用セント欲スルモ、決シテ得可ラザルコト知ル可シ、是ニ知ル今人云  
 フ所ノ「イデアール」ハ空幻ニシテ實無キ者ナリ、又其意義初ヨリプラト  
 ンノ所謂極致ト少シモ相涉ルコト無キヲ、然リ而シテ猶ホプラトンヲ祖  
 述スルヲ以テ自ラ稱スルハ何ゾヤ、  
 プラトンノ所謂極致モ亦之ヲ庶物ノ中ニ求ム可ラズ、他無シ庶物ハ皆

長厚廣ノ三性有リテ、其限畫スル所ト爲リ、又時月ヲ經テ破壊ニ就クヲ  
 以テ終ニ完粹無缺ト爲ス可ラズ、  
 音ニ此ノミナラズ、プラトンノ所謂極致ハ亦純美ノ觀ト同シカラズ、純  
 美ノ觀ハ獨リ神ノ有スル所ナリ、蓋シ極致ハ神ノ造リシ所ノ庶物ノ精  
 華ト曰フニ過ギザルヲ以テ、其完粹ナルコト未ダ至レリト爲サズ、完粹ノ  
 至レル者ハ神ヲ去リテ復タ別ニ求ム可キ無シ、是ニ知ルプラトンノ所  
 謂極致ハ又純美ノ觀ト自ラ相異ナルコトヲ、  
 夫レ所謂純美ノ觀トハ至レリ盡セリ、限畫スル所無キ者ナリ、是ノ如キ  
 者ハ固ヨリ人智ノ得テ想像スル所ニ非ズ、且ツ之ヲ實物ノ上ニ著ハサ  
 ント欲スルモ得可ラズ、然ルヲ直チニ此ヲ摸擬シテ以テ藝術ノ美ヲ發  
 揮セント欲スルキハ、狂ニ非ザレハ妄ナリ、故ニプラトンノ意ニ於テハ、  
 寧ロ夫ノ極致ヲ摸擬スルノ切實ナルニ如カズト、蓋シ極致ハ物ノ精華

ニシテ其美ヲ夫ノ神ノ純美ノ觀ニ假ル者ニシテ、其完粹ナルヲ遠ク相及バズ、而シテ吾人ノ夫ノ極致ヲ感覺スルヲハ、畢竟先世ノ記憶ノ殘餘ニ過ギザルヲ以テ、其美觀又眞ノ極致ニ及バザルヲ遠キヲ甚シ、是ニ知ル、極致ナル者ハ其義極テ高シト雖モ、畢竟純美ノ觀ニ比スルキハ、其卑キヲ同日ノ論ニ非ザルヲナシ、

夫レ極致ハ純美ノ觀ニ比スルキハ相及ハスト雖モ、然レモ其源直チニ神ヨリ出ルヲ以テ其美ナルヲ猶ホ頗ル至レリ、且ツ又庶物ノ精華ナルヲ以テ既ニ長厚廣ノ三性ノ限畫スル所ト爲ラズシテ、歲月ノ久キ經ルモ毀壞ニ就クヲ無シ、是ニ知ル神ノ純美ノ觀ト庶物汚穢ノ觀トノ間ニ在リテ、極致ノ觀ハ正ニ其中央ノ位置ヲ占ムルヲナシ、

是故ニプラトンノ說ニ從ヘハ、藝術ノ士ノ作クルヲ有ルハ、庶物ニ因リテ感發シテ其僅ニ記憶スル所ノ極致ヲ摸寫スル者ナリ、而シテ此極致

ハ本ト源チ神ノ純美ノ觀ニ資ルヲ以テ、藝術ノ作ハ畢竟神ノ純美ノ觀ノ極細部ヲ寫スニ外ナラザルナリ、

然リト雖モ茲ニ一難事有リ、プラトンノ所謂極致ハ畢竟本質ヲ有スルヲ能ハズ、何トナレバ本質ナル者ハ二有ルノミ、曰ク有限ノ本質ナリ、曰ク無限ノ本質ナリ、然ルニ若シ極致ニシテ無限ノ本質有リト爲スキハ、是レ神ト同一體ヲ爲ス者ニシテ、夫ノ純美ノ觀ト區別ス可キ無シ、若シ極致ニシテ有限ノ本質有リト爲スキハ、是レ庶物ト異ナルヲ無クシテ、亦長厚廣三性ノ限畫スル所ト爲リテ、歲月ノ久キキ經テ毀壞ニ就カサルヲ得ス、故ニ曰クプラトンノ所謂極致ハ畢竟本質ヲ有スルヲ能ハズト、

夫レ物トシテ本質無キキハ、畢竟空理ノミ、既ニ空理ナルキハ之ヲ藝術ニ著ハサント欲スルモ得可ラズ、是ニ知ル藝術ノ士ノ著ハス所ノ極致

ハ、纒ニ眞ノ極致ノ影象タルニ過ギズ、藝術ノ士ノ最モ高絶ト稱スル者ハ、畢竟纒ニ極致ノ影象ヲ摸寫スルニ過ギザルコトナリ、又一事ノ言フ可キ有リ、夫ノ極致ハ物ノ精華ニシテ、別ニ一種ノ境界ヲ爲スト雖モ、實ハ庶物ノ總稱ト其數ヲ同クシテ、少シモ出入有ルコト無シ、蓋シ庶物ノ中ニ在リテハ、机、獅、木等ノ物有リテ各々其定形有リ、極致ノ境界中ニモ亦机、獅、木等ノ精華有リテ正ニ庶物ノ總稱ト相當ル、是ニ知ル藝術ノ士ナル者ハ其眼前ニ於テ三個ノ臨本有リ、即チ一ハ物ノ精華ニシテ、一ハ物ノ總稱ナリ、又一ハ庶物ナリ、此三個ノ臨本ニ資リテ作ル所有リテ、而シテ遙ニ夫ノ純美ノ觀ノ極細部ヲ發揮ス、顧フニプラトノ旨意タル實ニ高遠浮華ノ至ニ非ズ平、

以上論ズル所ニ由リテ之ヲ觀レハ、プラトノ美學タル知ル可キノミ、人ノ未ダ斯世ニ生レサルヤ、天堂ニ居テ親ク神ノ純美ノ觀ニ接スルコト

ヲ得テ、又庶物ノ精華ノ間ニ逍遙シテ諸ノ美觀ニ富メリ、降リテ斯世ニ生ル、ニ及ヒテハ、見ル所皆腥穢汚濁ノ迹ニ非ザル莫シ、然レモ現世ノ庶物モ亦神明ノ造ル所ナルヲ以テ、其間自ラ幾分ノ美觀有リテ、乃チ夫ノ精華ノ影象ノ一部ヲ發揚スル者ナリ、是ニ於テ藝術ノ士庶物ヲ觀テ、其美處ヲ喜ヒ、此ニ因リテ其前生嘗テ天堂ニ居リシ時ノ美觀ヲ追憶シ、其良智ノ作用ニ藉リテ夫ノ極致即チ物ノ精華ヲ講求シテ、務テ之ヲ其作中ニ著ハスコトヲ求ム、此レ藝術ノ美ノ大ニ實物ノ美ニ踰ユル所以ナリ、然リト雖モ藝術人ノ其見ル所ノ庶物ニ因リテ、夫ノ物ノ精華ヲ追憶スルコトハ、吾人今日通常事物ヲ追憶スルノ明ナルカ如クナラスシテ、僅ニ彷彿ノ間ニ在ルノミ、故ニ現ニ物ノ精華ヲ追憶スト雖モ、實ハ自ラ知ラサルナリ、此レ猶ホ人ノ夢中ニ在リテ知ラズ識ラズ、覺時ノ事ヲ追思スルカ如キナリ、

是ニ由リテ之ヲ觀レハ、藝術ノ士ノ由リテ以テ作クルコト有ル所ノ者ハ、其良智ノ作用ニ外ナラス、然レモ良智ナル者ハ其職タル本ト纔ニ藝術ノ美ヲ求ムルカ爲ニ設クル者ニ非ズ、何ノ謂ソヤ、曰ク良智ナル者ハ主宰ヨリ吾人ニ附與シテ以テ吾人ヲシテ直チニ物ノ眞理ニ透徹セシムルガ爲メナリ、豈區々ノ藝術ノ爲メニシテ吾人ニ附與スル所ニ非ズ、且ツヤ良智ノ汲々トシテ求ムル所ハ夫ノ神ノ純美ノ觀ノ一部ヲ感受スルニ在リテ、遠ク藝術ノ求ムル所ノ極致ノ上ニ在リ、故ニ曰ク吾人ノ良智ハ特ニ藝術ノ美ヲ求ムルガ爲メニ設クル者ニ非ズト、然リト雖モ吾人良智ノ夫ノ神ノ純美ノ觀ヲ求ムルヤ、其升騰シテ進ムノ間必ズ先ヅ夫ノ極致ノ境界ヲ經過セザルヲ得ズ、何トナレバ神ノ純美ノ觀ハ其在ル所最モ高キヲ以テ、吾人ノ良智ノ之ニ達スルノ前、其勢極致ノ境界ヲ以テ中間ノ處ト爲サバ、ルヲ得ザレバナリ、是ニ知ル藝術

ノ士ノ作ル有ルヤ、其始メ先ヅ現世庶物ノ觀ニ由リテ興起スル所有リ、是ニ於テ其良智進ミテ形而上ニ溯リ、愈々進ミテ已マズ、以テ直チニ神ノ純美ノ觀ニ透徹セント欲シテ、其進行ノ際極致ノ境界ヲ經過シ、斯ニ始テ夫ノ物ノ精華ノ影象ヲ感受シ、因リテ其彷彿ヲ得テ之ヲ條線采色聲調ノ間ニ著ハシテ、方ニ始テ其作ヲ成スコトヲ得、

此ノ如ク論シ來ルキハ、プラトンノ美學ニ在リテハ、良智ノ功極テ大ナリトス、蓋シ良智ノ物タル人心ノ諸作用中、尤モ高尙ナル者ニシテ、吾人ノ物ノ完粹無缺ヲ愛好スルコトハ、獨リ此良智ノ力ニ由リテ然リ、設シ吾人ヲシテ此良智無ラシメバ、初ヨリ物ノ完粹無缺ナルコトヲ愛スルヲ知ラズ、果シテ然ルキハ美物ヲ見ルモ以テ快ト爲スコト無ク、醜物ヲ見ルモ以テ不快ト爲スコト無クシテ、藝術由リテ以テ生ズルコト無キナリ、今幸ニ然ラズシテ、吾人皆此良智ヲ有ス、是ニ於テ乎夫ノ完粹無缺ノ觀ヲ愛戀スル

コヲ知リテ、之ヲ求メテ已マズ此レ正ニ藝術ノ由リテ生ズル所以ナリ、吾人唯良智有リテ夫ノ完粹無缺ノ觀ヲ愛戀ス、是ヲ以テ詩ナリ音樂ナリ、彫刻ナリ繪畫ナリ、苟モ物ノ美ヲ發揮セルヲ見ルキハ、其胸中想像スル所ノ完粹ノ觀ヲ以テ尺度ト爲シテ、之ヲ權カリ、其孰レカ最モ之ニ近キヤ孰レカ最モ之ニ遠キヤヲ察シテ、然ル後之カ高下ヲ定ム、而シテ作者モ亦其胸中想像スル所ノ完粹ノ觀ヲ以テ目的ト爲シテ、務メテ其作ヲシテ之ニ近似セシムルコヲ求ム、故ニ曰クプラトンノ美學ニ在リテハ良智ノ力ノ効極テ大ナリト、

夫レ完粹純美ノ觀唯神之レ有リ、而シテ吾人胸中此觀ヲ想像スルコト此ノ如シ、是レ以テ實ニ神ナル者ノ存スル有ルヲ證スルニ足ル、夫レ神ノ完粹純美ノ觀ハ迥カニ人間ノ上ニ存スルヲ以テ、人ノ智力能ク之ヲ覺知ス可キニ非ズ、故ニ藝術ハ直チニ此觀ヲ發揮スルコトヲ以テ旨趣ト爲

スヲ得ザルコトハ固ヨリナリ、然レモ藝術ハ夫ノ極致即チ物ノ精華ヲ摸擬スルコトヲ求ムル者ニシテ、而シテ此精華ハ神ノ純美ノ觀ヲ假リテ以テ其美ヲ爲スカ故ニ、作者ノ其藝術ノ美ヲ發揮シ、賞鑒家ノ此美ヲ品藻スルコトハ到底神ノ純美ノ觀ヲ想像スルヨリシテ起ルト謂ハザル可ラズ、他無シ、形而下ノ美ヲ發揮シ及ビ之ヲ品藻スルコトハ、必ズ典型ヲ形而上ニ取ラザル可ラザレバナリ、

夫レプラトンノ美學タル人ノ良智ヲ重スルコト此ノ如シ、苟モ人ノ良智ヲ貴尙スルキハ、人ノ感情ヲ貴尙セザルコト明ナリ、何トナレバ感情ノ物タル、天下ノ最モ定態無キ者ニシテ、突如トシテ來リ忽焉トシテ去リ初ヨリ良智ノ次序ヲ逐ヒ、階級ヲ經テ進ミテ退カザルカ如クナルコト能ハズ、故ニ若シ此ヲ以テ夫ノ物ノ精華若クハ神ノ純美ノ觀ヲ求メント欲スルモ得可ラズ、而シテプラトンノ意ニ從ヘハ、是ノ二ノ者ヲ求ムルニ



非ザレバ藝術ノ美ハ終ニ得可ラズ、故ニプラトノノ美學ニ在リテハ、唯  
 良智ノミチ貴ト爲シテ感情ハ初ヨリ恃ムニ足ラザル者ナリ、  
 且夫レ吾人ノ感受ノ性タル、獨リ庶物ノ間ニ於テ行ハル、者ニシテ、無  
 形ノ物ハ其及バザル所ナリ、之ヲ例ヘバ采色ヲ見、聲音ヲ聞クガ如キハ  
 皆庶物中ノ事ナリ、故ニ作者若シ感情ヲ本ト爲シテ作ルコト有ルキハ、其  
 材料ハ專ラ之ヲ實物ニ取リテ、夫ノ物ノ精華神ノ純美ノ觀等ノ如キハ、  
 絶エテ其間ニ雜ハルコト得ズ、故ニプラトノノ如キ作者ヲ評  
 セシムルキハ、必ズ曰ハソ鄙陋ニシテ觀ルニ足ラズト、  
 更ニ言ラ可キ有リ、夫レプラトノノ所謂極致ハ物ノ精華ナルヲ以テ、人  
 々ニ在リテ言フキハ、或ハ之ヲ記憶シテ大ニ眞ニ近ツク者有リ、或ハ之  
 ヲ記憶シテ未タ甚タ眞ニ近クコト能ハザル者有ルニ論無シト雖モ、其極  
 致ノ極致タル所以ハ、初ヨリ増減有ルコト無シ、何トナレバ彼レ本ト無形

ノ理ニシテ、既ニ長廣厚ノ三性ノ限畫スル所ト爲ラズ、又歲月ノ久キヲ  
 經ルモ毀壞ニ就クコト無キヲ以テナリ、夫レ物ノ極致ハ常ニ純一ニシテ  
 變化無キ者ト謂ハザル可ラズ、果シテ此ノ如クナルキハ藝術ノ士漸次  
 ニ其旨趣トスル所ノ極致ヲ發揮シテ、能ク之ニ近似スルキハ、後來ノ者  
 更ニ新途ヲ開カント欲スルモ得可ラズ、他無シ其目的トスル所ハ物ノ  
 精華ニ在リ、而シテ此精華ハ萬古ヲ互リテ純一ニシテ變易無キヲ以テ  
 ナリ、

是ニ由リテ考フレバ、藝術ノ士ノ夫ノ極致ヲ以テ目的ト爲ル者ハ、一タ  
 ビ規轍ノ定マル有ルニ及ビテハ、復タ變改スルヲ得ズ、必ズ守リテ失ハ  
 ザルヲ要スル者ナリ、夫レ此ノ如クナルキハ、後來ノ者摸擬剽竊ノ外別  
 ニ道無キコト明ナルニ非ズ乎、

然リト雖モ希臘人ハ古昔ノ民ノ中ニ就テ心神ノ自由ヲ尊フコト最モ至

レル者ナリ、而シテ其所謂極致ノ説ハ極テ高遠ニシテ尋常人ノ能ク及  
 フ所ニ非ズ、是ヲ以テ藝術家ノ其作ニ於ケル、頗フル己レノ所見ニ隨フ  
 テ發揮スル所有リテ、必スシモ前人ノ舊轍ニ規々タラサリキ、但プラト  
 ン|美學ノ理ニ由リテ言フキハ、終ニ作者ノ自由ヲ損害スルニ至ルコトハ  
 畢竟免レザル所ナリ、

然<sub>リ</sub>ト雖<sub>ヒ</sub>プラト<sub>ン</sub>ノ美學ニ於テハ、果シテ獨リ良智ノ作用ニ由リテ  
 夫ノ極致ヲ摸寫シテ足ル乎、曰ク然ラザルナリ、良智ノ力ハ誠ニ庶物ノ  
 美ヨリ溯リテ極致ニ至リ、更ニ進ミテ神ノ純美ノ觀ヲ想像スルニ至レ  
 リ、然レ<sub>ニ</sub>藝術家ニ在リテハ、獨リ良智有ルノミニテハ足ラズ、必ス一種  
 物ノ美ヲ愛好スルノ性尋常人ニ超過スル有ルニ非サレハ不可ナリ、蓋  
 シ庶物ノ質タル無常ニシテ悠久ナルコト能ハズ、而シテ藝術家ノ之ヲ摸  
 寫シテ作クルコト有ルハ、畢竟庶物ヲシテ其有セザル所ノ悠久ノ質ヲ得

セシムルガ爲メナリ、故ニ藝術タル者ハ必ス一種ノ天性有リテ、深ク美  
 觀ヲ愛好シテ自ラ禁スルコト能ハサルニ非サレハ、良智ノ作用如何ニ富  
 メルモ終ニ一名作ヲ拈出ス可ラズ、

以上論次スル所ハ即チプラト<sub>ン</sub>ノ美學ノ説ニシテ、今チ距ルコト二千年  
 餘ニ在リテ、大ニ希臘ニ行ハレ、方今ニ在リテモ猶ホ頗其勢力ヲ保チテ失  
 ハズ、即チ我カ博士院ノ教則ノ如キハ、往々旨意ヲ此ニ取レリ、是ヲ以テ  
 藝術家及ヒ賞鑒家ノ用フル所ノ言語ノ如キモ、プラト<sub>ン</sub>ノ創ムル所ノ  
 者極テ夥シ、故ニ今日ニ在リテ博士院ノ説ノ繆戾ノ處ヲ擿發シ、及ビ其  
 缺陷ノ處ヲ指斥セント欲スルキハ、プラト<sub>ン</sub>ノ説ニ於テ痛ク檢察ヲ加  
 フルニ非ザレハ不可ナリ、此レ余ノプラト<sub>ン</sub>ノ説ヲ究ムルニ於テ、此ノ  
 如ク反覆詳悉スル所以ナリ、  
 余ヲ以テプラト<sub>ン</sub>ノ美學ヲ觀ルニ、其病根ハ先ツ夫ノ追憶ノ説ニ在リ、

夫レプラト<sup>ン</sup>ノ此說ヲ立ツルヤ、人ヲ以テ本ト天堂ニ在リテ庶物ノ極致間ニ逍遙セント爲ス、此レ豈ニ妄想態度ノ甚シキ者ニ非ズ乎、夫レ人ノ萬事ニ係リテ完全ナルヲ求メテ已マザルコトハ、人ノ至情ナリ、プラト<sup>ン</sup>其此ノ如キヲ見テ其解ヲ得ズ、是ニ於テ其追憶ノ說ヲ創メテ、以爲ラク人本ト天堂ニ在リテ純美ノ觀ニ飽ケリ、故ニ斯世ニ在リテモ美麗ノ觀ヲ愛好スル者ハ、彷彿トシテ前世ノ事ヲ顧戀スルニ起ルト、顧フニ此說タル果シテ何ノ據ル所有ル哉、

夫レプラト<sup>ン</sup>三個ノ臆說ヲ倣シテ以テ其理學ノ根基ト爲シ、其第一說ニ於テハ庶物ノ外別ニ無形精華ノ境界有ルヲ論シ、第二說ニ於テハ人ノ良智ヲ以テ明鏡ニ比シ、寂然不動ニシテ專ラ夫ノ精華ヲ覺知スルヲ論ゼリ、此二說ノ如キ固ヨリ皆臆造タルニ過ギズ、既ニ此二說ヲ創成シテ後、猶ホ一說ヲ添補スルニ非ザレバ未タ己レノ意思ヲ全クス可ラザ

ルヲ悟リ、是ニ於テ乎追憶ノ說ヲ創メテ、即チ造化主宰ヲ以テ萬物ノ主ト爲シ、次ニ夫ノ物ノ精華ナル者ヲ以テ其侍從ト爲シテ、前世ノ人ヲ以テ其中ニ置テ亦神ノ侍從ト爲スニ至レリ、

夫レ理學苟モ一說ヲ創ムルハ、必ズ之レカ證據ヲ舉ケテ以テ其實迹ニ背カザルヲ示メサ、ル可ラズ、然リ而シテプラト<sup>ン</sup>シハ曾テ以テ之ヲ證スル有ラズ、是ヲ以テ吾儕若シ學術ノ道理ニ據リテ之ヲ考フルハ、直チニ其繆妄ナルヲ知ル可クシテ、初ヨリ深ク議論ヲ費ヤスヲ須非ザルナリ、獨奈何セン夫ノ博士家ノ輩自ラ學術ヲ以テ誇尙シ、而シテ世人モ亦之ヲ稱シテ閱覽博物ノ君子ト爲ス、然リ而シテ博士家ノ輩淵源ヲプラト<sup>ン</sup>ニ資リテ以テ其浮華ノ說ヲ鼓倡シテ已マズ、故ニ余ハ已ムコトヲ得ズシテ、深クプラト<sup>ン</sup>ノ說ヲ論駁シテ以テ其非ヲ暴白セント欲ス、

夫レプラトソノ美學タル三個ノ説ヲ以テ基ト爲シ、而シテ其説ノ皆妄造臆構ニシテ信ヲ置クニ足ラザルヲ前ニ論ズル所ノ如シ、且プラトソノ意ニ以爲ラク苟モ藝人其胸中ニ於テ神明ノ此世ニ存スルヲ信シテ、心ニ其純美ノ觀ヲ想像スル有ルニ非ザレバ、縱令ヒ如何ノ才性有ルモ、初ヨリ名作ヲ打出スルヲ能ハズ、何トナレバ藝人ノ其法則ヲ取ル所ハ、夫ノ極致ニ在リ、而シテ所謂極致ハ其美ヲ神ノ純美ノ觀ニ假レルヲ以テ、藝人苟モ此觀ヲ想像スルヲ知ラザルキハ、猶ホ物ノ長短ヲ度ラント欲シテ、手ニ繩尺ヲ取ラザルカ如キナリ、

是故ニプラトソノ意ニ從ヘハ、人類ハ一切ノ美觀ヲ了解シ、且ツ美物ヲ造クルニ於テ、絶エテ源ヲ己レノ胸中ニ取ルヲ能ハズシテ、必ズ法ヲ神ニ取ラザルヲ得ズ、願フニ是説ヤ獨リプラトソノ之ヲ執リシニ非ラズシテ、古昔理學家ハ皆幾分之ヲ信セザル無シ、即チ我博士家ノ徒ノ如キモ

其根據トスル所ハ、正サニ是ニ在リテ以爲ラク、人智ハ明鏡ノ臺ニ懸レルカ如クニシテ、唯來リ映スル物ノ影象ヲ感受シテ、之ヲ心ニ致スノミニシテ、絶エテ自ラ影象ヲ發スルヲ無シト、此ニ由リテ之ヲ考フレバ、凡ソ吾人ノ心中ニ想像スル所ノ事物ハ、其果シテ形體有ルト否ラザルトヲ問ハズ、皆必ズ現ニ心外ニ存在スル者ナリ、

何トナレバ若シ是物ノ心外ニ存在スルニ非ザレバ、初ヨリ影象ヲ吾カ智ニ印セザルヲ以テ、我力ニ於テ之ヲ想像セント欲スルモ得可ラザルノ理ナレバナリ、

夫ノ純美ノ觀ノ如キモ亦然リ、プラトソノ及ヒ其徒タル者ハ、皆其心ニ於テ髣髴トシテ此純美ノ觀ヲ想像スルヲ以テ、此純美ノ觀ノ現ニ心外ニ存在スルヲ疑無シ、何トナレバ若シ此觀果シテ存在セザルキハ、此輩モ亦之ヲ想像スルニ由無ケレバナリ、然リ而シテ純美ノ觀ハ此世ノ物ニ

非ズシテ、獨天堂ニ在リ、而シテ必ズ神ト一體ヲ爲ス、是ニ知ル神ナル者ハ天堂ニ現存シテ毫モ疑ヲ容レズ、  
 是故ニプラトンノ意ニ在リテハ凡ソ藝術ハ何ノ類ヲ問ハス、其實ハ皆神明ヲ以テ本原ト爲ス者ニシテ、若シ神明無キキハ初ヨリ生出スルニ由無キナリ、

然ルニプラトンノ意ニ從ヘハ、凡ソ物ノ完粹ナル者ハ皆形質無キ者ナリ、苟モ形質有ルキハ長厚廣ノ三性ノ限ル所ト爲リ、歲月ノ毀壞スル所ト爲ルヲ以テ、終ニ完粹ト爲ス可ラズ、故ニ藝術ノ士ハ必ズ法ヲ夫ノ極致ニ取ラサル可ラズ、然レヒ予ヲ以テ之ヲ觀ルニ、所謂極致ハ無形ノ理ナルヲ以テ、既ニ條線ノ見ル可キ無ク、又聲音ノ聞ク可キ無シ、然ルヲ藝術ノ士從テ法ヲ取リテ以テ其條線ヲ發シ、其聲音テ出スト曰フハ豈ニ繆迷ノ甚シキニ非ス乎、

夫レ詩及ビ音樂ニ在リテハ、猶ホ云爾可ナリ、若夫レ彫刻ト繪畫トニ至リテハ、專ラ形貌ヲ以テ美觀ト爲ス者ナリ、然リ而シテ法ヲ無形ノ精華ニ取リテ之ヲ出サント欲ス、夫レ精華ハ猶ホ云爾可ナリ、若夫レ神ニ至リテハ高大無邊悠久不測ナル者ナリ、然リ而シテ法ヲ神ニ取リテ彫刻及ヒ繪畫ヲ爲サント欲ス、是レ豈ニ理ナラン哉、

然リト雖ヒ、理學ナル者ハ專ラ空理ヲ談シテ事ノ實迹ヲ問フコト無シ、故ニ事實ニ於テ大障礙有ルモ、彼輩曾テ以テ憂ト爲サス、益々浮華空幻ノ說ヲ構架シテ以テ其矯僞ノ論ヲ完成シテ、自ラ以テ得タリト爲ス、且ツヤ彼輩專ラ言語文字ヲ以テ說ヲ爲シテ、初ヨリ其言語文字ノ事實ニ適スルト否ラザルトヲ問ハズ、是ニ於テ乎喋々トシテ云フ、藝術ハ美ヲ以テ旨ト爲ス者ナリ、又云フ藝術ノ旨トスル所ハ完粹ノ美ニ在リ、而シテ完粹ノ美ハ獨リ神明之レ有リ、故ニ藝術ノ神ヲ以テ原本ト爲スト、又云

フ人ノ智見本ト自ラ意思ヲ發スルコト能ハズ、故ニ人ノ苟モ思フ所ハ皆必ズ外ニ其實有ラサルル莫シ、今吾人心中完粹ノ美ヲ想思ス、然レハ則チ神明ノ現存スルコト明ナリト、凡ソ此等ノ論ハ皆唯言語ヲ弄シ文字ヲ玩ヒテ以テ之ヲ構築スルニ過ギス、

夫レ神明ノ事ハ測茫荒惑實ニ準ス可キ無キ者ナリ、即チ夫ノ極致ノ説ニ至リテモ其妄ナルコト此レト相下ラズ、顧フニ極致ナル者ハ物ノ精華ニシテ實質無キヲ以テ、隨テ一定ノ形貌有ルコト無シ、夫レ一定ノ形貌無キ者ニシテ何ヲ以テ之ヲ形貌中ニ著ハスコトヲ得ンヤ、プラトソノ專ラ空理ヲ談スルコト乃チ是ニ至ル乎、

吾人胸中種々ノ意思有リテ發出ス、之ヲ例ヘハ乍ニシテ牀子ヲ思フキハ、胸中自ラ牀子ノ意思ヲ發シ、乍ニシテ椅子ヲ思フキハ、胸中自ラ椅子ノ意思ヲ發ス、而シテ牀子ノ意思ト椅子ノ意思ハ判然區別有リテ、決シ

テ相混スルコト無シ、然ル所以ノ者ハ他無シ、吾カ心外ニ於テ現ニ牀子ナル者有リ、椅子ナル者有リテ、而シテ此二ノ者各々固有ノ條線ヲ具シテ以テ一定ノ形貌ヲ成シ、又或ハ采色ノ施ス有リテ以テ一定ノ光明ヲ成ス、是ヲ以テ吾人胸中之ヲ想像シテ其形態采色ヲ發スルコトヲ得ルナリ、蓋シ采色ト形態トハ、或ハ目ニ由リテ之ヲ感シ、或ハ手ヲ以テ觸レテ之ヲ感シテ方ニ其現ニ存在スルコトヲ知ル、今プラトソノ所謂物ノ精華ハ既ニ形無ク又色無シ、吾人胸中何ニ由リテ之ヲ感覺スルコトヲ得ン哉、夫レ極致ノ語ハ今日ニ在リテ其意義極テ曖昧ニシテ窮結ス可ラズ、人々相共ニ此語ヲ用ヒテ以テ藝術ヲ談ズルモ、實ハ自ラ其何ノ義ヲ察スルコト無シ、顧フニ此語ハプラトソノ之ヲ創メシ所ニシテ、プラトソノ書ニ於テハ意義頗ル明瞭ニシテ、即チ余カ前ニ叙述セシ所ノ如シ、嗚呼意義ハ明瞭ナリ、然レモ實物ノ之レニ應スル無キヲ奈何セン、

プラトンの美學ハ唯此極致ナル者ヲ基ト爲シテ纔ニ自ラ樹立スルヲ  
 得、若シ此極致ニシテ破敗セラル、キハ、プラトンノ美學ハ自ラ崩壞  
 シテ一時ニ墜ツルヲ免レズ、プラトン蓋シ是ニ慮ル有リ、故ニ其書  
 中口ヲ極テ此極致ナル者ノ現ニ存在スル有ルヲ論ゼリ、嗚呼プラト  
 ンノ此極致ノ説ヲ立ツルヤ、初ヨリ徵ヲ實事ニ求ムルニ非スシテ、其論  
 ノ根據ヲ得タルカ爲メナリ、是故ニ若シ當時プラトンヲシテ他ノ一説  
 ノ更ニ其根據ヲ得ルニ便ナル者ヲ想像セシメハ、其極致ノ説ヲ棄テ、  
 更ニ他ノ一説ニ取リシヲ疑無シ、若シ其時ニ於テプラトンは先テ極  
 致ノ説ヲ爲ス者有ラシメハ、プラトンは必ス口ヲ極テ之ヲ排撃シテ以  
 テ自家ノ説ヲ鼓倡セシヲ想フ可シ、彼レ別ニ一説ヲ立ツルヲ能ハズシ  
 テ、獨其極致ノ説ヲ以テ根據ト爲ス、是ヲ以テ之ヲ珍重スルヲ極テ至レ  
 リ、他無シ若シ一朝此説崩ル、キハ、其美學ハ復タ支フ可ラザルヲ以テ

ナリ、

夫レ然リ、故ニプラトンノ書中此極致ノ事ヲ論シテ、其現在スルヲ示  
 ス、一處ニシテ足ラス、乃チ云フ吾ノ所謂極致ナル者ハ、天地ヲ窮メテ  
 墜ツルヲ無ク、萬世ニ互リテ壞ル、ヲ無シト、又云フ此極致ハ人智ノ高  
 下ニ隨テ之ヲ解スルヲ、或ハ至ル有リ、或ハ至ラサル有リ、或ハ同キ有リ、  
 或ハ異ナル有リ、然レモ此極致ニ至リテハ初ヨリ増損有ルヲ無シト、  
 嗚呼人ノ此極致ヲ解シテ果シテ異同アル此ノ如クナラシメバ、予ハ則  
 チプラトンを向テ一問ヲ呈シテ曰ハント欲ス、若シ先生ノ所謂極致ノ  
 認視シ難キヲ此ノ如クナルキハ、先生ハ何ニ由リテ獨リ之ヲ認視スル  
 ヲ得タル乎、先生ノ此極致ヲ論スルヲ細微遺スヲ無キヤ、何ニ由リテ  
 之ヲ知ル、此ノ如クノ細微ナルヲ得タル乎、此極致ナル者ハ何故ニ先  
 生ノ眼ニ於テハ此ノ如ク明瞭且ツ完全ニシテ、餘人ニ在リテハ何故ニ

此ノ如ク曖昧ニシテ且ツ欠缺有ル乎、先生ハ天ニ何ノ幸有リテ餘人ノ見及フヲ能ハザル所ノ天堂ノ觀ニ於テ、獨進入シテ之ヲ明ニスルヲ得タル乎ト、知ラズプラトンハ何ヲ以テ余ニ答ヘントスル乎、  
 願フニプラトンハ嘗テ先天ノ說ヲ立テ、以爲ラク、人ノ智愚賢不肖本ヨリ天命ノ定ムル所ナリ、故ニ生レナカラニ智且ツ賢ニシテ、人ノ師表ト爲ル可キ者有リ、生レナカラニ愚且ツ不肖ニシテ人ニ役セラレ人ニ教ヘラル、者有リト、由リテ政治ノ事ニ係リテモ此說ニ據リテ論ヲ立テ、以テ上下尊卑ノ別ヲ基ト爲セリ、故ニ若シ余ガ前ノ問ヲ以テ之ヲ詰ルキ、必ズ曰ハン、吾レ固ヨリ天ノ命シテ人ニ師表ヲラシムル所ナリ、公等吾說ニ於テ疑フ所有ル容ラスト、然レモ予ヲ以テ之ヲ觀ルニ、プラトンノ說ヲ立ツルコト一ニ之ヲ胸臆ニ取リテ、絶エテ實際ニ咨詢スルコト無シ、若シ理學家ノ說ヲ立ツルコト果シテ此ノ如クニシテ足ルキハ、餘人モ

亦別ニ一臆說ヲ立テ、以テプラトンニ反對スルニ於テ何ノ難キコト之レ有ラン、

凡ソ新ニ一說ヲ立ツルノ難キハ、其說ノ實事ニ合シテ證據ヲ得ルニ在リ、若シ唯臆想ヲ以テ足ルキハ、古來世ヲ惑ハシ俗ヲ眩ハシ、人民ヲ聾聵トスル所ノ豫言者ノ類ハ皆是ニ外ナラズシテプラトンモ亦流ヲ同シウス、吾儕其レ何ノ辭ヲ以テ其非ヲ辨センヤ、之ヲ要スルニプラトンノ極致ノ說ハ其創意ニ出ルニ非ズシテ、凡ソ古昔諸國ノ民ノ開闢元始ノ事ヲ想像シテ立ル所ノ說ヲ剽襲シテ、之ニ加フルニ己レノ想像ヲ以テシテ、以テ之ヲ完成セシニ過ギザルナリ、

蓋シ嘗テ之ヲ論ズ、人ノ智タル實ニ不測ノ作用ヲ有スル者ニシテ、或ハ實物ニ就テ特ニ其意思ヲ取リテ之ヲ講求シ、又或ハ此意思ニ就テ更ニ想像ヲ加ヘ、之ニ附スルニ完粹無缺ノ性ヲ以テシテ、其高遠ナルコトハ迥



カニ實物ノ上ニ在ラシム、此レ皆人智ノ作用ノ測ラレザル者ナリ、今其例ヲ舉ケンニ爰ニ美婦人有リテ其容貌綽約トシテ人ヲシテ一見消魂セシム、然レ此レ猶ホ實物ナルヲ以テ、細ニ之ヲ檢察スルキハ、幾分缺失ノ處無キヲ能ハズ、是ニ於テ其容貌中ノ綽約美麗ノ狀ニ就テ其意思ヲ取り、次ニ其意思ニ就テ凡ソ吾人ノ美麗ト爲ス所ノ相貌ハ皆之ヲ加ヘ、凡ソ吾人ノ醜穢ト爲ス所ノ部分ハ皆之ヲ除キ、以テ一個完粹無缺ノ相貌ヲ想像シテ、以テ之ヲ骨中ニ置ク、是ニ於テ平、向キノ皮肉血液ハ一洗シテ純然無形ノ一物ヲ成シテ、其端麗ナルヲ世間在ル所ノ實物ニ比スルキハ、相勝サルヲ幾何ナルヲ知ル可ラズ、

夫レ人智ノ作用ノ測ラレザルヲ此ノ如シ、顧フニプラトンハ人智ヲ寂然不動ニシテ、唯外來ノ物ニ感受スルニ過ギズト爲スヲ以テ、苟モ吾人其智ノ作用ニ由リテ一意思ヲ構成スルキハ、プラトンハ輒テ云フ此レ

決シテ吾人ノ自ラ之ヲ構成セシニ非ズシテ、必ズ外ヨリ來映セルナリト、是ニ於テ其天堂ノ說ヲ設爲シテ以爲ラク、凡ソ人智ノ想像スル所ノ意思ハ皆天堂中ノ無形ノ物ノ來映セルナリト、是ニ於テ現世實物ノ外ニ於テ更ニ所謂物ノ精華ノ境界ナル者有ルヲ信ズルヲ致セリ、

此ニ由リテ之ヲ觀レバ、プラトン云フ所ノ極致ノ境界ハ、獨吾人ノ實物外ニ於テ想像スル所有ルヲ以テ根據ト爲スニ過ギズシテ、決シテ他ニ證憑有ルニ非ズ、故ニプラトンノ論弊ハ人智ヲ以テ寂然不動ノ物ト爲スト其神明ナル者ノ現存スル有ルヲ信ズルトニ在リ、既ニ人智ヲ以テ不動ノ物ト爲スルキハ、凡ソ人智ノ想像スル所ノ者ハ皆實ニ是物有リト爲サマルヲ得ズ、既ニ是物有リト爲シテ、而シテ現世中絶エテ之ヲ見ザルキハ、終ニ別ニ一境界有リト爲サマルヲ得ズ、別ニ一境有リト爲スルハ、其中在ル所ノ物ハ皆無形ノ理ト爲サマルヲ得ズ、何トナレバ其所謂

別境ノ物ノ斯世ノ物ニ異ナル所以ノ者ハ、唯其長厚廣ノ限盡ト歲月ノ  
 侵襲トチ受ケザルニ在リテ、而シテ此二者ノ侵襲チ免ル、コトハ無形ノ  
 理ニ非ザル可ラザレバナリ、  
 是故ニプラトンノ論ニ就テ假リニ其人智チ以テ不動ト爲スト、其神明  
 ナル者ノ現存スルチ信ズルトノ二點チ存スルコトチ許スルハ、其餘ノ説  
 ハ皆能ク之レト連屬シテ前後極テ整齊ニシテ、其極致ノ境界ノ説ノ如  
 キハ、乃チ尤モ其發明ノ巧ナル者ト謂ハザル可ラズ、獨奈何セン、凡ソ其  
 論ズル所一モ實迹ニ徴スル所無クシテ、專ラ臆度ニ由リテ之チ立ツル  
 チ以テ仔細ニ檢覈チ加フルキハ、終ニ崩壞チ免レザルナリ、方今學士苟  
 モ證徴チ實迹ニ求ムルコトチ知ル者ハ、皆云フプラトンハ誠ニ古今絶倫  
 ノ才ナリト雖モ、之チ要スルニ理學家ト稱ス可ラズシテ、神學家ト稱ス  
 可シト、是言極テ當レリ、

プラトンノ著書チ通覽スルニ所見頗ル多端ナリト雖モ、其大意ハ神德  
 チ稱讚シテ其造ル所ノ物チ稱譽スルノ一著ニ出デズ、故ニプラトンノ  
 意チ推スルハ世界ノ物一モ棄ツ可ラズシテ皆再拜シテ之チ受ク可キ  
 ナリ、何トナレバ神ハ聰明正直ノ德チ具スルチ以テ、苟モ其造ル所ハ皆  
 必ズ善良ナル可ケレバナリ、  
 是故ニプラトンノ意ニ從ヘバ、現世ノ庶物並ニ皆缺失ノ處有ルチ免レ  
 ズト雖モ、是レハ固ヨリ理ノ已ムチ得ザル所ナリ、夫ノ神明既ニ自ラ完  
 粹至極ノ物ナルチ以テ其造ル所ノ物ハ大ニ相下ラザルチ得ズ、若シ然  
 ラズシテ、庶物皆完粹至極ノ物タルキハ、是レ庶物皆神明ナリ、夫レ至極  
 ノ者ハ一有ル可シニ有ル可ラズ、故ニ庶物ノ缺失ノ處有ルハ事理ノ已  
 ムチ得ザル所ナリ、  
 然リト雖モ神其完粹至極ノ德チ以テ庶物チ造ルキハ、庶物皆幾分神德

ノ形迹ヲ有セザル可ラズ、是ヲ以テ現世ノ庶物汚穢亂雜ナルガ如シト雖モ、仔細ニ之ヲ察スルキハ、其間必ズ秩序有リテ存セザル莫シ、必ズ幾分美麗ノ觀有リテ存セザル莫シ、夫レ秩序ナリ美麗ノ觀ナリ、皆神明ノ此德ヲ以テ庶物ニ附セシ所ノ者ナリ、是ニ由リテ之ヲ觀レハ、若シ人有リテ現世ノ諸物ヲ以テ足レリトセズシテ、必ズ更ニ善良ノ質ヲ願欲スルキハ、其神明ノ威ヲ躡冒スルノ罪實ニ大ナリト爲ス、何トナレバ向キニ神ノ庶物ヲ造ルノ時ニ於テ、初ヨリ已ムヲ得ザル者有リテ、庶物ニ於テ幾分缺失ノ處ヲ留メシメテ、更ニ善良ナラシムルヲ得セシメザルガ爲ナリ、

フラトンノ書中此意ヲ論ズルコト屢々之レ有リ、乃チ云フ庶物皆神ノ手ニ由リテ成レリ、故ニ皆良好ナラザル莫シ、若シ人庶物ニ足ラザル有ルキハ、其罪至リテ大ナリト爲スト、是レハ則チ論理ノ序ヲ得タリト謂フ

可シ、然ルニ其美學ヲ論シテ極致ノ說ヲ立ルニ及ビテハ、知ラズ識ラズ茲ニ云フ所ト少シク反スル者有リ、何ヲ以テ之ヲ言フ、曰クフラトンノ說ニ從ヘハ、藝人ノ夫ノ極致ヲ以テ法則ト爲シテ作ル所有ルキハ、其美麗ノ觀大ニ庶物ノ上ニ出ヅト、是レハ則チ人ノ造ル所ノ藝術ノ美、神ノ造リシ所ノ庶物ニ勝サルト謂フ可シ、其言自ラ矛盾スルニ非ズヤ、

フラトンノ言ニ從ヘハ、人智ノ想像スル所ノ總稱ナル者ハ、夫ノ極致ニ近似セルヲ以テ、其美ナルコト大ニ庶物ニ勝サル者有リ、若夫レ藝人ノ作ハ直チニ極致ヲ以テ法ト爲シテ作ルヲ以テ、其美ナルコト庶物ニ勝サルコト更ニ遠シ、

夫レ藝術ノ作ハ法ヲ極致ニ取ルト雖モ、畢竟實物ナルヲ以テ、既ニ長厚廣三性ノ限ル所ト爲リ、又歲月ノ毀壞スル所ト爲ルヲ以テ、之ヲ把リテ夫ノ極致ニ比スルキハ、固ヨリ大ニ相下ル者ナリ、然レモ之ヲ把リテ庶

物ニ比スルキハ、必ズ勝サル處有リ、嗚呼神ノ聰明ニシテ其庶物ヲ造ルヤ、幾分汚穢缺失ノ處有ルヲ免レズ、今人智ノ么微ニシテ法ヲ極致ニ取リテ作ル有ルキハ、其美反リテ神ノ造ル所ノ庶物ニ勝サル、是レ豈ニ咄々怪事ニ非ズ乎、夫レ人智ノ么微ニシテ其作ル所猶ホ庶物ニ勝サルキハ、向キニ神ノ庶物ヲ造ル時、何ゾ亦之ヲシテ更ニ極致ニ近似セシメザルヤ、

プラトンの美學前後矛盾スル所有ルコト此ノ如シ、顧フニ此矛盾ハ一時文辭章句ノ間ニ存スルニ非ズシテ、現ニ其論說ノ間ニ存スル者ナリ、夫レ一論說中此ノ如キ矛盾有ルキハ、其片言碎語ノ中如何ニ巧妙ノ處有ルモ、終ニ信據スルニ足ラズ、世ノ理學家自ラ閱覽博物ノ君子ト稱スル者ニシテ曾テプラトンノ論中此一大矛盾有ルヲ悟ラズ、苟モ藝術ヲ論ズルキハ、常ニプラトンヲ祖尙シ、一モ則チプラトンニモ則チプラトン

ト、曾テ檢覈ヲ加フルコトヲ知ラズ、此レ其故何ゾヤ、彼レ實ハ初ヨリ深クプラトンノ說ヲ講求セルニ非ズシテ、唯其片言碎語ノ中幸ニ己レノ僻見ト合スル者有ルヲ見テ、喜テ之ヲ取り以テ其論ノ根據ト爲スニ過ギズ、此レ其疎漏ニ免レザル所以ナリ、

若シ更ニ細微ノ事ヲ論ジテ以テプラトンノ美學ヲ糾駁セント欲スルキハ、其言恐クハ太冗漫ニ失シテ、大ニ人ヲシテ厭怠セシムルニ至ラン、故ニ余ハ唯其肝要ナル處ヲ舉ゲテ之ヲ示サン、曰ク藝人若シプラトンノ美學ニ信據シテ作ルコト有ルキハ、其弊ヤ生氣索然トシテ絶エテ意趣ノ觀ル可キ者無キニ陥キランコト疑無シ、何トナレバ其法ヲ取ル所ハ夫ノ無形ノ精華ニ在ルヲ以テ實物ト相距ルコト遠クシテ、其勢端麗整齊ニ過ギテ變化ノ處無キヲ致ス可キガ故ナリ、  
是弊ヤプラトンモ亦自ラ之ヲ云ヘリ、曰ク吾ガ所謂極致ハ純一ナルヲ

以テ之ヲ摸寫スルノ法モ亦純一ナラザルヲ得ズ、是ヲ以テ先輩ノ士一  
 タビ之ヲ摸寫シテ妙ヲ得ルキハ、後來ノ者ハ必ズ此ヲ以テ軌範ト爲サ  
 ザル可ラズト、夫レ藝術ノ士各々皆專ラ前轍ヲ踏ミテ敢テ他ニ出デザ  
 ルキハ、其久チ經テ性靈活潑ノ跡ヲ沒スルニ至ルハ免レザル所ナリ、其  
 他フラトンノ書中ニ散見スル所ニ由リテ之ヲ考フルキハ、天下美麗ノ  
 貌ノ最モ端嚴ナル者ハ、必ズ幾何ノ道理ニ適合シテ整齊ナル者ナリ、夫  
 レ幾何ノ道理ニ適合スル形貌ハ、皆唯完全平均ナルノミニシテ、絶エテ  
 變化生動ノ態有ルヲ無シ、而シテ此ヲ以テ藝術ノ規則ト爲ス、何ヲ以テ  
 其弊無キヲ保タン乎、

且縱令ヒフラトンヲシテ自ラ此言有ルヲ無カラシムルモ、其說ヲ推ス  
 キハ竟ニ是ニ至ルヲ免レズ、何ヲ以テ之ヲ言フ、夫レ極致ノ物タル既ニ  
 長厚廣ノ限ル所ト爲ラズ、又歲月ノ壞ル所ト爲ラズ、淡然泊然大虛ノ中

ニ懸在シ、久チ互リテ變セザル者ナレバ、則チ其美麗ノ觀ハ特ニ其不變  
 不動ノ性ニ得ルニ非ズ乎、然リ而シテ藝術ノ士專ラ此不變不動ノ物ヲ  
 以テ法則ト爲シテ作ルキハ、其作ノ淡泊不動ナラザルヲ求ムルモ胡  
 ヲ得可ケン邪、

プラトンノ美學ハ凡ソ古昔ノ道德ノ說ト全ク相類ス、蓋シ古昔ノ學士  
 ハ皆人慾ヲ懲窒スルヲ以テ最大ノ旨趣ト爲シテ、人ヲシテ清淨寂滅ノ  
 德ヲ求メシム、夫レ人慾ハ天ノ我レニ附與シテ其情性ヲ發揮セシムル  
 所ノ者ナリ、今乃チ蓋ク懲艾シテ之ヲ去ルキハ、其弊ヤ木石ノ意識無キ  
 ガ如キニ至ルヲ昭然明白ナリ、看ズヤ希臘フィヂヤースノ彫鐫セル所ノ  
 神像ノ如キハ、皆端麗整齊ノ美有ルモ、畢竟生意ノ觀ル可キ無シ、此レ猶  
 ホ「ストイック」派ノ學士ノ物欲ヲ芟除シテ墮然トシテ此世ニ子立シテ、絶  
 エテ爲ス所無キカ如シ、

嗚呼プラトノ美學其根據トスル所ハ皆臆說妄論ニシテ一モ信憑スルニ足ラス、又其藝術ノ實際ニ施スニ至リテハ、作物ナシテ生氣意趣ヲ蕩滅セシム、是ノ如キ者豈ニ今日ノ藝術ノ期望ス可キ所ナラン哉、唯此一失有リ其餘ハ觀ルニ足ラザルナリ、

大瀧確藏 校

維氏美學下冊 終

維氏美學下冊正誤表		訂正		誤脫	
頁數	行數	頁數	行數	頁數	行數
一五	二	一五	二	一五	二
全	九	全	九	全	九
一六	一	一六	一	一六	一
一八	九	一八	九	一八	九
二五	一	二五	一	二五	一
三三	一〇	三三	一〇	三三	一〇
四三	六	四三	六	四三	六
四七	九	四七	九	四七	九
五五	二	五五	二	五五	二
一〇一	一	一〇一	一	一〇一	一
一〇六	九	一〇六	九	一〇六	九
誤脫	訂正	誤脫	訂正	誤脫	訂正
數章感テ	數篇感テ	土壤ノ算數學	土壤ノ算數學	土壤ノ算數學	土壤ノ算數學
所ノ顯ハル、	所ノ者ノ顯ハル、	作者ノ感情	作者ノ感情	作者ノ感情	作者ノ感情
意義テ有ス	意義ヲ有ス	瑕類	瑕類	瑕類	瑕類
又多ク	又多ク	人情ヲ	人情ヲ	人情ヲ	人情ヲ
又多ク	又多ク	其藝テ	其藝テ	其藝テ	其藝テ
斬削	斬削	ウエニコース	ウエニコース	ウエニコース	ウエニコース
固メシ	固メシ	獲シテ	獲シテ	獲シテ	獲シテ
屬テ觀テ	屬ヲ觀テ	題ヲ是ニ	題目ヲ是ニ	題目ヲ是ニ	題目ヲ是ニ
華瞻富麗	華瞻富麗	章ヲ追ヒ	章ヲ追ヒ	章ヲ追ヒ	章ヲ追ヒ
アラサ莫ルク	アラサル莫ク	空漠ノ	空漠ノ	空漠ノ	空漠ノ
シテ	シテ	是ヲ以テ	是ヲ以テ	是ヲ以テ	是ヲ以テ
手法アル者ノ	手法ナル者ノ	由シ末ケレバ	由シ末ケレバ	由シ末ケレバ	由シ末ケレバ

二二六	五	善ハサル	喜ハサル	四二一	五	伊人	意人
二三六	九	肯窾	肯窾	四四四	三	事ノ物理ヲ究ム	事物ノ理ヲ究ム
二四二	一	ノ發スル	ノ發スル		一	胸理ニ	胸理ニ
二六五	一〇	完璧ナ	完璧ナ	四七一	一	可キヤ豫メ	可キヤ否豫メ
二七四	一	クリユベン	クリユベン	四八五	一	讀書一タビ	讀者一タビ
三〇三	一二	其業ヲ率ハル	其業ヲ卒ハル	四九二	六	齟齬	齟齬
三一三	一	那蘇	耶穌	五三二	六	欲セバ誠ニ	欲セバ試ニ
三二八	九	反リテ	反リテ	五四七	七	其理ヲ眞探リ	其眞理ヲ探リ
三三一	九	以テ成ル	以テ成ル	五六七	一二	多ク人ヲ舉グ	多ク人物ヲ舉グ
三六一	三	美學ノ講求	美學ノ講求	五九七	六	分派	分派
三六七	八	起狀復タ	起狀復タ	六四三	一二	之ヲ肖似スル	之ニ肖似スル
三七八	五	如キ際ニシテ	如キ際ニシテ	六五五	三	舊地	舊址
三八三	三	無シ其但他ノ	無シ但其他ノ	六七二	三	以テ此世ニ	以テ神ノ此世ニ
三九八	一	博士院	博士院	七一〇	五		
四〇一	一二	舞蹈スル	舞蹈スル				
四〇四	四	布臚	希臚				

七二六	九	言ヲ可キ	言フ可キ	七三九	六	極致ニ至リテ	極致ニ在リテ
七二九	一	藝術タル者	藝術家タル者		ハ		
七三三	七	我力ニ於テ	我が心ニ於テ				

明治十七年三月七日板權所有屆

文部省編輯局藏板

六三  
八  
五  
二  
一



285
304

終